
魔法少女リリカルなのはStS ZEROSTORY—絆（KIZUNA）—

麗×零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStS ZEROSTORY―絆（KIZUNA）―

【Nコード】

N7047I

【作者名】

麗×零

【あらすじ】

あの事件から3年、ヴィヴィオは魔法少女になり、元戦闘機人、元ナンバーズが六課に加わった。平穏な日々を過ごしてきた彼らだが運命の歯車は動きだす。

少年、少女の見る先とは……。

魔法少女リリカルなのはStSZEROSTORY―絆（KIZUNA）―始まります。

S t S のオリ主 F F ですがよろしくお願いします♪

※ S k y p e、始めました♪ 麗×零で、ヒットすると思います…
∴。多分っ！

ブローグーあの事件から3年―（前書き）

ども♪ZEROです♪

何か、ノリで書いてみました♪何分未熟者なので、誤字、脱字があったら、ご指摘お願いします♪

プロローグーあの事件から3年ー

機動六課・・・そこは異常な戦力の高さで、ゆりかご事件を終決させた部署。この物語は、そんな機動六課で勤務している、とある、一人の青年の、冒険、コメディ、恋愛・・・そんなものがたくさん入った物語である。今、六課の上空に飛行している人物が一人。

「こちら、ゼロだ。応答せよ。」

彼の名はゼロ・S・アームストロング。

魔導ランクSSSオーバーの元戦闘機人、そして、元ナンバーズだった男。

そして、今は機動六課の一員として活動している。

《ん？　ゼロ君か？　どうしたんや？》

今、通信に答えた茶髪でショートの彼女は八神はやて、機動六課の部隊長。

一応、ゼロとは面識があり。

六課内では、結構話している。

「ああ、そうだ。帰投許可もらい…」

はやての応答があり、ゼロは次の言葉を紡ごうとしようとする、その瞬間。ノックが聞こえ、その奥から声が聞こえる。

《ん？　なのはちゃんか？　どう…》

はやてがそれに応え、呼びだそうとするが、ゼロは咳払いし、まだ

続ける。が、はやては少し耳を傾け、そのまま続ける。

「はやて、帰投許可を…」

と。言いかけたところで、はやてからの声が聞こえ、ゼロは頭に來て、額に青筋を浮かべ、

「さっさと帰投許可出せ！！ バカはやて！！」

そう叫んだ。そうすると、

『ゼロ君…少し…頭冷やそうか…』

今の、ものすごく怖い事を言った栗色の髪でサイドポニーの長い髪の彼女は高町なのは。エース・オブ・エースとして有名で、スイッチが入るとゼロ的には怖い。

「あ、あの…：…すみませんでしたあ！！！」

彼は、前にスイッチの入った、なのはを見たことがあるため、撃たれないとわかっていても、頭が上がらなくなる。

『わかればいいよ♪』

スイッチがなければかわいいのに…。そう思うゼロだった。

「それで、帰投許可やったね。」

はやてが聞く

「あ、ああ。」

少しだけゼロはおどけて返す。

「はい、これでええよ。」

端末を操作し、帰投許可を承認する。

「ありがとう。」

「お礼なんかええよ。」

そう言うと、通信を切る。…とりあえず帰投完了したゼロ。

「まったく、ホント久しぶりだな。帰投許可もらうのにこんなに背筋が凍えたのは…。」

…ともあれ、六課でのゼロたちの生活が始まった…ってどこ？

まだ、話すことはたくさんあるんだけどね。ん？なに？ほかの六課メンバー？説明は不要でしょう？え？知らない？…とりあえず！知っている設定で行きますので。

「あ、ゼロ。」

そこには赤と緑のオッドアイで、ツインテールの少女、高町ヴィヴィオがいた。

「ようヴィヴィオ、どうした？」

「模擬戦やろう？」

「ああ、いいよ。」

わからない読者さんに説明。この物語はゆりかご事件から3年後の世界。

「ゼロはやくしようよー日が暮れるよー。」

ヴィヴィオは手を振り、ゼロを呼ぶ。

「わかった、わかった、じゃあいくか!!」

「うん!!」

ヴィヴィオはゼロがそう言った途端に笑顔になる。ちなみにヴィヴィオはものすごくゼロに懐いていて、たまに、フェイトからのすごい殺気を感じることがある。余談だが。

・・・こうして、六課での生活が始まった。

プロローグーあの事件から3年ー（後書き）

Z

「始まりましたね。K I Z U N A。宜しく願いします。突然ですがオリキャラの募集をしたいと思います。」

名前

階級（なくてもかまわない）

デバイス

容姿

バリアジャケット

魔導ランク

必殺技

性格

武器の形状（ないなら書かなくて良し）

備考

で書いてください。

口調が所々おかしいですが勘弁してください。

そのうち人気投票とかもやる予定なのでお願いします。」

ゼ

「それでは！！」

Z

「じゃますんじゃねえ！！なのは召喚！！ゼロを焼き払え！！」

な

「スターライトブレイカー！！」

ゼ

「うぎゃあああああああ！！」

どーん・・・

z

「えー、改めてそれでは次回に会いましょう!!」

第1話―悪夢の始まり―（前書き）

Z・ゼ

「前書き質問コーナー!!」

しーん・・・

Z

「えー、さっそく質問、キラーさんからの質問で

『小説のタイトルがガンダムwのovaと同じ題名というのが気になりました。』

これは、私の趣味です。以上！」

チャンチャン♪

ゼ

「つてまでごらあ!!」

Z

「スターライト」

ゼ

「え？」

Z

「ブレイカアアアアアア!!」

ゼ

「うぎゃあああああ!!」

ドガア・・・

Z

「盛大な音を上げたところで、魔法少女リリカルなのは 戦場の

絆 endless waltz」

Z

「はじまります。」

第1話―悪夢の始まり―

「ふう、つかれた。」

その日、ゼロはヴィヴィオと模擬戦をし、任務を終えた日だった。これが、悪夢の始まりとなるのは、だれも予想しないだろう。

「あ、いたいた。お疲れ様。データ、取れた？」

声がして、振り向いてみると金髪で髪の長い女性、フェイトが居た。

「ああ、ばっちり、オフコースだよ♪」

ゼロは笑顔で答える。

「よかった…それじゃあ隊長室に行こう？」

「うん、わかった。」

笑った時の顔はフェイトが一番かわいい。とゼロは思っている。余談だが……。

▼▼▼▼▼機動六課・隊長室前▼▼▼▼▼

「じゃあ、入るか。」

「うん。」

コンコン…とゼロがノックした音が少し響いて……

「ん？ゼロ君とフェイトちゃんか？」

はやてが答える。バレバレだった。まあわかってたことだけど・・・
そう、ゼロは思った。

「はい。」

ゼロは答え、

「ほんなら、入ってええよ。」

はやては入室を許可する。

「失礼します」

そして、二人は入り、まずゼロから切り出した。

「まあ、とりあえず今回行ったTAS調整の結果だ。」

「ご苦労さん。」

「所々エラーがあるが気にしないでくれ。」

「「いやいや、その時点で気にする範囲だから。」」

と二人は突っ込む。ちなみにTASはTri Attack Systemの略。いまのところ、ゼロしか使えない。

「エラーがあるってことは、やっぱりリミッターつけるしかないか。」

落ち込んだ声で言う。

「そうやね。」

その時フェイトが

「ん？これって・・・ヴィヴィオとの戦闘結果・・・。」

データを確認して言う。それに、少しギクウツ！となったゼロは

「心配しなくてもちゃんと部屋に送り届け・・・たよ。」

と言った。がそのとき、フェイトはゼロに異常な殺気を放った。

「じゃあ！そうゆうことで！！」

ゼロは逃げようとした。：ガシツ明らかに腕を掴まれた感触。さらに、離そうとしても離れない。

「ゼロ君・・・私と模擬戦・・・しよう？」

ものすごい黒いオーラを出しながら聞く。

「お断りしま・・・。」

ゼロは断ろうとした。だが・・・。

「君に断る権利はない・・・。」

そう言い、バルディツシュを構える。見事に人権無視ですか。ゼロはそう思った。

「人権無視ですか!! なら聞かないでく・・・。」

その時、ゼロの首元にバルデツシュのハーケンセイバーが来た。

「首・・・とばすよ・・・。」

ゼロは確実にフェイトのスイッチが入ったことを察知し、念話を飛ばした・・・。

（はやて! 助けて!!）

（いやや♪）

（なんで!?!）

（さっき私のこと、ばかにしたやんか。）

（う、あれは・・・その・・・謝るから許して?）

（許すけど助けない。）

（なぜに!?!）

（おもしろそうだから♪）

ブツッ…。ゼロは念話を切り、思い切り叫んだ。

「誰か助けてー！！フェイトを止めてくださーい！！」

その時、またバルディッシュがゼロの首元に来た……。

「言ったよね私。首……飛ばすって……。」

「いやホントすいません。」

ゼロは首を切られるのは御免なので、おとなしく訓練場に来た。フィールドは生成完了されている……。その時ゼロは不意にある予感がした。

キイイン……。

ゼロの予感はあるに当たった。完膚なきまでに当たってしまった。

「あー、フェイト？」

フェイトの方に向き、ゼロは言う。

「なに？」

「ひとつ聞いていいか？」

「いいよ。」

「何人と戦わせる気だ？」

「うーんと、・・・7人♪」

さっきよりも黒い笑顔で言う。

「いやだあああああ!!」

ゼロは思い切り叫ぶ。

「ほら行くよ。」

その声は確実に悪魔の声だった。

・・・こうして、悪夢は始まった。

第1話―悪夢の始まり―（後書き）

Z

「後書き召喚コーナー」

わー♪

ゼ

「つてちよつとまてごらあ!!」

Z

「ドラグーン♪」

ゼ

「ぎゃあああああ!!」

チーン♪

Z

「さよなら。君のことは忘れないよ。というわけで、今日のゲストは、前回お礼を言い忘れていたので高町なのはさんです。」

な

「どうも、高町なのはです。」

Z

「宜しくお願いします。」

な

「こちらこそ、宜しくお願いします。」

ゼ

「またんかあ!!」

Z・な

「ちっ!!」

ゼ

「そこ二人!! 舌打ちすんな!!」

Z

「わかってるって。」

な

「わかってるよ。」

ゼ

「わかってなさそうなんだけど、ものすごくわかってなさそうなんだけど。特に後ろのほう!」

Z・な

「そろそろお時間が来たようなのでまた次回♪」

一同

「さようなら♪」

第2話―天使―（前書き）

今回は前書きと後書きはありません。

第2話―天使―

「ここは・・・どこだ・・・？」

そこには少年が立っていた。血まみれになり。

「いたぞー！！」

そして、管理局に追い詰められる。

「・・・くッ！ダブルオー〇〇起動！！」

そして、少年は高く、デバイスを掲げた。

『了解』

そして、デバイスはそれに呼応し、少年に鎧を思わせる青と白のバリアジャケットを纏わせた。

「はあああ！！」

そして、少年は斬り込む。己を守るため。そして、悪を根絶するため・・・。自分がやっていることが悪の方へ向いているとも知らず・・・。

「・・・ちょっとまって！！」

「いくらなんでも7人は俺でも無理だ！！」

少年が管理局に追われてる頃、ゼロは訓練場に来て、FW陣&p;なのは&p;ギンガ&p;フェイトを相手に模擬戦をしようとしていた。そして、七人は無理だと、何とか逃れようとしているゼロがいた。

「うるさい！！ヴィヴィオの痛みお前にも与えてやる！！」

そして、フェイトが斬りかかろうとした瞬間。アラートが鳴った・・・。

「フェイトちゃん！、ゼロ君！喧嘩なんかしとる場合なんかちゃう！！」

その時、はやてから通信が入った。

「どうしたの？はやて？」

その時、ゼロは思った。Good timingだ！はやて！と。しかし、そんな考えは、はやてが次につないだ言葉にかき消された。

「ロストログアが現れたんや！！」

“ロストログア”その言葉によって。

「それで、どこに・・・？」

フェイトが聞く。それにはやてが答える。

「いこや。」

座標が表示された。そこは、町のど真ん中。

「くそッ！」

その場所が分かった瞬間、ゼロは急いで向かった。

「試験段階だが仕方がない！！ブレイブ・フォース！！」

そうデバイスに呼び掛ける。

『準備OKです。』

ブレイブ・フォースは応える。

「セットアップ！！」

『了解！！』

一瞬、白い光に包まれ、光を破って出てきた。その格好は白い騎士
甲冑に黒いマントを羽織っていた。

「時は、一刻を争うな。急ごう！！」

『了解！！EWシステム、起動！！』

そして、背中から、一對の白い翼が生え、飛び立った。



「ゼロ君は今どこにいるんや？」

はやてが聞く。

「ゼロ君ならそこに・・・!?!」

だが、いない。おかしい・・・さっきまでいたのに! そう、フェイトは思った。

「いない・・・?」

フェイトは口に出す・・・。

「なんやて!?!」

ものすごい見幕で聞く。

「きっと場所を聞いて向かったんだと思う。」

フェイトはそう思考した。

「あかんわ。フェイトちゃんも行って!」

「わかった!」

はやてが言い、フェイトは了解した。

「バルディッシュ!」

『Get set.』

そして、バルディッシュを起動させる。

「いくよ!」

そして、飛び立った。



「・・・やはりか。」

一人の男は呟いた。

「見つけた。ん? あ、ヒューズさん。」

アーヴェントⅡヒューズ、機動六課所属、階級は少将。

「ああ、ゼロさんか。」

ヒューズは返答する。

「“さん”付けはよしてください。」

苦笑いでそう言う。

「それにしても、出血が酷いな。千里眼で敵がいたら、迎撃してください。」

「それは、無理だな。」

ヒューズはクールに言う。

「なぜに!?!」

「ここからじゃ、迎撃は無理だ。」

ホント、リアリストって困るな。そう思った。

「じゃあ、見張りだけお願いします。」

「了解しました。」

ヒューズは敬礼をする。

「さてと俺はあいつを・・・?」

様子が変だな。いや、あいつは・・・!! 神崎刹那か!!

「ゼロ!! 敵接近中!! 距離3000mだ!!」

「クソ!! どうすればいい!!」

「起きろ!! 刹那!! 神崎刹那!!」

とりあえず、少年に近付き、声をかけるゼロ。

「距離10m!!」

もう肉眼でも確認できる距離までガジェットは近づいてきた。

「起きろ!! 神崎刹那!!!!」

もう一回ゼロは声をかける。

「〇〇起動……。」

『了解。』

その時、戦場に閃光が走った。いや、正確には、閃光ではなく、ツインドライヴシステムから出される、『ライザーフォトン』による物だった。

神崎刹那……彼はいったい何者なのか……？

次回、魔法少女リリカルなのはStS ZERO STORY 一絆（KIZUNA）一。 一神崎刹那一

第3話―神崎刹那―

Z

「前書き質問コーナー♪」

一同

「わー♪」

ゼ

「またんかいゴラァ!!」

Z

「なんだよツツコミ?」

ゼ

「そうだ!!」

Z

「まあ、質問ない訳だしいいか、ちゃっちゃとね。」

ゼ

「まず、なぜ新キャラがいる!? ヒューズさんはまだしも、なぜ、

神崎刹那がいる!!」

Z

「そりゃあ、なあ、仲間になるんだよ。」

ゼ

「いっちゃっていいのか?」

Z

「いいよ時期にわかることだし。」

神

「確かにな。」

ゼ

「あーもう! ネタバレだったの。」

Z

「これは、もう決まってたことだし、しょうがないよ。細かいこ

と気にしてるゼロにおしおき♪」

神

「俺も若干苛立ってたしいいか。『ライザーソード』!!」

ゼ

「ぎやああああああああ!!」

ドオオオン・・・

《さすが刹那》

Z

「さて、ゼロもぶっ飛んだことだし、そろそろ本編行きますか！
刹那言っちゃっていいよ！」

神

「わかった。魔法少女リリカルなのは 戦場の絆—endless
waltz—」

一同

「始まります。」



「・・・」

ゼロは、はっきり言って、言葉を失った・・・これだけ綺麗なものもあるかもしれない。けど、何か違う・・・俺達と何かが違う気がした。そう思い、拳を握りなおした。

「OO、どうしたらいいと思う？この数・・・」

刹那が自身のデバイスに聞く。

『私的には、セブンスードモードを起動して、GNビームマシンガンかGNマイクロミサイルで一掃したほうがいいと思われます。』

OOは戦況を判断し、正確に答える。

「さすがだな。OO」

刹那はそう言う。

『いや、刹那に比べたら、まだまだですよ。』

それに対し、OOは謙遜する。

「OO、セブンスードモード起動!!」

『了解、起動します。』

刹那の手に大きな剣が現れた。

「GNマイクロミサイル、発射!!」

刹那がそう言うのと、セブンスードから、ものすごい量の小さなミサイルが出てきた。

「着弾後に、GNマシンガンを出してくれ。」

そう刹那は言う。

『抜かりがないですね。』

OOは返す。

「もしかしたら当たってないかもしれないからな。」

刹那がそう言う。

『あなたらしいですね。GNマシンガンです。』

そう言うと、刹那の手にGNマシンガンが出現し、握られた。

「来たか・・・。」

そう刹那が言った瞬間、30機近くのカジエツトが出現した。次々と撃墜していく中、撃墜しきれなかったカジエツトが刹那へ迫る・・・その時

「アストラルブレイカーー!!」

一閃

その声が聞こえると集束砲が真横を通り過ぎて行った・・・。

「俺達がいることを忘れないで欲しいな。」

ゼロが言う。

「その通り!」

ヒューズがそれを肯定する。

「君は後ろを任せて戦うといい。存分にな！」

ゼロがそう言う。とその時ゼロ達は囲まれていた。

「「さあて、いっちょ征いきますか！！」」

ゼロとヒューズが言う。

「ああ！！OO、トランザム起動だ！！」

刹那はそれに答える様に言い。トランザムを起動させる。

『了解』

OOもまたそれに答える。

「一気に行くぞ！！GNバスターソード2を出せ！！」

『あれですね。』

「ああ！」

「その二人！退避しててくれ！大技を使う！！」

と刹那はゼロとヒューズに言う。

「「了解した！、結界も張っておくから、おもいっきりやれ！！」」

二人はそう言うのと、出来るだけ離れ、結界を張る。

「いくぞ！」

『了解した!!』

「『エクリプス・・・バスタード!!』」

二人がそう言うと、ピンク色の魔法刃が生成され、斬撃がくりだされた……。20機程いたガジェットが一瞬にして、全滅したのだ。さすがにこれにはゼロは達はびっくりしてしまった。

「なかなか凄いじゃないか。」

ゼロが言う。

「それほどでもありませんよ。」

刹那は返す。そこにフェイトがやってきた。

「あ、いた!、なに勝手に急行してるの!?!」

フェイトを見た瞬間、刹那の目付きが変わった。あれは……。!!
殺す目!!。そう思ったゼロはフェイトに言う。

「逃げろ!! フェイト!!」

「え?」

フェイトは状況を理解できず、その場に留まった。

「刹那・・・目標を駆逐する!!」

そう言い、刹那はライザーソードでフェイトへ斬り込む。

「ッ!!」

フェイトはいきなりの行動に対処できず、プロテクションを張るにも距離が近く、ソニックムーブでかわせない距離に刹那は居た。

「やらせるかあ!!」

そこ声と共に血吹雪が舞う……。そこにはゼロが立っていた。切ったのではなく、フェイトの身代わりとなり、切られたのだ……。

「そんな、どうして……。」

フェイトは突然の行動に驚いた。ゼロは意識が朦朧としてる中、フェイトの肩を掴み、

「フェイト……これでチャラだ……。な。」

そう作り笑いを見せ、

一倒一

倒れる。ゼロの背中からは、尋常じゃない程の血が出ている。

「ゼロ君!ゼロ君!!ゼロ!!」

フェイトは必至で呼び掛ける。それにゼロは答えない。

「くっ！○○！！」

『トランザム・バースト準備完了です。』

「『トランザム・バースト！！』」

刹那が○○に指示を出しその技を使うと、ゼロの傷が塞がり、意識が回復した。

「う、うん……。」

ゼロが瞳を開け、最初に見たのは、

「ゼロ！？」

涙を流して心配している……フェイト。

「あ、ああ。」

ゼロはぎこちなく返事を返し、起き上がる。

「よかった、よかった！！」

フェイトはその瞬間にゼロに抱きつく。

「いや、あの、すまん。てか、離れて。」

ゼロがおどおどしながらフェイトに言う。

「うん。」

そして、フェイトは離れた。

「それより、刹那だ。」

ゼロは話題を変える。

「すまなかつ・・・」

「なに謝ってるんだ。」

刹那が謝ろうとするのを、ゼロは遮る。

「え？」

刹那が疑問を抱くと「フッ」っとゼロは笑った。

「俺についてこい。」

ゼロはそう言い、

「新しい世界を見してやる。」

一息置いて、そう言う。

「ちよっ・・・ゼロ!？」

フェイトが驚き、言う。

「俺は本気だ。」

フェイトに顔を向け、そう言う。そして、六課の方を向き、歩き出す。

「さっさと来い。」

ゼロはそのままゼロに言う。

「いいのか俺はお前を・・・」

刹那は、ゼロを斬った事を気にしているのか、その事を言う。

「けどお前は、俺をどうした？助けただろう？」

ゼロは刹那に向き直り、言う。

「ああ。」

刹那はそう言う。

「人を助ける力・・・それさえあれば十分！機動六課は神崎刹那を正式に仲間として・・・認める！！」

ゼロははやての許可なしで勝手に宣言する。

「は、はい！」

そして、刹那が答える。

こうしてロストログ・インテリジェントデバイス『OO』とともに
に神崎刹那を仲間として、迎え入れたのであった。



今回は後書き召喚コーナーはお休みです。

第4話―新しい世界―

「……。」

ゼロは考えていた。この状況、ロストログアがこんなに出現するなんて……。そう思い、今までで、刹那を加え、5つくらい同時に発生しているのだ。

「やはり、聞いてみるか。」

そう思い、ゼロはある場所へ足を向ける。

「あ、ゼロ君。」

とその時こちらを呼ぶ声が聞こえ、その方向を見ると、フェイトが居た。

「よう、フェイトか。」

ゼロはそう言う。

「うん。けど、どうしたの？」

とフェイトが聞く。

「いや、刹那の所に行こうと思ってな。」

そうゼロは言う。

「私も行っちゃだめかな？」

と上目遣いではないが聞く。

「うーん、まあ、いいか。」

ゼロは一頻り悩み、言う。

「じゃあ、行こう？」

そうフェイトが手を取り、言う。

「ああ。」

ゼロはそれに返し、言う。最近、フェイトが異常に俺にやさしい気がする……。そうゼロは思う。

「フェイトちゃん、ゼロ君。」

とその時、こちらを呼ぶのが居た。

「二人でなにしてるの？」

と単刀直入に言う。

「『刹那の所に行こうと思って。』」

ゼロとフェイトは仲が良さげに二人で言う。

「そう、いってらっしゃい♪」

そうなのは言う。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼機動六課 取調室▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「・・・。」

取調室では刹那が少しだけ、不機嫌そうな顔をしていた。

「いい加減、話したらどうだ？」

ヒューズが呆れた顔をして言う。

「ヒューズさん。」

そこにゼロがやって来て、ヒューズを呼ぶ。

「おお、ゼロか。いいところに！」

ヒューズはこっちを見て、そう言う。

「刹那は？」

ゼロはヒューズに聞く。

「一向に口を開かない。3日間ずっとだ。」

ヒューズは残念そうな顔をする。

「そうか。じゃあ、外に出してやってくれ。」

ゼロはヒューズにそうお願いする。

「・・・わかった。」

ヒューズは少し悩んでから、そう言う。

「サンキュ。」

ゼロはそう言う。

「刹那、出ていいぞ。」

「ああ。」

ヒューズがそう言うのと、刹那は取調室を出る。

「よう。刹那。」

ゼロがそう言い、挨拶をする。

「ああ。」

刹那がそれを返す。

「約束通り、新しい世界を見せてやる。」

ゼロはそう言うのと、

「本当か!?!」

刹那は目をキラキラさせる。

「俺が嘘をつくと思うか？」

ゼロが聞くと、

「「「思わない。」」」

フェイトを含め、その場に居た三人は思わないと答える。

「だろ？・・・っておい！！三人で同じこと言うな！！！！んまあ、外に出ようぜ。」

ゼロは話題を戻し、言う。

「「うん。／ああ。」」

そして、フェイトと共に外に出た瞬間、刹那の目が輝いた。

「きれいだな。」

刹那が言う。

「確かにな。」

ゼロは応え、一息吸い、

「機動六課を案内してやる。」

そういつて、ゼロは案内を始めた。食堂、ミーティングルーム、その他さまざまな所を案内した。それで最後に残ったのが……。

「隊長室と訓練場か……。」

「うーん。」

ゼロはフェイトと悩んだ。

「よし！隊長室に行こう！！」

そして、ゼロは思い切って言う。

「「え？」」

「ほらほらっさっさと行く！！」

おどおどしてる二人を尻目に、隊長室へ行く。

▼▼▼▼▼機動六課 隊長室▼▼▼▼▼

「よし！入るか！！」

ゼロはそう言う。

「刹那はここで待ってて。」

フェイトがそう言い、刹那を待たせる。その事に関して、後でヒューズさんに怒られたのはこれまた余談。

「ああ。了解だ。」

刹那は了解し、ゼロはドアをノックする。

「はやてゝ。入ってもいいか？」

ゼロが聞く。だが、返答がないので、勝手に入らせてもらう。

「失礼します。」

フェイトとゼロはそう言い、入って行った。それで、最初に目に入ったのは、ウェーブがかかっている茶髪で中性的な顔立ちの青年。

「ん？待て。そいつは誰だ。」

ゼロはそれを見て、はやてに聞く。超ぶっきら棒ではやてに睨まれたのも余談。

「ジェナス君、ジェナス・ディラ君や。」

はやてはその青年の事を紹介する。

「『はじめまして。／はじめましてっす。』」

ジェナスとそのデバイスは挨拶をする。

「「お手柔らかにどうも。」」

フェイトとゼロはそれに返す。

「んで、刹那入れてもいいか？」

ゼロははやてに聞く。

「ええよ。」

意外とあっさり許可した。その辺はさすがはやてだな。と思う。

「刹那ゝ入っていいぞー。」

ゼロはそう言い、刹那を入れる。

「失礼する。」

刹那は礼をし、入る。

『うわ、かわいげのない少年っすね。』

ジュナスのデバイスは悪態をつく。ホントムカつくなジュナス君のデバイス。ゼロはそう思う。声には出さないが……。

「それで、どうしたんや？」

とはやてが聞く。

「ああ、ここでお茶でも飲みながら、刹那に聞こうと思ってな。」

超簡潔にゼロが言う。

「わかった。ちょっと待ってて。」

そう言う、はやては隊長室を出て、どこかへ行く。

「いい人たちだな。」

刹那が言う。

「なにが？」

ゼロが一応聞く。

「いやなんかこう…。」

刹那は言おうとするが、言葉が出ない。

「言いたいことはわかる。けど、話していいこと全部話してくれ。」

そういう風にゼロは促し、

「わかった。」

刹那は了解する。

「まず、君の使ってるデバイスについて話せる？」

フェイトが聞く。

「ああ。あれは『〇〇』。ここに来る前に、ガンダムと呼ばれる、兵器に乗っていて…。」

刹那がそれについて返答。

「後は、こっちの世界に来たら、こうなっていたというわけか。つまり、〇〇の管制人格と一緒にいたパイロットになるのか？」

ゼロが纏め、さらに聞く。

「ああ。けど違う機体に乗っていた。」

刹那はそう言う。

「そうか。じゃあ次の質問。前の世界で、どんな事をしていたんだ？」

ゼロは次の質問を問う。

「ソレスタルビーイング。」

刹那が答える。

「なるほど、それで追われてたのか。OK。質問は終了。」

ゼロは納得して、質問を終わらせる。

「それだけ聞ければ充分。後は、ロストログアがもう一つ。」

フェイトがそう言った瞬間。

「見つかったで。」

はやてが戻ってきた。

「Thank you. 意外と速かったな。」

ゼロがおふざけ交じりで言う。

「なめないで欲しいもんや。」

はやてはそう言い、一枚の写真を渡す。

「悪い、悪い。」

ゼロはとりあえず謝り、手に持つ写真をフェイトに渡した。

「このことなんだけど。」

フェイトが刹那にその写真を見せる。そこには一つのロストログアがあった。

「・・・スターゲイザー。」

刹那は少し考え込み、言った。

「知っているのか？」

ゼロが聞く。

「ああ。時空から時空へ逃げているときに、見かけた。確か・・・ガンダムの機体名称だと思う。」

刹那が答える。

「ありがとう。」

ゼロが礼を言う。

「――「それだけでいいの？／＼それだけでいいのか？」――」

そうすると、他の四人に、突っ込まれた。

「ああ。それだけでいい。後は心を開かせるだけだ。」

ゼロはそう言うのと、

「それもそうやな。」

はやてが肯定する。

「確かにな。」

ジェナスも肯定する。

「んじゃ、辛気臭い話も終わったところで、訓練場に行きますか！」

ゼロはそう言って、立ち上がる。

「そうしますか。」

フェイトがらしくないが、そう言い、立ち上がる。

「ジェナス君も来いよ。」

ゼロが誘う。

「は、はあ。」

ジェナスは渋々ながら了解。そして、一同は訓練所へ向かう。

ゼロ、彼にはどんな企みがあるのか？次回、魔法少女リリカルなのはStS ZEROSTORY―絆（KIZUNA）― 第5話―
模擬戦―

第5話 模擬戦

Z

「前書き!!!」

シュバツ!

ゼ

「質問!!」

ビシッ!

ゼ

Z

「コ・・・。」 「超・〇・斬!!」

ドゴオオオ・・・。

一同

「コーナー♪」

わー♪

Z

「さっそく質問、煌 焰 さんからで、

『もしかして…… ガンダム 好きかい?』
好きです。以上!」

チャンチャン♪

ゼ
「……………」

Z
「今日は起きないな。わざとボケてやったのに。」
スター

「まったくですね。（ゼロさん……がんばってくださいね。）」

Z
「さてと、KDGとKFC、それと、ZBCの入団届を……。」
ゼ

「さて、撃つんじゃないぞ。」

Z
「心配すんな。KDGとKFCそれと、ZBC（ゼロ、カナン、シオン、ぶっ飛ばしクラブ）に正式に入団届が来たら、刹那に譲るさ。」

ゼ
「つまり刹那に譲るまでは……。」

一同

「葬られキャラ♪」

ゼ
「なんか字が違う気が……。」

Z
「獄・風雷砲!!」

ゼ
「いま思いつき吹き飛ばしたのは……?」

Z
「読む?」

ゼ
「ああ。」

『ZEROです。KDGとKFCの入団届とZBC（ゼロ、カナン、シオン、ぶっ飛ばしクラブ）の案内を添えておきました。あと、な

のはさんとフェイトさん、それとスターゲイザーが頑張って作った、お菓子（特にイチゴのタルトが上出来と言っていました。）はヴィヴィオさん、メイデンさん、レナスさんで、おいしく頂いてください。あと、ゼロが、カナン君の不死身講座楽しみにしてたよ。（笑）一之瀬祐希奈様、ご武運を祈っています。K D GとK F C楽しみにしていますよ。』

・・・これって。」

Z

「いやあー、俺一人じゃ退屈だからさ。その回るときだけ、出てくるよ。」

ゼ

「よかった・・・。」

ドサツ・・・。

Z

「死んだな。」

ジェ

「ああ。」

一同

「君のことは忘れない。」

Z

「魔法少女リリカルなのは 戦場の絆—endless walt

z—」

一同

「始まります。」



とりあえず、何をしようか？困った。そんなことになりゼロは困っ

ていた。

「チーム戦するか！」

咄嗟に思いついた、模擬戦の方法で、若干冷や汗を流すゼロ。

「「はい！／うん。」」

ゼロは、皆賛成してくれたみたいでよかったと少しだけ安心する。

「じゃあ、組は・・・俺と刹那、フェイトとジェナスでいいな。」

ゼロはバランスが整うように、チーム分けする。

「やだ・・・。」

え・・・？今、「やだ」ってフェイトが言ったような？ゼロはそう思う。

「ちよっ、フェイトさん！？」

ジェナスが言った。気のせいじゃないか。ゼロは確信し、ため息を吐いた。

「じゃあ、誰がいいの？」

ゼロが呆れ交じりで聞く。

「ゼロ・・・。」

フェイトが言う。『ゼロ』と。

「へ？」

ゼロはその答えに素っ頓狂な声を出す。

「だめかな？」

やめろ！！上目遣いで言うな！！そう、ゼロはお願いする。心の中で。だが、やめる気配がないので：

「はぁ、わかった。」

諦めた。

「ちょ、ゼロさんまで！」

ジェナスもこれにはびっくりする。

「大丈夫、加減するから。・・・多分。」

ゼロは不安交じりで言う。

『多分ってものすごく不安なんすけど！！』

ジェナスのデバイスが言う。

「まあ、気にすんな♪」

ゼロは作り笑いで言う。

「はあ。」

ジェナスがそう呟いた。

「んじゃ、模擬戦開始。」

ゼロが言う。

「「「Ready GO!」」」

そして、始まる。

「んじゃ、俺、援護に回るから。」

ゼロはそう言う。

「うん♪期待してるよ♪」

フェイトは満面の笑みでこたえる。

「二人で、斬り込むぞ。」

ジェナスが提案する。

「了解。」

刹那は了解し、武装を展開。

フェイトはハーケンセイバー、ゼロは、e n d l e s s ライフルと

砲撃用スフィアを三個、刹那は、GNソードを、ジェナスは、ファーストモードで、グラップルソードを出した。

「はあああ!!」

刹那とジェナスがフェイトに斬り込んだ。フェイトはソニックムーブすると思ったら、しなかったので、ゼロは援護射撃に取り掛かる。

「風弾装填!! WIND SHOT!!」

一閃

外したか。そう、ゼロは思った。

「ジェナス、俺はゼロに斬り込む。フェイトさんの相手を頼む。」

刹那が言い、

「了解した。」

ジェナスは了解。そして、別れた。



「やっぱ、こっちに来るか。」

いい機会だ。TAS試すか。そう思い、ゼロはTASを起動した。

「はあああ!!」

刹那はGNソードで斬りかかる。

「装備、トライソード。トライボール装填。属性、風・炎・雷。」

ゼロは工程を確認し、大剣を召喚する。

『了解。』

ブレイブフォースはそう言い、装填される。

「はあああ!!」

隙を見せてる。今なら!! そう思い、ゼロに刹那は斬りかかる。

「今、隙を見せてるって思っただろ。」

ゼロの声が聞こえる。そう、背後から、大剣を携えながら。

「なっ!」

刹那は驚く。斬った筈の相手が背後から現れたから。

「その大振りなくしてからにしなよ。」

ゼロはそう言い、大剣を片手で持ち…。

「風雷閃!」

―閃―

雷と風を纏った一撃が刹那に向かって放たれる。空気に雷が放電する。斬撃は空気を震わせ、残心。そして、刹那は地面に叩きつけられた。

「ぐあ！」

なんという威力だ・・・！！刹那がそう思った矢先。

「さっさと立たないと、また同じの食らうよ。」

そこには、大剣を振り翳したゼロがいた。何！？いつの間に！そう思い、刹那は即座に立とうと思ったが遅かった。

「炎雷斬。」

――閃！――

今度は炎と雷を纏った一撃が刹那に襲いかかる。火の粉が飛ぶ。

「ぐあああ！！！」

刹那は盛大に吹き飛び、ゼロはトライソードにトライボールをもう一回装填しトライソードに属性を纏わせた。

「止め！風式剣術、炎雷風撃！！！」

その名を叫ぶとともに、風・炎・雷を纏った剣をたたきつけた。

「おわあああ!!」

そして、刹那は意識を失った…。

「やりすぎたかな？」

まあ、TASで一発食らったら大怪我なのに、こいつは二度も耐えたな。

なかなか強いな刹那は。

お疲れさん。ゆっくり休んでくれ。」

って言っても気絶した人に通じないか。ゼロはそう思った。

「さて、向こうはどうだろうな？」

そして、フェイト達がいるほうへとゼロは向かった。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼フェイト&ジェナスside▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「なかなか、強いね…。」

「そちらこそ。」

その時、バルディッシュはアサルトモード、ゼアムはファーストモードになっていた。厄介だな。この子をゼロに任すべきだった・・・。
まあ、悔やんでもしょうがないか。そう思い、フェイトは一瞬だけ口元を緩ませた。

「一気に決めるよ。バルディッシュ！真・ソニックモード！！」

『G e t s e t .』

「ッ！！」

まずい！あれを使用したら！そう思い、ワンフィフティを構え、斬り込んだ。

「させるかああ！！」

「・・・遅いよ。」

「ッ！」

フェイトは余裕でかわし、一撃を加えた。予想以上だな!!この速さは!!ジェナスはそう思った。その時フェイトはライオットブレードを起動し、スピードは格段に上がっていた。だが打つ手がない訳ではない!ジェナスはそう思った。

「ファイナルモード!!」

『了解っす!』

ジェナスはZ E A Mジャケットになった。そして、

「ツインビームカノン!」

銃撃を放った。

「バルディッシュ!」

『S c n i c m o v e.』

フェイトはそれを交わすべく高速移動を開始。そして、ジェナスから、3メートルほど前方に出た。そして、その時の隙をジェナスは見逃さなかった。

「もらった！カルンウェナン！」

ジェナスは対剣を出し、斬り込んだ。

「はあああ！！！」

「甘い！」

「ライオットザンバー！」

「閃ッ！」

対剣と大剣が重なった。力の量は大剣のほうが上だった。

「くっ！」

「ウワアアアッ！！！」

「撃」

ジェナスは地面に叩きつけられた。

「ごめんね！」

―殴―

フェイトは鳩尾にチョップを入れた。そして、ジェナスも気絶した。
・・。

「本当にごめんね・・・。」

「あらら、やっぱりね。」

ゼロがその場に現れ、少し、『ドキッ』っとフェイトはした。

「なんだ。びっくりした…。」

「そういえば、前の、出来なかったやつ、今やんないの？」

「えっ？」

「刹那が現れた時にやり損ねたやつだよ。」

そういえば、そうだった。けど、前、命を張って、助けてくれたし、それに私、ゼロ君のことが……。フェイトはそう思ったが、心に留めた。

「いや、いいよ。前助けてくれたお礼もあるし♪」

フェイトは満面の笑みでそう言った。

「そう♪じゃあ、刹那たちをシャルさん達に預けるか。」

「そうだね。」

ゼロは倒れてる刹那とジェナスを担いだ。

「ほら、いこう。」

「あ、うん。」

フェイトは何か考え事をしてるみたいだった。そう思って少し聞いてみた。

「何考えてるんだ？」

「いや、何も考えてないよ！」

「そうか？俺には『恋の悩み』です。みたいな感じで顔に書いてるのが見えるけどな。」

フェイトはその瞬間、ドキッとしたみたいだった。

「凶星か？」

「ゼロ君には、悩み事してるのがわかるんだね。」

「悩みごとしてるのだけな。」

「え？」

「後は、勘だ。」

「・・・。」

「んで、何をお礼は何にするんだ？」

「えっ？」

「リアクションがワンパターンだな。」

「ご、ごめん。」

「いや、責めてないよ。それより、俺にお礼をするって言ってたじやんか。それをどうするって話。」

言われてみると、お礼って、何をしてあげればいいんだろう？ フェイトは少し考えたが思いつかなかった。

「今度の休みまでに、考えておくってゆうのは、・・・だめかな？」

「ああ。いいよ。それまでに楽しみに待ってる。」

「ありがとう。」

フェイトは心の中はうれしきでいっぱいだったけど、ホントは飛びつきたかったけど、刹那達に悪いから、今回はやめておいた。と思った。

「そろそろだな。」

「うん。」

ゼロ side

「シャルさんいますか？」

ゼロは入ってすぐに言う。

「はーい♪どうしたんですか？」

シャルが笑顔でこちらに来る。

「刹那とジェナスをお願いしてもいいですか？」

「はやてちゃんから連絡は受けてますから大丈夫です♪」

ああー。やっぱりですか！ゼロはそう思い、少しでもため息を吐く。

「そうですか。ありがとうございます。」

「ええ♪でもほどほどにしてくださいね♪」

「わかりました。」

ゼロはそう言う。

「失礼しました。」

そう言い、出て行った。

「渡してきたぞ。」

「うん。」

ゼロはフェイトに言う。そして、フェイトも返す。しばらく沈黙が続く、

「じゃあ、俺らも帰るか。」

「そうだね。」

「「じゃあね。／＼な。」」

そう言い、別れる。

Z

「どんどん食べてくれ。」

パクッ・・・。

一同

「・・・。」

パクッ・・・。

一同

「・・・。」

Z

「どうかな？」

一同

「う、うまい!!」

スタ

「あなた、できますね。」

Z

「そんなにうまいのか？」

スタ

「ええ♪」

Z

「そうか。なら、ちょっと失礼するよ。」

スタ

「？」

Z

「風撃法! カナンにありたれ!!」

ドーン・・・。

スタ

「あの、今のは？」

Z

「LVに向けて発射した。『みんなで仲良く食べてください』って言う紙を添えてな。」

スタ

「はあ。」

Z

「ん？もうこんな時間か。また次回で会おう。」

一同

「ではでは〜♪」

第6話 一星を見上げし白銀の機兵（スターゲイザー）――

▼▼▼▼▼▼▼▼▼機動六課 取調室▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「一応、スターゲイザーと話してみるか……。」

ゼロはヒューズさん呼び、なるべく、広い場所で、スターゲイザーと話させてくれないか？と交渉した。

「わかった。転送魔法で、訓練場にする。」

ヒューズは何とか許可してくれたようだった。

「だが、怪我の有無は保証しない。」

ヒューズはそう言った。それは、死ぬかもしれない可能性の中で、やれるのか、聞いていると言う事。

「わかってます。とりあえず、ありがとうございます。」

これは、ゼロの独断の行動。怪我の有無は関係ない。覚悟もできている。

だから……。ゼロはそう思い、訓練場に足を向けた。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼機動六課 訓練場（室内）▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「いたな。」

「!」

ゼロはそう言うと、スターゲイザーは素早い反応で、銃撃を5発浴びせてきた。

「こりゃ、相当だな。」

スターゲイザーは俺が倒れてないのを確認すると、さらに銃口を向け、3発発射した。

「すまない。俺は君と話がしたいだけなんだ。」

ゼロはスターゲイザーに言う。

「・・・そだ。」

「嘘だ!!」

叫び、駆けだす。

「ッ!」

スターゲイザーはビームサーベルを出し、斬りかかってきた。3メートルの距離を一気に縮め、

―刺!―

ゼロの腹にビームサーベルが刺さった。

「ガハッ…。はぁ、言っただろ、俺は『君と話がしたい』って。だから、俺はかわさない。」

ゼロは吐血をしながらも、そう言う。そして、ビームサーベルを引き抜き、投げ捨てる。

「。。。。」

それを見たスターゲイザーは、バックステップで、また、3メートルほど、離れた。。。

「話を聞いてくれ！俺は君に危害を加えるつもりはない！！」

ゼロはスターゲイザーに叫ぶ。：が、

「戯言を！！ポール・ド・オラージュ！」

スターゲイザーは聞き入れず、背中に付いていた円盤スラスターを媒介にし、斬撃にしてきた。

―斬―

ゼロは足を少しだけ切る。が、そこは、膿となっていて、気持ち悪くなっていた。

ホントに全力だな。体のあちこちが痛いな。ゼロはそう思いながらも、スターゲイザーに言う。

「何回も言ってるようだが・・・俺は君に危害を加えるつもりはない』んだ。お願いだから、武器を置いてくれないか？」

「・・・本当…なんだな。」

スターゲイザーがもう一度聞く。

「ああ。なんなら、もう5発位攻撃しても大丈夫だ。」

ゼロはそう言い、両手を広げる。

「いや、その必要はないと思う。大人しく武器を置こう。」

とりあえず、準備完了だな。攻撃を食らいすぎて、足元がかなりふらつくが……。ゼロはふらつく足を庇いながらも、スターゲイザーの元へと足を進め、目の前に立ち、座る。

「とりあえず、なんで、君が人間を拒絶するようになったか、聞かせてくれないか？」

ゼロはまず、そこから…根本的な、根元の部分から、探る事にした。

「わかった。わたしは、こことは、違う世界、こことは、違う場所に前はいたんだ。それが、なんというのだろう…？」

「次元震だな。それで？」

スターゲイザーが上手く説明できないところをゼロは説明する。

「それで、わたしは人になっていた。」

「人？ということは、つまり……。」

人と言う単語に疑問を抱いたゼロは再度聞く。

「ああ。私は機械だった。『ガンダム』という名のな。それで、いつの間にか、わたしは、たくさんの人に追われていた。」

やっぱり、ガンダムがかかわっていたか……。これも作者の陰謀か……。ゼロはそう思い、渋々ながらも納得した表情を見せ、言う。

「なるほどな。それは多分、管理局の魔導師だろ？」

ゼロは管理局であるかどうかを確認するために、聞く。

「ああ。」

スターゲイザーは応える。

「きっと、管理局はあまりのエネルギー反応で、君をロストログアに指定したと思うんだ。」

ゼロはなぜ、スターゲイザーがロストログアに指定されたか説明する。

「それで、わたしはたくさん弾をぶつけられて、そこからだ、わたしが人間を拒絶、いや、他者を拒絶するようになったのは。」

が、スターゲイザーはお構いなし。だがゼロは、なるほど。それで、他者を拒絶し続けていた訳か。そう納得して、

「それで、そのほかの魔導師はどうしたんだ？」

ゼロがまた疑問をぶつける。

「さっき、あなたに放った技、『ポール・ド・オラージュ』で一掃した。・・・それから魔導師は日に日に追ってきて・・・。」

きつと辛かったのだろう。目に涙を浮かべている。

「それは、大変だったな。辛かっただろう？今は泣いていいんだぞ？」

ゼロはそう言い、抱き寄せる。

「わたしは・・・わたしは・・・。」

そして、一拍置き・・・

「わあああああああ！」

泣いた。悲痛の叫び。それは、そのように聞こえる。スターゲイザーの肩は微かに震えていた。

「辛かったんだろう？怖かったんだろう？全部吐き出して泣いていいんだよ？」

そう言って、ゼロは頭を撫でた。

「うん・・・うん！」

「すごく・・・怖かった・・・すごく辛かった・・・。」

スターゲイザーは素直に吐き出し、泣き続ける。

「そうか、そうか。」

ゼロは子供を慰める気持ちで、そう言う。優しい顔で。

「わああああああ!!」

スターゲイザーはホントに今までの辛い思い、怖い思いが吹き飛ば
と言わんばかりに……。泣いた。軽く1時間は泣いただろう……。

＊

「もう、大丈夫か？」

ゼロが聞く。

「はい、大丈夫です。」

スターゲイザーは敬語が基本となった。そして、言う。

「そう♪君が心を取り戻してくれてよかったよ。」

笑顔で、ゼロは言う。

「本当に、ありがとうございます。」

スターゲイザーはお辞儀をした。

「ああ♪」

本当は足元がめっちゃふらつくんだけどな。ゼロはそう思う。

「それより……。」

「ん？」

「さっき、私がつけた傷、大丈夫ですか？」

スターゲイザーは言葉を繋ぎながら、恐る恐る言う。

「なんとかな……。」

――倒――

ゼロは足に力が入らなくなり、その場に倒れ込む。

「どこが大丈夫なんですか？」

スターゲイザーは、はぁ、とため息をつく。

「肩、お貸ししますから医務室に行きましょう。」

スターゲイザーはそう言いながら、肩を貸す。

「ああ。そうだな。」

ズキッ…。と激痛が走る。

「うっ……。」

その痛みに思わず唸ってしまった。

「大丈夫ですか？」

心配してくれてる……。やはり、スターゲイザーは優しいんだな。ゼロはそう思う。

「こりゃ駄目だな。少しだけ、体がいかれてる。」

ゼロはあまり無茶すると、逆に死に迫いやるような形でダメージを受けたので、正直に言う。

「そうですか、あそこに座って回復術をかけましょう。それで少しは楽になるはずです。」

スターゲイザーそう言う。

「ああ、すまない。」

ゼロは謝る。そして、機動六課内のあるベンチに腰をかけた。

「あ、ゼロ……？」

その時、声を掛ける人物：フェイトがゼロの方に向かって、走って来た。

「どうしたの！？その怪我！？」

フェイトが涙を流しそうな勢いで言う。

「悪い。ヒューズさんに無理言ってスターゲイザーの心を開かせたんだ。本当に、ごめんな。」

ゼロは謝りながらも言う。フェイトは理解した。

「これで、少しは楽になったと思いますよ。」

スターゲイザーが言った。確かに軽いかな。今なら、一人で歩けそう…。そう思い、実際に立ち上がってみた。

「少しだけ痛いな。でも一人で歩く分には、問題はなさそうだな。」

ゼロは素直に言う。

「そうですか。お力になれてうれしいです。」

スターゲイザーがこちらを向いて言う。

「ああ。ありがとう。」

ゼロはお礼を言う。そして、ゼロ達は医務室に向かった。シャマルさんにこっぴどく怒られたが、スターゲイザーが心を開いてくれるだけよかった。その思いで、ゼロはいっぱいだった。

明日は休日、フェイトがお礼に用意してくれるものはなんだろう…
…？

次回、魔法少女リリカルなのはStS ZERO STORY 一絆（
KIZUNA）―機動六課の休日

に行きます。

「「……。」」

まあ、実際には、話題が見つからず、沈黙中でしたとさ（笑）

「作者うぜえ！」

すいません。

「まあ、とりあえず、街の喫茶店で、お茶でも飲む？」

ゼロが提案。

「じゃあ、そうしようか。」

フェイトはそれに賛同する。

「じゃあ、出発♪」

と、言うわけで、喫茶店に行く。

一十分後—

とりあえず、喫茶店に到着。

「「……。」」

当然ここでも、沈黙な訳で……。口を開いたのは、ゼロだった。

「久しぶりだな。」

「え？」

「こうやって、二人でこうゆう所に来るのがさ♪」

「そうだね……。」

ゼロが笑顔。だが、対照的にフェイトは俯いている。

「あのさ、もうちょっと楽しそうな顔してくれないと。そんなカチコチじゃ、楽しいものも楽しくないって。」

ゼロはほら、スマイル、スマイル♪と言うように、フェイトを見る。

「うん。わかった♪」

フェイトはそう言うのと、満面の笑みになった。その後……。

「ごめんね。」

「なにを？」

フェイトがいきなり謝ったので、反射的にゼロは聞く。

「お礼、何にするか、決めてなかった……。」

フェイトがそう言った事に対し、ゼロは口元を緩ませる。

「プッ、あははははは！」

「な、なんで笑うの!？」

フェイトは訳が分からず、聞く。

「いやさ、そんなに考えてると思わなくて、あはははは!」

頑張っと思っていたのに、そんな事扱いされたせいでフェイトがむくれていた。

「いや、ごめん、ごめん。でも・・・ありがとな。その気持ちだけで十分だよ。俺はな。」

ゼロは優しい笑顔で言う。

「な、ななな何を言ってるの!？ゼロ!！」

ゼロはまた笑いそうになったが堪えた。

「そんなに焦ることはないだろ。」

ゼロはそう言う。

「だだだ、だって!」

「ほら、リラックス、リラックス。」

呂律が回っていないフェイトをゼロは落ち着かせる。

「うん。」

フェイトが落ち着いたところで、次の場所を目指すことにした。

「ねえ、次はどこに行くの？」

そこは映画館。フェイトの体が少しだけ、震えた。

「ジャンル的には、どんなのを・・・？」

「ホラー♪」

ゼロが楽しむような笑顔で言う。ビクンッ！と明らかにフェイトの体が震えた。そして、足から下が確実に震えている。

「嘘・・・だよね？」

しまいには、声まで震えてきた。

「本当♪」

「別な映画に・・・。」

「もうチケットとってある。」

「返却は・・・。」

「昨日までだった。」

フェイトの逃げ道は完全に断ったゼロ。それを尻目に手を引く。

「さあ、行こう?♪」

「いやあああああ!」

「大丈夫だって♪ほら。」

「わかった。怖くなったら腕にしがみついていい?」

「いいよ。」

「ありがとう・・・。」

叫んで弱音を吐くフェイトを引っ張りながら、中に入る。

—映画終了後—

「ヒック、ヒック・・・。」

案の定フェイトが泣いていた。さすがに、これはやりすぎたかな・・・?
ゼロはそう思う。

「フェイト・・・なんかごめんな。」

ゼロは謝る。

「いや、大丈夫・・・。」

フェイトはそう言うが、明らかに大丈夫じゃなかったので、近くのベンチにフェイトを座らせた。

「ここで待ってて。飲み物買ってくる。」

ゼロはフェイトに言う。

「うん……。」

そして、了解すると、自動販売機へ走り去る。

「とりあえず、緑茶と……。」

そういえば、はやてにフェイトの好きな飲みものって聞いてなかったな。そう思う。

「フェイトに、コーヒー……。やっぱホットミルクにするか。」

フェイトの所に自販機で買った緑茶とホットミルクを持ってた。

「フェイト」。

「ゼロ。」

「ごめん、待った?」

「ぜんぜん待ってないよ。」

「そうか。それはよかった。」

そして、一拍置き、

「フェイトの好きなものがよくわかんなかったから、ホットミルク

買ってきたけどいいかな？」

さっき買った飲み物を差し出す。

「大丈夫だよ。ありがとう♪」

フェイトが笑顔を見せた。

「おう。それじゃ、フェイト。なんか買ってきたいものとかある？」

ゼロはフェイトに聞く。

「ないけど……。ゼロは？」

フェイトは逆に聞き返す。

「俺か？特にないけど、とりあえずその辺見て回るか。」

ゼロはそういって、昼食の後に、いろいろ見て回った。そして……。

「んー。楽しかったな。」

ゼロは屈伸しながら言う。

「そうだね。」

フェイトは肯定。

「最後に海でも見ていくか。」

なぜ、海なんだろう？というフェイトの疑問が聞こえたが、気にせず、海へ行った。

「潮風が気持ちいいな。」

ゼロは言う。

「そうだね。」

「フェイト。俺はな、海を見ることが、夜空を見ることが好きなんだ。」

「海と夜空？なんで？」

フェイトはそれに疑問を持ち、聞く。

「海と夜空はな季節とか、場所で、見えるものが違うからだよ。まあ、その話はまた今度にしよう。もう、陸風になってきてるしな。」

ゼロはそう言うと、向き直る。

「そうだね。」

フェイトは賛成する。

「じゃあ、いくか。」

ゼロはそう言うと、歩き始めた。

…フェイトは感じていた。このままでいいのか？と。もし、このま

ま行ってしまったら自分の思いは、どうするのか？その気持ちを、感じていた。

「待って！ゼロ！！」

フェイトが呼びとめる。

「どうし・・・。」

バフツ・・・。ゼロは言い切ることができなかった。なぜなら、フェイトが俺の胸めがけて走ってきたからだった。

「やっぱり、ゼロ君は暖かいね。」

フェイトはそう言う。そして、ゼロはフェイトを抱きしめた。

「お前も暖かいな。」

「ねえ、ゼロ君。私の思い、聞いてくれないかな？」

「ああ。いいよ。」

「わたしは、ゼロ君のことが好きなんだ。」

「うん。」

「だから、付き合って欲しいんだ。・・・私と・・・。」

その顔は赤かった。けれども、ゼロも少し、目を閉じ、自分の気持ちを思い返して…

「ああ。いいよ。俺も君なら大歓迎♪」

そう言った。

「いいの・・・？」

フェイトは聞く。

「ああ。大丈夫。」

ゼロはそう答える。この答え方もどうかとは思いつながら。

「ありがとう。」

「いや、なんの、なんの。」

ゼロはそう笑って言う。

そして、二人は六課にもどった。途中ギクシャクしたといっても、とても楽しかった。「とても幸せだった。」その思いで、二人は胸がいっぱいだった。そして、安らかな眠りに就いた・・・。



Z

「後書き召喚コーナー♪」

わ〜♪

Z

「今日は、このコーナー「初」のゲストが来ています♪」

おー。

Z

「それでは、来ていただきましたましょう。青コーナアアア『高町ヴィ
ヴィオ』!!!」

ゴチン!

ゼ

「いい加減にしろ。」

Z

「冗談なのに……。わかったよ。えー、今日は、LVから、高町
ヴィヴィオさんとメイデンさん、それにレナスさんです。どぞー♪」

ワアアアア!!

LV陣

「こんにちは。」

EW陣

「いらっしやい。」

Z

「まあ、さすがに話しにくいでしょ。お茶でも飲みながら話そ。」
スタ

「わたしとZEROさんで、腕によりをかけて作りました。たくさん
食べてくださいね♪」

L V 陣

「いただきます。」

Z

「はいどうぞ♪」

L V 陣

「♪♪♪」

Z

「これが噂に聞く……。」

L V 陣

「なんですか？／なんだ？」

Z

「いや、なんでもない。そういえば、作者さんが蟹とオムライス、それと……。」

メ・レ

「くれるのか！？／くれるんですか！？」

Z

「ああ。そんなこと言ってたな。袋かなんかに入れてやるから持っていけ♪」

メ・レ

「ありがとうございます！／ありがとうございます！」

Z

「いや、お礼なら作者さんにな調べてくれたのは、作者だし。」

ヴィ

「……。」

Z

「わかってる。ヴィヴィオには、特大シュークリームとか、そういうの、L V に送ってあるから。」

ヴィ

「ありがとう！」

Z

「いやいや何の何の。（こいつら笑うとかわいいな。）」

L V陣

「ごちそうさまでした。」

Z

「お粗末さまでした。にしてもすごいな。全部食べるとは思わなかった。」

ゼ

「おかわりあるぞ。」

Z

「なんでお前が言うんだ？」

ゼ

「スターゲイザーが作ってたから。」

Z

「スターゲイザー、ごめんねー!!」

スタ

「いえ、どうということはないですよ。」

Z

「刹那達も呼んでくれるかなあ？」

スタ

「はーい♪刹那さーん!!」

Z

「ちょっと待ってて」

L V陣

「はい。」

一十分後

Z

「軽く自己紹介するか。俺は、ZERO。ネタバレはしたくないから詳しい自己紹介は避けるようにとだ。Nice to meet

you.

ゼ

(なんで英語なんだ?)

Z

(そのうちわかる。)

メ・レ

「え?、え?」

ヴィ

「Nice to meet you too.

メ・レ

「ヴィヴィオ……。／ヴィヴィオさん……。」

Z

(ほらな?)

ゼ

(客人いじるなよ。)

Z

(気にしない、気にしない♪)

メ・レ

「今ZEROさんはなんて言っていたんだ?／……ですか?」

ヴィ

「今のは、『これから宜しくお願いします。』って言っていたんだよ。」

メ・レ

「なるほどな。／……ですね。」

Z

「ヴィヴィオは英語がわかるんだな。勉強してる証拠だ。えらいぞ

♪

ヴィ

「そう……かな?」

Z

「そうだよ♪」

若干文字数がやばいので、自己紹介終わり。

Z

「んじゃ、自己紹介も終わったところで……。フェイトさん召喚
！！」

パアアア……。

フェ

「ヴィヴィオ〜♪」

ヴィ

「フェイトママ！」

フェ

「元気にしてた？」

ヴィ

「うん♪」

Z

「あ！！もうこんな時間だ！！」

一同

「え？」

Z

「ごめん。後書きはもう終わり。刹那と俺で、オムライスと蟹持つて行くから。」

メ・レ

「ありがとうございます♪」

Z

「いや、いいよ。それではみなさん。」

EW陣

「次回も、」

L
V
陣

「お楽しみに♪」

一同

「ではでは♪」

第8話一敵（前篇）一

Z

「前書き質問コーナー。」

わ〜♪

ゼ

「ど、どうした・・・？」

Z

「質問がないそうだ。」

ピクッ・・・。

ゼ

「そ、それは、つまり・・・。」

Z

「質問だけネタ切れみたいだ・・・。」

ゼ

「ま、マジかよ。」

Z

「ああ・・・というわけで読者さん！！！！どっんな素朴な質問でもかまいません是非、このコーナーにネタを！！！」

ゼ

「無理やりだな！！で、質問がなくなると、今後どうなるんだ？」

Z

「前書き駄目だしコーナーか後書きコーナーと同じ運命になる・・・。」

ゼ

「危険だ!! 俺からもお願いします!! どうか、どうか、このコーナーに、ネタを!!」

Z

「まず一件目……。」

ゼ

「ひい!! やばいぞ!! ともかくそのことをお願いしつつ、魔法少女リリカルなのは 戦場の絆—endless waltz—始めります!!」

Z

「状況描写が少なくて……。」

ゼ

「もう、やめてー!!」

Z

「ちなみにな、後書きないから。」

ゼ

「グハア!!」



ピピピッ……。そんな音が、ゼロの部屋に流れた……。屈伸をして、起床した。ちなみに今は、5…30。

「ふう、さて日課に行きますか。」

ゼロはそう言い、着替える。彼の毎日の日課は、初めに、ミッドチルダを500周すること。ちなみに、自分に劣化魔法をかけて負荷をかけて日課をしている。余談だが。

「さあ、行くか!!」

500周するまで、1時間もかからないことが、ゼロのある意味での自慢である。

—1時間後—

「疲れた〜。さあ、次だ。」

ゼロはそう言う。次は、模擬戦だ。大抵ブレイブフォースに相手をしてもらうのだが、たまに訓練場に刹那かスターゲイザーがいることがあるので付き合ってもらったりするのだが…。

「今日は、いないな。」

ゼロは確認して言う。

〈そうですね。〉

ちなみに、模擬戦といってもデバイスを起動して、本気で殺りあうわけではない。組み手程度のもの。

「じゃあ、ブレイブフォース、アウトフレーム。」

〈了解。〉

ゼロはブレイブフォースに言い、ブレイブフォースはアウトフレームになる。この時に補足。ブレイブフォースは前の俺の相棒の『ブレイブハート』に闇の書だった、リインフォースのリンカーコアを入れたものだ。

「説明は、終わりましたか？」

「おわっ！人の心こころを読むのやめてくれって言っただろう。」
「すみません。」

ブレイブフォースは少し落ち込んだ様子で謝る。

「いや、いいよ。じゃ、始めるか。」

ゼロはそう言い、手の骨を鳴らす。

「そうですね。」

しばしの間・・・そして、ブレイブフォースは駆け出した。

「はああ！！！」

右の拳を打ってきた。けれどゼロは軽く屈み、アッパーを繰り出す。

「ほっ。」

そして、体勢を整えたところで…。

「そら！！！」

一撃！

サマーソルトを繰り出す。

「うぐっ！」

ブレイブフォースはその衝撃に少し唸る。

「まだまだ。歯あくいしばれよ・・・。」

そして、ゼロはブレイブフォースの腰を掴み、組み技をかける。

「ぐはっ！」

ゼロは手を見るべく、バックステップで、5歩分はなれた。

「やっぱり、強いですね。」

ブレイブフォースはそう言い、立ち上がる。

「うーん。そうか？」

「とぼけないでください。」

確かにな。まあ、あいつが本気出せば、俺も少しは苦戦するけど・・・。ゼロはそう思いつつ、構えを緩くする。その隙をブレイブフォースは見逃さない。

「はぁ！」

蹴りを放つブレイブフォース。

「ぐわっ！」

ゼロはそれを体勢を崩すことでかわし、ブレイブフォースはさらに、アップーを出し、サマーソルト、そして正拳突きを放つ。ゼロは盛大に吹き飛ぶ。

「へえ……。さっすが。俺のデバイスだ。どんな隙も見逃さないな……。」

ゼロはそう言う。

「主……。ではなくマスター。」

ブレイブフォースが構えを解き、言う。

「呼びやすいほう……。ってわけにもいかないな。なんだ？」

「そろそろ、時間です。」

「あら？そうだったか。」

ゼロは少しだけ時計を見て思う。ちなみに今日は、6…30から7…00までだ。本当は8…30までやるのだが、ゼロは今日、フェイトと一緒に（助手という役割で）任務に行くことになっている。

「んじゃ、待機モードになってくれ。」

「了解しました。」

ゼロろがそう言うのと、ブレイブ・フォースが待機モードになってグローブになった。これは、フェイトがゼロにあげた結構昔のグローブを参考に構成したもの。

「さあ、着替えるか。」

「そうですね。」

そして、着替えをして、食事を取るべく、食堂に行くと……。

「ゼロ。」

フェイトが食堂の椅子に座っていた。

「すまないな。待ったか？」

ゼロは反対側の椅子に座り、言う。

「うん。むしろ会うのが楽しみで。」

実は昨日、ゼロは任務のことでフェイトと食堂で待ち合わせする、ということになっていた。

「そうか。じゃあ、食べるか。」

ゼロはそう言う。

「うん。」

フェイトはそれに頷く。そして、朝食を取り終え、「時間があるから」という理由で、話していると・・・。

「ゼロさん、フェイトさん。」

なのはとスバル含めるstrickersがゼロ等の方を見て、呼ぶ。

「スバルか、今日の練習はどうだった？」

ゼロはスバルに聞く。

「もちですよ！」

「そうか♪」

スバルは応え、ゼロはそれに合わせる。何気に、ゼロとスバルが息が合っているというのは、余談である。

「はあ。」

そんな中、ティアナはため息を吐く。

「「ティア？／ティアナ？／どうしたの？／んだ？」」

ゼロとスバルが聞く。

「あんたらが悪いんでしょうが！！」

「打打！！」

ティアナは何処から取り出したか、ハリセンで二人の頭を叩く。

「「いったあ……。／てえ……。／いきなり何するの？／んだ？」」

「だー！息を合わせるな！！鬱陶しい！！！」

「「ご、ごめん……。」」

ティアナに謝る二人。

「打打！！」

今度は先ほどよりも強い一撃が二人を襲う。

「うごお……。」

「いったあ……。」

二人はタイミングをずらして、唸る。

「ゼロ……そろそろ時間が……。」

フェイトが時間を確認して、言う。

「そうだな。行こう。」

ゼロはそう言い、席を立ちあがる。

「それじゃ、私たちはこの辺で……。」

フェイトも席を立つ。

《はい。／うん。いってらっしゃい。》

「「いってきます。」」

そして、ゼロがこの日、最後に見たのはティアナのため息だった。これが、新たな敵の出会いだとは、誰も、誰も思わなかっただろう。そして、これが悲劇の始まりだった。

「ねえ、ゼロ？」

「どうした？」

フェイトがいきなり声をかけ、ゼロは返す。

「私たちずっと一緒だよね……。」

フェイトは聞く。その声は弱々しい物だった。

「何を言っているんだ。当り前だろう？」

ゼロはそんなフェイトの肩に手を回し、言う。

「そうだね。」

「おっと、忘れるところだった。」

「なにを？」

ゼロの言葉に対して、フェイトは尋ねる。

「ほら、刹那のことさ。嘱託魔導師試験受けなきゃいけないだろ。」

「ああ。そうだね。確かに刹那君も一般人だからね。」

ゼロの問いに対して、フェイトは納得する。

「だろ。隊長室に行こうぜ。」

「うん。」

そう言い、二人は隊長室に向かった。

▼▼▼▼▼機動六課 隊長室▼▼▼▼▼

「失礼します。」

「ん？なんや、お二方か。付き合ってる……。」

ゼロ達が入ると、はやてが初っ端から爆弾を踏む。

「はやて……。ボケもいい加減にしないと……。」

フェイトははやての首筋にバルディッシュを突き付ける。

「フェイトちゃん？ ちょっと……。あ、ゼロ君？ 助けてーな？」

はやてはそれを自覚し、冷や汗を流しながらゼロに助けを求める。

「前の借りを今ここで返さなきゃいけないからな。断る。」

ゼロはあえて冷たく接する。

「そんなこと言わんといて？」

「やだよ♪」

ゼロははやての言葉に爽やか過ぎて黒いオーラが出るほどの笑顔を
見せる。

「う……。わ、わかった！！前のことは帳消しにするから！！な
？な？」

「そんなんですすと思う？」

ゼロははやてに強請をかける。

「わかった！！もう、今後このことは口にださへんから！！それで
助けて！！お願いや！！」

「はあ。ほらフェイト。はやてもああ言ってることだし、デバイス
をしまえ。」

ゼロはバルディッシュをはやてに突き付けているフェイトを諷める。

「ホントにはやてちゃんが約束守るとゼロ君は思うの？」

「思わない。」

「ちょ・・・」

ゼロはフェイトの問いに即答。はやてはそれに焦り、手を思わず出す。

「だけど話が進まんから今は押さえろ。」

「わかった。」

ゼロはそう言う。これでダークオーラはひいたな。よし。ゼロはそれを確認後、

「さて、本題に入りますか。」

さらに言う。

「そうだね。」

フェイトは肯定。

「で、どうしたんや？」

『カップルさん』とでもゆうつもりだったのだろう。あわてて口を隠すはやて。ゼロはそれに眉を引き攣らせながら話す。

「刹那のことだ。嘱託魔導師試験を受けさせてくれねえか？」

ゼロは単刀直入に言う。

「うーん。そうやな……。」

はやては考え込むしぐさをする。

「きっと、刹那君は、魔導師になれば、即戦力になるし、ね？」

フェイトはフォローを入れる。

「わかった。それじゃあ、言っとくわ。」

「「ありがとう。」」

はやてはそう言った事に二人は頭を下げる。

「まあ、とりあえず……ティアナは筆記だな。」

その後、ゼロは言う。

「どうしてや？」

はやてが聞く。

「なんとなくだ。あとは、適当に決めてくれ。」

ゼロはそう言う。はやては、何となくってなんや！という声が聞こえたが、スルーした。

「わかった。こちらで決めさせてもらうわ。」

はやては気を取り直し、言う。

「じゃ、俺等、任務あるから。」

「わかった。それじゃあな。」

ゼロはそう言う。はやてはそれに返す。

「ああ。／うん。」

二人はそれに返す。

「仲良いお二人さん♪」

カチリッ・・・はやては完っ全に地雷を踏んだ。

「聞かなかったことにしようかゼロ君。」

「ああ。そうだな。“聞かなかったこと”にしようか・・・。」

二人ははやてに聞こえる様に大きな声で言う。

「失礼しました・・・。」

ズガンッ！！あまりにも激しすぎる音で俺達は扉を閉め、移動ポータルへ向かった。

＊

第126番宙域・・・そこは、地球のように緑豊かで、少しだけ、谷とか、峠とか、洞窟とかがある星だった。建物はあるが、むっち

やくちゃ高いビルばかりだった。今日はそこへ用があるのだ。

「これは……。」

「……。」

フェイトは呟く。そこには、クレーターがあつた。まるで、ものすごい衝撃が走ったか、隕石でも落ちたか、蟻地獄でもあるのかと思うくらいのもの。

「なんなんだろうこれ……?」

さらにフェイトは言う。

「俺が思うに、エネミー……いや、ちがうか。」

ゼロは自分が出した考えを自分で否定し、また考える。

「ゼロ君にもわからないの?」

フェイトは言う。

「ああ。」

ゼロは肯定する。と、その時。

—轟—

何かが落ちる音がした…。

「なんだろうな?」

ゼロはその方向を見て言う。

「そうだね。」

フェイトもその方向を見て言う。

「ちよっくら見てくるな。」

ゼロはそう言うと、歩き出す。

「うん。気をつけてね。」

「ああ。おまえもな。もしかしたら、おこぼれがそっち行くかも。」
「わかった。」

ゼロとフェイトは一頻り会話をし、ゼロは制服のポケットから青色の宝石を取り出す。

「E W s y s t e m 起動。行くぞ。」
「了解しました。✓」

そして・・・落下物が落ちてきた場所へ急行した。

＊

「!!・・・お前は・・・。」

そこには、一体のマントを羽織った戦闘機人・・・いや、それとはまた違うものかもしれない。けれど、そのような雰囲気醸し出している人物がいた。

「・・・。」

「うわっと！」

その、戦闘機人らしきものはいきなり斬りかかり、ゼロは体を後ろに無理やりそらせて回避する。

「ひとつ聞こう・・・。貴方は誰だ？」

ゼロは爆転し、体勢を元に戻して聞く。

「人は、俺のことをこう呼ぶ・・・。」

それは口を開く。

「・・・？」

「ライザーⅡクロイツ・・・。」

「！！！」

まさか、こいつが！？あいつは、別の宙域で死んだはずじゃ・・・。
ゼロはその名を聞いた瞬間、その思いが心を滾る。

「隙を見せる余裕があんたにあるのか？」

「ッ！！！」

ライザーはいつの間にか、ゼロの後ろに回り込み、斬撃を繰り出した。

一斬！一

「ぐはぁ!!」

ゼロは少しだけ声を上げ、体勢を崩す。

「ふん……。相手にならないな。」

ライザーはそう言う。逆光でよく見えないが、マントの中の右腕は機械だった。

「なるほどな……。」

ゼロはそう言い、体勢を戻し、立ち上がる。

「ほう、まだ立てるか……。」

ライザーはそれに感嘆し、言う。

「あたりまえだ。」

ゼロはさらに言葉を繋ぐ。

「ホントにそんなことをしていいのか？」

ライザーはそう言い、不敵に笑う。

「どうゆう意味だ……？」

ゼロはその言葉の意味がわからず聞く。

「俺はもう、お前の親愛なる人に刺客を放っているぞ。」
「!!」

ライザーは何食わぬ顔で言う。親愛なる人・・・まさか!!ゼロは
そう思い、その名を叫ぶ。

「フェイト!!」

そう、フェイトの名を。ゼロはさらに、E W s y s t e m特有の羽
を広げ、羽ばたいた。

「フェイト・・・か。せいぜいあぐがいいさ。今はまだその時で
はない。貴様が力をつけたときにまた来よう。」

ライザーはそう言い、高らかに笑う。フェイト!フェイト!!間に
合えよ!!ゼロはそう思いながら、高速で向かった。



フェイトside

「よし、これで終了っと。」

ゼロ・・・遅いなあ。探しに行こうかな。フェイトがはそう思う。
それに、なんだか、少し胸騒ぎがする・・・。その思いが引き金を
なり、

「よし、・・・行こう。」

フェイトを向かいさせる事を決意させた。そして、落下物から、5

k m地点。

「オマエヲ…コロス…」

「え？」

フェイトはそのような念話らしきものを聞く。その刹那。地面がゆがみ、結界が張られ、地面から戦闘機人らしきものが出てきて…。

「オマエヲ、コロス…。」

「ぐあっ!!」

いきなり、首をつかまれて、持ち上げる物体。

「コロス…。」

「く…あ…。」

さらに強く絞める。

「助けて…ゼロ…。」

フェイトは涙を流してそう願った…。

「フェイトー!!」

「ゼロ…?」

その声を聞き、フェイトは希望を見た。



ゼロ side

「はあああ!!」

ゼロは戦闘機人らしきもの、今は仮に異形と呼ぼう。その両腕を切断。そしてコアを切り裂いた……。

「グアアアア!!」

異形は叫び声をあげる。

「安らかに眠れ。」

ゼロがそう言う。その後、異形は、消え、ゼロはフェイトを優しく受け止める。

「げほっ!げほっ!」

その後フェイトは激しく咳き込む。

「大丈夫か?」

「ゼロ君……?」

フェイトはゼロを見る。

「ああ。俺だ。ゼロだ。……しっかりしろ。」

ゼロはフェイトを見て言う。

「バカ・・・。」

フェイトは呟く。

「?、フェイト・・・?」

ゼロは訳が分からず、聞く。

「バカ! バカ! バカ! バカ!」

そうフェイトは言いながら抱きつく・・・。

「・・・ごめん。もっと早く気づいてればよかったのにな・・・ホントにごめん。」

ゼロはそう謝る。それにフェイトはゼロの体に顔を埋めたまま、首を横に振る。

「今度は、今度こそは、守り切るから。もう・・・泣かないで? な?」

ゼロはそう言い、謝る。

「・・・うん。こっちこそごめん。」

フェイトはその後、納得したように言う。

「わかったらいいよ。今、立てる?」

ゼロはフェイトに立つように促す。だが・・・。

「うっ!!・・・」

フェイトは呻き、その場に蹲る。

「大丈夫か？」

ゼロは聞く。

「へ、平気だよ。」

そう言うフェイトの腕は微かに震えていた。

「正直に言え。足が痛いんだろう？」

ゼロはフェイトの手を掴み、言う。

「・・・うん。」

フェイトはは頷く。

「なら、抱っこで行くか。」

ゼロはそう言うのと、腕を取り、首の後ろで結びつける。

「え、え?」

フェイトは困惑している。それを見たゼロはフェイトの方を向き、

「抱っこだよ。抱っこ。」

そう言い、持ち上げる。

「ええ!？」

フェイトは驚く。

「早くしないとさっきの奴等が来るからな。」

「で、でも……。」

「さっさと行くぞっと。」

ゼロは抱っこをした、だがこれは俗に言う、『お姫様抱っこ』と言う奴だった。

「ちょ、ちょっとゼロ!？」

「行くぞ。」

ゼロはフェイトにそう言い、屈む。

「で、でもこの体勢で？」

「ああ。そうなるな。」

「え、その……。」

「EW起動。」

ゼロはフェイトの話を聞きながら準備を進める。

「ちょ、私の話聞いてる!？」

△了解。▽

「聞いてない。行くぞ。」

ゼロは話を聞いているにもかかわらず、そう言い、足に力を込める。

「や、その……。」

「大丈夫。安全な場所までだから。」

そして、飛び立ったがフェイトは終始あう。あう。ってな感じ。きっと、はやてが見たら茶化すんだろうな。とかゼロは思いながら飛行を続ける。

へマスター。すぐそこに洞窟があります。✓

「よし。そこにしよう。」

ゼロは、洞窟の入り口に着地。そしてフェイトを下した。

「俺、これから迎撃に行ってくるから。」

ゼロはそう言う。

「待って!……もしかしてとは思うけど、まさか、一人で?」

「ああ。」

「……私が止めても?」

「ああ。」

ゼロはフェイトを見て言う。

「……はあ。わかった。怪我だけはしないようにね。」

フェイトは止められないと解り、諦める。

「ありがとう。」

そう言うと、ゼロは飛び立った。たくさん異形を連れていくために、さっきのクレーターの所へ向かった。そこなら、EWを使って空中で戦えるとゼロは思ったからだ。

「よし、着いた。ここなら……。」

そして後ろを振り向いた。だが、さっきの異形とは形……いや、大きさまでもが違った。その姿はまるで……。

「翼竜……。」

ゼロの前に立ちはだかる翼竜……。ゼロはどうやって立ち向かうのか？そして、この任務を終えて、六課に帰還できるのか？次回、魔法少女リリカルなのはStS ZERO STORY一絆(KIZUNA)――

一敵(中篇)――

第9話一敵（中篇）一

「翼竜……。」

その竜は高く咆哮した。ゼロの額に汗が流れた。こんな、どうやって倒せばいいんだよ……。ゼロはそう思う。根本的に打つ手がないのだ。そうなるのも仕方がない。

「くそっ！ どうすればいい、どうすれば！」

その時、竜の尾が振られた。ゼロは、プロテクションを即座に張ったが、竜の尾はそれをいとも簡単に突き抜ける。

――閃――

「ぐあああああ！！」

そして、吹き飛ばされた。ゼロは右腕をかばいながら、竜を睨む。クソ！いくらなんでも威力が違いすぎる！時間稼ぎができるかどうかの問題だぞ！そう思い、剣を捨てるかと思いきや、剣を持ち竜と対峙。少しの間……。

「翼竜さんよ。俺が倒れると思ったら大間違いだ。この腕がちぎれても、俺はお前さんを倒すつもりだぜ。」

ゼロはそう言う。竜はまた咆哮した。それが、上等だ。と言うように……。そして、これが新たな戦いの始まりだった。

＊

「はあああ!」

―閃!―

もう、彼らが戦い続けて、3時間は経過していただろう。槍で色々ランスやってみたが、どの攻撃も通用しない。かろうじて攻撃は回避していたが、ゼロはひそかにもう、だめかもしれないと思っていた。かくなる上は、そう思い、ゼロはフェイトに念話をつないだ。

(フェイト、聞こえるか?)

(うん。どうしたの?)

フェイトは応える。

(今からする話をよく聞いてくれ。)

フェイトは一瞬戸惑った。けれど出した答えは

(わかった。)

だった。

(今、戦闘中だ。それはわかるな?)

(うん。)

(実はな、異形が集合体となって翼竜になったんだ。)

(じゃあ、私も…。)

(フェイト、気持ちは嬉しい。けどな、それじゃあお前が逃げられない。)

その時、竜から、光線が発射され、ゼロはそれを受け流しながら続ける。

（じゃ、じゃあ、つまり……！！）

（察しが良くて助かる。そう、俺が時間稼ぎをしてる間に逃げろ。）
（だめだよ！そんなの……。）

フェイトはそれに反論する。だが、ゼロは少しだけ溜め息を吐き、

（決断しろ、フェイト。今ここで戦って、二人とも死ぬか。それとも、時間を稼いでどちらかでも助かるか。みんなならどっちを選ぶ？）

そう言う。

（そ、それは……。）

（だろ。だから、俺が時間稼ぎをしてる間に逃げろ。）

（……。）

フェイトはもしかしたらもう、会えないかもしれない。そう思っていた。こうしてる間にもゼロは……。その予感がし、こう告ぐ。

（……わかった。必ず、戻って来てね。）

（了解。）

そして、二人は念話を切った。

「……オーバードライブ、全稼働（フルバースト）。」

ゼロはそうブレイブフォースに告ぐ。

へマスター。ホントにいいんですね。✓

ブレイブフォースは聞く。それにゼロは

「ああ。」

二つ返事で答えた。

へわかりました。リミッター全解除。不死鳥system、100
%解放、獣人化。ビーストアウト E W s y s t e m、最大稼働。✓

「よし、行くぞ。」

へ了解です。✓

そして、再び翼竜を見据えた。絶対に帰るということを心に決意して・・・。

「うおおおお!!」

そして、命をかけた戦いが始まった。



フェイトside

ゼロとの念話が終了した後

「私は、私のできることをしなくちゃね。」

『Yes, my master.』

フェイトの言葉にバルディッシュは応える。

「行こう。」

〈Yes, sir.〉

フェイトは立ちあがった。

「まずは、はやて達に連絡しなきゃね。」

そして、はやてに念話をつないだ。

（はやて、聞こえる？）

（フェイトちゃん？どうしたんや？帰投許可？ちょっと待って…。）
（はやてちゃん。これからする話をよく聞いて。）

フェイトははやての声を遮り、言う。

（なんか訳ありっぽいな。聞こうか。）

はやては少し黙りこみ、言う。そして、フェイトは、すべて話した。こちらに来てから隕石のようなものが落ちてきたこと。そして、その後ゼロがどうなったか。話せること全て話した。

（なるほど。それは大変やな。そしたら、今いける人そっちに送るわ。それで、ゼロ君は？）

はやては聞く。フェイトはその時、少しだけ、顔を強張らせて言う。

（いない。今は私を逃がすためって。）

（時間稼ぎか。）

はやてはそう言う。

（うん。）

フェイトはそれに肯定する。この時、フェイトは唇を噛んだ。自分の無力さに。出来ることがないことに……。

（フェイトちゃんは……。いや、こっちに戻ってきて。話を聞く限り、どっか負傷してそうやもんな。）

フェイトは、言い返そうと思った。怪我などしていない、と。けれども、その言葉は、見事に的を得ていて、逆に無力感を感じさせる言葉だった。

（……。わかった。）

そして、念話を切る。

「ホントに……。私って……。」

〈master…〉

落ち込むフェイトにバルディッシュは声をかける。

「わかってる。帰ろう。バルディッシュ。」

〈Yes, sir.〉

その後、フェイトはミッド式の魔法陣を足下に展開。帰投した。



はやてside

フェイトの話を聞き終わった後、はやては今出撃できる人を探していた。けれども、実力のある人でなければいけない。だがしかし・・・。

「どうすればいいんや！」

そんな人は、いるわけがない。そう悩んでいると・・・。

「はやてさん。」

スターゲイザーがこちらを見ていた。

「入ってええよ。」

「失礼します。」

はやてがそう言うと、スターゲイザーは敬礼をし、入る。

「・・・どうすればいいんや・・・。」

「何を悩んでるんですか？ お力になりますよ。」

はやての様子を見て、スターゲイザーは言う。

「スターゲイザーには関係あらへんことやよ。」

はやてはそう言い、笑う。が、

「そんなことはありません。」

スターゲイザーがそう言うとき、

「関係あらへん事やって言うとりやろ！」

はやては逆上する。

―打―

スターゲイザーがしつぺを張ってきた。

「スター・・・ゲイザー・・・？」

はやてはそれに驚き、スターゲイザーを見る。

「何が、関係ないこと・・・ですか。私は、そんなに、そんなに頼りないですか？」

「。。。。。」

はやてはその言葉に俯く。スターゲイザーはそんなはやての胸ぐらを掴み言う。

「私だって！私だって！！この六課の一員なんですよ！確かにはやてさん見たく訓練学校とか隊長とかはやったことはありませんよ！！ですが、だからって・・・だからって、頼ってくれたっていいじゃないですか！！」

はやてはその言葉に正気になり。

「すまんかった・・・私のストレスをスターゲイザーにぶつけてしまったな。」

スターゲイザーに謝る。それを見たスターゲイザーは手を離す。

「いいえ。いいんですよ。わかればそれでいいですよ。それで、どんなことなんですか？」

「実は・・・。」

その後、はやてはスターゲイザーにフェイトの報告内容すべてを話した。

「そんなことが・・・。」

「ああ。それだけじゃない。今、そっちに行ける人員がないんや。」

「

はやてはさらに今の現状を言う。

「なら、私たちで行きましょう。」

スターゲイザーは言う。

「それやったら、隊長はどうするんや？いなくなるやろ。」

はやてはそう言う。スターゲイザーは、そこまで考えていなかった。そうして、二人で悩んでいると・・・。

「そんな大事、二人で悩んじゃダメでしょ？」

一人の人影が入ってくる。

「「なのはちゃん／さん。」」

二人はその主の名を呼ぶ。

「そしたら、なのはちゃんには何か考えはあるのか？」

はやては聞く。

「グリフィス君に任せておこうよ。」

なのははそう言う。

「でも、グリフィス君に悪いし……。」

はやてはさらに言う。

「そんな心配してなさるんですか？」

その時、また人影が入る。

「「噂をすればなんとやらだね。／ですね。」」

スターゲイザーとなのはは二人で呟く。

「……グリフィス君。」

「僕にだって隊長の代わりぐらいできますよ。」

「でも……。」

はやては弱気な一面を見せる。

「隊長。」

― 掴 ―

グリフィスははやての肩をつかみ。

「今、助けられるのはあなたたちだけです！行ってください！」

そう言う。はやては少し唇を噛み……。

「恩にきる！スターゲイザー、なのはちゃん！」

はやては立ち上がり、二人に声をかける。

「「うん！／はい！」」

そして、はやてを含める3人は転送装置に向かった…。

はたして、はやて達は間に合うのか？そして、ゼロの運命はいかに・
・次回 魔法少女リリカルなのはStS ZEROSTORY―
絆(KIZUNA)― 第10話一敵(後篇)―

第10話一敵（後篇）一

「はぁ、はぁ。」

その時、ゼロは翼竜と交戦中だった。

「敵、視認。これより攻撃に入る。」

その声がした途端、集束砲が翼竜の背中を貫通した。ゼロは恐る恐る、射撃線の方角を向くと、一人の男がいた。

「全開、抹殺！！」

さらにその男の足元に魔法陣が展開。そして男の両手に魔力コントロール用のスフィアが二つあった。

「翼竜に聖なるさばきを！！」

そして、その男の前に魔法陣が展開し、魔力が集束し始めた。

「正義の……砲撃！！」
ジャスティス
ブラストレイ

そう叫ぶと同時に集束砲が放たれ、翼竜を一掃した。ゼロは、危うく意識が飛びそうになったが何とか堪えた。

「……ふう。」

男は息を吐く。

「……。」

ゼロはただそれを茫然と眺めるだけ。

「……さて、本題はあなたです。ゼロ・S・アームストロング。」

その時ゼロは驚いた。なぜ俺の名前を知っているのかを。しかし、声には出さず、おそろおそろその男に聞いた。

「……貴方は誰ですか？」

「……答える義務はない。」

その瞬間。ゼロは少しだけカチンツときた。こいつなめてるな。そう思った。その刹那。

男は高速移動を開始。

その速さは、ゼロがとらえられないほどの速さだった。いや、体力や気力が減っていなければの捉えられる速さだったが、その男は後ろに回り込んだ。

「なっ！」

そして、ゼロは振り向こうとしたその瞬間。

「遅い。」

――撃――

男は鳩尾に拳を入れた。そして、ゼロは、意識を闇に落とした。

『アルスー。少しやりすぎじゃないの？』

通信から聞こえる声は、女。それに、

「まあな。でも、奴に立ち向かうのではこいつの力では足りないぞ。リイナ。」

アルスと呼ばれた男は応える。

『まあ、確かにね。でも、こいつを選んだってことは、何か策でもあるの？』

「一応な。素質があるからなけどまだ未完成そこで、こいつの記憶を飛ばす。」

『それは……。管理局から狙われるよ。アルス。』

リイナと呼ばれた女は頭を抱える。

「心配はない。始めるぞ。」

アルスは魔法陣を展開。そして、呪文詠唱を開始した。

「我が、能力^{チカラ}。記憶をなくすものなり。ゼロ・S・アームストロングに新たな力を……。」「
「記憶^{メモリ}の 仮面^{マスク}、装備^{イクイップ}。」

そして、ゼロに顔の左片方だけに仮面が装備された。

『あーあー。知らないよー。私は。』

リイナはそう言うのと、耳をふさぐ動作をする。

「ゼロ。すまない。だが、記憶の欠片・・・それは、その仮面がすべてなくなったときに明かされる。しばしの辛抱だ。俺達には君が必要だ。協力してくれ。」

アルスはそう言う。

『・・・ホントにこれでよかったの？』

リイナは聞く。

「ああ。あと、君の仮面を壊すには、その中にいるジョーカーを倒さなければいけない。そこの所だけ気を付けてな。」

アルスはさらに言う。

『・・・アルス。飛行物体3つ接近中だよ。』

「それでは、行くか。」

アルスは魔法陣を展開。どこかへ転移した。



はやてside

ゼロ君、ゼロ君。大事な女を泣かせてから逝く気か？あんたは。反応がないのがわかっていても、そう念話で問いかけつつ、ゼロがいる場所。クレーターがある場所へ向かった。

「・・・まさか。翼竜にやられたりしてへんやろうか・・・？」

その言葉をはやてが口にした瞬間、空気が重くなった。と、その時。

―閃―

閃光が辺りに走る。

「転移術か？ いやな予感がするな。なのはちゃん、スターゲイザー。速度上げるよ！！」

はやてがそう聞く。

「「うん！／＼了解しました！！」」

そして・・・クレーターへ到着。

「・・・これは・・・。」

そこには、『翼竜の血』の様なものと、ゼロが倒れていた・・・。

「「ゼロ君！／＼ゼロさん！！」」

なのはとスターゲイザーはゼロのもとへ駆け寄った。

「くそっ！」

とはやては悪態をつき、グリフィスに通信を繋いだ。

「グリフィス君、聞こえるか？」
『はい。』

グリフィスは応える。

「救護班を今すぐにこっちによこして欲しいんや。訳は後で話す。はようしてな。」

『・・・了解しました。』

通信を切り、その後・・・。

「なのはちゃん！スターゲイザー！そのまま声をかけててな。」

はやては言う。

「「うん！／＼はい！」」

そして、二人は声をかけ始めた。

「ゼロ君・・・。ホントにすまんかった。ホントに・・・。」

そう、呟くはやて。その後、救護班が到着し、ゼロは六課に運ばれた・・・。



Z

「超々鬱展開ですが、このコーナー参りましょう!!」

神

「後書き召喚コーナー。」

わ〜♪

Z

「はあ。」

神

「どうしたんです?」

Z

「いやさあ、今回鬱展開でしょう?」

神

「ああ。」

Z

「この後、どうやって仮面を外すかってこと考えてなかったんだよね。」

神

「まさかのネタ切れか。」

Z

「いや、そういうわけではない。うーん。このコーナー、召喚してたりしてなかったりだよな。」

神

「そうだな。」

Z

「よし。名前変えよう!」

神

「何にするんだ?」

Z

「決めてない。今度LV行くから、祐希奈様に聞いてみるか。」

神

「そうだな。俺も行こう。」

Z

「だな。」

神

「終わるか。」

Z

「そうだな。えー。少し長くなっちゃいましたが、終わりにさせていただきます。」

神

「それではまた次回に会いましょう。」

Z

「では〜♪」

第11話 一仮面一

Z

「前書きコーナー。」

わ〜♪

Z

「はあ。」

神

「どうした？」

Z

「作者がな。」

神

「ああ。」

Z

「この際、このコーナーやめよっかなって。」

神

「なんでだ？」

Z

「質問来ない、感想来ないじゃやっていけないっしょ！ってことだな。」

神

「・・・なるほどな。で誰で止まってる？」

Z

「烈風さん。なあ、刹那。セブンスード構えてどこへ行くつもりだ。」

神

「烈風さんの所♪」

Z

「いや、危ないからな。」

神

「安心しろ。半殺しでとどめる……。」

Z

「それが危ないって……もう無理か。烈風さん。すまない、逃げるか全力で謝ってくれ。それと、どこかに感想で『EW駄作だよ。』的コメントは控えてくれ。」

神

「行くぞ。トランザム！」

Z

「待てえ！刹那！！スターゲイザー、後は頼んだ！シャイニングウイング！」

スタ

「あ、待って……。行っちゃいましたか。はあ。魔法少女リリカルなのは 戦場の絆—endless waltz—始まります……。刹那さんには、後でお説教ですね。フフフ……。」



「う……。ん。ここ……。は？」

そこは、白い天井が有り、広々とした部屋。そこにシャマルがいた。

「気がついたようですね。ゼロさん。」

シャマルはゼロの方を見て言う。

「はい……。」

ゼロ……。それが僕の名前……。ゼロはそう思い、拳を握る。
ゼロの調子が変わるのをシャルが察知して

「大丈夫ですか？」

と聞いた。そしてゼロは

「ええ。大丈夫です。」

と答えた。と、そこに

「大丈夫？ゼロ。」

フェイトが入ってきた。

「ええ。……っ!!」

その時、ゼロを頭痛が襲う。

「ぜ、ゼロ君!？」

その時、なんなんですか……。ゼロはそう思う。そして、意識を手放した……。



ゼロが目覚めたとき……。そこは周り一面が真っ暗だった。

「闇……。？」

実際そう呼ぶのがふさわしかった。

「やっと起きたか。」

後ろの方向から声がした。振り向くと……。ゼロがもう一人いた。夢じゃないか？　そう思い、ゼロは自分の頬をつねって見たが、痛かったただだった。

「何してるんだ？　お前。」

もう一人のゼロが言う。

「夢じゃないか確かめてるんです。僕がもう一人いますので。」

ゼロはそう返す。

「僕？　…ああ。そうか。今、仮面付けてるから、記憶を盗られてるんだっけ。んじゃ、改めて説明する。要するに、お前に対して俺は『影』だ。」

ゼロはその言葉を聞いて、少しだけ考え込む。

「あー。理解できてる？」

そう聞いてきたので、

「ええ。大丈夫です。」

そうゼロは答えた。

「つまり、貴方と僕は一心同体なんですね？」

ゼロは要約し、言う。

「そう言うことになる。」

そうになると、一つだけ疑問がある。それを晴らすためにゼロは

「なら、なぜ、僕は貴方が見えるんです？」

そう、質問した。それに対して…。

「簡単に言うと、完全な形じゃないからだ。」

それにもう一人のゼロは答える。

「つまり、貴方と僕は今は別人なんですね？」

ゼロはさらに聞く。

「さあな。」

もう一人のゼロはそう言う。

「なぜ、教えてくれないのです？」

ゼロはそう聞く。それに対し、返ってきた答えは、

「お前には不要だからだよ。」

その言葉だった。その言葉に怒りを覚えたゼロはランスを召喚。そして、もう一人のゼロに向けて構えた。

「貴方を倒して、無理やりにでも聞かせて見せます。」

そして、もう一人のゼロは肩から力を抜き、

「無理だって。今のお前じゃ俺は倒せない。」

そう言った。

「やってみなくちゃ分かんないでしょう？」

「さて、どうだな。」

もう一人のゼロはそう言う。その刹那。ゼロは斬り込んだ。

「はあああ!!」

――閃――

攻撃が通ったと思った。…がそうではなかった。もう一人のゼロは？右手？の小指一本で止めていた。

「なっ！」

ゼロは一瞬怯んだ。この攻撃は、僕の最大の一撃…。そう思ったからだ。

「なんだ。その程度か。」

そう言い欠伸をする。そして左手でデコピンの形を作り…。

「もう少し、出来るはずだろ？ゼロ…。」

そして、放った。その力はすさまじく…。

—撃—

「ぐはっ!!」

ゼロを地面にたたきつけた。もう一人のゼロが降り立って、止めを刺すかと思われた。

「うん。まあ、このくらいの向上心があれば十分だろう。」

そう言った。

「なぜ止めをささないんですか？」

「ん？そりゃあ、お前を殺したら俺も死ぬからだ。これ以上は聞くな。記憶の断片を少しだけ与える。」

そして、ゼロの額にもう一人のゼロは手を乗せ、術式を展開、記憶を注ぎ込んだ。

「…これは？」

「これはな。俺の親友、愛人、相棒。色々な人たちの記憶♪」

もう一人のゼロはふざけた様に答える。

「だから、こんなに…。」

そして、全ての記憶を注ぎ終わった時。

「ああ。そうだ。これから現実に帰る訳だけど、フェイトだけは守り抜けよ。」

「どうしてです？」

疑問に思い、ゼロは聞く。

「俺の愛人だからだ。」

そう言われ、ゼロは一息置き、

「わかりました。絶対に守り抜きます！」

そう言った。

「じゃあな。期待、裏切るなよ。」

「大丈夫です。」

そして、ゼロは現実に帰った。



「う、う…ん。」

「ゼロ!？」

フェイトは呼びかけた。無事に帰ってこれたようですね。そう、ゼロは思った。

「だ、大丈夫？」

「ええ。大丈夫ですよ。フェイトさん。」

フェイト…さん？ゼロがそう言った時、場の空気が凍りついた。

「ねえ。ホントにゼロ…なの？」

そう、フェイトは聞いた。そう、違うかもしれない。そう思って恐ろしかったが…。帰ってきた来た答は…

「はい。」

その瞬間。フェイトから怒りが立ちあがった。

「ふざけるな…。君はゼロじゃない。返してよ…私たちのゼロを…。」

そう言って、バルデッシュを起動し、首元に近付けた。そう、いつかのときのように…。

「…。」

ゼロは答えなかった。そして、フェイトに近づき…

「どういふつもりですか？」

そう聞く。

「貴方を…今、私は殺したいほど怒ってる。」

フェイトは答える。

「なぜです？」

ゼロは聞く。それに帰ってきた答えは…。

「貴方が私の知っているゼロじゃないから。」

そう答えた瞬間。ゼロは左手を振りかぶり…。

―打―

フェイトに向かってビンタをした。ゼロの目には涙が浮かんでいた。

「貴方は…そんなに人を怨む人でしたか？見損ないましたよ。フェイト・T・ハラウンさん。貴方は、僕の記憶の中では、僕が記憶をなくしても、よい目で見てくれると思っていましたけどね…。」

その時、不運なことに、その場になのは、はやてが入ってきた。

「何してるんや？ゼロ君？」

その時、ビンタをした後の姿勢になっていた。ゼロははやて達にこう告げた。

「はやてさん、なのはさん。話してあげてください。僕がなぜこうなったか。そして、この仮面は何の術式か。」

そう言うときゼロはブレイブフォースと共に医務室を出て行った。

「確かに、そうだね。はやてちゃん。フェイトちゃんには話してないんだよね。」

なのはがそう言った。そして、フェイトは…。

「どうということ？」

そう聞いた。そして、はやては言った。

「確かにそうやな。隊長室で話そう。」

そう言って、隊長室へはやて達は向かった。



一方、そのころゼロたちは、訓練場に向かっていた。

へいいんですか？謝らなくて。✓

ブレイブフォースがそう聞いた。

「ええ。少しは後悔、してるんですよね。でも、これじゃあ、フェイトさん…いや、皆さんにも認めてもらえないかもしれない。それだけはいやなんです。」

…だから、あの手を使います。」

ゼロは言う。あの…手？ブレイブフォースはその言葉に嫌な予感がして、ゼロに聞いた。

〈マスター？あの手というのは…？〉

「え？模擬戦ですよ。模擬戦。」

〈はあ。〉

そんな事だろうと思いましたよ。そう言うようにため息をついた。

「どうしたんです？」

〈いえ。なんでもありません。〉

ブレイブフォースはそう言う。

「？…まあ、いいでしょう。とりあえず訓練場に行きましょう。」

〈はい。〉

そして、ゼロ達は訓練場に向かった。

同時刻、はやて達は…。

▼▼▼▼▼機動六課 隊長室▼▼▼▼▼

「まず何から話そかなあ。…フェイトちゃんは、ゼロ君が翼竜と戦ったことを私に報告してくれたよな？」

はやての言葉に対してフェイトは頷く。

「その後、私たちはグリフィス君に六課を任せて、なのはちゃんとスターゲイザーとでゼロ君のもとへ向かったんや。」

「その後はどうなったの？」

はやての言葉に対し、フェイトはそう聞いた。

「現場へは着いた。けれども、翼竜は倒れてた。ゼロ君もや。それで、私は救護班を呼んだ。その時、ゼロ君は…。」

後は、わかるやろ。そう言う様にはやては目で訴えた。

「つまり、あの仮面は…。」

「そうや。翼竜を倒れてた時には、もう付いてた。けれど、ゼロ君の記憶はあの仮面に封じ込められてるらしいんや。」

はやてはそう言う。

「封じ込められてる…?」

どういうこと? そう言うようにフェイトは首をかしげた。そこなのはが…。

「フェイトちゃん。つまり、彼…ゼロ君の記憶があのかの仮面に入ってるんだよ。私たちが最初見たときは、ホントに赤かった。今は、少しだけ白が入ってる。」

そう、説明する。

「つまり、ゼロ君は記憶を失ってるのではなくて…。」

「ありがとう。なのは。はやて。」

フェイトははやての言葉を遮り、言う。

「「フェイトちゃん？」」

二人はそう聞く。

「もう、大丈夫。ゼロの記憶は私たちで取り戻せるだよね。」

そういうことだよ。そういう様に二人は微笑んだ。

「私、謝りに行ってくる！」

フェイトはそう言い、走り出す。

「待って、フェイトちゃん！」

なのははそう言う。フェイトは足を止め、振り返った。

「「どこにいるのかわかってるの？」」

はやてとなのはは聞く。

「大丈夫。ゼロは訓練場にいる。そんな気がする。」

そう言って、走り出した。訓練場へ向かって…。

▼▼▼▼▼機動六課 訓練場▼▼▼▼▼

「来ましたか。」

へそうですね。✓

そうゼロとブレイブフォースが言った時、フェイトが来た。

「ゼロ。あのね…。」

フェイトのその言葉を遮るようにゼロは言う。

「フェイトさん…模擬戦をやりましょう。」

え…？そう、フェイトは思った。そしてフェイトは聞いた。

「何言ってるの？ゼロ…？」

「認めてないんでしょう？ならば戦いましょう。刃を交えてほしいんです。」

ゼロはそう言う。

「ゼロ！私はただ謝りたいだけで…。」

フェイトは言う。

「すみません。でも、僕がそうしたいんです。駄目ですか？フェイトさん。」

フェイトの言葉をまた遮り、言う。

「…だったらやろう。もし私が勝ったら、その仮面を割る…。」

フェイトは少し悩んだが、そう答えた。

「いいですよ。なら、僕が勝ったら、僕を認めてください。」

ゼロもそう言う。

「いいよ。」

こうして、フェイトとゼロとの模擬戦が始まった。どちらが勝つか？そして、ゼロは…？次回魔法少女リリカルなのはStS ZERO STORY一絆(KIZUNA) — — 認める闘い —



ZERO

「後書き雑談コーナー♪」

わ〜♪

ZERO

「少し、変な状況で終わっちゃいましたねKIZUNA。」

刹那

「ZERO。そろそろ、本性教えたらどうだ？」

ZERO

「そうだな。とう！！」

シュバツ！！

アルス

「元に戻ったぞ。」

刹那

「お前、どんな事したら、そんなに華麗に変身できるのか逆に知りたいな。」

アルス

「よくやらされてたからな。」

刹那

「誰にだ？」

アルス

「秘密だ。」

刹那

「確かに。俺はゼロ（LVの混そう言った時）の様になりたくないからな。」

アルス

「ちなみに、今日ゼロがいないのは、作者のパワー切れだそうだな。」
刹那

「キャラ召喚ってそんなおまけつきだったんだな。」

アルス

「そんなところだ。そろそろ時間だな。それではまた次回まで…」

刹那・アルス

「R I D E O N!!」

第12話ー認める闘いー

アルス

「前書きコーナー♪」

わ〜♪

ゼロ

「なあ。刹那はどうしたんだ？」

アルス

「スターゲイザーを怒らせて説教食らってる。ゼロ。こうゆうのを知ってるか？ある人は言いました。大人しい人ほど怒らせると怖い。」

ゼロ

「なるほどな。それで、刹那が…。」

スターゲイザー

「う〜ん。すっきりした。」

アルス

「スターゲイザーか。前はすまなかったな。」

スターゲイザー

「ホントですよ。前は追いかけようと思ったけどキャラがいなくなるので…って、ん？どうしました？

アルスさん、ゼロさん。」

アルス・ゼロ

「右、右。」

スターゲイザー

「右って…あ!!！」

ジェナス・ヒュース

「…はあ。俺達って影薄いなあ。」

スターゲイザー

「いや、あの、その、えっと、これは、ちよつと、つまり…。」

アルス・ゼロ

「墓穴掘ったな。それより始めるよ。」

ジェナス・ヒューズ・刹那

「はぁ。」

スターゲイザー

「ちよつ、刹那さんまで！！元気出してくださいよ！！」

アルス

「駄目だな。」

ゼロ

「奇遇だな。俺もそう思ってたところだ。」

アルス

「始めよう。」

ゼロ

「そうだな。魔法少女リリカルなのはStS ZEROSTORY

一絆(KIZUNA)――

アルス・ゼロ

「始まります。」

スターゲイザー・ジェナス・ヒューズ・刹那

「はぁ。」

ゼロ

「つて、スターゲイザーもかい！！」



「では、行きます。」

「うん。」

「ブレイブ・フォース!!」

「バルデッシュ!!」

「standby ready. / 準備完了。マスター、いつでもどうぞ。<<」

「セーット、アップ!!」

「yes, sir. / 了解。<<」

二人はバリアジャケットを纏った。フェイトはハーケンフォームで起動。ゼロはファーストモードの騎士甲冑だった。

「GO!!」

二人は駆け出し、模擬戦は始まった。

「はああああ!!」

まずフェイトが斬りかかった。

「…。」

ゼロはそれを左足を軸にして回転することで回避。

「隙あり!!」

そして、剣で斬りかかった。

「バルデッシュ!!」

＜sonic move.＞

フェイトは高速移動をして、ゼロの剣撃を回避。

「なかなかやりますね。」

「そっちこそ。」

その後、ゼロが『フッ』と笑った。

「何がおかしいの?」

フェイトは不思議に思い、言う。

「なんででしょうね。よし、本気で行かせてもらいます。高機動には高機動です。ブレイブ・フォースさん!!」

へ了解した。セカンドモード。＜

ブレイブ・フォースがそう唱えると、騎士甲冑が消え、インナーになった。

「どう言うつもり？バルデッシュは殺傷設定なんだよ？」

フェイトは言う。

「大丈夫です。全部よけますから♪」

その瞬間、ゼロは小太刀を呼び出し、一直線に駆けてきた。

「迂闊だね。一直線に走ってくるなんて！」

フェイトはそう言って、バルデッシュでゼロを斬ったはずだった。

「なっ！」

そこにゼロはおらず。

「迂闊なのはどっちですか？」

その声のほうへ向く。その瞬間。

—撃—

ゼロのアップーがフェイトの顎を打ち抜いた。

「がふっ！」

「うまく守ってくださいね。」

—撃—

次にムーンサルトを決め、カートリッジを2つリロード。そして、小太刀を上空に投げた。

「デイバイーン・バスター!!!」

左手に黄金色のスフィアを瞬時に作り、放った。デイバイーン・バスターとは名ばかりで実際はなのはのスターライトブレイカーをも凌駕する一撃をフェイトの放った。そして、小太刀を受け取り、走り出した。

「まだまだ!!!」

「っ! バルデッシュ!!!」

それを見たフェイトはバルデッシュに命ずる。

〈sonic move.〉

―撃―

フェイトは危うく、地面を割る一撃を高速移動で回避した。ゼロは少し残念そうにこう言った。

「かわしましたね。あの一撃。あの手のゼロ距離砲撃は僕の得意分野だったのに。」

「あんなの…二発食らったら…アウトだよ。」

フェイトは息も途切れ途切れにそう言う。

「確かにそうですね。けど、非殺傷とはいえ、まだ三分の一ですよ。本気出してください。」

ゼロはさらに言う。

「そうだね。無理やり仮面はがすのに、手加減なんて…何考えているんだろう私は…。バルディッシュ。真・ソニックモード。」

〈yes sir.〉

そして、フェイトが纏うバリアジャケットが薄くなった。そして、バルディッシュはザンバーモードになっていた。

「ふう。やっとですね。ツイエラオレードTTB起動。トライボールセット。」

〈了解。起動完了した。〉

ゼロは双剣を呼び出した。そして、感覚のまま、左腕を上げ魔力刃を展開した。

―閃―

そして、フェイトとゼロとの鏖迫り合いになった。ゼロは左肩の力を少しだけ抜いた。

「!!」

フェイトはバランスを崩し、倒れ込む。

「やっぱり、双剣は全身のバランスを少しだけ変えると、相手もバランスを崩しますね。」

そう言って、右に体を避け、トライボールを装填。

「神速…。」

そうゼロは呟いた。ブレイブ・フォースは

〈装填。特殊アビリティ発動。〉

それに答えるように言った。

「させない！」

体勢を戻し、フェイトが斬りかかってきた。だが…。

「もう、遅いですよ。」

フェイトは後ろを振り向く。その時ゼロはもう構えを取っており。

「そこ…！」

双剣がクロスするようにフェイトの首をめがけて突いた。

―閃― ―倒―

そして、二人は倒れた。

「僕の…勝ちですね。」

ゼロは言う。

「そう…だね。」

フェイトは応える。そして、ゼロは双剣を抜いた。フェイトは少し驚いた。ここで、止めを刺さなかったからだ。

「止めは…刺さないの？」

フェイトは聞く。

「刺す訳ありませんよ。そうする必要がどこにあるんです？」

ゼロは聞く。

「でも…。」

反論しようとしたところに、ゼロがいきなりフェイトを抱いた。

「え…？」

フェイトは驚きを隠しきれなかった。けれど、ゼロは続けた。

「ごめんなさい…フェイトさん。」

ゼロはそう言うと、フェイトから離れた。

「ゼロ…？」

フェイトは何か言おうとした。けれどゼロがこう言った。

「じゃあ、僕、部屋に戻りますので…。」

そう言って、立ち上がって戻ろうとしたその刹那。

「っ!!」

またもゼロを頭痛が襲う。そして、双剣を地面に落とし蹲る。

「ゼロ!？」

それを見たフェイトは駆け寄る。

「頭が…!!」

ゼロはそう言うと、あまりの痛さに地面に倒れる。

「ゼロ!ゼロ!!」

ゼロは急速に意識が遠くなるのを確信した。



またここに来たか…。そう思うゼロ。そこで呼び掛ける。

「出てきてくださいよ。いるのでしょうか？」

「よう。」

ゼロは振り向いた。声の主へと。

「一日に二回も呼び出して、何がしたいんですか？」

ゼロは聞く。

「記憶与えんの♪」

その声の主、もう一人のゼロは答える。

「だろうとは思いましたよ。」

はあ。とゼロはため息をつく。

「でも、いいんですか？こんなに早く記憶を与えても…。」

ゼロは聞く。

「ん？ああ。これでいいんだ。」

もう一人のゼロは言う。

「ホントにいいんでしょうね？」

ゼロがジト目で聞いてきた。

「ああ。大丈夫だ。」

もう一人のゼロ、影ゼロ（今、命名）は落ち着いて答える。

「なら、お願いします。」

ゼロはそう言う。

「ああ。」

影ゼロはゼロに近づき、額に手を当て、魔法陣を展開。そして、記憶を注ぎ込んだ。その時、ゼロの仮面は2／5を白が包んでいた。

「これは…?」

ゼロは聞く。

「軽く説明する。これはジェイル・スカリエッティが編成した、『ナンバーズ』ってところに入るまでと入ってからとあるシステムの暴走させられるまでだ。」

影ゼロは答える。

「その、とあるシステムって…。」

ゼロは聞く。

「おっと、これ以上は今回は教えられない。」

影ゼロは答える。

「そうですか。それじゃあ戻りますね。」

「おう。戻った、戻った。」

そして、ゼロは目を覚ました…。



「う…ん。」

「起きたか。マスター。〓

起きて、すぐブレイブフォースは言う。

「ブレイブ・フォースさん？ひとつ聞いてもいいですか？」

ゼロは言う。

へいぞ。✓

ブレイブフォースは答える。

「僕は…ですね。ホントにナンバーズだったのですか？」

『マスター。確かにそうだ。けど…』

後の言葉をゼロは遮った。

「わかってます。その時の記憶も戻ったし、真実なんでしょう。」

『マスター…。』

少し変わったか…？そう、ブレイブ・フォースは思った。

「それで…。フェイトさんはどこですか？」

『マスター右肩が重くないか?』

「そう言えば、確かに重い……!!」

『やっと気づいたか。』

その時、フェイトは木に寄り掛かって、待っていたのだろう。ゼロの肩を枕にして寝ている。

「ブレイブ・フォースさん。」

『どうした? マスター。』

「絵、描いちゃだめですかね?」

『何をだ?』

「今のフェイトさん。」

『さすがにそれは…。』

「描きますか。」

もう、時すでに遅し、すでに絵を描く体勢になっていた。

『はあ。ホントに聞かないところはそっくりなんですから…。』

そう呟かずにはいらなかった。



「う…ん。」

「あ、起きました？」

フェイトはびっくりした。ゼロが起きていて、握られている画材…。
ん？画材？そう、疑問を抱いた。まさか！！そう思い…。

「ちょっと見せて!!」

そう言って、ゼロから絵を奪った。その瞬間フェイトは驚いた。なんせ、自分の寝顔が描いてあるのだから…。

「…。」

それを見た瞬間。フェイトの顔が真っ赤になった。そりやもう、トマトに負けないくらいに…。

「すいませんでした。勝手に描いてしまつて。」

「…や…よ。」

「ホントにすいません。」

謝り倒した。フェイトは、かなり恥ずかしかったらしく、声がものすごく細かった。それから、少しの間ができ…。

「あの、絵を返してくれないでしょうか？」

「ひゃ!! 何!？」

フェイトはかなりびっくりしたようで声が裏返っていた。

「だから、絵を…。」

「あ！そうだよね！ごめん。」

ものすごくテンパってますね。そう、ゼロは思った。

「よかったらそれ、あげますよ。」

「いや、飾るところないし…。」

「なら、手の力抜いてください。」

フェイトは力を抜こうとした。けど抜けなかった。

「なんで抜けないの！？」

「落ち着いて、落ち着いて。」

ゼロは、うーん。と考え、何かひらめいた。

「なら、その絵を少しだけ預かってくださいよ。」

「え？ そんな。」

「僕はいいですよ。今度お邪魔した時に描かせてもらいます。」

「な、何を？」

「貴方をです♪」

「ええ！？」

「ふう。とりあえず、帰りましょう。」

「そうだね。」

そうして、二人は部屋に戻り、眠りに就いた…。

NEXT STAGE', , ,



ZERO

「後書き雑談コーナー♪」

わ〜♪

ZERO

「う〜ん。」

刹那

「どうしたんだ？」

ZERO

「いや、このコーナーの名前変えるか？って話してたんだけど…。」

刹那

「道場にしたら？」

ZERO

「それはEXで使ってる。」

刹那

「…ティータイム。」

ZERO

「Brave saverのほうで使ってるってかさ、これはなし。お茶するような場所じゃないだろ。今の場所具体的にゆうとドラゴン〇ールで言う精神世界だからね。」

刹那

「召喚…。」

ZERO

「無理。ネタ切れになるし、そもそも祐希奈様に悪いだろう？」

刹那

「雑談は？」

ZERO

「そう思ったんだけどフィルさんに殺される。」

刹那

「じゃあ、もうないな。」

ZERO

「駄目か。」

刹那

「時間だし、終わるぞ。それでは次回まで…。」

ZERO・刹那

「RIDE ON!!」

第13話―とある隊長陣の休日―

ZERO

「前書きコーナー♪」

わ〜♪

ZERO

「何と、今日は素敵なゲストが二名…いや、三名来ています!!」

おー。

ZERO

「それでは呼びましょう!! 赤コーナー!! 草薙 かけーる!!」

―撃―

ZERO

「痛いー!!」

ゼロ

「そのネタもうやめろよ。」

ZERO

「わかったよ。えーと草薙 翔さん、アリシア・テストロッサさん、リインフォースさん、リニスさんです♪」

Brave Savers一同

「こんにちは♪」

KIZUNA一同

「いらっしやい♪」

ゼロ

「ちょっと待て。四人じゃないか。なんで三人って言った。」

ZERO

「え？1・2・3・4…あ！ホントだね。」

翔

「大丈夫か？ここ。」

ZERO

「大丈夫だって。この前だって言っただろ？ここはおっちょこちょいだから。」

リニス

「かつ、うちの作者は抜けてますけどね♪」

「さりげなく、黒いこと言うな。」

ZERO

「そろそろもとに戻りますか。」

Brave servers一同

「?？」

ZERO

「とう!!」

―煙―

アルス

「もとに戻ったぞ。」

Brave servers一同

「!!」

ゼロ

「心配するな。この手の変身はここでは普通だから。あ、そうだ。

ブレイブ・フォ…」

スターゲイザー

「駄目ですよ。それは後書きにしないと。ゼロさん♪」

ゼロ

「何気に力入ってるって!! 首締まる死ぬ! 死ぬ!!」
?

「いっそのこと死ぬ、死ぬ♪」

一同

「なぜに!?! てか誰!?!」

アルス

「…リイナか。びっくりさせるな。」

リイナ

「あらら? ばれた?」

アルス

「当たり前だ。」

リイナ

「もう。アルスのいけず。」

アルス

「うるさい。静かにしてなさい。」

リイナ

「はい。」

―座―

アルス

「さて、話に…。」

アルス以外

「戻れるかあ!! / ものですか!!」

アルス

「なぜだ?」

ゼロ

「当たり前だろ!!」

翔

「ひとしきりコントやっというて!!」

アリシア

「戻る方がおかしいでしょ!!」

アルス

「はぁ。」

リニス

「なにが!!」

リインフォース

「『はぁ。』なんですか!!」

アルス

「わかった。口を開こう。あいつは俺の…。」

スターゲイザー・刹那

「アルス／さん／の?」

アルス

「相棒だ。」

アルス以外

「はぁ!？」

アルス

「なぜ驚く？」

ゼロ

「駄目だ。みんな。付き合うな。こっちが疲れる。」

ゼロ・アルス以外

「そうだね。」

アルス

「?？」

ゼロ

「そろそろ始めよう。今回はまた、休日だ。魔法少女リリカルなのは ZERO STORY 一絆 (KIZUNA) 一。」

一同

「始まります。」



「ふう。」

最初の記憶二つを取り戻して一か月。あれから、ちっとも記憶が蘇らない。ゼロはそう思っていた。そんなこんなで悩んでたところをはやてに捕まり、そのことを話したところ、『いつそのこと、休んだらええんちゃうか?』と言われ、『いやです。』と言おうしたところ、タイミング悪くグリフィスに有休がたまっているのがばれ、『なら休みでOKやな。』と言われ、今に至る。

「休み、と言っても、僕は街のことをあまり知りませんし…。うーん。」

そうやってゼロが悩んでいると…。

「「あ!ゼロさん!!」」

その声の主はスバルとティアナだった。

「スバルさん、それにティアナさん。どうしたんです?」

ゼロはそう聞いた。

「こっちが聞きたいですよ。」

ティアナがそう言った。

「お恥ずかしいんですけど、休日ってどう過ごせばいいのでしょうか？」

「「……。」」

「やっぱり…だめですよね…。」

「「あはははは!!」」

ティアナとスバルはいきなり笑いだした。

「?? どうしたんですか? 二人とも?」

「どうしたもこうしたも…。」

「これはおかしすぎるでしょ!!」

「「ははははは!!」」

「もういいです。」

ゼロはそっぽを向いて立ちあがった。

「いや、ホントごめんって。」

「いや、いきなりあんなこと言われるの慣れてなかったただけですから!!」

「ん? スバル? あれって…。」

ティアナがそういつて指差した先には…はやてがいた。

「呼びますか。はやてさーん。」

ゼロははやてを呼んだ。

「あ。ゼロ君か。はあ。」

そう、はやては呟いた。

「その様子だと、はやてさんですか？」

一応、はやてにそのことを聞いた。

「そうや。」

「ああ。やっぱりですか。」

「「?」?」

スバル達は『?』であつたが、ゼロ達は『グリフィス君どうやらあんな情報集められるんやろうな?』とか話してた。

「「あの…。」」

「「どうしたんや?／ですか?」」

「「やっぱりなんでもないです。」」

「「そうか。／ですか。」」

「で、フェイトさんとなのはさんは? きっと同じ理由で休みでしよう?」

ゼロはそう言う。

「そうや。」

「やっぱりそうですか。なら、久しぶりにフェイトさんの家にお邪魔しましょうかね。」

「なら、私もそうしようかな。」

「なら、行きますか。スバルさん、ティアナさんありがとうございます。」

そして、はやてと共に、ゼロはフェイトの家へ向かった。



「はあ。」

ここでも、悩んでる人が一人。フェイトだ。

「ホント、グリフィス君とシャーリーさんってどうやってあんな情報を…。けど、どうやって過ごそう…?」

その時、インターホンが鳴った。

「はい。」

誰だろう? そう、フェイトは思ってた。

「「こんにちは。」」

そこにいたのはゼロとはやてだった。

「ゼロ君と…はやてちゃん? どうしたの?」

「どうしたのって。」

「遊びにきたんやないか。」

「まあ、そうだね。立ち話もあれだから上がって。」

「「お邪魔します。」」

そして、フェイトの家へお邪魔した。部屋に入り、ゼロの第一声は…

「落ち着いた部屋ですね。フェイトさんらしいですね♪」

だった。それに対して、フェイトは

「そうかな。」

照れ笑いでそう答えた。

「さてと、座っても大丈夫ですか？フェイトさん。」

「うん。大丈夫。はやてちゃんも座って。」

そして、ゼロ達はお言葉に甘えさせて、座らせてもらった。

「そう言えば、僕が描いた絵今出せます？」

「うん。出せるよ。ちょっと待ってて。」

そして、部屋を出て行った。そうすると、はやてが話しかけてきた。

「なあ、ゼロ君が描いた絵って何なん？」

「それはですね。前、僕が無理言って模擬戦した時あったじゃないですか。」

「ああ、あの記憶が戻った時な。それで？」

「その時、ずっと待っててくれたみたいで寝てたので…。」

「まさか…。」

「そのまさかです。」

ちょうど話が終わったときにフェイトが入ってきた。

「ごめんね。待った？」

「いや、大丈夫ですよ。」

「なら、これ。」

「ありがとうございます。」

そうして受け取った絵をはやては覗き込む。

「わぁ……。うまいなー。」

はやても驚いた。それはすごく似ていたって言うより、本人そのものに見えたからだ。

「これでもまだ下手なほうなんですよ。」

ゼロは言う。

「これで？」

「はい♪」

さらに、驚き、はやてはゼロにこんなことを聞いた。

「なら、描いてもらってもかまわないやろか？」

はやては言う。

「はやてさんをですか？ いいですよ。」

「ほんまに？」

「ええ。」

ゼロは笑顔でそう答えた。

「なら、そちらに座ってください。十分ほどで終わるので。」

「わかった。」

はやては座り、ゼロはズボンのマルチポケットから、黒炭と木炭を

取り出し、キャンパスと小さいイーゼルを召喚した。

「なんか、便利だね。」

フェイトがそう言う。

「まあ。確かにそうですね。ナンバーズにいた時も描いてましたし。」

ゼロは答えた。

「さあ。描きますよ。」

ゼロが黒炭で輪郭を描こうとした時、はやてがガチガチなのに気づいた。

「はやてさん？」

「何や？」

「そんなにガチガチになると描くこちらが困ります。」

ゼロは言う。

「ガチガチになんかなってへんよ。」

そう言うはやての手は力が入りっぱなしで膝がわらってた。そこでゼロが、

「はやてさん。一回服脱いでみませんか？」

と言った。

「え、ええ!？」

はやては驚く。その時ゼロは上手くいきましたかな?と思う。

「ちょっ…ゼロ君!？」

フェイトは驚く。

「ちゃんとヌードデッサンって言うのがあるんですよ?驚く必要はないでしょう?」

さぞ、当り前のように言うゼロ。それを尻目にまだあわてる二人。

「やっぱり、ゼロ君。それはちょっと…。」

「…という冗談ですが。」

ゼロは冷静にそう言った。

「ゼロ君…。」

「…ひどいなあ。ゼロ君…。」

二人は俯き言う。

「でも、力が抜けて、良い顔になりましたよ?」

そこで、二人は気づく。これは、はやての緊張をほぐすための冗談だと。

「「ゼロ君…少し、頭冷やそう…」」

悪寒を感じたゼロは画材を片手に持ち、爽やかな顔をする。

「さてと、お邪魔しました。」

そう言い、立ち上がり、歩き出す。

「「待つて。」」

―掴―

それを上回る速さで二人は歩き、確実にゼロの腕が掴まれた。

「ホントにすみません。今度からこういう冗談はやめますんで。」

ゼロは言う。

「「今の私達が…許すと思う？」」

もう、二人はデバイスを構えていた。

「思うから、そう言うんですよ。」

ゼロは打開策を見つけるために言う。

「「なら、見当外れだね…。」」

二人はそう言い、魔法陣を展開する。ゼロは頭を回転させ、何か打開策はないか!となっていて閃いた。

「わかりました。何か御馳走しますよ。」

「「なんでも？」」

「ええ。とりあえず、懐に入るくらいでは。」

「「なら、いいよ♪」」

危なかったですね。ホントによかった…。とゼロは心の中で思っていた。一億回ほど。

「「ちなみに、懐って？」」

「うーん。1000万くらいですかね。」

「「うおっ!!」」

二人は驚いたようだった。どうやったらそんなにお金たまるのか不思議だからだ。

「で、絵を描かせてください。」

「わ、わかった。」



「す、すごいね。」

「そうやな。」

とりあえず、ゼロは絵を描き終えた。その絵を見せたところ、すごすぎて今に至る。

ゼロ君にこんな才能があったなんて……。そう思わずにはいられなかった。

さらに言えば、うますぎるのだ。誰が見ても本人そっくりって言うほどに。

「うーん。少し、焦っちゃったんですね。だから、木炭使いが少しだけ荒いですね。自分としては。」

そんなことを当たり前のことのように言うゼロに二人は

「「…。」」

な感じだった。これで、雑と言うなら、本気を出せば……と言うことになるからだ。

「なあ。話はそれるんやけど…。」

「『どうしたの？／ですか？』」

「いや、ゼロ君、どうやって一億貯めたのかなって。まさか、食事抜いたりしてないよな。」

じつとゼロを向く二人。だが、言ってることはあながち間違いではないことは確か。そこで、ゼロは素直に言った。

「まあ。そうですね。」

「なんでや？」

「いや、戦闘機人ではないとはいえ、あまり動いていないときは、食事とらないことにしてるんです。あんまり、食べ過ぎると次の日体調崩すんで。」

ここにも悩める乙女―（休日の過ごし方についてだが）が一人いた。

「なのはママー。」

「なにー♪ヴィヴィオ♪」

そう言って行くと…。

「フェイトママ達が来てる。」

―倒―

その言葉を聞いた瞬間。思いっきりすっこけた。

「ヴィヴィオ？冗談もそれくらいに…。」

「冗談じゃないよ。」

また、すっこけそうになったところを何とか耐えた。そして、よく見てみると、フェイトが来ていた。
ゼロとはやてを引き連れて。

「えっと、お邪魔だったかな？」

「いや、大丈夫だよ。上がって。」

「「「お邪魔します。」」」

「さてと、なのはさん？」

「何？ゼロ君？」

うーん。と言いながら、あたりを見回して、うん。と頷いた。

「その、あのソファーに座ってください。」

「うん。わかった。」

そして、なのはがソファーに座った時にはゼロの手元には画材がすべて揃ってた。

「あ。なのはさん？絵を描いてもいいですよね。」

「うん。いいよ。」

そして、デッサン用の木炭を走らせた…。



「ふう。できた。」

ゼロが絵を描き終えた。そして、フェイトとはやてが覗きに來た。

「「ああ。なるほどね。／＼な。」」

「え？何、何？」

そして、なのはが絵を覗きに來た。

「…。」

「その、怒らないでくださいよ？僕は絵を描いていいですか？って

聞いたんですからね。」

「なのは。確かにその気持ちはわかる。けど…」

「がまんしてや。」

そうフェイトとはやてが釘を刺した。

「うん。フェイトちゃん、はやてちゃん、ゼロ君？」

「「何？／＼でしょうか？／＼や？」」

「今日、飲もう？」

「あ、僕ちようど用事を思い出しました。」

「ゼロ君？今日は休暇…だよね？」

ぎくっ！！と思った。そう、逃げ道がないのだ。

「はあ。わかりました。ヴィヴィオさんも呼んでください。それで、どこか食べに行きましょう。もちろん、僕の奢りで。」

「ホント…だね？」

「もちろんです。銀行に1,000,000,000円程預金があるので、少しだけ下せば大丈夫です。」

「ヴィヴィオ〜♪今日はフェイトちゃん達とお食事に行くよ〜♪」

「わかったよ〜♪なのはママ♪」

「さすがやな。」

「確かにそうですね。」

ゼロとはやてがそんな会話をする。

「じゃあ、行きますか。」

「そうだね。」

そして、外でなのはとヴィヴィオを待ち、来たところで、食事に向かった。それで、きりのいいところで、切り上げた。今日の合計は100,000円だったが、ホントに涼しい顔で帰路についた。

NEXT STAGE, , , , ,



ZERO

「後書きコーナー♪」

わ〜♪

ZERO

「ヒヤッホウ!!」

—撃—

ゼロ

「ばるさ!!」

ZERO

「さてと、ゼロも吹っ飛んだことだし…。スターゲイザー?」
スターゲイザー

「はい♪出来てますよ。」

ZERO

「あんがとね。」

翔

「何を作ったんだ？」

スターゲイザー

「ちょっとお菓子をいくつか。」

ZERO

「みんな、お菓子好きそうだからな。特別に奮発した。」

アリシア

「それ、ホントなの？」

ZERO

「モチのロンだよ。」

アリシア

「ちなみにいくつくらい？」

ZERO

「そうだな…。ちょっと待ってて。」

—10分後—

ZERO

「お待たせ。」

翔

「なあ。ひとつ聞いていいか？」

ZERO

「いいよ。」

翔

「その箱は何だ？」

ZERO

「うーんと…聞きたい？」

翔

「ああ。」

ZERO

「お前らの巫女服♪」

翔

「今の内に逃げ…。」

ZERO

「リアル？」

リアル

「アイアイサー♪翔さん確保〜。」

翔

「げっ！」

ZERO

「ふっふっふっ…。覚悟しろよ。翔…。」

翔

「いやだあああああ！！アリシア！！」

アリシア

「ごめん。翔。」

翔

「リインフォース！！」

リインフォース

「すみません。翔さん。」

翔

「リニス！！」

リニス

「いやです♪」

ZERO

「どの道、“君達”に逃げ場はないのだよ…。リニス！！ステージ
イザー！！残りの二人を！！」

スターゲイザー・リニス

「確保しました♪」

アリシア・リインフォース

「え!?!」

ZERO・アリシア・リニス

「作業開始…。」

翔・アリシア・リインフォース

「いやああああ!?!」

—20分後—

ZERO

「なかなか似合ってるじゃないか♪」

リニス

「そうですね♪」

スターゲイザー

「はい♪」

翔

「なんで…」

アリシア

「リニスが…」

リインフォース

「そちらに…」

翔・アリシア・リインフォース

「いるんだ!?!／のよ!?!／ですか!?!」

ZERO

「こっちに協力してもらっただけ。後で別なの渡すから、向こうでお着替えタイムすればいいだろ。」

翔・アリシア・リインフォース

「だな。／だね。／ですね。」

ゼロ

「はっ!」

ZERO

「おお。起きたか。じゃあ、ブレイブフォースを呼ぶ…わけにはいかないな。あ、そうだ。ケーキは持ち帰り許可で12ホールある。」
B r e v e S a v e r s 一同

「さっそく食べよう。」

Z E R O

「と、言いたいところだが、時間が押してるので、お土産にしてもらった。」

翔

「ZERO…。」

Z E R O

「わかってる。そうそう、その服、向こう行くまではそのまんまだからな。はい♪これ。」

アリシア

「なんか悲しいね。」

Z E R O

「わかった。今度も来ていいから。」

えいっと東吾さん。今回の出演ありがとうございます♪

うまく書けたかどうか分かりませんが今後も召喚するつもりなので宜しくお願いします♪

後、この場を使ってヨシユアさんへ謝罪。あのメッセージホントは東吾さんへのメッセージだったのですが、ヨシユアさんに送ってしまいました。申し訳ありません。

それと、この前の召喚ありがとうございます。今後ともに、また召喚すると思うので、宜しくお願いします♪」

スターゲイザー

「それでは、次回まで…。」

一同

「R I D E O N ! !」

第14話一暴走（前篇）一

ZERO

「前書きコーナー♪」

わ〜♪

ゼロ

「今回はテストメントさんから許可を得て、あのゲストが来てるんだろ？」

ZERO

「その通り！！それでは、赤コーナー！！神庭シーオン！！」

―殴―

ZERO

「まったく、痛ってえってのがわかんないのか！！」

ゼロ

「だったら、そのネタをもうやめろ！！」

ZERO

「うっさい！！スターライト・ブレイカー！！」

ゼロ

「ぎゃああああああ！！」

―撃―

ZERO

「えっと、今日は神庭 シオン君が来ています。」
シオン

「ども。シオンです。」

スターゲイザー

「はじめまして。スターゲイザーです。」

シオン

「どうも。」

ZERO

「どうも。作者の分身のZEROです♪」

シオン

「どうも。」

ゼロ

「…。」

シオン

「なあ。あの死体は何なんだ？」

ゼロ

「死体って言うな!!」

シオン

「うおっ!」

ZERO

「トライデント・スマッシュャー!!」

ゼロ

「ぐっはあ!!」

—撃—

シオン

「かわいそうだな。大丈夫か？」

ZERO

「あ、気にしないでいいから。あいつはここの弄られキャラだからね♪」

ゼロ

「おいっ!!」

ZERO

「だんだん慣れてきたな。もう少し威力上げるか。」

ゼロ

「こらこら。あ、君がシオン君かい？」

シオン

「はい。」

ゼロ

「自己紹介。俺の名前はゼロ・S・アームストロングだ。」

シオン

「宜しくお願いします。」

ZERO

「それじゃあ、始めるか。魔法少女リリカルなのはStS 戦場の
絆—endless waltz—。」

一同

「始まります。」



「…。またですか…。」

その日、ゼロは妙に寝つきが悪かった。寝ようとは思っているのだが、なかなか寝れない。

「頭痛…という訳ではないですし…。」

『マスター。』

「すみません。少し、外に出ています。」

『…私も行く。』

「そうですか。」

そして、ブレイブ・フォースはアウトフレームになりゼロと共に外に出た。

「マスター。やっぱり…。」

「そのことも考えました。けれど、それだったら、もう動いてるでしょう?。」

「ですね…。けど、取れかかっているのかも…。」

「その時はその時です。」

そう、ゼロは答えた。少しだけ、悲しみの念を抱いてるようにブレ

イブ・フォースは見えた。

「マスター。貴方は…。」

「ゼロ君…。」

と、そこにフェイトがやってきた。

「おや、フェイトさんですか。どうしました？」

「少しだけ風に当ろうと思って。ゼロ君は？」

「なかなか寝付けなくてですね。そうだ、フェイトさん。ちょっといいですか？」

「何？」

少しだけ寄り添って、話をする。

「いいですか？ 僕の中にある不死鳥systemが今、ものすごく不安定な状態になってます。そこで、お願いなのですが、何かの拍

子で暴走してしまったら、六課の力を使って僕を…。」

「ゼロ君を？」

ゼロは少しだけ間を空け、こう言った。

「殺してください」

「え…？」

フェイトは驚いたようだった。それもそのはず。最愛の人を殺すことなんてできないからだ。

「…こんなこと急に言われても困るっていうのはわかります。けど、守りたい人が、殺したくない人が僕にはたくさんいます。ですから、お願いします。今、僕が頼れるのは貴方だけなんです…。」

その眼には涙が浮かんでいた。

「…わかった。」

フェイトはそう答えた。

「ありがとうございます。」

そして、ゼロが笑い、言った。

「そろそろ、寝ましょう。」

「うん。そうだね。行こう？」

「でも、僕は眠くないので、行ってください。」

「わかった。」

そして、フェイトは自分の部屋へ向かった。

「…あれは、ホントに暴走したら、被害をどれだけ生むのか…。」

「マスター…。」

「…僕らも寝ましょう。」

「…そうだな。」

そして、ゼロは自分の部屋に戻って就寝した。けれど、誰も予想しなかっただろう。この暗示が現実になろうとしているとは…。



『マスター。』

「ええ。起きてますよ。体の調子は…まあまあですかね。」

『そうですか。』

「はい。」

その時、アラートが鳴り響いた。ゼロは何事かと思い、シャーリーを呼ぼうと思ったがやめた。

『マスター?』

「ええ。行きましょう。」

ゼロは外に出て転送術を展開。そして、消えた。



「やはりですか。」

そこには異形が100以上いた。

「ブレイブ・フォース。セットアップ。」

『了解。』

そして、ゼロは騎士甲冑のバリアジャケットを纏った。

「トラディブレード
TTB!!」

『了解。』

「はあああ!!」

―閃・閃・閃・閃・閃・閃・閃・閃・閃・閃―

ゼロは双剣を呼び出し、振るった。何十回も、何千回も。だが…

「はあ。はあ。減りませんね。」

という状態だった。なぜか、数が一向に減らないのだ。

「オマエヲ、コロス。」

そして、背後から、異形が持っていた剣を振り下ろした。

しまった。ゼロがそう思った時にはもう遅かった。プロテクションを張ろうとしても、そこは間に合わない距離だった。とその時。

「アストラル・ブレイカー!!」

―閃―

その時、異形に一筋の光が通った。

「…ヒューズさん。」

構えを解いて、ヒューズはこう言った。

「はあ。命・令・違・反です！！帰ったらはやて隊長からお経を据えてもらってくださいよ！」

ゼロは少しだけ笑った。

「相変わらずですね。ヒューズさんは♪」

『マスター。そんなこと言ってる場合じゃ…。』

「わかってますよっ！！」

そう言って、剣を横に振るった。そうすると異形が言った消え去った。

「大丈夫ですから。全部倒します。トライブレード。」

『了解。』

ゼロは刀を呼び出し、斬り込んだ。

「はあああ!!」

「:やれやれ。仕方がないな。アルトさん。ここで降ろしてくれ。あと、降りた後はすぐに離脱してくれ。」

「了解!」

「アーヴェント!!ヒューズ。出るぞ!!ブレイド!時之加速!^{クロック・アップ}」

そして、ヒューズは戦場へ行った。

「さあて、いっちょ征きますか!!」

「…ふう。少しずつですけど、数は減ってきましたかね。」

『マスター!! 後ろから射撃反応!!』

「了解しました!!」

ゼロは後ろに振り向きプロテクションを張った。

―撃・碎―

だが、いとも簡単に抜かれた。

「なっ! このっ!」

ゼロは無理やり、トライブレードで軌道をそらせて回避させた。

「…あれは…!!」

そこには1名の次元犯罪者。

「ライザー!! クロイツ…。」

『マスター。あれって…。』

「わかってます。手出しは無用です。」

その時、魔力の供給を開始した。

「あれって…!!」

その砲撃のコースにいるもの。ヒューズだった。

「ヒューズさん!! 避けてください!!」

「ソニック・ショット…。」

ゼロが叫んだときには、時すでに遅し。ヒューズの体は射抜かれた…。

「結局、お前は力がない。守れない。だから、何もできない…。」

「黙れ…。」

ゼロは返事を短く切った。

「貴方だけは…。」

そう言うのとゼロの魔力量が激増。そして、ゼロの姿が変わっていった。両腕にはクロー。さらに背中には羽根が生えた。

「貴方だけは！！私が！！」

「私だから？どうする？？」

ゼロは見事にライザーの口車に乗せられた。

「殺す！！」

「ゼロ…。」

ヒューズの声もむなしく、不死鳥systemは暴走してしまった。

「うああああ!!」

―閃―

ゼロは突撃し、己の右腕をたたきつけた。

「…ほら、どうした？お前の力はこんなものか？」

「貴様!!」

そして、左腕をたたきつけた。

「まだまだだな。お前は弱いんだよ。そろそろ、現実を…受け止めたらどうだ!!」

ライザーは右手でスフィアを作り、左足でゼロを蹴った。

「はああああ!!」

そして、放った。

「くそっ！」

「悪いが、これで終わりだ。ライドレス・ブラストレイ！」

—撃—

その技を言った瞬間。ゼロに向かい一筋の光が走った。そして、ゼロは意識を手放した。

「…さて、こいつの魔力をいただくとするか…。」

「させない！！アイセス！」

『set on.』

「ブリッツランサー…サンダー！！」

一人の少女の周りに、ランサーが展開。そして、放たれた。

―閃・閃・閃―

「邪魔が入ったな。」

「…ふう。」

その少女は息を整え、言った。

「アリシア・テストロッサ！行きます！」

そして、アリシアは突撃した。



「はあああ！！！」

―閃！―

そのころアリシアはライザーと戦っていた。ライザーは剣、アリシ

アは鎌で五分五分だった。しばらく鏢迫り合いで、均衡した後。

「邪魔だ。」

「っ！」

ライザーはアリシアの首を掴んだ。

「その程度で俺と戦おうなど…。」

「くあっ…！」

ライザーは力を強めた。そして…。

「百年早い…！」

投げ捨てた。

—撃—

アリシアは地面を数メートル転がった。

「くそっ！…アルスの大事な人なのに…。なのに…。」

アリシアは泣いていた。それを見たライザーは…。

「小娘。そこで見ている。“お友達”が死んで行くのを…。」

「死なせなんてしない！！」

『stand by ready.』

「ディバイーン・バスター！！」

「っ！！」

—閃—

その声が聞こえると、空から桃色の一筋の光が降ってきた。

「高町なのはさん…?」

アリシアは光を出した主を呼ぶ。

「トライデント・スマッシャー!!」

―閃―

今度は、金色の三叉の光が降り注いだ。

「フェイト…。」

アリシアは少し笑った。

「妹が頑張ってるのに、私がへこたれる訳にはいかないな。」

そして、戦場へ足を踏み入れた…。



「…こは？」

「このポケ野郎。やっと気づいたか。」

その時、影ゼロが上のほうから降りてきた。

「ジョーカーさん！！これは一体…？」

「いいからまずは、この記憶でも食らっとけ！！」

そして、記憶を込めた、右のナックルが鳩尾に入った。

—撃—

ゼロは吹っ飛び、少しせき込み、聞いた。

「…ぐはっ！こ、これは…？」

それに、影ゼロは答えなかった。代わりに、こう言った。

「説明は後！とりあえずこれを持って！！」

渡されたのは鞘に入った短剣だった。

「これは…？」

「楔の剣だ。」

「…これで、どうしろと？」

「楔を刺すんだよ。向こうに扉がある。そこにクサビが抜けがかってる、やつがあるから入れなおして来い。」

それを聞いたゼロは扉のほうを振り向き…。

「了解しました。必ず、楔を刺して見せますよ。」

「おう。生きて帰ってこいよ。」

「ええ。」

そして、ゼロは楔を刺しに扉の向こうへ行った。はたして、なのは達はどうなるのか。そして、ゼロは楔を刺せるのか。次回―暴走
(中篇)―



ZERO

「後書きコーナー。」

わー。

ZERO

「今回は作者が力尽きたので前後編です♪」

シオン

「しかし、これはゼロ面目丸つぶれだな。」

ゼロ

「ぐはっ！しょうがねえだろうが。これは流れるにこうなるかもって言う作者の悪ノリが…。」

シオン

「後はアリシアだな。」

ゼロ

「だな。フェイトに似てかわいいんだけど…。」

シオン

「俺はカナンにアーメンって言いたくなるな。」

ZERO

「そうか？」

シオン

「お前、鬼か？」

ZERO

「今ここで呼び出して、カナン君と同じ運命^{デステイニ}逝かせてあげようか？」
シオン

「結構だ。」

ZERO

「デストロイ！！」

シオン

「ふがっ！！」

ZERO

「スターライト・ブレイカー♪」

ゼロ・シオン

「うぎゃあああああ！！」

――閃――

ZERO

「えゝ。おあとがよろしいようで。では、次回まで…」

ZERO

「RIDE…」

ゼロ・シオン以外

「ON！！」

第14話―暴走（前篇）―（後書き）

ちょっと告知。

えっとですね。そろそろ、人気投票をやろうと思います。

最大三名までで、期限はクリスマスまでです。

他作品おkです♪出来ればメッセージ、無理だったら感想に書いてください。お願いします♪

第15話一暴走（中篇）一

ZERO

「前書きコーナー♪」

わ〜♪

ZERO

「えっと、まあ。告知。」

ゼロ

「何をだ？」

ZERO

「決まってるだろ。人気投票。」

ゼロ

「ああ。なるほどね。」

ZERO

「今回、作者が何を思ったか、人気投票をやることになりました。」
ゼロ

「一応、どの作品からでもいい。最大五人まで。何？前は三人だったって？それは、作者が三人って少なすぎだって理由だからだ。」

ZERO

「出来れば、幅広く応募して欲しい。期限はクリスマスまで。」
ゼロ

「これはポイント制になってる。1番…5pt 2番…4pt
3番…3pt 4番…2pt 5番…1pt となっている。」

ZERO

「ちなみにこれは作者が面白い小説を探すためのものなんだ。NO,
1の人は、他作者様に許可を得て、出すつもりだそうだ。」
ゼロ

「これは、メッセージかEW感想に書いてくれ。」

ZERO

「その他に、意見なども待ってるので、お願いします。それではEW本編。」

一同

「始まります。」



アリシアside

「いけるかな？アイセス。」

『all right.』

「無理して、英語で言わなくても大丈夫だから。」

『…わかりました。行きましょう。』

「うん。」

そして、飛び立った。一方ライザーはと言うと、

「…少しもらってしまっただが、問題はないな。」

無傷だった。なのはとフェイトが2人がかりでかかっても、ライザは健在していた。

「…なのは。さっきの女の子大丈夫かな？」

フェイトはなのはに聞いた。

「わからない。でも大丈夫だと思う。」

なのはは答えた。と、その時通信が入った。

『こちら、アリシア・テスタロッサ。なのはさん。フェイト聞こえたら応答してください。』

その通信を聞いた瞬間、二人の顔は驚愕に染まった。アリシアはもう、死んでいるはずだからだ。けれども、その通信になのはは応えた。

「こちら、高町なのは。」

『よかった。聞こえてた。今から私も戦闘に参加します。事情の説
明は後にしましょう。』

「待って！」

その時、フェイトは呼びとめた。

『どうしました？』

「あなた、本当にアリシアなの？」

フェイトはそう聞いた。それに対し、アリシアは少し笑い、答えた。

『そうだよ。フェイト。私は正真正銘のフェイトの姉さんで、正真正銘のアリシア・テスタロッサだよ。∴プレシア母さんが私を蘇らせてくれたからね。』

よかった。と少し息をつくのもつかの間。アリシアが突撃した。

「アイセス！」

『了解！』

「『ユニゾン・イン！！』」

アリシアはアイセスとユニゾンした。煌めく瞳は黄金色。流れる髪は銀の色をしていた。

「『ブリッツ・シューター！！』」

アリシアは自分の周りにスフィアを100ほど展開。

「『サンダー！！』」

そして、放った。ライザーはそれを弾く。片手で。

「やっぱりか。」

『マスター。やっぱり遠距離は無理だと思うぞ。』

「ちょっと試してみたいことがあるんだけど。」

『…はあ。好きにどうぞ。』

「なによ。今のため息は？」

むすっとしてアリシアがきく。

『少し、ゼロさんのことを思い出しただけですよ。』

「ならいいけど。行くよ!!！」

『了解!!！』

「『ブリッツランサー!!！』」

アリシアは自分の周りにランサーを150程展開。

「『ブリッツ・シューター!!！』」

続いて、スフィアを倍の300程展開。

「『サンダー!!』」

それらを一気に放ち、別の術式をアリシアは出した。

「『一撃、制裁!!』」

アリシアの両手にはコントロール用のスフィアが二つ。アリシアの足元に魔法陣が展開。

「『聖なる裁きをライザーに!!』」

アリシアの目の前に、ベルカ式とミッドチルダ式の魔法陣が展開。

「『アルス直伝!! ジャスティス・ブレイカー!!』」

白い光がライザーを貫いた。

白い光は集束砲。

放つ主はアリシア。

そして、ライザーは地に叩きつけられた。アリシアは少し息を整え

た。

「…なんか、すごいね。」

なのはがそう言った。

「確かに…。敵には回したくないね。」

フェイトはそれに答える様に言った。

「油断しないでよ。」

ユニゾンを解いたアリシアがなのは達の後ろから言った。

「「わっ！」」

二人は少しだけ驚いた。

「……エリアサーチ完了。いなくなったね。けど…。」

「わかってる。ゼロ君の事でしょ？アリシア姉さん？」

フェイトはそう言った。けれど、アリシアは少しだけ笑って言った。

「呼び捨てでいいよ。『姉さん』とか向こうで呼ばれなかったからあまり慣れなくてね。」

そう、訂正した。

「うん。わかったよ。アリシア。」

「あのさ、フェイトちゃん？アリシア？」

「「どうしたの？」」

さすが姉妹。息がぴったりだ。となのはは思ったり、そうじゃなかったり。

「ゼロ君は…どうなってるのかな？」

アリシアは少し暗い顔をして、答えた。

「わからない。けど、ゼロが不死鳥を制する事が出来れば、姿は元に戻ると思う。」

「もし、できなかったら？」

なのはが聞いた。

「多分。殺すしかないだろうね。フェイトは聞いてるはずだよ。」

フェイトはそれに頷いた。

「今は信じて待つことしかできないよ。皮肉だけど。」
「…。」

三人は暗い顔をしていた。

「…待とう？」

アリシアは言う。

「…うん。」

そして、三人は待つことを決めた。



一方、そのころゼロは…扉を開け、楔を刺すところ。だったのだが…。

「……楔は…どこにあるんでしょう？」

ゼロが楔を探している、その時。

「フェザーランサー!!」

―閃・閃・閃―

ゼロは回避した。

それは、羽根に似た形態。

それを放った人物。それは…。

「……なっ！あ、貴方は!!」

ゼロだった。しかも、体は鳥と人間が合わさった様な体をしていた。

「そんなこと決まってるだろうが。『楔』だよ。」

楔。確かにそう言った。

「…楔ですか…。」

「ああ。そうだ。“私が”楔だ。」

「なるほど。つまり、貴方を何かにくくりつけて、封印すればいいんですね。」

「やれるものならばな。」

「やって見せますよ。」

そして、ゼロと楔との戦闘が始まった。はたして、ゼロは楔を刺せるのか。次回－暴走（後篇）－

第16話―暴走（後篇）―

ゼロは楔の剣、楔はトライソードを片手で軽々と持ち、構えた。

「「ゼロ・S・アームストロング。」」

「「行きます！／＼推して参る！！」」

そして、二人は駆け出した。

「はあああ！！」

―閃―

少しの鏖迫り合い。そして、楔は言った。

「こんなものか？昔のほうが強かったぞ。」

そして、空いている方。左手で拳を作り、構えた。

「ふん!!」

―撃―

ゼロは吹き飛ばされた。

楔の腕の力だけで。

そして、構えを戻し、楔は肩と手首の調子をつまらなさそうに確認していた。

「本当に弱くなったな。貴様の体を頂いてもいい位だな。」

「やめてくださいよ。そうゆうの。」

楔が振り向く。そこに立っていたのは、長剣を携えたゼロがいた。

「ほう。やられたと思っていたのだがな。」

「…このくらいでやられるなら、もう、終わってますよ。」

息は途切れ途切れだった。それは、このままでは勝てないということ。

「高機動…ってわけでもないですね。」

「せいぜい足掻くがいいさ。」

「ええ。そうさせてもらいます。」

そして、魔力を足に注ぎ込んだ。無理やりですけど、これしかできないですからね。ゼロはそう思った。そして、長剣を上段で構えた。

「はああああ!!」

―斬―

切り裂いたのは空。
切った主はゼロ。
その時焦った。

「その焦りが何もかも失う原因になる。」

―斬―

斬り裂かれるのはゼロ。

風を纏ったその剣で切り裂いた。

楔の体は風を纏い、白く白く映る。

だが、ゼロは何とか踏ん張り、後ろを斬る。

―斬―

また空を斬る。

だが今度は焦らずに瞳を閉じ剣を構え、

風を感じ、

感覚のままに剣を後ろに振った。

―斬―

「ぐはっ！」

今度は楔を斬った。

だが、存在は消え、

ゼロの前方に現れる。

それを見切ったゼロは剣を縦に構え、

楔の斬撃を耐え切った。

「貴様…。なぜ私の場所が…。」

それにゼロは目を閉じたまま答えた。

「簡単ですよ。風を感じるんです。そう、運命のままにですね。」

その時、長剣の形が変化した。それだけではない。左手に金属できた籠手の様なものが装備された。

「お前、その力は…。」

楔の顔は驚愕に染まっていた。

ゼロはそれに対し、笑って言った。

「今、焦っているのはどっちでしょうね？」

そして、瞳を見開き、剣を振るった。

―閃っ！―

少しの鏝迫り合い。

それを弾き。

二人は対峙する形で3メートルずつ離れた。

そして、ゼロは自分の持っていたもの、長剣と左腕の姿が変わっていたことに気づいた。

「…これは…？」

〈運命の力。〉

それに答える様に言った。

それにゼロは少し驚いて言った。

「…誰ですか!？」

〈運命の力の主です。〉

主は答えた。

それにゼロは聞いた。

「運命の力とはなんですか？それを使ってみんなを守ることができますか？」

へ：ならば聞きましょう。貴方は自分と仲間が絶体絶命のときに自分が助かるか。それとも、仲間を助けるか。どちらですか？」

主は問いに問いを返してきた。
それに対しゼロは答えた。

「もちろん。仲間です。自分はどうでもいい。けれど、仲間は救いたいです。」

へ：貴方の瞳に迷いはありませんね？

主はさらに問いをする。
それにゼロは答えた。

「はい。なら、僕の瞳を確かめてくれてもかまいません。」

へ：そこまでの決意があるならいいでしょう。運命の力：Dを与えましょう。✓

そうすると、ゼロの目の前に一人の女の人。女神と呼ぶにふさわしいものが現れた。

「貴方がDの主なんですか？」

へええ。『元』ですけどね。▽

「『元』？」

へええ。名をエルザと申します。▽

「エルザさん…ですか。いい名前です。」

へそれより、Dを与えます。▽

「ええ。宜しく願います。」

へ我の名はエルザ。運命の力を与えるもの。新たな主はゼロ・S・アームストロング。▽

エルザの足元に魔法陣が展開。そして、スフィアが生成され、そのスフィアには“D”という文字が刻まれている。

へ…D。授付。▽

そして、ゼロに吸い込まれた。

♪
へ…これで、大丈夫です。私はいつでも貴方のお傍にいますからね

「ええ。」

それは一瞬の出来事。エルザが消えたとき、眼前に楔がいた。
ゼロは剣を縦に構え、呪文を詠唱した。

「我、運命の力を受け継ぐもの。汝、運命の力を与えるもの…。」

そして、ゼロの足元に十角形の魔法陣が展開。

「!、させるか!!」

そして、楔が斬り込んできた。
それでもゼロは詠唱を辞めず。

「運命よ! 我に力を!」

そして、ゼロが光に包まれた。

光が晴れ、そこに居たのは、背中に羽根が不死鳥、E W S y s t e mとは違う羽根が生え、銃ともう一つ剣を携えていた。

バリアジャケットは青色で戦士、あるいは騎士と呼べる姿であった。

「デステイニDフォルム！！」

「クソ！！」

楔は一度止まった足を動かして、斬り込んだ。

「閃」

それに対し、ゼロは左手で受け止める。

玩具を扱うように。

ただそこに佇んでいた。

「魔力供給開始。」

そして、ゼロは魔力を供給した。

「パルマ・フィオキーナ!!」

―撃―

その瞬間、楔の体を集束砲が突き抜けた。
放つ主はゼロ。

その打ち抜いた左手は、白い、白い煙が上がっていた。

「楔の剣!!」

ゼロは吹き飛んでいる楔を見て、楔の剣を取りだした。

「っ!!」

楔は体勢を立て直そうとした。けれども、彼にそのような力は残っていないかった。

そして、ゼロが追いつき。

「両足!!」

―斬―

「右腕！」

―斬！―

「左腕！」

―斬っ！―

楔をくくりつけるような形に剣を振るった。
そして、短剣状に戻し。

「はあ。はあ。」

「速く止めをさせ。」

「そうします。」

ゼロは息を整え。

呪文詠唱を開始した。

「楔の剣よ。我に封印するために力を…。」

楔の剣が光り、腰だめに構えた。

「^{ロック}封印。」

そして、胸を目掛けて短剣を刺した。

「っ！…ふん。今回は大人しく封印されてやる。だが、次封印を解いた時は…。」

「わかってます。おやすみなさい。」

「ああ。お休み…。」

そして、辺りが光に包まれ、気づけば扉の前に居た。

「…ここは…扉の前？けど、来た時と違って何かが違うようですね。」

「…おめでとう。」

声をかけられ後ろを向くと影ゼロがいた。

「ジョーカーさん。」

「…新しい記憶、もう一個やるわ。」

「いいんですか？」

「ああ。それとも、いらないのか？」

それを聞いたゼロは慌てて言った。

「いいえ！そうおっしゃらず下さい！」

それを聞いた影ゼロは少し笑い。

「バーカ。冗談だよ。ほら、顔出せ。」

ゼロは言われるがまま、顔の額を出した。そうすると仮面が白に染まり、記憶が注ぎ込まれた。

「聞きましょう。これは、何の記憶ですか？」

「さっきから今までの記憶を軽く説明する。

それはな、不死鳥systemに操られて、封印され破ったんだがその時スバルと戦って怪我をしたスバルを六課に送り届けて、

時空管理局に身柄を拘束されるまでの記憶だ。」

少しゼロは気を落として、言った。

「ええ。けれど、それが真実なんですネ。」

「ああ。残念だけだな。そして、何十人も、何百人も、何億、何兆、それ以上の人を殺した。」

「そうですか。でも、それが僕、なんですよね。」

「ああ。」

影ゼロは笑って言う。

「わかりました。ジョーカーさん。」

そして、ゼロも笑って言う。

「そろそろ戻らないとな。なあ、ゼロ。」

「そうですね。あんまり心配かけたくないですし。」

「じゃあな。」

「はい♪」

そして、ゼロはフェイト達がいる所。現実へと戻って行った。



「…っ！ぐっ…。」

「「ゼロ君!!／＼ゼロ!!」」

そこにはアリシアとフェイト、それになのが居た。

「…みなさん。ただいま。楔、刺してきましたよ。」

「「よかった…。」」

「それと、御三方。」

「「「どうしたの?」」」

「顔。近いです。」

「「「ご、ごめん。」」」

それまで三人は気付かなかった様で、慌てて離れた。そして、ゼロは魔力を流して、体の調子確かめたようだった。

「…右肩、粉碎骨折。…両足首、脱臼。左腕、筋肉痛。…こんなところですか。」

そして、ゼロは足首を持ち…。

「よっこいしょ！」

パキッ…。と軽い音がした。

「ゼロ君…今何したの？」

なのはがそう尋ねたので、答えた。

「足首が脱臼してたんで、無理やり元に戻しました。」

相変わらず無茶苦茶だね…。そう、三人は思った。

「どうしたんです？行きましよう？」

「そうだね。」

フェイトが言う。

「でも、ゼロはどうするの？」

アリシアが問う。それにゼロは答えた。

「歩きますよ。」

「それ、危なくないかな？」

それに、さらになのはが問う。

「ああ。そうでしたね。でも、右肩にしても、ものすごく痛いですし、逆でも、筋肉痛が…。」

『なら、私ら頼ってくれてもいいんじゃないか？』

その時、はやてが通信をした。

「はやてさんですか。でも、脱臼は治しましたし…。」

『なら歩いて帰るって？左は筋肉痛、右は骨折やろ？立つときどないすんねん。』

そう言えば…。そう、ゼロは思った。

「なはは…。」

もう、ゼロは苦笑いしかできなかった。

『待ってな。ゼロ君。今から行って、右肩を弄り回してやるから…。』

ゼロの背筋に悪寒がものすごく走った。

「逃げてもいいですか？」

「逃げたらあかんよ♪」

もう、後ろに居た。ものすごい激痛がゼロの肩に走った。

「…。」

「ゼロ君？」

フェイトがきいた。

—倒—

ゼロは顔面からぶっ倒れた。涙を流して…。

「はやてちゃん？」

「あ、いや、その、ここまでとは思わなくて…。」

「はやて…それはいい訳だよ…。」

ぎくっ！これはまずいな…。はやてはそう思った。

「まあ、二人とも落ち着いてや。」

「そうだよ。なのはさん。フェイト。」

「アリシア。でもね…。」

フェイトはアリシアに反論しようとする。だが。

「でも、もへったくれない！わざとじゃないんだし、許してあげる！いいね！？」

「はい…。」

フェイトは押し負けてしまった。はやては少し安心したらしく、安堵の息をもらした。

「はやてさん。すみません。」

「いや、ええよ。それより、話を聞かせてくれへんか？」

「いいですよ。」

そして、ゼロは気を失ったまま六課に運ばれ、アリシアもまた、六課に行くことになった。

NEXT STAGE, ,



ZERO

「後書きコーナー♪」

わ〜♪

ZERO

「今日は翔達が来てるぞ〜♪」
翔

「どうも。」

アリシア

「こんにちは♪」

ゼロ

「いらっしやい。」

アリシア

「ゼロ♪久しぶり♪」

ゼロ

「ああ。久しぶりだな。」
アリシア

「何か冷たいね。」

ゼロ

「そうか？」

アリシア

「うん。」

翔

「何か悪いんだけどさ。話進めよう？」

ゼロ

「そうだな。」

ZERO

「この回までのおさらい♪」

スターゲイザー

「そうですね…やっぱり、Dの力でしょーうね。」

アルス

「だな。」

翔

「アルス。心臓に悪いからやめてくれ。」

アルス

「すまない。」

アリシア

「それと…。」

ゼロ

「アリシアだな。」

アリシア

「さっすがゼロだね♪」

アルス

「後は、楔との戦いだな。」

ゼロ

「そうだな。で、翔。アリシア。」

アリシア・翔

「どうした？／＼の？」

ゼロ

「リニスはどうなった？」

アリシア

「もちろん…ね？翔？」

翔

「ああ…。」

ゼロ

「おお！二人から黒いオーラがつ！」

ZERO

「気にしない、気にしない♪」

アリシア

「で、今回はないよね？」

ZERO

「ない。」

翔

「嘘だろ？」

ZERO

「その通り♪今回はナースとバニーガール♪」

翔

「ダッシュ！」

アリシア

「待って！翔！」

ZERO

「逃がすかぁ！！ディバイーン・バスター！！」

ゼロ

「ぎゃああああ！」

— 撃 —

ZERO

「えー。御後がよろしいようで。東吾さんキャラ召喚ありがとうございます♪また、召喚させてもらうかもしれませんが、よろしくです♪」

翔

「ふう。助かった。」

アリシア

「ホントにね。」

ZERO

「それでは、次回まで!!」
ゼロ以外

「RIDE ON!!」

第17話―後悔とクリスマスイヴ―

ZERO

「どもっ♪Z・E・R・Oですっ♪」

わー!!♪

ZERO

「ま・え・が・き・コーナー☆」

わっ♪

ゼロ

「初っ端からやりたい放題だなおい!」

ZERO

「たまあにこういうことやるとおもしろいよ♪」

ゼロ

「俺やったら白けるんだろ?」

ZERO

「チッ!ばれてたか。」

ゼロ

「やっぱりな。」

ZERO

「このコーナーえらいほど質問ないな。」

ゼロ

「そうだな。そろそろ、ファンレターとか（感想で）が来ないと、作者が挫折するな。」

ZERO

「DA・NE♪」

ゼロ

「妙にノリノリだな。まあ、いいや。魔法少女リリカルなのは 戦場の絆—endless waltz—。」

ZERO

「始まります♪」



「…ここは…?」

そこは、医務室だった。

「あ、気付いた?」

そして、そこにはフェイトが居た。

「フェイトさん…。」

そこで、ゼロはある事に気が付き、質問した。

「…ヒューズさんはどうなったんです?」

その質問をした瞬間、フェイトの顔が強張った。そして、黙り込んだ。そしてゼロは言った。

「言っして下さい。どんなに辛いことだとしても。」

「それで、自分を責めたりしない?」

フェイトはそう聞いた。このまま言おうとゼロ君は無理をしてしまう

…。そう思ったからだ。そして、出た答えは…。

「はい。」

だった。そして、フェイトは一息置き。

「亡くなられたよ。」

そう言った。

「…。やっぱりですか。」

「？やっぱりって、どうゆうこと？」

「ライザーが放った一撃…それは、動脈を狙った確実な一撃で、もう生きてないだろうとは思ってたんですよ…。」

「ゼロ君…。」

「助けを呼べば助かったのかもしれないですね。けれどあの後、僕は暴走し気を失ってたから仕方がないですね…。」

そんなことをゼロは言った。それにフェイトは続けた。

「けど、ゼロ君のせいじゃないから…。」

それを遮るように言った。

「わかってます。…不思議ですね。こんな経験何億回、何兆回あったのに。なんだか泣きたくなりました。けど…。ヒューズさんはい

いい人でした。管理局で六課の事を目の敵にしていな……そんな人でした……」

「……ゼロ君……」

ゼロの頬には涙が流れていた。

「……もっと強くななくちゃいけないですね……。心も、体も……」

「今は泣いていいよ。ゼロ君。」

フェイトはそう言った。それにゼロは躊躇した。

「駄目ですよ。情けないじゃないですか……」

「ううん。そんなことはないから、ね？」

「くそっ。なんで僕は、僕は……」

そして、ゼロは泣いた。

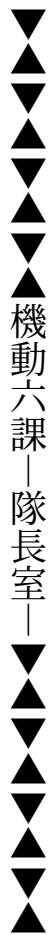
「畜生オ！なんで僕は、俺は！激情に走らせたんだ！クソッ！クソッ……！」

今まで思ってたこと全部、封じ込めたものの全てを吐き出して……

「うあああああああ……！！」

「今は、泣いていいよ。封じ込めたままじゃ、悲しさは、大きくなるだけだから……」

フエイトはそう呟いた。



ゼロが氣を失つてた頃、アリシアとはやては隊長室に居た。

「……アリシアちゃん？」

「はい。」

「もう一度聞くけど、アリシアちゃんはどこに居たんや？」

「アルハザード。」

さつきからこの調子。『アルハザード』そこは、伝説の都と呼ばれ、存在するはずがない。そう思っていたからだ。

「…さっきから、その答えばっか何やけど、ホントに間違いないんやな？」

「はい。」

アリシアはそうきっぱり答えた。

「…なら、誰に連れてこられたんや？」

「……言えません。」

「なんでや？」

「それは、アルスが困るからです。」

「アルス？」

「アルス・フォード。剣術の家の人です。」

「ホントなんやな？」

「はい。そうです。」

これ以上追及しても埒が明かないと言うことで、はやては

「今日はここまでにしとこうか。」

と、話を区切った。

「そうですね。部屋はどうしましょう？」

と質問をつけてお返しした。

「うーん。まあ、連絡するわ。その辺出でてええよ。」

「ありがとうございます。」



「はっ！ふっ！」

そこにゼロは居た。フェイトと医務室を出て、自分の部屋を漁ってたところ、双剣の練習用にとアルスがくれた金属の柄らしきものが出てきたので、インナーになって練習中だった。

「ふっ！やあああ！！」

左の蹴りから、右足を軸にした左右の双剣をたたきつける動作をして、動きを止めた。

「…ふう。まだまだですね。147ですか…。」

147。それは、今の練習の連撃数であった。

「次は、170ですね。よしっ！」

そして、動作を再開する。

「はっ！ふっ！やっ！」

右の斬り払い、左の斬り上げ、そして、両の剣で斬る…。

「…相変わらずだね。ゼロは♪」

と、そこでゼロは動作を止める…。

「そこに居るのはアリシアですね？どうしました？」

「あらら。ばれちゃったか。」

そう言って、アリシアはゼロの所へ駆け寄った。

「それにしてもゼロは勘が強くなったね。」

「勘…。と言うより、きっと風の流れるを感じると言った方が近いんじゃないかね。」

「へえ。どうやって？」

それにゼロは笑って言った。

「属性変化資質の応用ですよ。まあ、僕しかできないでしょうけど。」

それに対しアリシアは言った。

「いいなくゼロは。私そういうのないからさ。」

「まあ、出来ないことはないですけど、ものすっごく疲れますよ？」

「うゝ。…ならいいや。」

逃げましたね。ゼロはそう思った。とその時。

「冷めたっ！」

その時、雪がほろり、ほろりと降ってきていた。

「ああ。そうか。雪降って来てるんだ。それでさっきから肌寒いと思ったんだ。」

アリシアがそう言った。

「寒くないですか？」

そうゼロは聞いた。

「そう言うゼロはどうなのさ？」

アリシアは逆に聞いた。

「僕は大丈夫です。」

ゼロはそう答えた。それにアリシアは悪戯っぽい笑いを浮かべて言った。

「そうかなあ。ちょっと試してみよっと。えい！」

そして、ゼロの首にアリシアの手が当たった。

「冷たっ！」

「あはは。ほらやっぱり我慢してた。」

「悪いですか？我慢してて…。」

「いや、いいんだけどさ。ほら、フェイトが心配しちゃうじゃん？」

「まあ。それは。確かに。」

ゼロはだんだん肯定的な態度を取っていくのに少しだけ笑い、その後「そうだ。」と言って、ゼロに1枚の封筒を差し出す。

「これは？」

「アルスからの手紙だよ。」

「アルスって、アルス・フォードさん？」

「そうだよ。中身は見えないけど、アルハザード出るときにもらって、『ゼロに見せてもらう時に見せて貰え。それ以外は絶対に開けるな。』って言ってたから、結構大事なことなんじゃないかな？」

「そうですか。じゃあ、開けてみますか。」

「早く、早く♪」と言わんばかりに顔を近付け、こちらの方を見る。そして、封を切って、中身を見た。

「…。」

今度はそれを巻き戻しの如く、ポケットにしまった。内容が気になったアリシアがゼロに聞いた。

「どんな内容なの？」

「その前に質問が。」

「何？」

「今日は何日ですか？」

「12月24日。」

「どうしましょう。」

「どうしたの？」

「読みます？」

「うん。」

そして、ゼロから手紙を受け取ったアリシアはその手紙を読んだ。

―親愛なるゼロ・S・アームストロングへ―

久しぶりだな。ストラトス。今回はある連絡事項（あまりたいしたことではないが）を連絡することにする。

一つ目、俺はお前に力をつけて欲しいがためにアルハザードで技術を身につけ、お前に埋め込んだんだ。記憶の仮面、『memory mask』をな。本当にすまないと思っている。今度、謝らせてくれ。けど、『エルザ』と逢っただろう。それで、右手にDの文字が刻まれてるはずだ。ちなみに俺はJ、『正義』を司る紋様がついてる。ちなみに、Dは運命だ。後、F、『自由』の紋様を司る紋様が誰かに付くんだが、誰かはわからないから、お前の方でも探してくれ。頼む。

二つ目、家族の事についてだ。お前の本名は“アルタード・ストラトス”。射術の家の者だ。ちなみに俺は剣術の家。アリシアは魔術の家だったかな？まあ、後は従兄妹の事と、父と母の事だ。父、フエード・ストラトス、母、ライアン・ストラトスが死んでいるのは知っているだろう。その後、お前はある意味ではスカリエッティに

「声が震えすぎです。しかも、あの人手紙の最後に『従兄弟たちに
うまいもの食わしてやれよ♪』って。」

アリシアと二人でため息をつく。

「二人で何話とるんや？」

その時後ろから声がした。ゼロは振り向いた。茶髪でショートヘア。
はやてだった。

「はやてさんですか。何か用ですか？」

「今回はアリシアに用があつてな。部屋は決まったで。」

「うーん。でも、ゼロと一緒に寝ようかと思ってまして…。」

「「は？」」

はやてとゼロは聞き直した。

「だから、ゼロの所に居させてもらおうかなって。」

「あー。そう言うことですか…。って納得できる訳ないでしょう！
！」

「いいじゃん。そもそも、ゼロがもう少し子供だった頃とかは…。」

「ああ！！言わないでください！！」

「なら、一緒に寝よう？」

「うゝ。はやてさん…。」

「私としてはアリシアちゃんにちゃんとした所に泊まってもらいた
いけど…。まあ、ゼロ君なら大丈夫だろうし…。いいわ。」

「やったあ♪」

「ちょ…はやてさん!？」

ゼロは反論しようと思った。けれど、はやては言った。

「隊長命令♪」

「うぐっ!…わかりました。」

「じゃあ、行こうよ。ゼロ♪」

「わかりました。」

▼▼▼▼▼機動六課―ゼロ・自室―▼▼▼▼▼

「ふう。」

「お疲れ様。」

アリシアとゼロはゼロの部屋に置いてあるソファ―に座り、一服し
てた。

「どうしてこうなったんですかホントに…。」

「まあ、いいじゃん。従兄妹なんだし。」

「そういう問題じゃないですよ。」

そうした会話が続く中、ドアをノックする音が聞こえた。

「はい。ちょっと待ってください。」

そして、ゼロは迎えに出た。

「こんばんは。ゼロ君。」

そこに立っていたのはフェイトだった。

「フェイトさん？どうしました？」

「ちょっとね。入っていい？」

「いいですよ。」

「お邪魔します。」

そして、フェイトと共にアリシアの所へ向かった。

「誰だったの？」

「フェイトさんですよ。」

「ふーん。」

何となくでアリシアは踵を返した。

「アリシア。いたんだ。」

「まあね。フェイトはどうしたの？」

「ちよつと話をね。アリシアは？」

「ん〜？泊まりだよ。」

泊まり…？フェイトはダークオーラを漂わせていた。

「ゼロ君？少し、お話しよう…。」

「え？今から話するんでしょう？」

「アリシアから聞き捨てならない言葉を聞いたから…。そのことも含めて…ね。」

あらら。話しちゃったんですね、アリシアさん。そう思い、ある手段を取った。

「妬いてるんですか？なら、フェイトさんも泊まっていいますよ♪」

「え？いや、その、そう言うことじゃなくて…。」

かなり動揺してるのを見たゼロは不敵な笑いを見せて、さらに続け

た。

「なら、三人で寝ます?…♪」

「え? いや、あのね…。」

「まあ、そんなことする訳はないですよ♪まあ、僕はロリコンじゃないですし、安心してください。一緒に寝るって言っても僕は壁に寄り掛かって寝ますから。」

それを聞いたフェイトは安心したせいなのか、ダークオーラを引いた。

「なら、いいよ…。」

そして、少し残念そうに踵を返した。それに、ゼロはまたしても不敵な笑いを見せ、言った。

「泊まりますか?♪」

「え? いや、遠慮しとくよ。明日仕事あるし。」

「そうですか。…あ、そう言えばフェイトさんってクリスマスって何か欲しいものとかありますか?」

「うーん。ゼロ君と一緒に暮らすかな?」

フェイトは顔を真っ赤にしてそう言った。

「え?。」

それを聞き返すようにゼロは返した。

「やっぱり、無理…だよな。」

「今は無理ですね。他には？」

「他には…何か素敵なものが欲しいな。」

ゼロは少し考え、「わかりました。」と返事を返した。その時アリシアがやってきてゼロに言った。

「ねえ、晩御飯まだなの？」

それにゼロは今気付いた様で返した。

「そうですね。何が食べたいですか？」

「何でもいいよ。ゼロの好きなもの作って。」

「はい、わかりました。っていうより、僕料理作ったことないんですよね。」

「じゃあ、今までどうしていたの？」

フエイトがきいた。それにゼロは返した。

「食べてませんよ。」

「それは、いかんやろ。」

その時、ゼロの後ろにはやてが居た。

「はやてさんですか。どうしたんです？」

「いやな。さっきゼロ君の部屋通りかかったらな。なんか面白い会話が聞こえたんで、アリシアちゃんに入れて貰ったんやよ。」

「まあ、いいですけど……。とりあえず、食堂行きます？ここで作り方教わるよりはいいですよ？」

「それなら、行こうか。」

フェイトがそう言い、

「そうやな。」

はやてが続け、

「行こう？ゼロ。」

アリシアがゼロを誘った。

「それじゃあ、行きますか。」

そして、四人は食堂に向かい、夕食を食べ、それぞれで別れた。ゼロとアリシアは自室に戻って寝た。けれど、ゼロは少しだけ眠れなかった。食堂に行く前にフェイトが言った言葉の事を思い出したからだ。

「一緒に住むこと。ですか……。」

そんなことを考えていると、ドアがノックされた。

「はい。今行きます。」

そして、ドアを開けると、パジャマを着たフェイトがいた。

「フェイトさん？　どうしたんです？　そんな恰好で。」

「……一緒に寝たいなって思っで。」

「そうですか。いいですよ。」

「うん。ありがとう……。」

そして、寝室へ来た。

ゼロは壁に寄り掛かり、フェイトはその隣に座った。

「ねえ。ゼロ君？」

「どうしました？」

「私の願い、叶うかな？」

「……叶いますよ。絶対に。」

そう、ゼロは言った。それに安心したフェイトが言った。

「そろそろ、寝ようか。」

「そうですね。」

「お休み。」

「はい。お休みなさい。」

そして、二人は眠りに就いた。



ZERO

「後書きコーナー♪」

わ〜♪

ZERO

「今回のおさらい！」

スターゲイザー

「ゼロさんとアリシアの会話がメインですね。」

ZERO

「そう。そして、この話の題名がなぜ、クリスマスイヴなんでしょうか！」

スターゲイザー

「まさか・・・。」

ZERO

「そう！！そのまさかだ！今回はクリスマス編でござる！！」
スターゲイザー

「ちょ・・・ござる！って、しかも次回も出番なし！？」

ZERO

「残念ながらな。そろそろ時間だ。次回まで・・・。」
スターゲイザー

「RIDE ON!!」

第17話―後悔とクリスマスイヴ―（後書き）

質問、意見。待ってまーす♪

第18話　クリスマスと衝撃の事実とプレゼントー

「・・・朝ですか。そしてクリスマスですし、どうしようね・・・」

朝から悩み事。そして、アリシアとフェイトが同じ部屋で寝ていた。

「ホントに、みんなに何をプレゼントしましょう？」

その時、二人が起きた。

「「ゼロ／君。／おはよう。」」

「おはようございます。二人共。」

ゼロ達は朝のあいさつを交わした。

「・・・あれ？ゼロ。なんでフェイトがいるの？」

「昨日、一緒に寝たいって言ってきたもので、部屋に入れました。」

アリシアは不敵な笑いを浮かべ、楽しむように言った。

「ふーん。フェイトって結構さびしがり屋なんだあ〜♪」

それを言われたフェイトはかなり焦って言った。

「な、ななな何を言ってるの！？アリシア！」

「凶星なんだあ〜♪」

「違うよ！そんなじゃない！ただ、一緒に寝たくて、話したくて・
・・。」

それを聞いたゼロが口をはさんだ。

「フェイトさん。それを人はさびしがり屋と言うんですよ・・・♪」

「もう！ゼロ君まで！！」

「ただの冗談じゃないですか。怒らないでくださいよ。」

笑いを堪えながら、ゼロは言った。そして、ゼロは続けた。

「まあ、今日はクリスマスですね。FW陣二人とはやてさんとなのはさん誘いますか。」

そう言ったところで、今度はアリシアが口をはさんだ。

「ギンガさんも誘わないと。」

「ああ。そうですね♪」

「ねえ、二人とも。何話してるの？」

ゼロはその質問に答えた。

「クリスマスなんで、食事会ですよ♪ちなみにフェイトさんも入ってます。」

「ええ!？」

「驚かないでよフェイト。もう、昨日から決まっていたことなんだし。それと、ゼロ？」

「なんですか？」

「『さん』付けで呼ぶのやめて？」

「無理だと思いますよ？」

即答だった。それにアリシアは返した。

「ふーん。なら、子供の頃の話、フェイトに暴露しちゃおっかなあ
♪」

それに焦りを感じたゼロは止むを得なく言った。

「ああ!! やめてください! アリシア!!」

「ほら、言えたじゃん♪」

「あ。なはは・・・。」

「ねえ、ゼロ君？」

「なんですか? フェイト。」

「いや、何でもない・・・♪」

名前で呼んでくれた・・・♪とフェイトはうれしく思った。と、その時、

「・・・ッ!」

ゼロの頭に激痛が走った。

「「ゼロ／君!」?」

「大げさですね・・・。いつもの事じゃないですか・・・ぐっ!」

そして、ゼロは意識を闇に落とした・・・。



「またここですか。イメージチェンジとかも図ってほしいですよ。」

そこは、闇。真っ暗な、闇・・・。

「まあ、そう言うなって。」

そして、ゼロの後ろから声がした・・・。

「こんにちは。ジョーカーさん。」

「堅えなあ、お前。もうちょっと柔らかくやろうや。」

それに、ゼロは笑いながら怒り、

「それでしたら、頭にスターライトブレイカーニ発分の威力を持つ頭痛で呼ぶのやめてください。」

といった。

「そこまで強かったか？まあ、いいや。記憶やるわ。」

「唐突ですね。」

「まあな。」

そして、影ゼロは額に手を当て、記憶を流しこんでいく……。

「では、聞きましょう。これは何の記憶ですか？」

それに、影ゼロは言う。

「逆に聞こう。前の記憶はどんな記憶だ？」

ゼロはそれに答える。

「スバルを機動六課に送り届けて、管理局に拘束されるまでです。」

そう答えた。それに影ゼロは続ける。

「そうだ。で、その後、管理局で過ごした日々の事。と言っても、ある人物に会うまでだけだな。」

「ちょっと待ってください。ある人物って……？」

それに疑問を抱いたゼロは、影ゼロに聞いた。

「それは、思いだしてからのお約束だ。」

そう影ゼロは言って、ゼロに背中を向けた。

「そろそろ、お姫様達が心配する頃だぞ。」

「それもそうですね。戻ります。」

「ああ。戻れ。じゃあな。」

「ええ。」

そして、ゼロが戻って行った後、影ゼロは呟いた。

「やっと名前と呼ぶようになったな……。見てるか、エルザ……。俺、少しづつでも、強くなってるかな……。？」



そして、ゼロは瞼を開けた。

「おはようございます。二人共♪」

それに気付かずびっくりしたのか、アリシアとフェイトは

「「お、おはよう……。」「」

おっかなびっくりであいさつをした。

「ふう、今の時間は・・・。」

時計を見た瞬間、驚愕した。なぜなら、みんなとの待ち合わせの時間は6:00。そして、今の時間は5:30だった・・・。

「ヤバイ・・・。」

「「どうしたの？」」

「二人とも、早く準備してください。後、三十分で待ち合わせ時間です・・・。」

「「!!」」

二人もそれにはびっくりした。

「とりあえず、アリシアはフェイトの物借りるかしてなんとかしてください。」

「わかった。」

そして、ゼロは笑った。

「自分の中で一番だと思いう服着てきてくださいよ♪」

それに二人は笑って

「了解！」

と答えた。そして、二人は出て行った。

「さて、僕はあの服でいいでしょうね。」

そして、服を選び始めた。



一方、その頃、アリシアは迷っていた。

「どの服にしよう・・・。」

そう、『一番の服』で行かなければいけない。けれど、自分の服以外で、一番の服なんて……。そう考えると、無理！！という結果にたどりついてしまう……。

「ええい！！考えても仕方がない！女は度胸よ！！」

そして、ものすごい速さで服を選んでいった。ちなみに、フェイトは服を選び終え、アリシアを待っていたそうなの……。



そして、フェイトとアリシアが部屋から出てきた。

「遅いですよ。」

ゼロの恰好はと言うと、下はジーンズ、上はインナー。その上に茶色のジャケットを羽織り、髪は後ろで結び、キャップを被っていた。

「ごめん、ごめん。」

アリシアは、黒のショートパンツに半そで。その上にパーカーを羽織っている恰好。フェイトは、白のスカートミドル、そして、黒の長袖を着てきた。

「まあ、いいですけど。行きますよ。」

「あのさ、ゼロ君？」

そこをフェイトが呼びとめた。

「どうしました？似合ってますよ。まあ、案外そう言うところが姉妹らしいという形ですが。」

「?？」

「服の色のチョイスが一緒なんですよ。白と黒で。フェイトさんに至っては、例のドレス着てもよかったんじゃないですか？」

「なっ！」

その時、フェイトの顔が真っ赤になった。

「ちょっと服が同じなのもあれなんで、着替えて貰えますか？」

その後、二人は少しだけ着替えをして、みんなとの待ち合わせ場所に向かった。



「ゼロ君おそいなあ。」

はやてが言った。実は向かってる途中に、「ちょっと買うものがあるから先に行つて。」と言ってどこか行ってしまったからである。

「まったく。誘つていてなんなのよ。」

ティアナが悪態をつく。

「まあ、いいじゃんティア。」

ティアナの怒りをスバルが静める。

「ゼロ君……どこ行ってるんだろう……？」

とフェイトは心配する。と、フェイトにジャケットが羽織られた。

「遅くなりました。みなさん。」

そう、笑顔でゼロは言う。

《わあ!!》

そして、みんなが驚いた。

「いきなり現れんという。心臓に悪いから・・・。」

はやてが胸を押さえながら言う。

「それは、すいませんでした。じゃあ、中に入りましょう。」

「そうだね。」と、みんなが肯定し、中に入った。

「いらっしやいませ。」

「ゼロ・S・アームストロングです。」

「承っております。席はあちらでございます。」

と店員に接客と案内を受けた。そして、席に着いたところでゼロは話を始める。

「実は、今日呼び出したのは、ある連絡事項を伝えるためです。」

「そんなに重要なことなの？」

なのはが聞く。

「いや、そうでもありませんよ。でしたら、隊長室で話しているでしょう？」

「そう、だよね。」

なのはが肯定する。

「話を続けますよ？連絡事項と言うのは、家族関連についてです。」

「家族関連？」

はやてが首を傾げた。

「そうです。これを見てください。」

そして、差し出された手紙をみんなで見た。

「それは、全て本当の事です。クイントさんも桃子さんも僕の記憶にはありますから。」

「嘘でしょ・・・。」

ティアナが顔に驚愕を浮かべた。

「本当です。」

それをあっさり返した。

《嘘でしょおお!!》

その事実を知って、アリシアとゼロ以外は叫んだ。

「じゃあ、じゃあ、フェイトちゃんとゼロ君は従兄妹同士で付き合ってたんか!?!」

そう、はやては聞いた。

「はい。そうですよ。」

あっさり答えた。そこに書かれてた内容はこうだった。

・ナカジマの姓をもつもの。一人は頼もしい性格。もう一人は泣き虫だ。

・ランスターの姓をもつもの。兄が執務官。そして、何があったかはよく分からないが、兄の後を追って、日々精進中。

・テストロッサの姓をもつもの。ジュエルシードを集めていた事のある人物。後、この手紙を渡したのもそうだ。

・八神の姓をもつもの。幼いころ、両親をなくしている。

・高町の姓をもつもの。末っ子で、結構、家で一人の事が多かったらしい。

・・・これだけ見ても、丸わかりだった。

「でも、まあ、わかってよかったですよ。」

ゼロはそう言う。

「て言うか、アリシアはなんで驚かないの？」

フェイトが聞く。

「ん？ゼロに見せて貰ったからだよ。ね、ゼロ♪」

そして、アリシアはゼロに同意を誘った。

「ええ。まあ、僕も驚きでしたよ。そしてその手紙の最後に『なんかいいもの食わせてやれよ♪』と書いてあったので、その通りにしました。まあ、あくまで推測ですので、もし違っててもラッキーだと思っして下さい。連絡事項って言っても、これだけなんですよね。ま

あ、今日は僕の奢りなんで、みんな食べてください。」

と、アリシアに同意し、連絡事項を言い終え、みんなと食事に入
った。

「食べるぞ〜♪」

そして、スバルは準備が整っていた。

「でも、これはこれで、ここの店潰れそうですね・・・。」

ゼロはそう、呟いた。と、その後30分位経って

「ねえ、ゼロさん。」

・・・と、スバルに声をかけられた。

「どうしました？」

そう聞くと、スバルは黙ってしまった。それを見たゼロは

「ここで話したくないことなら、外で話しましょう。」

それで、スバルは頷き、ゼロの手を引っ張って、外へ出た。

「・・・それで、どうしたんです？」

まず、それを聞いた。

「あの、ゼロさん。」

「呼び捨てでいいですよ。僕も『スバル』と呼びますんで。」

そうゼロは訂正した。そしてスバルは口を開いた。

「ゼロ。私、もう少しゼロの事が聞きたいな。」

そして、ゼロは少し間を置いて、ため息をついた。

「駄目・・・かな？」

「いや、いいですよ。ただし、今の時点で覚えてることだけです。」

その言葉に少しだけスバルはうれしく思った。

「うん！ありがとうございます！」

「それで、どこから聞きたいんです？」

「ゼロになる前の事かな？」

「うーん。自分で言っというてなんですけど、それは全部思い出してからですね。今、貴方に言えるのは、貴方と戦った時の事と、その後です。」

「・・・それでもいいよ。」

「なら、話します。その内、みなさんにも話しますから、簡単にね。僕は昔、不死鳥systemの元、ロストログア、『ファルザー』に操られていたんです。一回封印されたんですけどね。そして、破

り、貴方と戦い、貴方を戦闘不能にした。

そして、六課に送り届けた。その後、管理局に拘束されました。

・・・まあ、当然なんですけどね。貴方が起きてなくてよかったですよ。絶対に止めてたでしょうからね。実際に、はやてさんは見てたんですよ。僕が涙を見せて『スバルを宜しくお願いします。』って言ったところをですね。」

全て話し終え、ゼロはスバルを見る。

「もし、ゼロがファルザーに操られてなかったら、一緒に居られたのかな？」

そう、スバルは聞いた。それにゼロは答えた。

「無理でしょうね。ファルザーがなかったら、今の僕はいません。いずれは、僕は元に戻ったでしょう。そして、どうすれば正しい道なのか。どちらに進めばいいのか。わからなくなり、結局。僕は自害していたんでしょうね。」

それを聞いたスバルは、少しだけ、項垂れていた。

「ごめんね。そんなこと言わせて・・・。」

そう、スバルは謝った。

「こちらこそ、御免なさい。貴方を傷つけたのは僕ですし、貴方が謝り、僕が涙を見る必要はないんですよ。」

ゼロはそう言って慰めた。

「うん。ありがとう。」

そして、スバルはお礼を言った。

「そろそろ戻りましょう。みんなが待ってます。」

そう、提案した。

「うん・・・うん！そうだね！」

スバルがそう言って店に戻った。

「ホント、元気が良いっていいことですよね・・・。」

ゼロはスバルが戻った後、そう呟き戻って行った。

＊

そして、1時間ほどで食事は終了した。

「さて、帰りますか。」

ゼロが言い、みんなが肯定した。そして、会計を済ませた。と言っても、ゼロの自腹である。

「あ、フェイト？」

「どうしたのゼロ君？」

「少しだけ、時間取っていただいていいですか？」

ゼロはそう聞いた。

「うん。いいよ。」

フェイトは了解し、

「みなさんちょっと先行っててください。」

と言ってフェイトの手を引っ張って、その場から立ち去った。

「フフ。なんか面白そうやな。」

とはやて。

「二人でどこ行くんでしょうね？」

とスバル。

「ちょっと二人に悪いけど、つけてみる？」

とはやての提案。

「やめようよ。きっと怒るよ？ゼロ君とフェイトちゃん。」

となのはが止めをかける。

「まあ、後で聞けばいいし、いいな。」

とつけることを止めた。

「じゃあ、帰ろっか。」

となのはが言う。

「そうやな。」

とはやてが言って、解散した。



一方その頃ゼロ達と言うと、誰もいない路地裏に来ていた。

「ここなら、はやてさん達にも見つかりませんよね。」

ゼロが確認した。

「そうだね。」

フェイトがそれを肯定した。

「時間を取ってもらったのは、ちょっとしたクリスマスプレゼントです。」

そして、ゼロはフェイトにプレゼントを渡した。

「開けてみていい？」

そうフェイトが聞いてきたので、ゼロは「いいですよ。」と言った。そして、開けて出てきたのは、翡翠だった。

「これって……。」

フェイトが聞いてきた。

「フェイト、一応五月生まれでしょう？だから、誕生石です。素敵なものって言っても、何かないかと思いついて考えたんですけどね。それしか思い浮かびませんでした。……すいません。あまり、気の効いた物じゃなくて……。」

そう、ゼロが謝った。

「いや、いいよ。ゼロ君。私はその気持ちだけでも……でも、お返しはしなきゃね。」

そうフェイトが言った。そして、ゼロの唇とフェイトの唇が触れあった。そして、離れた。

「フェ、フェイト!？」

ゼロはびっくりしてしまった。そして、フェイトは悪戯な笑いを見せ、

「ゼロ君。Merry Xmas。」

そう言った。そして、ゼロも

「ええ。Merry Xmas。」

笑ってそう言った。

NEXT STAGE, ,



ZERO

「後書きコーナー♪」

わっ♪

ZERO

「久しぶりのこのコーナーだね。えっ。今回はお知らせです。どうぞ」

作者

「今回、この章が終わった後、地球に舞台が移ります。そこで、地球出身の魔導師を募集したいと思います。出来れば学生のほうがいいです。―（先生ネタも使いたいですし。）―）その中でFの力を使う人も決めたいと思います。期間はこの章が終わるまでです。宜しく願います。」

ZERO

「はい、作者のお願いでしたー♪」
ゼロ

「と言うことは、なんか、無理やり終わらせる気だな。」

ZERO

「心配はない。ダイジョーブだ♪」
ゼロ

「よく、言いきる自信があるな。」

ZERO

「まあな。それと、1章が終わったら、ちょっとした能力説明とかもやるみたいだ。」

ゼロ

「そうか。おっと、そろそろ時間だな。それでは、次回まで、R

DE,,」

ZERO

「ON!!」

第19話ーライザーⅡクロイツー

ZERO

「前書きコーナー♪」

わ〜♪

ZERO

「唐突だが！ゼロの事を紹介したいと・・・」

ゼロ

「それは1章終わってからだろうが！！！！！」

ZERO

「冗談なのに。今回はいよいよ決戦だ。EWは・・・」
ゼロ

「ちょっと待てえい！！！」

ZERO

「何なんだお前は！！！」

ゼロ

「イークですか！？それとしようりやくしすぎだあああ！！ち
ゃんと最初から、最後まで言え！！！」

ZERO

「わかったよ。魔法少女リリカルなのは 戦場の絆ーendles
s waltzー。」

一同

「始まります。」



「はあ。」

ゼロはいきなりため息をついた。なぜなら朝氣持ちよく起きたと思っただけ、いきなり呼び出されたからである。

「そう怒るなって。」

そう影ゼロは言った。

「ほほう……。貴様、よくまあ、朝氣持ちよく起きたところに、今度はディバインバスター1億発分の威力で呼び出してくれましたね……。」

怒気満々で笑顔でそう言った。

「あら。おかしいな。そう言うつもりはなかったのに……。」

影ゼロはものすごく冷や汗が背中を通るのがわかった。

「なら、わからせてあげますよ。貴様に気持ちいい朝を邪魔された気分をね!!!!」

そして、大剣を出し、突進した。

「だああああ!!! 待て! 待て!」

必死で止めようとする。だが、

「問答無用!!!! 斬り捨ててくれるわあ!!!!」

……無駄だった。

「ぎやああああ!!」

そして、地にひれ伏した。

「さて、こういった記憶が戻るんですか？」

すっきりしたゼロが聞く。

「なら、こいつを・・・。」

影ゼロは拳を構え、

「食らいやがれえええ!!!!」

そして、ナックルを浴びせてきた。

「ごっはあ!!」

そして、まともに食らった。

「それは、はやてに会って、六課に誘われて、入るまでの記憶だ。」

そして、ナックルから立ち直ったゼロが言った。

「なるほど・・・ですね・・・。けど、ナックルはないでしょう。」

と反論した。

「まあ、とりあえず、戻れ。ライザーがかかわる大事みたいだぞ。」

影ゼロはそう言った。

「!・・・わかりました。」

そして、現実へと戻って行った。



「ふぁ。」

そして、体を起こした。

「くそッ! 酷い目に遭いました。」

そして、ゼロは悪態をつく。

『まあ、いいじゃないかマスター。』

とブレイブ・フォースが抑えさせる。

「まあ、そんなに怒ってないんですけどね。」

と、その時アラートが鳴った。

「やっぱり、ジョーカーの言ったとおりですね。シャーリーさん?」

そして、シャーリーに通信を繋いだ。

『ゼロさん。ライザー、来てます。』

そうシャーリーは応える。

「ここから出ます。シャーリーさん。」

『マスター。』

ブレイブ・フォースが心配する。

「大丈夫です。決着をつけるために、クロイツと戦います。」

そう言って、部屋を出て行った。



一方、ロングアーチ。

「ゼロさん。ライザーに向かって、飛行中。」

シャーリーが伝えた。

「やれやれやな。」

そう言うのと、はやては立ち上がり、

「六課全員に告ぐ！これより六課はライザーとの本格的な戦闘に入る！みんな、心してかかって！！」

そう六課に告いだ。それにみんなは、

《了解!!》

と言って答えた。

「グリフィス君。頼むで。」

そうはやてがグリフィスに言った。

「了解です。」

笑顔でグリフィスは応えた。

「おおきにな。」

そう言って、ロングアーチを出て行った。



視点は戻って、ゼロはと言うと・・・。

「見つけましたよ・・・。ライザー。」

ライザーを見つけ、戦闘へと入る前だった。

「今回は速かったな。ゼロ・S・アームストロング。」

そして、ライザーは本名フルネームで呼んだ。

「まあ、今回は決着をつけるためですし。」

そう言って、フォルムをデステイニーに変え、背中に携えた大剣、『アロنداイト』を抜いた。

「余裕そうだな。」

そして、ライザーも太刀を抜刀。構えた。

「そうでもないですよ……。」

そして、ゼロは大剣、ライザーは太刀を握る力を強めて、互いの相手を見据えた。

「『ゼロ・S・アームストロング。／ライザーⅡクロイツ。』」

そして、一迅の風が突き抜ける……。

「『推して参る!!』」

そして、互いの足を踏み込み、決戦が始まった。

＊

「はあああ!!」

先手を出したのはゼロ。アロنداイトを振りかぶり、切り裂く。

一斬一

が、その攻撃は空を斬る。

「・・・。」

ライザーは振りかぶった後の隙を見逃さなかった。

一斬一

鮮血が散る。

太刀には血が付き。

振り抜いた後のライザーは構えを戻す。そう、油断をしないように。この前の様に、邪魔者がいつ来てもいいように。と、その刹那。

「デイベイーン・バスター！！」

一撃一

青い閃光がライザーを狙い、通り過ぎた。

「やはり来たか。」

その視線の先には・・・

スバルがいた。

右手には白い煙が上がっていた。

「ゼロ！」

そして、ゼロに駆け寄った。

「大丈夫？」

と声をかけてきた。

「……ッ！スバルさんですか。僕は大丈夫です……。」

そう、笑顔で答えた。背中には傷があっても、なお、大丈夫という、自分にはたじたじですね。そうゼロは思い、少しだけ、息を吐いた。

「ホントに大丈夫なの？」

スバルが聞く。

「……少しだけ、傷を負いましたが、戦うのに、支障はありません。」

そう答えた。

「私はそういうことを聞いてるんじゃない！！」

そして、スバルが怒気を放ち、言った。

「私は、戦いに支障がないとかじゃなくて、気分が悪いか聞いているの。わかってる？怒ってる意味……？」

それに、少しだけ申し訳ないと思ったゼロは

「すみません。無茶苦茶背中が痛いです。」

謝るのと、今の気分を伝えた。

「全然大丈夫じゃないよね。」

思いっきり指摘されてしまった。

「そうですね!!」

そして、ゼロは持っていたアロンドイトを頭上に構えた。

一閃

かん高い音と共に大剣と太刀が重なった。

「ほう。」

少しだけ、ライザーは感心した。

「ぐう!!」

そして、ゼロは背中では、血が滲んでいた。ライザーは不敵な笑いを
見せ、

「もう少し、力を加えたらどうなるかな・・・?」

ライザーはそんなことを言った。まずい……。ゼロの体がそう体
が直感していた。

「破!」

その時、ライザーの腕に力がかかった。

「はああああ!!」

それにゼロは意識を持ってかれそうになったが、何とか持ちこたえる。

「ほほう。これも耐えるか。ならば、魔力強化・並!!」

さらに、ライザーは魔力強化を使い力をかける。

「ぐああああああ!!」

それにも耐える。早く来てくれ……。ゼロはそう思う。

骨が軋む。

鮮血が吹き出す。そんな感覚を覚えながらも大剣を持つて腕に力を入れ、

「なめるなああああ!!」

一閃!—

太刀を弾く。背中には血が流れ、装甲が赤く染まっていた。

「やはり、並大抵の相手じゃないですね……。」

息も途切れ途切れにそう言う。

「貴様はもう限界の様だな。」

ライザーがそう言う。

「馬鹿言わないでくださいよ。まだまだ、これからです。」

しかし、当たっていることは確か。そう思い、ゼロは剣を握る手の力を強めた。

「ゼロ……。」

スバルは心配そうにゼロを見る。

「少々厳しいですが、はやてさんが来るまで、持ちこたえます。」

そう言葉を紡ぐ。

「なら、一瞬で終わらせてあげよう。」

ライザーがそう言うと、足元に黒い六角形の魔法陣が展開。

「邪悪の化身よ。我に雷鳴の力を……。」

ライザーが呪文詠唱を始めると、空に暗雲が立ち込めた。

「スバルさん。プロテクションを張ってください。」

そうゼロはスバルに言った。

「わかった。」

そうスバルは応える。

「補助プロテクション二重展開。スバル・ナカジマ。ロック。」

そして、スバルのプロテクションにさらに、二枚のプロテクションが張られた。

「ゼロ!？」

スバルはゼロがその行動をしたのに驚愕した。

「・・・我は邪神。」

ライザーは呪文詠唱を終えた。

「やはりですか・・・。」

ゼロはそう呟く。そして、さらに補助プロテクションをスバルに5枚張る。

「ゼロ!!」

スバルが叫ぶ。

「すいません。でも、彼は、魔力量が半端ないんですよ。ライザー・・・・いや、邪神は。」

そうスバルに言う。さらに言葉をつなげる。

「貴方を助けるには、これしかありませんから。」

その顔には、涙が浮かんでいた。

「話は終わったか？」

ライザーは待っていたのだ。その時まで。

「ええ。」

ゼロはそう答える。

「轟け！ダークネス・ボルテックス！！」

そして、術が発動。スバルとゼロに黒い雷が落ちる。

「はあああああ！！」

ゼロはそれを魔力コーティングでカバーする。

「ゼロ！！」

スバルは叫ぶ。だが、その声は届かず。

「セカンド・アタック。」

そして、二度目の雷が落ちる。補助プロテクションにひびが入り、ゼロは

「うあああああああああ！！」

・・・悲鳴しかあげなかった。

「・・・ゼロ・・・。」

スバルはそれに絶句した。見てられないくらい、ひどい有様なのだ。体中から、血が噴き出し、それでも立っているのだから。そして、雷が消え、暗雲が晴れた……。

一倒一

そして、ゼロは力なく倒れる……。

「ゼロ？」

それにゼロは答えない。

「ねえ、ゼロってば。」

なおも答えない。

「……そんな。……やだよこんなの。……こんなのって……」

スバルが涙を流しても、ゼロはただ、ただ、地面にひれ伏すのみ。

「どうだ？ 仲間を失った悲しみは？」

そんな中、ライザーはただ、ただ、笑って、スバルに聞く。

「ライザー……ライザアアアアアアア！！」

そして、咆哮した。スバルはライザーに向かって走り出す。

「ほほう。向かってくるか。」

ライザーはそれを楽しむようにただ待ちかまえる。

「うあああああ!!」

スバルは右腕を振り抜く。が、それをライザーは右手の人差し指で止めた。

「情に流されては・・・本当に大切なものが見えぬぞ!!」

ライザーは空いている左手に拳を作り、放った。

一撃! —

スバルは吹き飛ばされ、地面にクレーターを作った。

「そんな力では、何もかも失う原因だ。」

そして、スバルの頭を掴み、拾い上げた。

「世も末だな。安らかに、ゼロ・S・アームストロングと眠るがいい!!」

もう駄目だ・・・。そうスバルが思ったその時。

「「デイバイーン／サンダー」」

桃色の閃光と金色の閃光が集まり、

「「バスター!!／スマッシュャー!!」」

放たれた。

一撃ッ!!—

その閃光はもう一つ、クレーターを作る威力。

「その程度か？」

・・・が、その一撃をライザーはかわしていた。スバルを掴んだまま。

「ゼロ君・・・。」

フェイトは見つけてしまった。血まみれになり、赤く染まっていたゼロを。

「ライザー・・・。貴方だけは、私が・・・」

フェイトはバルディッシュを大鎌状態にした。ハーケンフオルム

「貴様だからどうする？」

ライザーはさらに挑発する。

「倒します！」

そして、突撃。

一撃!—

「え・・・？」

その時すでに、わき腹に拳が入り、地面に叩きつけられていた。

「「フェイトちゃん！！／＼フェイトさん！！」」

スバルとなのはが叫び、走る。

「まだ遅いな。お前たちは。」

ライザーは二人の首を掴み、地面に叩きつける。

一撃！一

「「・・・ッ！！」」

叫びも出せないほどの一撃。

「ミストルティン！！」

白い閃光が走る。ライザーはそれを二人を離して、太刀で受け止める。

一閃一

そして、太刀が石化する。そこに居たのははやてだった。

「なるほど。石化の能力か。」

内心焦っていた。実際はもっと時間を稼いで、ラグナロク・ブレイカーで吹き飛ばすつもりだったのだが、あまりにも時間が稼げず、やむを得ず詠唱をキャンセルし、ミストルティンで迎撃したのだ。

「へえ。結構、目はいいようやな。」

とはいえ、どうしたもんかな。ゼロ君はもう、死掛けやし。そう思っていた。とその時。

「もう終わりか？今度はこちらから行くぞ。」

そう言うライザーの手には、太刀が握られていた。石化したのではなく、霞がかりの、正真正銘の太刀が。

「！・・・くそっ！」

なんでや！なんで太刀が握られとるんや！！そう思う。

「太刀は一本だけと言ったか？」

そう笑う。そして、瞬時に斬る！

一斬！一

そして、鮮血が散る。

体を捻り、致命傷は避けたが、血が出ている。

「・・・くっ！」

そして、後方に下がり間を空ける。

「ほう、ゼロと言ったか。あいつはこれで致命傷だったんだがな。」

「知っとるわ。」

はやては冷たい視線で答えた。

「もっと骨のある奴じゃないと一人でかかっても死ぬただぞ。」

ライザーはそう言った。はやてはそれに笑い

「なら、お言葉に甘えて……。」

そして、右腕を上げた。とそれと同時に、エリオが出てきた。

「うおおおおお!!」

一閃

ライザーはそれを受け止める。エリオはそれを弾き、その瞬間。

「クロスファイアー……シュート!!」

一撃

無数のスフィアが飛んできた。ティアナだ。ライザーはステップを巧みに使い、全てかわす。

「ブリッツランサー……サンダー!!」

そして、アリシアもランサーを飛ばす。

一撃！一

ライザーはそれらすべてに対応できず、いくつか食らってるものの、余裕そうな顔でそれを見ていた。

「・・・こちらから行くぞ。」

その瞬間、ライザーの魔力が少しだけ上がる。そして、はやて達に冷たい視線を送る。

「・・・っ！」

その視線にはやて達はたじろいだ。と、その時、ゼロの手がピクリ・・・と動いた。

「う・・・ん。ここは・・・？」

そこは闇。ここは、何度も呼び出された、影のゼロがいるところ。

「ジョーカーさん？」

応答はない。どうしたもんか。そう思い、辺りを見渡すと、光が見えた。

「あれは・・・。」

それは、思い出にも似た光。そう、“記憶”。ゼロの失われた、最後の記憶。

「行ってみるしかないですね。」

そして、その記憶へ歩みを始めた。その記憶のそばへ行き、触れる。そうすると、ゼロに吸い込まれ、今までの記憶全てが蘇った。

「・・・これで、全てが蘇りましたね。」

『ええ。そうですね。』

そう言うと、ゼロの目の前にエルザと影ゼロが現れた。

「ジョーカーさん。それに、エルザ。」

「そんなことはいい。」

影ゼロは言葉を切る。

「お前は、どうしたいんだ？」

影ゼロはそう聞く。

「・・・僕は、みんなにこのことを話そうと思います。」

そう答える。

「つまり、恨まれてもいいんだな。その覚悟があるんだな？」

そう影ゼロは聞いた。

「ええ。構いません。恨まれても、憎まれても、殺されかけても・・・」

そこで言葉を切り、息を吸い、少し笑って、

「それが、僕の、自身の覚悟です。」

そう言った。

「いいんだな？何をされようが、自身を曲げないことを約束できるか？」

影ゼロはさらに聞く。

「ええ。もう、“味方を殺す生き方”はやめます。迷いはありません。」

ゼロは答えた。それに、影ゼロは笑い、

「俺も同じ考えだ。最後のピースだ。俺と一緒に、みんなを守ろう。」

そう言って、手を出した。

「ええ。守り切りましょう！必ず！！」

そう言って、手を握った。そうすると、影ゼロは光となり、ゼロの中へ吸い込まれていった。

『良い顔になりましたね♪』

「ああ。行こう。」

『ちょっと待ってください。そんな血だらけで行っても、かえって死に追いやるだけです。回復魔法をかけます。座ってください。』

行こうとしたところに、エルザが止めをかけた。そして、ゼロは「わかった。」そう言って、その場に座りこんだ。

場は戻り、フェイト達は苦戦していた。

「機動六課・・・もう少し、骨のあるものがそろっていると思ったのだがな。」

現状、みんなはボロボロで、もう、打つ手がないほどだった。

「くそっ！」

はやてがそう悪態をつく。はやて自身、どうしていいのか分からな
いから、こんな時、ゼロ君なら・・・。そう考えてしまうほどだっ
た。

「万策尽きたようだな。なら、その金髪の女から片付けよう。」

そして、フェイトに刃を向け、六課全員にバインドをかけた。

「これで、終わりだ。」

記憶がすべて戻ったゼロ。そして、六課の危機。ゼロは間に合うのか？ 次回、一復活の運命――。

第19話ーライザーⅡクロイツー（後書き）

こんにちは。作者です。

なんやかんやで、1章終わりそうです。

煌焰さん。オリキャラありがとうございます♪

2章入るまで募集してます。三人集まれば、何とか2章入れそうです。

因縁キャラも待ってますので、お願いします♪

第20話ー復活の運命ー(前書き)

今回は割と短めです。

第20話―復活の運命―

「これで、終わりだ。」

ライザーはそう言い、バインドをかける。そして、踏み込みフェイトの眼前へ来て、太刀を上段に構える。

《フェイトちゃん！／さん！》

そうみんなが叫ぶ。

「さらばだ。フェイト・T・ハラオウン。」

そして、振り下ろす。

（ゼロ君・・・最後に逢いたかったな・・・。大好きだったよ。それと、ごめん。なのは・・・はやて・・・エリオ、キャロ・・・。六課のみんな・・・。）

そうフェイトが謝罪、それとゼロへの思い、全てを心に思った。

一閃！一

と、太刀はフェイトを斬り裂かず、止まった。

「まだ、諦めんじゃねえよ、フェイト。」

「え・・・？」

そこには、仮面がないゼロがいた。太刀を右手で受け止めて。

「全く、俺はなんでフラグを5本くらい立てる真似をしたんだ？それと、いきなり降ってきて、右手で受け止めたから回復の意味が・・」

悪態を少しだけつき、左足を軸にし右足を引いた。

「ねえじゃねえかあああ!!」

そして、思いつき放った。ライザーは障壁を展開するが、

一撃ッ!!—

意味はなく、地面に叩きつけられた。

「ふう。」

ゼロは、息を少し吐いた。

「ホントにゼロ君なの？」

フェイトがそう聞いてきた。

「んあ？そうだけど。」

間の抜けた返事で返し、その直後。

一刺—

後頭部にバルディッシュの魔力刃が刺さった。

「・・・何してるんだよフェイト。ものすごく痛えじゃねえか。」

3秒後、後頭部を抑え、ものすごく痛がりながらフェイトに返した。

「本物だよね？」

さらに聞く。

「嘘だと思うなら、俺の死に掛けの瀕死体はどこにある？」

ゼロがそう言った途端にあたりを見回した。だが、

「どこにもない・・・。」

そう言うことになった。

「だろ♪だから、俺は真正正銘のゼロ・S・アームストロングなんだよ♪」

そう笑顔で言った。

「けど、待ってな。よし。アンチバインドリング準備完了っと。」

そう言うと、ゼロの足元に魔法陣が展開。

「アンチバインドリングー!!」

そして、ゼロを囲むように青色の輪が出現。術式が発動した途端に

輪が広がり、みんなにかかったバインドが取れた。

「さてと、まず言うことは一つだな。」

そして、息を大きく吸い、言い放った。

「六課のみんなぁ！だだいまあああ！！」

そして、少しだ呆氣をとられてしまったが、

《おかえりなさい！！》

ちゃんと返事は帰ってきた。

「そんなことをしてていいのか？」

ライザーがムクリ・・・と起き上がる。

「まったく。ホントにKYって困るな。」

ゼロが頭を掻きながらそう言う。

「せっかく、みんなと楽しい再会をしたのによお。」

ゼロはそう言い、アロンドイトを抜き放つ。

「まあ、もう少しの辛抱だ。はやて。攻撃許可を。」

構えたままはやてに聞く。

「ええで。全力でやって!!」

はやてはそれに頷き、ゼロは笑い

「よっしゃあ!!」

そう言った。

「行くぞ! FW陣共!!」

《了解!!》

そうゼロが言うと、FW陣とともにゼロはライザーに突っ込んでいった。

＊

「はああああ!!」

ゼロは左手で、ライザーの頭をつかみ、集束砲を二発放つ。

一撃!・撃!—

放ち終わっても、その手は離さない代わりに、

「スバル!!」

スバルに応答を求めた。

「応!!」

それに応え、ライザーの元へウイングロードを伸ばし、右腕を振り抜く。

一撃！一

見事、直撃。だが、ここで終わらない。

「「デイバイン・・・」」

スバルは空いている左腕に、ゼロはライザーと掴んでる左腕にスフ
ィアを作り、

「「バスター！！」」

二人はそれを一気に放つ。

（エリオ！準備は大丈夫か！？）

ゼロは念話を飛ばし、エリオに聞く。

（OKです！ゼロさん！！）

エリオはOKと返した。

（じゃあ、行くぞ。）

そして、ライザーを上を斬り上げ、滞空させる。

「「うおおおおおおお！！」」

ゼロは滞空したゼロを上を斬り上げ、エリオは下を斬り込む。

一斬ッ！！—

そして、今度は逆。

「はあああああああ！！」

一斬ッ！！！！—

さっきより強い威力で、さらに、水平に斬り込み、

一斬ッ！！！！！！—

そして、ティアナのクロスファイアーシュートが直撃する。

（ツンデ・・・じゃなかった。ティアナ、ナイス！！）

そして、念話を飛ばす。

（うるさいわね！！今は戦闘中でしょ！！）

ティアナが返す。

（と言うより。今、ツンデレ娘って言おうとしたでしょ！！）

さらにティアナが繋ぐ。

（当たり前だ。それより、アリシアとフェイトは準備できてる？）

それを肯定し、返事を聞く前に聞いた。

（（ばっちりだよ!!））

二人は応える。

「エリオ！次でラストだ!!」

エリオに言う。

「了解です!!ゼロさん!!」

エリオも応える。

「「はああああああ!!」」

「斬ッ!!!!!!!!!!」

エリオとの最後の一撃を決め、アロنداイトをしまい、アリシアとフェイトが即座に斬り込む。

「「はああああああ!!」」

「斬・斬・斬・斬・斬・斬・斬・斬!!!!!!!!!!」

無限にも広がる連撃。その中、ゼロはブレイブ・フォースとスターゲイザーを呼ぶ。

「ブレイブ・フォース！スターゲイザー！」

そして、魔法陣を展開。

「「無限連斬奥儀・・・」」

そして、一気に切り抜く。

「斬!!!!!!!!!!!!」

「「霸王獄連斬!!!!」」

「閃!」

そして、雷がライザーに落ちる。

「SEED!」

そして、瞳の色が深紅に変わる。

「SEED、IS! SEEDリンク! 魔力補助開始!!」

そして、はやて、アリシア、なのは、フェイトに緑の光が伸びた。

「手加減すんなよ!!」

そして、みんなに言う。FW陣はライザーをバインドで全力で束縛する。

《了解!!》

「バースト!!」

ゼロが叫ぶ。その瞬間。E W S y s t e m が作動し、砲撃の威力が一気に上がる。

「「「「はあああああああああ!!!!!!」」」」

そして、全てを使い切る。

—爆ッ!!!!!!—

「やったのか・・・?」

ゼロが言う。煙が晴れ、ライザーが現れる。もう、立つ気配はない・・・。

「やったみたいだね・・・。」

アリシアが言う。

「やった・・・。」

「「「私たちの勝ちだ!!」」」」

ゼロ以外の四人が言う。だが、ゼロは考えていた。

「おかしい……。彼はなぜ、バインドを破らなかった・・・?」

と、その時、ライザーの指が動いた。

「!..、まだだ!! みんな! 構えを解くな!!..!」

そう言うのと、ゼロはフェザーランサーを展開。某Vガン○ムのフィンファン○ルの様に、みんなにフィールドを張った。

「...来る...!!」

とその瞬間。黒い砲撃がゼロの足を掠めた。

「くそッ! 足部フレームアウト!!」

「了解!」

そうすると、足についてた装甲が外れ、外れた装甲は消えた。そう、何かに浸食されたように...。

「やっと、お出ましか。はやて。みんなを脱出させてくれ。」

「いや...。」

「はや...て...?」

そこに居たはやてはやての様ではやてではない。左足に紋様がつき、そこに立っていた。

「いやあああああああ!..!」

そして、咆哮。

「まずいな・・・一番恐れてた事態だ・・・。くそッ！ブレイブフ
ォース！スターゲイザー！！」

「了解です！！」

そして、ゼロは言い、二人とユニゾンを解除し、はやてに向き直る。

「アウトフレーム許可。」

そして、二人はアウトフレームになった。

「時間を稼ぎます！その間に！！」

二人はそう言った。

「ありがとう！他のみんなも早く離脱しろ！！」

そう告げた。

「待って！ゼロ君これって一体！？」

なのはが聞いた。

「説明は後だ！！早くしないと取り込まれるぞ！！」

ゼロはものすごい剣幕でそう返した。

「・・・わかった。」

なのは言った。

「ちょ・・・なのは!？」

フェイトが驚いた。

「ゼロ君。ホント、ただ事じゃないみたいだった。」

「だったら尚更!!」

フェイトは声を荒げる。

「ごめん、フェイトちゃん。けど、ここに居たら、かえって足手ま
といだと思う。だから、今はお願い・・・。」

なのはは泣きそうな顔で言った。

「なのは・・・。」

そして、フェイトは唇をかむ。

「行こう。フェイトちゃん。」

「うん。わかった。」

フェイトは頷く。そして、小さく「死なないでね・・・。」そう呟
くのだった。

＊

そして、ゼロはなのは達が転移したのを確認して言った。

「行ったな。よし。」

「いやああああああ!!」

はやてはまだ咆哮する。

「まだ、成りかけだ。今なら!! デステイニーバースト!! 阿修羅!!」

そう言うと、全身が白く光った。

「はああああああ!!」

そして、左手で、はやての腹を殴る。

「ああああああああ!!」

「すまん。はやて……。肉体回路接続、精神回路接続、神経回路接続。ジャック開始。邪神の卵を探し出せ。」

そして、はやてに魔力を流す。

「ああああああああ!!」

「!!、見つけた!! 内部侵入! ジャック回路接続! E W s y s t e m、防御型!!」

そして、ゼロの背中から、白く輝く翼が生え、はやてとゼロの二人

を包んだ。

「ブレイブフォース。スターゲイザー。行ってきます。」

「行ってらっしゃいませ。我が主／＼ゼロさん。」

そして、はやての中へと入った。

・・・果たして、ゼロははやてを救えるのか？そして、ブレイブフォースとスターゲイザーの運命はいかに。次回、一はやてのココロ。

—

第21話―はやてのココロ。―

ゼロははやての中に入った。

「ここは……。」

そこは闇。仮面をつけてた頃、ジョーカーに何度も呼びつけられた場所。そこに類似していた。

「何だろう？この締め付けられる思いは……。悲しき、寂しき、悩み、切なさ……。」

思い描かれたものを上げていく。

「……そうか。はやてはこんなに……。」

そう、感情の重さで、締め付けられる思いがあったのだ。

「行こう。みんなも待ってるし、はやての相談も乗りたいし。」

そして、感情の重いほうへと、少しずつ、歩き始めた。

一方、その頃はやては……。

「いやや。なんでやなんで……。」

底知れぬ恐怖。それに、少しずつ、脅かされてきたのだ。

「捨ててしまえばいい。思いなど。そうすれば、これから助かる。」

その時、声がした。

「誰や!？」

はやては呼んだ。

「私だよ。」

そこに現れたのは、もう一人の自分。

「なっ!」

驚きが隠せない。そして、身がたじろいだ。

「驚くのも無理はない。私は貴方の負の念だからな。」

負の念。邪神の卵は答える。

「どういうことや? 私は、負の念なんて抱いてない。」

はやてはそう言う。

「負の念を抱いていない? 笑わせるな。」

邪神の卵はあっさりそれを否定する。そして、さらに続ける。

「人間、誰でも悲しみ、怒り、憎悪・・・そんなものを絶対に抱く

はずだろう？現に今、フェイトとかいう小娘に自分の恋した人を盗られて悔しさを抱いているだろう？」

「そ、それは……。」

邪神の卵は不敵な笑いを見せ、さらに続ける。

「私と共に来い。そうすれば、フェイトとかいう小娘を見返せるぞ。」

はやてを誘う。

「そう、したい。けど、私は……。」

だが、いまだ迷う。このまま、でいいのか。けど、自分はフェイトちゃんに愛する人を取られた。憎いけど、悔しいけど……。そんな思いが交錯していた。

「さあ、来い。」

さらに誘う。と、その時

一閃

一筋の砲撃が突き抜ける。

そこに居たのは、ゼロだ。左腕に白い煙が上がっていた。

「やっと見つけた。はやてを返してもらうぞ。邪神の卵……！」

「ゼロ……君？」

「ちっ！！邪魔が入ったか！！」

「そうさ。俺は、はやての友人。それでもってお前の邪魔者だ。邪神。」

「何で来たんや！！私の事なんてどうでもいいのに！！」

ゼロはそれを聞いた途端、はやてのそばへ行き、

一殴ッ！！！！！！

思いっきり殴った。そして、胸ぐらをつかみ、

「お前、ふざけるなよ！！何が“私の事なんかどうでもいい”だ！！俺は！その事を前にお前に聞かれた！そしたらなんて答えた！？今のお前と同じだ！けど、それを正したのはどこのどいつだ！？お前だろ！！」

・・・俺は、その時にお前の悲しさを見た気がするんだ。その時、俺は誓った。夜天の書を明るく照らす、蒼い月になるって！！だから、俺は曲げない。自分の決意を、思いを！！・・・確かに、お前にとって“自分より他人”だろ？でも、それは、六課の奴等はみんなそうだ！！お前を大切に思ってる奴等がいる！お前を頼りにしてる奴等がいる！！俺は、お前の支えになりたい！！お前と一緒に居たい！！」

そう言った。

「ゼロ・・・君？」

そして、はやてを離し、

「だから・・・一人で死ぬとか、そう言うこと言うなよ・・・はやて・・・。」

そう言って、抱きついた。その顔には涙があった。

「ごめんな。ゼロ君・・・。」

はやてはそう言うのとゼロの頭を撫でた。

「こっちこそごめん。でも、さっさと片付けるもの片付けますか。」

そして、その場を立ち、邪神に向き直る。

「私も手伝うよ、ゼロ君。」

はやてがそう言って、ゼロの隣に立つ。

「ありがとう。けど、一人でやりたい。」

「・・・わかった。」

はやては悩んだ。けど、やはり任せることにした。

「ありがとう。じゃあ、この中に居てね。」

そう言うと、補助プロテクションを展開し、はやてに張った。

「邪神。俺はお前を討つ。」

「ふはははははは！ お前ひとりでか！？」

その言動に嘲笑う邪神。

一斬ッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

邪神は斬り裂かれた。

劍にしたたる鮮血。

バランスを失い、倒れ込む邪神。

ゼロは目に見えないほどの速さで、居合斬りをお見舞いしたようだ。

「がふッ！！貴様あああああ！！」

邪神は右腕を剣状に形を変え、ゼロに斬りかかる。それを身を屈めて、避け、居合斬りをする。

— 斬ッ！！！！ —

先ほども弱い一撃。

それでも、邪神の身は揺れる。

「ふお あああああああああああああ！」



ゼロはそれを屈む、受け流すなどして、全て防いだ。さらに怒りが募った邪神はもっと激しく打ち込む。

「あああああああああああああああああああああああああ

あああああああ!!」

「無駄だ。もう、お前の負けだ。」

それでも邪神は攻撃することを止めない。

「ぐあああああああああああああ!!」

「・・・阿修羅。」

その中、ゼロは右腕に浄化の魔力を込め、太刀を握り、間を空ける。

一斬ッ!!!!!!!!!!!!!!

そして、二人は、一閃を刀を剣を交えた。

少しの間。太刀にはひびが入り、邪神は倒れた。

そして、邪神は消え去った。ゼロは太刀を鞘に締まった。

「ふう。」

その時、補助プロテクションが消え、景色が青空になった。

「ゼロ君!!」

はやてが走ってくる。

「ん? あ、怪我とかないか?」

ゼロは一応聞く。

「うん。大丈夫。ゼロ君は？」

はやてが逆に聞く。

「俺も大丈夫だ。」

「あんな。ゼロ君？」

「ん？どうした？」

はやてがもじもじしながら聞く。

「ここのなら、キス・・・してもらっていいかな？」

「・・・へ？」

ゼロは、その言葉に呆気を取られた。

「駄目・・・かな？」

はやてがさらに聞く。 ああ！！かわいいなコンチクショウ！！とか
思いながら返した。

「いいよ。」

「ホンマに？」

「ああ。けど、フェイトには内緒だぞ。」

「うん。」

そして、二人の唇が触れあう。そして、離れる。そして、はやては顔を真っ赤にして隣に座る。

「ああ。それとな、はやて。」

「どうしたの？」

ゼロの方は向かないが、はやては返す。

「さっき、お前に言った言葉、あれ、ホントの事だ。それに、お前の事嫌いじゃない。と言うか、好きだ。」

「え・・・？」

はやては聞きなおすように首をかしげる。

「さあ、行こうか。」

「ちょっと、今の言葉もう一回言ってくれへんか？」

はやてがもう一回言うように催促する。そして、ゼロは言う。

「だから、俺はお前の事が好きなんだよ。だから、支えたいし、一緒に居たいんだ。」

そして、そして、二人とも顔を真っ赤にする。

「行こうか。」

ゼロが言う。

「そうやね。行こう。」

そして、はやてが手を握る。そして、ゼロの顔が赤くなる。

「……。い、行くか。肉体回路復元、精神回路復元、神経回路復元……。」

そして、ゼロの足元に白の魔法陣が展開。

「現実への扉よ……。開け!!」

そして、白く光る扉が現れる。そこへ二人は入って行った……。

＊

「……。現実に戻ったか。」

ゼロが瞼を開き、言う。

「そう、みたいやね。」

はやてが言う。そこで、E W s y s t e mを解除した。そこで見たもの。それは……。

「!!、スターゲイザー!! ブレイブフォース!!」

血まみれになって倒れている二人だった。ゼロはそこへ駆け寄り、ブレイブ・フォースを抱き上げた。

「大丈夫か！？返事をしろ！」

「ぐっ！・・・・・・・・マスター？」

「そうだ。ゼロだ。」

「マスター。私より、スターゲイザーを・・・・うぐっ！！」

ブレイブ・フォースの肩から、血が滲み出ていた。

「ああ。今は、六課に戻って休め。」

「わかりました。マスター。」

そう言うのと、ゼロは転送術で、ブレイブ・フォースを転送した。

（ゼロ君！スターゲイザーは私が転送した！！）

はやてから、念話が来た。

（ありがとう。ブレイブ・フォースも俺が転送したから大丈夫。）

（それは良かった。早く離脱しよう。）

（はやて・・・・すまん。先に行ってくれ。）

そう言うのと、はやての表情が変わる。

（どういうことや？）

わ〜♪

ZERO

「なんか、このノリが久しぶりな気がする〜♪・・・あると思います。」

ゼロ

「さっそく乗るな。ってか古いよ！それ、古いよ！！」

ZERO

「ウザイ。」

ゼロ

「なぜにシャニっぽく言ってるんだよ！！」

ZERO

「お前、邪魔なんだよ。」

ゼロ

「シャニネタやめろ！！」

ZERO

「わかったよ。今回のおさらい。」

スターゲイザー

「フェイトさんがかわいそうです。」

ゼロ

「おわっ！！いつの間に！！」

スターゲイザー

「そんなことはどうでもいいです！！フェイトさんがかわいそうです！！確かにクリスマス編で、キスはしてましたけど、二股じゃないですかあ！！！！」

ゼロ

「だああああ！！わかったわかった。please wait！
please wait！」

ZERO

「あのくらいが二股した男には、ちょうどいいんですよ♪」

ZERO

「読者のみんなも、二股したら、あんな風になっちゃうゾ♪」

スターゲイザー

「女の怒りは怖いのだ♪」

ZERO

「ここで、作者のお知らせ。

『ども♪作者です♪

この前、オリキャラの件は話しましたよね？あれ、実は3人いないと2章入れません。

え？何故かって？それは3人いれば、ボケ、天然、ツッコミが整うじゃないっすかぁ♪

と、言う訳で、お願いしますm（　　）m

あと、ウチのキャラのオリキャラ出演—（後書き等のおまけコーナーにおいてですが。）をして欲しいって方は、感想の欄に書いて送ってください。ググってください。↑ググれねェよバカ野郎。

と、言う訳で、長くなりましたが、お願いしますm（　　）m。』
だとさ。ってか、土下座、二回もしてる。」

スターゲイザー

「相当のヘタレみたいですな。」

ZERO

「何？カナンみたいなのと一緒にするな！！だってさ。」

スターゲイザー

「すみませんでした。そろそろ時間ですね。」

ZERO

「ん？ああ。だな。それではこのへんで。RIDE・・・」
ゼロ以外

「ON!!!!」

＊

一方、ブレイブ・フォースの処置の開始時、機動六課では……。

「ゼロ君……大丈夫かな？」

フェイトが心配していた。

「大丈夫だよ。きっとね。」

冷静になのはが言う。

「なのはは、ゼロ君の事心配じゃないの？」

フェイトは言う。

「心配だよ。確かに。」

なのははフェイトに返す。

「なら、助けに行こう？」

フェイトはなのはを誘う。

「助けに行きたいけど、それとこれとは、違う。心配だから、助けに行くなんて……。」

なのはは続ける。

「フェイトちゃん。さっき私は言ったよ。足手まといかもしれない

って。」

「だけど、だけど！私にも何かできるかもしれない。そうは思わないの？」

「思うよ。」

「だったら！！」

「でも、今の状態じゃ、足手まといだと思うの……。それは、ここに居るみんなが同じ気持ちを持ってる……。」

なのは泣きそうな顔で言った。

「なのは……。」

「確かに、フェイトちゃんの気持ちもわかる。けど、それで無茶したらゼロ君が一番悲しむと思うよ？」

「そうや。今言っても足手まといや。」

二人が振り向くと、そこにははやてがいた。

「「はやて！／＼はやてちゃん！」」

「ここへ来る前に監視用のサーチャーを置いてきた。これで、ゼロ君の様子をみようや。」

ね？とはやてが促す。

「来たれ、三芒星！！砲撃、白虎！！」

それは、魔法陣へと変化し、そして、その三芒星から砲撃が放たれた。

— 擊！！ —

直撃。邪神の体を揺らす。揺らすだけ。倒れもしないし、むしろ余裕なように。

[illegible]

さらに叫ぶ。

「余裕つてところか。揺らすだけなら三芒星で大丈夫だな。なら、一気に五芒星だな。」

そう言い、五芒星を描く。

「来たれ、五芒星！！砲撃、白虎！！」

— 擊ツ！！ —

そして、大きく揺れる。危うく邪神はバランスを崩しそうになった。

G
A
A
A
A
A
A
A
A
A
A
A
!

そして、砲撃を乱射。ゼロはソニックムーブで、死角である、足元へ行き、回避。

「よし。来たれ、七芒星!! 月光の魔導書!!」

そう言い、七芒星を描くと、その中に手を突っ込み、本を取り出した。はやての持っている、夜天の書とは違う、白い本だった。そして、飛行魔法を使い、邪神とかなりの間を作った。

＊

一方六課の方は・・・

『月光の魔導書!!』

「「「え?」」」

はやて達は驚愕してしまった。なぜか。それは、魔法陣の中に手を突っ込み、夜天の魔導書によく似た、月光の魔導書を取り出したからだ。

「はやてちゃん。何か知ってる?」

なのはが聞く。

「いや、わからへんなあ。」

はやては頭を使って考える。

「何してるんですか?」

その時、声がした。アリシアだ。

「アリシアちゃん。これ、何かわかる？」

そして、はやてはアリシアに映像を見せた。

「・・・へえ。ゼロ、これ使えるようになったんだ。」

「アリシアは何か知ってるの？」

フェイトが聞く。

「うん。フェイトが生まれてないときに、一回、ゼロに会ったことがあるんだよね。それで、母さんの所に戻るときに私が『ゼロは訓練すればまだうまくなるからこれあげる。まだ名前付けてないから名前はゼロが考えていいよ。』って言って渡したものがこれだったと思う。・・・多分。」

「アリシアちゃん。多分ってないと思うよ・・・。」

なのはがアリシアの答えに少しだけ苦笑いしながら言う。

「いや、ホントに多分なんだよ。確か私が渡したのはもっと青みがかった色のはずなんだよね。それが白いつてことは違う可能性もあるんだよ。それに、あの手の魔法は母さんでも、私でも見たことがないんだよね・・・。」

そうアリシアは映像を見ながら答えた。

「どういことや？アリシアちゃんでも見たことのないなんて・・・。」

はやてが顎に手を当て考え始めた。

「作りだしたんだろうね。きっと。こんな時のために。」

フェイトが言う。

「もしかして、術式は完成してるけど、まだ使ったことがないんじゃないかな？」

なのはが不意にそんな事を言う。

「マスターの事ですから、その可能性が高いでしょうね。」

また、新たな声。振り向くと、左手に包帯を巻いている、ブレイブ・フォースがいた。

「ほんとうなの？」

なのはが聞いた。

「ええ。影で、ものすごく努力してますからね。」

「」「そうなんだ・・・。」「」

ブレイブ・フォース以外が肩を落とす。

「私もご一緒してもよろしいでしょうか？マスターが何を考えているのか、知りたいですし。」

ブレイブ・フォースが言う。

「やっぱり、接近戦は無理か。向かないもんな。接近戦での芒星system使っての戦いは。」

そう呟き、

「斬ッ！！！！」

邪神はそれを弾く。

ゼロは一太刀入れた後、邪神の射程圏外にまで飛んだ。

「硬えな。やっぱり、強化しかないか。けど、鎧着けなきゃさすがに危ないな。」

そう言うと、月光の魔導書を開く。

「月光よ。月の光で地を照らし、闇から守る鎧と成れ……。」

そして、ゼロは光に包まれ、

ムーンライト・アーマー
「月光の鎧。」

光が晴れ、白い甲冑を纏って出てきた。

「月光よ。光は剣に宿りしホノオ。闇を斬り裂く剣と成りて、我に力を与えよ。」

魔法陣が展開。そして、魔力エネルギーが月光の剣に集まった。

「月光の強化。」

「GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA
AAA!」

邪神は触手を砲撃台にし、砲撃をしてきた。

「マジかよ……。」

ここは避けず……全て受ける!! そう思い、術式を展開した。

一撃ッ!!!!!!!!!!!!!!

「あぶねえ。大火力だな。これ。」

そう言って出てきたのは、ゼロだった。

「GNフィールドはっというてよかったよホント。……まあ、てのは冗談だ。しかし、月光の鎧も硬えなあ。」

そう言って、叩く。

「さて、今度はこっちの番だな。」

「YARERUMONONARAYATEMIROOOOOO
OOOOOOOOO!!」

「なんか、喋ってねえかこいつ!!?」

そう言うツツコミも入れながら接近して、剣を構える。

「一式、月光斬、白虎・・・満月!!」

そして、円を描く様に斬り抜く。

一斬ッ!!!!!!

斬ったところが白く光り、鮮血が噴き出す。

「UGAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!」

雄叫びをあげる邪神。口に閃光をため、放つ。

「クソッ!!」

一撃ッ!!!!!!

ゼロは横に飛びギリギリ回避した。

「フィールド系はあるわ、体は硬いわである意味チートだな。邪神って。」

どうしようか?とゼロは考えていた。今の魔力量で撃てるのは今の技が最大。とすると、俺に勝ち目はない・・・。ゼロは歯ぎしりをし、剣を握る手の力を強めた。どうすればいい!どうすれば!そう思い、ゼロに焦りが見え、気付いた時には、触角が目の前まで迫っていた。

「クソッ!!」

一撃!!!!!!

触手による攻撃は外れ、ゼロは上空に逃げた。そして、はやてがいたら、どうしただろうか？　そう考える様になった。

[G
U
A
A
A
A
A
A
A
A
A
A
A
A
!]
!

そして、邪神が叫び、全ての触角の閃光がこちらを向いた。同時に邪神の口が開き、そこにも閃光が溜まる。

「はあ、はあ。クソツ！！」

その砲撃に意識を集中。・・・したせいで、後ろから迫る触角に気付かなかつた。そして、ゼロは死を覚悟し、目を閉じた。すまん。みんな・・・。そう思い。

—斬!!

・ ・ ・ が、その斬撃は当たらなかった。
むしろ、触手の方が斬られたのだ。
そこに居たのは ・ ・ ・ 。

「フェイト……？」

フェイト・T・ハラオウン。正しく、その人だった。

「ホントに 無茶するな。生きて帰る。諦めるなって、いつもゼロ君から言われてたのに、ゼロ君が無茶して、死んだら、みんなは誰の教えで頑張ればいいのか・・・？」

フェイトはそう言い、一発ビンタをした。

「・・・ごめん。ホントに・・・。」

そう言って、フェイトを抱きしめる。

「馬鹿・・・。」

「すまん・・・。ホントに!!」

そして、フェイトをお姫様だっこし、触手からの攻撃を回避した。

「ゼロ君・・・?」

「はは。もうちょっとで降ろすから大丈夫。」

「うん。」

とは言え、フェイトの顔は真っ赤であった。

「距離的にここなら・・・ん?」

「どうしたの?」

「いや、六課の連中がいた様な気がして・・・。」

「いるよ。」

「居るんかい!!!!」

その答えに思わず突っ込むゼロ。だが、それとは対照的に少し笑っ

ていた。

「まあ、ちょうどいいや。」

「そろそろ、降ろしてくれないかな？」

「あ、ごめん。」

そして、フェイトを下した。

「じゃあ、第二幕の始まりだな。」

「うん。」

「私たちもいる。」

なのはが言い、ゼロは後ろを振り向き、笑う。

「すまんかったな。色々。」

「そうだよ。私たちはチームなんだからさ。機動六課って言う名前のね。」

フェイトが言う。

「だから、協力は当たり前や。」

はやてが継ぎ、

「行くよ！みんな！」

なのは言う。

《応!》

そして、みんなが答える。

「いい感じに纏まったところで、行こうか!」

「「「うん!」」」

「・・・の前に。」

「「「え?」」」

ゼロが呼びとめたのに、はやて、なのは、フェイトの三人は止まり、
他はすっ扱けた。

「はやて。夜天の魔導書、貸してしてくれ。」

「うん。わかった。」

ゼロは夜天の魔導書を借りると、月光の魔導書を近づけた。その時、
二つは強い輝きを放った。

「ビンゴだな。」

そう言うと、ゼロは呪文詠唱を開始した。

「夜天よ・・・月の光を浴び、月天に成れ!!」

そして、二つの魔導書は一つになる。

「来たれ！月天の魔導書！！」

そして、水色の一冊の魔導書がゼロの手に降り立つ。

「うまくいったな・・・。」

「ねえ、ゼロ君？」

フェイトが聞く。

「今の二つはどうなったの？」

「合体した。」

簡潔に答える。

「はやて。これを使え。」

そして、月天の魔導書をはやてに渡した。

「でも、ええんか？」

「いいよ。後、俺がトップに出て、囀になるから補助してくれ。」

「駄目♪」

なのはがとても冷たい笑いで言った。

「やっぱりか。なら、一氣に行こう。一応、念を入れて三芒星の守護をみんなに入れる。」

そして、三芒星を描き、術式を展開。

「来たれ三芒星。守護の構え。」

そして、みんなのデバイスマスターの危機が訪れた時に強化プロテクションが展開するようにした。

「これでOKだな。行くぞ。」

《心！》

*

「SINEEEEEEEEEE!」

「こいつ、どっかかんで成長してるよな。」

そう言いつつも、剣で、斬り抜く。

斬！！

白く光り、傷がつく。

「なんか、ホントに硬いな。しょうがない。みんな、魔力溜めとけよ。」

そう言い、剣を上段に担ぎ、魔力を込める。

（いいか、みんな。俺が傷口を作る。合図したら、みんなで一斉に放て。）

（ゼロ君はどうするんや？）

（俺も超至近距離から放つよ。けど、めっちゃ溜めとけよ。通らなかつたこともあるらしいからな。）

（了解や。）

そして、みんなとの念話を切る。

「さあ、これで終幕だ！！来たれ、五芒星！！」

ゼロの足元に魔法陣が展開。

「魔力強化・・・阿修羅！！」

そして、術式を発動。刀身が一層白く輝きを放つ。

「月光閃！一式いいいいいい！！月光裂襲斬！！」

振り下ろす。

一斬ッ！！！！！！！！！！

そして、邪神の傷を開き、鮮血が飛ぶ。

白く光り、その傷口を修復しないようにしている。

「みんなぁー!!」

ゼロが叫ぶ。

「了解や!」

とはやて。

「「うん! わかった!!」」

フェイトとなのはが息を合わせ、

《了解!!》

後の人たちも続く。

「全力全開! スターライト・・・／雷光一閃! プラズマザンバー・・・／響け! 終焉の笛! ラグナロク・・・／右手に正義を、左手にさばきを!! 一撃制裁! ジャッチメント・・・」

アリシアを含めた四人が術のため、

「「「ブレイカー!!」」」

一気に放つ。

「翔ける! 隼!! 轟天! 爆碎! ギガントシュラーク!! 〃オメガ・・・エンド!!」

そして、術式が完成し、その中に手を突っ込んで、一つの刀を取り出す。

「阿修羅の剣!!」

そして、構え、突撃した。

「G U A A A A A A A ! S I N E E E E E E E
E E E E E E E E !」

そして、触角を伸ばし、

—斬!—

斬る。

そこから、感染が始まり、黒く変色してきた。

「俺は！みんなを守るためなら！どんな無茶も！！」

感染は、残すは左目のみ。だが、ゼロは突きの構えを取り、

「やり遂げて見せる！！！！！」

— 刺ッ！！！！！！ —

そして、**刺した。**

そこから白い光が溢れ、

邪神もゼロに向かって攻撃する。

なのはがとっても寒い目で言ってきた。口は笑っているが、目はとても寒そうな目だった。

「それは、勘弁だな。今の状態じゃ体力は回復しても、魔力は回復しないから、また今度な。」

「でも、受けることは確定なんやな。」

はやてが言った。

「まあな。俺は無茶したのは確定で、その償いって言えばいいのかわからんけど、なんかしなくちゃならないって気持ちはあるから。」

そうゼロが言う。

「今は立てる？」

フェイトが聞いてきた。

「生憎、今は体力切れだから無理。魔力も切れてるから、明日は休みが欲しいところだな。」

そう冗談交じりで言った。

「わかったよ。いいでしょ？はやて。」

フェイトがはやてに聞く。

「うーん。そうやな。今日はみんな頑張ってくれたし、明日は休み決定やな。」

はやてが苦笑いしながら言う。

「だってさ。良かったね。」

フェイトが笑いながら言う。

「そうだな。フェイト、肩貸してくれ。」

ゼロがフェイトに肩を貸してくれるように頼む。それにフェイトは「わかったよ。」と言って、肩を貸し、みんなで六課に帰った。



ZERO

「後書きコーナー♪」

わ〜♪

ZERO

「今回のお話のおさらい!!」

スターゲイザー

「六課の総攻撃ですね。」

ZERO

「前半の方はゼロが全部持ってたけどな。」
スターゲイザー

「そうですね。」

ZERO

「後は、月光の魔導書？」
スターゲイザー

「そうですね。ゼロさんは「あれは武器と防具しか入ってねえよ。」とか言っていましたけど、嘘ですね。」

ZERO

「まあ、詳しくは、次回かその次かにやるって、ああ。次回はもう作ってるんだっけ。」

スターゲイザー

「どんなお話しなんですか？」

ZERO

「まあ、魔力枯渇で、ゼロが女体化して、はやて達に追っかけ回される様な感じだな。」

スターゲイザー

「ものすごいネタバレですね・・・。」

ZERO

「いや、何でも作者がな。「俺のキャラ個性がねえな。そうだ！魔力枯渇で女体化すれば結構な・・・。」

とか考えついて、追加設定なんだそうだ。」

スターゲイザー

「へえ。」

ZERO

「今、8,083字だ。一万字まで頑張ってみる？」

スターゲイザー

「そうですね。頑張りましたよ。」

ZERO

「作者がみてみんなにユーザー登録したそうだ。」

スターゲイザー

「え！？あの学校で、自称「美術の評価1取れてもおかしくない男」の作者がですか!？」

ZERO

「そう言うことを暴露するなって。出番減るぞ。」

スターゲイザー

第22話ー決着ー（後書き）

オリキャラの件まだまだ募集中です♪（治癒系が良いと思います。）
あと、後書きの名前も募集しようと思います。お願いします。

第23話 一力の反動一

「ふぁ．．．。！！」

邪神の事があつて翌日。ゼロは朝起きて驚愕した。体が体が．．．

「女になつてるううううう！！」

そう、これが、悲劇の始まりだった。

「ゼロ君！？」

フェイトがいきなり入ってきた。ものすごく、タイミングが悪い時に。

「フェイト．．．。俺死んでもいいかな？三途river渡っちゃってもいいかな？」

涙目でそう言った。

「どうしたの？．．．！！」

フェイトは驚きを隠せないといった表情でゼロを見た。そう、そこに居たのはゼロに違いないが、茶髪で、胸が大きくなっていたからだ。

「わかる。わかるぞ。お前の気持ちはよくわかる。だが、俺もどうなつてこうなったのか分からない。それと、今の性別は女だということが確かになった。」

フェイトは恐る恐る聞く。

「ない……の……?」

「ああ。ない。」

即答だった。

「ええええええええええええええええ!!!!」

その時、一人の叫び声が六課に響いた。

＊

「まあ、落ちつけフェイト。そわそわするな。」

「う、うん。」

10分くらい、そわそわした後、落ち着いた。

「これは、力の使いすぎで、それで女になってるんだと思う。きつとな。」

ゼロは補足の説明をした。

「なるほどね。でも、どうして?」

フェイトが聞く。ゼロは応える。

「きっと、魔力枯渇なんだろうな。それで女になってる。」

ゼロが説明する。

「へえ。そうなんだ。／＼そうなんやあ。／＼」

そして、ゼロに悪寒が流れた。

「うっ！なんだ、この寒気は……。はやてとなのはか？」

「「その通り」」

見事なまでに凶星だった。

「一応聞こう。なんの用だ。」

ゼロが聞く。

「ちょっと、品の方をなあ。」

はやてがいかにもしやらしい手で、ゼロの方へ来る。ゼロの頭の中の選択肢はこうだ。

1. 逃げる 2. 戦う 3. 助けを呼ぶ 4. 諦める

でも、ゼロとしては戦っても負ける。だが、助けも見込めない。と言うことで、選ぶ選択肢は……。

「逃げる！！」

そして、バリアジャケットを装備し、転移魔法で離脱した。

「あ!！」

はやてが声を荒げる。

「ほらあ、はやてちゃん。やっぱりもっと近づいてからの方がよかったんじゃないの?」

なのはが言う。

「二人とも、ゼロ君に何する気なの?」

フェイトが言う。

「いや、フェイトちゃん。あれは、ゼロ君ちゃうわ。」

はやてがそれを否定する。

「「ゼロちゃんだよ!！」」

二人で言う。

「確かに……。」

フェイトは肯定する。

「なら、あの娘この胸は見たところ、フェイトちゃんより、なのはちゃんより大きいはずや。それを確かめてみたくないか?」

はやては不敵な笑いを見せ、フェイトに提案する。

「そうだね。」

見事乗った。

「「それじゃあ、搜索開始。」」

こうして、ゼロの逃亡とはやて達の捕まえんとする計画が交差する運命となった。

＊

「なんで、フェイトが向こうに居るのか、俺にはわからん!!」

そこには、ゼロの嘆く姿があった。

「いたぞお!!」

そして、はやては六課全員を動かし、追われてる。つまり、1VS「infinity」になる訳です♪

「クソが!滅碎刃!」

風を纏った刀で追ってきた輩を吹き飛ばす。

「腹減ったなあ。」

ゼロはそう思わずにはいられない。今は12…00。追われたのは、8…00くらいだから、丸4時間は、逃げていることになる。もっと早くにあきらめてくれると思ったのが間違이었다。皮肉だが。

「かと言って、むぎむぎ六課に入ると、あれだし、そもそも、何で追っかけられてる。逃げたかったからだよな。うん。」

「ゼロ。」

少し驚いて、間を取り、振り向き刀に手をかける。

「んあ？刹那か。お前も捕まえに来たのか？」

「いや、違う。ただ、他の人に頼まれて、ゼロの事を紐で縛ってこさせてくれて・・・。」

「刹那。それを人は捕まえるって言うんだぞ。」

ぎくっ！と刹那の体が痙攣した。

「凶星だろ。」

「はあ。御名答だ。大人しくしてくれれば、報告書を手伝ってやる。」

「断るな。俺が何でこんな恰好なのか知っているのか？」

「いや、知らない。」

「なら、教えてやろう。俺はな、今、魔力枯渇でこんなんになってるんだ。」

「そうなのか。」

「わかれ、刹那。わかるんだ。」

刹那は笑い、答える。

「だが、断る!!」

そして、どこから出てきたのか、局員がゼロに襲いかかる。

「くそおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

そして、ゼロの戦いが始まった。

＊

「お疲れさんや。」

はやてが言う。

「いや、それ程でもないですよ。じゃあ、俺はこれで、失礼。」

刹那が答える。ゼロは・・・戦ったが、一対百じゃ勝てる訳はない。と言う訳で、大人しく捕まった。

「さてと・・・なのはちゃん？」

「OK♪」

そう言うのと、ゼロの手に手錠とバインドがかけられ、ソファアに座らせられた。

「さあ、お楽しみの時間やで♪」

そう言うのと、いやらしい手で、ゼロの胸を弄び始めた。

「はぐっ・・・あうっ・・・やっ・・・。」

ゼロの口から思わず出してしまう喘ぎ声。かなり我慢しているのか、足が小刻みに震える。

「うーん。B? いや、Cかもなあ?」

はやてが胸を弄びながら言う。

「いや、終わったんなら、離してよこれ。」

ゼロが涙目になりながら言う。かわええ!! と三人は一瞬思ってしまった。

「いやや。どう? なのはちゃん達も触ってみてへん?」

「ちょ、え? は? 何? やめて、ホント。」

ゼロはおどおどしながらも、制止をかけようとする。

「「じゃあ、少しだけ・・・。」」

そして、二人が近づく。

「そこの二人も乗るな!!」

そして、2人が胸に触れる。

「はうっ……。」

「「柔らかい……。」」

「二人して声を揃えんていい!!」

そんな見当はずれな意見に突っ込みを入れるゼロ。

「やろ？」

「『やろ?』じゃねえ!!」

さらに突っ込みを入れる。

「折角だから、服脱がせてみへん？」

「被害が拡大するからやめてくれ。」

「「そうだね。」」

「そこふたりいいいい!! いや、三人とも!! 俺の人権を尊重しろ
!!!!」

「「「え?」」」

「だあああああああ!! お前ら三人俺の事見えてる? 考えてる
?」

「「「全く。」」」

「そうそう。全くっておいしいiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!」

「いや、だって、」

「ゼロ君が何でこの体になって、それで、」

「スリーサイズとか知りたいじゃないか？」

なのは、フェイト、はやての順で言っていく。

「おいしいiiiiiiiiiiii!!あのなあ、俺はお前らの玩具じゃないからね!!断じて違うからね!!?」

「じゃかましい!!なのはちゃん、右。フェイトちゃん、左で。」

「「了解!!」」

そして、じりじりと三人は近寄る。

「待てええええええ!!俺、脱がされたら、男として、外歩けなくなるからね!!?」

「大丈夫や。オカマとして生きればいいねんさかい。」

「ええええええええ!!なんでそうなる!!?なのはとフェイトも何か言ってって!ねえ!!?」

「「ごめん・・・。」」

「謝るなああああああああああ!!」

「漫才で文字数稼ぐな!!行くよ二人とも!!ゼロ君赤裸々作戦開始や!!」

「「「やあああああああ!!」」」

「くそおおおおお!!なめるなああああああ!!」

ゼロは手錠とバインドを破き、フェイトとなのはの胸に手をやり

「「え?」」

一揉一

揉んだ。そして、二人はその場に顔を真っ赤にして座り込み、ゼロははやての方を向き、直線状に走った。狙うは・・・一つ!!ゼロはそう思った。

「させるかあ!!」

はやては飛びかかる。だが、ゼロは制服のスカートに手を引っ掛け、持ち上げる。

「おらあああああ!!」

ゼロが狙ったのは『スカートめくり』、それは成功し、ガッツポーズを取り、隊長室を後にした。

「言っただろ・・・そんなことはしないって。だから、断る!!」

ゼロは肩で息をしながら、言う。

なぜこんなことになっているか。それは、はやてが六課に『六課内デバイス使用許可』が下りて、ゼロを捕まえるためだ。いつもなら、別にプロテクションとか使えるのだが、魔力枯渇のため、自分の運動神経をフル回転で使っていたからだ。

《なら、ぶっ潰すのみ!!》

「やれるものならやってみなアアアアアア!!」

そして、砲撃が撃たれる。

一撃・殴!!!!!!!!!!――

ゼロは拳でそれを弾き、返す。

《ぎゃああああああああ!!》

「お前らで自分の攻撃食らってろ!!」

そう吐き捨て、振り返り、走ろうとすると、

「・・・。」

「「ゼロ君? わかってるよね?」」

金色^{フエイト}の夜叉、白い悪魔^{なのは}、白銀^{はやて}の魔術師がゼロを見ていた。とても寒く、冷たい笑顔で。

「わかってますとも。」

そう答える。

「「「そう、なら・・・」」」

大体の方は予想できるだろう。三人はデバイスを構え、こう言った。

「「「少し、頭・・・冷やそうか・・・？」」」

そして、後ろを振り返り、走り出そうとした。

「「「逃がさない・・・。」」」

そして、ゼロの全身にバインドがかけられた。

「「「全力全開・・・スターライト・・・／雷光一閃・・・プラズマザンバー・・・／響け、終焉の笛・・・ラグナロク」」」

黒いです、みなさん・・・。そして、六課の皆さんさようなら・・・。ゼロはそう思い、目を閉じ、運命を受け入れる。

「「「ブレイカー!!」」」

そして、術は放たれた。

一撃ッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!
――

そして、何かがスパークする音がした。

ゼロは、恐る恐る、目を開ける。そこに居たのは……。

「スターゲイザー？」

その人だった。そして、ゼロの方を向き、

「大丈夫ですか？」

と聞いてきた。それで、

「大丈夫。けど、お前も大丈夫か？」

と、答え、聞いた。

「私は、デバイスですから。」

と笑う。少しだけ、困った笑いを。

「無理すんなよ。俺のために。」

そして、スターゲイザーは倒れた。

「ありがとよ。」

そう言うと、バインドが外れた。

「まず、なのは達に言うことができたな。」

そして、黒いオーラがゼロから立ち上る。なのは達よりもっとドス黒いオーラが。

「「いや、その、あの、待って!!」」

「なにか、言うことはあるか？」

「「御免なさい!!!!」」

「よし。」

そして、ダークオーラは消え去った。そして、スターゲイザーを抱っこして、自室に向かった。

*****ゼロ・自室*****

「眠てえ。」

あくびをして、そんな事を呟く。

今、スターゲイザーの手当てが終わりベッドに寝かせ、暇をしているところだった。

と、その時、誰かがドアをノックした。

「はやてか？入っていいぞ。」

「お邪魔します。」

そして、ゼロの隣に座る。

「今回の件は私、なんかやりすぎだったみたいや。ごめんな。」

そして、俯いて謝る。

「あのさあ、もういいから。スターゲイザー、あれから怒るつもりだたみたいだけど、俺はお前がどういう奴かわかってるから。だから、謝んなくてもいい。」

「うん……。」

そして、少しの間。ゼロが切り出す。

「何か、飲むか？」

「そうするわ。」

そして、台所に行く。

「調子はどうだ？」

「え？ああ、うん。大丈夫や。」

「そうか。」

そして、はやての顔を見て少しだけ疲れが貯まってるのを確認し、

「ホントに大丈夫なのか？俺には、いつも考えごとしてるように見えるぞ。」

「あ、そんなに顔に出てた？私？」

「誤魔化すなよ。ちゃんと言え。悩みなら、相談に乗る。疲れてるなら、そう言うのを回復する飲み物を出すからな。」

「・・・最近、体が重いんよ。」

「そうなんだ。特にどの辺が？」

少し、ぶっきらぼうに答えすぎたか・・・？そう思った矢先。

「頭とか、胸とか・・・かな？」

「わかった。ちょっと待ってて。」

そして、ゼロは何かを混ぜ合わせ、飲み物を作っていく。そして、出来上がったものをはやての居る居間に持っていく。

「どうぞ。」

「ありがとな。」

そして、ゼロは隣に座る。

「んで？悩みとかあるの？」

「まあ、その、恋愛の事でな。」

「そうなんだ。相手は？」

「私の隣に居る人。」

「俺か？」

「うん。」

そして、顔を赤くする。はやては続ける。

「私は、ゼロ君の事が好きや。だから、私はあの時にあんな事を聞いたし、それに、あの時、嬉しかったんや。ゼロ君が、あんな事言ってくれるなんてな。」

「そうか。それは良かった。」

「けど、私はどうすればいいのかわからなくなったんや。確かに、私はゼロ君の事が好きやし、さらに言えば、結婚したいくらい。けど、フェイトちゃんの気持ちを無視して、そんなことしても良いんやろうか？って思うようになったんや。」

「はやて……。」

「私は、素直な気持ちにならんといけないことはわかってる。けど、あきらめなきゃいけないか持ってる節もあるから……私は……。」

「ゆっくり、考えろよ。俺はどこにも行かない。だから、ゆっくり話し合えばいい。なあ、フェイト？」

そして、扉の方を見る。

「やっぱりばれてた？」

そして、入ってくる。

「当たり前だ。なのはも入って来い。」

「てか、すごいな、ゼロ君。」

はやてがツツコミを入れる。それを裏目に二人は入ってきて、座る。

「スターゲイザーはどうなの？」

なのはが言う。

「ああ。今はぐっすりだ。」

「そうなんだ。良かった。」

なのはがほっとした。

「ホッとするのもいいけどさ。ホントに治すの大変だったんだよ。」

「そうなの？」

フェイトが聞く。

「ああ。データ残してるから三人で見てもたら？」

「「うん。」」

三人はデータを見る。見て行ってる間に、三人の顔が青くなっているのがわかる。

「「御免なさい。スターゲイザー。」」

「つてなるだろ？」

ゼロは苦笑いでそう言う。

「「ははは・・・。」」

「やれやれ。そう言えば、なのははさっき大丈夫だったのか？」

「え？何が？」

「スターゲイザーにスターライト・ブレイカーぶっ放しただろ。」

「大丈夫だよ！」

そして、その真偽を確かめる様にゼロは瞳を見た。

「はあ。なのは。嘘と安心させるってのは訳が違うぞ。そこに座って待ってろ。」

「いや、でも・・・。」

「待ってろ。」

そう言い、台所へ向かって、魔力水、治癒水、それと、果物をいくつか混ぜ、なのはに渡す。

「ほい。これ飲め。」

「う、うん。」

そして、なのはは渡された飲み物を飲む。

「それ飲み終わったら、マッサージしてやるわ。」

「ふえ!？」

なのはは驚く。が、それは気にしない。

「なんか抵抗があるのか？今は女の子同士だろ？」

「いや、それはそうなんだけど・・・。」

「安心しろ。俺ははやてみたいな奴じゃないから。」

「ちょっと待った!それってどういうことなん!？」

はやてがツツコミを入れ、

「胸揉んで、バストカップ判断したり、なんかコスプレさせたりってことだ。」

ゼロはそれを軽くあしらう。

「それって酷かへん？」

涙目で訴える。ゼロはデコピンをする。

「あにゃ!」

「そんなことしても、かわいくはあっても本当に涙目とは思わねえから。それと、さっきのは軽い冗談だ。」

「酷いなあ。」

そして、はやとゼロのコントがしばらく続き、

「ゼロ君？」

その時、なのはに声をかけられた。

「ああ。悪い悪い。飲み終わった？」

「うん。」

「よし。なら、今痛い場所とかは？」

「肩かな？」

「わかった。」

そして、なのはの肩に右手を当て、

「拳底。」

一撃一

そして、放った。

「にゃあああああああああああああああー!!」

なのははものすごい痛みを感じたらしく、叫び声をあげた。

「ははは。ごめんな？でも、明日にはよくなってるはずだから。」

「ホントにこんなので良くなるの・・・？」

なのはは涙目で聞いてきた。

「ああ。大丈夫だ。他に痛いところはない？」

「胸が苦しい・・・。」

「わかった。とりあえず、うつ伏せになってくれ。」

そして、言われたようになのははうつ伏せになる。

「よし、これから力を徐々に加えていくから痛くなったら教えてくれ。」

「うん、うん。」

そして、痛みの中心を見つけ出し、徐々に力を加えていく・・・。
と、小一時間ほど、マッサージを行った。なのははと言うと・・・。

「はは。立てる？」

ゼロが聞くと、

「む、無理です・・・。」

となのはは答えるほど、痛みが酷かった。

「あらら。ごめんな。ちょっとアリシアに聞いてみるわ。」

ちなみに、アリシアは本局へ報告中だ。そして、アリシアに念話を繋いだ。

（おい。アリシア？）

（ゼロ？）

（ああ。でさ、今日はちょっとさ、かくかくしかじかで・・・。）

（なるほどね。いいよ。今日は本局に泊まって報告しなきゃいけないし。）

（ありがとう。）

（何の何の♪）

（やっぱりアリシアにはかなわねえな。じゃあ、お休み。）

（うん。お休み。）

そして、念話を切る。

「・・・とりあえず、事情説明したよ。そしたらOKだったから、なのは泊まりだな。」

「ふえ!？」

「「いいな。」」

「いや、そんなことはないぞ。そもそもさ。痛みがエンドレスに続くんだ。怖いよ。」

「そうなの!？」

なのはが驚く。

「いや、ホントにすまない。こればかりは……。」

ゼロは困った表情でなのはを見て謝る。

「にやははは……。」

「「ホントにいいなあ。」。なのはは。／なのはちゃんは。」

「お前らも泊まるか？」

ゼロがいきなりそのような爆弾発言をする。

「「え!？」」

フェイトとはやてがびっくりする。

「いやなら別にいいんだぜ。俺は変な事とかしないし、最高で一緒に寝るくらいしかできんぞ。」

「「えっと、やっぱり、その……。」」

「どうするんだ？」

「「お願いします。」」

フェイトとはやてが声を揃えて言った。ゼロはなぜお願いしますなのかわからんな……。と思った。

「別にいいよ。そうときまったら着替え持ってこいよ。」

「「うん！わかった！」」

「なのはも持ってきてやれよ。」

そして、二人は出て行った。と、その時

「うぐっ！」

寝ていたスターゲイザーから声がした。ゼロはそばに寄り添い、様子を見た。

「……ゼロさん？」

「大丈夫か？」

「はい。ありがとうございます。」

「それはよかったな。」

「・・・それで、私はどのくらい寝ていたのでしょうか？」

「うーん。五時間位かな。よく覚えてないんだけどな。ごめんな。」

「何でゼロさんが謝る必要があるんですか？」

「そりゃあ、お前に怪我させたし、それに、その・・・。」

スターゲイザーは少し間を置き、

「別に大丈夫ですよ。これは私の行動ですし、別にゼロさんを責める必要はありません。」

「わかった。で、スターゲイザーは今日はどうする？」

「は？」

「今日泊まるかって話。スターゲイザーはどうするんだ？」

「私はいいです。自分の部屋に戻ります。」

そして、スターゲイザーは立ち上がり、部屋を出て行った。

「何であんなに固いんだろうな。」

ゼロが言う。

「何が？」

なのはが問う。

「あいつ、ホントはさ。泊まりたかったと思う。」

「何でそう思うの？」

「なのはの方見てから答えたからさ。きっと、フェイトとはやてが一緒に泊まるってわかってたんだろうな。」

「確かにね。」

「「お待たせ。」」

と、その時、フェイトとはやてが戻ってきた。

「いや、あんまし待ってないよ。」

そして、フェイトはなのはに服を渡し、各々は着替えた。ちなみに、ゼロはフェイトがなのはに持ってきた服に少しだけ吹きそうになった。余談だが。そして、着替え終わり、

「じゃあ、寝るか。」

「「「そうだね。」」」

ゼロの提案に対して肯定する三人。今の時刻はPM11…00。良い子は寝る時間だ。ゼロはなのはをお姫様抱っこしてベッドに連れて行き、そのベッドのそばにある壁に寄り掛かるように寝た。

「ゼロ君、あれでよく寝られるなあ。」

とはやて。

「確かにそうだね。あれで寝たら、背中が痛くなりそう。」

とフェイト。

「まあ、寝よう？二人とも。」

「「そうだね。／＼そうやな。」」

そして、なのはが言い、二人は床に入る。

「しかし、寒くないのかな？」

とはやてが思う。

「確かに寒そうだね。」

となのはが言い、

「入れようか。ブレイブ・フォース？起きてる？」

とフェイトが言い、ブレイブ・フォースが起きてるか確認した。

『はい。どうしたんですか？』

以外にも、ブレイブ・フォースは起きていた。

「ゼロ君を起こさないようにこっちに連れてきて欲しいの。」

『やめといた方がいいと思いますよ。これで起きたら、昼にあったあの件で100倍になってお返しが来ますよ。』

「大丈夫だと思う。だから、お願い。」

『わかりました。』

ブレイブ・フォースはアウトフレームになり、ゼロを起こさず、ベッドに運んだ。

「ありがとね。」

「いえ。ですが、極力ちよっかいを出さないようにした方がいいですよ。」

「うん。わかった。お休み。」

「おやすみなさい。御三方。」

そして、待機モードになり、ゼロの手にグローブがついた。

「さてと・・・。」

はやての目が変わる。

「はやてちゃん？」

なのはが聞く。

「安心せえよ。何もしないから。」

はやてが手を動かしながら言う。

「いや、その手の動きをみる限り、安心できないよ。」

「大丈夫やて。お休み。」

「「お、お休み……。」「」

その後、四人は眠りに就いた。その時、ゼロははやてに色々、されてた事は、また、機会があったらお話ししましょう。

終幕。



ZERO

「後書きコーナー♪」

わ〜♪

ゼロ・スターゲイザー

「ただいまあ〜。」

ZERO

「お帰り♪どうだった？」

ゼロ

「いや、あのDVD見ててわかると思うが、変態居たわ、酒に酔ってカナンと祐希奈がやばい事になってるわでちつとも温泉旅行って感じがしなかった。」

ZERO

「災難だな。俺も今度、誰かの作品にお邪魔しようかな♪」
ゼロ

「はっきり言って、残る感想は疲れたの一言に尽きるな。」
スターゲイザー

「やっぱり、奈月さんの胸の秘密は……。いいなあ。もう一回行こうかな？」

ZERO
「心配するな。次回は番外編で、翔達誘っていくみたいだから。」
ゼロ

「聞いてねえぞ!!」

ZERO
「言ってねえからな。」

ゼロ

「酷え!!」

ZERO
「他の作者様のキャラも呼んで、カオス空間作ろうかな……。」
ゼロ

「やめろ!!特に、変態とか呼ぶのはやめろ!!」

ZERO
「冗談だ。とりあえず、今週中はキャラ募集＋番外編に出るキャラ募集だな。」

ゼロ

「お前は、どこから、どこまでが冗談なのかわからんから怖いわ!」

ZERO
「モチのロンで全部、本当の事に決まってるじゃんか。」
ゼロ

「おい!!」

ZERO
「はっはっは。まあ、集まるかどうかだけだな。そしたら、あの三人呼ぶことにするわ。」

ゼロ

「まあ、そっちの方が安全だな。そう言えばキャラ募集の事で、作者が『学生キャラで回復系が良いな。』とか言ってたけど、なんか、ものすごく、次元犯罪者レベルの奴来たな。」

ZERO

「確かにな。あ！そろそろ紅白が！！」
ゼロ

「いっけねえ！！それでは皆さん！良いお年を！！次回まで！RI
DE・・・」

一同

「ON！！！！！！！！」

ZERO

「みんなあ！テレビの前に急げえ！！」

現在、1月1日、時刻AM10:00。

アルス

「さあ、待ち合わせ場所も送ったし。楽しみだな。」

ゼロ

「だな。まあ、今回はやてとフェイトとなのはも来るし、それに、今回は、なんかな。大人しいキャラばっかだし。」

はやて

「駄目だよ。ゼロ君あんまし、そう言うこと言っちゃ♪」

ゼロ

「なら、お前らは変態どもに覗きをされたいのか？」

はやて・なのは・フェイト

「う！」

ゼロ

「だから、おとなしめのキャラなんだ。」

スターゲイザー

「楽しみです♪」

刹那

「確かにな。」

とそこに、アリシア、翔がやってきた。

アルス

「やっと来たな。」

ゼロ

「そうだな。おい。二人ともーこっちだー。」

アリシア

「あけましておめでとう。でいいのかな？」

ゼロ

「大丈夫だと思うぞ。」

アリシア

「なら、あけましておめでとう。」

ゼロ

「ああ。おめでとう。」

翔

「なあ、アルス。」

アルス

「なんだ？」

翔

「何で、三人が来てるんだ？」

ゼロ

「いいじゃねえか。別に。」

アルス

「確かに。まあ、この間に、ゼロのプロフィールでも公開しますか。」

刹那

「そうだな。」

スターゲイザー

「じゃあ、よっこいせっ・・・と!!！」

ゼロのプロフィール

現名前…八神ゼロ・S・A・ハラオウン

旧名前…ゼロ・S・アームストロング

容姿…金髪の手まである長い髪でロングストレート。瞳は翡翠。(

女体化すると、紙がショートの手髪、瞳が薄い青になる。)

デバイス…万能型ユニゾンデバイス『ブレイブ・フォース』

魔力ランク…最低AAA++++++、最高EX+a

特殊技能…不死鳥 フェニックス system、EW エンドレスワルツ system、D デステイニー program、SEED、芒星型魔法変換、属性体
備考

不死鳥 system…これは彼がナンバーズだった時代、ユニゾン型ロストロギア、ファルザーを回収しようとした時に、ファルザーが暴走し、ファルザー自体は管理局にあるのだが、ゼロの体に根強く残ってしまったため、ブレイブ・フォースに制御プログラムを入れて発動するものがこれ。これによってもたらされるのは魔力値増加が主である。発動中は背中に深紅の羽が生える。

最大魔力値…SSS+++++

最低魔力値…SS++++

EW system…これは、ゼロが六課に入ったときに、回避ばかりでいいのかな? と思い、開発したオリジナルのプログラムシステム。魔力値は上がらないが、これによって速さと防御力は最高でEXになる事がある。発動中は背中に、潔白の翼が生える。

D program…これは、ゼロが仮面をつけてた頃、前の運命の力の主、『エルザ』によって、与えられた力。これは、全体のステータスがSSに統一される。発動中は某ガンダム種死のデステイニーガ○ダムと同じで、青い鎧を身にまとい、背中に赤い翼が生え、その翼に、剣と銃を携えている。これでわからなかったら、ググってください。

SEED…D programが使えるようになって初めて使えるIS。主に、回復、魔力強化、特性を生かした、ユニゾンなどできる。これでわからなかったら、感想で質問してください。

芒星型魔力変換…これは空に三芒星、五芒星、七芒星等を描くことによって、剣、魔導書、杖などを取り出すことができ、防御魔法にルールなどを付け加えたりすることができる。

最大魔力値…?

最低魔力値…? (とりあえず、AA辺り。)

属性体…これは、ゼロが生まれた時から持っていた特性。魔力変換

資質の概念をぶった斬り、全ての属性変換を使えるというもの。これによって、TASが使える。

ゼロ

「まあ、こんな感じ？」

翔

「て言うか、ゼロ女体化するんだ・・・。」

ゼロ

「まあ、魔力枯渇のときだけな。あの時にスターゲイザーはぶっ倒れた。」

アリシア

「それに、E W s y s t e mの開発理由って・・・。」

ゼロ

「まあ、あれだ。気分とか、ノリ？」

アリシア

「いや、そんなんじゃないと思う。」

はやて

「芒星型魔力変換って、これよくわからんやつなん？」

ゼロ

「まあな。これ、今使えるのは、五芒星までなんだよね。」

なのは

「なんで？」

ゼロ

「それ以上使うと、俺の体が女も・・・じゃなくて、魔力枯渇になるか、もうひとつ、この場所が焼け野原になるかだから。」
フェイト

「危ないじゃん！」

ゼロ

「ああ。危ない。だから、あの場で使えたんだ。」

シオン

「遅れてすm・・・」

アルス

「チェストオ!!!」

シオン

「ばるさッ!!!」

一撃一

アルス

「安心しろ。みねうちだ。」

ゼロ

「おい。大丈夫か? しーちゃん?」

シオン

「しーちゃん言うな!!!」

今の状況。ゼロのプロフィール発表が終わり、シオンが来たところ、アルスに、蹴りを入れて、シオンがぶっ倒れたところに、ゼロがしーちゃんと呼び、復活してツツコミを入れた。という具合。

ゼロ

「悪い悪い。つい、ノリでな?」

シオン

「なぜ語尾が上がる!?!」

刹那

「ゼロ?」

ゼロ

「何?」

刹那

「お前って、はやてさんとフェイトさんと結婚してたんだな。」
ゼロ

「ああ。籍は入れたけど、式はこれからかな？まだ、正式な発表じゃないんだけど・・・って誰だ！！こんな情報流したのは！！」
スターゲイザー

「すみません。わたしです。」
ゼロ

「お前かよ！！何で流すかなあ！！プレシアさんが俺に雷落とすから、そう言う情報流すのはやめなさい！！」

スターゲイザー
「すみません。」

そして、俯き謝る。

ゼロ

「まあ、いいけどさ。」
スターゲイザー

「すみません。アルスさんにはかせられまして・・・。」

スターゲイザーがそう言った瞬間、その場の温度が、一気に10℃くらい下がった

ゼロ

「ほっほう。」
アルス

「ま、待て！話せばわかる！」
フェイト

「覚悟は決まってるよね？アルス君？」
ゼロ

「じゃあ、はやて、フェイト。行くぞ。」

はやて・フェイト

「りょーかい♪」

ゼロ

「みんなは待ってて。ちよっくら・・・」

ゼロ・はやて・フェイト

「お話してくるから・・・。」

翔・アリシア・なのは・刹那・スターゲイザー・シオン

「は、はい・・・。」

そして、三人は退場した。そして、翔達はアルスに十字を切った。

ゼロ

「おらあああああああああああああ!!」

アルス

「ぎゃあああああああああああああ!!」

はやて

「もう一ちょ!!」

アルス

「うがあああああああああああああ!!」

フェイト

「まだまだ!!」

アルス

「うごあああああああああああああ!!!!」

ゼロ・フェイト・はやて

「もういっちょおおおおおおおお!!」

アルス

「ぎゃあああああああああああああ!!!!!!」

「!!!!」

なのは

「・・・なんかすごい声が大きくて、フルボッコだね。」

それにその場にいる人たちは『うんうん。』と肯定した。さらに言うなら、魔力光が飛び交っている。

翔

「もう、あの話はやめよう。」

一同

「うん。」

アリシア

「あ、帰ってきたよ。」

フェイト

「ただいまあゝ♪」

はやて

「すっきりしたなあ♪なあ、ゼロ君♪」

そして、はやてとフェイトが黒こげになったアルスを連れてきた。

ゼロ

「すまん。魔力枯渇だ。でも、すっきりしたのは確かだが・・・。」

そして、女体化したゼロが出てきた。

翔

「まさか・・・これほどとは・・・て言うか、はやてに似てるな。」

アリシア

「そこから先は言っちゃいけないよ。翔。」

ゼロ

「そうだぞ。はやてが傷つく、ついでに、お前にも二度と治らない

ような傷が……。」

はやて

「何話してるんや？」

ゼロ

「俺のこの姿がはやてに似てるって話。」

フェイト

「胸はゼロ君の方があるけどね。」

フェイトは確実に爆弾のスイッチを押した。

はやて

「いいよ……。別に私なんて……。」

ゼロ

「すまん。俺の配慮不足だ。本当にすまん。」

はやて

「慰めなんて……。」

ゼロ

「なら俺を殴ってストレス発散だ♪」

はやて

「じゃあ……。T-L I O K ナツコォ!!」

一撃ッ!!!!!!——

ゼロ

「ぐっはあ!!! なぜに……。OGなんだ……。」

——倒!——

はやて

「なんかすっきりしたわ。ありがとうな♪」

ゼロ

「気分が治った様でなにより・・・だ。」
なのは

「あ、ホントに生气がなくなっちゃった。」

フェイト

「ちょ・・・大丈夫!？」

はやて

「やりすぎた見たいやな？」

翔

「いや、やりすぎだはやて。てか、T-LINKナツ〇ルはないだろ。」

アリシア

「そもそも、はやてに似てるって言うネタ引っ張りだした翔が悪いじゃん。」

アルス

「確かにな。と、言う訳で・・・。」

アリシア

「謝ってきなさい。」

翔

「な・・・わかった。」

そして、ゼロのそばに行き、

翔

「すまなかった。」

ゼロ

「いや、大丈夫。」

そして、ゼロは起き上がり、その時、メールが来た。

ゼロ

「あ、祐希奈k」

アルス

「デストロイ・ギガレイズ!!」

一撃ッ!!!!!!!!!!!!!!

ゼロ

「ばるさ!!」

アルス

「祐希奈様を侮辱するな!!で、なんと来た?」

ゼロ

「向こうの方は結構忙しいみたいだから、これないかも知れないってこと、それで、これたら、俺が殴られるらしい。」

アルス

「なら、大丈夫だな。よし、みんな。行こう!」

一同

「おお!!」

そして、バスを乗り継ぎ、いよいよ、不死鳥温泉へ到着♪

アルス

「着いたぞ♪」

ゼロ

「おお♪」

刹那

「やっと着いたな。」

アルス

「ああ。我々は、ガジェット500機に襲われたり、次元犯罪者に人質を取られたりした……。だが!我々は、幾度となく苦難を乗り

越え！不死ちょ・・・」

一同

「どこにそんな苦難があったんじゃー！！」

アルス

「へぶし！！」

アルスの訳のわからん妄想に嫌気がさし、みんなで、ハリセンを持ち、思いっきりアルスの頭を叩いた。

ゼロ

「まったく！訳の分らんギャグをかますな！！」

アルス

「はい・・・。」

翔

「しかし、ここに二度も来るとはな。」

ゼロ

「まあ、確かにな。今回は奈月さんはいないし。アリシアは奈月さんと入れ替わりと思えば納得できるな。」

アリシア

「それじゃあ、私が奈月の代わりみたいじゃない！」

ゼロ

「いや、そう言う意味で言ったんじゃないんだ。ごめんな？」

スターゲイザー

「あゝあ。ゼロさん、アリシアさん泣かせましたね♪」

ゼロ

「何で、そういうこと言うかな。スターゲイザーは。」

スターゲイザー

「なんか、弄りたくなったので♪」

ゼロ

「お前って何気に黒いんだなおい！！」

翔

「お前らもコントやってないで、入ろうぜ。」

ゼロ

「そうだな。金とかは済ましてあるから、普通に入ってくれ。」

一同

「はい♪」

そして、受付を済まし、部屋に入り、荷物を置く。

ゼロ

「なんか、色々騒いで疲れたな。」

翔

「同感。」

アルス

「なら、風呂入ろう。」

ゼロ

「よし。つとなら行くか。ブレイブフォースもアウトフレームになつていいから、なのは達と一緒に入って来い。」

ブレイブフォース

『いや、それではマスターが……。』

ゼロ

「俺の事はいいから。行って来い♪」

ブレイブ・フォース

「はぁ。わかりました。」

そして、アウトフレームになる。

翔

「え？なんで、ブレイブフォースがリインフォースになってるんだ？」

ゼロ

「ああ。ブレイブフォースは、俺の前の相棒のブレイブハートが壊れた時に、リインフォースのリンカーコアを入れて、ユニゾンデバイス化したものなんだ。」

翔

「ああ。なるほどな。それで……。」

アルス

「とりあえず、行こう。二人とも。」

ゼロ

「そうだな。あ、これ、ブレイブフォースのタオルだから。使え。」

ブレイブフォース

「わかりました。では。」

ゼロ

「ああ。」

そして、ブレイブフォースは退室。

ゼロ

「じゃあ、行きますか。」

翔

「そうだな。」

アルス

「よし。じゃあ、行こう。」

このやり取り何度目だ？とか言うツツコミはナシの方向で。その頃女性陣は……。

一同

「ふう。気持ちいい♪」

風呂に入っていた。

スターゲイザー

「たまにはいいですね♪こういうの♪」

アリシア

「それには納得♪」

なのは

「そういえば、ここって癌とかが治ったりして、奇跡の湯って呼ばれてるんだよね？」

フェイト

「そう言えばそうだね。」

ブレイブフォース

「何でも、胸が大きくなるって噂もあったりなかったり・・・。」

ピクン・・・はやてとアリシアが反応した。

アリシア

「それ、本当なの？」

ブレイブフォース

「ええ。確か。奈月さんがそうでしたね。」
はやて

「へえ、具体的にはどのくらいあるんや？」

ブレイブフォース

「91cmくらいで、Fじゃなかったでしょうか・・・？」
フェイト

「ちょ、2人とも！しっかり！！」

スターゲイザー

「なんかすごぉく。」

なのは

「スターゲイザーも正気に戻って！！」

はやてとアリシアは沈み、スターゲイザーは真っ白な灰と化していた。

はやて

「な、何か秘密があるはずや!!」

フェイト

「あ、復活した。」

?

（残念ながら、ホントに何もしてないんだよ。）

はやて

（この声・・・ゼロ君か?）

ゼロ

（大正解♪あのDVD見る限りでは、ホントに何もしてないって言うってたんだよ。でも、俺は外より中身だから、な?）

はやて

（・・・ホンマか?）

ゼロ

（ああ。本当だ。）

はやて

（ありがとうな。）

ゼロ

（おう。そろそろ念話を切るぞ。）

そして、念話が切れる。

フェイト

「何話してたの?」

はやて

「ん?ゼロ君の好みの話♪これで、私らと結婚したのも辻褄が合う

わ♪」

アリシア

「外より中身って言ったんでしょ？」

はやて

「うん。」

アリシア

「相変わらず、罪な人だねえ。ゼロは。」

なのは

「確かにね。」

同時刻、男性陣は・・・。

ゼロ

『掴みきれてないな・・・。』

翔

「ゼロく？何考えてるんだ？」

ゼロ

「ん？ああ。ちょっと、術式についてな。少しだけ。」

アルス

「少して位じゃなさそうだったが？」

ゼロ

「バレバレだな。」

翔

「当たり前だ。」

刹那

「で、何を考えてたんだ？」

ゼロ

「芒星型魔力変換・・・まだ、掴みきれてないって・・・。」

翔

「そっか・・・。まあ、いいじゃねえか。今は温泉旅行だろ？楽し

もうぜ？」

刹那

「そうだぞ。ゼロ。今は忘れよう。」

ゼロ

「ああ。だな。」

そして、男性陣は何事もなかったように風呂に入り、女性陣と合流した。

ゼロ

「さてt・・・」

祐希奈

「チェスト♪」

――撃！――

ゼロ

「がはっ！」

カナン・ヴィヴィオ

「遅れてすみません。」

アルス

「来ましたか。」

刹那

「にしても、お構いなしだな。」

はやて

「同感やわ。まあ、わかった事やけど。」

ゼロ

「まさかホントに吹っ飛ばされるとはな・・・。」

祐希奈

「ちっ！」

ゼロ

「舌打ちすんな!!」

翔

「落ち着け落ち着け。反抗しても、無駄だという事をわかれ。」

祐希奈

「そう言うこと♪」

ゼロ

「はあ。まあ、叫びすぎると宴会で騒げないし、今回は許そう。」

フェイト

「大変だね。」

ゼロ

「それ程でもないよ。・・・まだ、時間あるみたいだし、前行ったところ行くか。」

翔

「そうだな。」

祐希奈

「じゃあ、Let's go♪」

そして、アミューズメントパーク。

ゼロ

「これはこうでこれは・・・。」

翔

「お前って、クイズとか、頭使う方が得意なのな。」

ゼロ

「そうでもないぞ。」

アリシア

「でも、殆ど解いてるよね。」

ゼロ

「まあな。」

アリシア、翔、ゼロの三人は、クイズでなんか盛り上がる。

スターゲイザー

「また当りです♪」

ブレイブフォース

「すごいですね。3連続……。」

シオン

「そう言うブレイブ・フォースさんは、15連続じゃないですか。」

シオン、ブレイブフォース、スターゲイザーはパチンコで当りを導き出す。

カナン

「はぁ！」

フェイト

「なんの！」

ヴィヴィオ

「やぁ！」

なのは

「甘いよ！」

祐希奈

「チャンス！ジャイアントインパクト！！」

はやて

「うおっ！危な！！」

祐希奈、はやて、ヴィヴィオ、カナン、悪魔、夜叉の

なのは、フェイト

「悪魔／夜叉／／じゃないもん！！」

おっと失礼。なのは、フェイトの六人はダブルスならぬトリプルスで、白熱していた。

まだ、時間があるようなので、もうちょっと、紹介の方を

スターゲイザーのプロフィール

正式名…バイオウエポン型ロストログア【スターゲイザー】

ここは、感想で主な説明が載っているので大丈夫だとは思いますが、体つきは16〜18歳。どちらかと言うと、18歳で、性別は女で、武装は某機動戦士の機体、まんまですね。後は、本編には出してない、追加設定だけ紹介します。

エンジンワルツ

エンドレスワルツ

EW system…これは、EW systemの改良版。スターゲイザーとブレイブ・フォースの併用で使えるようになる。発動時、天使の翼のように、EW systemに輪が付く。これによってもたらされる効果は、魔力値増加、防御、素早さの向上である。

最大魔力値…EX

最小魔力値…SS+

スターデステイニー

SDフォルム…スターゲイザーとブレイブフォースとゼロのユニゾンによって完成する。魔力値がSS++に、統一され、鎧が銀に統一される。

と、とりあえずここまで。と、言っている間に、夕食の時間。

ゼロ

「それではみなさん。」

一同

「いただきます。」

ゼロ

「まあ、これで、済めばいいけどな。」

翔

「同感。」

酔っ払い組

《イエーイ♪》

ゼロ

「・・・こういうときの予感って当たるんだよなあ。」

翔

「ああ。わかる。で、誰だ！酒入れたのは！！」

？

「私♪」

ゼロ

「その声は・・・シャルか！？なぜここに来てるんだ！？」

シャル

「なんか、お約束がなかったら面白くないでしょう？」

ゼロ

「そう言う問題じゃ・・・。」

フェイト・はやて・なのは

「ゼロ♪」

ゼロ

「・・・翔。助けてくれ。」

翔

「無理♪」

ゼロ

「なははは。どうしよう？」

フェイト・はやて・なのは

「さみしいな♪」

ゼロ

「わかった、わかった。何さ？」

フェイト・はやて・なのは

「なんか、体が熱いの・・・。」

ゼロ

「マジで助けてくんね？」

翔

「すまん。俺も巻き添いにされたくない。」

アリシア

「翔〜♪」

翔

「だぁ！言ってるそばから！！カナンと祐希奈は新婚さんっぽくなってるし！！」

アリシア

「何してるの〜？♪」

ゼロ

「残るは、刹那とアルス・・・けど、希望は消えたな。あの二人はなんか、木刀出して、バトってるから。」

フェイト・はやて・なのは

「ゼロ〜♪」

ゼロ

「落ち着くまで待とう。」

翔

「だな。」

そして、ゼロ達は酔っ払い組が落ち着くまで、対応してた。その時、ヴィヴィオが危なくお酒を飲みそうになって、無理やり止めた。

翔

「・・・やっと落ち着いたな。」

ゼロ

「ああ。疲れた。こいつら。部屋に置いてくるわ。」

翔

「なら俺は、刹那達を置いてくる。」

ゼロ

「そしたら、またここで落ち着いて飲もう。」

翔

「だな。」

ゼロ

「さてと……。ブレイブフォース？ スターゲイザー？ 起きてる？」

ブレイブフォース・スターゲイザー

『はい。』

ゼロ

「アウトフレームになっていいから、手伝ってくれ。」

ブレイブフォース・スターゲイザー

「わかりました。」

ゼロ

「俺はフェイトとはやて抱えて行くから、なのは達の方頼んでもいいか？」

ブレイブフォース・スターゲイザー

「わかりました。」

ゼロ

「うし。じゃあ、先行ってる。」

そして、ゼロははやてをお姫様抱っこ、フェイトをおんぶして部屋に行く。

*****女性陣 就寢室*****

ゼロ

「やれやれ。」

ゼロはフェイトとはやてに布団をかぶせ、座っていた。

ゼロ

「ん？今日は満月か。」

そして、窓を開き、淵に座る。

ゼロ

「風が気持ちいいな。」

ブレイブフォース・スターゲイザー

「マスター？」

ゼロ

「ん？ああ。ブレイブフォースとスターゲイザーか。なんだ？」

ブレイブフォース・スターゲイザー

「いや、髪が綺麗だなんて。」

ゼロ

「そうか。ちゃんと布団とかかぶせてやれよ。」

ブレイブフォース・スターゲイザー

「わかりました。」

ゼロの髪は、月明かりにあたり、金色に光り、風が髪を揺らしていた。

ゼロ

「さてと、翔も待ってるし。行こうか。」

ゼロは、窓を閉め、その部屋を後にする。

*****宴会場*****

ゼロ

「お待たせ。待った？」

翔

「そうでもないよ。」

ゼロ

「じゃあ、」

ゼロ・翔

「乾杯♪」

翔

「でさ、お前はなんであんなもの使うんだ？」

ゼロ

「守りたいから。守れないのは弱い象徴、そう思うから。だから、あの力を使いこなさなくちゃいけない。使いこなしたいんだ。」

翔

「なるほどな。けど、無理はすんなよ。」

ゼロ

「無理じゃない。」

ゼロは笑い、言葉を繋ぐ。

ゼロ

「無茶だよ♪んでもって、無理・無茶は俺の専売特許だからさ♪」

翔

「何気に、俺は止めても無駄発言したな。」

ゼロ

「そのつもりだし、曲げる気もない。」

翔

「なるほどな。じゃあ、体だけは壊すなよ。体壊して、一番最初に心配するのは……。」

ゼロ

「わかってるさ。そうならないようにもしてる。」

翔

「なら、いいな。・・・そろそろ時間か？」

現在の時刻はPM11:00。

ゼロ

「ああ。そうだな。」

翔

「なら、行くか。」

ゼロ

「ああ。」

そして、二人は席を立ち、部屋に向かった。

ゼロ

「あ、そう言えば・・・。」

翔

「どうしたんだ？」

ゼロ

「忘れ物したんだよね。取ってくるから、先に寝ててくれ。」

翔

「わかった。」

実は忘れ物をしたというのは口実で、外に出て、訓練するために別れたのである。

ゼロ

「さてと。」

ゼロはあたりを見渡し、誰もいないことを確認する。

ゼロ

「よし。来たれ、三芒星。」

そして、三芒星を描き、術を発動させる。

ゼロ

スターライト・ダブル・ツイン・ブレード
「星の光の両双剣、召喚。」

そして、某機動戦士物の自由が神帝を倒すときに使った『守りたい世界があるんだァー!!』とか言いそうな両剣が二本出てきた。

ゼロ

「さてと。まずは、50だな。」

そして、スフィアを成型し、剣に込める魔力を上げ、振るう。

ゼロ

「・・・35、40。」

そして、斬り上げ、斬り下げ、突き、斬り上げ、蹴り……。と繰り返しているうちに……。

？

「やっぱりな。」

その声の主、それは……。

ゼロ

「・・・翔か。」

翔だった。

翔

「そう。けど、何でるときに言った言葉。覚えてるか？」

ゼロ

「・・・ああ。誰が一番最初に心配するか・・・って話だろ？」

翔

「ああ。でも、そう言って、なぜ剣を振るう。」

ゼロ

「説教なら聞くから、500まで頑張らせろ。後10なんだ。・・・終了。」

翔

「俺がしたいのは説教じゃない。」

ゼロ

「じゃあ、何だ？」

翔

「お前の力。少し、見てみようと思ってさ。」

そう言って、翔自身のデバイス、『アロンドイト』を起動させ、こちらに刃の先を向ける。

ゼロ

「・・・上等だ。スフィアじゃ物足りなかったところだ。」

そして、ゼロも剣を構え、翔に向く。

ゼロ

「先行どうぞ。」

翔

「じゃあ、先に。」

そして、ゼロに向かって駆け出す。上段に構え、振るう。

一斬一

そこにゼロはおらず。

剣は空を切る。

ゼロ

「先手はやったぞ。」

そして、剣を振るう。

一斬一

斬り上げ、

一撃一

蹴りあげる。

ゼロ

「本気出せよ。」

翔

『ははは。この状態じゃ無理だっつの！』

そう思いつつも、剣を振るう。質感はあった。だが、その逆。

一斬一

斬られたのだ。

非殺傷設定で入れたその一撃は翔を地に伏せるのに十分だった。

ゼロ

「ふう。・・・俺の負けだ。」

翔

「は？」

ゼロ

「だから、俺の負けだって。」

翔

「何で？」

ゼロ

「受け流しちゃったからだよ。今の剣に込めた魔力じゃ、次の一撃を防げない。だから、お前の勝ち。」

翔

「魔力もう少し送ればいいだけだろ。」

ゼロ

「そう言う訳にもいかねえんだよ。訓練用に流した魔力だから、これ以上流すと、殺傷設定になるからさ。」

翔

「なるほどな・・・って、え!？」

ゼロ

「まだ何かあるのか？」

翔

「いや、一撃受けたら終わりなんだろう!？なら、殺傷設定なら・・・。」

ゼロ

「実はな、俺、全部の訓練用の武器は、全部こうなるようにしてるんだよ。防御も大事だが、俺は生憎、回避の方に力を入れててね。まあ、そう言うことだ。行こうぜ？」

武器をしまいながら、説明をする。

翔

「そうだな。」

そして、翔と部屋に戻って寝ようとしたその時、

？

「ちょっと待った。」

女性の声がした。

ゼロ

「んあ？はやてか？」

はやて

「翔兄さん？ゼロ君借りてもええかな？」

翔

「ああ。良いぜ。」

はやて

「じゃあ、ゼロ君借ります！！」

ゼロ

「ええ！？」

翔

（先戻ってるわ。）

ゼロ

（そうしてもらうとありがたい。いつもの事だから、刹那達には内

緒な。」

翔

（わかった。それじゃあな。）

そして、念話を切ると同時に、はやては全速力で、俺を女性陣の部屋の方へ連れ出す。

ゼロ

「なあ、お前は何がしたいんだ？」

はやて

「ちよっと待ってて。」

そして、待たされること十秒。

はやて

「お待たせや。入って。」

ゼロ

「ちよっと待った!!」

はやて

「なんや？」

ゼロ

「いや、今の流れからして、俺は『夜中が心配だから、外で眠っていて、何かあったら念話で伝えてくれへんか？』って流れかと思っただが、見当違いか？」

はやて

「うん。一緒に寝ようかと思って。」

ゼロ

『What? 何? もう一回整理しよう。』

Q1外で警備してくれと言ったか？

A 言っていない。

Q2 一緒に寝ようか？って言われた？

A 言われた。

Q3 つまり、はやては何をしに部屋に入ったんだ？

A 女性陣と交渉。

・・・は？』

はやて

「何フリーズしとんねん。中に入ろう？」

ゼロ

「え？ いや、ちょっと！」

そして、半場押し切られる形で、部屋に入った。

ゼロ

「改めて聞こう。俺は、ここに入っているのか？」

はやて

「ええに決まっとるやないか♪」

ゼロ

「なら、なんで祐希奈から、ものすごい量の殺気を感じるんだ？」

はやて

「無理やり押しきったからに決まっとるやないか。」

ゼロ

「おいおい。まあ、なんか落ちつかねえから、壁に寄り掛かって寝るわ。」

フェイト

「せっかくだから、こっちの方がいいんじゃない？」

ゼロ

「起きてたのか。いや、でも、いつもそういう風に寝てたからな。それに……。」

はやて

「それに？」

ゼロ

「月明かりが綺麗だからさ。」

はやて

「そうか。なら、私も見るかな♪」

ゼロ

「明日寝坊したら、顔引っ張って起こすからな。」

はやて

「わかってるって♪」

そして、二人で月を見る。ゼロは壁に寄り掛かり、はやてはその隣に座ってみる。

はやて

「きれいやな。」

ゼロ

「……俺の髪？」

はやて

「うん。」

ゼロ

「……ブレイブフォースとかにも言われた。そんなに綺麗かねえ？」

フェイト

「綺麗だと思うよ？」

ゼロ

「いつの間に来てたんだ？」
フェイト

「今。」

ゼロ

「そうか。」

はやて

「で、翔兄さんと何やってたん？」

ゼロ

「酒飲んでから、少しだけ模擬戦やった。」

フェイト

「なんで？」

ゼロ

「俺が行くのが遅かったんだろうな。心配していたんだと思う。」

フェイト

「確かに、翔はしっかりしてるしね。」

ゼロ

「それ、あそこにいる本人に言ってやれよ。」

そして、隣のベランダに居る翔を指差す。

はやて

「ずっと見てたんかな？」

ゼロ

「多分な。」

フェイト

「まあ、いいじゃん。」

ゼロ

「だな。・・・。」

フェイト

「ゼロ君？」

ゼロ

「・・・。」

はやて

「寝た見たいやね。」

フェイト

「そうだね。でも、こうしてみると、ホントに綺麗だね。」
はやて

「同感や。」

ゼロの髪は月の光にあたったところだけ、黄色く、光っていた。

はやて

「私たちも寝ようか？」

フェイト

「そうだね。」

そして、二人はそのままではかわいそうなので、来るときに着てきた上着をかぶせ、就寝した。

＊

翌日。ゼロ達は、荷物をまとめ、旅館前に出ていた。

ゼロ

「昨日と今日は、ありがとうございました。」

女将

「いいえ。またお越しく下さい。」

ゼロ

「そうします。それでは。」

こうして、不死鳥温泉でのちょっとした旅行は終わりを迎えた・・・
あ、そうだ。

ゼロ

「どうしたんだ？」

いや、ちよつとしたお知らせと、翔達に知らせることが。まあ、シオンはカオス作るために呼んだんだけど、作れなかったな。

シオン

「俺呼ばれた理由そんななの！？」

放つときまして。えゝ今回、番外編をやらせてもらった理由は三つ

1、次回から、2部入ります宣言。

2、作者の描写向上とお礼。

3、我がキャラクター達の再認識。

・・・ってところ。で、1はもういいな。次回から二部に入り、舞台は、地球！THE EARTHです！今後とも、シクヨロです♪

ゼロ

「おいおい。」

後、お礼。テストメントさん、東吾さん、ヨシユアさん。番外編の御協力ありがとうございます♪

その内、ゼロ達もそっちに向かわせますので♪

ゼロ

「俺に・・・飛べと？」

そうだよ♪お前はEW始まったところから、カナンと同じ扱いだから。

ゼロ

「うおい!! 違うから!!」

祐希奈

「え? 同じじゃないの?」

ゼロ

「おい!」

また、放りまして。その時はゲスト召喚もお願いしますね♪

ゼロ

「そして、何気に介入しようとするのな。」

その通り♪で、ラスト。それぞれの作品の居残り組に、ちゃんとDVD配つといたから。心配すんな。ノン修正、ノーカットだ♪

ゼロ

「いや、なんでだよ。」

面白そうだから。ほら、シオンに十字を切った切った♪

ゼロ

「ああ。了解した。」

そして、十字を切る。

シオン

「なぜに!?!」

やっぱり、アリサさんとすずかさんにお灸をすえられると思うから♪

ゼロ

「じゃあ、みんな送るぞ。」

そして、アリシア、シオン、翔、カナン、ヴィヴィオ、祐希奈様を元の場所に送った。

ゼロ

「これ以上延ばされても困るし、ツッコまないわ。」
なのは

「たしかにね。」
フェイト

「うん。」

それでは、番外編。これにて、閉幕！！

番外編♪L e t、 s G O♪不死鳥温泉♪ ゼロ達のプロフィールも公開します

えー。改めて。テストメントさん、東吾さん、ヨシユアさん。この度はどうもありがとうございます♪

読者の皆さん。次章も宜しくお願いします♪

第2章第1話一あの邪神とケリをつけてから半年・・・。

ZERO

「前書きコーナー♪」

わ〜♪

ZERO

「ゼロ、結婚おめでとう♪」

ゼロ

「どうもありがとう。で、前から思ってたんだけどさ。」

ZERO

「どしたの？」

ゼロ

「何で、お前はアルスとして出てこないんだ？」

ZERO

「それが運命^{さだめ}さ!」

ゼロ

「まあ、確かにな。って、納得できるか!」

ZERO

「放つときまして。第一章、運命の力lord of destiny
iny〜完結おめでとう♪」

ヒューヒュー♪

ZERO

「センキュー。センキュー。」

ゼロ

「お前は、どこぞの芸能人じゃああああ!」

一撃ッ！一

ZERO

「うがつ!!」

ゼロ

「はぁ。はぁ。全く。魔法少女リリカルなのは 戦場の絆—end
less waltz—。」

一同

「始まります。」



「ふう。今日の献立はこんなかな。さて、作るか・・・。」

邪神との決戦から、半年。ゼロははやととフェイトと結婚し、八神
ゼロ・S・A・ハラウンとなっていた。

「ゼロ、おはよう。」

「おはようフェイト。」

今の時刻はAM7:00。ゼロは、アリシア、はやと、フェイトと
共に、四人暮らしをしている。この事に対して、ゼロは一発だけ、
プレシアから、雷をもらったのは余談である。

「ゼロ君、おはよう。」

「“君”付けは良いって言ってるだろ。まあ、良いけど、おはよう。
はやと。」

「まあ、ええやないか。今日なんなんや？」

「冷蔵庫の中空っぽだったからな。今日は和食作ろうと思って。」

「へえ。手伝おうか？」

はやてが聞く。

「いや、それよりアリシア起こしてきてくれ。」

「わかったわ。起こしてくる。」

そう言っ、アリシアの部屋に行こうとした時、

「あ。そうそう、アリシア起こすときに、『今日はどれくらい成長したかな?』とか言っ、変なこととして起こすなよ。」

包丁を弄りながら、はやてに言う。

「うゝ。わかったわ。」

はやてはそう言い、ずいぶんと気分が落ちたように、アリシアの部屋へ向かう。

「やる気だったようだね。」

フェイトが苦笑いを浮かべ、言う。

「確かにな。」

そして、火を入れる。と、その時、アリシアの部屋から、走ってくるものすごい物音がした。

「起きたな。」

「そうだね。」

そして、ゼロの方へアリシアがダッシュで向かって、

一撃・倒一

飛びかかって、それに耐えきれず、ゼロは倒れる。

「おはよう♪ゼロ♪」

「『おはよう♪』じゃねえよ。毎回言ってるだろ。料理中は邪魔するなって。」

「ごめんなさい。」

「まあ、良いけどさ。おはよう。アリシア。」

「うん。おはよう。」

「っと。離れてくれないか？」

他から見れば、ゼロにアリシアが乗かっている状態。

「ごめんごめん。」

そして、離れ、

「さてと。もうすぐで完成だから、リビングでTVでも見て待っててくれ。」

「なぜにTV！？テレビって言えはいやろ！？」

とはやてがツツコミを入れ、

「まあ、ちょっとしたジョークだ。ホントに向こう行って待っててくれ。」

「「はい♪」「」」

ゼロは軽く流し、料理を作る。

＊

「出来たぞ♪」

「「はい♪」「」」

そして、みんなを呼び、手伝わせる。

「よし。それじゃあ・・・。」

《いただきます。》

そして、4人で合掌。手をつけ始める。

「そう言えば、ゼロ君って変わったよね。」

フェイトが言う。

「そうか？俺が変わったと思うのは、はやてに料理教わって、料理の腕がプロレベルになった事だぞ。」

「そう言う意味じゃなくて！」

フェイトが喝を入れ、続ける。

「・・・優しい笑い方するようになったってこと。」

「そうか？」

それに、みんなは肯定する。

「そうか。」

そして、笑う。

「それだよ。それ。」

「・・・なるほどな。」

「でしょ？」

そして、ゼロは確信する。これも、あいつが残した、感情なんだな・・・と。

＊

「ご馳走様。さて、食洗機にかけて、それから着替えないな。」

そして、ゼロは席を立ち、食器を食洗機にかけ、自分の部屋に行く。

「・・・なんで、ここに居るんだ？」

そこには、はやてがいた。

「いや、その、あれや！忘れ物を・・・」

「取るくらいならさっさと戻れ。着替えができんだろ。」

「うゝ。わかったわ。」

そして、出て行ったのを確認すると、十秒で着替えを済ませ、ブレイブフォースの起動チェックを済まし、車のカギを取って、外に出た。

「ふう。風が気持ちいいな。」

そして、風を感じ、車を出して、六課へ行く。これがいつもの事なのだが・・・。

（ゼロ。聞こえるか？）

念話が入った。

（・・・アルスか？なんか問題発生か？）

（ああ。二つほどな。）

（で？なんだ？）

（ジェイル・スカリエッティが脱獄したのが一つ。もう一つはスカリエッティが第97管理外世界に行った事だ。）

（第97管理外世界・・・！）

（そう。地球だ。あそこは、管理局の魔導師がいるにはいるんだが、科学が発展しすぎて、もう、信じている奴はいない。）

（なるほどな。わかった。こっちでも、考えるわ。）

（恩に着る。）

（良いつて。別に。俺とお前の仲だ。）

（すまない。俺は今仕事が入ったから、後はお願ひする。）

（了解♪）

そして、念話を切る。とその時、

「お待ちせ。」

フェイト達が来た。

「おう。話したい事がある。なのはも含め、色々とな。」

真剣な表情でゼロは言う。

「どんな事なの？」

フェイトも聞く。

「まず、車に乗ろう。遅刻する。」

今の時刻はAM 8:30。

「それもそうやわ。」

そして、はやてが肯定し、車に乗った。ちなみに運転手はゼロだ。

「で、なんなの？話って。」

フェイトが聞く。

「めんどいから、端折るけど、まず、スカリエッティが脱獄。で、地球に向かった。」

その時、場の空気が5℃下がった。

（ゼロ？）

そして、アルスからまた念話が入る。

（どうした？）

（新たな情報だ。スカリエッティはロストログアを集めるつもりで、戦闘機人も何体か脱獄してる。）

（嬉しいと嬉しくないの両方だよ俺は。）

（なんか、変なタイミングだったみたいだな。）

（今、絶賛空気が重い中だったんだよね。じゃあ、念話を切るぞ。）

そして、念話を切る。と同時に六課へ着いた。

「まあ、詳しい話は隊長室でしょうや。」

「それもそうだね。」

フェイトが肯定する。

「じゃあ、行こう。」

そして、一同は車を降り、隊長室へ向かう・・・。

*****機動六課 隊長室*****

「さてと。みんな集まったな。」

隊長室には、はやて、フェイト、ゼロ、なのは、ヴィータ、シグナムが座っていた。

「これから話す事は、紛れもない真実。心して聞いて欲しい。」

そして、みんなは頷く。

「まず、一つ目。ジェイル・スカリエッティが脱獄した。」

そして、フェイト、はやて、ゼロ以外が驚愕する。

「・・・二つ目。なぜ脱獄したか。それは、ロストログアの研究、使用。それが主な目的。」

そして、少し間を置き、繋ぐ。

「三つめ。奴は戦闘機人数名と脱獄。そして、第97管理外世界。そこに向かった。」

その時、みんなの顔が驚愕の色に変わった。

「そう、地球。だから、ここに集めた。少なからず、関係のある人に聞いて欲しい問題だったからな。六課としてもこっちが本業。判断ははやてに任せる。」

「ちょっと待てよ。」

その時、ヴィータが口をはさんだ。

「なら、なんで私らに話して、後ははやてに任せるんだ？それで、誰の情報だ？」

その疑問にゼロが答える。

「一つ目の答え。決めるのは隊長だ。で、それを無視すると、命令無視になる。さらに言えば、お前らにとって思い入れの深い場所。だから、俺は判断をはやてに任せる。」

二つ目、この情報はアルスの情報だ。あいつは情報網にハッキングして、痕跡も残さず情報を抜きとるエキスパートだからな。だから、間違いないだろう。」

そう、簡潔だが、そう答える。

「で？どうする？はやて。」

ゼロがはやてに聞く。

「もちろん、スカリエッティを止める。」

そして、ゼロは少し笑った。

「よし。なら、人数はこちらで決めさせてもらっていいか？」

さらに、ゼロは提案する。

「ええで。」

はやては了解する。

「14〜20人だ。」

そして、答える。

「ずいぶん幅が広いんだね。」

なのはが言う。

「一応な。戦力は多めに見積もった方がいいしな。・・・言い方が悪かったな。謝る。」

言い終わった後、少し考えて言う。

「で、私たちに決めろと？」

シグナムが疑問をぶつける。

「ああ。俺じゃあ、絶対に戦力が偏ると思うから。バランス良くても、14人が最低。」

そう言って、ゼロは息を吐く。

「・・・まあ、俺が考えたのは、FW陣全員、隊長陣全員、シャマル、刹那、アリシア、ザッファイ・・・ってところ。けど、これじゃあ、少しだけ足りないんだよな。」

「？十分だと思うけど・・・。」

フェイトがそう言う。

「速さの担当が全然足りないんだよ。確かに、パワー、回復・・・それは良い。だけど、速さが少しだけ足りないんだ。フェイト一人じゃ無理だろ？」

「・・・確かに、テストロッサ一人では、少しな。」

そして、みんなが頭を捻り、考える。

「あ。そうや！」

そして、何かを思い出したように、はやては指を鳴らす。

「このオーダーにヴィヴィオを入れればいいんやよ。」

「あゝ。」と、そこにいた全員は思い出したように頷く。

「なるほどな。じゃあ、連絡しないと。」

ゼロはシャーリーに連絡しようとしたところで、「ちょっと待て。」とヴィータから声がかかった。

「アギト達はどうするんだ？」

そう言ったところで、空気が少しだけ固まった。

「・・・そう言えばそうだったな。」

苦笑いで言う。

「確かに。でも、人数は満たしてるよね。」

フェイトが続ける。

「じゃあ、決まりだな。あ、そうそう、メンテは俺が受け持つから。」

シャーリーとかにも悪いからと言って、その事を了解。その後、改めて連絡をした。

＊

「・・・さてと。準備完了♪」

ゼロは地球に向かうということになって、準備を進めていた。

『・・・けど、本当なら、大事だな。ちゃんとした準備をしなくちゃな。』

そして、ゼロは術式を確認し、いつでも使えるのを確認した後、少しだけ壁に寄り掛かって寝た。

「「ゼロ君？」」

寝ようとした時、タイミング悪く、フェイト達が来て、扱けた。

「大丈夫？」

フェイトが心配する。

「ああ。あまりの絶妙なタイミングに扱けただけだ。で、何？」

ゼロは体勢を戻し、はやて達に向く。

「準備できたかなって思おてな。まあ、ゼロ君の事やから、大丈夫やとは思うけど、一応な。」

そうはやては言った。

「ああ。俺は大丈夫。アリシア達はどうかんだ？」

「アリシアちゃんも大丈夫や。」

はやては答える。

「そうか。なら、地球へ行くか！」

そして、ゼロ達はスカリエッティを止めるため、はやて達の故郷を守るため、今、地球へ参る！

NEXT STAGE，，



ZERO

「後書きコーナー♪」

わ〜♪

ゼロ

「今回は質問なしだな。トークでもしますか。」
ZERO

「そうだな。みんなでお茶でも飲みながら。」

＊

ゼロ

「さて、メンツも揃ったところで。この作品、何処が駄目だと思う？」

スターゲイザー

「描写が細かすぎて鬱陶しいところですかね？」

刹那

「日常篇がちよつとな。」

スターゲイザー

「後は、あれですね。キャラが使いきれないところですかね？」

ゼロ

「やっぱりそう思うか。けど、治せないんだよね、これが。」

ジェナス

「大変だな。」

ゼロ

「作者も色々とな。描写は烈風さんに言われて、修正中で、まだ、全然何だだよ。後、感想が少ないのはなんで？」

ジェナス

「やっぱり、魅力がないからじゃないのか？ ほぼパクリで、できてるし。」

刹那

「それは言える。後、ゲスト出演の押しが足りないんじゃないか？ スターゲイザー

「やっぱり、そうですね。後、ヘタレキャラがいないってこともありますね。」

ゼロ

「この作品のヘタレね……。カナンみたいな奴……。カナンみたいに吹き飛ばせばいいのか……。でも……。」

刹那

「打開策なしだな。まあ、うちはオリキャラで作られてる所もあるし、それも一理あるかもな。」

ゼロ

「俺的にはジェナスと刹那のキャラが超越ってると思うんだよな。これも作者の技量不足か……。」

スターゲイザー

「なんなら、だめな部分を遠慮なく募集して、作者をきちんとすればいいと思いますよ。」

ゼロ

「だな。……と言う訳で、読者さん!! 何処をどう工夫すればいいのか、意見をください!!」

刹那

「ファンレターも募集するぞ。」

スターゲイザー

「お待ちしてますね♪あ、時間だ。それでは次回まで、R I D E ・ ・ ・ .」

一同

「ON!!」

第2話―任務開始。―

「さて、みんな集まったな。」

とはやてが言う。そこにはゼロを含め、14人が来ていた。

『改めて任務開始か。あの術どこで作り上げよう・・・？』

ゼロはそんな事を考えていた。

「準備できました。」

そして、シャーリーから連絡が入る。

「ありがとうな。じゃあ、行くよみんな！」

《了解！》

そして、はやてが声をかけ、みんなが答える。

*****第97管理外世界 地球*****

「・・・着いたな。」

そこは林。ゼロがあたりを見渡して言う。

「うん。」

それにフェイトが答える。

「地球さーん！初めましてー！」

ヴィヴィオがとても大きな声で言う。

「うっさい！」

それをアリシアは鉄拳制裁。

一撃一

「痛っ！何するのく？アリシアちゃん。」

今にも泣きそうな顔でヴィヴィオが問いかける。

「今の時間は朝だよ、ヴィヴィオ。もし、これで誰かが起きちゃったら迷惑でしょ？」

わかりやすいようにアリシアは説明する。

「はーい。」

それにヴィヴィオが返事をした。

「わかったならよろしい。」

そうアリシアが言った。

「鉄拳制裁！！」

一撃ッ！一

その時アリシアが頭を押さえ、呻いた。
ゼロの拳から、少しだけ煙が上がっていた。

「痛いよ、ゼロ。何するのさ！」

そして、拳を作り殴りかかるが、ゼロは額を手で押さえ、止める。

「お前の態度が何となくな。」

頭をかきながらゼロは答える。

「むう。」

アリシアは頬を膨らます。

「まあ、良いじゃねえか。ヴィヴィオがはしゃぐのもわかるだろう？
お前だってここに初めて来た時、念話で付き合えとか言って、ずっと話させたのは、何処のどいつだ？」

「うゝ。」

「な？・・・そろそろ茶番を終えた方がいいな。」

そして、ゼロははやての方を見る。

「じゃあ、あまり無理しないようにな。それじゃ解散。」

そう言って、皆解散。

「そう言えば、ゼロ君はどうするんや？」

はやてが聞く。

「野宿でいいだろ。」

さらっと流す。

「いや、駄目だよ。私の家に……。」

「よし。訳を話してやる。まず、フェイトの方はアリシア、エリオ、キャロだろ？で、あまり俺の方で迷惑掛けて、寝る所を増やしたくない。

……次にはやての家。お前の家はヴォルケンリッター守護騎士がいるから無理。

で、最後になのはの家はスバルとティアナとヴィヴィオだ。年頃の女の子4人と暮らすとなると、とてもじゃないが、俺の気が持たない。だから野宿だ。」

その時、聞いていたなのは達は呆けていた。

「じゃあ、そう言う訳で。」

そして、ゼロは立ち去ろうとする。

「「「待った！」」」

そして、一気に肩を掴まれ引き止められる。

「まだ何か？答えられる範囲なら答える。何もなかった場合は野宿

決定だな。」

「刹那君はどうするの？」

その時ゼロの顔が少しだけ歪んだ。

「大丈夫だ。前、ナンバーズとしてここに来て、日給1億稼いでたからな。それで、分譲マンションを借りたからさ。刹那にはそこで住んでもらおうと思って。」

・・・それに、ここに来た時に、拾ってもらった恩人にあいさつしようと思ってな。」

「「「恩人って？」」」

なのは、フェイト、はやての3人の声がそろった。

「金持ちさ。まあ、なのはは殴った事あるかもな。」

そう言って、その場を立ち去った。

「なのはちゃんが殴った事のある人物って・・・。」

はやてが考え、

「もしかして・・・。」

フェイトが少しだけ思いだし・・・。

「・・・アリサちゃん!？」

なのはが思いついたように言った。

＊

「・・・さて、どうやって入るか。」

ゼロは今、バニングス家の前。

「ん？」

「・・・。」

その時、アリサと目が合って・・・。

「よ、よう・・・。」

「デストロイ♪」

一撃ッ！

そして、初っ端から蹴りを入れられた。

「ぐはっ！」

「久しぶりねえ。この私を10年近く待たせておいて、御免なさいはなしかしらあ？」

そして、ものすごい剣幕で睨まれた。

「すみません。」

そして、謝る。

「まったく、まあ、良いわ。その代わり、肉弾戦を・・・」

「いや、危ないでしょ!」

肉弾戦をしようと企むアリサに突っ込んだ。

「・・・なら、バニングス家の最大の兵器を・・・」

「それも十分危ないから!!」

そして、アリサがとてつもなく危なそうな事を発言したので、止める。

「・・・まず、言いたい事があるんだって、ホント、そう言うの直して? 疲れるから。」

「で? 言いたい事って何なのよ。」

そして、少し息を吐き、

「ただいま。アリサお嬢様。」

そして、悪戯っぽくそう言った。

「お帰り。馬鹿執事。」

そして、アリサも返す。

「じゃあ、それだけだから。お前も忙しいだろうし・・・」

「忙しくないわよ。」

言いきる前に、アリサが答える。

『は?』

そうゼロは思った。

「いや、あれだろ? 社長だろ?」

「まあ、そうだけど、どうせ他の人がやるっしょ。」

そして、ゼロが聞き、アリサがそれが普通みたいな感じで返す。

『悪魔だ・・・。』

そう、ゼロは思った。

「だから、上がって来い、馬鹿執事。」

「馬鹿は余計だ。でも、上がってってやるよ。」

「何その『仕方ないから上がってやるよ。』ってノリは。」

「俺はそもそもそんな気分だ。」

そして、会話をしながら入っていく。

「行ったね。」

なのは言う。

「そうだね。」

フェイトが継ぎ、

「でも、こんなことしていいの？三人とも。」

すずかが言い、

「ええんや。私が許可する。で、入る？」

とはやてが言う。

「言われなくても！」

そして、なのはとフェイトは頷き、

「そうやな。入ろうか。」

そして、三人はアリサ宅へと向かう。

＊

「そう言えば、ゼロの髪ってきれいよね。」

アリサが唐突に言う。

「みんな言うな。そんなに綺麗か？」

「うん。」

「『うん。』て、はあ。もう逃げ道がない事に俺も気付くべきだな。」

そして、ゼロは俯く。

「諦めなさい。」

そして、紅茶を啜る。ちなみに、ここはアリサの部屋で犬達がたくさんいる。

「ああ。そうする。」

そして、ゼロはあたりを見回す。

「? どうしたの？」

「いや、なのは達が来た気がしてな。」

そして、その時

「お嬢様。なのは様達が来ました。」

そして、執事が上品に扉を開け、報告する。

「入ってもらって。」

アリサが言うと、

「かしこまりました。」

そして、上品に扉を閉め、出ていく。

「あ、ちなみにさ。アリサ。」

「ん？何？」

そして、アリサは首を傾げて聞く。

「明日で、十年だ。だから今日は9年と364にn・・・」

「T—LINKナツ〇ル！！」

一撃！—

アリサはゼロの顔面に拳を入れた。

「ぐはっ！」

「いちいちうっさいわよ！」

「ごめんな？」

そして、ゼロは謝罪した。

「と言うより、よく覚えたわね。それ。」

「まあね。あまり、昔な気がしないのが理由かな。色々楽しかったし。」

ゼロが言い、アリサはそれを流す。と、その時、

「お連れしました。」

執事が言う。

「わかったわ。どうぞ。」

「アリサちゃん。こんにちは。」

「こんにちは。すずか。」

「」「ただいま。」「」

「お帰り。なのは、はやて、フェイト。」

そして、挨拶をする。

「俺、邪魔かな？」

「そんなことはないわよ。」

アリサが言う。

「そうか。お嬢様♪」

それに軽くキレたアリサが、

「調子に乗ってんじゃないわよ！」

ナツクルをかますが、それをゼロはかわした。

「まあまあ。」

「ん？ちよつと待って。今、ゼロ君、アリサの事をお嬢様って……」

フェイトが気付き、アリサに聞く。

「ん？ああ。この馬鹿執事は、この私の、前の専属執事よ。」

そう答える。

「「……ええええええ!!」」

なのは、フェイト、はやての三人は驚く。

「あれ？気づいてなかったの？てか、この馬鹿執事は言っただけでなかった訳？」

それに、三人は肯定する。

「なはははは。言う時がなくて、それで今になったんだよね……」

そして、苦笑いして言う。

「・・・あのさあ、ホントあんたは体術しかできない訳？」

アリサが呆れたといった顔で言う。

「いや、もう何を守ればいいかわかるから。感情が俺の中にはもうあるから、大丈夫。」

そして、懐かしむように言う。

「あ、そう言えば、すずかも久しぶりだったな。」

「あ、うん。そうだね。」

そして、ほのぼのとした雰囲気流れる。そして、だんだんピンク色の空気へ変わっていく・・・。

「ラブんな!!」

一撃! —

「ぐはっ!」

そして、壁にゼロがめり込む。

「ちょ、ひでえなオイ。少しだけ、関節がずれたじゃなか。」

「あんたにはその位が丁度いいわ。」

そして、アリサは言う。

「やれやれ。よいしょっと。」

パキン・・・と軽い音が部屋に響く。

「ゼロ君？何したの？」

フェイトが聞く。

「何って、前した時みたいに、関節を元の位置にずらしたただけだぞ？」

いたって普通にゼロは言った。

『相変わらず無茶苦茶だ・・・。』

そこにいたみんなはそう思った。

「・・・さて、そろそろ時間だし、お暇するわ。」

「もうちょっとゆっくりしとけばいいのに。」

すずかが言う。

「いや、別にいいよ。それにここにいるとな、アリサが俺をサンドバッグにしたいやな思い出が甦るからあまりここに居たくないんだよな。」

そう言って、出ていく。

「やめてください！」

そんな声が聞こえた。

「良いじゃねえか、姉ちゃん。」

そんな男の声も聞こえた。その方向を向くと、手にナイフを持っていた。

「・・・やめてやれよ。気取った兄ちゃん。」

そう声をかけ、金の瞳の女性に話しかける。

「今の内にどっか隠れてな。」

「はい。ありがとうございます。」

そして、女性は走り出す。

「おい、お前、邪魔すんなよ。」

そして、男が話しかける。

「黙れ。」

「はあ？」

「黙れと言っている。」

「お前、ただじゃ帰さん!!」

そして、男はナイフを向け、走り出す。

「刺！」

そして、左手にナイフが刺さり、血が出る。

「先手は譲ったぞ。」

そして、ゼロは回し蹴りを繰り返し、空に蹴りあげる。

「撃ッ！」

「さっきの威勢はどうした。俗物。」

「ぐっ！なめるな！」

ゼロが言い、男は拳を作り、殴りかかるが、ゼロはナイフを抜き、左手で止める。

「なっ！」

「温いな。こんなんじゃない、女はお前に寄り付かんよ。ではな。」

男の驚きを尻目にゼロは左手で頭を掴み、重力に身を任せ、一気に落とす。

「撃」

「……終了っと。もう出てきていいぜ。」

ゼロは男の頭を離し、その場に放置。その後、さっきの女性が出てくる。

「あの、ありがとうございます。」

「お礼ならいい。」

「あ、その、左手は大丈夫ですか？」

女性は、恐る恐る聞く。

「ん？ああ。大丈夫・・・っ！」

その時、激痛が走り、左手を抑える。

「大丈夫じゃないですね。治します。」

そして、女性は左手に魔力を込め、ゼロの手にかざした。

「！、お前・・・貴方は魔導師なんですか？」

「普通に話してくれて構いません。ちなみに、囑託です。宮野桜みやのさくらって言います。サクラって呼んでください。」

そう笑って言って、自己紹介をした。

「俺は八神ゼロ・S・A・ハラオウンだ。宜しくなサクラ。」

「ゼロってまさか、あの邪神を倒した!？」

「ああ。そうだが。」

「そうなんですか。なんか、失礼をしたみたいですみません。」

そして、桜は俯く。

「別にいいよ。俺はそんなに気にしてないし。俺の事もゼロって呼んでくれ。」

そうゼロは笑って言った。

「はい。・・・終わりました。」

「へえ。すげえな。ん？」

「そうしたんですk・・・。」

「静かに・・・。」

そして、桜を五月蠅くしないようにする。とその時、ゼロが真上を見て、

「やっぱりな・・・。」

確信する。

「やっぱりって・・・。」

「すまん。結界が張ってあるわ。」

そう言った途端にガジェットが出てくる。

一斬っ！

それを斬り裂く。

「また、少しだけ戦うことになるな・・・。」

そう、眩き、地球での任務は始まった。



ZERO

「後書きコーナーNEO♪」

デデッ！デデッ！デデッ！デーデー！デッデッデッデッ！デ
ー・・・デデデン♪（ド○ンがゴッドフィ○ガーを放つときのB
GM。）

今回の担当

・刹那 ・スターゲイザー
・ジェナス ・桜

刹那

「始まったな、後書きコーナーNEO。ちなみにこのBGMは作者
の趣味だ（毎回変わる）。今回の担当ー（これも毎回変わる）も明
記した。」

ジェナス

「てかさ、これはあれか？EOSE見た作者がおもしろいなあ。とか

思って入れた結果がこれか？」

スターゲイザー

「なはははは。違うと思いますよ。ちょっとアレンジしてます。」

刹那

「まあ、良いか。で、今回は初登場だな。桜。」

桜

「まあ、そうだね。なんだか、少しだけ不安。」

スターゲイザー

「心配しなくて大丈夫ですよ♪」

桜

「だよね♪」

ジェナス

「飲もう!!」

スターゲイザー・桜

「はい!」

刹那

「待て。このコーナーをやり投げにするな。」

ジェナス

「そうだな。じゃあ、今回のおさらい。」

桜

「友人との再会、そして、新たな仲間、境地へ・・・だね。」

スターゲイザー

「なぜ境地なのかはスルーしてください。それでも気になる人は質問してください。」

ジェナス

「ちなみに、早く慣れさせるために次の話で残りの二人＋αを出すつもりらしい。」

桜

「ホントに大丈夫かな？」

刹那

「大丈夫だ。．．．そろそろ時間だ。それでは次回までfly t

he．．．．．」

一同

「sky!!!!!!!!!!」

第3話―新たな人物、地球でのひと時―

「また、少し戦うことになるな・・・。」

そう言った瞬間、ガジェット1型が出てくる。

「サクラ。デバイスを起動させて、援護してくれ。」

そして、桜に言う。

「はい。わかりました。」

そして、返事をして、桜はデバイスを掲げ

「アルテマ、セットアップ！」

『了解。』

そして、バリアジャケットを纏う。両腕にガントレットをし、黒いシャツとロングスカートに蒼いコートを羽織っていた。

「じゃあ、頼むぜ。」

「はい。」

そして、散る。

「来たれ、三芒星。我が手に星の弾丸、月の弾丸。それを使うにふさわしい銃を召喚せよ！」

ゼロは三芒星を描き、呪文詠唱をして三芒星の中に手を入れ、黒と白の銃を取り出す。

「ムーンライト・ハンドガン 月の光の短銃、スターライト・ハンドガン 星の光の短銃、召喚完了。」

そして、ゼロは銃口に黄金色の魔力を溜め、上に向ける。

「行くぞ！アクセルシューター！！」

『アクセルシューター・多弾使用。スタンバイ完了。』

そして、ブレイブフォースが応答する。

「気が効くな。ブレイブフォース。」

『いつもの事でしょう？』

「まあな。さて、敵さんもいい感じに集まってきた事だし、放つぞ。」

『了解。』

そして、

「ファイア！！」

放つ。その閃光は分離していき、その数は一万にもなった。

一撃！一

黄金色の閃光がガジェットを貫く。

「よし、三分の一は減ったな。」

ゼロは呟く。そして、念話を繋ぐ。

（サクラ？聞こえる？）

（はい。聞こえます。）

（これから、でかい一撃ぶっ放つから、障壁を張ってしてくれ。）

（わかりました。）

（それとき、敬語使わなくていいから。俺がおまえにそうしてるように。）

（・・・わかったよ。ゼロ。）

（そうそう♪じゃあ、切るぞ。）

（うん。）

そして、念話を切る。

「さあ、一ちよ行きますか！」

＊

その頃、桜はと言うと、

「はぁ。あんなこと言ったけど、ホントに倒せるのかなぁ？」

『援護へ回ってくれ。』そう言われ、アルテマをフォーム1のスナイパーライフルにして待機していた。

「ファイア！」

ゼロの声を聞き、その方向を向くと、一万程のスフィアを一気に操り、その全てをガジェットにヒットさせていた。

「・・・凄い・・・。」

その言葉しか出せなかった。桜もある程度は操る事は出来るが、あそこまで精密なコントロールは無理だからだ。そして、その時、

（サクラ？聞こえる？）

ゼロから念話が入った。

（はい。聞こえます。）

（これから、でかい一撃ぶっ放すから、障壁を張っといてくれ。）

（わかりました。）

（それとさ、敬語使わなくていいから。俺がおまえにそうしてるように。）

そして、一息吐き、

（・・・わかったよ。ゼロ。）

（そうそう♪じゃあ、切るぞ。）

（うん。）

そして、念話が切れる。

「さて、アルテマ？」

『了解です。桜。』

そして、アルテマは障壁を展開。桜はゼロを探し、見る。

「なっ！あんなの作れるの！？」

その視線の先には、黄金色の魔力が、集束し、半径100メートル位の大きさになっているところ。

『桜！Iフィールド張ります！』

「止むを得ないわね。頼んだよ！」

『了解！ファンネル起動。』

そして、桜の周りにファンネルが浮遊し、桜の周りにフィールドを形成した。

*

「行くぞお！俺のアレンジ魔法！」

そして、魔力の収束が終わり、ミッド式の魔法陣を作る。

「二撃必中！ムーンライト！」

そして、**構え**、

「ブレイカー！！」

一気に放つ。その一撃はガジェットを巻き込み、少しでも閃光を発生する。

「……閃光波！」

そうゼロが言うと閃光は弾け、余波が発生する。その時、桜のＩＦワールドにひびが入った。

— 擊！！！！ —

そして、余波が止む。ゼロのバリジャケットは全身の接続箇所がずれ、蒸気を発していた。

「ふう。結界は壊れたし、ガジェット反応もなしと。」

ゼロはあたりを見回して確認を済ます。ちなみに桜はＩフィールド全体にひびが入り、とても危険な状態だった。ゼロは桜の近くに降り立った。

「もう大丈夫だよ。」

そう言うと、桜はIフィールドを外し、

「・・・ゼロ。貴方は一体、何者？」

そう聞いた。

「俺は運命の力の現在の主。それで、月光の書の持ち主だ。」

そうゼロは答えた。

「そう言う事じゃなくてさ。今リミッターあり？」

「ああ。そうだよ。けどさ、今の一撃はSランクでよかったけど、リミッター外したらきつとEXだぞ。」

そう言った瞬間、桜に寒気が走った。

「なはははは。・・・凄いね。ゼロは。」

「そうか？」

「だってさ、あんなに多くのスフィアは操っちゃうし、あんな大技放てるし。」

そう俯いて言った。

「・・・俺には戦って守ることしかできないから。」

「え？」

桜がもう一回聞き直そうとするのを無視して続ける。

「だから、戦って守る。俺は回復系が使えないからさ。出来るのは魔力補助くらい。だから、戦う事も出来て、さらに回復魔術も使える・・・俺は、そんなサクラが羨ましいよ。」

そして、ゼロは桜の方を向き、笑顔で言う。

「・・・はは。そう、だよ。別に戦いが全てじゃないよね。」

そして、桜も笑顔で言う。その顔には涙が付いていたが。そして、ゼロは桜のそばに行き、涙をふく。

「お前みたいなかawaii人が、そんな顔しちやいけないよ。な？もつと、笑顔を見せてくれよ。」

そうゼロは優しく笑って言う。

「うん。」

そして、桜も笑顔で返す。

「お、良い顔になったな。」

そして、ゼロが言う。

「ん？桜姐じゃねえか。こんなところで何してるんだ？」

そして、一人の男がやってくる。

「知り合いか？ サクラ。」

ゼロが言う。

「うん。門矢侑斗君。かどやゆうと知り合いなんだ。」

桜が説明する。

「なあ、桜姐。そいつは誰なんだ？」

侑斗が聞く。

「こちらは八神ゼロ・S・A・ハラオウンさんだよ。」

桜が説明する。

「え！？ あのだ、フェイトさんとはやてさんをはべらせてる！？」

侑斗が驚く。

『微妙に違うぞ！！』

とゼロは思った。

「え？ そうなの！？」

と桜が言ったので、何処から取り出したハリセンで、

「「「違うわぁ!!」」」

と二人を叩く。その時、三人で叩いたのを不思議に思い、隣を見るとはやてとフェイトがいた。

「なんで、お前らここに居るんだ？」

ゼロが聞くと、

「「そりゃあ、ゼロ君を呼んで、焼肉やろうと思ったからでしょ？」」

と二人は息ばっちりで答える。

「左様でございますか。」

とゼロは言う。

「「で、その二人はどちら様？」」

二人がそう言った瞬間、ゼロは扱けた。

「「知らないで叩いたんかい!!」」

そして、侑斗とゼロがツツコミを入れる。

「「うん。」」

とフェイトとはやては言った。

「まあ、いいや。こちら、女性の方は宮野桜さん。」

「初めまして。」

と桜は挨拶する。

「で、○八っぽくツツコミを入れたのが……」

「誰が○八じゃあ!!」

と侑斗がツッコミを入れる。

「うっさいな。黙ってないとさっきの一撃お前に入れるぞ馬鹿野郎で、門矢侑斗君。」

「初めまして。」

と侑斗も挨拶する。

「これはごく丁寧にも。」

とはやてとフェイトも挨拶をする。そして、俺の手を取り、方向転換。

「「じゃあ、そう言う事で！」」

そして、二人が言うど、走り出した。

『オイ イ イ イ イ イ イ イ イ イ！！！！！』

そうゼロは思った。だが、お構いなしに二人は引っ張っていく。

*****はやて宅*****

「さあ、着いたよ。」

二人は息を切らし言った。ちなみに老いとかそんなではない。なぜか。あそこから、ここまで1km近く離れていて、それでも全力で走ってきたからである。

「あ、ありがとう。二人とも。」

ゼロは良く走ったな、この二人。と言う顔で言った。

「あ、来た来た。」

とそこに現れたのは、なのはだった。

「ういっす。」

とゼロは返す。ちなみに今の時間はPM5:00。

「じゃあ、行こうか。」

「だね。／だな。」

そして、三人は入って行った。

「よっしゃあ！食うでえ！！」

はやてがついたなりものすごいノリで言った。

「じゃあない。喰うか。」

ゼロが言い、

《なんか字が違うよ!!》

とか他の人は思ったり。そんな私情を挟みつつ、手をつけ始めた。

「・・・なあ、はやて？」

「どうしたんや？」

はやてが肉をほおぶりながら聞く。

「お前ってさ、何で髪伸ばさないの？俺的には、肩まで伸ばせば、結構かわいい感じになると思うぞ？」

そうゼロは言った。

「そ、そうやろか？」

はやてが聞く。

「うん。絶対に。」

ゼロは肉を取りながら答える。

「なら、伸ばそうかな？」

とはやてが言い、また肉をほおぼる。

「うん。その方がいいよ。」

フェイトが言う。

「フェイトもそう思うだろう？」

ゼロが聞き、

「まあ、確かにね。」

と、フェイトも返す。

そして、この焼肉会は2時間弱くらい続いた。途中で例の様にシャルが酒を混入して、半端ない事になったのは余談であるが……。それで、酔っ払い組が落ち着いたところに、寝込んでしまい、ゼロはフェイトをお姫様だっこ、なのはをおんぶして行く。

「やれやれ。酒を混入したのが弱い奴だけでよかったよ。」

ちなみに、一部の酔っ払いは転送魔術で送ったが、それではゼロの体が持たないので、今この形で帰っている。

「しっかしなあ。こいつらなんで酒に酔うとなんか俺に甘えてくるんだ？」

そんな事を考えながら、高町家、別名翠屋に到着した。

「ふう。お兄さん達がいませんように……。」

そして、ドアを開く。

「いらっしやい……。」

「……。」

丁度そこに居た。

『なぜ、俺はこんな時に会う……。』

ゼロはそう思った。

「言っておきますが、誤解です。」

「何がだ……。」

なのはの兄、恭也が言う。

『やっぱりですか……。そうですか。でもさ、俺なんか悪いことした？ 木刀持たないでください。って言っても無理か。』

そうゼロは思う。とりあえず、打開策を出すために、訳を話す。

「えっと、これはですね、多分この出掛ける時に言ったと思います
が、はやてさんの家に行つてですね、それで、お酒に酔い、気付い
た時には寝ていたので、それでこういう形に……。」

「ほほう。なるほどな。つまり、はやてちゃんの家に行って、お酒を出させて、危ない事をしようと・・・。」

と、恭也が言う。

『解釈の仕方間違ってるよ!？俺はそんな趣味はないからね!？てか、どんだけシスコン!？』

とかゼロは思ったらしい。

「とりあえず話を・・・。」

「聞くものか!!」

そして、恭也は木刀で斬りかかる。

一斬!・斬!ー

その二太刀は、空を切る。

ゼロは全てを見切り、かわす。

「手を出したのはそっちですからね。知りませんよ。」

そう言い、髪を結う。

「上等だ。」

恭也も構える。

少しの間。先に飛び出したのは恭也。

ゼロは瞳を閉じ、風を感じる。

一撃！一

そして、恭也の手に蹴りを入れ、木刀を空に上げ取り、恭也の首元に付ける。

「・・・これで、理解頂けましたか？」

ゼロは瞳を開け、凍るような笑顔で言う。

「・・・お前は何者だ？」

恭也が聞く。

「時空管理局、起動六課所属、八神ゼロ・S・A・ハラオウンです。」

そう言うと、なのはを降ろす。

「まったく、今はフェイトも抱えてるのに、どういうつもりなんですか？」

「それは、お前が変質者かなんかかと思ったから・・・。」

恭也が真面目な顔言う。

「はあ、気付いてくださいよ。なのはとフェイトが俺みたいなやつに負けると思いますか？」

とゼロは呆れ顔で、フェイトをおんぶしながら言う。

「思わないな。」

と恭也は木刀をしまいながら言う。

「でしょ？だから、俺は無実ですよ。」

そして、ゼロは立ち上がる。

「それもそうか。すまない。」

恭也が謝る。

「珍しいですね。」

ゼロが言う。

「は？」

「だって、なのはに聞いた話ではもっとシスコンだって言ってますし。案外食いついてこないのが不思議だって思います。」

そう言うと、ゼロはドアの前に立つ。

「今度機会があったら手合わせ願います。」

そして、ゼロは翠屋を後にする。

「・・・ああ。必ずな。」

恭也はゼロが出て行った後に呟いた。

＊

「強かったな。恭也は。」

フェイト宅へ向かっている途中にそんな事を呟いた。

「さて、着いた。」

そして、ゼロはフェイトの家の前に立つ。

「クロノがいませんように。」

そう思い、扉を開く。

「「・・・。」」

またやっちゃった・・・。

「どういう事だ？ゼロ君？」

クロノが言う。

「いや、話ははやてに聞け。一応結婚してる訳だし、別に問題はないだろう？」

ゼロが言う。

「大有りだ。」

クロノが返す。

『大有りかよこん畜生!!』

ゼロは思う。

「特にどの辺が？」

「お前がお姫様だっこしてるのが。」

「こうじゃないと、ベッドに寝かせられないだろ。我慢しろ。シスコン野郎。」

「この・・・!」

「じゃあ、そう言う事で。」

そして、逃げる様にフェイトの部屋に向かう。

＊

「やれやれ、あのシスコン馬鹿二人は如何にかしないといけないな。」

そう言い、フェイトをベッドに寝かせる。

「お休み。フェイト。」

そうゼロは言い、部屋を後にした。

「さて、行くか。」

とゼロは言う。

「もうちょっと居ればいいのに。」

声がして、その方向を向くとアリシアが居た。

「アリシアか？ エリオとキャロは・・・」

「寝たよ。」

「さいで御座いますか。でも、ここに居ちゃフェイトの迷惑になる
だろ？」

そうゼロは言い、アリシアは

「そんなことないと思うよ。」

あっさりと否定。

「なんでだ？」

ゼロは念のために聞く。

「だってさ、家事のレベルはそんなじゃそこらの人たちよりよっぽど
腕いいし、それにゼロが手伝ったら、フェイトが助かると思うよ。」

とアリシアは答える。

『確かにそうだな……。』

ゼロはそう思い、

「じゃあ、今日はここに泊まる。で、明日フェイトに聞いてみて、
『良いよ。』って言うならここに住むわ。」

そう言った。

「ホント!？」

アリシアは嬉しそうに言った。

「ああ。俺は嘘は滅多にしかつかないのは知ってるだろ?」

そう言い、アリシアの頭を撫でた。

「さあ、お前も寝ろ。もう11時だぞ。」

「うん。お休み、ゼロ。」

「ああ。お休み、アリシア。」

そして、アリシアは寢床へとつく。

「……。さて、俺も眠るとするか。」

そして、壁に寄り掛かり、瞳を閉じた……。



デデデ、デデデ、デデデデ、デッデッ！♪（Wのあれ。）

今回の担当

・ジェナス ・ゼロ
・桜 ・侑斗

ゼロ

「さあ、始まりました。後書きコーナー・・・」

一同

「NEO!!」

シャキーン!!

わ〜♪

ゼロ

「てかオイ！何なんだこのフリは!!」

侑斗

「まあ、良いじゃねえか。」

ゼロ

「よかねえ!!第一、何で○ンダムなんだ!!」

桜

「良いじゃん、それでも。作者と交渉してあげるから怒るのやめてよ。ゼロ。」

ジェナス

「そうだぞ。」

ゼロ

「サクラとジェナスがそう言うなら・・・。」

侑斗

「俺は!？」

ゼロ

「知るか。」

侑斗

「酷っ!」

ジェナス

「まあ、良いじゃないか。で、今回のおさらい。」

ゼロ

「○八召喚!!」

侑斗

「だから、○八じゃねえ!!」

ゼロ

「○八と呼ばれて、○八じゃねえ!って言うのは○八の証拠だ。」

桜

「まあ、止そうよ。」

ゼロ

「まあ、弄るのを止めるか。でさ、さっきお前らノリノリで決めポーズしてたよな。」

桜・侑斗

「特撮もの大好きだから!♪」

ゼロ

「・・・なるほどな。」

桜

「あれ? 突っ込まないの?」

ゼロ

「これは・・・その、あれだ。突っ込んだら負けって奴だ。」

ジェナス

「なるほどな。」

侑斗

「それで納得するなよ。」

ゼロ

「竜巻旋○脚!」

一撃ッ!—

侑斗

「ぐはっ! おのれ、ストファイのネタを使うとはな。」

桜

「普通にいいなよ。」

ゼロ

「サクラ。今のが突っ込んだら負けだ。」

桜

「そうなの!」?

侑斗・ゼロ

「素で驚いてたんかい!」

桜

「え? え?」

ジェナス

「わかった。今から説明する。」

ゼロ

「お願いする。その間に、決着をつける。」

一十分後—

ゼロ

「勝った・・・我々は、勝利したあ!」

桜

「何にだよ!」

ゼロ

「わかってきたな。サクラ。」

ジェナス

「そろそろ時間だ。このコーナーでは、ゲストに出演したい、と言うキャラを募集中だ。別に期限がある訳ではない。それと、こちらから武力介入する場合と借りる場合もあります。その時は宜しくお願いします・・・だ、そうだ。」

侑斗

「カンペ見ながら言うなよ。」

ゼロ

「まだ甘い!」

侑斗

「なぬ!」

ゼロ

「ここは武力介入の件で突っ込むべきだった!!」

侑斗

「しまったぁ!!」

桜

「なんか、二人が変になったので、このコーナーを終わりたいと思います。」

では、明日の大空へ! R I D E・・・」

一同

「ON!!」

第4話一とある日曜日、ゼロが先生に!?!?—

「・・・ふぁ。」

AM 9..00。

「さぁ、今日も頑張ろうっと。」

そうフェイトは言い、リビングへと、足を運ぶ。リビングに行くとゼロが壁に寄り掛かって寝ていた。

「ぜ、ゼロ!?!」

フェイトは素で驚く。

「ん? フェイトか。おはよう。」

ゼロは起き上がった。

「いや、まずいつから居たの?」

フェイトは聞く。

「昨日、な。で、いつまでそんな恰好で居るつもりだ?」

傍から見ると、下着一枚で居る訳だ。

「あ、その、これは、あれだよ?」

フェイトは顔を真っ赤にして、いい訳をする。

「わかってる。さっさと着替えて来いよ。その間に飯作るよ。」

ゼロはそう言った。

「わ、わかった！」

そして、ものすごい速さで部屋に戻って行った。

「ははは。フェイトの奴、いつもあんな恰好で居るのか？まあ、いや。飯作ろうっと。」

そして、冷蔵庫を漁りだす。

＊

「うううっ。」

フェイトは頭を抱えて唸っていた。

「なんであんな恰好したんだろう・・・。」

そして、考える。

「でも、逆にいえばチャンスだね。」

さらに考える。

「よし。ちゃっちゃと着替えて、ゼロにここに住んでくれないか、

お願いしよう。うん。」

そして、着替える。

＊

そして、台所。

「ん？フェイトか。」

ゼロは言う。

「うん。で、お願いがあるんだけどさ。」

フェイトが言う。

「何だ？」

「あのさ、ちょっと耳貸して。」

「ああ。」

そして、耳を貸すように促し、耳写しで伝えた。そして、

「駄目かな？」

フェイトは改めて聞いた。

「奇遇だな。アリシアも昨日そんなこと言ってたぞ。俺は良いけど、寝床は・・・壁に寄り掛かれればいいか。」

ゼロはそれを承諾した。

「うん。ありがとう。」

フェイトが顔を少しだけ赤くして言った。

「どういたしまして♪で、朝ごはん出来たから、アリシア達よんでくれ。」

「うん。わかった。」

フェイトはリビングを後にする。

（ゼロ？桜だけど・・・聞こえる？）

その時桜から連絡が入った。

（どうしたんだ？サクラ。）

（いや、ちょっとね。頼みたい事があるんだ。実は・・・）

そして、桜は事情を話す。

（――ってことなんだけど、駄目かな？）

（俺は体育科しか担当できんぞ。）

事情と言うのは、ゼロに先生になってくれないかと言う事。丁度その時アリシアも来る事になっている。

（うん。それでもいいよ。こっちで話はつけて、よくなったら連絡するね。）

（わかった。じゃあな。）

（うん。）

そして、念話を切る。

『まずは、はやてに連絡かな？』

そして、はやてに念話を繋ぐ。

（やつほ〜。はやて。ゼロだよ〜♪）

（何変な挨拶しとんねん！！）

答えるなり突っ込むはやて。

（わざとボケたわ。すまん。）

（まあ、いいわ。で、念話使ったってことは何かあるんやろ？）

（ああ。実は——）

そして、今までの素性を話した。

（——ってことなんだけど。まあ、サクラはお構いなしだから、俺の独断でな。）

（なるほどなく。でも、こっちでも情報の提供と収集はするつもりだったし、ええよ。）

（・・・・・・・・・・・・・・・・わかった。）

（なんや、今の間。）

（いや、喰い付かないなあって。）

（あんたはウチに何を期待しとんねん。まあ、いいわ。じゃあ、そう言う事で。）

そして、念話を切る。そして、この事をゼロは、なのはにメールする。ちなみに携帯電話はa uのケータイを弄って作ったもの。強度はオゾン層を通っても、燃えないし、壊れない。お値段は1億円（笑）！

ちなみにゼロはこれを自分の使いやすいように形状を変化させてるし、いざとなればバッテリーの電力でスタンガンにすることも出来る。さらに言えば、スタンガン（銃って意味での）にすることも可能だし、スタンソードにもなる。

「作者よ。あまりそう言うこと言っても混乱するだけだ。ちなみに護身用のケータイだしな。まあ、回線はdocomoから。」

とまあ、言った具合。とその時フェイトと一緒にアリシア、エリオ、キヤロが来た。

「」「おはよう（ございます）。ゼロ（さん）。」「」

三人が声を揃えて挨拶をする。

「ああ。おはよう。三人とも。」

ゼロは返す。

「あ、それとエリオとキャロは敬語じゃなくても大丈夫だからな。」

ゼロはそう言って置く。

「「わかったよ。」」

二人で声を揃えて言う。

「そんな感じだ。さて、飯でも食うか。」

そして、ゼロは時計を見る。現在の時刻はAM10:00。この時間に朝御飯はないと思うが、一応食べる。

「じゃあ、頂きます。」

《頂きます。》

そうやってみんなは朝ごはんを食べる。

*

「ご馳走様。」

ゼロは箸を置き、食器を持って台所へ行き、洗い物を始めた。

「ゼロさんは家事が上手なんですね。」

エリオが言った。

「自慢じゃないけどな、そこら辺に転がってる人には負けることはないと思うぞ?」

ゼロが言う。

「へえ。」

エリオが呆ける。

「んで? なんか収穫はあった?」

ゼロが言う。

「いや、別にありません。」

エリオが言う。確かに一日ただただじゃ手に入るものは少ないが、手に入るだけでずいぶんと違うもの。そう、昔のゼロなら言うだろう。今も言いそうだが。

「そうか。」

が、言わずに流す。

「・・・よし。洗い物終了。次は洗濯?」

ゼロが向かおうとしたところに、

「洗濯はさっきフェイトさんが済ませてましたよ。」

とキャラロが言った。

「そうか。ありがとな。」

ゼロはキャラロの頭を優しく撫でる。

「さて、これで朝の家事は終わりか。」

ゼロが言うと

「そうだね。」

フェイトが洗濯を終えたらしく、答えた。

「なら、あれ作るか。」

《あれって?》

あれの存在がわからなかった4人は聞いてきた。ちなみに今日は日曜日なのでアリシアは学校に行っておりません。

「ああ。まあ、デバイスに付ける・・・なんだろうな。パーツ? まあ、そんなんだ。」

ゼロが説明する。ちなみにゼロはデバイスマスターの資格を持っているのでこう言うのは朝飯前。ゼロはズボンのポケットから一つの

ボックスを取り出す。工具は転送魔法で無理やり持ってきた。

《これ？》

「そうだぞ。」

四人は聞き、ゼロは答える。そして、ゼロがボックスパーツを放り投げると、それは一つの板になった。まあ、某 I c a n f l y
！！の少年のボードである。

「今回は突っ込まんぞ。」

さらに言えば、形状変化するタイプ。空に浮き、滑走することができる。カラーリングは違うタイプだからご安心を。

「うし。前はここまで進んだから、これを……。」

と工具を取り、ボードを弄る。

「ゼロ？」

「どうした？アリスア。」

「これって……。」

アリスアがゼロが設計図を見ながら話を聞き、答える。

「遊び用だな。でも、一回乗ってみて、それで実用性があると判断したら、出力強化、形態増加、フレーム強化もするぞ？」

「へ、へえ。」

アリシアは驚きを隠せなかった。

「まあ、その内作るよ？第二作。その時はアリシアに乗ってもらわ。・・・うっし。完成。」

そして、ボードを取り、ブレイブフォースを宝石の状態にして、いきなり窓から飛び降りる。

「アゝイ、キャゝン、フラーイ!!！」

《それは言うのね!?!》

思いっきりセリフのパクリに4人は突っ込む。

「と言うより、ゼロさん!」

「「「あ、そうだ!」」」

エリオの言葉にハツとなり、ゼロの方へ行く。

「イヤッホウ!!！」

その時ゼロが上空で後方一回転を決めた。

「よし、完成だ!!！」

そして、ガッツポーズを取る。

〈マスター。出力、安定してます。〉

とブレイブフォースが報告した。

「ありがとな。形状変化、スケート。」

〈了解。SKATEMODE、起動。〉

そして、ボードが変形し、靴になった。

「カットバックドトップターン!!」

「」「」「やっぱりか!!」「」「」

そう言って回転して、思いっきり4人は突っ込んだ。

「さて、戻るか。このまま行けるか？」

〈ライザーフォトンが飛び散りますから一階地上に降りた方が。〉

「なら、ボードだな。」

〈はい。〉

「行くぞ。」

そして、ベランダの手前まで乗ってきて、そこで飛び降りた。飛び降りた途端にボードはボックスに変形し、ゼロの手元にブレイブフォースと共に戻った。

「なんか、すごいね。」

フェイトが近づき、言う。

「俺的にはまだ不満だけだな。」

《なんで？（ですか？）》

4人が尋ねる。

「ライザーフォトンが着地の時に多く出ちゃうから、それを抑えれば、第一作、リフボαこと、ニルヴァーシュαの完成だ。」

《結局、リフボって言ったね。》

「あ。」

と、説明して、とうとうネタバレの領域へ行ってしまった。

「なははは。いっけねえな。まあ、これのパーツの名前は『ニルヴァーシュ』だしな。名前つけんのがめんどくなっただし。今度、ニルヴァーシュをお前らに作るよ。」

そう言うのと、みんなの頭を優しく撫で、家に戻って行った。

「なんか、今日は妙に優しいね。」

とアリシア

「そうですか？いつもあんな感じだと思いますが？」

エリオが言った。

「エリオ君、意外と鈍感なんだね。」

とキャロが言う。

「え!？」

エリオがさらに驚く。

「ゼロはああ言うことするのは、大抵人に知られるとその人が悲しくなる事があったか、」

「隠し事してるときだけだしね。」

アリシアとフェイトが言う。

＊

「・・・そう言えば、今晚の献立を考えんの忘れてた。」

とゼロは家に入って言った。

「とりあえず、冷蔵庫の中は・・・。」

中には和・洋・中華系統の食事ができる食材が入っていた。

「むむう。どうしたもんかなあ?」

「どうしたの？」

「だぁ！びっくりするから音も立てずに近づくな！」

「ごめんね。」

そこに居たのはフェイトだった。

「まあ、いいけど。ところで晩ご飯は何がいい？」

「うーん。洋食？」

「そうか。じゃあ、洋食で。」

「待った！私は中華が！！」

アリシアがストップをかける。

「わかった。じゃあ、中華も作るから。じゃあ、それまでテレビ見てるか、仕事してるか、訓練してるかしててくれ。」

《了解！》

「俺は、部隊長とは違うぞ。」

ゼロはみんなのリアクションに軽くツツコミを入れ、晩御飯を作る。

＊

「・・・よし。完成っ。って、何ではやてがいる。いつお邪魔し

た？」

と完成したのでリビングの方を見ると、赤色・桃色・金色×2の他に茶色が混じっていた。

「作者、それでわかるか？」

ゼロもいちいち突っ込むな、で髪の色だよ♪

「おかしいやろ！！」

さっさと話を進めろ。

「駄目やったやろうか？」

はやてがこちらを向き聞く。

「別に大丈夫。きっと呼んだのは・・・フェイトだな。」

ゼロが料理を運びながら答える。

「正解や。で、なんか悩み事でもあるんか？」

はやてが聞く。

「いや、最近スカリエッティのこちらへのけん制がないなって思っ
て。」

ゼロが簡潔に答える。

「まあ、確かにな。」

「だろ？取られてからじゃ遅いからと思って、少しだけアルスの方に繋いだけど、連絡が取れないんだ。」

「何かあったんやろうか？」

「わからない。」

そして、ゼロが料理を運び終える。

「さあ、運び終わったぞ。」

「」「え！」「」

「驚く事はないだろう。さあ、食べるぞ。」

「」「う、うん。」「」

そして、皆座る。

「では、頂きます。」

《頂きます。》

そして、箸をつける。その時はやての顔が料理人の顔に一瞬だけな
った。

「ま、負けたあ！」

そして、はやては咆哮する。

「お前さあ、いちいち叫ばなきゃ気がすまんの？」

ゼロは呆れ顔ではやてに聞く。

「いや、だって、ウチが教えたのは料理の基礎だけやよ？なのに、なんでウチが作ったものよりうまいの？」

はやてはそう泣き顔で聞いてきた。

「うーんと、それはだな、その、ほら、一昨日さ、アリサの家に行っただろう？」

「うん。」

「あそこで、料理もしてたんだよね。それで、しくじるとアリサに関節技掛けられて、さらに蹴り入れられてっていうのがあったから、知らぬ間に料理がうまくなったっていうか……」

《凄っ！》

それだけはみんな驚く。

「つまり……」

フェイトが繋ぐ

「お嬢様舌に合わせろやあ！！ってことであそこで過ごしてきた訳だな俺は。」

とゼロは当然のように言う。

「あんた何者!?!」

とアリシアが言う。

「はやてとフェイトの婿です♪」

と何か効果音に『テヘッ♪』とか出そうな感じで言った。

「アホかー!?!」

「ぐはっ!」

とはやてのナックルが見事決まる。

「ちょ、大丈夫!?!」

フェイトが聞く。

「大丈夫。鼻血が出てるだけ。」

「「それ、大丈夫じゃないですよね。」」

エリオとキャロが言う。

「いや、大丈夫なんだよ。」

アリシアが捕捉する。

＊

「ご馳走様。」

ゼロは朝の様に箸を置き、台所へ向かおうとするとその時、

（ゼロ？桜だけど。）

桜から念話が入る。

（聞こえてる。で、どうだった？）

（うん。大丈夫だから、ぜひ来てくれだって。）

（了解♪）

（うん。また明日♪）

（ちょっと待った。明日？）

（うん。明日だよ。）

（・・・わかった。じゃあな。）

（うん。）

そして、念話を切る。その時に丁度洗い物も終わった。

「さて、洗い物も終わったし、フォトンの調整でもするか。」

ゼロはリビングに戻りニルヴァーシュを起動させた。

「なんなん？これ。」

とその時はやてが聞いてきたので答える。

「これは、スケートボードをデバイスのパーツ化した様な感じだ。」

「ここにはめるんか？」

そして、はやては窪みがある方を指さし、聞いてきた。

「ああ。ここにはめて、ホントの起動だ。えっと、ここで形態変化させて・・・っと。」

そして、ボードが靴になったのを見てはやてはびっくりしていたが、それを気にせず、作業を続ける。

「このバルブを少しだけ、圧力下げて・・・さらにこの回線を・・・」

「なあ、ゼロ君？」

「どうした？」

「それ、私にも作ってくれないかな？」

はやてのその言葉を聞いて、少しだけ手を止め、はやての方を見る。顔が赤くなってるのを確認した後、作業を再開しながらゼロが言っ

た。

「これが完成して、コピー量産できたらな。その時は教えるし、一緒に飛んでやる。」

「ホンマか？」

「ああ。きつとな。」

そして、少し笑い言った。

＊

「・・・よし、完成。」

そして、ボードに変形させ、窓から飛び降りる。

「I c a n f l y! ! !」

「レ○トンか! ?」

はやてが思いっきり突っ込む。

「カット○ツクド○ップ○ーン! !」

「リフっとる! ?」

さらに突っ込みを入れるはやて。

「バリアジャケット、サードモード。」

〈了解。THIRD MODE。〉

そして、ゼロはバリアジャケットを起動する。その姿は両腕にガンレットが付いていて、比較的回避に対応した、ジャケットだった。

「うし。スケートモード。」

〈SKATE MODE、起動。〉

そして、先ほどの靴になる。

「よし、着地するぞ。」

〈はい。〉

そして、家のベランダへ着地する。着地した時、フォトンが渦を巻いてゼロを巻き込んだ。

「うん。いいね。」

〈そうですね。〉

「じゃあ、モードリリース。」

とゼロが言うと、靴はブーツになり、ベランダと家の境目で変形し、ボックスと宝石はゼロの手に戻った。

「完成だな。ニルヴァーシューα。」

〈そうですね。〉

こうして、ゼロのある日曜日的一天は終わった。



今、地平を撃てえ♪（JAMの守護神—The guardian—から。）

今日の担当

・ゼロ ・ジェナス
・桜 ・スターゲイザー

ゼロ

「始まりました！後書きコーナー・・・」
一同

「NEO!!!」

シャキーン！ ドカーン！！

わ〜♪

ゼロ

「この前より激しいな。」

ジェナス

「確かに。今日のおさらい。」

スターゲイザー

「ゼロさん、先生決定！そして、I can fly!!」
桜

「まあ、この事は決定だね。それと、ゼロと私とスターゲイザーで

E O S E と B r a v e s a v e r s 行くんでしょ？楽しみだなあ
♪」

ゼロ

「俺は怖いかな。」

スターゲイザー

「心配いらないですよ♪きつと、リニスさんがサポートしてくれま
すから♪」

ゼロ

「それが怖い。」

桜

「なはは。大変だね。あ、もう時間だね。ではっ！明日の大空へ！
R I D E・・・」

一同

「ON!!!!」

スターゲイザー

「さて、あっちへ行くにあたって、準備しなくては・・・女体化薬
と巫女服をと。」

第5話一学校ですよ、そうですか。まあ、その反応もわからなくはないよ、うん

AM 6:00。

「ふう。何で俺はこんなところに居るんだ？」

起床したは良いが、ここがどこだか言おうと、フェイトの部屋のベッド。

「フェイトめ、図ったな。」

そう思いつつ、起き上がりリビングへ向かった。

「さて、朝ごはんを作るとするか。」

そして、包丁を握り、調理を始める。

＊

一方その頃アリシアはと言うと、

「うーん。」

寝ていた。とその時、

「アリシアさん？朝ですよ。起きてください。」

とキャロがやって来た。

「後5分だけ・・・。」

そう言って、また布団にもぐる。

「どうだ？」

とそこにゼロがやってきて、

「駄目です。」

と答える。

「先に下行って朝飯用意してくれ。」

「はい。」

そして、キャロが出ていく。

「アリシア。」

「後3分。」

「早く起きろ、じゃないと魔王が来てお前の事相殺するって。」

そう言った途端にアリシアは起き上がり、土下座した。

「どうか、どうか命だけは!!」

「安心しろ。来るはずはないかr・・・」

「呼んだ？」

後ろを向くと、なのはがもの凄く黒いオーラを出して仁王立ちしていた。それを見た瞬間、

「申し訳ありませんでしたあ！！」

土下座をした、が

「ダ・メ♪」

と無残にも打ち破られる。

＊

「おはよう。アリシア、ゼロ。・・・あれ？何でなのはまで？それに何で二人はボロボロなの？」

とフェイトがひっくるめて言う。

「フェイト。これは海よりも深く、オゾン層も高い訳があるんだ。聞くな。」

「そうだよ、フェイト。聞かないで。」

「う、うん。」

アリシアとゼロの剣幕に押されて、聞く事が出来なかった。

「そう言えば、なのはは飯食べたのか？」

「まだだけど、ヴィヴィオ達が待ってるから。」

となのはは言う。

『なら、なぜここに!?!』

とゼロは思う。

「そっか。なら、じゃあな。」

「うん。それと、高校の教師の件で私たちも臨時でなるから。」

「わかったから早くしろ。」

「うん。じゃあね♪」

パタン・・・と扉を閉める音が響き、向き直る。

「さて、朝ごはんを食べるか。」

《うん。／はい。》

「じゃあ、全ての食材に感謝を込めて・・・」

《頂きます。》

そして、食事に箸をつける。

*

「・・・ご馳走様。さて、急ぐか。」

そして、超人的な手際の良さで、洗い物を済ませる。

「よし。終了。次は洗濯か？」

「さっきフェイトさんが済ませてました。」

とエリオが言う。

「うし。わかった。じゃあ、フェイトと一緒に留守番とかお願いな
？」

「はい。」

とエリオは答え、ゼロはニルヴァーシュを出し、仕事場と言う名の
高校、私立聖祥大附属高等学校へと。

「陸上滑走モードセット。よし。行くぞお！！」

ゼロは外に出た瞬間にブレイブフォースをはめ込み、地面を蹴った。

「うおおおおおおお！！やべえ！遅刻するううううううう
ううう！！」

とゼロは言い、全力で走って行った。

《行ってらっしゃい。》

残されたフェイト、エリオ、キャラは二人を見届けた。ちなみに、アリシアはゼロが洗い物を終える前に学校へ登校している。

＊

一方、アリシアはと言うと・・・

「アリシアさん。何もこんなに早く来る事はなかったんだよ？」

と桜とお話中。

「いえ、私は早めに来た方が落ち着くので♪」

「そっか。で、ゼロは元気？」

「はい。」

と答えたが、アリシアはなぜ、ゼロの事を知っているのか疑問に思ったかもしれない。

「おおおおおおおおおおお！！！」

ギャギャギャギャギャ・・・と言う音と共にゼロが現れた。

「無事、到着！！！」

決めポーズをし、

「このアホお！！！」

桜から蹴りを食らう始末。

―撃ッ！―

「がはっ！」

ゼロはその蹴りを食らい、盛大に吹っ飛び、10 m位先に有った木に激突した。

「あ、ごめん！その、侑斗の影響を受けて、つい……。」

と桜が駆け寄り、謝る。

「いや、良いよ。やっべ、鼻血出たわ。」

「大丈夫？」

「大丈夫だ。」

と、その時チャイムが鳴る。アリシアは桜の後に職員室へ、ゼロは校長室へ行った。

＊

ゼロとアリシアにそんな事があったが、別な視点、ゼロとアリシアが来ることになる、2－Z組。

「なあ、ここに転校生が来るんだろ？楽しみだな、侑斗。」

ある男子生徒が言い、

「そうだな。」

侑斗は流す。

「お前、そんな反応だから、友達ができないんだろ？」

とまた男子生徒が返す。

「お前が可笑しいだけだろ。俺は友達はたくさんいる。」

と侑斗が返し、

「うぐっ！痛いところを・・・。」

男子生徒が俯く。

「いいから、これでも食らえ。」

――撃ッ！――

侑斗は持っていた箱のようなものの角で男子生徒を殴る。

「うごああああああ！！痛い！痛いぜ侑斗！！！」

「もう一発食らうか？」

「謹んで遠慮する！！！」

と、その時、担任の先生、宮野桜が入る。

「はい。席について。えっと、今日は転校生が来てます。アリシアさん、入ってください。」

そして、入ってきたのは金髪で、ツインテールの髪型のかわいらしい少女が入ってきた。

「アリシア・テストロッサです。宜しくお願いします。」

「はい。と言う訳でみんな仲良くね。アリシアさんはあそこの空いてる席に座ってください。」

「わかりました。」

そして、空いてる席に座る。と、隣の女の子に話しかける。

「あのさ、名前、なんて言うの？」

「かみじょうかん上条神無。」

と、ぶっきら棒に答える。

「へえ。神無ちゃんて呼んでいいかな？」

「いいぜ。」

と神無は答える。

「宜しくね。」

「ああ。」

「はい、今日はもう一人転校生と言うか、副担任が来ています。」

と話を桜が切る。扉が開き、そこに居たのは、膝まである金髪、翡翠の瞳。黒のインナーに白衣を纏っていた。

「あ！！」

アリシアと侑斗の二人は驚く。そこに居たのは知っている人物。

「えっと、僕の名前は長いですよ。メモリたい人はメモってください。僕の名前は八神ゼロ・S・A・ハラオウンです。なぜ名前が長いかと言うと・・・」

ゼロがそう言うと、生徒の視線がゼロに集まる。が、

「秘密です♪」

と笑顔で言う。と、その瞬間にみんなは抜ける。

「今のタメは何なんだよ！！」

と優斗が突っ込む。

「五月蠅いよ、○八君。」

と、ゼロが言った瞬間にクラスが笑いに包まれる。

「で、」

そう言い、笑いを切る。

「僕の好きなことは機械弄り、鍛錬、訓練、修行です♪嫌いなことは作ったら負けだと思うのでありません。以上で自己紹介を終わりますが、質問、相談は100%応じますのでいつでも持ちかけてください。」

「はい、ありがとうございます。で、何か質問のある人？」

と桜が言った瞬間に、一斉に手が上がる。

「はい、山田君。」

「ゼロ先生はどんなものが好きですか？」

「えっと、誰かを虐めた時に聞く、残虐な叫び声です♪」

そう答えた。その時、クラスの皆はこう思っただろう。

《悪魔だ……。いや、冥王だ……。》

と。それでも手は下がらない。

「はい、前田君。」

「先生は強いですか？」

「このクラスの皆全員でかかって倒せません♪」

と寒い笑顔で答える。

「ほ、他に……。川島β君。」

『それ、名字なんだ！？』

とゼロは思った。

「じゃあ、体育科なんですね？」

「そうですよ♪」

今度は邪気のない笑顔で言う。この時、女子のハートをつかんでしまったとか。けど、ゼロはロリコンではない。さらに、フェイトとはやてがいたので、絶対に浮気はしない。

「他に……と言いたいところですが、時間なので、またの機会にしましょう。それでは今日の日直さん、お願いします。」

そして、朝のホームルームが終わり、桜とゼロは一緒に職員室に向かいながら話す。

「けど、ゼロってあんな顔もできるんだ？」

と桜。

「営業スマイルだよ♪」

とゼロ。

「営業スマイルって・・・やれやれ。まあ、金夜叉さんと白の魔術師に殺されるしね。」

「あれ？言ったっけ？はやてとフェイトの別なあだ名。」

「アリシアに聞いたよ。」

と桜が答えると、三芒星から月光の魔導書を取り出し、ページを開き、術を発動させようとする。

「アリシア・・・少しだけ頭冷やそうか♪」

とゼロが見るだけで死んでしまいそうな笑顔で言った。

「ちょっと、ゼロ！？ストップストップ！！」

桜が魔法を使おうとするゼロを止める。

「俺が止めると思う？」

「思わないけどそれはまずいって！！」

「しょうがないか。」

そして、三芒星の中に月光の書をしまう。

「冷や冷やするよ、全く。」

「そもそも、そのあだ名出した桜が悪いじゃないか。」

「あ。」

「だろ？さて、一時限目は2—Zが俺の担当だから準備しないと。」

「そっか。がんばってね。」

「ああ。それと、俺の後ろに妙な殺気を感じるんだが。」

「それは、青い髪で、緑の瞳の女の子が・・・」

「スバルか。」

そう言って後ろを向くとホントにスバルがいた。そして、丁度準備が終わったので、授業に行く事にする。

「さて、行こうか、スバル。」

「はい！」

とスバルは答え、職員室を後にする。一時限目はグラウンドだから、しっかり体を慣らさなくちゃな。とゼロは考えながら、足を速めた。

＊

「さて、今日の体育は野球をしたいと思います♪何か、適当にチームを組んで下さい♪」

と授業が始まる。なぜ野球かと言うのは触れないで欲しい。

「さて、チーム決めてるうちに、ちょっくら業務連絡でも。」

そう言って端末を取り出し、操作し報告する。とその時

「先生はどのチームに入るんですか？」

とある女子生徒、名前がよくわからないのでAと名づける事にする。

「僕は、強いチームに入って、弱いチームをフルボッコにしようと思います♪」

と言った瞬間朝の様な事になった。

「まあ、加減はしますがね。」

「ど、どのくらいですか？」

「パワ〇ロで言う、ミートS、パワーS、走力SってのをミートA、パワーA、走力Aにした感じですよ♪」

「それ、ほぼ能力がチートじゃないですか。」

「気にしない♪気にしないで、チームが組みあがった模様なので、僕はアリシアさんが入っているチームで行きましょう♪」

そう言って入ったチームのオーダーは

1番..アリシア

2番..スバル

3番..侑斗

4番..ブレイブフォース

5番…神無

6番…アリサ

7番…すずか

8番…スターゲイザー

9番兼ピッチャー…ゼロ

「いや、可笑しいところありすぎでしょ!!」

侑斗がツツコミを入れるがゼロは華麗にスルー。

「さあ、試合を始めましょう♪」

そして、始まった試合。

ファーストラウンド!

高校野球部レギュラーはまず確定っしょチームVS学校最強連合

「ネーミングから、ツツコミどころ満載だわあ!!」

侑斗が何か言っているが、それもスルー。

「はい♪プレイボール♪」

試合が始まる。

アリシアがバッターボックスに立つ。

相手のピッチャーはスタンダードの構えで投げた。

「……。」

―捕―

そのコースはストライク。そして、キャッチャーがピッチャーにボールを返す。

そして、投げられる。

「甘いね。」

―撃ッ!!―

そして、アリシアは撃つ。アリシアの撃ったボールは、空高く舞い上がり、グラウンドを越え、さらに道路を越え、川に入った。

「その程度で私に勝負を挑もうなんて、100兆年早いわよ。」

そう言い、ダイヤモンドを一周した。

「アリシア、ナイスだ♪」

そう言ってみんなは迎えた。

「次はスバルか。行って来い！」

「応！」

そして、バッターボックスに立ち、構える。

「ま、マグレ当たりだな！次こそ!!」

そうピッチャーは言い、投げる。

―撃ッ！―

スバルはフルスイングで打つ。そして、ホームランになった。ここからは、あまりにも相手チームが可哀相なので、割合させていたただく。結果、

0―100。

となり、学校最強連合の勝ち。

「まあ、当たり前と言っちゃあ、当たり前だな。」

そう、侑斗が言う。と、その時チャイムが鳴る。

「お。そろそろ時間ですか。では、一時間目の授業を終わりたいと思います♪」

そして、授業が終わる。

「ねえ、ちょっと手加減したらどうだったの？」

とアリシアが言った。

「ん？ いや、お前の1回の場外道路越えソロホームランに言われたくない。」

「いや、あれは……。てか、ゼロミスったの、9回のあれだけじゃない！」

「いや、アリサに脅されてたし。ミスったら殺すって。ヒトコプタ―にされるよ?」

「怖っ!」

そして、アリシアが驚く。ゼロはそれを尻目に職員室へ戻った。

「はあ。」

そして、ゼロはイスに座る。

「ゼロさん、あれで手加減なんですか?」

とスバルに聞かれる。

「いや、脅されてたから、若干本気だった。」

とゼロは返す。とその時、この学校の校長先生に声を掛けられ、2―Zの専属教科担任になってくれ。と言われたので、ゼロは

「いいですよ。」

と答える。なぜ、そんな事をしたかと言うと、ゼロの成績を計ったところ、全てにおいて、満点だったからである。

「と、言う訳で、教科担任をやる事になりました。」

とゼロは言う。ちなみに二時間目は理科。で、理科室に居る。ここからは、諸都合があるので、またしても割合させていただく。別に作者の手抜きではないと言う事をわかって欲しい。

＊

そして、放課後。職員室の様子は・・・。

「さて、僕達は此の辺で。」

そう言い、ゼロとスバルは職員室を出る。

「さて、スバル？」

「はい？」

「お前は、空中を滑走したいか？」

とゼロが聞く。

「・・・？」

スバルは首を傾げる。

「やっぱりわからんか。つまり、スバルはいつもウイングロードを使ってるだろ？」

「はい。」

「それをさ、これの縮小パーツを使って、ウイングロードなしで、戦えるようにしないか？ってこと。」

ゼロはポケットからボックス状の物を取り出し、説明する。

「それって、マッハキャリバーをある程度改造するってことですか？」

「そうなるな。まあ、スバルがよければいいんだ。無理には押しつけないから、考えてみてくれ。」

そう言うのと、ボックスをしまい、歩き出した。

＊

その頃、アリシアの方は・・・。

「ふう。終わったああ。」

と屈伸をする。

「なあ、アリシア。」

と声を掛けられ、その方向を向くと、侑斗が居た。

「ん？何？」

「一緒に帰らねえか？」

「うん。いいよ。」

そう言い、席を立った。

「行こう？」

「ああ。」

そして、侑斗は歩幅を合わせ歩く。

「でさ、何でここに来たんだ？」

「ん？何でって……。引越したから。」

――撃――

そうアリシアが言った瞬間、上から箱の様な物の角で侑斗にアタックされる。

「痛ぁ。何するのよ！」

「悪い。つい癖で。でも、本当の事を言え。お前があれだったら、今殴ったこれも何なのかわかるだろう？」

そして、侑斗が握っているそれを見る。

「・・・デバイス？まさか、貴方も？」

「やっぱりな。で、話してもらおうか。お前等がなぜ、ここに来たのか。」

「うん。わかった。けど、みんなには内緒だよ？」

「わかった。じゃあ、念話を使うか。」

「うん。」

そして、玄関に向かいながら、念話で、今まであった事を話す。

（・・・成程な。大体わかった。）

（変でしょ？なんか、こんなので侑斗とか巻き込んで。）

（いや、そう言うことなら、俺も協力する。）

（うん。ありがとう。）

「アリシア。」

そう呼ばれてその方向を向くと、ゼロが立っていた。

「何？」

「晩御飯何がいい？」

ゼロがそう言うと、アリシアは唸り、閃く。

「中華！」

「わかった！」

ゼロはそう言うと、ニルヴァーシュを起動させ、材料を買いに行つた。アリシアは侑斗と一緒に帰っている。それで、侑斗に痛い視線が刺さっていたが、華麗にスルーした。

＊

「・・・でき、これがホントに面白くて。」

「へえ。今度お前のお家にお邪魔して、その真偽でも確かめさせてもらうかな？」

と笑いながら帰っている二人。

「あ。私、ここから違う道だから。じゃあ、また明日。」

「また明日な、アリシア。」

「うん♪」

そう言い、別れ、帰って行った。こうして、ゼロの先生初日、アリシアの転校初日は終わった。



今回の担当

・ゼロ ・桜

・スターゲイザー

ゼロ

「さあ、後書きコーナーNEOの始まり始まり♪」

わ〜♪

ゼロ

「はい♪神無初登場だったね。」

スターゲイザー

「そうでしたね♪」

桜

「アリシアちゃん、お友達が来たようでよかった。」

ゼロ

「そうだな。」

スターゲイザー

「で、ゼロさん？BSでもらったそれ、開けましょう。」

ゼロ

「ああ。それじゃあ・・・。」

そして、ゼロは開けるが、巻き戻しのように閉める。

スターゲイザー

「桜さん？」

桜

「うん♪」

そう言うと、桜はゼロの両腕をつかんだ。

ゼロ

「やめろ！離せ！！」

桜

「やだ♪」

スターゲイザー

「ほっほう♪これはこれは♪」

ゼロ

「アリシア、今度そっち行った時は覚えてろよ・・・。」

桜

「よし♪決まったね♪」

ゼロ

「決まってるじゃない!! てか、にじり寄るなスターゲイザー!!」

スターゲイザー

「いや、着替えさせたいですもん♪」

ゼロ

「いや、そう言う事じゃ!・・・。」

スターゲイザー

「こっちの方が一枚上手でしたね♪では♪」

しばらくお待ちください・・・。

ゼロ

「う、うん・・・。はっ!なぜこの姿に!!」

そこには茶髪で薄い蒼い瞳、そして、スク水メイド服のゼロがいた。

桜

「やっぱこっちの方がいいね♪」

スターゲイザー

「確かに♪」

ゼロ

「少し・・・頭でも冷やそうか、二人とも♪」

―撃ッ!―

桜・スターゲイザー

「アアアアアアアアアアアアアアアアア!」

ゼロ

「さて、ブレイブフォース?」

ブレイブフォース

へ了解です、マスター。✓

ゼロ

「ふう。さて、時間なので此の辺で。それでは、明日の大空へRI
DE ON!」

第6話―新たなる影、新たなる敵―

いつもと変わらない朝、いつもと変わらない、日常……。

「平和だな。」

ゼロはそう思い、グラウンドを見渡す。

「確かにね。」

そうなのはが言う。ちなみに今は数学の授業。

「でも、これが嵐の前の静けさった奴じゃなきゃいいんだが……。」

とその時、その場の人気が一気になくなった。

「……結界か。」

そうゼロは言う、瞳を閉じ気を集中させ、気配を感じた。

「後ろに気を配ったらどうだ？」

と後ろから声がする。それを察知したゼロは体を屈めつつ、隠し持っていたスタンソードで受ける。

―閃―

「……アルス……？」

その男を見た瞬間、驚愕した。一見、そいつはゼロの記憶を奪った男、同時に、なかった記憶を繕い、さらに力を与えた人物である。

「くそっ！」

――閃！――

アルスはゼロと距離を離す。

「そうさ。俺はアルス。アルス・フォードマンさ。」

そうゼロを睨み答える。

「知ってるさ。なぜ、俺を攻撃した！？」

ゼロもアルスを見つめ、叫ぶ。

「お前が邪魔になる存在だからだよ。」

アルスはその問いに返す。

「なぜ？」

「お前が強大すぎる力を手に入れた故にだ。だが、今の俺じゃ勝てん。」

そう言うと、アルスは左手を挙げ、ガジェットを呼び出す。

「待て！」

ゼロはスタンソードを構え、アルスに突っ込む。

「このガジェットはスカリエッティの物だったんだけどな。足止めには丁度いいかもな。じゃあな。御人好しな、八神ゼロ・S・A・ハラオウン。」

そう言うのと、アルスは飛びあがり、虚空に消える。

「逃がすか!」

そう言い、ゼロは追撃するが、ガジェットに阻まれる。

「くそっ!」

――撃!――

ガジェットから、ビームが放たれる。それをゼロはスタンソードで弾き、直撃を免れる。

「お前等・・・邪魔だ! ブレイブフォース!」

△了解。準備完了です。▽

「セットアップ。」

△了解。バリアジャケット、精製します。▽

そして、ゼロは白の甲冑を纏う。ゼロは髪を結う。

「お前等、俺の邪魔をするな！」

トライ・ツイン・ダブルブレード
「TTDBスタンバイ。」

ゼロの手に両双剣が握られる。

「トライボール装填。属性、炎、風。」

「了解。トライボール装填。」

両双剣にトライボールが装填され、右手に炎、左手に風を纏った魔力刃が現れる。

「おおおおおおおおお！！！」

――斬――

ガジェットに線が入り、だんだんとずれていく。

『どうしてなんだ。』

――斬――

さらに二体を斬り裂く。

『俺が力を手に入れたからか？』

――斬――

ゼロは回転し、炎と風を纏った一撃をガジェットに与える。

「・・・どうして・・・？」

そして、全てが爆発する。

「俺が、悪いのか？俺が、力を悪用してしまうためか？俺は・・・俺は・・・。」

バリアジャケットを解除し、教室へと戻る。そして、結界が解除され、人氣が戻る。

「・・・俺は、なぜ、こんな事に・・・。」

そうゼロは呟く。誰にも聞こえないように、ひっそりと。その時、チャイムが鳴り響く。

「それでは、今日の授業はここまで♪日直さん、お願いします♪」

そう言い、この時間は終了する。

「なあ、先生。何呟いてたんだ？」

声を掛けられ、その方を向くと、やや凛々しい顔立ちで小麦粉色の肌、艶やかな黒髪にツンツンヘアの少女・・・神無が居た。

「僕は何も・・・。」

「嘘をつくな。そんなに言えない事なのか？」

ゼロは顔を歪ませ、返す。

「御免な。言えない。」

そう作り笑いで言った。

「・・・わかった。でも、無理するなよ。」

そう言うと、走り去って行った。何でも、女子高から転校してきて、クラス以外の女子に追っかけ回された経験があるかららしい。

『お前が邪魔になる存在だからだよ。』

ゼロはアルスが言ったその言葉を少しだけ頭に残しながら、職員室へ戻った。

＊

ゼロは今イスに座り唸っている。

『なぜ、俺は・・・。はやてに念話でも入れてみるか。』

ゼロは唸るのを止め、次の授業の準備をしながら、念話を入れる。

（はやて？聞こえるか？）

（どうしたんや？ゼロ君。元気がないやんか。）

（ああ。アルスに言われたことで、少しだけ引っかかった節が合っ
てな。）

（なんなんや？ちよつと言ってみて？）

（お前が邪魔になる存在って。どう言う事なんだろうな。これくらいで落ち込む俺も俺なんだけど。）

（邪魔になる存在？って事は・・・。）

（もしかして、アイツ、禁術使う気か？）

（禁術？）

（ああ。禁術つつのは、自由、正義、運命の3つの紋章、これにはルールがあるって言っただろ？その禁忌を犯す事、それで発動し、闇の力が開放する。）

（・・・それは、どうなるんや？）

（多分、世界一つは吹き飛ばすようなものだ。最低でも街一つだ。）

（・・・・・・。）

（それと、アイツは少なからず、スカリエッティに繋がっているな。）

（まあ、そうやな。おおきにな。あまり落ち込まんと、フェイトちゃん心配するよ？）

（それもそうだな。じゃあ、そろそろ授業だから。）

(うん♪)

そして、念話を切ると、丁度チャイムが鳴り響く。

「はい♪授業を始めます♪」

＊

ゼロが授業してる時、はやては端末を操作し、情報収集中。

「やっぱり、見つからへんなあ。」

ゼロの手に刻まれた紋章。それを見た時に何かの前触れかと思い、ちよくちよく調べていたのだが、見つからない。

「でも、なんでアルスが・・・あの人は恨むべき人だけど、ゼロに力を与えた人でもあるし・・・。」

そう呟き、情報収集を再開。と、その時

「運命の交差は、新たな輝きを生み、正義と自由を保つ為に有り？」

そのような文書をはやては見つける。

『どう言う事なんやろ？ちよっと覗いてみるか？』

そう思い、さらに開く。文書の内容はこうだ。

―あるところに、一つの国、一人の王がいた。―

―その王の所に、ある三人の男が来た。一人は主に忠実な男、一人は誰にも翻弄され無い男、一人は流れに身を任せ、協調性のある男・
・。―

「これって、あの紋章の話？」

はやてはそう思い、続きを読む。

―王はその三人にD、F、Jと書かれた器を渡す。そして、王はこう言った。―

―『その器に見合う、物を持って来い。』と。そして、三人は散る。
―

―翌日、その三人の男はまたここに来た。Fと書かれた器をもつものの、中は水。J、酒。D、水割りの酒。―

「って、何やねん！水割りの酒って!!！」

とはやては思わず突っ込んでしまった。が、続きを読む。

―王はそれを受け取り、それぞれにこう言った。―

―『これから、私に遣えろ。』とそれを了解する三人。王はさらに条件を出す。―

―『これから、禁忌を犯した者は、その姿を変え、我々に敵として襲いかかるだろう。が、その禁忌を守るものだけ残れ。』そう言うとうと、三人は身じろぎせずに残った。―

―『よろしい。それともう一つ、運命同士の交差は新たな輝きを生む。それが、敵か否か。それは、わからん。だが、それは二つを保つために有る事を忘れるな。』王はそう言い、その三人を味方につけ、そして、栄光に導いた。その国の名は・・・『アルハザード』。

「なんやて・・・？」

アルハザード。そこは忘れられた都市。が、なぜ消えたのか、それは謎。

「もしかして、この先に・・・。」

―運命と正義はぶつかり合い、消えてなくなる。が、いつかその因縁を断ち切る事が出来れば、栄光は、平和はまた訪れる・・・。―
「・・・これでわかった。なんで、アルスとゼロ君がぶつかり合ったのか。」

そして、端末にこの文書を保存し、はやては一息ついた。

＊

「・・・ここ、大事ですよ♪」

ゼロは見てわかる通り、授業中。

「先生。」

「ん？何ですか？」

「先生の授業は分かりやすいですけど、何処で教えて貰ったんですか？」

と男子生徒が質問する。

「もう、そんなこと言っちゃ今日の分終わらないでしょ？って訳で、次の所に進みま〜す♪」

ゼロは気にせず、スルーし、授業を進めようとした時、チャイムが鳴る。

「あらら。時間かぁ〜。しょうがないな。じゃあ、午前中の授業は終わり♪お疲れ様。日直さんお願いします♪」

そう言い、午前の授業は終わる。

「さて、どうしよっかな？」

と考えていた時、

「あのさ、ゼロ？」

とフェイトから声がかかる。

「どうした？」

「よかったら、その、一緒に……。」

「ああ。じゃあ、そうするか♪」

笑顔でそう言い、屋上に弁当を持っていく。その時の二人は超ラブ
ってて、他の生徒から、（特に男子）から、恨みを買うはめになっ
た。

＊

「「頂きます。」」

そして、二人で座り、箸をつける。

「あのさ、ゼロ？」

「ん？どした？」

「さっき、なのはから聞いたんだけど・・・どうしたの？」

「・・・わかった。言う。」

「うん。」

「アルスに会ったんだ。結界の中でな。」

「結界・・・やっぱりね。」

「やっぱりって事は・・・気付いてたのか？」

「うん。そこで何があったの？言ってくれないかな？」

「・・・アルスが言うには、俺は強大な力を手に入れた。だか

ら、俺が邪魔な存在になったって事らしい。」

「でもさ、それって可笑しくない？」

「まあ、不自然だよな。俺が強大な力を手に入れて。」

「そうじゃなくて。」

そう言ってフェイトは顔を近づける。

「なんで、それでゼロが消えなくちゃいけないかって事！」

「！！・・・確かに。なら、俺は力を使わないようにすればいいだけ・・・。けど、奴は俺に攻撃を仕掛けた。どういう経緯で・・・？」

「ね？　そうなるでしょ？」

「確かに。何でだろう・・・？」

「まさか、そう言う運命だったりしてね。」

フェイトが思いついたように言う。

「あり得るな。」

ゼロは否定せず、言う。

「協力者、探した方がいいんじゃないのかな？」

「まあ、そうだよな。けど、下手に巻き込みたくない。」

「私もその気持ちはあるんだよね。」

「うーん。」

二人は箸を止めずに頭を捻る。

「フェイトちゃん？ゼロ君？何してるの？」

「「うわぁ！！」」

いきなり声を掛けられ、びっくりして、後ろを向くと、なのはが居た。

「あ、なのはか。びっくりしたなあ。」

そうゼロは言う。

「私も。」

フェイトはそれを肯定するように言う。

「で、結局、二人は何をしてたの？」

となのはが聞く。

「「ちょっと、アルスの事でね（な）。」」

「ふーん。で、いつもそうやって食べてるの？」

なのはの目には二人が体をピッタリくっ付けて、仲良く食べてるように見える。

「うん。そうだぞ。」

ゼロはこれに慣れたようで、当り前のように言う。フェイトの顔は赤いが。

「仲いいね、二人とも♪」

「なら、お前が左に入るか？」

ゼロが唐突にそんな事を言う。

「え？・・・いや、いいよ／＼／」

そして、なのはは顔を赤くする。

「そうか。・・・ご馳走様。」

程なくして、ゼロが弁当を食べ終わる。

「じゃあ、行こう・・・・・・・・？なんだ、この魔力反応。」

「どうしたの？」

なのはが聞く。

「近づいてくる・・・。」

ゼロが言う。フェイトとなのはも確認する。

「本当だ……。何だろ？」

フェイトは聞く。

「レベルからして、バリアジャケットなしじゃ厳しいな。人よけの結界でも張つといた方がいいな。なのは、フェイト。」

「ゼロ一人で対応する気？」

フェイトは聞く。

「ああ。まあ、軽くあしらって、撤退するよ。」

「ホントだよね？」

なのはが顔を近づけ、聞く。

「ああ。」

「・・・わかった。でも、無理はしないようにね。」

「OK♪」

そう言うと、結界が張られた。

「ブレイブフォース。」

△了解。▽

「セットアップ。」

△準備完了。セットアップ。バリアジャケット、精製します。▽

そして、甲冑姿のゼロが出てくる。

「さあ、どこからでもかかって来い・・・。」

そして、構え、待つ。

*****??*

「ふう、片付いたようだね。」

紫髪で、白衣を着た男・・・ジェイル・スカリエッティが言う。

「そうですね。ドクター♪」

？の戦闘スーツを着ている女性、クワットロが答える。

「さて、私はロストログアでも搜索するとするよ。」

そう言い、スカリエッティは出て行った。



星の、海に、儚く消えて♪

フェイトは置いてあった箱を手取る。

なのは

「これ？もしかして、トラウマの原因。」

はやて

「せやろな。何が入ってるんだろな？」

フェイト

「ゼロには悪いけど、開けてみる？」

なのは・はやて

「うん。」

そして、三人は箱を開け、それを巻き戻しのように閉める。

はやて

「ゼロ君、勘忍な。」

なのは

「何か挟まってる。なにになに？」

『スターゲイザーさんへ。』

それ、ゼロに着させてやってね？

BSアリシアより。』

だって。」

フェイト

「へえ。BSのアリシア、そんな事を……。」

はやて

「うお！フェイトちゃんから何か、黒いオーラが……！」

なのは

「フェイトちゃん、ちょっと怖いよ……。」

フェイト

「ふふ♪アリシア、こっちに来た時はお仕置きだね♪ちゃんとかわ

いがつてあげるからね♪作者さん、お願いね♪」

りよ、了解しました・・・。

はやて

「フェイトちゃんのキャラが変わつとる!! てか、作者さん!？」

仕方がないだろ。あんな黒い笑いをされたら・・・。てか、フェイトさん、もう、お仕置き用の服の製作を始めてるぞ？

なのは

「にやははは。かなり本気だね。」

はやて

「ゼロ君の復讐かな？ ちょっとヤバ気やな？ でも、おもしろそうやから、私も混ぜてえ〜♪」

なのは

「はやてちゃん!？ もう、ゼロ君もしっかり!」

ゼロ

「俺は、男としての何かを失ったあああああああああああ
あ!!」

なのは

「そんな事ないって! ほら、ね？」

ゼロ

「ありがとな。で、後の二人は？」

なのは

「あっち。」

はやて

「巫女バニーなんてどうや？」

フェイト

「いいね♪」

ゼロ

「……。触らぬ神に祟りなし!!」

なのは

「ふえ!?!」

ゼロ

「あればっかりは止められん!終わらずぞ!明日の大空へ!RID

E………」

なのは・ゼロ

「ON!!!!!!!!!!!!!!」

はやて

「スク水巫女ってのもええな。」

フェイト

「それ、も作ろう……。♪」

はやて・フェイト

「フフフフ……。♪」

第7話 一影の正体、そして、新たな転校生。一

そこに一人の男が降り立つ。ものすごく体格のいい男。本当に某世紀末伝説マンガに出ても可笑しくない位ゴツイ。

「おいおい。マジかよ。こりゃ、チ〇・ホン〇ンよりもデケェんじやねえか？」

とゼロは呟く。

「貴方は誰だ？」

その、チ〇・ホン〇ン位の背のある男が聞く。

「人に名乗らせる前に自分から名乗るものじゃないのか？」

そうゼロは言う。

「失礼。私はアルテマ・カトラス。またの名を『総てを断ち切る者』。」

と男は名乗る。

「へえ。礼儀正しいな。俺は機動六課所属の八神ゼロ・S・A・ハラウンだ。宜しく。アルテマ・カトラスさん。」

とゼロはさん付けでカトラスを呼ぶ。

「ああ。宜しくお願ひする。・・・失礼。今は何時だろうか？」

とカトラスは聞く。

「今は・・・1..30分位ですけど。」

とゼロは教える。

「そうですか。ありがとうございます。あ、貴方は先生ですよね？」

「ええ。そうですが。」

「これ、上条さんに渡しといて下さい。」

カトラスはそう言い、花束を渡す。

「一応聞きますが、怪しい物とかは入っていませんよね？」

ゼロは眉を顰めて聞く。

「ええ。その点に至っては大丈夫です。では、これで。」

そう言うと、飛び去って行く。

「何なんだろ。アイツ。」

そう呟き、なのはに念話を繋ぐ。

（なのは？もうOKだ。）

（え？もう？）

（ああ。結界を外してくれ。）

（うん。）

そう言うのと、結界が外れ、青い空が広がる。

（で、どんな人だったの？）

（体格とは裏腹に滅茶苦茶、義理がたい人だった。）

（そ、そうなんだ・・・。）

（そろそろ時間だし、俺、授業に行くわ。）

（うん。わかった。）

そして、ゼロは念話を切り、職員室へ急いだ。

＊

一方、なのは達は

「なのは？ゼロ、大丈夫そうだった？」

とフェイトが聞く。

「にやはは。意外と面白そうな人だったみたい♪」

となのはは邪気のない笑顔で言う。

「どんな人なんだろうな・・・？」

「なんか、体格とは裏腹に滅茶苦茶義理難い人だったらしいよ？」

「そうなんだ。」

フェイトはそう言う。

「じゃあ、戻ろうよ。フェイトちゃん。」

「うん。そうだね。」

そして、二人は戻って行った。

＊

一方はやてはと言うと・・・。

「はぁ。気持ちええな。」

お茶を飲んで、呆けていた。

「はやて？」

と、その時、ドアを開ける音がして、赤髪で、三つ編みにしている少女、ヴィータがはやてを呼ぶ。

「どうしたんや？」

「今、ちょっとだけ強い魔力反応が有ったんだけど、どうする？」

「すぐに消えたんか？」

「うん。すぐに消えたよ。」

「なら、大丈夫や。ロストログアの方は私でも調べるから、ちょっと休憩してるとええ。」

「うん。わかったよ。」

そう言うのと、ヴィータは出て行き、はやては端末を起動させる。

「さて、私も頑張るとしますか。」

そうはやては言い、屈伸をして、調べ物を始める。

＊

場所は戻って、ゼロ達は

「はい♪今日は長距離走をしたいと思います♪」

そう言い、体育の授業中。

「先生。」

「なんですか？」

「あの、今日は転校生が来るって聞いたんですが……。」

「知りません。」

真顔でそう言う。

「さて、まずはグラウンドを歩いて、感触を確かめてね♪一番最後の人には罰ゲームがもれなくつくから、ちゃんと確認しましょう♪」

ゼロがそう言うのと、生徒全員が、用心深く歩く。

「ちょっと、ゼロさん？」

スバルが聞く。

「ん？」

「やりすぎじゃないですか？」

「大丈夫だって、しっとりコースかサツパリコースか選ばせるから。」

「いや、そう言う事じゃなくて!!」

「わかってる。俺は何もしないよ。ただ、冗談を言ったただけだ。」

そう言い、ゼロは両腕に付けてるリストバンドを外した。ドシン・・と鈍い音がした。

「あの、ゼロさん？」

「ああ。これはな。一つ6トンはある代物だ。スイッチで外れる物で、両腕、両足に二個づつ、で合わせて48トン位あると思うぞ。でも外すときは、異空間に転送するから、ご心配なく。ふう。軽くなった。」

そう言うのと、準備運動をする。

「ゼロさんも走る気ですか？」

「そうだけど？お前も走るか？」

とゼロは聞く。

「私は見えます。」

「そうか。じゃあ、これ起動させて、取って置いてくれ。」

そう言うのと、スバルにカメラを渡す。

「先生。終わりました。」

「ありがとうございます。じゃあ、何周がいいですか？」

「先生！私は二周がいいです！！」

とアリシアは元気に言う。

「はい♪じゃあ、他は？」

しばらく静まり返り、

「じゃあ、先生は20周を10分で走ろうと思います♪」

そう言うと、

「先生。ホントにそんな事が出来るんですか？」

と神無がきく。

「出来ますよ♪多分、一人目が走り終わったところには20周が終わっていると思います♪おっと、少しだけ脱線してしまいましたね。では、スバルさんに、カメラに収めて貰っているので、見たい人は、見てください♪では、配置につきましよう♪」

そう言うと、生徒たちは準備し、スタンディングスタートの形を取る。

「よいい、どん♪」

そう、ゼロが言うと、みんなが走りだす。ゼロは一番後ろに居て、ドンドン抜かし、先頭に着いた。先頭はアリシアだった。

「頑張ってる〜？」

「頑張ってるよ。」

「そっか。なら、ここの感触も慣れた事だし、一気に20周するわ。」

「うん。わかった。」

そう言うのと、ゼロの姿がぶれ、ゼロが走り去った方を見ると、砂が舞い上がっていた。

「うし。18周。」

そして、ぶれが収まり、アリシアの前に一滴の汗もかいていないゼロが現れる。

「早っ！ホントに18周したんだよね？」

アリシアは驚き、ゼロに聞く。

「したよ♪スバルにビデオ見せてもらえばわかるって。」

そう言うのと、アリシアの視界からゼロが消え、ゼロは白線の上に立っていた。一周を測るための白線。

「速くしろよ♪罰ゲームがお待ちかねだよ♪」

そう笑顔で言う。それを聞いた瞬間、皆が冷や汗を流した。

「ゼロさん。」

「あ、悪い悪い。で、どうだ？」

「取れましたよ。でも、超人レベルじゃないですか？これ。」

「どのくらいで走ってた？」

「サツパリコースしゅうりょ♪」

笑顔でそう言うゼロが現れる。ちなみに侑斗は少しだけ赤く染まっていない。

「さて、今の内にスバルさんからビデオを見せて貰っていると思うので、次に移りたいと思います♪」

「先生。私、先生が本気で走って、何秒くらいかかるか見てみたいです。」

と神無が言う。

「いや、先生は街中を1時間で100周位できる人だから、無理ですよ♪」

と言うと、チャイムが鳴る。

「はい♪て言う事で終わりたいと思います♪あ、そうだ。神無さんは渡す物があるので、職員室に来て下さい♪」

そして、授業が終わる。ゼロはポケットからリストバンドを着けながら、職員室に戻って行く。

＊

「えっと、お、有った有った。」

一方職員室。戻ってきたゼロはさっき、カトラスにもらった物を探し出した。

「失礼します……。」

丁度その時、神無が入室する。

「おーいこっちこっち。」

そして、ゼロは神無を手招きする。

「で、渡す物って？」

と神無は聞く。

「これ。」

それは、花束だった。神無は花束の中に手をつっ込み一枚のカードを取り出す。

「……成程な。あのカトラスめ……。俺が嫌だったのがわからんのか……？」

「まあ、落ち着け。落ち着け。」

神無の怒りを感じたゼロは抑えさせる。

「で、あの馬鹿野郎はどこに行ったんだ？」

「もう帰ったよ。」

「なら、いいか。ありがとな。」

そう言うと、神無は職員室を後にする。

「・・・俺は、こんな事をしていいんだろうか？ ううん。駄目だよな・・・よし。」

そうゼロは呟くと、ゼロは校長室に向かう。

＊

ゼロは校長室の前に居た。そして、ドアをノックする。

「何方ですか？」

と校長から、返事が返る。

「ゼロです。少し、話したい事があるのですが・・・。」

「どうぞ。」

そう校長から、許可が出るとゼロはドアを開ける。

「失礼します。」

「それで、何ですか？」

「校長先生。僕は前に話しましたよね。今ここにはちょっとした危機が訪れてるって。」

「はい。言いましたよ。」

「それで、ここ最近になって、もう地球の危機としてのレベルになりつつあります。」

ゼロがそう言うのと、校長は紅茶を飲もうとする手を止める。

「どう言う事ですか？」

「・・・正直話したくないんですが、すべて真実で偽りのない物です。聞いてくれますか？」

校長を見据えて、ゼロは言う。校長はそんなゼロの瞳を覗き込む。

「・・・いいでしょう。」

そう言うのと、紅茶を置き、某ネルフの司令官のように手を組む。

「実は僕等は魔法を使う世界、次元から来ました。そこで、重要視され、今危険なのはロストロギアと言う代物です。」

「で、そのロストロギアと言う物の危険性は？」

「最低で街一つ、最高で世界、次元を吹き飛ばします。で、僕等はある犯罪者を追い、ここに来ているんですよ。それで、僕自身でもロストロギアの情報を集めたいので、2-Zの専任担任を辞めさせていたきたいのです。」

校長は紅茶を啜る。そして、

「・・・いいでしょう。」

専業担任を辞めさせる事を許可した。

「ありがとうございます。」

そう言うと、ドアがノックされる。

「どうぞ。」

と校長は言い、

「失礼します。」

入ってくるのは、青色のショートカットの髪に水色の瞳をした少女。

「来ましたか。」

そう校長は言う。ゼロは邪魔になると思い、出て行こうとしたが、

「貴方も残ってください。」

そう校長は言い、引き止められる。

「・・・わかりました。」

ゼロは足を止め、校長の隣に立つ。

「それで、名前は？」

校長はそう少女に聞く。

あかつきセレナ
「暁・S・クロウズンです。」

そう少女は名乗る。

＊

そして、放課後。校長室に来たセレナは外国からの転校生。で、2
—Zに明日から入るから。と言われ、出て行った。

「さあて、帰りますか。」

そう言って、ゼロは家に足を向ける。

「今日の献立は何にしようかな♪」

そう呟きながら歩く事10分。

「ゼロ〜!」

と振り向く前に飛びかかれたのか、背中に柔らかい感触。

「フェイト? 案外、大胆だな／＼／」

ゼロは顔を赤くしながら言う。

「そんな事ないよ♪」

悪戯っぽい笑いでフェイトは返す。

「まあ、いいか。今日は何がいい？」

「そうだな・・・あ、外食にしない？」

「エリオとキャロ、アリシアに俺とフェイトでか？」

「いや、二人で♪」

「あのねえ。それだとエリオ達が困るでしょ？」

「なら、聞いてみようよ。」

「フェイトはさ。ミッド居た時より甘えん坊になってないか？」

「そんなことはないよ♪」

「まあ、いいけど。」

そう言うと、ゼロは携帯を取り出し、家に電話をかける。しばらく呼び出し音が聞こえて・・・。

『はい。ハラオウンです。』

そうエリオが出た。しっかりしてるな。とゼロは思う。

「あ、ゼロだ。」

『ゼロさん？どうしたんです？』

「実はな————」

それから、フェイトと外食する事を伝える。エリオは苦笑いしている事だろう。とか思いながら、話す。

『そう言うことなら、良いですよ。』

「でも、晩御飯だけは作って行くから。」

『いや、何か買いますかr・・・』

「今日の今まで俺の飯食ってきた奴が、他の飯でよかった奴なんて見た事がないぞ。」

『・・・あの、大丈夫ですから、気にしないで下さい。』

「そうか。アリシアの方は俺からも連絡するから。じゃあ、そういう事で。」

『はい。』

そして、次にゼロはアリシアに電話をかける。

『何?ゼロ。』

「アリシア?俺等これから、飯食いに行くから。」

『え?エリキャロ連れて?』

「いや、二人で。」

『あ、そっか。二人の方が夫婦っぽくていいよね♪じゃあ、私は桜の所で食べるから。』

「うん。わかった。じゃあな。」

そして、携帯をしまう。

「さて、みんなには連絡したし、行くぞ。」

「うん♪」

そうフェイトは答えると、くっ付いて歩く。

「どこか行ってからにしようか？」

「じゃあ、映画かな？」

「よし、ならホラーだな。」

「ええ!？」

「冗談だ。っていうと思った？」

「や、ややややっぱり映画はやめる。」

「そうか。」

「うーん。やっぱり、エリオとキャロも心配だし、早めに帰る?」

「それでもいいぞ。何処で食べる?」

「その前に。」

とフェイトは言い、ゼロの手を引っ張り、何処かへと連れて行く。

＊

「こっちこっち。」

「おい。フェイト。俺の意見は無視ですか？」

そして、フェイトが手を離す。

「着いたよ。」

「？ああ。海か。」

「うん。私はロマンチックだし、好きだよ♪」

「俺も♪」

二人はともに見つめ、笑う。

「そう言えば、フェイトから告白を受けたのも海が見える場所だったな。」

「うん。」

二人は海を見つめ、手を繋ぐ。

「懐かしいな。少しだけ。ほんの少しだけだけど、懐かしい記憶。」

「そうだね。・・・ゼロ？」

「ん?・・・!／／／」

振り返ると、フェイトの唇とゼロの唇が触れあう。

「ん・・・／／／」

そして、ゼロは抱き寄せる。

「・・・／／／」

そして、離れる。二人とも顔が赤い。

「なかなか大胆やな〜お二人さん♪」

「「!」」」

その方向を向くと、はやてが居た。

「は、はやて?居たのか？」

「うん♪フェイトちゃんとゼロ君がキスを始めて、抱き寄せて、離すところまで、しっかり録画済みやで〜♪」

「「ええ!?／／／」」

フェイトとゼロは顔を赤くしながらも驚く。

「でも、フェイトちゃんとやって、私とはあまりないから・・・」

「!」

今度ははやてとゼロのが触れあう。そして、離れる。

「今日くらいは良いやろ・・・／＼／」

そう言うのと、はやては顔を赤くする。

「ああ。まあな。」

ゼロは冷静になり、言った。

「そろそろ、行こうか？」

とフェイトが言った。

「そうだな。はやても一緒に。」

「うん♪」

そうフェイトが言うと、ゼロの手を引っ張り立たせる。

「でも、どうして分かったんや？」

「俺ははやてがここまで来るとは到底思わない。で、何でなのかも一緒なのかな？」

そう言うと、

「えへへ。ばれちゃった♪」

笑いながらなのは出てくる。

「で、何かわかったのか？」

とゼロは聞く。

「うん。」

「うし。じゃあ、食事しながら話そう。」

「「「そうだね。」」」

そして、四人はとあるお店に入り、食事を頼む。

「んで？どんな事がわかったんだ？」

「実はな……。」

そして、はやては話を始める。家で調べてわかった事、それにロス
トロギアの事、アルスの事。それを話した。

「……成程な。俺は何か感じてたんだよ。アルスについてな。」

「何で言わなかったの？」

フェイトが聞く。

「・・・心配とか、あまりさせたくないからな。まあ、俺の判断で
だけ。」

「私たちの事そんなに頼りない？」

なのはが上目遣いで聞く。

「そんなことはない。けど、俺のために誰かが傷付く事が怖いから
さ、俺は無闇に助けは呼ばない。」

ゼロは返す。と丁度その時、料理が来た。

「じゃあ、食べようか。」

「」「うん。」「」

そう言うと、みんなで食べ始める。数分後、フェイトがゼロの事を
見つめ、思いついたように瞬きする。

「ゼロ？」

「ん？」

「あゝんして？」

そうフェイトは言う。

「・・・フェイト？」

「あゝん♪」

フェイトは待っている。

「はぁ。あゝん。」

そして、ゼロの口の中にフェイトは自分の食事を入れる。

「美味しい？」

「ああ♪」

そう笑顔で言う。それを見たはやてとなのはが同じようにゼロにやって、ゼロが三人にお返しして、バカップルぶりを演じたのは余談である。

＊

「さて、帰るか。」

ゼロが言う。

「それもそうだね。」

なのはが言い、

「じゃあ、行こうか。」

フェイトが繋ぎ、

「そうやな。」

はやてが言う。

そして、会計を済ませ、外へ出た瞬間、フェイトがゼロの右腕を谷間に挟む。

「フェイト。お前、今日は大胆だな。」

「そう？」

フェイトは悪戯な笑いを浮かべる。ゼロは諦めて、そのまま帰る。二名から物凄い殺気を感じたが、気にしない。

「「じゃあ、私たち違う道だから。」」

とゼロとフェイトは言い、

「じゃあね。御二人さん。」

「今度、私の家来てね、ゼロ兄。」

「ああ。そうする。」

そう言い、別れる。

「ゼロ？」

フェイトが呼ぶ。

「・・・作者さん。少し、お話しようか・・・。」

遠慮します!!

フェイト

「貴方に断る権利はない・・・。」

ピンポンパンポン♪ただいま、フェイトさんの無間無双、苛立ちM
AXが行われております。水樹奈々さんのG i m m i c k G a m
eでも聞きながらお待ちください♪

ゼロ

「そこらへんで辞めておけ。」

はやて

「でも、どうしようなあ？あ、ゼロ君に着せれば・・・」

ゼロ

「却・・・」

なのは

「いいね。えっと、スターゲイザーから渡されたこの薬を・・・ほ
っ！」

ゼロ

「!・・・。」

はやて

「さて、フェイトちゃん？なのはちゃん？」

フェイト・なのは

「りょーかい♪」

しばらくお待ちください・・・

はやて

「やっぱり似合うなあ〜♪」

フェイト

「ホントにはやてにそっくり。」

ゼロ

「はっ！なぜこの姿に！！」

なのは

「あともうちよっただけ……。」

ゼロ

「やらせるか！！」

―戟―

ゼロ

「危なく、前の二の舞になる所だった。」

はやて

「もうちょっとやったのに。」

ゼロ

「まあ、前のビデオレターと一緒に今ビデオレター撮影して、それと一緒に向こうへ投下するか。」

フェイト

「時間だね。蒼く高い大空へ……」

一同

「飛翔せよ！！」

第7話 一影の正体、そして、新たな転校生。ー（後書き）

言い忘れましたが、IFストーリー公開中です♪

第8話　Fの力の持ち主

「えゝ突然ですが、今日は転校生が来ます。」

桜がそう言う。ゼロはものすごく眠そうにしているが、ちゃんと耳の中には入っている。いつもなら、目は醒めているのにだ。なぜか。理由は一つ。今日の朝、起床した時に、フェイトの谷間に自分の腕が潜り込んで、気が気ではなくなっているからだ。まあ、それでしつかりとした感情を保っているのは、感情が冷めている人だけだろう。

「それでは、入ってください。」

そう桜が言うと、青色のショートカットで水色の瞳の少女。

あかつきセレナ

「暁・S・クロウズンです。セレナって呼んでください♪宜しくお願ひします♪」

そう自己紹介をする。一部の男子が興奮しているが、ゼロは凍結の属性変化資質を使い、黙らせる。

「では、そちらの空いてる席に座ってください。じゃあ、次の時間は私の教科なので、質問タイムにしましょう♪」

と桜が言ったところで、チャイムが鳴る。

「なあ、好きなものある？」

「得意な事は？」

「彼女いる？」

恒例の質問責めが始まる。ゼロは炎の属性変化資質でまたも黙らせる。

「君達・・・先生の話は授業中に聞いて、ちゃんと復習しようね・・・♪」

そう黒い笑顔で言う。

「じゃないと、このかわいそうな柱のようになるよ・・・♪」

そう言うと、近くにあった柱を殴る。そうすると、針金のようにへし曲がる。

《サーイエッサー!!》

生徒一（質問責めをしてる人のみ。）を一頻りして黙らせると、出ていく。

「やっぱりゼロは恐ろしいね・・・。」

アリシアがゼロが戻ったあとと呟く。

「「確かに・・・。」」

侑斗と神無が肯定する。

「「「はあ。」」」

そして、3人で質問責めしてなくて良かった。と言ったため息をついた。

「あの・・・。」

「「「ん?」」」

そこに立っていたのはセレナ。

「どうしたの?」

アリシアが聞く。

「その、ちょっと屋上に来てくれませんか?」

「「「いいよ／＼良いぜ。」」」

と3人は答え、屋上に行く。と、そこに居たのは、

「あ?何しに来たんだ?」

ゼロだった。そこには数名の瀕死体が有った。

「ゼロさん?つかぬ事をうかがいますが、何をしてらっしゃるんでしょうか?」

セレナが聞く。

「いや、な。ちょっとしたシスコン不良学生に鉄拳制裁と体で話し、

聞くお話ってのを行ってた訳。」

ああ。やっぱりかあ。とセレナ以外の三人は思う。いや、もしかしたら思っていたのかもしれないが、顔に出していないだけかもしれない。

「ここに伸びてる奴全員運ぶのか？」

と侑斗がきく。

「いや、次の時間が体育みたいだから、外に放り投げる。」

酷っ！と四人は思う。

「で、ここに來たって事は話があるんだろ？・・・魔法の事で。」

そう言った瞬間、アリシアと神無と侑斗の三人はそうだった！と言う顔をし、セレナは顔を強張らせる。

「ゼロさんは、右手に紋章の様なものが刻まれませんでしたか？」

そうセレナが言った瞬間、ゼロの顔も強張る。

「・・・って事は、お前はFか？」

ゼロはグローブを脱ぎながら聞く。

「ええ。Fです。」

そして、セレナは右手に巻いていた、シャドウボクシング用の包帯

を取る。そして、右手同士を近づける。

一閃一

その場に眩い閃光が走る。数瞬後、閃光は収まる。ゼロはグローブを、セレナは包帯を巻く。

「これから、宜しくな。セレナ。」

とゼロは右手を差し出す。

「ええ。ゼロ。」

セレナはそれを取り、握手を交わす。

「ねえ。何でセレナは今ゼロって呼んだの？」

アリシアが疑問に思い、聞く。

「戦友だからですよ。」

セレナはそれに答える。

「なら、私も呼んで欲しい。」

そう言い、アリシアは頬を膨らます。セレナは少し笑い、

「ええ。アリシアもこれから宜しく♪」

そう言うと、チャイムが鳴る。

「お前等、そろそろ時間だから、教室に戻れ・・・っと！」

ゼロはそう言うと、不良学生を全員持ち、一気に放り投げた。一応補助はしといたゼロだがものすごく盛大な音がしたのは余談である。

「じゃあ、戻ろうか？」

「「「はい♪／ああ。」」」

そして、四人は早足で戻って行く。

「・・・アルス・・・お前は、こっちに来る気はないのか・・・？」

ゼロはアリシア達が戻って行った後に呟く。

「へフリーダムですか。へ」

ブレイブフォースが言う。

「ああ。自由の形、フリーダム。けど、本当は・・・」

「へマスター。深く考えないでください。へ」

「わかっている。俺はスカリエッティを止めるためにここに来てるんだよな・・・。」

ゼロがそう言うと、風が肌にあたる感じがなくなる。

「・・・結界か・・・。」

ゼロはスタンソードを構える。

＊

その頃、アリシア達は・・・

「さて、授業ならぬ、質問タイムの始まり始まり♪」

桜がそう言うと、質問の時間が始まる。

「廊下側の方から来て、窓際で終わりです♪」

そう言うと、まず、神無。

「好きなものは何ですか？」

「料理を作る事、楽器を弾く事、残虐な叫び声を聞く事です。」

そして、みんなが静まり返る。

「まあ、最後のは冗談です。」

そう言うと、神無と入れ替わりに、侑斗が立つ。

「料理は何を作るんですか？」

「お菓子・・・とかですかね♪」

そうセレナは笑顔で言う。

そして、最後にアリシア。

「ズバリ聞きます！今、好きな人はいますかぁ！！」

と某武装を錬金術で作りだす少年の友達のエッチな人の如く、目を光らせて聞く。

「え、えつと・・・。」

困ってるのを余所に、桜はものすごく笑いを堪える。止めてください！桜先生！！とかセレナは思う。

「・・・私は好きな人はいません。」

一部の男子からおおー。とかという声が聞こえた。その時、教室から人氣が消える。

「結界！？何でこのタイミングで！？」

アリシアが声を上げ、その後

一撃！ー

屋上から大きな衝撃が来る。

「・・・行ってみる・・・いや、行く！」

そうアリシアが言う。それと同時に教室を飛び出す。

「待つて！アリシア！！」

セレナはそれを追う。

「糞ッ！先生！！」

神無も声を上げる。

「わかってます！行きましょう！！」

桜が言い、屋上へ向かう。

＊

一方、屋上。

「くっ！そが・・・多すぎだろ・・・この数！許可が下りないから、バリアジャケットは着れないし！！」

ゼロはそう言い、スフィアを作りだす。

「行けっ！」

そして、スフィアを放つ。

一撃一

ほぼ同タイミングで着弾。が、またガジェットが現れる。

「全然へらねえじゃねえか！」

一戟！一

悪態をつくも、確実に体術で撃墜する。

「ホントは使いたくないんだけど、あれを使うか？」

へマスター、それは危険です！

ブレイブフォースも反論する。

「だよな……。でも、あれを使わなきゃ、戦局はこのまま。どうする……？」

そして、魔法が使えないため、次第にゼロは追いつめられる。

「やっぱ使おう。」

へマスターさっきも私は……

「俺はこんなところでは墜ちれないんだよ。だから、少しだけ開放する。」

へ……。わかりました。

「うし。不死鳥system、ブラックウイングオープン。」

へ了解。ブラックウイング出ます。

そうブレイブフォースが言うと、ゼロの背中に漆黒の翼が生える。

「行くぞ！」

へはい！

そう言うのと、ゼロはガジェットの群れに突っ込んで行く。

一斬・斬・斬・斬・斬・斬

一気にゼロはガジェットを切り刻む。ガジェットは誘爆しながらも、数を減らす気配はない。

「糞ッ！フェザーランサー！！」

ゼロがそう言うのと、羽根が外れ、宙に浮く。

「行け！」

そう言うのと、ガジェットに次々と襲いかかる。

「やっと三分の一・・・。」

そう言うのと、ドアが開く音がする。

「「「「ゼロ！／先生！」「」「」」

アリシア、セレナ、桜、侑斗、神無がそこには居た。

「すまん。加戦してくれ！捌き切れん！」

そう言うのと、ゼロはランサーを戻し、蹴りを入れ、ガジェットを爆破させる。

へマスター！

ブレイブフォースが限界を伝える。

「わかった！ブラックウイングクローズ！」

へ了解。ブラックウイング収納します。へ

ゼロの背中から、漆黒の翼がなくなると、ゼロは膝をつく。ガジェットはそれを待ってましたとばかりに、襲いかかる。

一撃！

が、それは一つの魔力弾で妨害される。放つものは侑斗だった。侑斗は次にこう言う。

「大体わかったぜ。先生。こいつ等が・・・俺等の倒さなきゃいけない、存在だっということがな！！」

そう言うのと、アリシア達もデバイスを構える。

「ディケイドドライバー！」

「アイセス！」

「アルテマ！」

「オフエアリス！」

侑斗、アリシア、桜、セレナの4人はデバイスを掲げ、神無は身構

える。

「「「セット、アップ!」」」」

〈〈〈Standby ready. Set up.〉〉〉

そして、四人はバリアジャケットを纏う。侑斗は特撮ものが好きみたいで、仮面ライダーの恰好。セレナは両腕にガントレットが付いており、右は金、左は銀。そして、騎士を思わせる鎧に、左の腰に剣、右の腰に短銃を持つ遠近療法でも対応できるような恰好。

「行くぞ!」

「「「応!」」」」

侑斗の掛け声にセレナ、アリシア、桜、神無は答える。そして、五人は駆け出す。

・・・俺も、負けてられないな。そう思い、意識が朦朧とする中、立ち上がる。

〈マスター!?! 無茶です!〉

「やらなきゃならない時があるんだよ・・・。」

ゼロはそう言い、腕を前に出す。

「男の子にはなアアアアアア!」」

そう言い、ゼロはアロنداイトを召喚する。

「行くぞおおおお!!」

ゼロもまた、ガジェットの群れに突っ込み、ガジェットを斬り倒していく。

一斬!・斬!・斬!・一

ゼロは三太刀を振るう。そして、構えを戻し、次のガジェットを斬る。

「次ィ!」

ゼロは斬り進む。それが、この状況を打開できる術だと思い。忍び寄る影にも気付かず……。

＊

一方アリシア達は……

「ブリッツシューター!」

へブリッツシューター、standby。✓

アリシアは槍状のスフィアを作る。

「シュート!」

そして、放つ。

一撃・撃一

すべて命中する。が、それでもまだガジェットは増える。

「ちっ！ちょこまかと！！」

侑斗は悪態をつくが、確実に撃破する。

「・・・妙だよね。」

突然、桜が声を出す。

「妙って、何がだ？先生。」

スフィアを作り、投げつけ、撃破した神無が聞く。

「さっきから、ガジェットの動きが鈍くなってる。もしかしたら、
本当の狙いは・・・」

「まさか、Jの紋章の奴、そんな事を考えてませんよね・・・。」

ガジェットを真っ二つにして、セレナは考える。

「なにをだ？セレナ。」

攻撃を止め、プロテクションを張り侑斗が聞く。

「もしかして、こうなることも想定して、戦力を分散させるために、
こうやってガジェットを一点に集中させて、それで・・・」

「ゼロが一人になる状況を作り出したって事・・・？」

アリシアが恐る恐る言う。

「「「っ！」」」

アリシアとセレナ以外の三人は驚き、そして、失態の表情を露わに
してる中、セレナは

「そうだと思います。・・・！」

そう言い終わった後、ガジェットの動きが止まった。

一刺し！――

そして、何かが刺さる音がし、

「ゴハッ！」

吐血する音が聞こえる。

「ゼロ！！」

セレナは件をしまい居合の形に構える。

「一の太刀、弧月一閃！！」

そして、技を放ち、一気にガジェットを斬り裂き、視界が開ける。
その先に居たのは・・・

「はははははは！！哀れだな！ゼロ！！」

ローブを被っている男。そして、倒れている男だった。

「ゼロオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

それを見たアリシアはその倒れている男の名を叫ぶ。そして、それを確認した一同はゼロに駆け寄る。

「ゼロ?、ゼロ!?、しっかりして!!」

アリシアは好きだった人の名前を呼ぶ。それが、もう助からなさそうな命でも。ゼロは浅く息をしている。

「アリ・・・シア・・・?」

ゼロは瞳を開けて、アリシアを見る。

「よかった。待って!今助けるから!!」

そう言うと、アリシアは回復魔法をかける。

「無理・・・する・・・な・・・。ゴフツ!!」

ゼロはひとしきり話すと、吐血する。

「もう喋るな先生!!」

侑斗から檄が飛ぶ。

「ははは!どうだ!? お前等の仲間なんて、こんなものだ!」

とアルスから狂った声が飛ぶ。

「貴様!!」

セレナは剣を構える。

「そんな力では、お前の仲間は救う事は・・・」

「黙れ。」

アルスの声を神無が遮る。

「はぁ？」

「黙れてんのが聞こえねえのかこの野郎!!」

神無がそう言うと、一気に魔力量が上がる。

「俺はこれから、お前を、先生の仇を・・・」

「ゼロの？先生の仇をどうするんだ？」

「討つ!!」

そう言うと、アルスに向かい、駆け出す。

「なら、来い!!二人まとめてな!!」

そうアルスは言う。

＊

「駄目・・・！傷が塞がらない・・・！！」

アリシアは泣き顔で、言う。

「アリシア・・・無理するな・・・。」

「喋らないで！！」

アリシアから、檄が飛ぶ。もう、これ以上大事なものをなくしたくない・・・そんな思いで、回復術をかける。それを見た桜が

「アリシア、どいて！」

そう言い、押しのけると、桜が回復術をかけ始める。

「さ・・・くら・・・。」

「喋らないで！！今喋ると、命が飛ぶよ！！」

そう言うと、ゼロは喋らなくなった。そうすると、傷口がどんどんと塞がって行く。

「先生・・・私・・・何もできなかったのかな・・・？」

アリシアが力なく聞く。

「そんなことはないよ。アリシア。」

桜が治癒魔法に切り替え、ゼロを治癒させながら言う。

「アリシアは好きな人のために、頑張って、頑張って、思って、回復魔法をかけてあげたでしょ？」

「はい……。」

アリシアは答える。

「それだけで、十分なのよ。みんな、自分のできる事だけで♪最大の努力を尽くせば、ちゃんと見てくれるものなのよ♪」

桜は笑顔を見せながら、そう話す。

「けど、先生は凄いよ……。」

アリシアは言う。

「何でさ？」

桜は聞く。

「だって、私には、戦う事の方が多くて、回復系は全く使えない……だから……。」

「ゼロはそんな事は言わなかったよ？」

泣きそうなアリシアを見て、言う。

「え？」

「私もね、前にゼロの戦いを見た時に、強い魔法が有っていいなって思った。けど、ゼロはね。『戦って守ることしかできないから、回復魔術も使える桜が羨ましい。』ってね。でも、私にしたら、逆なんだよ。」

「先生……。」

「私はね。アリシアが戦って守れるって事が羨ましい。だからさ、全部やろうとしないで、自分ができる事最大限やろうよ？ね？」

そう笑顔で言う。アリシアは右手で拳を作り、自分の顔を殴った。

「先生。私、どうかしてたね。ごめん！」

いつもの元気な声で言う。

「そう思うなら、セレナ達を手伝ってきて？」

と桜は言う。と、その時

一撃ッ！

神無が屋上の格子に突っ込む。

「くあ……。クソッ！」

神無は拳を握りなおす。

「無駄だと言うのが・・・」

アルスは剣を召喚し、

「なぜわからん!!」

刃を振るう。

一閃!—

それをセレナが受け止め、左手の包帯を取る。

「やっぱり、これを使いますか・・・。」

へマスター。無茶は禁物です。✓

オフェアリスが言う。

「わかってます。自由の神、フリーダム・・・『契約開放』!!」

そして、セレナの足元に蒼い、八角形の幾何学模様の魔法陣が描かれていく。

「我は、自由を司るものなり。汝、与えるものなり・・・無限の自由を!!」

そうセレナが言った途端に、彼女のバリアジャケットが装甲に変わり、機械的な蒼い翼が背中に生える。

「いいだろう。かかって来い!!」

アルスがそう言うと、セレナは駆け出す。

＊

「セレナ……。」

ゼロの呼吸が整ってきた頃、セレナは紋章の力を発動していた。

「桜、もう良い。後は何とかする。」

ゼロはそう言い、立ち上がる。

「ゼロ！無茶だよ！」

桜が止めようとする。が、それでも止まらない。

「俺はしっかりとした、俺の神髄を歩く！」

そう言うと、右手が赤く光る。

「契約開放！」

そう言うと、セレナと同じような魔法陣が描かれる。しかし、色は深紅。

「我、授かる者。汝、授けるもの。汝が運命、我に委ねよ！」

呪文詠唱が終わる。それと同時に

一撃ッ！一

ゼロの鳩尾に拳が入る。

「がはっ・・・！」

ゼロは肺に入っていた空気を吐き出すと、そのまま倒れかかる。その拳を放った主それは・・・

「無茶すぎだよ・・・本当に・・・。」

フェイトだった。その目尻には涙が浮かんでいる。

＊

一方、アルスとセレナは、

「「はあああああああ！！！！」」

一閃！一

剣を出し、打ち合う。幾多もの剣撃を合わせ、砲撃を撃ち・・・これこれ、数十分は続いている。

「貴方を倒さなきゃならないのに・・・。」

セレナはそう呟き、剣を握る力を強める。

「！、管理局か。この勝負、預けるぞ！」

アルスはそう言い、転移した。

「奴・・・Jの紋章の主はなぜ、このような事を・・・。」

セレナはバリアジャケットに戻り、包帯を巻きながら言う。



暗闇から♪聞こえる♪君の声の中に♪たった一つ♪見つけた真実♪

今回の担当

・ゼロ ・桜
・フェイト ・セレナ

ゼロ

「始めました♪後書きコーナーNEO♪」

わ～♪

ゼロ

「作者もめんどくさがってきたな。」

フェイト

「そうかな？」

ゼロ

「いや、前はチュドーン！とか、ドッカーン！とかあってわ～♪だったんだからさ。」

フェイト

「そう言えばそうだね。で、今日はゲストが来てるんでしょう？」
ゼロ

「まあ、な。それでは、入ってもらいましょう♪魔法少女リリカルなのはStrikerS Caliber&phantomから、シン・ルークスさんと、神藤昶さんです♪」

昶

「どもです。」

シン

「初めまして。」

ゼロ

「これはご丁寧に。」

昶

「ゼロさん？」

ゼロ

「ああ。その件なら、俺も大丈夫。俺も昔に似た様な境遇が有つてな。それで、はやてに拾われて、今はこんな感じなんだよ。」

昶

「へえ。今度聞かせてくださいよ。」

ゼロ

「ああ。向こうに行った時にな♪で、まあ、立ち話もあれだから、座ろうや。」

桜・セレナ

「あの・・・」

ゼロ

「あ、御免。」

桜

「とりあえず、自己紹介かな？」

ゼロ

「その点に至ってはセレナだけすれば大丈夫じゃないか？一回、向こうで自己紹介してるんだし。」

セレナ

「じゃあ、そう言うことなら。私は^{あかつき}暁・S・クロウズンです♪」

昶・シン

「宜しく。」

ゼロ

「んじゃおさらい。」

フェイト

「無茶はほどほどに！」

ゼロ

「あれは御免って。謝るよ。本当はもっとガジェットが少ないと思
って……。」

シン

「いい訳は見苦しいぞ。ゼロ。」

ゼロ

「がふっ！ 厳しい一言！」

昶

「大変ですね。」

ゼロ

「まだ、良い方だ。これで、はやてとか、スターゲイザーとかが来
ると……。」

はやて・スターゲイザー

「呼んだ？」

ゼロ

「そうそうこの様に……ってなぜここに居るうううううう！！」

はやて

「ほい。」

ゼロ

「！……。」

スターゲイザー

「よし。じゃあ、話しててください♪」

一同

「はあ。」

ゼロとスターゲイザーとはやては退場。

フェイト

「こんな感じになって、最終的には・・・」

桜

「女体化、スク水メイドゼロが完成する訳だよ・・・。」

セレナ

「見てみたいです♪」

昶

「セレナさん・・・それは間違いなく、危ないスイッチを踏んでい
ることを認識してくれ。」

シン

「戦闘機人で、女体化するのか・・・。」

フェイト

「なんでも、属性体の人っていうのは、限界ぶち切りで無理する
人が多いから、魔力枯渇すると、あんなになるらしいよ?」

昶・シン

「なるほどだな。」

はやて

「お待たせや〜♪」

そして、はやてが入ってくる。

ゼロ

「はあ。」

昶・シン

「かわいいな。」

ゼロ

「言うな。」

セレナ

「かわいいです♪」

ゼロ

「あのなあ。」

フェイト

「でも、かわいいよ？」

ゼロ

「俺は今どのような状況になっているのか、改めて感じている。
スターゲイザー

「どのような状況ですか？」

ゼロ

「フェイト以外を一回殴った方がいいという状況だ♪」
一同

「すみませんでしたあ！」

ゼロ（はやての声真似）

「ええで♪」

フェイト

「はやて、今冗談言ってる場合じゃないよ。」

ゼロ（セレナの声真似）

「そうですよ♪はやてさん♪」

はやて

「私は何もしてへん！」

ゼロ（フェイトの声真似）

「本当？」

ゼロ（スターゲイザーの声真似）

「と言うか、はやてさん。大声出さないでください。」
はやて

「だから私は声なんて上げてへん！！」
ゼロ

「お前等、もう良いぞ・・・ククク」

一同

「ありがとうございましたあ！」

ゼロ

「ははははははは！面白いなお前等！ははははははは！」

フェイト

「ゼロ？ちよつとなんで笑ってるの！？」

ゼロ

「あのかな？・・・ヒソヒソ。」

フェイト

「それは確かに♪」

セレナ

「何で二人で笑ってるんですか？」

ゼロ

「それがさ。ゴニョゴニョ。」

セレナ

「それで引っかかるって♪面白いですね♪」

昶

「何で三人で笑ってるんだ？」

セレナ

「それが、ゼロがはやての声真似で、『ええで♪』って言ったのを皆さん本気にしたので、面白かっただけですよ♪」

ゼロ

「バツ！セレナ！！・・・はっ！」

はやて

「へえ。そんなことしてたんやあ？」

ゼロ

「いや、その、あのかな？これは・・・」

はやて

「問答無用！たっぷり揉んでから、着替えさせてやるわ！」

ゼロ

「あああああああああ!」

しばらくお待ちください・・・

ゼロ

「はあ。はあ。」

昶

「お疲れ様。」

ゼロ

「疲れたってレベルじゃねえぞこれ。」

シン

「飲むか?」

ゼロ

「酒じゃなかったらな。」

シン

「酒じゃないが、何か不手際が発生するのか?」

ゼロ

「においを嗅ぐだけで酔うよ。ついでに猫っぽくなる。」

シン・昶

「猫?」

ゼロ

「その辺は、そっちの作者に悪巧みしてもらえ。」

桜

「そろそろ時間だよ。」

ゼロ

「もう、か。すまない。俺オリジナルのブレンド珈琲とブレンド紅茶だ。持って行ってくれ。」

昶

「ありがとうな。こっち来た時にも、それ相応のおもてなしをさせて貰うよ。」

ゼロ

「ありがとうな。千華ちゃんとアリシアによろしくな。」
シン

「了解した。」

ゼロ

「転送場所、魔法少女リリカルなのはStrikerS Caliber&P;Phantomに転送！」

パシュン！

ゼロ

「転送完了。ちなみに今日のOPはJAM ProjectのRING FORCEだ。じゃあ、新システム、次回予告に行きますか。」

フェイト

「いつ作ったの！？」

ゼロ

「いや、作者がな。じゃあ、セレナから。」

セレナ

「はい。」

セレナ

「ゼロが目覚めた場所は病院。」

フェイト

「そこで、またしても事件が発生。」

桜

「ゼロ達の運命は如何に！？」

ゼロ

「次回、魔法少女リリカルなのは ZEROSTORY―絆（KIZUNA）― 契約開放―」
フェイト

「明日の大空へ！」

一同

「飛翔せよ！！」

第8話 一Fの力の持ち主（後書き）

二階堂さん、ゲスト召喚ありがとうございます♪
それと、読者の皆さんへ。感想お待ちしております♪

第9話―契約開放―

「う．．．。」

ゼロは瞳を開き、光を取り入れる．．．。

「ここは．．．？」

ゼロはあたりを見渡す。右腕には輸血用の点滴が付いている．．．。

「確か．．．俺はアルスに刺されて．．．。！！、アルスは！」

そう言い、起き上がろうとすると、ゼロの体に激痛が走る。

「く．．．あ．．．。」

そして、呻き声を上げ、ベッドに倒れ込む。その時扉が開き、

「あ、気が付いたみたいだね。」

そう言いながら、フェイトが入ってくる。

「フェイトか。俺はあの後、どうなったんだ？」

ゼロはフェイトに聞く。

「．．．。気絶し．．．。」

「させたんだな？」

フェイトが言い切る前にゼロが言う。

「・・・・・・・・・・。」

フェイトはだんまりして、ゼロは微笑み、言う。

「ありがとな。俺を止めてくれて。」

少しだけ声は重かったが、ゼロはフェイトにお礼を言う。

「うん。けど、無茶はだめだよ・・・・。」

そう言うフェイトの笑顔には涙が浮かんでいた。それを見たゼロはフェイトをそっと抱き寄せる。

「ごめんな・・・・。」

その言葉と共に。ゼロは腕の力を強める。申し訳ない・・・・。そう言う様に。

「こっちこそ・・・・すぐに行けなくてごめん・・・・。」

フェイトもゼロの背中に手を回す。とその時、この切ない空気を崩すように、扉は開かれる。

「ゼロさ〜ん！元氣ですか〜？」

スバルによって。ゼロとフェイトは慌てて元の体勢になる。

「ああ。大丈夫。元気だ。」

ゼロは苦笑いをして言う。

「よかった♪心配してたんですよ♪」

そして、ゼロのそばに走り寄る。

「スバル。病院の中では静かにしないと。」

ゼロがスバルに言う。

「ごめんなさい・・・。」

そうする途端に、落ち込む。気分の上がり下がり異常なほど顔に出るな。とゼロは心の中で思う。

「でも、ありがとうな。」

そう言うと、スバルの頭を優しく撫でる。

「はい♪」

スバルは笑顔を作り返事をする。それを見たゼロはさらに優しく微笑む。

「それと、なのはとはやてとティアナとエリキャロもいるんだろ？
入って来いよ。」

《何でわかったの？／んか？／ですか？》

ゼロがそう言うのと、ゼロが言った人全員が出てくる。

「スバルが来てて、他に奴が来ない事はないからな。それと、はやて。右のポケットに隠し持っているメモリースティックを渡してもらおうか？」

ゼロが訳を言い、そして、はやてに言う。はやては体をビクツ！とさせ、ゼロをぎこちない笑顔で見る。

「な、何の事やろうか・・・？」

「とぼけるな。呂律が回ってないし、さらに、さっき抱き合ってたところ盗撮してんのは、ブレイブフォースが確認済みだ。」

そう言う、モニタを出し、盗撮してるはやてを映す。

「さあ、これで逃げ場はなくなったぞ。そのメモリーを……。」

「いやや！」

そう言う、はやては走り出す。

「フエイト♪なのは♪」

「うん」
「♪」

ゼロが笑顔で言うと、二人も笑顔で返す。

[illegible]

あああああああ!!」

その数瞬後はやての悲鳴が病院内に走る。

＊

そして、はやては連れてこられ、今に至る。

「さて、返してもらおうか。」

ゼロが言う。

「いやや。」

はやてがそう返す。ゼロは何か考え込むしぐさをする。

「ゼロさん？」

ティアナが聞く。

「心配するな♪俺は、ただはやてをどうやってお仕置きするか考えてるだけだから♪」

そう顔は笑っているが、目は座っている。今の瞬間にみんなは怖っ!と思っただろう。部屋の隅でガクガク震えている。

「さて、はやて?俺は二つ思いついたよ♪」

ゼロははやてに顔を向け、言う。

「な、何かな？」

はやての足もものすごく震えている。

「一つは、コスプレさせて、ブリッ子して、一日奴隷。もう一つは、フッフ。」

「笑わないで教えてな？」

「教えて欲しい？」

「うん。」

「S Mプレイ♪」

とゼロは言う。

「どっちのいややあゝ!!！」

泣き顔で叫ぶ。

「さて、返すんなら、この三つの内、一個だけ選ばせてやる。返さなかったら、全部やる。俺的には、返した方がお得だよ♪」

ゼロはさらに笑顔で、目は見た相手を凍らせるが如く、冷たい目をしている。それは、なのはとフェイトの二人も同じ。

「わかった。返します・・・。」

はやてはそう言う。そして、ゼロの手に乗せる。

「よし。」

ゼロは受け取る。そして、はやてをそっと抱く。

「え．．．？」

はやては驚く。その後ゼロが

「ありがとな。来てくれて．．．。そして、申し訳ない。」

そう言った。

「どういたしまして．．．。」

そうはやても言い、ゼロの背中に手を回す。

「ほっほう。ラブってますなあ♪」

その時、またしても声がする。しかも見られたので、顔が赤くなる。

「アリシアか．．．びっくりさせんなよ．．．。」

ゼロは言う。

「何よ！せっかく来てあげたのに！」

アリシアはそう言って、膨れる。

「ごめんごめん。」

ゼロは苦笑いをしながらも謝る。

「まあ、いいけど。で、調子はどう？」

「まあまあかな。それほど悪い訳じゃないし。」

ゼロはそう言うと、レッドアラームが鳴る。

「!、こんな時にか！」

ゼロは痛みを根性でカバーし、点滴を抜き、外に出る。

「ゼロ!？」

フェイトが叫ぶが、ゼロは止らない。

「うわゝ。こんな時にレッドアラームとか、タイミング悪すぎじゃないの？」

アリシアはあきれた表情で、そう言う。

「そんなこと言ってる場合ちゃうで! みんな、行くよ!」

《了解!》

はやてが言い、現場へ急行する。

＊

一方、病院の外。

一閃！一

「くう・・・！」

ゼロは戦っていた。その名は、戦闘機人。と言ってもナンバーズではなく、スカリエッティが作り上げた新型。ましてや、ナンバーズより能力は上回る。それに、負傷状態で持ちこたえているのだ。大したもの。

『もう終わりかね？』

スカリエッティが嘲笑い、言う。

「まだまだ・・・。俺は終わらない！」

ゼロは構えに隙をなくし、言う。

『なら、終わらせてあげよう。』

スカリエッティがそう言うと、三体が襲いかかる。

「くっ！」

ゼロは上空に退避し、構えを取り、防ぐ。が、

一閃！一

剣で受けるも、次第に押され・・・。

一撃ッ！一

弾き飛ばされ、上空に飛ぶそれをさらに追い打ちするように一体が来て・・・

一閃！一 一撃ッ！！一

剣を合わせ、その勢いのまま、ゼロを地面に叩きつける。

「カハッ・・・っ！なめるな！」

ゼロは吐血しながらも、剣を弾く。そして、立ち上がり、構える。だが、相当今の一撃は堪えたらしく、ゼロは肩で息をする。

「はぁ。クソ・・・。まだまだ！！」

『威勢だけ本物の様だね。タイプ、異常。^{アブノーマル}』

「その名で呼ぶな！！」

ゼロはそう言うと、走り出す。

一閃！！一

ゼロは剣を合わせ、一旦離れる。とその時、目の前には戦闘機人が居た。

「！、っ！」

ゼロは咄嗟の判断で剣を構える。が、しかし。

一斬！一

鮮血が吹き出す。

「ぐあ……。」

ゼロの背中には血が滲んでいた。

「くっ……。」

ゼロはさらに剣を振るうが空を斬る。

ゼロは剣を地面に突き刺して、立つのがやっとになってきた。

「はあ。はあ。はあ……。くっそ。」

ゼロは目を瞑り、意識が遠のくを感じ、それを何とか持ち直す。と、その時。

《ゼロ！／ゼロ君！／ゼロさん！》

六課のみんなが来る。それと同時に戦闘機人がゼロに向かって振りかぶる。

「！！」

一閃！！！！一撃！！！！

ゼロは剣を上にも構えて、防ぐ。が、勢いは止まらず、地面に足がめ

り込む。

「はぁ!!」

ゼロは腕に力を入れ、弾く。

「大丈夫!？」

フェイトがゼロの隣に降り立ち、聞く。

「大丈夫に見えるんだったら、フェイトの目は節穴だな♪」

とゼロは笑いながら言う。

「ふざけてないで、手当てを……。」

「いや、このままで良い。試してみたい事があるんだ……。」

ゼロはそう言うと、デステイニーフォームを発動し、アロンダイトを抜く。

「はぁぁぁ!!」

ゼロは戦闘機人に突っ込む。

一閃!一

が一体に妨害される。そして、もう一体が……ゼロをめがけて斬る。が、

一閃！一

アロンドイトで防ぎ、弾く。その勢いで、フェイト達の下に降り立つ。

一割一

その瞬間。デスティニーフォームが硝子が砕けたような音を出し、解除された。そして、ゼロはその場に倒れる。

「ゼロ！」

フェイトは呼びかける。だが、起きる様子はない。

「！！シャル！！！」

「はい！！！」

それを見たはやてはシャルを呼び、ゼロの担当てに向かわせる。

「なのはちゃん！」

「うん！行くよ！みんな！」

《了解！》

そして、なのははやての声に応え、FW陣を連れて、ゼロの元へ行く。

*

その頃桜達は神無とセレナと侑斗と一緒にお茶をしていた。

「・・・！今、結界が張られた様な気配がしたんだけど、気のせいかな？」

桜がそう言う。

「そう？ちょっと待って・・・！！張られてる。しかも、ゼロのいる病院に！」

セレナが端末で確認し、そう言う。

「「「！！」」」

桜含む三名は驚く。

「ゼロ先生に何かあったかもしんねえ！桜先生！！」

神無はそう言い、立ち上がる。

「そうね。行きましょう！！」

桜がそう言うのと、結界の張っている場所・・・鳴海市立病院へ急いだ。

＊

一閃！一

「くっ・・・！」

バルディッシュと剣がぶつかる。閃光を発生し、弾き、距離を取る。

『終わりかね？』

スカリエッティが言う。

「五月蠅い！」

フェイトはそれを怒鳴って、自分に喝を入れ、バルディッシュを握る力を強める。

「テストロッサ。無理はするな。」

シグナムが隣に降り立ち、言う。

「わかってます。」

フェイトはそう言うと、息を整え、目の前の敵を睨む。

「無理は、禁物だってことくらい……。ゼロのお陰でわからされてます。」

フェイトはバルディッシュを握りなおす。その時。

一撃一　一撃一

魔力弾が飛んできた。

一斬一 一閃！一

続いて白と青のバリアジャケットの少女が剣を持ち、斬りかかってきた。だが、それはもう一人によって防がれる。

一閃！一 一撃一

さらに集束砲が少女の後方から飛び、戦闘機人の中の一体にあたる。そして、少女は離れる。

「やれやれ。ホントに困ったもんだな。大丈夫か？」

そして、後方から、三人組が現れる。

「神無ちゃん！？って事はみんなも！？」

アリシアは叫ぶ。

『予想外の邪魔立てが入ったね。ちょっとだけ、本気を出させるとしよう。』

スカリエッティがそう言うと、端末を操作する。

「「「SEED。」」」

そして、戦闘機人の中の三人はISを発動し、一人はフェイトに後の二人は神無に斬りかかる。

「神無！伏せろ！」

三人組の一人が言う。

「わかった！」

そう言うのと神無は伏せる。

「投影！」

そう言うのと、スナイパーライフルが握られる。

「桜姐！」

「わかった！」

そして、二人は構える。

「ツ○ンバ○ターライ○ル！！ショット！！」

「いや、所々おかしいですよ！侑斗さん！桜さん！！」

少女はそう言うがお構いなしで放つ。

一閃！一

戦闘機人はそれを予測してかわす。そして、神無に振りかぶる。

一斬！一 一閃！一

それを少女は自分の剣を振るう事でカバー。

「サンキュウ。セレナ。」

「いえいえ。」

神無とセレナは会話を交わし、戦闘機人の剣を弾く。

「・・・さて、こいつが前の奴の改良版か？」

侑斗がそう言うと、みんなは身構える。が、セレナだけは違った。

「おかしいですよ。」

「何が？」

侑斗が聞く。

「あとの一人が見当たりません。」

セレナがそう言うと、みんなは構えを強化する。

「油断しないでよ・・・みんな。」

「「「応！／＼はい！」」」

三人の戦いは始まる。

＊

一方もう片方は・・・

一斬！一閃！一撃！

「くっ！」

「。。。。」

フェイトは苦戦している。剣撃を防ぎ、鏢迫り合いになってる間にフォトンランサーとか、色々試してみた。だが、

「なんで、こんなに・・・効果がないの!？」

そう、『効果がない』のだ。決定的な一撃が出せずにいる。

「デイベイーン・・・」

なのはの声が聞こえ、桃色の魔力を集束する。

「バスター！」

そして、放たれる。桃色の閃光は、一直線に向かっていき、相手を飲み込む。

一閃！一撃ッ！

・・・が、実質、当らなかった。全くの同タイミングで、相手も緑色の集束砲を放っていた。

「えっ!？」

なのはは驚く。が、相手もその隙を見逃さなかった。さらに威力を

高め、桃色の閃光を押しつける。

一撃！一

「きゃああああああああ！！！」

「なのは！！！」

なのはは地上に向かって落ちてく。それを見て叫ぶフェイト。それを見て、戦闘機人は走り、フェイトに斬りかかる。

「くっ！」

一閃！一

フェイトは相手に攻撃を受けているせいで、助けに行けない。それを悔やんでいると。なのはを青と白の装甲をつけている戦士・・・刹那がキャッチする。もちろんお姫様だっこので。

「フェイトさん！戦って下さい！」

エリオが確認して言う。

「ごめん！エリオ！刹那！」

フェイトはそう言うのと相手を弾く。

「ここからが本番だな。」

シグナムが言う。

「行くぞ。歪みは正す……。」

刹那が言う。

「うん！」

フェイトが繋ぎ、戦いの場へと動き出す……。

＊

「……いつ以来だろうな。ここは。」

ゼロがそう言う。そう、ここは闇。真っ暗な闇。仮面をつけた時に何度も訪れた場所。

「でも、何で呼び出されたんだろう。俺の記憶は戻ってるし、俺がここに来る当ては……！まさか……！」

ゼロはある考えが浮かぶ。あたりを見渡すが、何もない闇。が、光が差し込んでいた。そして、右手を見る。

「やっぱり……紋章が……。」

そう、紋章が消えかかっているのだ。

「俺は……見届けるために居るのに……俺は……死んではいけない！フェイトとはやてを残して俺は死ねない！！エルザ！紋章よ！今、居るんだったら……有るんだったら！俺に力を貸してくれ！俺は守りたい物が……世界が……仲間が有る……！だから……」

・力を貸せ!!」

「本当に、我儘と言うか・・・傲慢と言うか・・・貴方らしいですよ。」

ゼロの後方から、声がする。ゼロが振り返ると、そこにはエルザが居た。

「エルザ・・・。」

「構えてください。私が、貴方にこの力を持ちにふさわしい、真の主かこの目で見極めさせて貰います。そして、これから戦う相手は、私を踏み越えなきゃ倒せない。」

エルザは大剣を召喚し、ゼロに向かい、構える。

「ああ。主として認めさせてやる! お前も踏み越えてやる! そして、セレナも・・・フェイトも・・・はやても、アリシアも皆!!」

ゼロはランスを召喚し、構える。

「助け出してみせる!」

そう言い、ゼロはエルザに突進をかける。

「はぁ!!」

一閃! 一

エルザは大剣を振るい、切先をずらし、直撃を避ける。だが、ゼロ

は左手を離し、片手剣を召喚し、斬る。が、エルザはそれを跳躍することで回避。

「まだ、技量が足りません!!」

エルザはそう言い、こちらに斬りかかる。

「くっ!」

一切――

ゼロは切先をずらそうとしたが、剣が当たらず、体を捻り、回避。

「わかったぜ……。俺の本気を出さなきゃ負けるって事がな……。来たれ、三芒星!!!」

そして、左手の片手剣をしまい、三芒星を描く。

「身体強化!!! 白狐!」

そう言うと、ゼロの中に魔法陣は吸い込まれ、ゼロの体に風が纏われる。そして、ゼロはランスもしまい、両剣を二本出す。

「行くぞ! トライボール装填! 風・水・雷!!!」

へ了解。トライボール装填!!!

ブレイブフォースがそう言う。すると、ゼロの両腕にガントレットが生成され、その中に風と水と雷を纏った球が装填される。そうすると、両剣の魔法刃に水と雷が纏われる。

「こっからが、俺の本気だ・・・。」

ゼロは両剣を構えなおし、回転させる。

「良いでしょう・・・行きますよ!!」

「来い!!」

そして、二人は地面を蹴り込み、跳躍する。

「はああああああ!!」

一斬! 一閃! 一撃! 一

二人は斬り、鏖競り合いになり、それを弾く。

「雷水・・・」

ゼロは両剣を回し、水と雷を纏った輪を作る。

「閃牙!!」

それを同時に放つ。

一閃!! 一

エルザはそれをアロンドイトを召喚し、防ぐ。

「爆ぜろ!!」

—爆!—

その二つは爆発し、煙を生み出す。ゼロはその瞬間を狙い、短銃を精製し、

「トライボール装填! 風・炎・雷!」

〈了解! 装填!〉

そして、ガントレットに装填される。その時、エルザが出てくる。

「バインドショット!!」

ゼロは出てきたエルザ目掛け、砲撃を放つ。

—閃!—

それはエルザにあたり、バインドを発動する。

—縛!—

それを見極め、ゼロは

「カートリッジロード!!」

〈了解! ロードカートリッジ!〉

そして、ゼロの両腕のカードリッジ搭載のガントレットが動き、空薬莖が10発出る。

「もう、加減なしだ!」

ゼロはそう言うのと、思いつきり魔力を短銃に注ぎ込む。

「食らえ!俺のとおっておき!!炎竜・・・」

そして、ゼロの後ろに炎を纏う竜が現れ、短銃に入る。炎竜の名をもつにふさわしい、そのような光景。

「白・弧雷閃!!」

一閃!一

砲撃は、風と雷と炎が龍を作り、渦を巻くようにエルザに向かっていく。

一撃ッ!!一

「あああああああ!!」

エルザはまともに食らい、地面へ落ちていく。それを確認したゼロは短銃をしまい、落下地点に降り立ち、エルザをキャッチし、降ろす。

「すみません・・・。」

「いや、いいよ。『お婆ちゃん』。」

「知っていたんですか?私が貴方のお婆ちゃんと言う事を?」

「ああ。気付いたのは仮面全てのパーツが戻る時。あの後俺を治したから。それでな。で、どうだったんだ？」

ゼロが脱線した話を戻し、エルザに聞く。

「合格です。使って下さい。私たちから受け継いだ力を。そして、大切なものを絶対に守り抜いてください。」

エルザが言う。

「それが、禁忌か。なら、大丈夫だ。俺は、フェイトとはやて・・・いや、六課の皆を死なせるような・・・大切な人を亡くすような真似はしない。絶対に。」

ゼロはエルザの方を向き、言う。

「ええ。それが禁忌。ですが、大切な人がたくさんいる貴方には、もう、関係有りませんね。約束ですよ？」

そう言うと、エルザは拳を出す。

「ああ♪」

ゼロは笑顔で言い、拳を合わせる。

「じゃあ、回復も終わっているはずですので、行って来て下さい。大切な人を守るために。味方を殺して、敵を増やす生き方をしないで下さいよ？」

「わかってる。俺はそんな真似はしない。」

これがエルザとゼロの最期の会話。ゼロは閃光に飲み込まれ、消えて行った。そして、呟く。

「・・・これが運命^{さだめ}けど、受け入れなければいけない。この世の禁忌。人は死ぬ。でも、輝き続けてね・・・。総てを守るために・・・。アルタード。」

ゼロの事を思い、ゼロの本当の名前を言い、エルザは倒れ、消えていった・・・。

＊

「く・・・。」

「ゼロさん!？」

ゼロは瞳を開ける。そこに居たのは・・・シャルだった。

「シャル。フェイト達は？」

「戦闘をしています。」

シャルが言う。

「・・・ここは？」

「病院の屋上です。」

シャルが言う。

「そうか。行こう。フェイト達が待ってる。」

ゼロはそう言うと、右手の装甲とガントレットを外し、右腕を前に突き出す。

「ありがとう。お婆ちゃん・・・エルザ・ストラトス・・・。」

そう言い、瞳を閉じる。そして、大切な仲間の事を思い、瞳を開く。

「紋章よ！俺に力を貸せ！」

ゼロが言うと、足元に魔法陣ができる。

「我は与えられし者。汝、与えるもの。契約の名のもとに、力を解放せよ！」

そして、腕を上げ、力を解放するための鍵^{スベル}を言う。

「契約・・・開放！！」

そして、解放される力。それは、如何なる物なのか・・・。そして、ゼロは間に合うのか・・・。

NEXT STAGE, ,



遠くく見つめたくままく♪時にへつらうように♪

今日の担当

・ゼロ ・なのは
・フェイト ・はやて

ゼロ

「はい、始めました。後書きコーナーNEO♪」

わ〜♪

ゼロ

「さて、今回はゲストが居ない訳なので、チャットチャトネ〜。
フェイト

「後半棒読みになってるよ？」
ゼロ

「それは御愛嬌。で、今回のおさらい。」
フェイト・なのは・はやて

「無茶はいけない!!」
ゼロ

「いや、わかってたつもりなんだけど、その、あれなんだよ……。それと、力の入手ってのもそうだな。」

なのは
「でも、無茶のしすぎに変わりはないでしょ!？」
ゼロ

「いいの。俺はレンにも認められた、チートOfチートなんだから。」
はやて

「それもそうやけど、無茶はいかんよ？」
ゼロ

「上目遣いと言うな……。俺が悪いことしたみたいじゃねえか・

•
○
└

フ
エ
イ
ト

「悪い事をしてるんだよ！」

ゼ
ロ

「わかった。今回ばかりは俺の負けだ。降参だ。」

フ
エ
イ
ト

「ホントにそう思ってる？」

ゼ
ロ

「ああ。」

フ
エ
イ
ト

「ホントのホント？」

ゼ
ロ

「ああ。」

なのは

「ホントのホントのホントだね？」

ゼ
ロ

「もちろん。」

はやて

「ホントのホントのホントのホントのホントのホントのホントのホント」

ゼロ

「いつまで続けるつもりだ！」

はやて

「ふにや！」

ゼ
ロ

「まったく。無茶は程々にするから。．．．多分．．．」

フ
エ
イ
ト

「ねえ、今多分って言ったよね!？」

ゼ
ロ

「だって俺は大好きなフェイトとか、はやてとか、なのはとかを傷

つけられたくないからさ、それで無茶するんだよ!？」

フェイト・なのは・はやて

「私達のため？」

ゼロ

「そうだよ! 誰かが怪我しただけでも、これなんだ。死んだら・・・嫌だろ？」

フェイト

「ごめんね。何か。」

ゼロ

「いや、みんなは正論だし・・・な？」

フェイト

「ゼロ・・・♪」

はやて

「あゝ。二人の世界は後でな。って聞いてへんし。」

なのは

「そんなことはないよ・・・♪」

はやて

「ってなのはちゃんもかい!! ええい! こうなりや、あたしも混ざったる!!」

ーピンポンパンポン♪ 四人の世界が終わるまで jihad をお楽しみください♪ー

フェイト

「絶対だよ？」

ゼロ

「ああ。大丈夫。あ、もうこんな時間だ。次回予告行くぞ。」

フェイト・なのは・はやて

「はーい♪」

なのは

「新たな力を手に入れ、みんなの所に駆けつけるゼロ。」
はやて

「その力は如何に。」

フェイト・ゼロ

「次回、一運命の力そして・・・」。
なのは・はやて

「明日の大空へ！」

一同

「飛翔せよ!!！」

第10話―運命の力。そして…―（前書き）

今回は若干短いです。

第10話―運命の力。そして：―

「契約・・・開放！！」

そして、その鍵と共に魔法陣が光り輝く。光がゼロを包みこむ。蒼き装甲を纏い、

赤き翼が生え・・・

それは、戦士と呼ぶに値する十分な形。

一見すれば、デステイニーフォルム。だが、その背中の翼には。もっと力強い。・・・そんな、イメージを持たせる虹色の翼が、生えている。

「アルタード・ストラトス。出る！」

そして、その戦士は飛び立ち、フェイト達の元へ向かう。

＊

一閃・閃・閃閃閃閃閃閃閃閃閃閃――一閃！！――

「くっ・・・。」

「・・・。」

フェイト達は防戦一方。攻撃が加えられない、そういった状況。その時、戦闘機人の一体が後ろに回り込み、振りかぶる。まさに絶体絶命。その時。

一斬！――一撃！――

一つの大剣が振り下ろされ、武装を両断。その後、左腕で、その戦闘機人の腹を殴り気絶させる。

「フェイト・・・迷うなよ。俺が付いてる。」

「ゼロ・・・？」

フェイトは聞き返す。

「いや、この姿の時はアルタード・ストラトスなんだが…どっちでも良い。とりあえず、お前ら全員避難しろ。大技で一氣に片付けるから。」

「・・・ホントなんだよね？」

フェイトが聞く。

「？、何がだ？」

「目が・・・赤い色になってるから。」

フェイトが言う。

「まあ、この契約開放は、瞳の色が深紅になるっていう、デメリツトがあるみたいだけど、俺は大丈夫だから、心配すんな♪」

ゼロは笑顔で言うが、フェイトは浮かない顔をしている。

「・・・わかった。一体ずつ潰して行こう。そうしたら、俺も無茶

はしないだろ？」

ゼロはそう言うが、まだ浮かない顔をしている。と、その時フェイトに戦闘機人の一体が斬りかかる。

一斬一 一閃！一 一撃！！一

それをゼロはフェイトの前に回り込み、剣を構え防ぎ、弾き飛ばす。そして、フェイトの顔を覗き込む。

「フェイト？」

「ひゃ！な、何！？」

フェイトはびっくりしたらしく、声が裏返る。

「俺、何か悪いことした？」

ゼロは聞いてみる。それにフェイトは首を横に振る。

「じゃあ、無茶して俺がどっか行くのが怖いのか？」

それには縦に振る。ゼロは少しだけ笑い、言う。

「安心しろ。俺はどこにも行かない。だから・・・」

一閃！一

ゼロは背中に携えていた銃を抜き撃ちし、空に浮遊していたガジェットの一体に当てる。

「おっぱじめようぜ……。」

ゼロはそう言うと、アロンドイトを引き抜き、手を翳す。そうすると、魔力光が集まり、二倍近くの丈になった。

「無理………しないでよね。心配するのは、こっちなんだから……／＼／＼」

フェイトは顔を赤くしながら言う。

「わかってるって♪」

ゼロは笑顔で返す。そして、構え、二人は息を吸い、叫ぶ。

「GO!!」

その声と共に、二人は飛び出して行った。

＊

「はぁ!!」

一閃！

ゼロは戦闘機人の一体に剣をたたきつけ、鏖迫り合いの状態に持ち込ませる。

一撃！

ゼロはそれを弾き、バランスを崩させ・・・

「ブラスト・・・ショット!!」

一閃! 閃! 一

背中に携えている銃を構え、二回抜き撃ちする。
赤い閃光が飛ぶ。

それを対処しきれない戦闘機人は・・・

一撃! 撃! 一

二回とも直撃。そして、ゼロはアロンドイトを引き抜き

一刺! 一

目の前の相手に刺す。同時に、左手を開け、銃を抜き撃ち。狙う先は・・・

一撃! 一

フェイトの相手をしている戦闘機人。その援護を受け、バランスを崩している間に

一斬! 斬! 一

バルディッシュで、二回斬撃を入れる。そして、ゼロの方を向き

「ありがとう!」

と言う。それを見たゼロは笑顔で返す。そして、アロンドイトの切先を地面に向け、

一轟一

落とした。地面は花卉のように割れ、戦闘機人は気絶している。

「ふう。一丁・・・違うな。二丁上がり♪」

ゼロはアロンドイトを引き抜き、額の汗を拭いて言う。その瞬間。

一撃！一

刹那が吹き飛ばされ、病院の壁に激突。それを見たゼロはすぐさま駆けつける。

「刹那？大丈夫か！？」

ゼロは刹那を見た。・・・結論は悲惨な物。デバイスの所々はスパークし、刹那の右肩からは、血が滲んでいて、膿になっているところもあった。

「大丈夫だ…このくらい…。」

刹那はそう言うと、足元がふら付きながらも、立ち上がる。が、すぐに膝をつく。

「無理するなよ。」

ゼロは言う。

「無理はしていない。俺は目の前の歪みを・・・」

刹那はGNソードを構え言う。が、

「正す!!」

一撃! —

…刹那はゼロから、パンチをもらう羽目になる。

「お前、歪みを正すってことに縋り付いて、逃げてんじゃねえよ。」

ゼロは刹那の胸ぐらを掴みながら話す。ゼロのその顔は、憤怒していた。

「だから、そこで見てろ。俺が、アイツを倒す様を。…動くなよ。」

ゼロは刹那に釘を刺すと、手を離し、座らせた。

そしてゼロは刹那を傷だらけにした戦闘機人に向かい、駆けて行った。

＊

「はぁ!」

「……。」

ゼロは向かっていく。アロンドイトを引き抜き。が

一閃！一 一撃！一

「ガハッ……！」

戦闘機人は魔力刃を一瞬だけ展開し、切先をずらした後、鳩尾に正確に蹴りを入れる。そして、ゼロが空気を吐き出す。その瞬間を見逃さず…

一撃！斬！一

砲撃を入れるのと同時に、斬撃を繰り出す。ゼロの体は宙を舞う。

「…くっ！」

ゼロはアロンドイトを地面に突き刺し、回転して、隙を作る事をしなかった。

「何なんだ？こいつ…。」

ゼロはそう言うと、アロンドイトを構える。

『フフフ。どうだい？タイプ、アブノーマル異常の二号機は？』

「……何…だと…？」

ゼロはアブノーマルの二号機が作られたのに驚く。

『そうさ！君より使いやすくなったよ！一号機君！！』

「黙れよ……。」

ゼロは魔力を一気に放出する。

「黙ってるよ……下衆。」

ゼロはその瞳を閉じ、開く。それと同時にアロンドイトを居合の形に構える。

「今から…人間をやめた人間ってのを…その生き様を……見せてやる!!」

ゼロはそう言った瞬間に翔ける。地上を『駆ける』のではなく、空を『翔ける』。

「壺式……」

そう言い、柄を握る。

「あんよけいはざん暗夜慶破斬!!」

瞬間。残像を作り出し、二つに分かれて同時に斬り込む!

一斬!一

相手が一瞬怯んでいる内に、構えを戻し……。

「式式……」

柄を掴み、発動させる。

「星輝絶昇斬!!」
せいぎぜつしょうざん

アロنداイトを地面ギリギリの所に構える。

同時に魔力を蓄え、アロنداイトは光り輝き、上空に向かい、切り裂く!

一斬!一

そして、相手を持ち上げ、滞空させ、左腕で、掴み、砲撃を放つ。

「パルマ・・・フィオキーナ!!」

そう言う名の白い砲撃を。

一撃!一

一撃撃撃撃撃撃撃撃撃撃撃撃撃撃撃撃撃撃

まずは一発そして、絶え間なく、連続で放つ。

「まだだ!カードリッジロード!!」

へ了解!ロードカードリッジ!!>

そして、アロنداイトの柄の部分が上下に動き、葉莢を排出。ゼロはそれを確認した後、魔力を存分に蓄えて…一撃を放つ。

「ディバイン……バスター!!」

ゼロの左腕に黄金色の魔力が蓄えられ、ハンドボール大の大きさに

なつたところを…解き放つ！

— 撃ツ！！！！！！！！ —

そう、自分の仲間の中で最も信頼できる技、それを放った。戦闘機人は空中を滞空して…墜ちた。

「よし……っ！！」

ゼロの左腕に痛みが走る。だが、戦闘機人自体は氣を失つてゐるようなので、大丈夫だ。

「スカリエッツィ 今度は何の特殊体の体使ったんだ？」

『そうだね……言うならば……』

そして、異常な殺気を感じ、体を捻る。

—
閃！
—

砲撃が迸る…。その先に居たのは、先ほど倒した、戦闘機人。

「不死。」

スカリエツティは戦闘機人と共に言う。

「……つまりは、心を持たせて何とかすればいいんだな……？」

ゼロはそう呟き、武器をしまふ。そして、言う。

「来いよ。俺はお前に攻撃はしねえ。やるのは……」

ゼロは次の言葉を言う。仲間が、ゼロと同じ存在の仲間が一番心を取り戻すのにやった事。

「話しあいだ。」

それを。

＊

ゼロは正面を見据える。構えなしで。

それは、かわす事もないと言う事。

逆に死に自分を追いやる行為。それをあえて選択した。

「……………」

そして、戦闘機人は斬りかかる。

一斬！！

一撃を受けるゼロ。鮮血が吹き出す。が、

一掴！

戦闘機人の腕を掴む。

「話し合いをしよう。お前は俺が助ける。」

「……………」

相手は目が潤んできている。きっと、嬉しいのだろう。

…もし、自分と同じなら、親を殺された。で、喋れなくなっているか、喋ると自爆するかの違いだ。そうゼロは思う。

ゼロは魔力を流し、確かめた。そうしたら、指示なし以外に喋ると、自爆する。さらに、耳にある所の音源しか聞き取れない防音魔法が付いてた。やっぱり、ゼロの思った通りだった。

「そっか。喋れないのか。なら、治してやる。」

（駄目……。逃げて!!）

その念話が聞こえた瞬間。

一刺!!—

空いている方の腕で、魔力刃を作り出し、心臓部分を思い切り刺す。

「ゴフッ……。…? どういう事だ? 今、念話が聞こえた…。!、もしかして!」

吐血。ゼロはそれをしながらも、思いつく。

もしかしたら、念話の方は封じられていないのではないかと。

（聞こえるか? 聞こえたら、返してくれ。）

（何で……。逃げなかった? 私は……。これ以上殺したくないのに……。!）

返って来たのは、紛れもなく、心の叫び。人間なのだ。その位、あ

る。

（嘘だ……嘘だ嘘だ嘘だ！！）

（思うよ…私だって助けてくれればなって……けど！）

一撃ツ!!!!!!!!!!!!

（体の自由が聞かない……だから！助けて欲しいなんて！！）

念話と同時に声を出していた。だが、構わず続ける。

ゼロはそう言う、左手に魔力を込め、一気に流す！

一 碎！一

硝子が碎ける音の様なものと共に、ゼロは倒れ込む。バリアジャケツトから、普通の私服に戻り、全身に血がにじんでいた。

『フ…』

スカリエッティは口端を吊り上げる。

『フハハハハハ！！仲間のためにそんなに…力を尽くすかね！君は！！ゼロ君！』

スカリエッティは笑う。その瞬間。皆がゼロの存在に気付き、

《ゼロ！／君！／先生！！》

叫び、周りに駆け寄る。その姿は悲惨な物。全身は血だらけになり、黒ずんでいた。

「スカリエッティ！！」

『君も哀れだな。フェイト・T・ハラオウン。母を失い、最愛の人も失…』

「勝手に殺すな。」

スカリエッティの言葉の途中で、声を出すゼロ。そして、立ち上がる。

「俺は……まだ……死ねねえんだよ……アルスと……剣を交えて…

…お話ししない限りは……な……。」

ゼロはそう言う。

『そうか。ゼロ君。なら、今回は引こう。次も頑張ってくれたまえ！』

スカリエッティはそう言い、通信を切ると戦闘機人全員を引き連れ、転移した。

「……ガフツ……！」

「ゼロ!？」

ゼロのは口から吐血する。それと同時に膝を着く。

「——っ。——っ。大丈夫……じゃないな……。」

ゼロはそう言う。

「IS……SEED……。」

そう呟く。その時、翡翠の瞳から、光がなくなる。

「魔力強化。カードリッジロード。」

そう言うのと、ブレイブフォースから、葉莢が排出され、ゼロの右手にいつもの黄金色の魔力光とは異なる、翡翠色の魔力光が燈る。

「よし。リカバリー！」

そう言い、自分の腹に、右手を入れ、回復させる。そうすると、傷口が少しづつ塞がるが、完全には塞がらず、もう一回、右手を引くと、誰かに抑えられる。振り向くと、はやてが居て、両腕で、がちりと抑えていた。

「いつも、無茶ばかりしないで、私たちにも頼ってな？」

そう言う。ゼロはその言葉に少しだけ笑う。

「確かに。無茶すぎだな。お願いしようか。」

そう言うのと、はやての顔に笑顔が出る。

「わかった。シャル？」

「はい♪」

シャルも嬉しそうに駆けより、治癒魔法を使い、傷を癒していく。そして、完全に傷が塞がる。

「ありがとうな♪」

ゼロは笑顔でそう言い、立とうとする。……が。

「……………は？」

立てない。もう一度やってみる。が、立てない。

「……………まさかな……………」

そう思い、足を触ってみる。

「感覚が………ない………？」

ゼロの思ったとおりだった。

「え？今なんて……？」

フェイトが聞く。

「感覚がないんだよ。足のさ。わかるだろ？今俺が立てない訳がさ。」

ゼロがフェイトに真顔で言う。そして、沈黙が流れる。

「……ホントに？」

「ホントに。」

一問一答がされ、その後。

《ええええええええ！！》

一同から、叫びが上がる。

「叫ばないでくれ。五月蠅いから。」

ゼロはそう言い、腕に力を入れ、立たせようとするが、立たず、座り込む。

「はぁ。どうしようか。この状況。」

ゼロは苦笑いで、一同を眺めながら、言う。

〈私が運びますよ。〉

「うわっ！ブレイブフォースか？びっくりさせんなよ……。」

ゼロがそう言う。

〈すみません……。〉

「しょんぼりするなよ。まあ、ブレイブフォースがそう言うなら、頼もうかな？」

ゼロはそう言う。と、その時

「「「ちょっと待った!!」」」

隊長陣三人が待ったをかける。

「ここに来た時にも、お前等はそんなストップ掛けたよな。で？何？」

「いや、ブレイブフォースには重くないかなって？」

フェイトが言う。

「ああ。それもそうだな。」

ゼロはそう言い、端末を操作して、元々両腕についていたリストバンドを解除し、異空間に送る。これで、フェイトの疑問を消化。

「はい。これで、ブレイブフォース…」

「でもさ、ブレイブフォースはメンテとか、そう言うのはしなくともいいのかな？」

ゼロの言葉の途中になのはが言う。

「地球でのデバイスマイスターは、俺だぞ？向こうに行ったついでに見てやるさ。」

ゼロはそう言い、なのはの疑問を粉碎。

「さて、ブレイブフォース。アウトフ…」

「「でもさ、アウトフレームにしたら、魔力を消費するよね？／やろ？」」

はやてを含む三人は閃き、そう言う。そして、ゼロは考え込み、言う。

「じゃあ、誰か、肩貸してくれ。」

「「はい!!」「」」

そして、例の三人は同時に言う。さらに、顔を見合わせ、火花をちらつかせる。

「はあ。すまん。ブレイブフォース。肩を…」

「「それだけは絶対にダメ！／や！」」

話しあっている内に、ゼロがそう言う事を行った瞬間、三人に止められ、ゼロはやめる。そして、小一時間こういった会話が続き、フェイトとなのはに決まって、その時ゼロが女体化してた事や、はやてがゼロの胸を揉んだりしたことは余談である。

＊

：翌日。ゼロは病院に六課のフォワードメンバー、隊長陣、それと、桜含む、高校生達が集まる。

「さて、集まったな。今集まってもらったのは、俺の話をするためだ。」

ゼロはそう言う。その時、フェイトから、言葉が飛ぶ。

「それって、ゼロのこれから？それとも…」

フェイトはそこで言葉を止める。そして、ゼロが言う。ゆっくりと、瞳を閉じ。

「俺の…過去の話。俺が生まれて、それからの話。」

そして、話が始まる……。

NEXT STAGE, , , ,



熱い♪願ひ♪繋がる時♪その優しさを♪信じられるよ♪

今回の担当

・ゼロ ・ティアナ
・スバル ・エリオ

ゼロ

「はい♪始めました♪後書きコーナーNEO♪」

わっ♪

スバル

「ゼロ？ここって、主に雑談をやるんだよね？私達が出て、意味があるのかな？」

ゼロ

「そう言うのは、ティアナ見たいに作者をヒトコプターで…」
ティアナ

「私が何時そんな事をしたあ！！」

一撃！一

ゼロ

「凄い飛びひざ蹴りだな。もう少し鍛えれば武道家に…」
ティアナ

「なる訳ないでしょ！！」

一撃ッ！一

ゼロ

「お前、今、魔力込めただろ？お返ししてやろうか…？」

スバル

「ゼロもティアも、やめてよ。」

エリオ

「そうですよ！ここで争ってもしようがないじゃないですか！」

ゼロ

「まあ、お前等が言うなら……。さて、今回のおさらい♪」

エリオ・スバル・ティアナ

「無茶しすぎ！！」

ゼロ

「お前等も言うか……。」

スバル

「だってそうでしょ！？戦闘機人に心臓部刺されて、それでもまだ、元に戻そうとやって、その何処が無茶じゃない！って言い切れるの！？」

ゼロ

「一応言っておこう。あれは0.1mmくらいずれてたから、命に別条はなかったよ。」

エリオ

「それ、ほぼ当たってるじゃないですか！」

ゼロ

「安心しろ。俺は何も意味無いところで死ぬような馬鹿じゃない。」
ティアナ

「じゃあ、意味がある所って何処なのよ？」

ゼロ

「たとえば、誰かが、死の淵に追いやられて、それで助けるために死ぬんだったら、俺はそれで良い。」

スバル

「何で、自分を大切にしないの!?!」
ゼロ

「元々、俺はそう思い、信念の中で…ってここから先を言うと、ネタバレになるな。と、言う訳で。次回予告! スバルから!」

スバル

「ええ!?! まあ、いいや。やろう。」

スバル

「遂に明かされる、ゼロの過去。」

ティアナ

「それは悲しい過去。」

エリオ

「そして、楽しい過去でもあり、忘れてはいけない、たった一つの思い出。」

ゼロ

「次回、一明かされる過去。その先に有るのは…?」

スバル

「明日の天空へ!」

一同

「飛翔せよ!」

第11話 一明かされる過去。その先に有るのは…？

「俺の…過去の話。俺が生まれて、それから話。」

そして、話を始める。

「俺の本名は、アルタード・ストラトスって事は皆知ってるよな。ストラトス家って言うのは、元々、運命の力を受け継いだ家。つまり…」

「その、Dの紋章の事？」

フェイトが聞く。

「そう言う事だ。で、俺に紋章を授けたエルザってのは、俺のお婆ちゃんにあたる人なんだ。俺の父さんや、母さんには、紋章が刻まれなかった。つまり、危機が訪れていないって事。」

「じゃあ、ゼロさんが生まれたところに危機ってのは訪れたんですか？」

エリオが疑問をぶつける。

「まあ、な。それはわからん。で、話に戻るぞ。俺は、フェード・ストラトスとライアン・ストラトスのもとで育っていた…。」

＊

「うーん！良い朝だあ！」

無邪気にそう言う少年。その背中には長銃を担いでおり、髪は金髪。膝まであるロングヘアーで、瞳の色は翡翠と言う、普通の少年。そう、これが、彼、ゼロの過去の姿。アルタード・ストラトスだ。

「「おはよう。アルタード。」」

そう言って、話しかける、一人は茶髪でショートヘア。そして、瞳の色が藍色で長銃を担ぐ男性。その男性にアルタードは返す。もう一人は金髪のショートカット。それで、青い瞳。

「おはよう。お父さん、お母さん。」

アルタードが父と言った人物。そう、彼こそ、フェード・ストラトス。母と呼ぶ人物。ライアン・ストラトス。その両名だった。

「おう♪で、今日は何をしたい？」

フェードはそう聞く。

「今日は、超遠距離射撃のコントロールショットかな？」

アルタードはそう言う。アルタードの銃の師匠はフェードであり、アルタードは父として、師匠として、とても尊敬していた。

「お前は、超遠距離ばかりやるな。」

「そう言う父さんは、遠距離しか狙えないじゃないか。」

フェードの言葉にアルタードは膨れて返す。

「悪い悪い♪俺は遠距離はできても、超遠距離はできないし。お前自身で掴んでやるしかないな。」

フェードはそう言うのと、アルタードの頭に手を乗せ、撫でる。

「頑張れよ♪」

その言葉と共に。

「はい。父さん。」

アルタードはそう言うのと、長銃を構える。と、その時。

「???、……何だ? あれ……?」

アルタードの視線の先、そこには、マントを被る一人の男が倒れていた。そして、ゼロはその場に急ぐ。

＊＊

「ねえ、大丈夫?」

ゼロは声をかける。だが、反応がない。

「もう一回声をかけようかな。それで、反応がなかったら、連れて帰ろう。」

そう思い、声をかける。

「う……。」

男から声が漏れる。そして、起き上がる。

「起きた？ 大丈夫？」

アルタードは聞く。

「ああ。で、ここは何処だ？ それで、お前は？」

「待って、待って、一つづつ答えるよ。まず、ここは、ミッドチルダ。で、僕はアルタード・ストラトス。ストラトスの家の人、で、家はすぐ近くにあるよ。で、君は？」

アルタードはすべて話し、男に聞く。

「俺は、アルス・フォード。助けてくれてありがとうな。アルタード。」

その瞳が碧く、髪が赤い男：アルスは言う。

「うん。で、怪我とかは無い？」

ゼロは聞く。

「ああ。——っ！」

アルスはそう言った瞬間に左腕を庇う。

「……何処が？」

アルタードが聞く。

「すまん。」

素直に謝るアルス。

「いや、いいよ。とりあえず、行こうよ。家に行けば、薬とか、そう言うのが有るから。」

そう言うのと、アルタードは右腕を取り、家に向かう。

＊

「……とまあ、ここまでは、俺がアルスに会うまでの成り行き。」

とゼロが言う。

「へえ。なら、その時は、アルスとゼロは友達の様になったんだよね？」

フェイトが聞く。

「ああ。でも…」

「彼は、ゼロを斬った。」

ゼロの言葉をさえぎり、言う。アリシアが言う。

「…いや、違うんだよ。」

「それってどういう事なん？ゼロ兄？」

はやてが聞く。

「……何か、感じが違ったんだ。あいつの……気って言うのかな？
なんかこう……うまく表現できないけど、アイツはアルスじゃない。」

ゼロがそう言う。

「でも、ゼロ君に刃を向けたんだよね？」

なのはが聞く。

「向けた。けど、それとは、また違う。あいつのお陰で、こいつに
収められてた記憶が蘇ったからな。」

ゼロはマイクロチップを見せながら言う。

「で、その1週間後にアリシアが来て、そして、事件は起きる……。」

＊

：アリシアが来て、一週間。アルタードは魔法を教えてもらっていたが、アリシアの体調が悪くなり、帰る事に。

「アリシア。元気だね。」

アルタードは言う。

「うん。アルタードもね♪…あ、そうだ。」

笑顔でアリシアは言い、何かを思い出した様に、背負っていたバッグから、一冊の青みがかった白い本を渡す。

「何？これ…？」

アルタードはそれを見て、アリシアに聞く。

「これはね。私が作った魔導書なんだ。名前はまだないから、アルタードがつけてよ。今度、聞かせてもらおうから。」

アリシアがそう言い、渡す。

「うん。いい名前をつけるよ。この子が喜ぶような、素敵な名前をね♪」

アルタードは涙で別れるのは嫌だと思い、笑顔で返す。

「わかった。じゃあね。」

「うん。」

そして、アリシアは転移した。

「さて、膿が見える場所使ってみようかな。これ。」

そして、アルタードは外に出る。

＊＊

「よし。とりあえず、ここで。」

アルタードはページを開く。そして、右手を掲げ、術を発動させる。

「古からの鼓動よ……我に答えよ。総てを包む、闇と成れ……。」

魔法陣が展開。そして、右手に、黒い球体が出る。

「デアボリック・スロットル!!」

アルタードはその球体を投げる。そうすると…

―爆―

黒い球体は弾ける。さらに、それは広がる。

「な! あんなことになるの!?! カット!」

アルタードは術式をカットさせる。

「あ、危ないなあ。びっくりしたよ…。」

アルタードはそう言い、座り込む。

「これって、広域型殲滅魔法なのかな? それとも制御できていないだけ?」

そう考えていると、フェードが来る。

「あ、お父さ…」

「少し黙ってろ！」

フェードは鬼の形相で、アルタードを掴み、こめかみに銃を当てる。その後、管理局がやってくる。

「父…さん？」

アルタードは何が何だかわからず、フェードを見る。

「死にたくないなら黙ってろ！」

「貴様！自分の息子を人質にとって、恥ずかしくないのか！！」

フェードがそう言った後、管理局の方が言う。

一人質—

その言葉に違和感を覚えたアルタード。

「父さん！説明してよ！！人質って何！？一体、僕が何をしたの！？」

「五月蠅い！黙ってろ！」

「答えてよ！！」

「黙ってろってんだろが！！」

―撃・撃―

そして、フェードは引き金を引いた。アルタードのこめかみに銃口を当てたまま。ある決断は

―死―

それだけ。アルタードの頭からは血が流れる。

「ちっ！」

そして、フェードはアルタードを投げ捨てる。

「貴様!!」

アルタードが海に落ちる前に聞いた言葉は、それだけ。

―：僕が：俺が、何をしたんだ：？―

遠のく意識の中で、考える。

―俺が：悪いのか：？―

血が流れ、海面が赤く染まる。

―違うよな：俺を利用しただけ。只：それだけ。―

―なら、なぜ俺は：撃たれた？利用できなくなったからか：？―

そして、瞳を閉じる。

「俺は、利用されてたのか…？この時のために…。」

「違うよな…違う。俺は、生きるために…ここに居る…。」

色々な考えの中で、アルタードはだんだんと、考えを深める。

「父さんは…奴は、俺の親ではないのか…？」

そして、景色を思い出す。その時、ライアンが管理局の方に居た。

「違うな。俺は、アイツの息子じゃない！！」

そして、右の拳を握り、左手の魔導書をさらに強く握る。

「…俺は、奴を…。」

「肅正する。――」

そう思う。アルタードは目を見開き、こめかみに手を当てる。

「希望の光よ、回復の繋ぎ手となりて、我を治したまえ。」

「俺は…あそこに居る奴等を…殺す！！――」

そう思い、術を発動させる。

「リカバー。」

発動させると、弾丸が取り出され、傷口が塞がる。

「我は全てを繋ぐ、星となる。希望は矛に。絶望は盾と成りて、我に力を貸せ。」

呪文詠唱をすると、瞳は、闇と光を表すような、陰陽太極の瞳になる。

「行くぞ。俺は、アルタードと言う鎖を断ち切る。」

そう言い、浮上する。

＊＊

「貴様！！これ以上足掻くな！！」

管理局の人物が言う。

「おっと。こいつが壊れれば、研究成果は無駄になるんだぜ？」

そして、フェードはUSBらしきものを見せる。

と、その時。一人の男が浮上する。

その男の髪は翡翠の色をしていて、

瞳は陰陽太極の瞳。

さらに、身長も大人びて見える位まで伸びていて、体付きもよくなっている。

「アルタード…？」

ライアンが言う。

「俺は、ここで、全てを終わらせる…過去きのうも未来あしたも、現在いまも……。
この手で!!」

そして、右手を突き出すと身の丈の30倍近くある両剣が出てくる。

「な!! 撃てえ!!」

管理局の隊長格が命令する。しかし。

「無駄だ。」

アルタードはそれを両剣を回すことで相殺。

「消えろ。」

アルタードは両剣を横に一閃する。

「斬!!」

それは、自分の家も、管理局の魔導師も、斬り裂き、

「轟!!!!」

空気を震わせ、轟音を立てる。

「さて、フェード・ストラトス。」

アルタードは両剣を向ける。

「や、嫌だなあ。父さんじゃないか。そんなに恐ろしい物を向けないでくれ。アルタード。」

フェードはそう言う。

「戯け。俗物。貴様の命など。その魔導師たち同様。殺すつもりだったんだ。今、楽にしてやる…。」

アルタードはそう言い、両剣を引く。

「それと、俺の事をアルタードと呼ぶな。俺は…『ストラトス』だ。」

アルタード…ストラトスはそう言う。そして両剣で…

—轟!—

フェードの首を突き刺す。空気を斬り裂き、轟音が響く。首は飛び、海へと落ちる。

「さて、次は貴様だ。ライアン・ストラトス。貴様は後を追うか、それとも、フェードの後を追うか、どちらだ?」

「まって! アルタード!!」

「そうか。覚悟は良いな? 首が飛ぶと言う事は、それなりの痛みが発生する。」

ストラトスはライアンの叫びにも応えず、両剣を引く。

「さらばだ。」

突き出そうとしたその瞬間。

―閃!―

かん高い音と共に両剣がストラトスの手から離れる。それと同時に、バインドがかかる。

「…なめた真似を。」

そして、二方向から、閃光が迸り…

―撃!―

ストラトスを包み込む。そして、ストラトスの変わった部分すべてが元に戻り、地上に落ちる。その後、タイトの様な戦闘スーツを着た、女性にストラトスは拾われる。

「しかし凄いッスね。子供だとしても。」

赤の髪をした女性は言う。

「侮るなよ。こいつは気絶したふりかもしれないからな。」

銀色の髪で、眼帯をしている少女は言う。

「でも、コイツから、生きているって感じはしねえぞ。」

髪の赤い少女は言う。

「仕方ないだろ。一回、死んだ身なんだし。それより、この子を運ぼう。」

紫の髪をした女性は言う。その時、右手が少しだけ動いた事には、誰も気づかれなかった。

＊

「…って言うのが、俺の、五歳ごろの話。」

ゼロはそう言う。

《へ、へえ…。》

皆は驚きっぱなし。

「で、その後、目は覚ましましたの？」

なのはが聞く。

「覚ましたよ。で、次はその時の話…。」

＊

「う…。」

ストラトスは目を覚ました。あたりを見渡す。それは、生体ポッドがたくさんあり、どこか不気味な部屋。そこにストラトスは居た。

「ここは、何処だ？俺は一体…？」

その時、足音が聞こえて、扉が開かれる。それと同時にストラトスは片手剣を出し身構える。そこに居たのは、赤髪で、縛っている女性。

「あ、気が付いた見たいッスね！」

そして、駆け寄る。それを見たストラトスは

「俺に近づくな！！」

そう叫ぶ。

「俺は、人は信じない。だから、近づくな。俺は、殺さなければいけない人間がもう一人いる。だから！！」

「近づくなと言うのか？死にそんな君を助けたのは私だよ。」

その声をする。その場にもう一人、男性が現れる。黄色い瞳。けど、何か、過ちを犯しているような瞳。そのような感じがする瞳に白衣。

「お前は誰だ？それと、ここは何処だ？」

ストラトスは剣を構えながら、言う。

「そんな危ない物振り回したら駄目ッスよ！」

先の女性は言う。

「少しでも、静かにしてろ!!」

ストラトスはそう言うと、瞳から、光が消え、疾風を纏った一撃を放つ。

「!!、今のは、一体…。」

ストラトスは、そう呟く。

「ISだよ。」

先の男性は言う。

「申し遅れたね。私は、ジェイル・スカリエッティ。科学者だ。」

「俺は、ア……ストラトスだ。」

自己紹介をする。

「アルタードの名は捨てたのかね？」

「っ!!」

ストラトスはその言葉を聞いた瞬間、スカリエッティの首元に刃をつける。

「その名で呼ぶな。」

ストラトスは鬼の形相で睨む。

「そうだな。なら、新しい名前で呼ぶでしょう。最凶で、最悪な数字……ゼローとね。」

「…ゼロか。良いだろう。俺の昔の名を捨てるには十分だ。名付け親のお前の名は従おう。何を望む？」

「さっそくお願いしたいところだが、君はまだ、小学生だ。だから、君は聞くところによると一夜天の魔導書一の主と従兄妹らしいじゃないか？」

「そうだ。はやて…とか言ったな。」

「それで、君にはそこに行ってもらおう。」

「引き受けた。一応、偽名として、アームストロングを使わせて貰おう。ドクター。」

「良いだろう。行ってきたまえ。」

「はい。」

ゼロはスカリエッティとの会話をした後、転移する。

「良いんですかあ？ドクター？」

「良いんだよ。クアットロ。あの虚ろな子供が何処まで成長するか、見てみたいんだよ。…じゃあ、研究に戻ろう。」

「はい♪」

＊

「「とまあ、これで、大体の説明が付いた。だから、後ははやて達に聞いてくれ。」」

ゼロとチンクは言う。なぜ。居るかと言うと、盗み聞きしてたからだ。

《へえ》。

一同は成程なあ。と言う顔をする。

「はい！辛気臭い話は終わり！スバルとティアナ残して帰れ！！」

「なんでや！？」

はやてが突っ込む。

「言う事が有るんだよ。二人にだけな。そのためにも、三人になれる空間が欲しい。良いか？」

ゼロが溜め息交じりで言う。

「わかったわ。じゃあ、皆出て。」

そして、三人になる。

「それで、話って何なんですか？ゼロさん。」

ティアナが聞く。

「お前等に謝りたい事が有るんだ。」

ゼロは言う。

「謝りたい事って？」

スバルが聞く。

「お前等の母と兄の事。」

「「っ！」」

二人は何の事だか分かり、反応した。

「俺は、ディーダ・ランスターとクイント・ナカジマを、重傷まで、陥れた。」

ゼロは涙を見せながら言う。

「嘘…だよね？」

スバルが聞く。

「嘘じゃない！本当の事なんだ！！俺は、あの時斬られて、思いだしたんだ！俺は、お前等の兄と母を傷つけたって！！」

「なら、今言っでどうするのよ！」

ティアナが言う。

「どうにでもしろ!! その方が……清々する。俺が、罰を受けなきゃいけない存在なのはわかってたから。俺は……」

ゼロは拳を握る。その腕は微かに震え、血が滲んでいた。

「顔をあげてよ。ゼロ。私達は怒ってる……」

「だったら!!」

スバルの言葉をさえぎり、ゼロが叫ぶ。

「話を聞いて! 私たちは、チームだよ。それで、過ぎちゃったことは、悔み様がない事は皆知ってるんだから、責めないで。ティアだって、許してるよね?」

「ふ、ふん! そんな事、分かってるわよ! もう、兄さんが戻ってこない事くらい。」

「ね?」

「……すまない。何度も何度も……。」

ゼロは呟く。そして、二人は出て行った。

「ありがとう……俺の仲間達……。」

ゼロはさらに呟く。それは、誰にも聞こえない声で。

＊

「どうすればいいと思う？ フェイトちゃん？」

「全方向囲まれた時の対処法かぁ。うーん。」

一方なのは達はなのは今日の戦績を見て、弱点を見つけたので、相談していると言う次第。

「こういう時に、ゼロに聞いてみればいいんじゃないかな？」

フェイトは言う。

「けど、今は一人の方がいいかもしれないし…。」

「でも、行ってみた方がいいよ？」

「うーん。じゃあ、行ってくる！」

そう言って、なのはは病室へ行った。

＊

病室。

「…やっぱり、接近戦の強化が必要だな。桜はともかく、なのはは…。」

ゼロがそう呟いている時、ドアをノックする音が鳴る。

「はい。どうぞ。」

ゼロはそう言う。

「失礼します。」

入って来たのは、なのは。そして、ゼロの隣に有った椅子に座る。

「あのね。ゼロ君。ちょっと相談したい事が有るんだけど。」

「俺的には、接近戦を少しだけ鍛えた方がいいと思う。」

ゼロはそう言う。当のなのは、呆けた顔になっていた。

「これから、どうやって弱点を克服するか悩んでたんじゃないのか？違うなら、最後まで聞くよ。」

そう言い、ゼロはなのはの方を向く。

「いや、あってるからしたんだよね。じゃあ、お兄ちゃんに…」

「まあ、待て。なのは。」

椅子から立ち上がり、行こうとするなのはの足にバインドををかける。

「俺の話を最後まで聞け。まず、なのはには、恭也とかの御薙流だっけ？それは合わん。だから、お前は桜の様な形を取る事になるんだけど、良いか？」

ゼロはなのはに聞く。

「うん。良いよ。」

なのはは答える。

「うし。解った。じゃあ、これからやる事は、お前に拳を突き出すから、瞬きをするな。まずはそこからだ。」

「…え？」

なのはが聞いた瞬間にゼロはなのはに拳をものすごい速さで突き出す。拳は眼前で止まる。

「…うし。合格だ。EOSEの主人公の像。銅のレン君人形をあげよう。つてのは冗談。じゃあ、説明すつぞ。」

ゼロがそう言う。ゼロが説明したのは、接近戦の種類。体術、棒術、槍術、剣術、楯術など、色々な説明。そして、なのはには、剣術と銃術を合わせたやり方と槍術が合う事がわかった。

「じゃあ、やっぱり、運動エネルギーを如何にかすれば、隙を作れて、攻撃が有効にできるんだよね？」

「ああ。そう言う事。」

以外にも、なのはは呑み込みが速くて、ゼロは苦勞しなくて済んだ。

「今日はここまでな。明日も教えるから。」

「今日全部教えてもらった方が…」

「お前は何を考えてるんだよ。よし。俺から教えてもらう上での注意。ってより命令だな。家でぐっすり休まないと、確実に死ぬ。」

ゼロはそう言う。

「う、うん。わかった。明日にする。」

なのははそう言う。

「解れば宜しい♪じゃあ、お休みな。刹那。入ってきていいぞ。」

なのはのバインドを解除して、刹那を呼ぶ。

「で、どうなったんだ？」

「お前の場合。まず、遠距離武器が、ライフルしかないのが痛手になる。だから、ちょこつとフォルムを追加させて貰いました♪その代わり。こいつを使うに当たって、魔力消費量が少しだけ上がるが…お前なら大丈夫か。とりあえず、修理もしたから、返すよ。」

ゼロはそう言って、刹那に返す。

「ああ。ありがとうな。」

刹那はそう言う。

「大事に使えよ。」

ゼロはそう言う。刹那はそれに頷き、出て行った。

「……アルス。お前は本当に、こっちの方ではないのか…?」

そう呟く。その時。

「誰が、そっちじゃないって?」

声が聞こえる。振り返ると、アルスがいた。

「アルス……。」

「よう♪ゼロ♪」

アルスは笑顔で答える。

「今まで何してたんだよ。」

「悪い。俺、少しでも調べ物する為に昇格試験受けたんだ。それで、六課に配属されたって訳。」

「?、つまり…?」

「つまり、俺はお前等の味方だ。そもそも、一年かかってやっと取れたんだぜ。もうちょっと祝えよ。」

「?、アルス?お前、俺の顔に仮面をつけたんじゃないのか?」

「いや。付けてないぞ。お前、俺が親友で命の恩人にそんなことすると思うのか?」

ゼロは首を横に振る。

「なあ、アルス。これに見覚えは無いのか？」

そう言い、Dの紋章を見せる。

「あ？お前もか？」

「お前もって…まさかな。」

「そのまさか。俺はJだったよ。」

そう言い、アルスは右手を見せる。そこには、Jの紋章が。

「これではっきりしたな。俺等は仲間だ。としたら、逸話は…？」

「あれは嘘だぞ。」

アルスが当然のように言う。

「そうなのか。わかった。ありがとう。」

「ああ。で、お前も寝ろ。じゃないと、回復しないだろ？」

アルスが苦笑いと言う。

「ああ。そうだな。お休み。」

「お休み。」

ゼロは瞳を閉じ、眠る。

「……これから、また、事件が始まるんだろうな。そのための俺等だ。ゼロも俺も、強くなきゃな…。」

アルスはそう呟き、彼もまた碧い瞳を瞳を閉じる。



そらを自由に♪とびた〜いか〜♪

今回の担当

・ゼロ ・フェイト ・はやて
・アルス ・なのは

アルス

「はい。始めました〜。後書きコーナーNEO♪今日のOPはタカえもんの歌で御座います♪」

わ〜♪

メイドゼロ

「ただいま……。」

フェイト

「おかえり〜♪。〜…。」

今の描写では分かりづらい方に。これは、ゼロが帰って来て、笑顔で迎えようと思ったら、だんだんと気持ちがダウンする光景。

メイドゼロ

「詳しくは、EOSEで♪」

アルス

「凄いい恰好だな♪」

メイドゼロ

「言わないでくれ…今ものすごく気にしてたのに…。」
はやて

「なんか、うん。ドンマイや。」

メイドゼロ

「グッサアアアアア！…ものすごく今のは効いた！効いたぞおおおお！！」

なのは

「うわっ！ゼロ君が可愛くなって、さらにテンションがおかしなことになるってる！！」

フェイト

「あはは。まあ、今回のおさらい。」

アルス

「人を間違える礼儀知らずは形振り構わず女体化しましょう♪だな。」

なのは

「そうだね。」

メイドゼロ

「はぁ。それって俺の事？」

アルス

「そうだ♪ゼロ♪」

メイドゼロ

「アルス。お前の事をヒトコプターに…」
フェイト

「ゼロ。落ち着いて、落ち着いて！」

メイドゼロ

「まあ、いいや。で、お知らせ。作者が映画公開記念で、オリキヤラ募集をしている。協力してやってくれ。そうすると、もれなく、銀のアルス人形を…」

アルス

「お前はどんなものを用意してんだよ。」

メイドゼロ

「…てのは冗談で、お友達になれるかも♪」

アルス

「そして、クロスリレーとかもユニークが1万人入ったらやるつもりらしい。」

メイドゼロ

「さらに、今なら、金の魔王、夜叉、魔術師の像…も…」
フェイト・なのは・はやて

「少し…頭、冷やそうか？」

メイドゼロ

「御免なさいませええええ！！ご主人様あああ！！」

アルス

「やけに、可愛いな。お前。」

メイドゼロ

「好きでやってる訳じゃない！！で、言いなおす。金のなのは、フェイト、はやての水着姿の像が当たるぞ♪」
なのは

「な、なななな何を言ってるの！？ゼロ君！！／／／」

フェイト

「そうだよ！！！！／／／」

アルス

「その割には、二人とも顔が赤いな♪」

フェイト

「もう！アルスまで！！」

メイドゼロ

「ああ。すまん。間違えた。水着じゃなくて、あんなことやこんなことをしている…。」

なのは・フェイト

「あう。／＼／＼／＼／＼／」

アルス

「あ。二人ともぶっ倒れた。」

メイドゼロ

「はやての写真だ。」

はやて

「な、何やて！？それ見して！！」

ゼロははやてに見せる。

はやて

「あ、あかんよ！ゼロ君！これは絶対にあかん！！」

メイドゼロ

「今のはどっからがコントだったのでしょーか！」

はやて・アルス

「フリだったんかい！！」

メイドゼロ

「その通り！次回予告行くぞ！！」

はやて

「待って、ゼロ！まったく。なのはちゃん、フェイトちゃん行くよ。」

」

メイドゼロ

「なのはは接近戦を覚えるために、ゼロに教えてもらおうと、病室へ行く。」

アルス

「そこで会ったのは、吸い込まれる様な碧の瞳をもった、アルス。」
はやて

「なのははゼロに、どう思い、何を守るために戦うか聞かれる。」
フェイト

「そして、なのはが出した答えは…。」

メイドゼロ・なのは

「次回、一何を守るため？」

アルス

「明日の大空へ！」

一同

「飛翔せよ！」

メイドゼロ

「…一体、俺は何時までこのままなんだ？」

次回までだ。んじゃ、終わり。

メイドゼロ

「あ！ちょ…」

終幕。

第12話 何を守るため？

病室。そこに訪れる、一つの影。栗色の髪でサイドテール。そう、なのはだ。ちなみに今は朝の7..00。

「ゼロ君？ 入るよう。」

そう言い、入る。

そこに居たのは、ゼロと紅い髪の男。しかも、かなり髪が長い。言うなら、リインフォースの？（ツヴァイ）の紅髪ヴァージョン。その男と寝ていたゼロ。その時、不意に瞳が開き、目が合う。その瞳は碧く、碧く、碧く。何処までも、真実を通す瞳だった。

「ふう。ゼロ。起きろ。」

そして、その男は、ゼロを起こす。

「んあ？ 何だよ、アルス。」

ゼロは起き上がり、言う。

「なのはさんだ。」

アルスは言う。

「あ、そっか。なのはは今日から、来るんだっけ。んじゃ始めますか。」

ゼロはそう言うと、屈伸する。

「俺、出た方がいいか？」

アルスが聞く。

「いや、良いよ。椅子はもう一個あるし。なのは？」

「あ、うん。」

そして、なのはは椅子に座る。

「んで、前はお前に合う接近戦の方法だったな。」

「うん。」

「うし。じゃあ、次は、使い方について。刀剣の類は『斬る』と『突く』、『払う』の類になる訳だ。まあ、『斬る』と『突く』てのは、槍にも言える事なんだが……。そうだ。まず、お前には、これを履いて貰おう。」

ゼロがそう言って、渡したのは袴。

「ねえ、一つ質問していいかな？」

なのははゼロに聞く。

「いいぞ。」

「何で、袴？」

「お前はなんでだと思う？」

ゼロは逆に聞き返す。

「えっと、気分？」

「…：。やっぱり、渡しといてよかったよ。きのうは休みを取ったか？」

「うん。」

「んじゃあ、今からやる事は、お前に体の使い方を上手くなって欲しいって事なんだ。それで袴を…：と言う形になる訳だ。今から説明するから、聞いておけよ。」

「…：まず、袴って言うのは、元々合気道で使うものだ。ここまではいいか？」

「うん。」

なのはは答える。

「合気道って言うのは、膝の動きがメインになる。で、袴はその動きをばれない様にするために着けるものだ。で、それ以外にも、色々効果がある。…：で、ここまでも良いな？」

「うん。大丈夫。」

なのはは言う。

「で、効果と言うのは、主に5つ。」

まずは骨盤の矯正。これは、袴の縛りによって、背筋が伸びる。それで、落ち着きが出てくる訳だな。

次。意識の変化。これは、体の一部分に意識が変化して、攻撃のときのエネルギーに変化が出てきて、威力が上がるって処だな。

……ここまでいいか？」

「あのさ、その、エネルギーの変化って、魔力にも応用できるかな？」

なのはは聞く。

「出来る。ちゃんと聞いてたみたいだから、次に行こう。

次は複雑な呼吸法ができるようになる。で、なんで、腹式呼吸が必要になるかと言うと、力を有効に出せるからだ。で、袴って言うのは、その独特な縛り方で、非常に腹式呼吸がしやすくなる訳だ。で、意識しながら、訓練することができる。

次は、見た目だけではなく、下半身も安定した形になる事。まあ、袴は下の方に広がっている形になる。で、本当に下半身が安定する。だから、着ける。バランス感覚もとても良くなるし、それにお前は良く無茶をして、体を壊すことが多い。それで、下半身を安定させ、さらに言えば、接近戦で足場を作り、下半身を安定させた状態で、戦う事のできる状態まで成長して貰う。これで、4つだが、ついてこれてるか？」

「うん。大丈夫。最後だよ。話して？」

なのはは言う。

「了解した。

最後は、立ち振る舞いが良くなるんだ。って言うのは少し混乱させ

るな。ええっと…。そうだ。大股にならないんだ。大股って言うのは、隙がでしやすい。」

「けど、大股って必要になる時もあるよね？」

なのはが逆に聞く。

「確かにな。けど、大股って言うのは、脱出とかの時の移動手段。だから、戦闘中って言うのは、あまり望ましくない。だから、袴をつけて、小股にするんだよ。…解ったか？俺が袴を選んだ訳。」

ゼロが改めてなのはに聞く。

「うん。接近戦闘の基礎となる体の動きを覚えさせるため。だよね？」

なのはは言う。

「そうそう♪じゃあ、俺も行くから、袴を着てみようか。」

ゼロはそう言い、近くに有った車椅子に乗る。

「え？でも、ゼロ君は…。／／／」

なのはは顔が赤くなる。

「俺は今、女だぞ？遠慮するな。」

ゼロは言う。

「けどね！」

「けどもクソもあるか。お前は袴、着れないだろ？」

なのはの言葉をさえぎり、ゼロは言う。

「うゝ。それもそうだけど…。」

「なら、我慢しろ。」

「あううう…。」

なのはは顔を赤くして言う。そして、更衣室に行く。少し戸惑っていたものの、ちゃんと着替えを済ませる。そして、病室に戻る。

「ふう。とりあえず、良い顔になったな。なのは。」

ゼロはそう言って、優しい顔になる。なのはは赤くなる。

「ちなみに、アルスがまっすぐな瞳^めをしているのも、袴が有ったからだ。」

ゼロがそう言うと、なのははびっくりだ。と言う様な表情を見せる。

「さて、これを渡しておくよ。」

そう言って、ゼロが渡したのは、風呂敷で包まれた長い棒。

「一応言おう。それは、訓練用に使う奴だ。で、アルス、頼んでいいか？」

「ああ。大丈夫。」

「じゃあ、これ。検査が終わったら、俺もなのは所の道場に行くから。」

「わかった。じゃあ、行きましょう。なのはさん。」

そして、アルスとなのはは去る。

＊

そして、道場。

「じゃあ、始めましょう。なのはさん。」

アルスが言う。

「あのさ。別に、同い年みたいだから、敬語は使わなくていいよ。」

なのはが言う。

「そっか。なら、遠慮なく。」

アルスは口調を直す。

「じゃあ、風呂敷の中身は・・・っと。なんだ。ゼロの奴。徹夜してこんな物を…。」

「何が入ってたの？」

アルスの方を覗く。

「木製の槍。これで、教えろって、書いてあったよ。やれやれ。しようがないな。始めようか。」

アルスはなのはに木槍を渡し、髪を縛る。そして、f a t eのセイバーの様な形にする。髪の量が尋常じゃないのに、見事にまとめ上げる。顔が少しだけ、女型なので、似合っているのは確か。アルスは、服を脱ぎ、インナーになる。

「まず、構えを教えるね。肩の力を抜いて、肩幅の二倍くらいに足を前に出す。で、肩幅より少しだけ広めに握るんだけど…一回やってみて？」

「う、うん。こうかな…？」

なのははアルスに言われた様に構える。

「うん。だけど、もうちょっと、膝を落とした方が、かっこいいよ。」

アルスがそう言い、なのはの肩を掴みながら、言う。

「うん。」

そして、膝を落とす。

「そう。そんな感じ。それで動くときは、なるべく摺足でね。あ、そうだ。」

アルスが何か思い出したように言う。

「精神統一を先にやった方が良かったかな？」

「アルス君がそう言うなら、やった方がいいんじゃないのかな？」

なのはもそれに肯定。

「じゃあ、やろう。まず、正座して…。」

「うん。」

二人は正座する。

「目を閉じ、心を無心にして、落ち着かせる。」

「うん。わかったよ。やってみよう？」

なのはが言うと、アルスは頷き、二人は瞳を閉じる。

そこには、光が差し、柔らかな風が吹く。

それを感じながらも、二人は心を無にする。

と、その時。道場の扉が開く。だが、二人は気にせず続け、瞳を開く。

「終わった？」

アルスが聞き、

「大丈夫。」

なのはが答える。

「うん、じゃあ、始めようか？」

アルスがそう言い、一振り放つ。

―轟―

その一閃は、空気を切り裂く一撃。

その余波と共に、道場が少しだけ軋む。

「よし。今日も快調っと。」

アルスはそう言うと、人影に気づく。

「風華……」

アルスは木槍を素早く構え…

「一閃！」

―閃―

放つ。それは、空気を斬り裂き、人影にあたり、壁に激突する。

「ぐはっ！」

そして、その人影は現れ、アルスは、構えを固くする。

「お兄ちゃん!？」

なのはがその人影を見た時、声を上げる。

「お兄さん…でしたか。」

アルスは構えを解き、槍を立て、正座する。

「すみませんでした。」

そう言い、謝る。

「いや、いいですよ。」

そう言い、なのはの兄、恭也は言う。

「けれども、とんだ御無礼を……」

「いや、こっさり見ていた、俺も悪いんだし、気にしないですよ。でも、お強いようですね。手合わせしてくれませんか？」

恭也はそう言い、右と左で長さの違う木刀を構える。

「ええ。いいですよ。それと、もう二人…気からして、ゼロと、なのはのお姉さんですか？」

アルスは言う。そうすると、二人が出てくる。

「相変わらずだな。お前は。」

ゼロは言う。もちろん女体化していますが。

「確かに。言えるかもね。アルス君♪」

なのはの姉の美由希は言う。

「はぁ。ゼロはもう良いのか？」

アルスが呆れて言う。

「俺の復活力を侮るなよ。で、構えとかは教えたのか？」

ゼロが苦笑いで言う。

「ああ。その点なら、大丈夫。で、お手合わせでしたよね？恭也さん。」

アルスが木槍を構え、言う。

「何で俺の名前を？」

「なのはが教えてくれましたよ。」

アルスが呼気を整えながら言う。

「なるほどな。じゃあ、宜しくお願いするよ。」

二人は対峙する。刀と槍。二つは似ているようで、違う。

一見すると、小回りが効く刀の方が、有利。が、アルスにはそんな常識は重視しない。

「はあ！」

先に飛び出したのは恭也。右を振るう。が、アルスは眼を閉じる。そして、待つ。

当たる瞬間に出来る、隙が来るまで…。

「来た…。」

アルスはそう呟き、目を見開くと、木刀を最低限の動きで弾き、素早く突きを放つ。

―戟― ―閃―

それは、残像を作りながら、恭也の腹に吸い込まれ、恭也は少し呻く。アルスはそれを見逃さず、両の木刀を…

―戟!―

弾く。それは宙を舞い、地に落ちた。

「「あ……。」」

それを見た美由希は、なのはは、声を上げる…。

「勝負ありですね、恭也さん♪」

アルスは笑顔でそう言う。

「やっぱり、強いね。アルス君は…。」

なのはが言う。

「確かに…。それには納得…。」

美由希も言う。

「ちなみに、アイツは双剣を使うから、武装を変えたら、俺でも勝てんぞ。」

ゼロはその言葉に口を挟む。そうすると、二人とも、呆けた。

「しかし、これほどとはね。アルス君は何者だい？」

恭也が復活して聞く。

「僕は、接近戦専門の家の人です。ゼロに剣を教えたのも僕です。」

アルスはそう言うと、恭也も呆けた。

「アルス。折角だから、やってみるか？」

ゼロがアルスに言う。

「なら、やってみるか。本気で。」

アルスも言う。

「いいね。加減…してくれよ。ここ壊さない程度に。」

「お前もな。やろう。」

「ああ。」

二人は会話し、ゼロは木製の両剣を二振り、アルスは、恭也から借りた、二振りの両剣を持つ。

「さあ、行くぜ。」

ゼロは両剣を回し、握りなおし、言う。

「おう。」

アルスも双剣を握りなおし、返す。

＊

少しの間。そして、二人は同時に駆け出す。

「「はあ!!」」

「戟!」

太刀と太刀は木製だからこそ出る独特の音を出し、拮抗する。ゼロはもう片方の両剣を振る。

「戟!」

が、これも防がれる。そして、二人は両の剣を弾き、間を作る。

「お前、なかなか、出来る様になったんじゃないか？」

アルスが言い、

「そっちこそ。最後に戦った、あの時より強くなってる。」

ゼロも言う。

「お前、最後って五歳のときじゃねえか！」

そう言って、斬る。

―戟!―

ゼロは両剣を回転させ、防ぐ。

「そうだったな！」

そして、ゼロは一閃入れる。

―戟!― ―斬―

アルスは右で、一閃を防ぎ、左でゼロに一閃。さらにアルスは右手を軸に回転し、

―斬!― ―撃!―

両の太刀で一閃。さらに、蹴りを入れた。ゼロは壁に激突して、むせる。

「ゴホッ！はあ。容赦ねえ。」

ゼロが言う。

「本気でやれって言っただろう？」

アルスが少しなめた口調で言う。

「まあ、確かにな。なのはにはいい機会になったかもな。どういう風に戦えばいいのか、考える時間になったと思うぞ？」

ゼロはそれに返し、なのはを見る。

「うん。けど、ホントに負けちゃったね。」

なのはは苦笑いでこっちを見て言う。

「まあな。俺、接近戦は少しカバーできるくらいでOKかな？とか思ってやってたんだけど、案外、筋が良かったってのが本当なんだよ。な、アルス？」

「ああ。お前は人の技術をドンドン自分の物にするから、俺も最初は焦ったぞ。」

ゼロはアルスに聞く。そうすると、アルスは苦笑いで返す。

「ふう。さて、今日は終わり。けど、なのは。」

ゼロがなのはに聞く。

「何？」

「お前は何で戦う？」

ゼロがさらにそう言うと、俯く。

「守りたいから…」

なのはがそう言う。その後、ゼロに向かって言う。

「皆を守りたいから！皆で仲良く過ごしたいから！」

言い終わった後、ゼロはなのはの瞳を見る。その瞳に描かれていた色は

—決意—

だった。それを見たゼロは優しく笑い、

「解った。なら、明日も頑張れよ。」

そう言い、出て行った。

「え？」

なのはは戸惑いを隠せない。が、アルスが傍に寄り、

「つまりさ。認められたんだよ。なのはは♪」

笑顔で言う。

「じゃあ、認められてなかったの？私。」

なのはがアルスに聞く。

「いや、アイツは自分の様になる事を恐れたんだと思う。なのはが…一番大切な物を消してしまう事をね。」

アルスはなのはにそう言い、立ち上がる。

「まあ、アイツが出て行ったのは、別な訳が有ると思うよ。」

そう言うのと、なのはに手を差し出した。

「それって、敵？」

なのはは手を取りながら聞く。

「かもね。恭也さんも美由希さんも使わせて頂き有り難う御座いますね。」

アルスはそう言うのと、なのはと共に出て行った。

「変わった子達だね。」

美由希が恭也に言う。

「確かに。剣は俺より…」

「そうじゃなくて。」

恭也の言葉をさえぎり、美由希が言う。

「ゼロ君とアルス君だっけ？あの二人は、何かを失くして、それで、強くなったような瞳をもっていた気がするから。」

美由希は恭也にそう話す。

＊

視線は変わって、ゼロ。

「∴出て来いよ。相手になってやる。」

そう言うと、金色の魔力刃が飛んでくる。

「ファイアー！！」

さらに、桃色の閃光が来る。

「エンドレスワルツ。」

〈了解。〉

――撃！――

そして、魔力刃と、閃光が当り、爆煙がゼロを包む。

「やはり、並では倒せん物が有るな。」

はやてに似た容姿の、また、違う女性が現れる。違うのは、バリアジャケットが黒色で、瞳が緑色なことぐらい。

「はっ！ 只つぶせばいいだけだろ！」

今度はゼロに似た容姿の男。だが、髪と瞳は黒色。

「その辺にしておけ。さっさと出て来い。オリジナル。」

アルスに似た男。だが、髪は青色。

「御名答。」

ゼロはそう言い、羽根を広げる。

「って、一体何なんだよ！ 俺みたいなのがいると思ったら、全然違うじゃねえか！！ 何なんだその性格！！ 一回死んで生き返れや！！」

ゼロは今思った事を素直に吐き出し、叫ぶ。

「あゝ？ 何だよオメエ。」

ゼロに似た男は答える。

「こりゃ、まとめるなら、“歪んだ運命”^{さだめ}だな。」

ゼロは呆れて言う。

「まあ、そうなるな。」

アルスに似た男は答える。

「ねえ、こんなの僕一人で大丈夫だと思うよ?」

フェイトに似た女性。違うのは髪が水色で、瞳が赤な事。それが降り立ち、歪んだ運命の隣に立つ。

「それは、实力を見てから確かめろよ。」

その声はフェイトに似た、女性の間後ろから、両剣を構えた状態で言う。

「響け!」

両剣に炎が纏われ、

「炎竜!」

放たれる。その奔流は辺りの物を一気にとかしながら、地面に向かい、消える。

「ふう。けど、まだまだだな。後は辺りに結界を張り忘れたのが欠点かな?」

ゼロはそう呑気に言うと、上昇する。

「行くぞ! 蒼穹の弓!」

〈Azure Bogen!〉

そして、両剣が変形し、蒼い弓になる。

「貫け！疾風怒濤！！」

〈Loaded cartridge! Sturm und Drang!〉

そして、ガントレッドから、空薬莖が二発排出され、ゼロの右手に風を纏う矢を握らせ、ゼロは宙で回転し、矢の先を地面に向ける。

「番鳥！」

〈Bird Nr!!〉

そして、放つ。その矢は幾つにも別れて行き、地面全体に刺さる。

〈「爆ぜろ！！」〉

ブレイブフォースとゼロはそう言うのと、辺り一面に有った矢がすべて爆発し、辺りが炎に包まれる。

「：こりゃあ、少しだけ長丁場になりそうだな：。」

〈ユニゾンしますか？〉

「そうするか。」

ゼロとブレイブフォースは会話を交わし、

「〈ユニゾン・イン!〉」

そう言う。そうすると、ゼロの髪が銀色になり、瞳が赤と翡翠の陰陽太極になる。

「さあ、行こう。」

そう言い、ゼロは飛び立った。

＊

「…ところで、何でドイツ語なんだ？」

ゼロはそれが気になり、聞いてみた。

「夜天の書自体がドイツ語の様だったので、ドイツ語だったのです
が、駄目でしたか？」

ブレイブフォースはそう言い、聞く。

「いいよ。気分的にもものすごくいい。」

ゼロはそう言うと、弓を構える。

「広がれ！無限の闇！！」

「Load cart ridge！！」

そして、右の手甲が動き、空薬莖が排出される。

「Infinite……」

「Darkness！！」

そう言い、漆黒の矢を精製。そして、放つ。その矢は天を貫き、辺
りを黒く染める。

「結界はこれで良いな。さて、行くぞ。ブレイブフォース。」

へはい。〈

そして、ゼロは弓を構えた……。

NEXT STAGE',',



メイドゼロ（AKB48の声真似で）

「会いたかった〜♪逢いたかった〜♪YES!♪」

今回の担当

・ゼロ ・スターゲイザー
・桜

メイドゼロ

「はい♪始まりました〜♪後書きコーナーNEO♪」

桜

「で、今日はゲストが来るんだよね？」

スターゲイザー

「そうですよ♪」

メイドゼロ

「じゃあ、俺は着替えに…」

スターゲイザー・桜

「駄目♪」

メイドゼロ

「ただでさえ、このOPに恥ずかしいことしてるんだから、それ位いいだろ!！」

桜

「伊織ちゃんに見せないと♪」

メイドゼロ

「駄目だ!! 俺はただでさえ、AKBで声真似やったんだからいいだろ!!」

スターゲイザー

「しょうがないですね…。今回だけですよ?」

メイドゼロ

「すまん!!」

そして、ゼロはマントを被り、剥ぐ。

ゼロ

「よし。じゃあ、呼ぶぞ。魔法戦記リリカルなのはRefrainから、御薙冬矢さんと高町伊織ちゃんです♪」

冬矢・伊織

「こんにちは♪」

EW一同

「いらっしやい♪」

伊織

「久しぶり、ネコミミお兄ちゃん、スターゲイザーお姉ちゃん、桜お姉ちゃん♪」

スターゲイザー・桜

「こんにちは♪」

冬矢

「ゼロ。ファイトだ。」

その時、ゼロはぶっ倒れていた。精神面には滅法弱いようで、地にひれ伏している。

冬矢

「ゼロ? 戻ってこい。」

ゼロ

「俺は燃え尽きたよ…。真っ白にな…。」

桜

「明〇のジョー!？」

ゼロ

「てな冗談は置いといて!! 今回のおさらい!!」

スターゲイザー

「復活速いですね…。」

伊織

「お兄ちゃん、また、バリエーションが増えたんだよね？」

ゼロ

「そうそう♪向こう行ったときのあの服では無く…って誰だ!! こんな情報を流したのは!!」

作者

「俺だー!!」

ゼロ（ドラえもんの歌をうたっているあの人の声真似）

「そ〜らを〜自由に♪と〜びた〜いか〜♪」

作者

「逃げろー!!」

ゼロ

「逃がさん! アルハザードまで飛んでゆけ!! ヒトコプタアアアアアアアアアアア!」

作者

「うわああああああああああああああああああ!!」

—キラーン☆—

ゼロ

「さて、話に戻ろう。おさらい。」

伊織

「ねえ、お兄ちゃん。見せて欲しいんだけど、駄目かな？」

スターゲイザー・桜

「見せてやりなよ♪ゼロ♪」

ゼロ

「蒼穹の弓。」

冬矢

「やめろ！！ここに尋常じゃない被害が出るから！！」

ゼロ

「てのは冗談だ。なのはが怖いから、見せてやる。ちょっと待ってな。」

―十分後♪―

メイドゼロ

「お待たせ。」

そこに現れたのはあゝ。

絶対領域であゝ。

髪は短い茶髪あゝ。

んでもって、青い瞳あゝ。

さらに言えば、丘が二つできていてあゝ。

世の中の女性がうらやまあゝ。ボン・キュッ・ボン！なあゝ。

とてもかわいらしい、女の子あゝ♪B V若松風アルス☆

伊織

「わあゝ♪メイドさんだあゝ♪」

伊織はそれを見て目を輝かせる。

冬矢

「お前も災難だな…。まあ、ドンマイだ。あ、フェイトとなのはから、お土産。クッキーだ。」

メイドゼロ

「悪いな。じゃあ、俺から、特性のダージリンを。」

冬矢

「特性って事は…作ってるのか？」

メイドゼロ

「まあ、そんなところ。マイスターで言えば、俺を越えられる奴はいないからな。…EXのブラウニー以外は。で、今持ってるのは130000ってところ？」

冬矢

「多いな…。で、それで料理の事は入ってるんだよな？」

メイドゼロ

「そうだが、でもお菓子の作り方なら教えるが、日・中・洋食はだめだ。そっちのフェイトの気持ちを考えて…な？」

冬矢

「だけど、俺だって…。」

メイドゼロ

「いや、フェイトの気持ちを尊重してあげないと。はっきりと言おう。ここまでのマイスターの能力をつけられたのはアリサの…：アリサお嬢様のお陰だ。」

冬矢

「へえ…：って、今なんて言った!？」

メイドゼロ

「アリサお嬢様のお陰だって言ったんだが？」

冬矢

「お前、アリサの家で働いてたのか？」

メイドゼロ

「まあ、そんなところだ。ヘッドロック、関節技は日常茶飯事だったよ。」

冬矢

「よく…生きてられたな。」

メイドゼロ

「俺にとっちゃあ、関節技は効いているようで効いていないからな。」

「

伊織

「ねえ、お兄ちゃん。」

メイドゼロ

「どうした？伊織。」

伊織

「お兄ちゃんみたいな服私、着た〜い♪」

メイドゼロ

「え？えっと…それは…。」

伊織

「駄目？」

スターゲイザー

「あゝあ。伊織ちゃんを泣かせましたね♪」

桜

「駄目だよ♪ゼロ♪そんなことしちゃあ♪」

メイドゼロ

「お前等。この状況、絶対に楽しんでるだろ？」

桜・スターゲイザー

「そんなことはないよ♪／ありませんよ♪」

メイドゼロ

「わかった。でもな。今これ一枚しかないから、今度そっちに持つて行くって言うのは駄目かな？」

伊織

「うん。わかった。」

メイドゼロ

「うし。物分かりがよくていい子だ♪」

そう言って、ゼロは伊織の頭を撫でる。そうすると、伊織は嬉しそうにする。

スターゲイザー

「ゼロさん、知らないうちにフラグが…。」

メイドゼロ

「……やっちゃまった……」

桜

「大丈夫だよ。……多分。向こうのなのはさん達にばれなければ。」

メイドゼロ

「はぁ。よかった。」

冬矢

「色々と災難だな。」

メイドゼロ

「まあな。あぁ。時間？」

スターゲイザー

「もうですか。」

桜

「じゃあ、また会おうね、伊織ちゃん♪」

伊織

「うん♪桜お姉ちゃんとスターゲイザーお姉ちゃんとネコミミ…メイドお兄ちゃん、またね♪」

スターゲイザー・桜

「じゃあね♪」

冬矢

「ゼロ。伊織に悪気はあるとは思わんから、頑張ってくれ。」

メイドゼロ

「そうする。じゃあな。二人とも♪んじゃあ、Refrainに、転送!!」

―瞬―

メイドゼロ

「さて、次回予告だ。」

スターゲイザー

「あ、ちょっと待ってくだ…」

メイドゼロ

「却下だ。行くぞ。」

メイドゼロ

「ゼロの前に現れた、集団。」

桜

「一人はゼロ、もう一人はフェイト、さらにアルスまで……」
スターゲイザー

「ゼロはこの時、自分達の影ではないか？　そう思う。」
メイドゼロ

「次回、自分の影……？」

桜・スターゲイザー

「明日の大空へ！」

一同

「Drive Ignition!!」

第13話―自分の影…?―

「ショット!!」

「ブラストファイアー!!」

―閃!― ―撃!!―

閃光が闇の中で飛び交う。爆煙が辺りを包み、その中から、女性と男性が出てくる。

「埒があかん!! 全く!!」

「マスター。自棄にならないで下さいね?」

「…わかった。ありがとな。ブレイブフォース。」

そう、話していたのは、ゼロとブレイブフォース。

「ふう。しかし、弓つてのも久しぶりだから、加減忘れて本気出せなかったし、そろそろ、加減なしで、超連射で行ってみるか。さて、ブレイブフォース。」

「あれを使うのですか?」

「そうだ。まあ、問題を見るには丁度好きそうだし、良いだろ?」

「マスターがそう仰るなら。」

「よし。なら、モードファースト、改式、起動。スロットル、AM

F。」

〈了解。〉

そう言うのと、手甲が変化する。マガジンが4つずつ付いていて、手甲の色は銀色。さらに、機械的な構造になっている。

「ロード！」

〈了解！〉

そして、手甲の一部分が飛び出て、葉莢を2発吐き出す。

「行くぞ！突き破れ……疾風怒濤の烈風閃！！」

Blend e Wind in Sturm und Dran
g.！〉

「番氷雨！！！」

〈SHOT！！〉

そして、ゼロは矢を弾き搾り、辺り一面に超連射で飛ばす。

それは、全て風属性を纏う、矢。

さらに、AMF付きだと言う、オマケ付き。

「コントロール！！！」

〈了解！！〉

その矢を全てコントロールする。

「まずはそこに隠れている、雷刃だな。」

ゼロはそう呟き、矢の先を向ける。

「くっ！」

雷刃はそれに気付き、障壁を張る。

「無駄だ。」

〈GO!!〉

矢は一斉に雷刃へと詰め寄る。

それは、障壁を突き破り、内側に入る。

一本入った瞬間、障壁は崩れ、無に帰る。

「何でえ〜！」

雷刃がそう間拔けに叫ぶと同時に

―爆!―

爆煙が辺りを包む。その中から、閃光が見えたと思えば、集束砲が飛ぶ。

「くそ！静寂よ！身を包み、閃光を弾け！」

〈Xuanwu Vormund!〉

そして、身を岩のような固い装甲が包み、AMFが張られる。
その閃光はAMFを突き破り、玄武の空にひびを入れ、

―爆!―

爆発。それは、ゼロの攻撃より、遥かに威力の高い一撃。

「スロットル・ベルカ!」

〈了解! スロットル、回転!〉

ブレイブフォースはそう言うと、手甲が回転し、手甲の一部分にベ
ルカの魔法陣が刻まれる。

「さあ、どうするかな?」

〈何も考えなかったんですか!?〉

ブレイブフォースが叫ぶ。

「当たり前だろ。現時点で敵は6人入ることが分かったし、どう対
処すればいいのか、案が有るか?」

〈……………ないです。〉

しばらく考え、答えを出す。

「だろ? だから…」

ゼロはそう言い、弓を上空に向かって構える。

「突きぬけろ！閃光！！」

〈Load cartridge！ Flash spear！！〉

そして、白く輝く矢が右手に握られる。

「させねえ！！」

その時、運命が出てきて、ゼロに集束砲を放つ。

「っ！」

―閃！―

それはゼロの頬を掠め、通り過ぎる。

ゼロは魔力の集束を済ませ、上空に矢を向ける。

「させネエつつつてんだろおおお！！？」

運命はさらに大剣を構え、ゼロに振りかぶる。

「まっず！！」

ゼロは体を捻る。大剣はゼロの髪を斬り裂く。ゼロはその間にも、上空に向け…

―射！！！！―

放った。それは、上空に立ち上った後に、弾け、閃光を辺りに散らせる。

その閃光が止んだ時、辺り、100m辺りに、六課メンバーがデバイスを構え、待ちかまえていた。

「ちい！おい！どうするよ！？」

運命はアルスらしき男に向かって言う。

「：焦るな。いったん引くぞ。」

「冷静沈着なのは変わらん。黒の正義。」

ゼロは両剣を正義の首元に付けながら言う。

「ほう。けどな、甘いぞ。八神。」

正義はゼロの鳩尾に蹴りを入れる。

— 撃！ —

「がはっ！」

ゼロは肺の中の空気を一気に吐き出し、滞空する。

「今死ぬ貴公には良い事を教えよう。俺等は、貴様等のリンカーを俺等の物にし、入れ替わることが目的だ。」

正義はそう言い、右手に闇の魔力を纏わせ、ゼロに振りかざす。

「死んでたまるかよ！」

ゼロはそう言い放ち、弓を零距离発砲。が、

「貴様には、力が足りん事を思い知れ。」

その声が聞こえる。後ろから。

「今度こそ、終わりだ。」

正義はその闇の魔力を刃状にし、ゼロに振り下ろす。

「させネエよ。」

――閃――！――

刃はアルスによって抑えられる。

「ここで暴れる位なら……もっと……広い所に行こうぜ！！」

アルスがそう言うと、その場に居た全員に魔法陣が展開。

「ふっ……。良いだろう。今回は乗ってやる。来い！」

正義はそう言うと、アルスは不敵な笑いを見せ、

「なら、行くぞ！海上に転移！！」

アルスがそう叫ぶと、魔法陣が赤く光り、六課メンバーと影の群団は消えて行った。

＊

海上。そこは鷗が飛び交う、静かな場所。

だが、今日だけは違った。波は静かに響き、鷗は一匹たりともいない。

そんな場所に、対峙する影が有る。

「ここなら、存分に暴れられるな。」

赤髪の青年、アルスが言う。

「よく皆連れてこられる魔力が御前に有ったな。」

呆れて、金髪の青年、ゼロは言う。

「まあ、転送されたのは、あの三人と、俺とお前、それと、あいつ等だけだからな。」

アルスは言う。

「一つ言おう。3 v s 2じゃ俺等に勝ち目はない。」

ゼロはそれに返す。

「確かに。普通ならな。俺とお前が一気に技を使えば…」

「死ぬ気か？お前は。」

「…そんなつもりはないけどさ。」

「なら言うな。俺だって、6vs1で粘ってたんだから、無理。それに、出来たらすごいぞ？それ。」

ゼロはアルスの答えを完膚なきまでに粉碎し、言う。

「じゃあどうすんだよ！」

「落ち着けよ。隙を見るまで、だ！」

ゼロはそう言い、アルスを蹴りとばし、二人の距離を離す。

――斬！！――

そこには、一太刀が降って来ていた。

それは虚空を通過し、その剣の持ち主、運命は残念そうに剣を担ぐ。

「もうちょっとだったのによお。」

運命はそう言うと、ゼロの方に特攻をかける。

アルスはそれを見て、動こうとする。

「来るな！」

が、ゼロはそれに制止をかけ、即席で魔力刃を生成し斬撃を受け止める。

――閃！――

「アルス！お前は自分の敵だけ見つめている！俺は大丈夫だから！」

「だけど！」

「俺にはまだ奥の手が残ってるから大丈夫だ！」

「…死ぬなよ。」

「当たり前!!」

アルスは会話を終えると、飛び立ち、ゼロは剣撃を弾く。

「さあ、行くぞ。歪んだ運命！」

「はッ! かかって来いよ!!」

二人はそう言うのと、一気に踏み込んだ。

＊

そんな事をしている頃、なのはは運良くフェイトとはやてと共に居た。

「また会いましたね。オリジナル。」

なのはに似た容姿。だが、バリアジャケットは黒の女性。星光の殲滅者がいた。

「マテリアル…S…」

なのははそれを睨みながら言う。

「その名はおやめ下さい。あの金髪のお方が『星光の殲滅者』と言う名前をつけてくれました。」

星光はそう言う。

「金髪って、ゼロ君の事？」

フェイトが聞く。

「そうだよ。僕にはカッコイイ、『雷刃の襲撃者』って名前をつけてくれたんだよ！」

そうフェイトに似た容姿で、違うのは髪が水色の雷刃が言う。

「へえ…って！そんな事は聞いてへん！何で欠片事件の時に消滅したあんたらがいるんや！！」

はやてがツツコミを入れる。

「静かにしろ。仔烏。」

そう言い、はやてに似た容姿の、瞳の色が緑色、さらに、黒のバリアジャケットを纏う女性が出てきた。

「あんたは！」

はやてはそれを見た瞬間、血相を変えて叫ぶ。

「闇を総べる王…とでも呼ぶが良い。仔烏共。それと良い事を教え

てやろう。」

「良い事？」

なのはが聞く。

「そうだ。私らはある物のスポンサーと言う奴だ。これが一つ目。二つ目。そいつは今ロストログアの回収を終えたところでな。今、自分の体を鍛えているそうだ。」

その言葉を聞いた時、なのは達に有る予感がよぎった。それは自分たちが追いかけている人物。

―ジェイル・スカリエッティではないか？―

その予感が。頭に。深く、深く。

「さらに言えば…」

「駄目ですよ。それ以上教えてしまつては。」

闇がそれを言おうとした時、星光がそれを遮る。

「それもそうだよ。闇。」

「その名で呼ぶなと毎回言っておろう。まアいい。これから消える貴様等には、関係ないからな。」

そう言うと、三人はデバイスを構える。

「「覚悟は良いな？／ですか？／よね？」」

影の三人はそう言い、なのは達も互いに頷き、デバイスを構える。

「「どっからでもかかって来い！」」

なのは達はその容姿に似合わない事を三人で言う。それを確認した影は、分散し、戦闘態勢に入る。

＊

「デイベイン・バスター！！」

「ブラスト・ファイアー！！」

桃色の閃光同士が互いから放たれる。前者がなのは。後者が星光。

――閃！！――撃！！――

同じ威力の魔法がぶつかり合い、相殺する。

「バリアブル…」

なのはは距離を取り、自分の愛機、レイジングハートを構える。

「シュート！」

そして、放つ。魔力弾が分散して広がり、不規則な動きを見せる。自身の周りにも浮遊させて、コントロールする。

「お願い！」

なのはがそう叫び、右手をあげると、魔力弾は一斉に向かっていく。

「バリアブルシュート！」

星光もそれに対して、同じように構え、放つ。魔力弾同士、互いにぶつかり合い、相殺する。

「さあ、まだこれからですよ。」

星光はそう言う。

「何で戦うの！ 私達に戦う理由はないはずでしょ！」

なのはが可能性を察して、聞く。

「戦う理由？ それは一つです。貴方と私の存在を入れ替わることが目的。」

星光はそう言う。

「そんなの…間違ってる！」

〈Load cartridge!〉

なのはがそう言うのと、レイジングハートは呼応し、空薬莖を排出する。

「貴方に私の気持ちができる訳ないです！ 生まれて、すぐに消えた…私たちの気持ちなんて！」

星光はそう言うと、空薬莢を排出させる。

「エクセリオン・バスター！」

「デストラクション・フレイム！！」

二人は砲撃をする。

―爆！― ―轟！―

それは互いに相殺して、辺りに轟音が響く。

そんな星光の目には、願いと涙が浮かんでいた…。

「貴方は…昔の私と同じ目をしているよ。星光ちゃん。けど…」

なのははデバイスを構える。

「私たちも、皆を守りたいから、止れない。」

そう言う。

「解ってます。それが宿命だと。だから…」

星光も構える。

「私は戦います。」

そう言い、前を向く。

＊

―閃・閃・閃― ―閃!―

閃光が辺りで光る。

それは、相殺ではない。

かと言って、救難信号でも、威嚇でもない。

「はああああ!!」

「やああああ!!」

―閃!―

そう、刃と刃が混じって起こる、鏝迫り合い。

もうかれこれ、10分は打ち合っているだろう。

「くっ!」

フェイトは悪態を少しだけもらし、二人は刃を離し、距離を取る。

「ハーケン…セイバー!」

「光翼斬!」

前者がフェイト。後者が雷刃。互いに刃を飛ばす。

「やっぱり…やるしか…ないのか…?」

フェイトがそう呟き、バルデッシュを構える。

「まあ、君は僕一人で十分。だから…さっさと終わらせる!」

雷刃はそう言うと、一直線に翔ける。

「プラズマランサー：ファイア！」

それを見たフェイトは槍状のスフィアを飛ばす。

「小賢しい！」

雷刃は一気に叩き斬る。さらに、ランサーを展開。

「行け！」

飛ばす。それはフェイトの出した物の五倍近く多い。それが意味する物は一つ。

―拙い―

そうそれだけ。

「バルディッシュ！」

〈S o n i c m o v e.〉

フェイトは高速移動を開始。

全てのランサーから、回避し、雷刃の後ろに向けて、一気に斬り込む。

「無駄！」

雷刃はそれを受け止め、さらに、バリアジャケットの形状を変化。レオタードに似た姿になる。

「はあ！」

――閃！――

雷刃は刃を弾く。

「なら、こっちも行こう。バルディッシュ！」

〈get Set.〉

フェイトにバルディッシュは応え、バリアジャケットの形状を変化させる。

レオタードの様な姿に、双剣が握られる。

そして、二人は同時に踏み込む！

「はあああああ！！！」

「やあああああ！！！」

＊

「アロндаイト！」

「クラウソラス！」

――閃！―― 撃！―― 轟！――

煌く閃光。響く轟音。そう、広域魔導師の戦い。

「埒があかな！」

『はやてちゃん！自棄になっちゃだめです！』

そうはやては焦っていた。それはみな同じ事。だが、彼女は自分と

全く同じ力を持っている事に焦っているのだ。
そう、ユニゾンしていても。

「…そうやね。ごめんな？けど、何かある？良いやり方。」

『……ここは様子見です。』

「そやね。じゃあ、様子見しようか。」

『はいです！』

はやては落ち着きを取り戻す。

「やっと本気を出せるようになったか。ようやく鳥になっているかと思えば、貴様はまだ仔鳥なようだ。」

闇を総べる王は言う。

「そうや。こっからが本気や。」

「そうか。なら、その生まれたばかりの出来そこないの融合騎と仔鳥。その力…」

闇を総べる王は魔導書を開く。

「見せて貰おう！」

そう言う。

「こっちも行くで！リイン！」

『了解です！』

はやてとリインフォースも夜天の魔導書を開く…。

「響け！終焉の笛！」

「駆け抜けろ！白き流星！」

二人は魔力を詠唱によって底上げし、ベルカ式の魔法陣を展開。

「ラグナロク！」

「ミディアホワイト！」

一気に放つ。その白い閃光同士は

―撃！―

互いにぶつかり合い：

―爆！―

相殺する。爆音を響かせ：

―轟―

空気を震えさせる轟音が辺りに響いた…。

＊

「やあああああああああ！！」

―閃！―

剣戟。そう、アルスの物ではなく。かと言って黒の正義の物でもない。一緒に戦っていた“傾いた自由”による物だ。

—しゅん—

アルスはそれを右の剣で受け流す。さらに体を相手に寄せ付け、空いている左で：

—斬！—

切り裂く。…が、それは正義によって間を入れられ、その間に離脱する。

「はああああ。やっぱし、双剣じゃ無理みたいだな…。しゃあない、インフィニット？」

インフィニット。意味は『無限』。アルスはその名前の自身のデバイスに問いかける。

へアルスうゝ。またあれ使うのおゝ？

インフィニットはふざけた態度で答える。

「ああ。使うよ？」

アルスは無難に答える。

へあれ、私にも負担デカイし、やめてくれると助かるんだけど。ゝ

インフィニットはダルそうな声で言う。

「しゃあないだろ？それともばらされたいのか？」

アルスは言う。ここに他の奴等が居たら、『なぜ、ゼロと言い、アルスと言い、バラス事が好きなのだろう…。』そう言うだろう。

〈了解しました！隊長殿！〉

インフィニットはそれに恐怖し、言う。

「……あとでAI組みかえるからな？」

〈それだけはやめて！〉

さらっと怖いこと言うアルスにインフィニットは止めをかける。

「だったら、その女の子みたいな喋り方を辞めろ。」

〈わかったよ。〉

「ならさっさとしろ。」

〈けど、ゼロにも止められてたよな？〉

「いつの話だよ。大分前じゃねえか。」

〈それもそうだな。よし。バリアジャケット展開。モード連結刃。〉

インフィニットがそう言うと、アルスは閃光に包まれる。

出てきたのは、赤い片手剣を持つ、金色基調の騎士甲冑。さらに、背中には青色の羽根が生えていた。

〈アルスもいい加減だよな。〉

「まあな。行くぞ。」

〈了解。〉

片手剣の柄の部分が動く。そこから空葉莢が排出され、剣は紫電を纏う。

「俺もゼロ見たいなスロットルシステム作ろっかな？」

「ブレイブフォースに今度相談しようか？」

「いいね。けど、こいつ等始末してからだな。」

「ああ。行こう。」

「応！」

アルスは一直線に駆け出す。

「二人にそんな小刀一本で立ち向かうとか！アンタ馬鹿でしょ？」

自由はそんな事を言い、砲撃を放つ。

「馬鹿はどっちだな！」

アルスは止まる事なく、連結刃を使い、弾く。

「本当だな。」

正義も言う。

「うっさいわね！アンタは敵か味方か、どっちなのよ！」

自由は額に血管を浮かべて言う。

「もちろん味方だ。ただ、お前が馬鹿だからな。俺がいなきゃ何もできない事には変わりはないだろう。」

「むう。そうだけど…なら、さっさとやるわよ！」

「最初からそのつもりだ。行くぞ。」

正義はそう言うのと、自由と共に突進。

「はは。やっぱり気付いてたか。これの弱点。」
へわかってたなら、何でやったんだよ！」

インフィニットは突っ込む。そう、連結刃、唯一の弱点は『刃を戻さない』と攻撃できない。』それを狙ってきたのである。それで、今は刃を戻していない状態。

「じゃあない！モード日本刀！」
へやっぱしこうなるか。解ったぜ。剣を海に投げ捨てろ。」
「うし。」

アルスはインフィニットの言われたとおりにする。
すると形状を変え、日本刀になる。

アルスは急降下し、剣を取り、急上昇する。

――斬！――

自由と正義が振り切った形でさっきまでアルスがいた場所で剣を持っている。
後、数瞬遅れていたら……。そう思うと、アルスの背中に冷や汗が流れる。

「マジかよ……。一人じゃきついかも……。」
へらしくないな。マスター・アルス。」

アルスにインフィニットは茶々を入れる。

「まあ、解ってるけどさ。らしくないってのは。」
「マスター！上だ！」

インフィニットがそう言うのと、集束砲が放たれていた。

「覇天光！」

アルスは瞬時に黒色の魔力を左手に纏わせ、放つ。

「閃！」

実質2vs1この状況で意味するのは

「押し負け」

こういう事。が、押し負けせず、覇天光は二つを分断した。
そうまるで斬撃の様に。

「奴め。なかなかやるな。」

「そんなこと言ってる暇が有るの！？」

前者が正義。後者が自由。

「知っているさ。だが、少しだけ面白くしよう…」

「はあああああ！！！」

「斬！」

そこに振って来た一人の女性。
手甲を右腕に纏い、ローブを着ている。
中は青い、騎士甲冑。
さらに、腰には剣を納める鞘が有った。

「何よ！こいつ！！」

自由は言う。

「暁・S・クロウズン。ただ、それだけ！」
セレナ

セレナはそう言う。そして、アルスを見て、無事かどうかを確認しようと思ったら、その姿を見て絶句。さらに言う。

「…何でここに居るの？お兄ちゃん？」

「お前…セレナか…」

アルスもその姿を見て返す。その時、セレナの後ろには刃が近づく。

「裂覇一刃！」

アルスはそれを見るや否や、剣を刃に向かって放つ。さらに、自分も追撃し、一気に押しやる。

「やっぱりお兄ちゃんだ…。」

セレナはそう言うのと、涙を見せる。

「……戦場に涙は似合わないし、俺の御姫様はそんな悲しい顔を
てないよ？前を向こうよ？」

アルスはそう言う。それにセレナはむくれて、

「馬鹿兄ちゃん…。」

そう言うだけだった。

「じゃあ、ツーマンセル。やるか！行くぞ、セレナ！」

「うん！行こう！」

アルスとセレナはそう言うのと、一気に駆けだした…。

＊

「おらおらおら！」

「くっ…！」

―閃・閃・閃・閃―

幾多もの打ち合い。さらに、広がる閃光。
片方は両剣。もう片方はバスターソード。

「そんなもんなのかよお！オリジナル！」

「誰がそんな物と言った？運命。俺はお前のオリジナル素体ではな
い。」

両剣を持つ男：ゼロは言う。

「なら、貴様と俺はなぜ似ている！」

「似ているだけ。俺とお前は別人だ。」

ゼロは両剣を構え、答える。

「だから！」

ゼロはそう言い、両剣を上に取り上げる。それは回転し、蒼い弓に変形。

それを持ち、回転させ、その蒼い弓より一回り大きい、黒色の中に、赤く輝く煌きがある弓が出てくる。

「俺は：お前等を！」

ゼロはそう言い、弓を精製。引絞る。

―閃・閃・閃・閃・閃・閃―

一気に七つの矢を一気に四肢に当てる。

「：止める！」

ゼロはそれにさらにバインドをかける。

「こんな物！ぶっ壊してやるよ！」

運命は腕に力を込め、バインドを破壊しようとする。

…だが、軋むだけで壊れない。

「何で壊せない！」

運命は叫ぶ。

「当たり前だ。お前の力だけではな。一応言おう。俺がお前に掛けているバインドは『ストラグル・バインド』という種類のバインドの改良版で有り、アレンジ版。」

「成程な…で、俺の魔力は無いに等しいってわけか？」

運命はそう言う。ゼロはそれに笑い、言う。

「お前はまだ分かっていない。俺は、お前に囚になってもらうためにここに縛っているんだぞ？それに、お前の命は『俺の手の中にある』って言うっても過言じゃないしな。」

ゼロはそう言うのと、右手を開き、握っていく…

「ぐ…あああああああああああ！！」

運命は叫ぶ。なぜか。それは…

「解ったか？俺の右手が締まりの撃鉄トリガーと成っているのがな。」

「くあああああああああああああ！！」

「まあ、解らんか。む？来たか。トラップ設置つと。」

ゼロは弓を精製し、トリガーを引き、設置した。
そこに来たのは自由、雷刃、星光、闇の四人。
全て計算通り。そう思い、口元を緩ませた。

「こちら準備するでしょう。限定解除は？」

「許可されていません。」

「なら、皆に謝るか。行くぞ。」

ゼロはそれをブレイブフォースに確認したや否や、目を閉じ、念じる。

「Wir sind Phoenix. (我は不死鳥。)」

そう言う。その時、魔法陣が出現する。

「Es gab keine Angst vor dem Tod damit, noch nie geflohen (故に死の恐怖は無く、一度も敗走はなし。)」

「マスター…やめろ…。」

ブレイブフォースがそう言った瞬間、バインドにかかる四人。運命と共に同じ定めになってしまう。

「Ich hoffe, wir werden. Und schließlich? r diese Kraft. Und sagen, dass das Schicksal mit dem Tod. (だから、我は願う。この力でも名を守りたいと。死と言う運命と共にと。)」

「やめろ…そんな事をして、誰が喜ぶんだ…マスター……。。」

ブレイブフォースの声に後ろ髪を引かれるが、詠唱を続ける。

「Besorgt?ber alle, mein Kampf.
Nun schw?re bei Gott, auf dem
Schlachtfeld. Wir in diese m
remium, das mit Blut gef?llt w
erden, und sch?tzen Sie alle!」
（皆を案じ、自分の力を尽くす。今、戦場の神に誓う。我はこの体、
血だらけにしようと、皆を守ると!）」
「やめろ!今ならまだ!」

「今やめたら、あいつらを誰が守る!」

ブレイブフォースにゼロは叫ぶ。目を閉じたまま。

「私は：マスターがいなくなる事が嫌だ!」

「絶対に帰ってくる。いつだってそうだったんだから。俺を信じろ。
スロットル・Super Magie。頼む。」

「絶対に帰って来い。スロットル回転!ロード!」

「解っているさ。その位。」

ゼロはそう呟くと、手甲が回転。空葉莢が両腕から20発排出される。

「Gott des Schlachtfeldes in Phoenix... Advent!」
（“不死鳥の戦場の神”
：降臨!）」

そう言うと、魔法陣が光り輝き、ゼロを包む。

背中から、深紅の翼と虹色の身の丈の5倍はあるだろう翼が生える。
さらにゼロの瞳は真紅と翡翠の陰陽太極図のようになる。

そして、全身に鎧を纏い、光から出てくる。

「…行くぞ。覇王の弓!」

ゼロは弓を放り投げると、それは黄金色に輝く、身の丈ほどの弓が握られた。

「我は自分の運命を不幸と思った事はない…。」

―閃・閃・閃・閃・閃―

ゼロはそう眩き、矢を連射し、運命達の動きを止める。

「それはなぜか…。」

その勢いで宙を回転し、前方に深紅に輝く魔法陣を展開。

「大切な、自分の身に代えても、守りたい…大好きな…」

矢を精製。引き搾る。

そこには、紅蓮色に輝く魔力と虹色に輝く魔力が吸い込まれていく。

「仲間がいるから…俺には!」

眼を見開き、眼前を見つめる。

「そんな…思いがあるから!皆を守る!」

放つ。

―射―

それは、魔法陣に吸い込まれて、分散。
さらに、運命達のバインドを固くする。

「思いは力に、力は…決意に！」

ゼロは矢を精製。

さらに魔法陣を3つ展開。

弓を引き搾り、魔法陣に紅蓮色、矢に虹色の魔力が集束される。

「思いの砲撃…D e t e r m i n a t i o n b o m b a r d m e
n t ! ! !」

また放つ。今度は反動で、右腕が少しだけ音を鳴らす。

―閃―

矢は魔法陣に吸い込まれ閃光を発し…

―轟― ―撃!―

轟音を出し、運命達へ紅蓮と虹が混ざった砲撃が飛ぶ。
運命達を巻き込んだかのように見えた。

―瞬―

が、転移魔法が発動し、その場から消え去る。

「な!術式カット!残存魔力でカードリッジ精製!」

ゼロはそう叫ぶ。その時、術式が消える。

それが葉莢となって、マガジンに入っていた。

さらに、瞳の色が元に戻り、装備がいつもの騎士甲冑に戻った。

覇王の弓も蒼穹の弓に戻る。

「――っ。終わったな。」

〈そうですね。〉

「ブレイブフォース。バリアジャケット解除。モードリリース。アウトフレイム許可する。」

〈了解。〉

ゼロは足場を作り、それを確認すると、グローブに付いていた宝石を取り、

「おりゃ！」

投げた。

ブレイブフォースはその時にアウトフレイムになった。

「マスター。やっぱり…。」

ブレイブフォースは近付き言う。

「いや、お前には、やって貰いたい事が有るんだ。」

ゼロがそう言った時。

あの四人とセレナが来る。

「ゼロ君。あれはどういう事かな…?」

なのはが黒いオーラを出して言う。

「まあ、落ち着け。俺はあれを使ったから、並行世界のどこかに飛ばされるんだ。」

ゼロはそう言うのと、フェイトとはやてが寄って来た。

「それ、本当なの？ゼロ。」

フェイトは聞く。

「すまん。本当だ。」

ゼロは少し寂しげに笑い言う。

「嫌だよ…折角、一緒に居られたのに……」

フェイトの顔には涙が浮かぶ。それを見たゼロは抱き寄せる。

「ごめん。でも、すぐに戻ってくるから。大丈夫。だから…」

ゼロはそう言い、フェイトにキスをする。

「笑って、『行ってらっしゃい♪』って言ってくれ。そしたら、帰って来た時に『ただいま』って言えるから。」

ゼロはそう言い、笑う。

「うん。行ってらっしゃい♪」

「行ってきます♪」

ゼロはその後、はやてにキスをし、同じようにする。

「アルス。なのは。」

ゼロはその後、向き直り、言う。

「解ってる。俺はなのはに剣と銃の使い方を少しでも教える。」
「私はそれをマスターする。」

アルスとなのはがそう言った。ゼロはそれに頷く。

「最後に一つだけ。」

ゼロは皆に言う。

「俺に何か言いたいときは、ブレイブフォースに頼んで、通信回線を繋いで貰ってくれ。」

ゼロがそう言った瞬間に魔法陣が展開し、足元から粒子の様になり、消えて行く。

「時間だな。…行ってきます…。」

ゼロがそう言い終わったと同時に消える。

《行ってらっしゃい。ゼロ。》

皆はそう言い、ゼロを見送った。



永遠の明日を〜♪誰もが求めている〜よ〜♪

今回の担当

・ゼロ ・フェイト
・なのは ・はやて

ゼロ

「さて、始めましたぜえ〜♪後書きコーナーNEO♪」

フェイト

「うん。」

はやて

「って、私らあまり出番がないやないか！」

ゼロ

「まあ、止せ。お前等はここでのレギュラーなんだから。」

はやて

「まあ、そう言うことならいいんやけど…。」

なのは

「さっそくおかしなことになってるね。」

ゼロ

「そうだな。でも気にしなければいいから♪さて、スタッフウ〜♪」

はやて

「狩野○孝!？」

ゼロ

「さて、くす玉セットが完了したところで。フェイト、なのは、はやて、行くぞ。3、2、1、ハイ!で行くからな。」

フェイト・なのは・はやて

「うん。」

ゼロ

「じゃあ…3、2、1、ハイ！」

―裂―

くす玉が割れる。

ゼロ

「はい。フェイト、読む。」

フェイト

「祝！CP、EWクロス企画！！って、これ…。」

ゼロ

「作者が二階堂さんにこの事を持ちかけて、許可を取った様なので、それで。」

なのは

「それで、私たちの出番は当分なし？」

ゼロ

「いや、頑張って、8000、8000でやるそうだ。」

はやて

「じゃあ、私らも出番が有るっちゅうことやね？」

ゼロ

「そうなる。さて、今回のおさらい。」

フェイト

「どっちが悪役なのやら…。」

なのは

「DSな主人公、乙。」

はやて

「奥の手は最後までとっておきましょう♪…ってどこ？」

ゼロ

「ああ。けど、なのは！お前は俺の事をどう思ってるんだ！？」

なのは

「いや、だってね？カンペにそう書いてあるんだもん！」
ゼロ

「ほほう？作者はよほど死にたい様だな？殺してやるからちよっと待ってろ？」

フェイト・はやて

「ストップストップ！」

なのは

「そうだよ！私達の出番がなくなるでしょ！」
ゼロ

「まあ、そうか。ならしょうがない。で、きょうのOPはティルズ・オブ・ハーツの主題歌で、『永遠の明日』でした♪」
フェイト

「けど、これは全部、ゼロが歌ってるんだよね？」
ゼロ

「そう言う事だ。さて、次回予告。なのはからどうぞ。」

なのは

「うん。」

なのは

「ゼロが意識を取り戻したそこは、見た事のある世界。けれども、何かが違う世界。」

フェイト

「ゼロはそこで、どう生きて行くのか？」

はやて

「そんな時、ゼロはある人物に逢う。それは、運命か、廻り合わせか？」

ゼロ

「次回、第三章、第一話―新世界？並行世界？―」

ゼロ・フェイト・はやて

「明日の天空へ！」

「Drive ignition」 一同

第13話―自分の影…?―（後書き）

二階堂さん、今回のクロス企画は許可を頂き有り難うございます♪
それと読者さんに。今、オリキヤラクター募集中です♪
メッセーじか、感想に投下してください♪

第三章第1話―新世界? 並行世界? ―

荒野に倒れている、一人の人間。綺麗な金髪の男性。ローブを羽織っている。

「くっ…!」

男は少し痛みで顔を歪ませながらも、起き上がる。

「…何処なんだろうな。ここ。」

開かれる、翡翠の眼。周りを見渡す。

「SEED。」

男性の眼が深紅に変わる。辺りを見渡した後に、眼を元の色に戻す。

「管理外世界か? いや、違うのかも…。とりあえず、歩くか。」

男性は立ち上がる。そう、この男性こそ、ゼロだ。その時、金色の槍状の物が飛んでくる。

「…!!」

ゼロは即座に反応し、剣を即座に精製する。

「覇裂光!」

―斬!―

ゼロはそう言い、剣を振るう。その槍状の物は切り裂かれ、四散する。

「そこ！」

ゼロは炎の羽を展開。さらにスフィアを精製して放つ。

「ちっ！」

その人物は全てそれを剣で弾く。

「来て初っ端から戦闘ですか？何なんだよ。ホントに。」

ゼロは悪態をつき、ポケットに手をつ突っ込むと、硬い物が手に当たった。

「？」

ゼロはそれを取り出し、見る。

「そう言えば、ブレイブハートが直せなくなって、お前を作ったんだっけな。バルディッシュ・テンペスト。鎌は使える。なら、打開策にはなるのかもな。」

ゼロはそう呟く。その時、無数のスフィアがゼロを襲う。

―撃！―

「やった…のか？」

その人物は草を掻き分け、出てくる。

「この位でやったとか、なめてるのか？」

――轟！――

ゼロがそう言うのと、辺りに轟音が発し、煙を振り払い、身の丈ほどの白い鎌を携えるゼロがいた。

ゼロの今の姿は白いロングコートに鎧を着ていて、騎士と呼ぶにふさわしい姿だった。

「まだ俺は実力の十分の一も出してないぞ？」

ゼロはその時、自分の体が眼に入り、こう聞く。

「お前等、何処の所属だ？」

と。それに対して、男は答える。

「時空管理局です。」

と言ったので、ゼロはバリアジャケットを解除し、モードをリリース。さらに言う。

「連れてけ。」

男はそれに少し呆けていたが、どこかに通信し、ゼロは連行された……。

＊

場所は移り、取調室。

「まず、名前を教えてください。」

女性は言う。先の男性と一緒に。

「じゃあ逆に言おう。君等の名前は？その後、俺も答える。」

「失礼しました。私は時空管理局、機動六課所属フェイト・T・ハラOWN執務官です。」

「同じく、神藤昶、囑託魔導師です。」

二人は自己紹介をする。

「そうか。俺は、ゼロ・S・A・ハラOWN。」

「ハラOWN？って言う事は、リンディ提督の何かですか？」

男性は聞く。ゼロの最後のハラOWNの姓に対して。

「あゝ。違う違う。正確にはゼロの上に八神が付くんだけど、リンディ提督とか、誰それ？ってなってるから。」

「闇の書事件もですか？」

「???、闇の書？何それ？」

フェイトの問いに対しても、知らないと答える。

「言って置くけど、俺の身元を確認できるのは、さっきフェイトさんが取り出した、そのバルディッシュ・テンペストだけ。それ以外は、俺の口だけだな。」

「けれど、あれにはデータがほとんど入っていませんでしたよ?」

昶が言う。

「まあ、あれだ。今起動したばかりで、データなんて皆無だからな。俗に言う、漂流者みたいなものだ。」

「そうですか。ありがとうございます。じゃあ、行こう。昶。」

フェイトはそう言うのと、昶を連れて立ち去る。

「さて、どうするかな?」

ゼロはそう言うのと、立ち上がる。

「このまま出るのも駄目だし。しょうがないから風の属性変化とかを合わせて、六課の制服をつと。よし。」

ゼロはそのまま澄ましたような素振で歩き出し、外に出た。

「よし。脱出。テンペストには悪いけど、ちよつと、ガジェットでも倒してくるか。よっ!」

ゼロは高く跳躍し、属性体ならではの光の翼を広げ、光速で飛び立

った。

＊

「さて、到着。行くぜえ。」

ゼロはガジェットが出そうな場所を攻撃する。

―閃！― ―撃！―

それは閃光を発し、物凄い爆音を出した。その数瞬後、ガジェットがゼロの周りに展開した。

「やっぱし、ガジェットから作るデバイスは面白いのができそうだな♪わくわくしてきた♪」

ゼロは少しだけはっちゃけてるのか、面白そうに言う。

「さて、行こうか。」

ゼロはそう言うと、ガジェットにとび蹴り。部品を打ち抜く。

―撃！― ―撃！― ―撃！―

次々と打ち抜いて行く。そして、ISを発動し、組み立てていく。

「うっしゅあ！完成！即席デバイス：レヴァンティン・エクシード！」

ゼロはそう言い、鞘が無い事に気付く。

「ああ。いつけねえ。鞘が無いや。まあいいか。火竜一閃！」

―斬！―

ゼロは腰だめにエクシードを持ち、切り裂く。それは少しずつずれて、

―爆！―

爆発した。その爆風は辺りに広がり、暴風を生む。

「さて、全部倒し終わったと。ん？」

ゼロが全てのガジェットを倒し終わり、妙な事に気付く。

「何で魔導師がいないんだ？ちょっと怪しいな。SEED。」

ゼロはISを起動し、熱源、魔力、その他もろもろを探索する。

「やっぱり、熱源反応が有るな。行ってみるか。」

ゼロはエクシードを持ち、駆けだした。

＊

「…どうやら、何かの研究所らしいな…。」

ゼロは歩きながらそう思う。その時。

「音声反応？それに…。」

ゼロは後ろを振り向く。

「すみませんねえ！勝手に出て行って！」

ゼロがそう叫ぶと、暗黒オーラを出したなのはと今すぐ謝った方がいいぞと苦笑いする昶が出てきた。

「ゼロ君…これは一体…どういう事かな…？」

「デバイスの改良パーツが無いとあれの最大稼働ができないんですよ。まあ、どっちにしろ、パーツはガジェットから取った方が安く済むので、新しいデバイス作るのにも使ってるんですよ。で、それよりも。」

「ああ。でも、凄いなお前。こんなところで発見できるとはな。」

「俺のISは少しだけ特殊なんだ…っつと。見つけた。ちよつと退いてろ。」

ゼロはそう言って、なのは達に離れる様に言う。

「不死鳥system。」

ゼロがそう呟くと、背中から深紅の羽が生える。

「石覇…天鷹拳！」

ゼロがそう叫び、壁を殴ると、一気に壁が吹き飛んだ。

「Gですか…。」

「気にしない。ほら、行くぞ？」

ゼロは二人に言い、先を急ぐ。

＊

そこは研究室。

「さて、これで完成するぞ…。」

ある科学者がそう言い、スイッチを押そうとする。その時。

――撃！――

壁が一気に吹き飛び、ボタンを押しそびれる。

「やれやれ…何時の時代もこんなんだな。」

「誰だ！」

科学者はライフルを構えて言う。

「俺は八神ゼロ・S・A・ハラOWNだ。」

ゼロがそう言うと、科学者は発砲する。ゼロはそれを避けずに全て食らい、歩みを進める。

「無駄だ。解れ。俗物。」

それでも科学者は発砲する。

ゼロの体、金色の髪は血で赤く染まり、戦神を思わせるほど、酷い状況だった。

―撃！―

ゼロは腕を振り上げて、科学者の目の前で止める。

―倒―

それだけで科学者は倒れる。

それに安心したのか、ゼロは安堵の息を吐く。

「ゼロさん？　ってうわぁ…血だらけじゃないですか！」

そこから、また男が出てくる。

「だからどうした、昶。俺は血が出ようと気にしないぞ？」

「尋常じゃ無い量なのにそんなこと言えるお前って何者？」

昶はゼロを見て言う。

「冗談は良いから。とりあえず、昶。あの少女を出してやれ。」

「ああ。解った。」

昶はそう言うと、実験装置らしき物の所に、行き、助け出す。

ゼロは科学者を背負い、研究所の天井に風穴を開け、出て行った。

「あいつ…何者なんだろう…？」

昶はそう言っていると、女の子を連れ、研究所を出た。

＊

「ぐ…少し無理しすぎたか…目が霞むな…。」

ゼロは科学者を背負い、飛行しながら言う。最も。転移魔法を使えば？と言う話になるが、何分魔力が無い物だから、それはできない。だから、飛行している訳である。もちろんステルスをかけながら。

「もう少し…もう少し…。」

ゼロはそう呟くのと同時に、意識が遠のくのを感じた…。

＊

「…。くあ。」

ゼロは眼を開き、辺りを確認した。

もちろん髪の色も。髪はちゃんと赤くて、安心した。

「気がつきました？」

ゼロは声に気付き、警戒の視線を送る。

「お前、誰だ？」

ゼロはそう言う。ここでもし、シャルさんでしたか。とか言ったら、間違いなく、質問責めだろう。

「あ、シャルです♪」

知ってましたけど何か。ゼロはそう心の中で思いながらも続ける。

「そうですか。で、ここは、何処です？」

「医務室ですよ。貴方が急に倒れて運び込まれたんです。」

シャルは簡潔に説明。

「そうですか。なら、俺は大丈夫なんで、失礼します。」

「駄目です！今動いたら傷口が開きます！」

シャルが慌てて止めるのを見てゼロは言う。

「貴方は僕が何者か大体分かるでしょう？僕の体を見たなら、スパークしている所とかもあった筈です。」

「ええ。」

「そうです。俺は戦闘機人なんですから、気を使わないで下さい。」

ゼロはそう言うと、医務室を出て行った。

＊

「そう言えば、今は何時なんだろう？」

ゼロは出て直後にそう思う。何故か。それは、出た直後に雪が降っていたのを目撃したからだ。

「…食堂借りるか。」

ゼロは何かを思いつき、食堂へと歩みを進める。その時、昶に会った。

「あ、ゼロさん。」

「ゼロで良いよ。あ、そうだ。今って、何月何日なんだ？」

「？、二月一日だけど？どうかしたのか？」

「いや、ちょっとやりたい事が有ってな。で、お前は幾つ貰うと思う？ 昶。」

「幾つって？」

「チョコレートだよ。後一週間でバレンタインデーだぞ？」

「そう言えばそうですね。で、髪洗わないんですか？」

昶はゼロの髪を見て言う。その髪は血で赤く染まっていたが、時間がたち、少し黒みがかっている。

「それもそうだな。水属性スフィア展開っと。これで数分すれば終

わるだろう。」

ゼロは自分の髪全体を水属性を纏ったスフィアに浸ける。昶はそれに呆然とするばかりだ。

「ん？どうした？」

「いや、凄くなって思って。」

「まあ、俺は特別だからな。だからこういう事が出来る。」

「あのさ。模擬戦しないか？」

昶がゼロに提案する。

「何でだ？まあ、訳言っても、断るがな。」

「そう言わずに、頼む！」

「戦闘マニアかお前は。頼まれても断る。第一、俺は怪我してるんだから無理だ。」

「それは何とかなる。」

「ならん！」

昶にツツコミを入れ、頭にチョップをかます。

—殴—

鈍い音がして、昶は唸り、蹲る。その時、

「ゼロさん？ ちょっと良いですか？」

「…？、はい？」

ゼロは呼びかけに対して、応じる。そこに居たのは、はやてでもなく、かと言って、フェイトでも、なのはでもない女性だった。

「千華…こんなとこで何してんだ…？」

「それはこっちのセリフ。病人に模擬戦申しこむなんて馬鹿じゃないの？」

「馬鹿って言うな！」

「じゃあなんて言えばいいのよ！ 思い付かないなら馬鹿でいいじゃない！」

「普通に呼べ！」

「呼んでるわよ！ けど、アンタが馬鹿だからでしょう！」

「何を！」

「一撃！！」

昶と千華が喧嘩しているところで、苛々が爆発しそうになったゼロは壁を殴りつけ、ドスの物過ぎ利いた声で言う。

「お前等…いい加減にしやがれ…。」

そう言った事に対して、二人は固まる。

「返事はどうしたあ！」

「「はい！」」

ゼロがそう叫んだ途端に二人は返事をする。

「で、千華ちゃんだっけ？」

「はい…。喧嘩はもう、しません…。」

「いや、そうじゃなくて…用事があったんじゃないの？」

ゼロは千華の顔を見て、言う。

「あ、そうでした。実はあの子が会いたって言ってたんですよ。」

「あの子って言うと…ああ。研究所に居たあの子か？」

「そうです。」

「なら行くか。」

じゃあな。と言いつつ、ゼロは歩き出した。

＊

「さて、入ろうかな。」

ゼロは一人、隊長室の前で眩き、ノックする。

「どうぞ〜♪」

何ともまア気の抜けた声だな。ゼロはそう思いつつ、扉を開け、

「失礼します。」

敬礼をし、入る。

「あ、来た来た。」

髪、肌、共に白色で唯一瞳が蒼色の少女はゼロに駆け寄る。

「で、ホンマなんやな？」

「うん。こいつは八神とハラオウンの姓を持つ、この世界とは別な、けれど同じ系統の力を持つ並行世界の住人だ。」

その少女はそう言った事にゼロは少し苦笑いをして、ゼロは言う。

「まあ、その通りなんだよな。で、そんなことが分かるお前は何者だ？」

「おっと。申し遅れたね。ボクは創造者^{クリエイター}。並行世界の神様の存在だよ。」

「的って何だよ。的って…。」

ゼロは頭を抱えて言う。

「的って言えば…的…だよ？」

創造者がそう言った事にガクツとくるゼロ。

「だから！的って何なんだよ！超不安だから！」

「抑えて抑えて。話が進まないでしょう？」

「誰のせいだと思っとんじゃあ！」

「ゼロさん？今は抑えて下さい。」

はやてがそう言ったのでゼロは抑える。

「……で、何で呼んだんです？」

「いや、実はな？ゼロさんが執務官って事で、スバル達に魔導教導官として、見て貰いたいと思いましたんですけど…」

「OKですよ？」

「了認、速っ！」

「お前が天然タイプなお陰で…長かったんだ！」

創造者のツツコミにゼロはさらにきついツツコミで返す。

「ツツコミを殺すな！」

創造者が言う。

「お前の詰めが甘いんだよ。…はあ。まったく。じゃあ、屋上で寝てるんで、用が有ったら呼んでください。」

ゼロはそう言うのと、敬礼をして、出て行く。

＊

「ふあ。寝るか。」

ゼロは屋上に寝転がり、眼を閉じた。

（ゼロ？聞こえる？）

その時、念話が入る。

（フェイトか。）

（うん。ブレイブフォースに言って、少しでも頼んだんだよ。）

（そうか。で、そっちで元気にやってるか？）

（うん。少し寂しいけどね。）

（ごめんな？けど、本当なら限定解除申請してからやった方が良かったんだけどな。あれ。）

（え？何で？）

（まあ、あれはな？限定解除しないと負担が大きいから、転移魔法が発動して、並行世界まで吹き飛ばされる。そう言う訳だ。）

（ゼロ：帰ってきたら覚えててよね…。）

（断る。ジェットザンバー食らう位なら、プラズマザンバー食らった方がましだ。）

（もう！まあ、私だってそんなことやるつもりはないけど。）

（そうか。安心したよ。）

（今はこんな形でしか話せないけど、帰ってきたら…。）

（ああ。もっとたくさん話してやる。気が済むまでな。）

（うん♪楽しみにしてる：／／／）

（そうか。はやてとなのはは？）

その時、ゼロの後ろで扉が開く。

（なのははアルスと剣をやってる。はやては情報収集。）

（うん。で、あの二人の仲は？）

（すっごくお似合い♪ユーノには悪いけどね。）

(言えるな♪)

ゼロはそれに少しだけ笑う。

「ゼロ？」

ゼロは呼びかけられてるが、聞こえていない。

(それで、何か情報は入ったか？)

「ゼロ？聞こえてる？」

聞こえていない。

(まだだよ。でも、ちゃんとした情報が入ると思うから待ってて。)

「ゼロ？聞こえてる？」

(了解。んじゃあな。)

(うん♪)

念話が切れる。それと同時に楽な姿勢になり、寝息を立てると…。

「聞こえてんのかあああああああ！！」

―閃！―

斬撃がゼロに飛ぶ。

ゼロはそれを素で受ける。

「うるせえよ！アツキーラ！！」

―撃！―

今度はゼロがクロスファイアーをまとめて飛ばす。
昶はそれを避ける。

「アツキーナみたく言うんじゃないか！」

「だったら、攻撃しかけてんじゃないか！」

「ゼロが起きないからだろ！」

「起きてたわ！元の世界と通信してただけだ！」

ゼロと昶が口論して、昶はある事に気付く。

「あれ？じゃあ、何でゼロは次元漂流者なんだ？通信できるって事は、帰れるって事じゃないのか？」

「いや、次元レベルじゃなくて、並行世界レベルだからな。俺。で、昶は何の用なんだ？」

ゼロがそう聞くと、昶はそうだった！と言う顔をして、ゼロの方を見る。

「部屋、とりあえず隊長室の隣って事になってるから伝えろって事で、はやて先輩から言われたんだけど…。」

「そうか。解った。」

ゼロはそう言うと、歩き出した。

＊

「本当に運がないな。俺。前にもこんなところだったよな？」

ゼロは自分の部屋に入り、壁に寄り掛かって言う。

「まあ、それが俺らしさか。寝よう。」

そして、ゼロは眼を閉じ、眠りに就いた。

＊＊＊＊＊

世界は変わって、元の世界のなのは達の様子。

「なかなか、ないな。情報。」

はやてはと言うと、自分の家で端末と睨めっこしていた。

「ロストログアって言っても、色々あるし…。けど、だからと言って、他の情報探す訳にもいかないし…。」

うーん。と唸りながら、また端末に向き直ると、扉がノックされる。

「どうぞ。」

はやてが言う。

「失礼します。主はやて。」

シグナムが入ってくる。

「どうしたんや？」

「いえ、大変なら私達も手伝いましょうかと言う事で来たのですが……」

「んゝ。なら、少しだけ手伝って貰おうかな？」

はやてが言うと、シグナムは頷き、はやてと共に作業を再開する。

＊

場所は変わって、なのは宅の道場。

「はっ！ やっ！」

「まだ甘いぞ。なのは。」

なのはは右手に持つ木剣を振り下ろす。その木剣をアルスは右手で抑え、言う。

アルスは左手で、なのはの右に持つ木剣を弾き、左手を同時に外し、なのはの首元に付ける。

「アルス君、強すぎだよおゝ。」

なのはは気の抜けた声で言う。

「そうでもないさ。俺の影の方がまだ強いと思うぞ。俺はまだ迷ってるんだろうな…。」

アルスはそう言うのと、木剣を取り、なのはに渡す。

「迷ってるって、何を？」

「守る道か、殺す道か。」

奴を倒すことで俺は上へ上がる事が出来る。けど、それだと競う相手がいなくなってしまうって、俺は管理局の阿修羅になる。

俺はそれが怖いんだ。誰かと競えなくなるのがね。人は誰かと競いながら前に進む。

：俺の壁はアイツだけ。それを崩すと、俺には何も残らない。
だから……。」

そう言うアルスの肩は微かに震えていた。そのアルスになのはは身を寄せる。

「考えれば良いよ。まだ、時間はあるんだしね。」

「…そうだね。ごめん。なのは。」

「大丈夫。続きをやろう？」

「そうだな。」

そして、二人は練習を再開する。

*

「どうすればいいと思う？ ティア？」

「うっさいわね！ 静かにしてなさい！ 私だって考えてるのよ！！」

『すみません。マスターがいない物ですから…』

一方その頃、スバル達と言うと、ブレイブフォースのメンテ中。

「別にゼロさんがいなくなったからやっているだけなので気にしないで下さい。うわあ。ゼロさん結構細かいデバイス作るわねえ。」

『マスターのデバイスはガジェットからパーツだけ抜き去ったりして作ってる事が多いですよ？』

「「嘘お！」」

『本当ですよ。スバルさん、ティアナさん。』

「道理でガジェットと似た様なパーツが有る訳だ…。」

ティアナは今更の事に頭を抱える。

「でも、どうやったら、そんな器用な事が…。」

スバルは疑問を口にする。

『簡単ですよ。思いっきり蹴り抜く。それだけで出来るんですよ。』

ブレイブフォースの言葉は聞こえるが、実際はそうでもない。重点をずらさずに、一点に衝撃を広げられない様に与える、そういう事だからだ。例えば、空気砲を撃つときに、線香の煙を入れ、その輪が広がらない様に撃てと言う事を彼はやってる訳で、通常では考えられない事をやっている訳である。

「それができるって、ゼロって何者？」

『まあ、確かにそうですね。マスターの体術は我流ですし。』

「それが解ってるんでしたら言わないで下さい。」

ティアナは頭を抱え、スバルは苦笑いする。

「さっさと終わらせましょ。」

『それもそうですね。』

「ティア？手伝う事は？」

「ないわよ。どっか行ってなさいよ。全く。」

スバルは珍しく出て行った。

＊

「ティアもああ言ってたし、ちよつと海でも見てこようかな？」

スバルはそう言うと、辺りに閃光が走り、揺れが起きた。

「なッ：一体何!？」

光が収まり、揺れも収まる。その時、ティアナから通信が入る。

『スバル!』

「解った!現場に行くから!」

『違う!』

「大丈夫だから!行ってきます!」

そう言って、強引に通信を切り、光の見えた方へと駆けだした。

＊

閃光が見えた場所、海。そこに倒れる、一人の男。

「く……。っ!」

男は眼を開く。

「やはり、僕は、とんでもない所に来てしまった様だな。」

男は立ち上がり、自分に武器が有る事を確認し、歩き出す。
その瞬間、周りが少しだけ歪んで見える。

「やっぱり、僕には、少しだけ速かったのでしょうか…?父さん…」

男はその場に倒れ込む。その後、スバルが到着。男は病院に運ばれ

た…。



聖なる夜に輝く♪深紅♪の星♪それは君が迷わない様々に♪

今回の担当

- ・ゼロ
- ・なのは はやて
- ・フェイト
- ・関西人

ゼロ

「はい♪始まりました♪後書きコーナーNEO♪」

はやて

「つて、始められるかぁー!!」

ゼロ

「何だよ。関西人で振り仮名ではやてになってるのは、作者の陰謀だ。心配しなくても大丈夫だ。」

なのは

「それで納得できたら凄いね。」

フェイト

「やり直そうよ…作者さん。」

了解。じゃあ、やり直そう。



聖なる夜に輝く♪深紅♪の星♪それは君が迷わない様々に♪

今回の担当

- ・ゼロ
- ・なのは

・フェイト ・はやて

ゼロ

「改めて始めるって…史上初だな。」
はやて

「これで落ち着いて始められるなあ♪」
フェイト

「ほとんど作者さんのせいなんだけどね。」
なのは

「まあまあ、二人とも。それより、作者さんがゼロ君にこんな物を。」
「

ゼロ

「これを読めってか。しょうがない。読むか。」

『え〜。ども〜♪ZEROです♪

今回、何やかんやで第三章。二章は微妙な終わり方でしたが、第三章ですよ〜♪

で、二月と言えば！そう、バレンタインデーっすよ！皆さん！てな訳で、この企画に参加するキャラを募集したいと思います♪備考については、活動報告を見て下さい♪

後、オリキャラ募集はまだ続いていますよ♪使えるかどうかはこちらで判断しますが（汗）、善処して、出せるようにしようと思います。感想でも、メッセージでも、気軽に投下してください♪時間です。で此の辺で。ではでは♪』

ああ〜。水ない？」

フェイト

「はい。」

ゼロ

「ありがとう。」

はやて

「ホントに全部飲み干すなあ〜。」

ゼロ

「これやった後はこういう事やらないと、のどが逝かれる可能性があるからな。大変なんだよ。」

なのは

「そうなんだ……。はてさて、今日のおさらい♪」
ゼロ

「世界は広い物だ。」

フェイト

「熱々夫婦の誕生か。」

はやて

「喧嘩するほど仲がいい。」

なのは

「まあ、こんな感じに。」

ゼロ

「やれやれな内容だな。今回。作者が扱い下手だな〜とか嘆いてたし。」

はやて

「まあ、良いんじゃない？て、私達、8000もないやないか！」
ゼロ

「今の作者じゃ無理だと言う事だ。我慢してくれ。今度から4000対4000にするそうだから、な？」

なのは

「まあ、それだと、読者が怒りそうな気もしないでもないけど、次回予告に行こう。」

ゼロ

「そうだな。ちなみに今回のOPは、水樹奈々のSilent Bibleだ。2月10日発売で、作者も買う予定だそうだ。てな訳で、次回予告。いっくぞ〜♪」

ゼロ

「ゼロが行き着いた世界。そこには見慣れた仲間がいて、暖かくて

…」

なのは

「元の世界の事も考える。そんな時、元の世界で、あの男が目覚める。」

フェイト

「彼の名は一体…？そんな時、ガジェットが現れる。」
はやて

「彼をつぶすために。けれど、彼は戦う…宿命と向き合うために。自分の生き方を見つける。そんな、悲しい理由^{わけ}で。」

ゼロ

「次回、仲間がいて、自分がいて、それが僕等の生き方。誰にも邪魔できるものではない！」

フェイト

「明日の天空へ！」

一同

「Drive ignition!!」

第三章第1話―新世界? 並行世界? ― (後書き)

扱いが下手だった気がします…orzアドバイスとかがあったら、
お願いしますね♪

作品名変更のお知らせ

ども♪ZEROです♪

ゼロ

「読者のみなさんに：すまない！」

えー。驚いた方もいるでしょう。EWがZEROSTORY、略してZSに変わってるものですかね。そうです。変えました。今回、nanaoさんの感想に『ガンダムクロスみたいだ。』とまあ、要約しましたが、そのような感じで作品名を変更させていただきました。誠に申し訳ありません。

ゼロ

「こんな駄目な作者ではあるが、生暖かい目で見守っていてくれ。」

なんて事を言いやがりますか！アンタは！

ゼロ

「それはしょうがないだろ。まあ、そう言う訳だから、理解してください。読者の皆様。腹いせに涼にランサーを…」

お前は腹が立つと送るその癖やめろ。：てな訳で、今後とも、ZEROSTORY一絆(KIZUNA)一を宜しくお願いします♪時間ですので此の辺で。ではでは♪

二章打ち上げ会、2チョコプレ上げ会！主に、温泉とか、遊園地とかに行っ

今は午前10時。場所は鳴海駅。

ゼロ

「さて、今日は打ち上げ会と言う訳ですが！誰もいません！」
なのは

「にやははは。私ら四人だけだね。」

フェイト

「今の内に渡そうか？」

はやて

「駄目やて。フェイトちゃん。義理でも、本命でも、ちゃんとした
場は用意してるんやし。」

ゼロ

「そうだって。で、今回はカラオケ大会とかもやる予定だし。待と
う。」

フェイト

「そうだね。」

ゼロ

「よし。一番最初に誰が来るか当てようじゃないか。4人でクイズ
しよう。」

なのは

「何で？」

ゼロ

「うし。じゃあ、BSの翔からもらった、この幸せそうなアリサお
嬢様の写真をプレゼントしよう。これで、弱みの一割は掴める。」
はやて

「ええなあ。翔従兄さんの弱みか…フフッ♪」
なのは

「はやてちゃん、顔が悪い顔になってるよ？」

フェイト

「でも、面白そうだね。名簿見せて。」

ゼロ

「はい。」

四人はそれを眺めて…。

フェイト

「レン君がもうこの近くに居ると言う事に一票。」

はやて

「昶が飛んでくる事に一票。」

なのは

「私はエリオットさんがこっちに来る事に一票。」

ゼロ

「千華ちゃんが俺にチョコを貰いに来る事に一票。」

一同

「……。」

フェイト

「見事に別れたね。」

なのは

「にやはは…。」

はやて

「でも、これで良い感じに別れた。誰が有るかなあ！」

昶

「うわあああああああああ！！先輩達、退けてくださあああああああ！！」

ゼロ

「昶が飛んできたな。」

はやて

「よっしゃあ！」

エリオット

「おお。こんなところに居たか。」

フェイト

「エリオットさんが来たね。」

なのは

「やった！」

レン

「あのー。ゼロさん？」

ゼロ

「ん？ああ。フィール君か。」

フェイト

「よし。」

千華

「ゼロさん？」

ゼロ

「む？来たか。じゃあ、これな。」

千華

「ありがとうございます♪」

はやて

「本当にもらってもうたな。」

一同

「……。」

はやて

「賭け事の意味がないやんけ！」

ゼロ

「はあ。こうなる気がしたんだよなあ。俺。」

なのは

「私も。」

フェイト

「あれ？ エリオットさんは？」

ゼロ

「ホントだ。いないや。」

はやて

「あれ、ちゃうか？」

はやての目線の先に居たのはナンパ中のエリオット。

ゼロ

「へえ。エリオットの奴。そんなことするんだあ？」

フィール

「俺も行きます。」

千華

「私ももちろんやってくるわね♪」

昶

「待て待て！ 三人とも、魔法はつ…」

ゼロ

「なに、結界を展開して、E W s y s t e m と属性体の力解放して、その上からさらに、二人と一緒に大出力でオーバーキルさ……♪」

フィール

「そうしましょう。」

千華

「じゃあ、ちよつと待っててね♪ちよつと…」

ゼロ・フィール・千華

「お話をしてくるからさ……。」

一同

「はい…。」

そして、三人は結界を張り、エリオットの元へと進む。

はやて

「なんか物凄いオーラ出していきながら行きおったけど、大丈夫かな？」

なのは

「もう、苦笑いしかできないね…。」

フェイト

「まあ、解らなくもないよ。」

昶

「先輩方の言う事もちゃんと解りますよ。僕。」

ゼロ

「ただいま。さっきそこで涼と言う名の変態野郎も居たから一緒に抹殺してきた。」

昶

「抹殺するなよ！」

ゼロ

「正確には1に限りなく近い1／2殺しだからな。」

フェイト

「で、後の二人は？」

ゼロ

「俺はフェザーランサー飛ばして今も戦ってっけど、終わったんじやねえか？」

フィール

「ゼロさん！加戦頼みます！」

ゼロ

「了解♪さらに500発ほど行けえ♪」

エリオット

「ぎゃあああああああああ！！！」

ゼロ

「まだまだ血祭りにあげてやるう〜♪」

はやて

「ゼロ！ストップストップ！ホンマに殺してしまうて！」
ゼロ

「…まあ、殺したら意味ないしな。フェザーランサー収納っと。E
System収納。ファイルくーん。連れてこい。」
ファイル

「了解しました。」

千華

「もうちょっと痛みつけたかったのに…。」

ゼロがそう言うと、千華は残念そうに、ファイルは満足な顔で戻っ
て来た。

ゼロ

「あ、そうだ。なのはとフェイトとはやてはこれ飲んでな。」
なのは

「…薬丸？」

ゼロ

「知識共有剤だ。」
フェイト

「ああ。そうか。冬矢が来るもんね♪」
ゼロ

「そう言う事だ。なるべく知識は共有しないって、もう飲んできた
のか。」

はやて

「まあ、そう言うことや♪」
ゼロ

「そう言えば後はBrave陣とRefrain陣がくればOKな
訳だけれども…。」
なのは

「ちなみに作者は我慢が出来なくて頭下げに行ったらしいよ？」

ゼロ

「4日じゃかけネエよバカ野郎!! ってことらしいな。」
はやて

「あれ? 冬矢さんやないか?」

はやての目線の先には子供を連れて歩いている人物が。

ゼロ

「本当だ。未来達も来ているな。」

涼

「相変わらずあいつは!」

ゼロ

「黙れ。」

ゼロは砲撃を放ち、涼の顔面を地面に打ち付けさせる。

ゼロ

「さて、おーい、こっちだろ。」

ゼロは手を振り呼ぶ。それに気付いた一同はこちらに来る。

セレナ

「すみません。遅れて。」

カコ

「お兄ちゃんが寝坊するからだよ!」

未来

「それはお前だ! 第一、明日が楽しみだね♪とか言って眠れなかったのは何処のどいつだ!」

ゼロ

「小学生か、お前等は…。」

二人の口喧嘩を見て、頭を抱えるゼロ。

冬矢

「すまないな。色々。」

ゼロ

「エリオットがいるせいで物凄く疲れそうだな…。で、伊織達も一緒に訳で。」

伊織・ことは・ユーリ・リア

「こんにちは♪ゼロお兄ちゃん♪」

ゼロ

「こんにちは♪フェイトは向こうで縮こまってるけど、この際、冬矢が呼んでくるのがベストなのだろうが、はやて。呼んで来い。」
はやて

「え…。何でやあ？私、冬矢さんとフェイトちゃんの…」

ゼロ

「色々甘々になると厄介だからだ。まあ、後でゆっくり甘々な展開になれる様にしてやるから。安心しろ。」

ゼロはそう言うと、皆をかき集めて、人数確認をする。

ゼロ

「…カコちゃん、セレナちゃん、のぞみちゃん、涼、バカ エリオット変態…よし。これで全員だな。」

涼・エリオット

「待てい！」

フィール・ゼロ

「うるさい。」

二人は瞬時に反応し、二人を気絶させ、待機していたバスにぶち込

んだ。

ゼロ

「さて、しおりを渡すから、乗って行く時に貰って行ってね。さて、行こうか♪」

ゼロがそう言うと、一同はしおりをもらい、バスに搭乗。

＊

ゼロ

「ふう。ようやくここまで来たな。」

冬矢

「お疲れ様。」

ゼロ

「ああ。サンキュ。」

伊織

「ねえ、ゼロお兄ちゃん？」

ゼロ

「どうした？」

伊織

「何でお兄ちゃんは髪を縛らないの？邪魔じゃない？」

ゼロ

「俺は、髪を縛っても良いんだけど…まあ、あれだ。好みって奴だ。」

伊織

「ふーん。そう言えば、この前言った、あの服は貰ったの？」

ゼロ

「大丈夫だよ♪ちゃん貰ってあるから、後で人気のない場所で渡すよ。」

伊織

「うん♪」

はやて

「あの服ってなんや？」

ゼロ

「秘密だ。」

はやて

「物凄く気になるなあ…。なあ、私だけに教えてくれへんか？」

ゼロ

「怒らないない…よな…？」

はやて

「怒らへんから、言ってみ？」

ゼロははやてに耳写しで伝える。

はやて

「へえ…って、何やて！」

ゼロ

「だから、伊織がそう言ったから…。」

はやて

「だからって、了解してよい物と悪いのが有るで！」

ゼロ

「やっぱり怒るんだな。まあ、いいや。言うなよ？」

はやて

「……わかったわ。」

ゼロ

「何？今の間。」

はやて

「何やと思う？♪」

ゼロ

「何かものすごく危険な雰囲気があるんだけど、気のせい？」
はやて

「気のせいやて♪」

はやてがそう言った事に対して、ゼロは頭を抱えてしまう結果になるだけだった。

ことは

「ねえ、お兄ちゃん。」

ゼロ

「ん？どうした？ことは。」

ことは

「今度、模擬戦せえへんか？」

ゼロ

「一人で？」

ことは

「いや、皆でチーム組んで、それでやる。」

ゼロ

「そうか。色々と教えながらやった方がいいのかな？」

ことは

「うん♪お願いします♪」

ゼロ

「おう♪」

とまあ、KIZUNA陣とRefrain陣はこうやって楽しく過ごしていました。

＊

未来

「なあ、何でお前等はこんなに俺の事を見ているんだ？」

未来はBrave女性陣に睨まれっぱなしのこの状況。

カコ

「あのさ、お兄ちゃんは誰のを貰いたい？」

未来

「は？誰のとは…チョコの事か？」

そう言った事に対し、皆は頷く。ここで応えなければお前は男じゃないぞ♪未来♪

未来

「おい！それはどういう事だ！！」

はい、天の声に突っ込まない♪

未来

「くっ……。」

のぞみ

「良いから早く答えなさい！」

未来

「俺は……」

言いだした瞬間、皆が未来の方を見る。

未来

「俺は……」

早く答えろ、と言うようにゼロは見る。

未来

「駄目だ！やっぱり言えない！！」

のぞみ・サラ

「ヘタレねえ〜。」

未来

「祐希奈か！お前等は！」

その後、散々ひがまれて、吐かせられたのは別の話。そして、バスに揺られる事、1時間。

＊

ゼロ

「うし。着いたな。降りるぞお〜。」

ゼロがそう言うのと、皆も荷物を準備して、バスを降りる。着いた場所
は遊園地。

ゼロ

「さて、^{エリオット}変態と^{バカ}涼を降ろしてやるか。」

ゼロはそう言うのと、フィールにエリオットを投げつけた。

フィール

「おらあ！」

エリオット

「ぐはっ！！！！」

フィールはナックルを浴びせ、起こさせる。

はやて

「やっぱり、やることが違うなあ。」
フェイト

「確かにね。」

なのは

「まあ、良いよね？」

ゼロ

「なぜ、語尾が上がる。」

ゼロはなのはをジト目で見る。その後、

ゼロ

「うし。皆いるみたいだし、ここからは自由行動だ。好きに行動してくれ。6時には観覧車前に集合な。何かあったら伝える様に。以上。行動開始。」

一同

「了解！」

そう言うと、一部の女性陣は未来に群がる。

はやて

「大変やな。未来も。」

ゼロ

「確かにな。酔ったりしなかったか？」

はやて

「そんなことあらへんよ♪ゼロも大丈夫やった？」

ゼロ

「ああ。で、何でことはと一緒に居るんだ？」
はやて

「いや、3人で見て回ろうと思ってなあ。な、ことは♪」

「うん♪」

はやて

「まあ、そう言う事や。なのはちゃん達も一緒や。」

ゼロ

「そうか。何か慣れないけど、行こうか。」

そして、あのは達率いる、KIZUNAメンバーとRefrain
メンバーは行動を共にした。

＊

昶

「んじゃあ、行くか。千華。」

千華

「え？私？」

昶

「お前以外にだれが居るんだよ。行くぞ。」

千華

「って、何勝手に歩き出してるのよ！待ちなさい！」

CPメンバー二人は二人きりで歩き出した。

＊

未来

「クレイ達は良いとして…。なぜ、お前等はずいてくる。俺はゆっ
くりしたいのだが。」

ルナ

「まあ、良いじゃないですか。マスター♪」

未来

「本当にゆっくりさせてくれ。疲れてるんだから。」

カコ

「じゃあ、お兄ちゃん達は私達のことを嫌いなのか？」

未来

「いい加減にしてくれ。まったく。」

ルナ

「つれないですね。マスターは♪」

未来

「あのなあ…。はあ、もう好きにしろ。」

ここで引き下がるとは…駄目だなあ♪

未来

「ってか、いちいち突っ込みたくはないが…そう言う事言うな！」

のぞみ

「うっさい！」

未来

「ぐはっ！」

未来はのぞみに跳び蹴りを入れられる。

未来

「痛い…。」

のぞみ

「悪かったわね…じゃなくて！行くわよ！」

未来

「行くなってどこに？」

ルナ

「マスターは鈍感です！」

未来

「ルナに言われたら、俺、終わりだな…。」

ルナ

「酷いです！」

とまあ、Braveメンバーもにぎやかでやっているようで。

＊

涼

「さて、俺等は何をしよう？」

フィール

「唯一女性キャラと共同じゃないしな。」

エリオット

「ナンパはど…」

フィール

「ランサー!!！」

エリオット

「ぎゃあああああああああ!!！」

涼

「フィール。お前は何処からそれを出した？」

フィール

「ゼロが^{エリオット}変態と^{バカ}涼に困ったら使えって。」

涼

「ほほう？アイツ、そのような事を考えていたのか…？」

フィール

「ランサーは監視用に上空に多く設置してあるってゼロは言ってたぞ？」

涼

「上等だゴルァ!!」

フィール

「だそうだぞ。ゼロ。」

フィールがそう言った瞬間、涼めがけてたくさんランサーが飛んでいく。

涼

「痛い!痛い!何じゃこの地味な奴はあ!」

フィール

「もっと威力をあげやがれ馬鹿野郎!だそうだぞ。」

フィールがそう言うとき度は集束砲が放たれるようになってきた。
スターライトブレイカー

涼

「ちょ、待つ…半獣人の俺でもそれはさすがに…ぎゃあああああああああああああ!」

フィール

「ふ…良い仕事をした…。」

フィールはそう言うと、歩き出す。こちらもこの様な感じ。全員やると時間がなくなると思うので、K I Z U N A、R e f r a i n メンバーの方をすべて話そう。

＊

伊織

「ゼロお兄ちゃん、今度はコーヒーカップに乗ろうよ♪」
ユーリ

「駄目だよ。ねえ、ジェットコースターに行かない?お兄ちゃん。」

ゼロ

「まあ、落ち着け。順番に回ればいいだろう？」
フェイト

「ゼロ、すっかり伊織達の人気者だね。」

ゼロの様子を見て、フェイトは笑う。

冬矢

「そうだな。」

冬矢もそれを見ながら笑う。

なのは

「でも、大変そうだね。」

なのはは苦笑いする。

はやて

「ええやないか。ゼロ、楽しそうやで？」

はやてはゼロ達の様子を見て言う。

冬矢

「そうだけど、少し可哀想じゃないか？」
フェイト

「確かに冬矢の言う事も一理あるよね。ちょっと見てこようか？」

そう言うと、二人は立ち上がり、ゼロの元へと小走りする。

ゼロ

「お、冬矢か。」

冬矢

「大変そうだったから来たけど、どうしたんだ？」

ゼロ

「そのな？伊織とユーリで意見が分かれてるからさ。んで、順番に
って言ったら、今度はどっちが先？って事になって…。」

フェイト

「大体わかったよ。伊織がコーヒーカップでユーリがジェットコー
スターだね。」

伊織・ユーリ

「うん。」

冬矢

「なら、ジェットコースターにしよう。」

伊織

「冬矢さんがそう言うなら、私は良いけど…。」

冬矢

「伊織？あまり、ゼロを困らせないでやれよ？一応、この計画考
えたのもゼロなんだし。」

ゼロ

「冬矢。それはフォローなのか、貶しているのかはっきりさせてく
れ。」

冬矢

「フォローだ。で、解った？」

伊織

「はい。」

冬矢

「解ったならいいぞ♪行っておいで♪」

伊織

「うん♪お兄ちゃん、行こう？」

ゼロ

「おう。」

そして、ゼロはジェットコースターとコーヒークップに乗る。ジェットコースターに乗った後、疲れですこしだけ吐いたのは余談。

ゼロ

「さて、もう全部回ったな。時間もいい頃だし、行こうか。」

ゼロはそう言うと、立ち上がる。その時に、遊び疲れていたことは抱っこして行ったのも余談。

＊

観覧車。そこはカップルの人たちが必ず訪れる(?)場所。そんなところに、群がる集団が居て、そこに駆け寄る集団もまた居た。

涼

「遅いぞ!お前ら!」

ゼロ

「お前に言われることはなかったはずだが?まあ、良い。で、女性の皆さんはチョコは渡しました?」

女性陣一同

「まだです!」

ゼロ

「なら、ここで渡しちゃってください!」

ゼロがそう言うと、チョコを渡し始める女性陣。

はやて

「はい、これ。」

ゼロ

「む。俺にか？」

はやて

「駄目やった？」

ゼロ

「その逆だ♪とてもうれしい。ありがとう♪」

ゼロがそう言うのと、はやては恥じらいと笑みが混ざった様な表情をする。

フェイト・なのは

「じゃあ、私達からも。」

ゼロ

「うん。ありがとう♪」

涼

「なぜ貴様はそんなにもらって…」

ゼロ

「五月蠅い。」

涼

「グボベラ！」

ゼロ

「訳わかんねえこと言ってんじゃねえよ。」

千華

「で、どうしてここに集合なんです？」

ゼロ

「ここはな、実は恋が叶うと言われる観覧車なんだ。となれば、後は解るだろ？」

ゼロが恋がかなう観覧車。そう言った途端に一部の女性陣は反応する。

カコ

「それって、本当なんですね！本当に信じていいんですね！？」
ゼロ（声真似あり）

「信じるか、信じないかは、貴方次第。ってとこ♪」
のぞみ

「嘘だったら：覚悟は良いわね？」

ゼロ

「だとさ。涼？」

涼

「なぜここで俺に！？」

ゼロ

「涼がどっからでもかかってこいやぁ！！だとさ。」
のぞみ

「よし。涼！覚悟しと来なさいね！」

涼

「おい、これはどういう事だ…？ゼロ…。」

ゼロ

「鳳凰天○！！」

涼

「ぎゃあああああああああ！！」

フェイト

「テイ○ズ！？」

冬矢

「伏せ字が必要なツツコミはするな。」
ゼロ

「まあ、色々あるけども、乗りたい人と乗ってくれ。」

はやて

「なら、私はゼロと、子供たちで。」

なのは

「ずるゝい。私も行くよ。はやてちゃん。」
ゼロ

「まあ、良いけど。アルスでも連れてこればよかったかな？」
はやて

「駄目やよ。そうゆうこと言ったら。ほな、行こか？」

そう言うのと、はやてはゼロの手を引っ張りながら進む。

冬矢

「……行っちゃったな。あいつ等。」

フェイト

「そうだね。」

そう言いながら、フェイトは冬矢を見る。

冬矢

「俺等も行くか。」

フェイト

「うん♪」

冬矢がそう言うのと、二人は甘々モード全開で、観覧車へ向かった。

＊

カコ

「お兄ちゃん！一緒に乗ろう？」

セレナ

「駄目です！私が乗ります！」

未来

「落ち着け！お前ら！」

誰が未来と乗るかと言う事で口論している二人。

クレイ

「あいつ等はホントに変わらないな。」

ヴェル

「確かにそうだな。お、のぞみも混ざった。」

未来がかりの喧嘩を蚊帳の外で見るクレイとヴェル。全く持って他人事のように話す。ちなみに、今回はセレナとカコが未来と乗る事になった。

＊

昶

「さて、俺等も行くか。」

千華

「そうね。」

昶と千華も歩き出す。この時、先ほど千華はチョコレート昶にあげたのだが、顔面に思いつきぶつけて、昶の額にあざが有ったらしい。

＊

そして、観覧車が回り切り、もう7時。

ゼロ

「さて、良い思い出が作れた奴と、作れなかった方もいますでしょうが、これから旅館に向かいます♪事前に他の作者さんに連絡して、

カラオケの歌う曲は決定してあるので、逃げないで下さい♪」

ゼロはそう言うと、バスを呼ぶ。そう、バスス〜♪と言って。

ゼロ（声真似あり）

「バスス〜。て、俺は狩野か！狩野〇考なのか！？」

無視しまして。

ゼロ

「もういいや。」

ゼロ達はバスに乗り込み、本日泊まる予定のホテル・KIZUNAに到着した。

ゼロ

「小説便利だな！オイ！」

フェイト

「落ち着いて、落ち着いて。」

はやて

「そうや！むしろ、ここからが本番や！」
なのは

「そういうことだから。ね？」

ゼロ

「どんだけスロースターだよ！」
フィール

「落ち着いてください。ゼロさん。」

ゼロ

「まあいいけど。じゃあ、最後に一つだけ。このホテルは絶対に作者の陰謀だろうがあー！！」

ゼロは力の限りに叫んだ。その後、一部の方々から蹴りを貰った。その後、ゼロ等は部屋に向かった。

＊

ゼロ

「疲れたあゝ。」

冬矢

「お疲れ様。」

涼

「ゼロ！オメエは…」

昶・クレイ・ヴェル・未来

「ゼロを休ませろ。」

涼

「グボラ！」

昶達四人は涼を蹴り、涼は壁に頭を打つ。

フィール

「お風呂に行きましょう。そうすれば疲れが取れますよ？」

ゼロ

「あゝ。俺はクレイ達と一緒に仕込みしていた材料を調理しに行かなきゃいけないから。」

冬矢

「そうか。」

ヴェル

「そう言えばそうだったな。」

クレイ

「じゃあ、行くか。」

ゼロ

「OK。三分で終わらせるぞ。」

クレイ

「駄目だ。煮込むのとかが大変なのに、それを三分じゃあ……。」「
ゼロ

「属性体の力なめんなよ。煮込みだって、何だって、完全に煮込めるし、10秒あれば十分だ。」

ヴェル

「凄いな……。」「

ゼロ

「そんなこと言っていないで行くぞ。」

クレイ

「ゼロ、風呂道具も一応持っていけ。」

ゼロ

「了解した。行くぞ。フィール。ランサーで涼達の事頼んだぞ?」「
フィール

「了解です。」

その言葉を聞くと、ゼロ達は退場する。

未来

「じゃあ、行くか。」

冬矢

「そうだな。行こうか。」

ユーリ

「僕も忘れないでよね。」

昶

「もちろん忘れてないさ。行こう。」

ユーリ

「うん♪」

こうして、男性陣一同は温泉へ向かう。その頃、女性陣は：

＊

女性陣一同

「気持ちいい♪」

のぞみ

「そう言えば、みるからに似てるわよね。伊織ちゃんとはちゃんとリアちゃんは。」

カコ

「なのはさん達の子供なだけありますね。」
はやて

「うーん。やっぱり、カコちゃんかなあ…？でも、セラちゃんもよさそうやな…。」

なのは

「何一人で呟いてるの？はやてちゃん？」
はやて

「あのな……。」

なのは

「ふうん。って、それは…／＼／」

なのははそれを聞いた瞬間、顔を赤面にする。

フェイト

「どうしたの？二人とも。」

なのは

「あのね……。」

フェイト

「それは駄目だと思うよ…。カコちゃん達がお嫁に行けなくなっちゃうよ?／＼／」

フェイトも赤面する。

はやて

「この、やりたい様で出来ない…。この衝動を如何する物か!」

はやては手をワキワキさせながら言う。

伊織

「ねえ、ママ達は何で顔が赤いの?」
なのは

伊織

「伊織、人には聞いちゃいけない事が何個もあるから…。」

「なら、今がその聞いちゃいけない時?」
なのは

「そうだよ!」

なのはは伊織に説明する。その時、ことは来て、

ことは

「あのなあ、伊織ちゃん、実は……。」

伊織

「ふんふん。成程。私的にはどっちでもないと思うよ? キリュウさんの方が大……」
なのは

「そこから先は言っちゃダメ!」

とまあ、大人の事情でこの先はカットと言う奴で行かせてもらいま

す。一方、男性陣はと言うと…

＊

ゼロ

「やっと終わったあゝ。」

冬矢

「本当にお疲れ様。」

涼・エリオット

「さあ、人間爆弾じゃあー!!」

エリオットと涼はゼロの両腕両足を持ち、湯船に投げ込んだ。盛大な水飛沫が上がる。

フィール

「あれ？上がってこない……？」

クレイ・ヴェル

「こんの…ドアホども!!」

クレイとヴェルは涼とエリオットを蹴りで沈める。

涼・エリオット

「ぐはっ！」

水飛沫が上がる。その時、ゼロが浮かんできた。

未来

「大丈夫か!？」

ゼロ

「未来…それが俺を踏みつけていた奴の言うセリフか？」

未来

「え。」

ゼロ

「よし。お前には制裁が必要なみたいだ。蒼穹の弓。」

未来

「ちょっと待て!! そんなものここでぶっ放したら:。」

ゼロ

「問答無用! 水龍天誅!!」

未来

「うぎゃああああああああああああ!!」

と、賑やかにな感じで。その後、ゼロはカコらにボコられ、未来が理由を説明し、何とか生き延びた。

＊

場所は移って宴会場。

ゼロ

「えー。コホン。今日は皆さんお疲れでしょう。この宴会で、疲れを癒してください! それでは: 乾杯!」

一同

「乾杯!!」

涼

「お、このエビチリうまそうだ♪」

クレイ

「それはただのエビチリではない。」

涼

「辛ええええええええええええええええええええええ!!」
クレイ

「それは、辛みがギネスの1億と5000倍は通り越している、激唐エビチリだ。ちなみに、それは1週間は治らないという、ゼロの虐めシステム付きだ♪」

ヴェル

「クレイ。もう、あまりの辛さで気を失ってるぞ。」

クレイ

「……やりすぎたな。これをつっ込んで、それでこうしてっと。よし。兄貴。良いぞ。」

ヴェル

「食えやあああああああ!!」

涼

「うがあああああああ!!」

未来

「俺、最初に手付けなくて良かった…。」

フィール

「ところでゼロは？」

なのは

「ゼロ君なら、楽器の音合わせしてくるからって言って、幕の後ろに行ったよ?」

フェイト

「ちなみに、ゼロは楽器を一人で音合わせして、一人で複数の楽器を弾けるから、私とたまに合わせたりしてるんだよ♪」

フィール

「へえ……。って、もしかして、ピアノも!??」

はやて

「そうやよ? ピアノは後回しで良いかな? とか言ってたから、もうそろそろやないか?」

フィール

「僕、手伝ってきます!」

冬矢

「と言うより、なぜお前ら3人はドレス姿なんだ？」
なのは

「それは後のお楽しみと言う事で♪あ、のぞみちゃんと千華ちゃんもそうだよ?」

未来

「それは……司会という名目でか?」
フェイト

「そうだよ。あ、ゼロがそろそろやるからこっちに来てって念話が来たよ。」

はやて

「なら、行こか。」

なのは

「そうだね。じゃあね。」

3人はそう言うのと退場する。

＊

ゼロ

「ベースの方はOK:ギター、ドラム、もOK:後はグランドピアノとシンセライザーか?」

ゼロは一つ一つ感触を確かめながらチューニングを行う。

フィール

「ピアノは大丈夫ですよ。」

ゼロ

「お、ありがとうな。」

フィール

「いいいえ。それにしても凄いですね。ギター、ベース、ドラム、

おまけにシンセライザーの特注ですか？これ。」
ゼロ

「それは廃材使ったりして作った奴だけどき。売っているような奴とは比べ物にならないぞ？」

フェイト

「お待たせ。」

ゼロ

「ん。来たか。うし。じゃあ、始めるか。フィールは出ててくれ。それと、のぞみちゃん。」

のぞみ

「のぞみで良いわよ。」

ゼロ

「そうか。解った。じゃあ、お願いするね。」

のぞみ

「了解♪消すわよ。」

のぞみがスイッチを押した瞬間、宴会場の照明が消える。

＊

冬矢

「始まるみたいだな。」

照明が消え、冬矢が呟くと、ゼロが出てくる。

ゼロ

「はい、大変長らくお待たせいたしましたあゝ！親陸カラオケ会のスタートです！」

ゼロがそう言った瞬間、ファンファーレが流れて、フェイト達が出

てくる。

フェイト

「司会は、私フェイト・T・ハラオウンと！」

なのは

「高町なのはと！」

はやて

「八神はやてと！」

のぞみ

「Braveの相原のぞみと！」

千華

「CPの赤羽千華で！」

フェイト・なのは・はやて・のぞみ・千華

「お送りします♪」

そう言った瞬間、歓声が響く。

なのは

「さて、今回はこの抽選箱で歌う順番を選ばせて頂きます♪」

のぞみ

「もし、反抗した場合にはもれなく♪」

千華

「LV式サッパリコース、スツキリコース、さらにKIZUNA式
シットリコースを選んでもらいます♪」

一部の人からうげえ。と言う声が聞こえたが、あえて無視する司
会一同。

なのは

「それでは！今日演奏を担当するゼロ君、何か一言！」

ゼロ

「演奏は任せて下さい！って、何じゃこの無茶ブリは！！」
なのは

「はい♪ありがとうございます♪では、抽選して行きます…。え
い！」

フェイト

「まず、最初に出た人は！」

はやて

「CPの神藤昶君で！」

千華

「misonoの二人三脚です！」

昶

「初っ端からか。やってやる！」

ゼロ

「まあ、頑張れ。」

昶はマイクを持つ。

のぞみ

「それでは皆さん、準備の方はよろしいでしょうか！」

昶

「おう！」

千華

「それでは、始まりです！」

司会一同

「Drive…」

一同

「Ignition…！」

—少女歌唱中—

なのは

「ありがとうございます！1回目からいい曲を聞かせて貰いました！皆さん！昶さんに盛大な拍手を！！」

なのはがそう言うのと、皆が昶に拍手を送る。

千華

「さて、続いてはあ！はい！」
のぞみ

「風祭涼さんで『絶望先生』の強引 n i マイ Y e a h です！」

歓声を送られ、涼は舞台に立つ。

涼

「うっしやあ！行くぜえ！」

ゼロ

「お前は自爆してくれるとありがたい。」

ゼロがそう言った時、特徴的な前奏が始まる。

——青年、混沌中——

フェイト

「ありがとうございます！このカオスな空気にした涼君にブーイングを！」

フェイトがそう言った瞬間、辺りから涼にブーイングが飛ぶ。

涼

「うるせえ！」

ゼロ

「黙れ。ランサー。」

涼

「ぎゃあああああああ!!」

ゼロが放ったランサーで涼は退場した。

はやて

「続いては!とう!」

なのは

「レン・クロフィールさんで、『もう君以外愛せない』です!どうぞ!」

ゼロはそれを聞いた瞬間、ギター類を下げ、グランドピアノを設置。

フィール

「ありがとうございます。」

ゼロ

「別に良いって。その代わり、良い演奏を聞かせてくれよ?」

フィール

「解ってます。」

フィールがそう言うのと二人はハイタッチし、ゼロは舞台を降りた。

フィールはピアノの前に座り伴奏を弾き始める。この様子からして、フィールは弾き語りを行うようだ。

―青年弾き語る―

最後にフィールは鍵盤に指を置き、演奏を終える。その後、舞台が

明るくなり、歓声が飛ぶ。

フェイト

「良い演奏と、良い弾き語りをありがとうございましたあー！！この素晴らしい演奏をしてくれたレン・クロフィールさんに盛大な拍手をー！！」

フェイトがそう言うのと、皆は歓声を送る。

ゼロ

「お疲れ様。フィール♪」

ゼロは舞台上上がる際にフィールに声をかけ言う。

フィール

「いえ、まだまだですよ。」

ゼロ

「でも、結構良かったし。全然だよ。」

フィール

「そうですか。」

ゼロ

「自分に自信を持たないから不幸少年になるんだ。もっと自信を持て♪」

フィール

「はい♪」

フィールはそう言うのと、ゼロと腕を合わせ、舞台を降りる。その時、コールが鳴る。

千華

「おっとお！ここでブレイクタイムです！」
フェイト

「今回は演奏者であるゼロが歌う企画があります♪」
ゼロ

「聞いてないぞ！」
のぞみ

「とか言って、準備満タンじゃない。」

その時のゼロの恰好は白いバリアジャケットだった。

ゼロ

「まあな。さて、歌う曲は2／10発売のSaint Bible
の収録曲で…」
なのは

「Unchain∞worldです♪」
ゼロ（声真似あり）

「さあ、盛り上がっていき〜♪」
はやて

「うお！ホンマに水樹さんや！フェイトちゃんの中の人や！」
ゼロ（声真似あり）

「そう言うこと言わない♪さあ、始めるよ〜♪」

ゼロがそう言うのと、ギターによるハードな伴奏。それにベース、ドラム、シンセライザーがかぶさる。

―未来「俺かよッ！！」というものを入れつつ少年熱唱中―

のぞみ

「く〜っ！ありがとうございますあ〜！こんな熱い曲を送ってくれたゼロに感謝の拍手を〜！！」

その時、拍手と共に歓声が送られる。

フェイト

「さて、もう時間なのかな？」

なのは

「そうだね。さて、ブレイクタイムが終わったところで！」

千華・のぞみ

「後篇に続く！！」

一同

「なぜに！？」

二章打ち上げ会、2チヨコプレ上げ会！主に、温泉とか、遊園地とかに行っ

ご指摘等有ればいいのですが、そう言う訳にもいきませんね。え
えっと、歌の部分で訂正など有れば、メッセで送ってください♪

P S・・運営が眼をぎらぎらとさせているので、カラオケ部分は削除
させていただきます。ご了承ください。そして、ごめんなさいm（

）m

二章打ち上げ会、2チョコプレ上げ会！主に、温泉とか、遊園地とかに行っ

なのは

「さあ！後篇です！」

ゼロ

「さて、後編も頑張るか。」

はやて

「さて！次は……。Refrainの子供たちとフェイトちゃんです！」

フェイト

「え！？はやて！？」

はやて

「フェイトちゃん、これは気にしたら負けや。ETERNAL B LAZEです！」

フェイト

「うう。ゼロお。」

ゼロ

「諦めろ。フェイト。」

フェイト

「私の味方はいないのお？」

ゼロ

「いや居るんだけど、反抗したら拷問が待ち受けているから。」

フェイト

「いじわる。」

ゼロ

「やめろ。その眼で見るな。俺が悪いみたいじゃねえか。」

フェイト

「だって、悪いんだもん。」

ゼロ

「解ったから！泣かないでくれ！頼むから！レンが怖いから！」
フィール

「呼びました？」

ゼロ

「フィール君じゃない方のレンだ！」

フィール

「そうですか。」

フェイト

「ううう。」

その間にもフェイトは涙目十上目遣いゼロを見る。

ゼロ

「わかったから。俺も歌うから。だからやめてくれ。その眼を。」

フェイト

「うん。」

そう言うのと、インカムとサングラスをつけて、立ち、ギターを持ちマイクの前に行く。その時にランサーを2つほどだし、ヴァイオリンの形に変形させる。

ゼロ（声真似あり）

「うん、バッチリ♪さあ、行くよ〜♪」

フェイト

「ここでも声真似なんだね。」

ゼロ（声真似あり）

「そう言う事♪」

—演奏終了—

千華

「ありがとうございます！リリなの王道を歌ってくれた6人に拍手を〜！」

そして、6人に拍手が送られる。

ゼロ

「あゝ。喉渴いた。声帯模写なんて2回連続で使うもんじゃないな。」

ゼロはシンセライザーの前に戻りながら、ポケットに入っていた、水分補給用のカプセルを二錠飲んだ。

のぞみ

「さて、次は…ん？千華ちゃんだ。」

千華

「私？」

はやて

「本当や。BOAの『まもりたい』。」

千華

「わかった。ゼロ、お願いね？」

ゼロ

「解ってまさあ。疲れるけど、KDGとして全力でサポートさせて貰いまっせえ！」

フェイト

「それでは！お願いします！」

――曲が終わる――

千華

「ふう。つて、なにこれ!?!」
ゼロ

「俺のちょっとした演出だ。綺麗な歌とその姫をもっと綺麗にしようと思っただけ? 昶も見とれてたぞ?」

千華

「え!?!」

昶

「ちょ…何言ってるんだよ!」

千華

「このアホオオオオ!!」

昶

「なぜにいいいい…。」

千華が放った砲撃により、昶は吹き飛ばす。

ゼロ

「千華、楽しそうだな。」

フェイト

「と言うより、嬉しそうだよ?」

ゼロ

「昶に喜ばれたのが嬉しかったんだろうな。でも、当の本人は…。」
はやて

「そうやな。どっちかがアタックするまでや。」

ゼロ

「だな。」

のぞみ

「え…。退場してしまいましたが…。次々行ってみましょう!!」

あまり歌わせると、字数と作者の精神力がやばい事になるので、歌った人、歌った曲、評価で行きます。

エリオット／Action-zero：自らの能力を使い、蜃気楼で分身を作り、二人になって歌った。事後処理で解った事なのだが、実はフィールが後ろで歌っていたとか。

未来／LIGHT IN YOUR HEART『V6』：V6ならではのテンポにうまく合わせて、ノリノリに未来は歌いきる。なかなかの曲。なぜかソニックに合わさる気がする。

カコ／時を刻む唄『Lia』：なかなかの美声で歌い上げた。歌い終わった後に未来に抱きついていていた。その顔はとても幸せそうだった。

のぞみ／赤く熱い鼓動『愛内里菜』：のぞみらしい選曲。なかなかのカッコイイsong。ウルトラマンの曲も見直してしまった作者だった。

ヴェル／英雄『doa』：これは作者も知っている名song。ニコ動で見ると弾幕が凄い凄い。会場がヒートした曲でもある。

クレイ／青い果実『doa』：ヴェルに負けず劣らず、とても男前に歌いきる。この時、会場がオーバーヒートしそうになったが、何とか乗り切る。

キリユウ／星のように『MISIA』：キリユウらしい一曲。落ちていた歌がヒートアップしていた会場を冷やしたので、良かったと言えばよかったのだが。

サラ／Little Busters！『Rita』：元気な彼女にピッタリな曲。やっぱり、エロゲの曲は曲の無駄遣いだと思う。

ニコ動で思う。うん。

セラ／消えないで：『yozuka*』：性格は曲に出る。そう思う今この時。この時、演出をゼロが色濃くし、歓声が上がっていた。セラ／彼方の面影『KIYO』：静かな曲で、テンションを普通に戻すつもりが、ゼロの演出でさらにヒートアップしてしまったと言う。

ゼロ／pray『水樹奈々』：実はゼロは一曲歌う事になっていて、歌った。その声はやはり本物顔負けの声で、会場をヒートアップさせた。

のぞみ

「さて、曲の殆どが終わりました！」

フェイト

「激しくウルト○マンの曲が多かったけどね。」

なのは

「そこは、気にしない方がいいよ。」

はやて

「そうや。もうちょっと頑張ってたな。」

フェイト

「え？」

千華

「最後の一曲はやっぱり、この曲！」

千華がそう言うと、スクリーンが現れ、ゼロ&mp、フェイト、『鐘を鳴らして』と書かれていた。

ゼロ

「つて、おい。」

フェイト

「そうだよ！ ああいうこと言ったけど本当にやるのは恥ずかしいんだよ！？」

ゼロ

「諦めよう。後で冬矢に泣きつけ。」

フェイト

「そうする。」

ゼロ

「うし。じゃあ、始めよう。」

ゼロがそう言うと、辺理の照明が落ち、シンセライザーの前に座るゼロとマイクの前にフェイトがドレス姿になって立っている。

フェイト

「これ、いままで私の趣味で歌ってたけど、大丈夫かな？」

ゼロ

「大丈夫。行き詰ったら、俺がフォローする。」

フェイト

「じゃあ、頼むよ。」

ゼロ

「OK♪」

歌は終了。その時、今日一番の大きな歓声が起こる。

フェイトがゼロの方を向く。それに気付いたゼロはウィンクして返し、フェイトはそれに笑う。

千華

「ありがとうございましたあー！！！」

ゼロ

「随分highだな。」
のぞみ

「当たり前よ。なのはの曲でなくてもこんなにクオリティが高いのはいないもの。」

なのは

「なんか納得いかないけど…。」

はやて

「冬矢さんとセッションしなかったのがなあ。」

ゼロ

「じゃあ、これ企画したのは誰なんだよ。」

司会一同

「作者。」

ゼロ

「こん畜生!!」

フェイト

「まあ、そう言うことだってあるよ。」

なのは

「さて、これで親睦カラオケ会は終わりです! 皆さん、お酒とか飲んで騒いで下さい!」

ゼロ

「おい。お酒はさすがに…」

酔っ払い組み

《イエーイ♪》

ゼロ

「こうなる訳だ。事後処理担当するのは俺なんだから、考えてくれ。」

なのは

「ごめん…。」

ゼロ

「謝るな。俺はどうなってもこうなる訳だから。」

ヴェル

「でもこうしてお酒が飲めることで幸せじゃないか。」
ゼロ

「……おい。なのは。お酒、何出した？」

なのは

「え？鬼神って奴を…。」

ゼロ

「だあああああああああ！！それは、俺が薬品開発用に置いておいた超度数が高い奴なのに！！！」

なのは

「ええええええ！？そうだったの！？」

ゼロ

「てか、名前から、解るだろ！」

フェイト

「じゃあ、どうなるの！？」

ゼロ

「知らん！」

はやて

「何とかせえ！」

ゼロ

「無茶ブリすんな！！」

ヴェル

「本当に高いな、これ。」

ゼロ

「ヴェル。飲みすぎたのど壊すなよ？」

ヴェル

「解ってる。」

のぞみ

「そ〜らを自由に♪と〜びた〜いか〜♪」

涼

「ここでまさかのヒトコプター!?!」
のぞみ

「飛んで行きなさい!」

涼

「うぎゃああああああああ!」

未来

「カコ…綺麗だよ…」

カコ

「お兄ちゃん…」

ゼロ

「これは良いな。写真取っところ」

フェイト

「何で？」

ゼロ

「これをカコちゃんに渡せば喜ぶし、他の奴らに渡せば、フルボツ
コ間違いなしだし」

はやて

「未来君、ご愁傷様。死亡フラグが5本くらいあったで？」

セレナ

「私は、小さいころに未来様に、抱きついたり、一緒に寝ていたの
で、そんなに嬉しくはないですよ？」

ゼロ

「……。ごめん、もう一回言って？」

セレナ

「だから、私は小さいころに未来様に抱きついたり、一緒に寝てい
たので、そんなに嬉しくはないですよ？」

ゼロ

「よし。録音完了。ヴェル。」

ヴェル

「？」

ゼロ

「これ渡しとくから、皆が正氣に戻ったら、渡してくれ。」
サラ

「あははははは!!」

涼

「ふべら!」

ゼロ

「のぞみとサラは殴る蹴るが激しいみたいだな。」

ルナ

「ゼロさん、マスターを止めて下さい:／／／」

ゼロ

「ごめん♪無理♪」

ルナ

「爽やかな笑顔で言わないで下さい!」

ゼロ

「こればかりはしょうがない♪」

セラ

「未来さんがいなくなってから私は、どれだけさびしかったか:。」

ゼロ

「セラちゃんは泣き上戸だ。あ、未来が抱きしめた。これも写真写

真。」

なのは

「にやはは:。仔の荒れようは:。」

フェイト

「何とも言い難い:。。。」

はやて

「お、キリユウちゃんが寝とるで?」

ヴェル

「アイツは極端にお酒が弱いんだ。誰かにのまされたんだろう。」

ゼロ

「：みたいだな。あ、エリオットが近づいてる！ヴェル！！」
ヴェル

「応！！」

ゼロ・ヴェル

「アストラル・バンカー！！」

なのは

「投げつけた！？」

エリオット

「ごばあ！！」

ゼロ・ヴェル

「この変態野郎がああああ！！」

エリオット

「がはら！！」

ゼロ

「ランサー！！」

ヴェル

「超重斬！！」

フェイト

「グ○ディオーン！？」

冬矢

「そういう物を出すな。全く。」

エリオット

「ぎゃあああああああああ！！」

ゼロ

「星塵○破！！」

ヴェル

「絶破雷刃○！！」

エリオット

「うごおおおおおおお！！」

フィール・ゼロ・ヴェル

「守りたい世界が有るんだアアアアア！」

そして、伊織は走り去る。

なのは

「ゼロ君…。何渡すつ…」

ゼロ

「さあて、俺も行かないとな。後は頼んだぜ。」

ゼロはそう言うと、逃げる様にその場を走り去ってしまった。

＊

場は変わってロビー。

ゼロ

「何とか逃げれたけど、ばれないか激しく不安だ。これもそうだけど。」

伊織

「ゼロお兄ちゃん！」

呼ばれて、視線の先には小走りで来る伊織達が居た。

ゼロ

「お、来たか。」

ゼロはそう言うと、屈む。

伊織

「お兄ちゃん。」

ゼロ

「解ってる♪はい♪」

ゼロはそう言い、小包を渡す。

伊織

「ありがとう♪」

ゼロ

「どういたしまして♪それとさ。なのは達には内緒な。」
ことは

「何でや？お母さんは知っとったよ？」

ゼロ

「あれは無理やり吐かせられたんだ。特になのはには内緒で。」
リア

「ママに言っても大丈夫なの？」

ゼロ

「なるべく止めて欲しいな。で、他に何かある？」

ゼロがそう聞くと、子供達は首を横に振る。

ゼロ

「よし♪じゃあ、行っておいで♪」

ゼロは笑顔でそう言う。そうすると子供達は小走りで駆けて行った。

ゼロ

「さて、俺も戻るか。」

ゼロは転送魔法を使い、戻って行った。

＊

ゼロ

「うわあゝ。皆寝てるや。」

フェイト

「起きてるのは私達だけだね。」

ヴェル

「そうだな。手伝うぞ。」

ゼロ

「いや、俺は転送魔法を使うから、良いよ。テンペスト。起きてる？」

バルディッシュ・テンペスト

〈はい。〉

ゼロ

「サポートして。」

バルディッシュ・Tテンペスト

「了解。」

ゼロ

「転送魔法陣展開。体勢もその時に楽な物にしよう。」

バルディッシュ・T

「了解。」

ゼロ

「各部屋に…転送！」

そして、転送される。もちろん、フェイト達も。その後ゼロは片付けを済ませる。

ゼロ

「さて、訓練にでも行きますか。」

ゼロはそう呟き、人気のないところへと転移した。

＊

ゼロ

「…壹拾貳芒星、絶対勝利の剣錬成。」
エクスカリバー

ゼロは十二芒星を描き、剣を召喚する。Fateのセイ〇ーの物とは違い、魔力刃で刃を作るタイプで、柄だけがゼロの手に握られていた。

ゼロ

「炎・風・鋼・輝・水・地・闇・氷・重・光・暗…。」

バルディッシュ・T

〈Set on.〉

ゼロ

「集え、力よ。」

ゼロがそう呟くと、魔力刃が精製され、空色の魔力が集束し始める。その時に足、腕、頬…それらの部位が切れる。

ゼロ

「まだだ。もっと…もっと強固な物にしなければ…。」

ゼロがそう呟くと、魔力刃に集まる光が虹色になり、集束する。

ゼロ

「嵐・獣破轟衝斬！」

ゼロはそう言い、エクスカリバーを居合で振り抜く。振り抜いた方向には暴風が発生し、木を斬り付けた。

ゼロ

「アイツ、話したのか。知られなくなかったのに。よりによって面倒な奴ばかり。」

冬矢

「面倒と言うな。面倒と。フェイト達も心配してるし、お前も戻れ。」

ゼロ

「冬矢がそう言うならしょうがないな。絶対勝利の剣分解。」
エクスカリバー

ゼロがそう言うのと、剣が粒子化し、消える。

冬矢

「無理するなよ。ゼロ。」

ゼロ

「はあ。翔といい、冬矢といい、何で心配性な奴が俺の周りには集まるかなあ。」

冬矢

「お前が無茶しすぎなんだろ。夜に秘密奥義の練習するってどんなんだよ。」

ゼロ

「確かにな。けど、これが俺だから。さあ、行こう。」

冬矢

「そうだな。それと、なのはにバレてるぞ。」

ゼロ

「やっぱもうちょい…。」

冬矢

「そう言うと思ったから、はやてからこのような物を。」

冬矢ははやてからもらったらしい、スク水メイド姿のゼロの写真を
見せる。

ゼロ

「それ、どうするつもりだ？」

冬矢

「ネットに流すって。」

ゼロ

「……。もう、腹を括ろう。」

冬矢

「そうした方がいいぞ？ てか、SRB食らっても大丈夫じゃなかったっけ？」

ゼロ

「痛覚カットするのが面倒なんだよ。行こう。」

冬矢

「ああ。」

そして、その後、向かっていくと、なのはとフェイトとはやてがすでに準備した状態で立っていて、逝きそうになりましたとさ♪

＊

ゼロ

「さて、最終日です♪」
のぞみ

「あれ？ 昨日、2泊3日って言ってなかったっけ？」

ゼロ

「あ？ 嘘に決まってるだろ。」

涼

「この野郎！」

ゼロ

「ランサー♪、フェイト、パス♪」

ゼロ

「あ。いっけねえ。これも小包として、転送っと。」

一瞬――

ゼロ

「あゝ。終わった♪」

一応聞こう。何処に送った？

ゼロ

「ん？俺の部屋にある、お宝保存庫…って、あ！」

言わんこっちゃないな。じゃあ、作者の力使うか？

ゼロ

「それは面白くないから。そろそろ時間だよな？」

そうだな。改めて、キャラ召喚を許可してくれた、naonaoさん、九淨さん、mebiusさん、クロックさん…ありがとうございました♪次回から、本編に戻ります♪ではでは♪

ゼロ

「って、こら。Drive ignition! だろうが。」

いけねえ。じゃあ、ゼロ、宜しくう♪

ゼロ

「はあ。しょうがない。明日の大空へ! Drive ignition

on
L

二章打ち上げ会、2チョコプレ上げ会！主に、温泉とか、遊園地とかに行っ

改めまして、キャラ召喚していただいた、naonaoさん、九淨さん、mebiusさん、クロックさん、ありがとうございます♪
♪だいぶ省いてしまいました、すみませんでした！と言う訳で、他の読者さんに。次回もお楽しみに♪

PS..

運営が眼をぎらぎらと光らせているので、カラオケ部分を削除させてもらいました。申し訳ありませんm(_ _)m

第2話 仲間がいて、自分がいて、それが僕等の生き方。誰にも邪魔できるもの

「ふぁ。昨日は色々あったな。」

金色の髪と翡翠の瞳を持つ男はそう言って、屈伸をする。

「さて、訓練場にでも行きますか。」

「おはようございます。マスター、ゼロ。」

男：ゼロがそう呟いた瞬間に聞きなれた機械音が聞こえ、そちらの方を向き、言う。

「起こしたか？テンペスト。」

テンペストと呼ばれた機械音を持つペンダントは応える。

「貴方が欠伸をした時から起きてましたよ。」

「そうか。なら行こう。」

「はい。」

ゼロはテンペストを持ち、部屋を出る。部屋の前にははやてが居た。

「どうしました？隊長殿。」

「アンタはそう言うキャラちゃうやろ。これから、聖王教会へ行くんやけど、ゼロ君も来てや。」

「訓練に行こうと思ってたんですが、今からですか？」

「敬語はむず痒いからやめて。それと、訓練終わった後からでええで。」

ゼロはその言葉を聞くと、「了解。」と言い、訓練場に歩き出した。

＊

「テンペスト。」

〈解ってます。マスター。〉

ゼロはテンペストを呼び、剣を精製する。そして、息を吸い…

「裂・獣波！」

ゼロがそう言い、剣を居合の構えから振り抜くと、輪を描くように暴風が発生し、辺りの草を逆立てた。

「うし。今日も快調だな。」

〈そうですね。〉

ゼロはそう呟くと、もう一度構え、

「そう言えば、はやては何で俺を呼ぶんだ？」

そう近くにいたはやてに聞く。

「いや、昨日カリムから連絡が有ってなあ。それで…」

「成程な。それで俺を呼びましたと。未来でも変わったのか？」

ゼロがはやての言葉をさえぎり、言う。

するとはやては「わからへん。」と言い、俯く。

ゼロははやての言葉に「そうか。」と返し、テンペストを持ち直し、待機形態にして、はやての傍による。

「どうしたんや？」

「いや、未来が変わったのなら、俺が戻る方法も掴めるかもしれないし、速く行こうと思って。」

「そう♪なら、行くで♪」

はやてはゼロの言葉を聞くと、彼の手を取り、走り出した。

「そう言えば、ゼロ君は車の運転は？」

「出来るけど？」

「なら、ワゴンで行った方が速いな。」

「ワゴンより、これをお勧めする。」

ゼロはそう言うと、ポケットから出したボックスを地面に投げつける。

そうすると、形が変形し、俗に言う、ポルシェの様な形になった。それにはやては咄然とする。

「何してるんだよ。行くぞ。」

「あ、ああ。せやな。」

そう言い、ゼロとはやては乗り込み、ゼロはキーを入れ、コンソールを操作し、さらに変形させていく。俗に言う。オートボットと言う奴。

「ちょ…何これ！」

「ちゃんと捕まってるよ！」

そう言うと、機体の後ろから魔力光が出るウイングを展開。羽ばたき、上空3万メートル付近まで一瞬で上昇した。

「訳解らへん！なんやこれ！？」

「オートボットだが？」

「これが普通。みたく言うなや！禿げるで！」

「こんなんで禿げたら、俺はとうの昔に禿げとるわ！」

「禿のあんたなんか見とうない！」

「聞いてないのか！お前は！」

「何でこんなに高いところ来てんねん！」

「お前はあれか！？高所恐怖症か！？」

「そうやねん！私も乙女なんやから、丁重に扱え！」

「命令系かよ！でも大丈夫だ。ホントに安全飛行で行くから。」

そんなやり取りをしている間に、聖王教会の上空付近に着く。

「お、着いた。急降下するから、捕まってるよ？」

「お、おう。解った！」

はやてはそう言うと、ゼロの腕を掴む。

「ふざけてんのか？」

「何がや！私は何時だって本気や！」

「…まあいいや。ポチッとな♪」

ゼロは近くに有った、形態、ポルシェ。と書かれたボタンを押す。すると、ポルシェの形態になり、ゼロ達は降下して行く。いや、

「落ち取るうううううウウウウウウウウウウウウ！！」

そう言った方が正しいか。

「はやて。お前はいちいち叫ばなきゃ気が済まんのか？」
「落ち取ったら叫ぶって!!」

そうこうしている内に着陸した。

「はぁ。もうやらないから、俺の腕を掴んで震えるのを止めてくれ。」

「だ、だってな！」

「行こう。これもしまわなくちゃいけないし。」

「そう言うならええけど…。」

そして、二人は車を降り、車(?)をしまい、聖王教会へと向かい、途中で引っかかりつつも、騎士カリムの元へと行った。

＊

「カリム、元気やったか？」

はやては、椅子に座っている金髪の女性に話しかける。

「ええ。はやて。で、そちらが？」

カリムははやてに聞く。

「そうや。ゼロ・S・アームストロング。自称並行世界から来た人物や。」

はやては答える。

「自称じゃないって何回言ったらわかるんだ。お前は。」

ゼロははやてに突っ込む。

「しょうがないやろ。」

「しょうがない！」

「まあ、二人とも落ち着いて。」

漫才をやっている二人をカリムは諫める。そして、二人は席に座る。

「で、どうしたんや？」

はやては聞く。

「実は、昨日、発動したんですよ。」

カリムがそう言う。はやてはそれに驚いた表情を見せ、カリムに聞く。帰ってきた答えは…

「はい。」

だった。その時、ゼロが口を開く。

「見せてもらっても良いか？」

「なぜです？この言語は私にしか…。」

「俺なら読める。昔、誰かに習ったんだ。誰かは忘れたけど。」

ゼロがそう言うのと、カリムは驚いた表情をする。そして、ゼロがもう一度聞くと、カリムは了承してくれた。

「……成程な。多分、俺の事だな。これ。」

「何ですか？」

「不死鳥の翼は俺の不死鳥systemの事。白き迅い翼はEWS system、運命を決めるものってのは、俺のこれだろうな。」

ゼロはそう言いながら、手にはめていたグローブを外し、テーブルの上に置く。

「で、続き行くぞ？森羅万象を味方に着けるってのは、俺の属性体の力だろう。で、ここまでで、俺のことは確かになる訳だ。で、次が、『“神帝”の名を持つ王は影を従え、ここに来たる。』…多分、近いうちに事件が起こるんだろうな。で、この影ってのが良く解らんのだよな。何か知っているのか？」

ゼロはグローブをつけながら聞く。

「影っちゅうと、あの一件で起きたシャドウやないか？」

「そうか。王だしあり得るかもな。で、次の一文が『英雄は王を殺すまで、運命の連鎖は止まらない。英雄が誰かを失う事でそこは無いに還る。』」

「それは、誰一人として、欠けさせてはいけへんという事か？」

「そう言う事だな。無に還るってのは俺の暴走の事だろう。次の一文で『英雄が狂いし時、人は彼を殺すだろう』ってあるし。…？」

ゼロは読んでいる途中で目を止める。

「どうしたんや？」

はやては聞く。

「いや、この文様が俺の使う魔法陣に似ていてな…。」

ゼロはそう言い、テーブルの上に置き、指を置く。

「五芒星ですか？」

カリムがそれを見て言う。

「ああ。来たれ…。」

ゼロがそう言い、五芒星をなぞる。すると、書かれていた五芒星が光り、部屋を光が包み込む。

…数瞬後、光が晴れ、紙に新たな文字が刻まれていた。一番最初にはやてが覗きこむ。

「何の文字や？これ。」

「さあ？」

はやてが疑問符を浮かべ、カリムのそれに続き、疑問符を浮かべる。

「ん？読めないのか？」

ゼロはそう聞くと、次に覗き込む。そこに浮かばれていた文字は、古代ベルカのもっと前の言語。

「なるほどなあ。これじゃあ読めない訳だ♪」

ゼロはふざけ半分で言う。そして、残りの二人はゼロを可愛く睨む。

「わかったよ。ええつと…。む。成程。」

「成程って事は読めたんやな？」

はやては睨みながらも聞く。

「読めるさ。本文読むのが面倒だから、意味だけ。俺と神帝って奴があと2カ月の何時かに決戦が起こるって。」

「端折りましたね。」

ゼロの答えに言い分をつけるカリム。

「端折ったけど、まアこんなところだ。魔法陣はないし、これで終わりだろ。」

ゼロはカリムとはやてにそう言うのと、二人は納得した。

「なら、それまでに訓練する必要があるな。」

はやては言う。それにゼロは肯定し、カリムも頷く。

「そうと決まれば、帰って模擬戦だな。」

ゼロは立ち上がり、そう言う。はやてはそれに肯定し、カリムに一言いい、出て行った。

＊

「…さて、フォワード十二人も集まったところで、実力確認の模擬戦でもしますか。」

ゼロはそう屈伸しながら言う。

「あの、一ついいですか？」

赤髪の少年、エリオは聞く。

「こっちのエリオはでかいな。どうした？」

「今更ですね。まあ、いいや。模擬戦って、ゼロさん一人で相手するんですか？」

「そうだけど？まあ、多少は加減するけどね。」

「加減って、どのくらいだ？」

昶は聞く。

「まあ、50%位？その二人はユニゾンありでも良いぞ？」

ゼロは昶とエリオを見ながら言う。そんなゼロに二人は苦笑いする。

『いいのかよ。俺等を戦闘に出して。』

「いいぜ。エリオの英霊さんよ。用が済んだのなら、暴れるぞ？」

ゼロはそう言うと言、手首、足首、股関節：あらゆる所の調整を行い、テンペストを起動。白のバリアジャケットを纏う。他の皆もデバイスを起動させ、バリアジャケットを纏う。

やっぱり、いつの時代、世界でも皆は変わらないな。何時でも暖かい。ゼロはそう思いながら構え、

《Ready, , 》

その掛け声でゼロ以外の他の皆は構え、足に力を込める。

《GO!!》

そして、駆けだした。

場所は移り、元の世界の病院。

「く…。」

呻き声をあげながら、起き上がる男。その眼は黒色、髪は黒色だが、少しかだけ紫に近い感じで、ロングヘア。男は自身の武器がない事に気づき、ベッドを下りる。

「何処だ…？俺の父さんの形見は…。」

そして、ふらつく足元をカバーする様に壁を伝いながら、歩き始める。と、その時、扉が開き、青髪の、その男と身長が同じくらいの女性が入って来た。手には男の持つべき武器が握られていた。

「！！」

男はその武器を見た瞬間、駆け出し、持っていた女性を突き飛ばし取った。形は長剣。そして、その女性は起き上がり、その男を睨む。

「ちょっと！いきなりそれはないんじゃないの！？」

「…すみません。って、俺と同じ年くらいじゃねえか。」

男はその女性を見ると、興味がなさそうに視線を変える。

「同じくらいって…。と言うか、貴方は何て名前なの？」

「：言う義理も、義務もないな。行かせてもらう。」
「ちょ：待ってよ！私は、スバル・ナカジマ！」

その名を聞いた瞬間、男は足を止めるが、また進めた。

「名前くらい教えてよ！私だって教えたんだし！」

「お前：」

「ス・バ・ル！！」

お前と言われた事が気に食わなかったのか、スバルは強調して言う。

「：スバル。お前、しつこい。」

「な：。初対面の相手にそれはないでしょ！！」

「ああ！悪かったさ！どの道俺が悪い事になるんだろうが！」

「そうだよ！解ったらさっさと名前を教えて！」

「どうしたらそう言う流れになるんだよ！」

男は突っ込みつつ、足を進めようとする。すると、男の体が拘束される。

「もう一回言うよ？名前を教えて？」

「嫌だと言ったら？」

「ん？こういうもので吐くまで殴らせて貰うよ♪」

スバルはそう言うのと、マッハキャリバーを起動させ、拳を作る。

「：解った。俺はエミル。エミル・ローウエル。」

「エミルかぁ。いい名前だね♪」

男：エミルは素直に言った。いや、吐かせられた。

「放っとけ。それより放せよ、これ。」

「嫌だよ♪」

「なんでだよ。」

「エミル、さっき私をどついたよね？」

エミルは背中に嫌な汗が流れるのを感じながら、続ける。

「そうだ。」

「だよね♪だったら、それ相応の罰を受けなくっちゃ♪」

スバルは笑顔で言う。それは顔だけで、眼は座っていた。エミルはそんな目に冷や汗をさらに増やす。

「待て！俺の武器を取ったお前等も悪いじゃねえか！」

「そうかな？」

「そうに決まってるだろ！」

エミルはそう後ずさりしながら言う。それにスバルはその倍の値だけ近づく。

「でも、どつくことはないよね？」

「……。」

「潔く認めてくれたところで、お話しよっか♪」

「せめて一発で納めてくれないか？」

「しょうがないな。マッハキャリバー？」

「all right♪」

次の瞬間、マッハキャリバーから空葉莢らしきものが出され、ナツクル部分が回転する。

「え？何？今の？」

「リボルバー…シュート!!」

一撃! — 轟! —

次の瞬間、エミルはリボルバーナックルを受け、その衝撃で外まで吹き飛ぶ。

そして、拘束が外れたことを確認したエミルは勢いを利用し、宙返りし、着地する。と、その時、結界が張られた。

「?、何だ、この感じ…。」

エミルはそう言うのと、長剣を鞘から抜く。否、鞘を投げ捨てた。

その時、斬撃がエミルを襲う。

エミルは咄嗟に反応し、体を捻り、長剣を地面に突き刺し、脱出する。

「何だこいつ!」

エミルはそう言い放ち、剣を振るう。すると、無機質の機械の体を持つ物体が両断され、爆発する。それを確認した後、飛び、離れた。そして、辺りを見渡すと、同じような機械が複数いたのが解る。

「どうやら、俺はとんでもないところに来ちゃったみたいだな。」

エミルはそう言うのと、長剣を構える。と、その時。

へやっとやる気になりましたか。我がマスター。✓

と、長剣から声がした。その時、エミルは驚き、剣を落としそうになったが、何とか持ち直す。

「何で剣が喋ってんだよ！」

「落ち着いてください。私はインテリジェントデバイスと呼ばれる種類です。」

「落ち着けるか！こんな状況で！」

「まあ、これで落ち着いてたら、私も驚きです。で、私に名前をつけて下さい。」

「なんでだよ！」

「私に正式な名前がないからです。速く付けないと串刺しになりますよ？」

「何気に怖いな！ちょっと待てよ……。ええっと……。」

エミルは剣を振るい、機械による攻撃をかわしながら、考える。そして、閃いたように眼を見開く。

ナイト・ヴェスペリア

「凛々しい騎士で、どうだ？」

「良い名前ですね。マスターエミル。」

「俺はそんな柄じゃねえ。で、どうすればいい。ヴェスペリア。」

「自分を守る服、自分が使う剣をイメージして下さい。」

「解った。服…剣…。」

エミルはそう言い、眼を閉じる。そして、イメージがまとまり、眼を見開く。

「ヴェスペリア！」

「standby ready！」

「セットアップ！」

エミルがそう叫ぶと、辺りが白に包まれ、白が晴れた時、居たのは胸が少しだけ開いた漆黒の服。手に握られしは日本刀。そんな容姿のエミルだった。

「うお！ 本当になったな！」

へばやばやしている場合ではありませんよ。▽

「っと。そうだったな。行くぜ！」

そう言うと、エミルは腰だめに剣を構える。そして、居合に引き抜く。

「星影！」

一斬！ 一

その引き抜いた剣劇の奔流は機械を巻き込み、一気に蹴散らした。

「へえ。結構強いんだな、これ。」

「ホント、アンタが名も知らない世界でここまでやるとはねえ。」

「ホントホント…って、何でお前がここに！？」

「いや。アンタの後追ってきたら、ここまで来ていたとはねえ。さて、解ってるわよね？ エミル？」

エミルは茶髪で赤い服を着ていて、ゴーグルが頭に着いている女性に背を向け、全速力で駆けだした。

「エミル？ アンタ、私が遠距離なの忘れてない？」

女性はそう言うと、幾何学模様の魔法陣を展開し、紫電を右手に纏う。

「さっさと…逝け!!」

女性はそう言うと、エミルに雷を放った。

「って、おいしいいい!!」

エミルはそう叫び、吹き飛んだ。

「さて、あの変なスーツとはオサラバできたし、変態博士も居ないし♪エミルは吹っ飛ばせたし♪いや〜。快適っと♪」

「それが人を吹き飛ばして置いて言うセリフか!？」

「あ、もう復活したんだ♪もっと威力上げて実験、実験♪」

「実験すんな!てか、どうやってここに来たんだよ。」

「インディグネイション♪」

「って、あぶねえ!」

「ちっ!もうちょっとで当たったのに!」

「何で奥義を出すんだ!リタ!」

「あ、やっと名前で呼んだ。てか、今のは私を馬鹿にした罰だ♪エミル♪」

リタと呼ばれた女性は魔法陣を展開しながら笑顔で言う。その時、後ろから

「あの〜。」

「ん?」

リタはその声に反応し、そちらを向く。そこに居たのはスバルだった。

「おお。アンタは青い犬ところ！じゃなくて、ええっと……。」

「スバルです。」

「おお！そうだった！スバルだ！」

リタははっちゃけた調子で話す。それにエミルは呆れ、言う。

「お前は人の名前もろくに覚えられネエのか。」

「しょうがないでしょ！」

「しょうがない。ったく。」

「まあまあ、二人とも落ち着いて。ね？」

スバルはそんな2人を諫める。その時、アリシア達がこちらに来た。

「やっと着いた。けど、何？このガジェットのあり様？」

アリシアは着いた途端にそう言う。

「あ？終わってんじゃないか。どういう事だ？」

次に神無が言葉を繋ぐ。

「とりあえず、その二人がこいつ等を駆除してくれたってところか？」

侑斗がガジェットのパーツを蹴りとばし、言う。

「ゼロが居ないから、頑張ろうって思ったら、今度はその二人が駆除してくれたのかな？…て、昨日海岸で倒れてた子と戦闘機人で、ゼロと戦ってた子じゃないの？あの二人。」

桜が視線を色々通わせながら言う。それにアリシア達も確認して、二人に詰め寄る。

「あの、お二人の名前は？」

セレナが聞く。

「俺はエミル・ローウエル。」

「私はリタ・ローウエル。」

二人は名前を聞かれて、答える。

「じゃあ、二人は兄妹なの？」

アリシアは気になり聞く。

「俺が上でリタが下。」

エミルは答える。

「はっきり言うな！私だって気にしてるんだから！」

「とまあ、そう言う訳だ。」

「無視すんなや！」

無視したエミルにリタは蹴りを放ち、

「ぐはっ！」

エミルはそれをまともに食らい、首のあたりから嫌な音がした。

「痛いじゃねえかよ！」

エミルは首を元の位置にもどしながら言う。

「無視するエミルが悪い！」

「真実のこと言って何が悪いんだ！」

「だったら反応しろや！」

「二人とも、喧嘩もその位に…。」

スバルはそんな2人を止めようとする。が、

「黙ってろ！／＼静かにしてて！」

二人に斬られる。それを見たアリシアが二人に近づき、アイセスの刃を二人の首筋に当てる。

「喧嘩を止めてくれないと、首が飛ぶよ♪」

アリシアは笑顔でそう言う。が、眼は座っていた。ホントに人が殺せそうなくらい。

「「はい…。」」

そして、二人は喧嘩を止める。

「解ればいいんだけどさ♪ホントに解ってる？」

アリシアは今度はそう言い、周りにランサーを展開した。

「「解っております！」」

二人はその容姿に合わない口調を使い、アリシアに言う。

「なら、宜しい♪」

アリシアはそう笑顔で言い、ランサーとアイセスをしまう。

「で、これからフェイトの家に向かって事情を聴かせて貰うけど、良いよね？」

アリシアは二人の顔を覗き込みながら言う。二人は頷き、それを確認したアリシアは二人の手を引っ張りながら、フェイト宅へと移動した。

Next stage', ,



Why were we there back to dark ♪
Why were we there face to face ♪
I must be the light when you're
e in the dark ♪

今回の担当

・ゼロ ・エミル ・フェイト
・リタ ・なのは ・はやて

ゼロ

「さて、始めました♪後書きコーナーNEO♪」
リタ

「て言うか、どの辺がNEOなの？」
ゼロ

「それは一章からのg d g d感がなくなったことだな。」
エミル

「確かに、あれはg d g dだな。」
ゼロ

「だろ？さて、こういう事で、フェイト、はやて。
フェイト・はやて

「準備OK♪」
ゼロ

「よし。行くぞ…後書きならではの新技！」
フェイト

「裏切らないですよ？」
ゼロ

「解ってます。カオス・コントロール混純操作!!！」

「瞬」

アリシア

「ゼロ！お願いだからやめて！」
リニス

「やめて下さい！」

エミル
「って、お前等。その格好で言っても…なあ？」
リタ

「それは、駄目だよね…。」

「つと、そこに居たのはあゝ♪」

赤い水着と黒い水着が良く似合うゝ♪

膨らむところは膨らみ、引っ込むところは引っこんでいるうゝ。

「悲痛な叫びが身に沁みる…。さて、今回のおさらい。」
なのは

「バトルマニアはたくさん居る。」

リタ

「名前はちゃんと覚えましょう。」

エミル

「ってところだな。お、戻って来た。」

リタ

「あの二人、顔が赤いけど、どうしたのかな？」
ゼロ

「ただいま♪」

なのは

「おかえり♪で、あの二人に何やったの？」
フェイト

「あのね…。♪」

なのは

「そ、それは…／／／」

なのははその言葉を聞いた瞬間に赤くなる。

はやて

「いやゝ。おもしろつかたわあゝ♪」

エミル

「あのさ、着かぬ事を伺うが、何をした？」
ゼロ

「あのさ…。」

エミル

「お前らなんてことをやってるんだよ!!／／／」
リタ

「え？何？何だったの？」

エミル

「お前、聞かない方が良い。」

リタ

「結局なんなのさ。それって。」

アリシア

「聞いちゃだめだよ!」

ゼロ

「やっと復活したか。」

リニス

「誰だってあんなことされれば、再起不能になりますよ…。」

ゼロ

「前のお返しという事で♪さて、このまま翔に送り返すか。」

アリシア

「ちょ…待…」

ゼロ

カオス・コントロール

「混純操作!!」

一瞬!—

ゼロ

「さて、送り返したし、次回予告に行こう♪」

リタ

「結局なんなのさ?」

はやて

「こういう事やよ♪」

はやてはそう言うと、手をクネクネさせ始める。

リタ

「やめて下さい!／／／」

ゼロ

「お前等。話が進まんから、次回予告をさせろ。」

フェイト

「じゃあ、私から行くね。」

フェイト

「遂に始まる模擬戦。」

なのは

「その中で、ゼロは教導をしていく。」

はやて

「彼らはその修練たる訓練に耐えきれるか。」

リタ

「その頃、エミル達は自分達の経緯を話す。」

エミル

「そこには、意外な事実が…。」

ゼロ

「次回、――教導と真実――。明日の大空へ！」

一同

「Drive ignition!!」

第2話 仲間がいて、自分がいて、それが僕等の生き方。誰にも邪魔できるもの

かなり脱線しましたね…orz

今度は気をつけます。はい。

♪ 東吾さん、キャラ召喚ありがとうございます♪次回もお楽しみです

第3話―教導と真実―

「さて小手調べに、クロスファイアーでも放つか。」

翡翠の眼をした男、ゼロはそう言い、スフィアを辺りに浮遊させる。

「シュート！」

一射！―

放つ砲撃は直線的な軌道。だが、それを放たれたFW陣一同はかわす。だが、ゼロはその直線的な軌道から、変則的な軌道にし、

一撃―

皆に当てた。だが、その中から、閃光が飛び、ゼロはそれを魔力を纏った右手で、

一殴！！―

殴りとばした。

「やれやれ。全部フェイクってところか？ 厄介なもんだな。」

ゼロはそう呟きながら、眼を閉じ、術式を展開させる。

「そこか。」

ゼロは眼を開き、スフィアを展開し、一気に放つ。それと同時に、

風の属性を纏う翼を展開。その場を離脱した。

一撃――

爆発音がし、それと同時に集束砲が飛んで来ていた。

「成程な。こういう事かよ！」

ゼロはそれを見て、かかと落としで、軌道を変えさせ、上空に飛ぶ。

「死に絶えよ！デストロイ……」

その瞬間、魔法陣が展開する。先ほどの魔法陣だ。漆黒の魔力が貯まり、

「ギガレイズ！」

放たれる。その奔流は辺りの木々を巻き込み、余波を残し、消えさる。

「はぁ。やっぱし疲れんな。これ。」

そんな独り言をつぶやいた矢先、何かがする音と共にスバルがこちらに突撃してきていた。

「まだ甘いな。スバル。」

ゼロはそう呟くと、テンペストで防ぎ、体を回転させ、

「うわあああああああああああ！！！」

受け流した。

「ごめんな。」

ゼロがそう謝ると次にエリオがこちらに向かう。

「うおおおおおおお！！」

ゼロは体を捻り、回避。次に千華と昶がこちらに向かい、攻撃を仕掛ける。

「「やあああああああああ！！」」

その連撃を体を捻り、受け、弾き…そこまでした時にテンペストが重くなったのを感じるゼロ。

「成程な。質量を狂わせる剣か。」

「そう言う事だ。」

ゼロの推測に肯定する昶。その表情は笑っていた。が、ゼロはそれを確認した途端にテンペストを手放す。そして、足場を形成。回し蹴りをお見舞いする。皆がのけぞる中で、昶だけは違い、回避して、斬りつける。

一閃！一

ゼロは剣に拳を打ち付け、止める。

一碎！一

その衝撃で刃が砕け、皆は距離を取る。

「――っ。さて、準備運動も終わりだな。いくぜ。テンペスト。」
〈了解。〉

ゼロがそう呟くと、テンペストは弧を描くようにゼロの手中に戻り、形態を変化させた。杖の様な型ではなく、スバルの使う様なナックル型。さらにバリアジャケットはブレイブフォースがいたところによく使っていた、速さを重視するインナータイプ。

「これより、教導を開始する。」

ゼロはそう言うのと、指をこちらに誘うように曲げた。

「嘗めるなああああ!!」

それに反応し、千華がこちらに向かって攻撃を開始した。ゼロは千華の武器の形状を確認して、一番隙が出来やすい所に拳を入れる。

一撃――

「まだ甘いぞ。千華。お前はちゃんと周りを見ろ。」

ゼロはそう言い、拳を離し、魔力を行使し、地面に落とす。

「やあああああ!」

続いてエリオ。ゼロは槍での攻撃を魔力刃を生成し受け止める。

「まだ甘い。もうちょっと槍の特性を生かせ。」

ゼロはそう言い、槍を振り払い、蹴りを入れる。その後、剣戟がゼロを襲う。彼は魔力刃で受け、そのまま右に流す。

「連結刃の弱点は、戻すまでのローテーションを利用できないと、隙だらけになるってことだ。」

ゼロは昶に蹴りを入れながらそう言う。そして、キャロとティアナの姿がない事に気が付く。そして、他の皆の姿も。

「……成程。その手は通用しないけどな。俺にはな。」

ゼロはそう呟くと、魔力刃をしまい、三芒星を描き、銃剣二丁取り出し、辺りに向けて発砲。瞬間、スフィアがゼロに向かい飛ぶ。それを確認したゼロは下降し、一点に集めると、集束砲を放ち、消し去る。

一閃！一

「ティアナ。幾ら技を真似ようと、鈍の威力じゃ俺には敵わん。」

ゼロはそう言い、銃剣のトリガーを引き、砲撃を分散させ、ティアナに向かう。

一閃！！一 一撃！一

その閃光は辺りを拓き、ティアナの姿だけを映し出す。

「OK。大体わかった。訓練メニューは明日位になるのかなって。」

ゼロはそう言い、振り向き様にティバインバスターを抜き打ちした。

「やっぱし、これは反動が来るな。キャロはティアナに任せすぎだな。それとティアナは指揮官なのに安心して隙を見せまくってるし。」

ゼロは頭をかきながらそう言い、跳躍。傍で待機していたエリオに一閃を入れ、さらに、その勢いで、エリオを昶にぶつける。

「模擬戦終了だ。起きろ。いくら麻痺系を入れたって、そこまでじゃないだろ。」

ゼロがそう言うと、皆は起き上がり、集合する。

「さて、とりあえずは終わりな？で、結果的に言うと、厳しいな。それと。千華は広域魔法を何で使わなかったんだ？」

「いや、それは…。」

「いや、解ってるんだけどさ。広域魔法が危険な代物な位。とりあえず、シャワーした後、俺の部屋に集合しろ。それまでにまとめしておく。以上、解散。」

ゼロがそう言うと、各自解散した。

＊

ゼロは自室に戻り、端末を無数に展開する。

「さて、纏めないとな。」

ゼロは今までの戦績データと今のデータを照らし合わせて、物凄い速さで指を動かし、データを作って行く。

「ここは、データよりも上のレベルでいけるな。ここは欠点として見た方がいいのかもしれないし…。」

「手伝いしましょうか？」

「ん。有り難う。じゃあ、スバルとティアナのデータをお願いしようかな？」

「解りました。✓」

「うし。さっさと終わらすぞ。」

「解りました。✓」

二人は会話をし、分析をまとめる…。

＊

一方、昶達は…

「しっかい、強かったなあ。何であそこまで強いんだろうね。」

スバルは屈伸しながら言う。

「さあな。アイツはどこか戦いなれている感じだったし。」

「それは執務官だからでしょ？ 当り前よ、バーカ。」

昶は答える素振を見せるが、千華に馬鹿にさせる。が、それにも、

「…アイツは武器の弱点を全て抑えていると思う。」

「何でそう言い切れるのよ。」

昶がそう言った事に対し、ティアナが聞く。

「お前等の攻撃…俺も含めて、全て受けてるし、かわされてるんだよな。最低でも、剣は使うかな？とは思ったんだが、拳のみで俺等を相手していた。…可笑しいだろ？」

「確かにそうですね。僕の攻撃も、クーと僕の攻撃も通らなかったですし。でも、もっと気になったのが…。」

「“あれで50%の実力”なんだよな。」

エリオの疑問を晴らすかのように昶が言う。

「言われてみれば、50%にしては威力が並じゃなかったわね。」

「何であんなに強いんでしょうね。」

キャラもその言葉には頷く。

「聞いてみようよ。そうしたら何か解るかも。」

スバルがそう言い、皆は頷く。そして、ゼロの部屋へと向かった。

＊

また場所は戻り、ゼロの部屋。

「何か解ったか？」

「…手掛かりなしですね。▽」

「神帝…謎が多すぎるぞ…。」

「マスター。自棄にならないで下さい。▽」

「解ってる。あいつ等が来るまでもう少し守備範囲広げるか。」

「そうですか。了解しました。▽」

そして、さらに調べ始めたところに、ノックが鳴る。

「どちら様ですか？」

「昶です。」

「入っていいぞ。」

そして、各々「失礼します。」と言って入室した。

「物凄い情報量ですね。」

キャロが入ってすぐに言う。

「まあな。テンペスト、無理しない程度に頼んでいいか？」

〈了解。〉

そして、テンペストをテーブルに置き、ゼロは昶達の方へと向き直る。

「さて、さっきの模擬戦のデータはこっちの方で取ってある。で、一応の事を思っ、て、欠点の方も上げておいた。一見、多いかもしれないが生活の一工夫で変えられる事ばかりだ。けど、無茶はするなよ。」

ゼロはそう言い、昶達に欠点をまとめた、データ端末を渡した。

「あのさ、これって紙がなくてこれにしたのか、それとも量が多すぎて、紙にまとめられなかったのか、教えてくれないか？」

「見ればわかる。」

ゼロは見るように促す。そして、皆が見る。そこに書かれていた言葉はみな違うが、とりあえず一言で纏められていた。

「紙がなかっただけ？ やっぱり。」

「俺はその言葉にどんな意味が込められているか、考えさせるためにここに呼んだんだ。で…」

「あの、良いですか？」

ゼロが全て言い切る前にキャロが口を挟む。

「？、どうした？」

「ゼロさんって何でそんなに強いんですか？」

「…聞きたいか？ 暗い話になるけど。」

「それでしたら、結こ…」

「お願いします！」

ティアナが断ろうとしたところにスバルが割って入り、お願いする。

「馬鹿スバル！」

「良いじゃん！ 別に話さないって言った訳じゃないんだし！」

「良くない！」

「落ち着け。俺はもうけじめはついてるから。」

ゼロはそう言うと、背中を向け、上着を脱ぎ去る。

「お前…こんなものを隠していたのか…。」

「……。」

昶がそう言う。ゼロは無言でただ立つだけ。スバル達はそれに絶句するだけ。それもそのはず。ゼロの背中には幾多の斬撃の跡が刻ま

れているのだから。

「答えろ！」

「……お前等は自分の大切な人を子供のころに殺したことはあるか？」

「……そう言う事なのか？」

「そう言う事だ。俺が言いたい、事はな。

自分の手で殺めたんだよ。そして、はやてと一緒に過ごして、なのはと出会って、フェイトと出会って、ヴォルケンリッターにも出会って、フェイトとはやてと結婚して、今に至る訳だ。

あまり覚えていないんだけど、自分が完全にできる奴だと思ってた頃だしな。その頃。」

ゼロは上着を着ながら、話す。その言葉に重みが有ったのか、昶以外は俯いている。

「だから、お前等には大事な人を失わせる様な事をしないで欲しいんだ。どれだけ、自分が危なくても。」

「なら、その大事な人が自分だとしたらどうする？」

昶が聞く。

「無茶苦茶だけど、関係なく戦うな。俺は。元の世界でも帰らないといけないし。俺は調べものが終わったら、すぐに寝ると思うから、お前等はとりあえず、考えてくれ。」

ゼロはそれに即答し、昶達に部屋に出るように促す。

「さて、調べますか。」

へそれなら、必要な情報を集めておきました。✓

「見せてくれ。」

ゼロはテンペストを取り、データを見る。

「…これは…。」

〈ギル・クルーゼ。過去に重犯罪を犯した人物です。〉

「他には？」

〈こんなものが…。〉

そして、二人はこんなことを丑三つ時近くまでやって居た。

＊

「何で模擬戦なんてしたんだろ？それにこの言葉に書かれている、これって…。」

スバルは端末を開きながら、言う。

「これって、書いていることは違うけど、結局は同じ道をたどれるようにしたって可能性も…。」

同じようにして、ティアナも言う。

「あり得るな。アイツの事は解らないが、きっとそうするつもりだと思うって…ん？」

昶は進めていた足を止める。それについて来ていた千華とエリオ、キヤロは昶にぶつかる。

「どうしたのよ。」

千華が聞く。

「いや、あれ見れば立ち止まるって。」

「あれって…。うわぁ。皆も同じようなことしてるわねえ。」

そこに居たのは同じように端末を開き、調べ物をしている職員達。これは、全部ゼロのフェイクなのだが、質量もしっかりとある、高技術なフェイクだ。

「だな。俺等も考えよう。」

昶はそう言うと、食堂に有った、テーブルに着く。

一方、場所は戻って、元の世界の様子。フェイト宅で、アリシア達と、隊長陣三人が集合していた。

「さて、話して貰おうか♪」

アリシアはエミルとリタに向けてランサーを展開しながら言う。

「お姉ちゃん、さすがにやりすぎじゃ…。」

「いや、このくらいで良いんだよ♪フェイト♪」

アリシアは笑顔をフェイトに飛ばしながら言う。とその時。

一殴！一

アリシアの頭に拳が降りかかった。

「ッたあく。誰よ！」

「俺だ。」

殴った主、アルスはアリシアの方を見て言う。

「何すんのよ！」

「俺がそれを言いたいな。」

「でも！」

「殴！」

「あああああ…。」

アリシアが何か言おうとしたところでアルスが拳をまた入れ、アリシアは悶える。

「何度言わせたらわかるんだ。」

「二回目！」

「三回目行くか？」

「それは嫌だ！」

「だったら、その物騒な物をしまえ。怯えてんだろ。」

アルスはそう言い、エミル達の方を見る。

「むう。解ったよ。」

「それと、お前等は訓練してろ。」

「私も何k…」

「訓練してろ。」

アルスの剣幕に負けたのか、アリシアは残念そうに出て行く。

「さて、すまんかったな。お二人さん。」

アルスはエミル達の方を向き、言う。

「ありがとう…で良いんですかね？」

「さあな。で、お前等は何処から来た？」

エミルが礼を言う。アルスはなのはの隣に座り、聞く。

セルレイド
「原界…ですかね？」

「セルレイド？何だ？それ。」

アルスの質問にリタが答える。

「原界って言うのは、ここと同じような環境の…言わばもうひとつの地球みたいな感じですよ。」

「もう一つの地球ね…。大体わかった。で、お前等は戦い慣れていた様だが、向こうで戦わなくちゃならない理由ってのが有ったのか？」

「それは…。」

〈私から説明しましょう。〉

アルスの質問にヴェスペリアが答えようとする。

「…お前は記憶AIなんて付いたの昨日じゃねえか。」

アルスが言う。

へところがどっつい、この剣の戦いの記憶が私に記憶を与えてくれたんでさあ！」

「何処からそんなキャラが出てくる！」

「まあ、落ち着いて、アルス。」

ヴェスペリアの変わり様にツッコミをかますアルス。フェイトはそんなアルスを諫める。

「で、どんな事なんや？」

はやてが聞く。

〈要約すると、ギル・クルーゼが私たちの居場所を危機に陥れて、それで、マスターたちは戦っていたのでさあ。〉

「…デバイスって、こんなのなの？」

リタはヴェスペリアの変わり様に少しおどけて言う。

「で、ギルは俺らで殺した。」

エミルはそう言う。

「その時に、ゼロって奴に有ってな。」

「ちょっと待った。」

エミルが続きを話そうと思うがアルスが止める。

「今、誰って言った？」

「ゼロって言いましたけど…。」

「可笑しいな。アイツ、何で向こうに居たんだ？」

「それは、アイツがボロボロの状態で倒れていたんですよ。光と共に。」

リタが捕捉で説明を加える。

「光？」

「ええ。物凄い、光。」

アルスの疑問符にエミルが今度は答える。

「並行世界にふっ飛ばされたか、あの馬鹿は。」

アルスが悪態をつける。

「それ聞いたら、ゼロは集束砲を放つやろな…。」

はやてがそう言った事にリタは頷く。

「まあ、修羅場ではさすがにやらないとは思いますが…。」

リタはそう言う。

「え！？嘘！？」

その後、フェイトが突然声を上げる。

「どうしたの？フェイトちゃん？」

なのはがフェイトのもとに歩き、聞く。

「今、ブレイブフォースから念話が有って。」
「で、どんな内容だったの？」

なのはは聞く。

「あっちでの事件の黒幕が…ギル・クルーゼだって…。」
《！！！！！》

皆はそれを聞き、衝撃を受けた。アルスはブレイブフォースに念話を繋ぎ、この場にいる全員にゼロと念話ができる様にしてくれるように頼んだ。ブレイブフォースは了解し、アルス達へとリンクを開いた。

（ゼロ！聞こえるか？）

アルスが問いかける。が、返ってくるのは沈黙。

（聞こえてんのか！）

アルスが叫ぶ。が、返ってくるのはまたしても沈黙。

（聞こえてんのかってんだよ！この、阿保野郎！！）

（…お前に阿保なんて言われる義理はなかったはずだが？）

ここまで来て、やっと返事が返って来た。

（ゼロ！話せ！何でそっちにギルが居る！）

（焦るなアルス！俺だって混乱してんだから！）

ゼロは叫ぶアルスを諫める。

（で、実際のところはどうかんだ？）

（まだ攻撃されてない。調べたのは、そいつが次元漂流者で管理局を裏切ったって事。それと、俺はそいつを倒さなくちゃただいまって言えない事。さらに、“神帝”の紋章を持つものってことだ。）

（で、やっぱりこっちは…）

（まだまだだ。それと、フェイト、はやて。）

（（何かな？））

（帰って来た時に泣くなよ？）

ゼロがそんな的外れなことを言いだすと、二人は

（（解った！怒ってあげるからね！／あげたるわ！））

怒って、そう言った。

（期待してる♪で、なのはは上手く行ってるか？）

ゼロは話題を変える。

（うん。で、少し相談なんだけど…。）

（アルスが良いつて言ったら、良いぞ。一応、スタイルだけ聞いておこうか。）

（剣とか、槍とかなしで…）

（肉弾戦か…アルスが許可したら袴は脱いでいいから。）

（うん。有り難う。）

（おう♪で、その名を知ってるって事はエミルとリタも居るんだろ？）

（ああ。そうだが…。？、何か二人がおかしなことになってる。）

（うっせえぞ。今何時だと思ってやがるこの野郎。俺が今からGo d n i g h tしようと思ったところでお前等は何時にも念話を飛ばしてくれるから厄介なんだよ。）
（それはすまへんかったな。）

はやてが割り込み謝る。

（いや、俺もお前等と話せたし。俺はきつとそっちに行くから。待っててくれ。で、戻った時には笑顔でな♪じゃあ、そう言う事で♪）
ゼロは念話を切る。そして、リタはやはり顔が赤くなっていて、恥じらいの表情が見える。エミルは苛々していたが、とりあえず、全ての話を済ませ、エミル達は病室の戻った…。

N E X T S T A G E , ,



巡る♪巡り合いを♪繋ぎとめにと♪と♪離さない♪

今日の担当

・ゼロ ・フェイト ・はやて
・リタ ・なのは ・エミル

ゼロ

「さあ、後書きコーナーNEO、始まり始まり♪」

エミル

「おい。これはどういう事だ？」

ゼロ

「気にしない♪混操発動しちゃうよ?。」

エミル

「…やっぱ、何でもない。」

ゼロ

「でしょ♪」

リタ

「あ、そうだ。これ、ちょっと遅れたバレンタインみたいだけど…。」

ゼロ

「俺か？」

リタ

「（コクコク）」

ゼロ

「ありがとう♪で、顔赤いけど、熱でもあるのか？」

リタ

「ないない!!」

ゼロ

「そうか。」

フェイト

「そう言えば、私達が前に渡したチョコレートはどうだったの？」

ゼロ

「…不味かったって言われてもいいのか？」

なのは

「頑張ったのに！」

ゼロ

「冗談だ。ちゃんと食べたし、美味かったよ。ちゃんと気持ちの籠もった、手紙も入ってたし♪」

フェイト

「ならよかったんだけど…。」

ゼロ

「キスとかした方が良かったのか?…♪」

フェイト

「な！なななな！そんなことしなくても！／／／」
ゼロ

「顔が赤いや♪可愛いな♪」

フェイト

「むうううう／／／」

ゼロ

「赤くなったまま怒っても可愛いだけだぞ♪」
なのは

「にやはは…フェイトちゃんがゼロ君に弄られてるよ…。」
はやて

「ホンマや…。かわええな…。」

リタ

「良いなあ…フェイトさん…。」

なのは

「もしかして、ゼロ君のこと好きなの？」

リタ

「そ、そんなことはありません！／／／」

はやて

「その割には顔が赤いで？」

リタ

「そんなことはありません！／／／」

エミル

「馬鹿やってないで次行こうぜ？今回のおさらい。」

リタ

「レベルのはき違い。」

なのは

「という訳で。」

はやて

「なんやら訳の解らん回になってしもうたな。」

ゼロ

「それはしょうがないだろ。」

はやて

「うお！何時の間に戻って来たんや！」

ゼロ

「now。」

エミル

「英語でいえばいいって問題じゃねえ！」

ゼロ

「気にすんな。」

フェイト

「ううううう／＼／＼／」

ゼロ

「睨んでも可愛いだけだぞ〜♪」

フェイト

「またそう言う！／＼／」

ゼロ

「クカカカカカ♪さて、次回予告だ。いくぞ。」

ゼロ

「次の日、訓練内容をスバル達に言うゼロ。」

はやて

「そうして、訓練を開始した矢先、アラートが鳴る。」

エミル

「そして、私達の世界では、なのはが新たな戦闘方法に挑戦する。」

リタ

「その名は肉弾戦。果たして、うまく使えるようになるのか。」

なのは

「次回、――神帝と運命――明日の大空へ！」

一同

「Drive ignition！」

フェイト

「うううう／＼／＼」

ゼロ

「解った。俺が悪かったって。」

ゼロ

「何だ？ここ。」

落ち着きなはれ。ここは作者の領域だ。今回は協力者モトム！って感じなんだ。

ゼロ

「またオリキャラか？」

ちゅちゅちゅ。甘いなく♪俺はアクセス6万、ユニーク1万が大盛況で越えたので、クロスリレーを企画している！

ゼロ

「受験生なのに…。」

言うな。で、内容は、こんな感じ♪

— 全ての世界がいり混じる時… —

— 決戦の時は訪れる。 —

— ある者は憑かれて。 —

—またあるものは、不死鳥と呼ばれて。—

—別々な次元の物が1か所に集う時、決戦は始まる。—

L y r i c a l c h a o s t h e w o r l d
〈世界を越える決戦〉

—終わりが有れば、始まりもあるように…。—

—全ては輪廻転生だ…。—

はい♪という訳で、こんなのを…きk…

ゼロ

「お前は何考えとんじゃあああああああ!!」

ぐばべらふえっふもへあげぶばあ!!

ゼロ

「訳の解らん声を出すな!どうすんだよ!場所的な立地条件は六課
だろうがハゲエ!」

落ち着け!ちゃんと協力してくれるから!…naonaoさんとか
は。

ゼロ

「最早希望になってんじゃねえか!」

良いじゃねえか！てな訳で、参加してくれる快い作者様は感想欄に
書き込んで下さい♪では♪

第4話 一神帝と運命（さだめ）

へマスター。朝ですよ。〈

一つの部屋にデバイスの機械音声が聞こえる。

「もうそんな時間か。眠い。」

そこにいたゼロはそう言い、起き上がる。

へ我慢して下さい。というより、矛盾してますよ、その行動にその言動は。〈

「いいじゃねえか、テンペスト。昨日は話しこんで眠いんだし。」

ゼロは言い訳がましく、自身のデバイスのテンペストに話しかけ、屈伸。そして、テーブルの上に置いてあったデータチップを取り、訓練場へ歩き出した。

＊

「やっぱ、少し体が固まってんな。テンペスト、あれ一回だけやるぞ。」

へ解りました。モード日本刀。〈

テンペストがそう言うと、ゼロの手に日本刀が握られる。ゼロは息を吸い、柄を掴む。

「斬空！」

そして、腰のアクションをすべて活用した一閃は、虚空に消える。

「あゝ。うし。OK、OK。」

ゼロは体の動きが正常なことを確認すると抜き身の剣を鞘にしまい、テンペストの形状を待機状態の宝石にした。

「お、来たな。おはよう、皆♪」

《おはようございます!》

揃えたのか知らないが、FW陣と昶達は挨拶をした。

「取り合えず、答えは見つかったか？」

「答えは、【守り護る】です。」

ゼロの問いにティアナは答える。

「【守り護る】なあ。どうしてそう思った。」

ゼロはさらに聞く。ティアナが言おうと思った時、昶が口を開く。

「ゼロ。本当はこれに意味はなかったんだろ。」

「なぜそう思う？」

ゼロは昶の言葉に興味を持ち、鋭い視線を飛ばしながら聞く。

「お前はあの時、言ったよな。大切な人を幼い頃に殺めたことがあるか、とな。」

「ああ。確かに聞いた。」

「本当に意義のあるのは、これじゃなくて、お前の言葉に有ったん

だろ。本来の目的は【俺等に考えさせること】じゃなくて【お前の言葉をどう取るか】って事に有ったんだろ。」

昶のその言葉を聞いた途端にゼロの表情は柔らかな物となり、昶達に笑いかける。

「御名答♪やっぱりだよ、お前等は。さて、あのデータは99.9%お前等に教えることはない。てな訳で、99.9%の弱点情報端末をプレゼントするよ♪」

ゼロはそう言い、データチップをデバイスにかざし、一気にデータを入力する。

「さて、大丈夫かな？俺で色々調整したんだけど。」
《十分すぎますね。》

デバイス一同は声を揃えてそう言った。

「訓練メニューの方も入れたけど、それで良いかな？」
《異議なしです。》
「そうか♪」

ゼロはデバイス一同の答えに納得したのか、訓練場に足早に入って行った。

「で、どんな内容なんだ？アルトリア。」

昶は気になったのか、アルトリアに聞く。

「まあ、こんな感じで。」

そこに出されたのは、昶達の練習内容。

「朝、ストレッチ20分間、その後、技能開発、10分、休憩7分……まだあるし。弱点克服とか、模擬戦とか……これ毎日やんのか？」

「毎日やったとして、そんなに疲労は貯まらない様になっています。」

「へ、へえ……。」

昶は呆然とするばかり。

「まあ、考えてても仕方がないわ。行きましょ？」

千華はそう言うと、一人で歩き出す。

「あ、待てよ。千華。」

その後を昶達が追う。

＊

「ああああ……ストレッチなんて兆久々だな……。」

ゼロはそう言いながら、ちょう座の体勢で、体を柔らかくする。

「ふああああ。ストレッチは体の柔らかさの基本だが、これほど久しぶりにやると筋が固まってるのが解るなあ。」

「それが手が足の踵まで届いている奴のセリフか！」

ゼロがそう言いながらいやっているところに昶達が到着する。

「そうだ。それが踵まで届いている奴のセリフだ。」

「なんか緩キヤラになってるな、オイ。」

「気にするなあ。」

「気になるわ!」

ゼロの見事なボケっぷり(?)に、ティアナと昶はツツコミを入れる。

「マスター。次は開脚を。」

「ほいさあ。」

ゼロはテンペストに言われると、開脚をする。足は直線状になり、体は全部地面に着いている状態。

「凄いわね…。ゼロ…。」

「そうか? 長座に時間かけてたから、開脚は何ともないけど。」

千華が言い、ゼロはそれに返す。そこで改めて、千華達はゼロは無茶苦茶だと言う事を悟った。

「お前等も早く柔軟をした方がいいぞ。一応、時間書いているけど、それは、予定という事で。だから10分でやっても大丈夫だから。」

ゼロはそれだけ言うと、上半身を起こして、左腕を伸ばし右のつま先を掴む。掌が付くほどに。

「柔らかすぎだな。」

「確かに。私等押してもらわないとあそこまで行かないわよね…。」

昶と千華はそう話す。その時、スバルがゼロの背中を押す。すると、ゼロの手が踵を掴み、地面に手をつけかける。それに吃驚してスバルは手を引いた。

「スバル、さっさとストレッチした方がいいぞ。」

「は、はい。」

スバルはそうおどけて言うのと、相方のティアナの元へと走って行き、ストレッチを開始した。

「左っと。」

ゼロはそう呟き、体の動作を逆にした。

「しかし、どうやったら柔らかくなるんだよ、お前。」

昶がゼロに話しかける。

「子供のころによくやってたからな。それでここまで柔らかくなっちまった。」

「凄いな。お前。」

「まあなツと。」

ゼロは股の前に手を置き、力を入れ立ち上がる。

「お前のその細い腕の何処からそんな力が出てくんだ。」

昶は聞く。

「どっかからだ♪次はブリッジか。ほ！」

ゼロはそう言うと、立った体勢から、ブリッジをし、さらにその状態から倒立、さらに元の体勢に戻った。

「さて、終了つと。その辺で素振りしてるから念話で呼んでくれ。」
「ああ。わかった。」

ゼロはそう言い、昶が返事をする、歩き去った。

「あんなに柔らかいから、あんな動きができて、太刀筋で攻撃方法とか判断できるんですかね？」

キャロが言う。

「多分ね。でも、あの人は異常よ。」

ティアナが後を継ぐ。

「でも、異常だからこそその護る力ともなりうるのね。」

さらに千華が言い、皆は納得し、ストレッチを続ける。

＊

「燕返し！」

一斬！一

訓練場に響く一つの声。そう、ゼロの物。ゼロは燕返しを決め、構えを戻し、抜き身の剣を鞘に入れる。

「ふう。」

そして、体の四肢の力を抜き、足を踏み込む。

「真空波！」

一閃！——斬！——

抜き放たれた剣から、閃光がきらめき、傍に有った木に幾多もの切り傷をつけた。

「ゼロさ〜ん。」

遠くから呼ぶ声。それに振り向く。相手はスバルだった。

「終わったか？」

ゼロはそう呟きながら近づく。

「とりあえず終わったので、報告をと思ひまして。」

「そうか。ご苦労さん。行こうか。」

ゼロはそう言うと、昶達の元へと歩き出す。

「あ、待って下さい！」

スバルはついていくために小走りで行った。

*

「うし。じゃあ、ストレッチも終わったから訓練を始めるとしますか。技能開発にはスフィアを使うんだが、お前等のスフィアだと一撃で粉碎される。だから…。」

ゼロはそう言うのと、ランサーを浮遊させ、球体状にまとめ上げ、それを昶達の方に浮遊させる。

「それを使え。性能は技能開発用だから、そこまでの攻撃機能は付いてない。こういう風にすればいいとかあったら、まず自分のデバイスに聞いて、それでも駄目な様なら、俺に聞きに來い。」

ゼロはそう言うのと皆が返事をする。それを確認すると先ほどの場所へと向かった。

「ゼロさんはちゃんと私達の事を考えてこれを作ったんだろうね。」

スバルはそう言う。

「何でそう思うのよ。」

ティアナが聞く。

「これ、自立回避とか実弾迎撃訓練とついてる様だし。」

「言われてみればな。」

スバルのその言葉に昶は頷く。

「とりあえず、俺は剣戟を。」

昶はそう呟くと、スフィアを片手に何処かへ走り去る。

「じゃあ、僕は槍の攻撃訓練を。」

エリオもその調子で立ち去る。

「私は連続技かな？」

スバルはその場で訓練を開始する。

「なら、私は迎撃。」

「私は回避を。」

そうして、皆、思い思いの訓練を開始する。と、その時、アラートが鳴った。

＊

「破魔・剣轟！」

一斬！——轟！——

少し遡り、ゼロの様子。彼は剣を掲げて、魔力を集束した剣を思いっきり振り下ろす。その衝撃は地面に傷痕を残すほどだった。

「まだだな。威力が安定しない。Dを使ったって、これは扱いきれるかどうか。」

「やってみればいいじゃないんですか？」
「そうだな。」

ゼロはテンペストの意見に賛成すると、グローブを外し、右手を前に出し契約開放を告げようとした。が、その刹那。

一刺！！一

「カハっ……！！！」

ゼロは誰かに刺されたような感覚を覚える。それも其の筈。彼の心臓部分は一筋の閃光に抜かれ、胸は赤く染まっているのだから。そして、その閃光は刺さったまま。

彼は振り向く。そこには、右手に巨大な赤い、否。赤く染まった魔力の剣を持って持っている男が居る。

「ご機嫌様。原界以来か？ゼロよ。」

「ギル：クルーゼ：。」

「貴様もその力を持たれると厄介なのでな？悪いが、終いにさせてもらう！」

ギルはそう言い、ゼロから、刃を引き抜く。するとゼロの体に穴が開く。これが何を意味するか。そう、

一出血一

そうして、ゼロは倒れ、彼の周りには夥しい量の血が広がっていた。

「さて、この辺りに居るのだろうか？貴様の仲間とやらが。」

「！！！」

ゼロはギルの言葉に反応し、立とうとする。だが、今たつと痛みが出て立てないのだ。そんな中、彼は呼びかける。

―立てよ…俺。立てよ……。―

ゼロは手に力を込める。その込めた手は拳となり、地面に指の跡を作る。

―このままじゃあ―皆がやられることが眼に見えてんだろうが！―

ゼロはさらに拳に力を込める。その時、偶然スバル達 came。

「逃げ…ろ…。」

ゼロは自分の渾身の力で叫ぶ。

「逃げろ！お前等！！」

「無駄だよ。貴様には奴等の思いなどわかるはずがない。」

「解ってるさ。だからこそ、今は守るだ！護るじゃねえ！」

スバル達はその声を聞くと、立ち止まる。だが、それはギルにとって、絶好の好機チャンスだった。ギルはランサーを浮遊させ、スバル達に向けて放つ。ゼロはそれを見て、さらに強く思う。

―やられてはいけない。だからこそその命。だからこそ！！―

今度は足に力を入れ、一気に跳躍。スバル達の前に立ち、両腕を広げて、全ての攻撃を受ける。

「……護る…。」

ゼロはそう言い、眼を閉じる。立ったまま。すると、傷が塞がり始

める。

「戦闘機人は…こういう時に…命を残せることが…：…皮肉だな…。」

ゼロは途切れ途切れに呟く。眼を開けたその時、ゼロの傷は完全に塞がり、服に赤いシミが残り、穴が空いていることだけ。それだけが変わった場所だった。

「反撃開始か？それとも、違う事か？」

「ふ…。」

ゼロがそう言い、振り向く。そうすると、口端を吊り上げ、

「ふははは！あっはははははは！」

笑いだす。ゼロはそれに構える。

「いや、今回は挨拶だけだからな。また会おう。私の宿命よ。」

ギルはそう言うと、魔法陣を展開。それを見た昶と千華は駆け出す。

「「逃がすか！」」

そう言い、己の武器の剣と爪剣をギルに振りかざす。

「クロスファイアー…。」

ギルは翡翠色の魔力を展開。そして、集束し…

「シュート。」

―射!―

放った。それを見たゼロは、昶を蹴り飛ばし、千華と一緒に倒れさせ、その間に、ランサーを展開。そして、破壊した。

「ほう。案外君もやるものだね。」

「うっせえ。俺は最近疲れ気味でバリバリ不調なんじゃボケ。」

「その威勢、また逢う日も見られると良いがな。」

「見せてやるよ。お前を倒すその日にな!」

「楽しみにしている。ではな。」

そして、ギルは転移して消える。ゼロはその瞬間、手に持つ剣を落とし、崩れ落ちた。

「ゼロ! しっかり!!」

昶は呼びかける。だが、意識が回復しない。

「千華!」

「解ってる! 今連絡を入れた!」

千華は焦りからか、怒ったような口調を見せる。

「死ぬなよ! お前が死んだら、俺等はどうすればいいのか解らなくなるからな!」

昶はそう言いながら、助けを待った。その後シャマルが到着し、ゼロは医務室へ運ばれた。

＊

「っ……ここは…。」

ゼロは白い天井を見て起き上がり、周りを見渡して、ここが医務室という事を確認した。

「俺、あの子の記憶がネエな…。如何しちゃったんだろうな？」

ゼロはそう考えながら、ベッドを降りようとする、右手に点滴が刺さっているのに気づいた。その点滴の先に有るのは

「輸血用の血液か。」

ゼロはそれ見て呟く。それを見て、自分の事が情けなく思う。皆を護れず、倒れてしまったんだろうな。そして、拳を強く握る。その時、扉が開き、昶達が入ってくる。

「昶。俺はどうなったんだ？」

「…いいから。お前はベッドに戻れ。」

「昶。」

「良いから戻れ。…それから話す。」

ゼロはその言葉の通りにし、出かかっていた足をベッドに戻し、リクライニングを上げた。

「昶。あの後どうなった？俺。」

「倒れたよ。出血多量でな。九死に一生を得る状況だった。」

…それは俺からでも解る。お前が俺等の所まで跳躍するまでに居た

場所にはお前の血で辺りがな。」

昶はそう話す。ゼロは「そうか。」と返し、次に聞く。

「お前等は大丈夫か？」

それに昶は申し訳なさそうな顔をして返す。

「ああ。けど、お前がいなくてもよかったんじゃないかな？とは思ってる。プロテクションで防げそうだったし。」

「それを俺が庇ったからってか？違うな。わざと俺に当てさせたんだ。」

「わざと？」

その言葉に疑問を見た昶は聞く。

「そう。俺がお前等に渡したランサーってのは少しだけ特殊でな。一発撃って、その後位置指定だけで撃つことができるんだ。仮にあの量の倍の量生み出されたら…。」

「確実に撃たれていた。そう言う訳か。」

「そう。けど、あのときでもうギリギリだったから、クロスファイアー叩き斬った時は奇跡だったけどな。」

ゼロはそう言い、少しだけ苦笑いする。

「……色々と、すまなかったな。」

「良いって事さ。俺の好きでやったんだし。」

ゼロはそう言い、昶の方を向く。

「昶。責めるな。」

「けど…!」

「昶。俺は二度は言いたくない。それに、今俺の練習メニューが決まった。」

「……まさかとは思うが、六課のFW陣と隊長陣全員と全力で模擬戦？」

「まだ甘いな。リミッター全解除、で、六課全員と全力全開のバトルだ。」

「…体壊してもしらねえぞ？」

「壊しはしないさ。俺だからな。」

ゼロはそう言う。その時、扉が開き、千華達が入ってくる。

「あれ？もう起き上がってるや。」

千華はそう言うと、昶の隣に座る。

「とりあえず、傷は塞がってるから、後は輸血が済めばいいからな。」

「へえ。でも、無理はしない方が…。」

「無理しての俺だし。」

千華の言葉をあっさり両断して返すゼロ。それにスバル達は苦笑いする。

「でも、よくあんなに血が出て立っていられましたよね。」

エリオがゼロに言う。

「あれ、はつきり言って、戦闘機人だったから立っていられたんだ

よ。」

《……は？》

ゼロの言葉に皆は言葉を出せないでいる。

「あれ？言ってなかったっけか？」

その言葉に皆は頷く。

「そうか。なら改めて言う。俺は戦闘機人だ。そこに隠れている、戦闘機人を憎んで居た様な眼を持っていた男の様にな。」

ゼロは扉の方を見て言う。

「ばれてしまったか。だが、真実だな。」

その男は扉の後ろから出てくる。

「はち合わせしてなかったからね。シン・ルークス君。」
「…。」

ゼロはその名前を呼ぶと、なぜその名前を知っている？という様な顔をした。

「はやてから聞いたよ。カリムに会いに行った時にね。」

「それでお前あの時いなかったのか。」

「そう言う事だ。」

ゼロは昶に返しながらも言う。

「何時から気付いていた？」

「大まかに付けられてるのは最初っからだっただけど、確信が付いたのは昨日かな？」

ゼロはそう言うのと、ベッドを降り、テンペストが有るのを確認して、自分の部屋に向かった…。

「なのは。良いか？」

元の世界。そこで対峙する二つの影。それは、赤い髪を持つ青年。アルス・フォード。そして、

「何時でも良いよ！アルス君！」

そう言い、構えを取る栗色の髪を持つ女性。高町なのは。

「うし。じゃあ、行くぞ？」

アルスはそう言い、足に力を込め、踏み込む。その瞬間、なのはの視界からアルスの姿が消失し、

一殴一

なのはの体は刹那の間に宙に浮く。

「言っただろ？行くぞって。」

アルスは跳躍し、なのはの目の前に現れ、なのはを地面に叩きつけ

る。

一撃一

なのははその衝撃で肺に溜まっていた空気を一気に吐き出し、咳き込む。その後、アルスは地上に降り立ち、考え込む。

「やっぱり、効率が悪いな。構えは良いんだけど…。」

アルスは何かを思い出したようにして、転送魔法陣を展開して、サンドバックを転移させる。その時なのはが起き上がる。

「起きたか。」

「何とか…でも、一撃が強すぎだよ…。」

「バリアジャケットを着ないからだ。解ってんだろ？俺が普通に殴っただけで地割れ起こせんのくらい。」

「解ってるけど…。もうちょっと何かないの？」

「ないな。それに、今からこれに打ち込んで貰うし。」

「サンドバックだよな？打ち込むだけなら簡単だよ？」

なのははそう言い、サンドバックに近づく。

「ただのサンドバックならな。」

アルスはまさに打ち込まんとする時に声をかけ、なのはの拳の力を抑えさせる。その時、サンドバックの周辺にスフィアが生成される。

「っ！」

なのははそれを見て、爆転をし、回避。その時に砲撃が放たれた。

一撃！――

なのはがいたまさにその場所は焼け野原になっていた。

「俺が手本見せるからさがってて。簡単に言うとな、一撃入れるごとに砲撃が発射されるんだが……一定以上の負荷が加わると砲撃が発射されない様になってる。」

アルスはそう言うとな、一直線に走りだし、右腕を引き、踏み込む。その時、地面にひびが入り、

一撃！――

一撃がヒットする。その勢いで、跳躍し、

一撃――

かかと落としを見舞いする。その時、魔力が集束される。それを見たアルスは爆転をし、回避。そこには焼け野原を通り越して、地面が少し抉れている様子が覗える。

「まあ、こんな感じで。」

「出来る訳ないでしょ！」

一殴！――

なのははアルスの動きを見て、頭を魔力強化入りで殴る。

「……痛い……。」

「ご、ごめん……。けど、無理だよ！」

「……なら、少し難易度を下げるか。最弱から十発ごとに1つつ上げていく。止まったら、そのレベルで訓練な？」

「魔力行使ありでいい？」

なのはは聞く。

「ありで良いぞ？ 言っておくけど、魔力行使なしで俺はあのレベルクリアできる。でも、お前は“有り”の方がいい。」

「いや、なしでできるところまでやってみる。それから魔力を行使するよ。」

「怪我するなよ。」

「怪我したって、アルス君がいるから。」

アルスの言葉になのはは返ししながら、前に踏み出し、構える。

「道具か、俺は。」

「違うよ。」

なのはがそう言い、アルスの方を見る。

「仲間だから。ちゃんと私の事を考えてくれると思うから♪」

なのははそう笑顔で言う。アルスは照れ笑いをし、言う。

「そろそろ始めるぞ？」

「うん。」

なのははそう答え、構える。そして、駆け出し、右腕を後ろに下げ、狙いを定め、

一殴一

一撃を入れる。さらに、跳躍し、踵落としを入れ、空いた方の足でサマーソルトを入れ、着地する。その後、左の拳と右の拳で一撃を入れる。

「なかなかのもんだな。技術を盗むって、こういう事なのか？」

アルスはそう呟き、なのはの訓練に付き合っていた。

＊

場所は変わって病院。

「そう言えば、リタは何時から来たんだ？」

そこに居た黒髪の男は聞く。

「結構前からかな？でも、エミルの後にこっちに移したはずなのにね。」

リタはそれに答える。黒髪の男、エミルは「確かにな。」と言い、沈黙の時間が流れる。その時、リタの口が開く。

「ゼロ、今どうしてるんだろうね？」

「さあな。でも、目覚めてない時でよかったな。…別な意味で。」

「どういう事？」

「アイツは並行世界に飛ばされる際に隊長陣しかいなかったらしいからな。お前が起きてたらまたアイツは…」

「そこから先は言うな！」

リタはエミルの声を遮り、言う。

「解ってるから…ゼロは私達に託したくらい…。」

「リタ…。」

そんな時、扉が開く。

「…起きてるみたいだな。」

そう言い、少し天然パーマがかりの青年が入ってくる。

「誰だ？お前。」

エミルはそう言い、厳しい視線を向ける。

「神崎刹那。ゼロの知り合いだ。」

男…刹那はそう言い、リタの隣に座る。

「フェイトさんが調子はどうか気になるから見て来いと言っていたが、そうでもないな。二人とも。」

刹那はそう言う。

「フェイトさんも知ってるって事は…。」

「ああ。御察しの通り、俺は六課だ。」

「やっぱり！」

リタと刹那はそんな会話をする。それにエミルはついていけずに不貞寝している。

「案外子供なんだな。」

「何時もあんな感じです。」

「そっか。」

刹那はそうして、リタと会話をし、キリの良い所で出ていった。

＊

病院の外。そこに刹那は立ち、通信回線を開いた。

「フェイトさん、聞こえますか？」

『うん。刹那？』

「はい。とりあえず見てきました。」

『どうだった？』

「結構元気でした。けど…」

『けど？』

「結構気になるみたいでした。ゼロの事。」

『確かに、私も気になるし…。今度、念話しようか。なのは達も一緒に。』

「そうですね。」

刹那はそう会話しながら、歩き、自宅の方へと向かった…。

NEXT STAGE', ,



立ちあがれ♪気高く舞え♪定めを受けた戦士よ♪

今日の担当

・ゼロ ・はやて ・リタ
・フェイト ・なのは ・エミル

ゼロ

「さて、“ZEROの境界線”の始まり始まり♪」

エミル

「待てい！」

ゼロ

「どうした？」

エミル

「何だ“ZEROの境界線”って！！可笑しいにもほどが有るだろ
！」

ゼロ

「いや、だってカンペにね？そう書いてあるんだし。」

エミル

「この野郎！」

ゼロ

「スタジオを壊すんじゃないえ！」

一殴！一

エミル

「ぐはっ！」

フェイト

「とう！」

一撃！一

一同

「エミル、滅！」

ゼロ

「さて、決まったところでおさらいだな。」

リタ

「気を引き締めて点滴を打とう。」

フェイト

「と言う訳で。」

なのは

「考えてみれば、凄かったよね。今回の後書き。」

はやて

「そうやな。ゼロ君がフェイトちゃんの方に蹴って、フェイトちゃんはライオットザンバーを…。」

フェイト

「なのははその時に蹴りでサポートして…」

なのは

「はやてちゃんはラグナロク…」

はやて

「リタちゃんはインディグネーション…。」

リタ

「さらにゼロは新技…。」

一同

「……。」

ゼロ

「さて、今回のOPはJAMPprojectで、“未来への咆哮”でした♪」

はやて

「今回はカオスやったな…。」

ゼロ

「そう言うなって。楽しかったぜ?…俺が。」
はやて

「まさかの!?!」

フェイト

「突っ込んでいくと時間がなくなるから次回予告に行こう?ね?」
なのは

「そうだね。じゃあ、私から。」

なのは

「ゼロはその日、訓練内容を考え、眠りに着く。」

フェイト

「そんな時にアラートが鳴り、出撃する。」

リタ

「そこに居たのは影。何を意図するものか、そこにはギルも居た。」

ゼロ

「そして、元の世界ではスカリエッティへ突撃準備が進められていた。」

はやて

「次回、一戦慄と準備と覚悟と…。」

フェイト

「明日の夜空へ!」

一同

「Drive ignition!!」

エミル

「……お花畑が…。」

ゼロ

「起きろ馬鹿野郎。」

第4話一神帝と運命（さだめ）一（後書き）

クロスリレーは明日辺りに始動させようかと思えます♪

参加してくれる作者様は二階堂さん、キラーさん、東吾さん、クロックさん、godaccielさんと銀吟さん、そして、この俺、ZEROでやっていくことにしました♪何か有ったら、感想でもメッセージでも宜しくです♪では♪

第5話 戦慄と準備と覚悟と…

ここはゼロの部屋。さらに、そこでベッドに乗って寝ているゼロ。

「なあ、テンペスト。」

〈何ですか?〉

ゼロの言葉にテンペストは返す。

「アリシアは気に入ってくれんのかな? お前の事。」

〈…それは解りません。フェイトさんと同じ立場、戦場に立てば、そう考えれば嬉しいかもしれないし…。〉

「だな。なんて言うだろうな…。」

〈マスター。来客です。〉

「?、出してみるか。」

〈そうですね。〉

ゼロはそう言い、起き上がると扉を開く。そこに居たのは…

「アリシア?」

「うん。でも、貴方が知っているアリシアとは違うけどね。」

「…知ってる。で、どうしたんだ?」

「少しだけ挨拶しようと思って。で…」

「通りかかったら変な話を聞いて盗み聞きか?」

「…うん。ごめん。」

アリシアは頭を下げる。ゼロはそんな光景に苦笑いし、テンペストを見る。そして、アリシアに向き直る。

「いや、変な話なのは本当だったし。良いよ。入るなら入って。」
「うん。お邪魔します。」

ゼロはアリシアが入るのを確認してから、扉を閉めた。

「入って行ったな。如何する？」

そこから覗く4つの人影。昶とはやてと千華とフェイト。昶はそう言い、

「如何する？決まってるやろ。」

はやてが言い、

「盗聴よ♪」

千華が言う。

「それは流石に拙いと思うよ…はやて。千華。」

フェイトが止めようとするが、昶が賛成したおかげで結局聞くことになった。結局面白ければ何でも良いのが千華とはやてだったという証明だった。

＊

沈黙が流れる部屋。話す内容がないだけでこれだけ苦勞する物とは思わなかった二人は別な方を向いて話題を探している。

「…あのさ。」

そこでゼロが口を開く。

「ん？」

「アリシアは“神藤”って名前が付いてるけど、昶と関係性でもあるのか？」

「うん。とりあえずはね。」

「そっか。」

また沈黙が流れる。拙い…非常に拙いな、この空気…。そんな事を考えながら頭を抱える。

〈マスター。〉

「だぁ！テンペストか。如何した？」

〈扉の外に魔力反応が。〉

「…ほう。ちよっくら弄るか。ランサー。」

〈了解。〉

ゼロはランサーを浮遊させたまま、外に出る。

*

「Hello?お四人方。」

《!!!!!!》

四人が気付いたところにはすでにゼロはキレているところだった。

「違うんやて！昶が！昶が！！」

「違うでしょ！先輩じゃないですか！盗聴しようって言ったの！」

「言い訳はいい。とりあえず、確信犯は誰だ？」

《昶!》

「違う!」

「よし。皆だな?」

ゼロは一通り会話を聞いた後にランサーを動かす。

「命乞いは?」

「駄目♪逝け!…フェイトと千華以外。」

「「なぜにいいいいいいいい!!」」

昶とはやては魔力弾をぶつけられ、気絶する。それを見てゼロは昶を担ぎ、はやてを俗に言うお姫様抱っこした。

「さて、昶とか運ばないといけないな。二人とも後で何か奢るからこいつ等の部屋教えてくれ。」

「「う、うん。」」

そして、足を動かそうとしたところで、アリシアが出てくる。

「あれ?三人ともどうしたの?」

「こいつ等が盗聴してたから、少しだけ懲らしめたんだよ。」

「そうよ♪アリシア姉さんとゼロはいけない関係にならない様になければ!とか言ってるね♪」

「完ッッッ全に違うよな!?!可笑しい事になってるぞ!」

「気にしない♪」

「気になるから!」

ゼロは千華にツツコミを入れながら、話す。

「まあいいや。行こう。こいつら置いてこなくちゃいけない…」

ゼロがそこまで言った時にアラートが鳴り響く。

「い…て、こんな時にどうかと思うな。しゃあない。フェイト、アリシア、千華、こいつ等の事頼んだ!」

ゼロはそう言い、受け渡すと屋上まで一気に走り抜けた。

＊

「SEED!」

ゼロは屋上に着いた途端に自身のISを発動して、敵影を見る。

「距離は…まだ後三分つてところか。あれは…ギル!? まさか!」

ゼロはISを即座に解除し、集束砲を放つ。ギルはそれを確認して、右手を上げる。すると周りにいたシャドウの形が変わり、ギル自身の身を守る。

「やっぱりか! テンペスト!」

〈マスター。それだけはやめた方がいいです。〉

「ここで止めたら、安心できねえよ! 行くぞ!」

〈マスター!〉

「…すまん。」

ゼロはそう言うと、テンペストを地面に置き、屋上から飛び出した。

〈マスター!?!〉

「大丈夫だ! 頼むぜ…。契約開放!」

ゼロはそう言う、右手を突き出す。するとそこには赤い翼をもつ一人の戦士がいた。ただ、前と違うところは自身で制御できるようになってきたため、瞳の色が翡翠である点。

「アルタード・ストラトス。出る！」

アルタードとなった彼は翼を広げ、剣を引き抜き、突撃した…。

＊

「はぁ！」

「む。来たか。」

一閃！

ぶつかり合う二つの影。片方はアルタード。もう片方はギルだ。

「一日振りか？運命の戦士よ！」

アルタードはギルを見据え、言う。

「ギル：お前はここで落とさせて貰おう。」

「はたして、それが御前にできるのか？」

「どういう意味だ？」

「私はお前とは違う紋章を持っている。つまり…」

ギルはそう言い、右手を前に出す。

「戦闘経験の差がものを言うのだよ！」

そして、灰色の光が彼を包み、姿を現す。背中にバックパックの様な丸い物を背負い、右手に高粒子砲、左手には魔力刃を持つ剣が握られている。

「……貴様が何年戦おうが知ったことではない。俺にとってはな。」

アルタードは剣を構えなおす。

「だが、その通りにはならんことを証明しよう。」

「笑わせる。別に私一人で戦おうと言っていないのだよ。」

「どういう…!!」

アルタードはそこまで言いかけて、何かに気づき、回避。そこには、一筋の赤い光が通り過ぎていた。

「伝説ってか？向こうにとっちゃあGood timingでもこっちにとっちゃあBad timingな訳だな。」

アルタードはそう言う。そして、ギルの隣に降り立つ影を見る。

「今回は、機動六課の機能を効かなくすることのはずだったのではないのか？ギル。」

「そう言うな。レイ。むしろ、好都合だ。こんな獲物に巡り合えると言う事がな。」

レイと呼ばれた人物は「なるほどな。」と言い、ランサーを展開した。

「つまりは…こいつをおびき寄せるための代償と言う訳か？」

「そう言う事だ。やるぞ。」

「了解。」

そして、ギルとレイは左右に展開し、ランサーを飛ばす。

「炎・旋竜！」

アルタードは剣を振り、魔法陣を展開。そこから、渦を巻くように炎が昇って行った。

「このくらいという事はないとな？それは見当違いだ。」

ギルは言う。

「それはどちらのセリフか解らんな。」

そのセリフは彼の後ろから聞こえた。そこに居るのは、先ほどまで持っていた剣とは違う剣。

「絶対勝利の剣。エクスカリバーこれがこいつの名前だ。」

「ほう。だが、隙を見せすぎだ！」

ギルは後ろのランサーに指揮をし、砲撃を放つ。

一射——閃！——

それは、一つの影によって、阻まれる。

「俺がそこまで馬鹿ではない事くらいわかっているだろう？」

そう、降って来ていたのは、“旋竜を使う時まで持っていた剣”彼の剣が変わっていたのはそのためである。

「でも、もう終わりだな。退いた方が良いぜ？多対二じゃ、分が悪
いぜ？」

そう、アルタードがそう言った時にそこに居たのは、機動六課の戦
闘メンバー達。

「勝手に出ていくなって、毎回言ってるだろうが！」

昶は来てすぐに言う。

「：今回は初めてじゃないか？」

「そうね。」

「わぁ。昶って超馬鹿なんだね。」

千華とクリエイターは言う。

「うるせえ！悪いか！」

「それ言ったら認めたことなるぞ？」

アルタードはそう言うと、エクスカリバーをしまう。

「テンペストも慎重すぎるんだよ。そもそも思い立ったら即行動。
だろ？」

「マスター。思い立ったら吉日。ですよ。✓」

「む。」

アルタードは頭を掻きながら言うが、その翡翠の眼は相手を見てい

た。

「さて、やるぞ。行くぞ。」

「ぐ……。退却する！レイ！！」

「了解した。」

レイは即座に魔法陣を展開し、ギルと共に転移した。

「契約凍結。フレイムウイング展開。」

ゼロの容姿はいつもの黒い軍服に戻り、背中には炎の翼が展開された。

「はあ。一時はどうなるかと思った。」

「ゼロ君？」

ゼロは悪寒を感じ、ゆっくりと後ろを振り向くと物凄い笑顔な三人が映っていた。そう、なのは、フェイト、はやての三人。

「お話を避けるにはどうすればいいのかな？」

「そんなの……」

なのはが口を開き、その後

「「無理に決まってるでしょ♪」」

と三人同時に死刑宣告。

「ふ……。」

「だから、勝ちましょう。主、はやて。」

「…そうやな。頑張ろう♪」

「はい♪」

そう言い、二人は拳と拳をぶつけた。

＊

「Lv100ある内99までクリアか。集束砲なしでこれだけできるとはな。」

アルスとなのはは格闘サンドバックを使い、訓練していた。なのは魔力行使なしでLv81まで、行って、少しアルスは驚いていた。

「アルス君！」

「OK。じゃあ、これがLv100だ。」

そう言い、手元のコンソールを動かし、Lv100にする。

「はぁ！」

なのはは右の拳を体のアクションすべてと魔力行使をして、入れる。

「スバルと似てるな。やっぱり。」

「アルスもそう思うか。」

「ああ。」

先日退院したばかりのエミルとそんな話をして、なのはの様子を見る。

「やあ！」

一撃！一

なのはは左の拳を入れ、

「せい！」

一撃！一　一撃！！一

その勢いで左の足技を入れ、さらに右の踵落としを入れる。そして、アルスの手元のコンソールに“complete”の文字があらわされる。

「なのは。休憩入れるぞ！」

「は〜い♪」

そして、なのははふらつく足でこちらに来て、座った。それも其の筈。なのはは足技の行使は“今回”が初めてなのだから。

「あれじゃもう無理だな。」

「本当？」

「ああ。ほれ。」

アルスはそう言い、なのはにコンソールを見せる。そこに書かれていた文字を見てなのはは嬉しそうにする。

「これで、ゼロ君が来ても大丈夫だね♪」

「…俺に一撃入れるようになればな。」

アルスはそう言うと、立ち上がる。

「休憩は終わりだ。最終工程は俺と模擬戦をして一閃を入れることだ。レイジングハートは俺の方で遠隔でシステム入れたから大丈夫だし、気にしないで戦え。」

「：行ける？レイジングハート。」

〈Of course. Master. Let the effort!（もちろんです。マスター。全力でやりましょう!）〉
「うん♪レイジングハート、セットアップ!」

〈standby ready set up.〉

そして、なのはは格闘戦闘のフォームにチェンジする。変わったのは、白の軍服になっている事。俗に言うなのはがフェイトのバリアジャケットを少し改良してきている様な物。さらに、両腕に手甲が付いている。

〈I do not know, master?（どうでしょうか、マスター?）〉

「大丈夫だよ。違和感もないし。」

〈I'm glad to favorite servants.（お気に召して光栄です。）〉

「そろそろ良いか?」

レイジングハートとなのはが話しているとアルスがそう言い、なのははそちらを向く。

「うん。大丈夫!」

「なら行くぞ。ready……。」

二人は構えなおし、足に力を入れる。

「「GO!!」」

そして、飛び出した。

＊

「はあ！」

最初に先手を打ったのはなのは。アルスは軌道を即座に判断し、首を逸らすことで避ける。

「無駄な動きが多いか？違うな。これは誘導か。」

アルスはそう言い、即座にプロテクションを張る。

「やっぱり駄目か…次の手は…。決まった。レイジングハート！」
〈all right. Load cart ridge.〉

そして、手甲が動き、空葉莢が二発出される。

「身体強化…スフィア精製…。これで！」

なのははそう呟き、足に渾身の力を込め、一気に距離を詰める。

「やあああああ!!！」

そして、右足を叩きつけ、次に左足。それをアルスは防ぐ。ここまでは予想通り。次に、右腕に魔力を纏わせ、

何がどうしたか、笑うアルスに近づく二人。

「如何した、格闘バカ!？」

「いや、凄く面白くて。なのはが俺を越えれそうになったことがな。ああ。久しぶりに笑った。」

「じゃあ…。」

「ああ。合格♪レイジングハートに公式にそのモードを使えるようにしとくよ♪」

アルスがそう言った途端に、なのはは喜び、エミルとアルスは顔を見合わせる。そして、三人で笑い合った。

＊

『…と言うことらしいです。概要的にはですけど。』

「うん。わかった。ありがとうね。刹那。」

『いえ。ではまた後ほど。』

「うん。」

場所は変わってフェイト宅。今、通信を終えたところ。

「……ゼロ、戻ってくるかな…?」

「大丈夫ですよ。フェイトさん。」

「エリオ…キャラ…。」

「隣、良いですか?」

「うん。」

フェイトはそう言うと、右にずれ、エリオとキャラはそこに座った。

「ゼロさん、フェイトさんと約束したんでしょう? きっと戻ってく

るって。」

「うん。」

「なら、信じましょう。あの人なら、ね？」

「そうだね。今、私を信じてくれているのに、私がゼロを信じなきゃいけないのに何してるんだろう。もっとしっかりしないと。」

そう独り言のように呟き、その後、

「そう言えば、さっき刹那さんから何の通信だったんですか？」

とキャラロが聞く。

「ジェイル・スカリエッティへの攻撃作戦。その内容をね。」

それにフェイトは答える。

「そうですか。でも、定石で“英雄^{ヒーロー}は必ず遅れてやってくる。”て言うのがありますし。信じましょう。」

エリオはそれを聞き、言う。

「そうだね。」

フェイトもそれに返す。決着をつけないといけない。その思いと共に…。

Be continued,,



I c a n f l y!

ゼロ

「HEY!」

Y o u c a n f l y!

はやて

「HEY!!」

W e c a n f l y!

エミル

「HEY!」

一同

「MOTTO MOTTO!!」

今回の担当

・ゼロ ・エミル ・なのは
・フェイト ・リタ ・はやて ・祐S…（ry

ゼロ

「さあ、始めました!“ZEROの境界線”」♪

エミル

「心なしか、作者の別キャラが見えた様な…。」

リタ

「気のせいだ♪」

エミル

「いや、でも…」

はやて

「エミル。あんまりそう言うこと気にしてると…。」

一同

「禿げるで？」

エミル

「なぜに！？てか、関西ですか！賛同しちゃいましたか！？これえ！」

ゼロ

「さて、おさらいおさらいっと。」

リタ

「実は実力なんて出すつもりないんじゃないかねえ？」

ゼロ

「つて、事。んで、作者からこんな紙を預かっているのだが。」

――
作者ZEROから♪

――ども♪ZEROです♪最近は年度替わりで忙しいみたいだけど、あまり感じない俺は鈍感かな？まあ、そ

――れはさておきまして、今回、新しい小説を執筆しようと思いましたが…一応、上げたんですが、まだ

――不安が残りますね…。と言う訳で少し皆さんに協力してもらいた
いと思います♪協力って言うのは

――最近書いた、“魔法少女リリカルなのは―Eyes attri
bute―”を連載するか否か、皆さんに決め

――貫おうじゃないですか！と言う事で、アンケートを開始いたします♪
実際、更新は少し遅れますが、

――ストーリーかぶりはないと思うので安心をば。で、俺のことは一
切考えない方向で、感想、

—メッセージ、活動報告：そのような感じで連載するか否かを入れてくれるとありがたいです♪

—まあ、K I Z U N Aが三人称、E Aが、一人称で進めたいと思うので宜しく願います♪

—

—ではでは♪

—P S ..

—何かアドバイスとかが有れば宜しく願います♪

つ

ゼロ

「カオスリレー（詳しくは、L C W ~L y r i c a l c h a o s
t h e w o r l dの略）で♪）の時よりヴァージョンアップし
てないか？これ。」

エミル

「…言えるな。どんどん上昇して行くな。」

はやて

「化け物か!？」

フェイト

「某機動戦士ものの赤い人の真似は良いから…。」

はやて

「む。なんか最近冷たくなってきてない？」

ゼロ

「何らかの気のせいだろ。さて、連絡事項もオワタし。」
なのは

「次回予告に行こうか？」

ゼロ

「そうだな。」

ゼロ

「ギルに対抗すべく特訓をする俺らだったが、レイの存在により、それは無と化した。」

リタ

「そこで、ゼロは強攻策に出る。」

エミル

「その内容とは…。」

はやて

「一方、元の世界では準備が終わり、作戦開始が告げられていようとした。」

フェイト

「決着をつけるため、私達は往く。」

なのは

「次回一強攻策？決戦？一明日の大空へ！」

一同

「Drive ignition!!」

第5話 戦慄と準備と覚悟と… (後書き)

と言う訳で、皆さん、アンケートの回答待ってます♪

第6話 一強攻策？ 決戦？ 一

「ギルだけではなく、レイも居るってなると…。」

ギルの襲撃から、二日が経過しようとしていた。

「少し強行だけど…やるなら二日後だな。」

そう呟き、テンペストを取り出す。さらに、ブレイブフォースに念話を繋ぐ。

（聞こえるか？ブレイブフォース。）

（…はい。マスター。）

少しの間が有ったが、ちゃんと繋がっていた。

（繋がっていたか。アリシア出せるか？）

（アリシアさんですか？ちょっと待って下さい。）

少しの間。その間に、アリシアのデバイスを作るべく、テンペストを机に置き、端末を起動させる。

（ゼロ？如何したの？）

その時に元の世界のアリシアから通信が入る。

（ん。実はさ、お前に作ってたデバイスが有るんだけど…。）

（好意は有り難いんだけど、アイセスが居るから。）

（そっか。なら、こっちの世界に居るアリシアにあげていいか？）

（うん。大丈夫。）

（そっか。なら良いんだけどさ。これから整備するから切るな。）
（うん。じゃあね♪）

（ああ。）

そして、念話を切る。

「さあ、どのくらい時間がかかるかな？」

そうゼロは呟き、作業を開始した。

＊

「ゼロ、遅いな。もう訓練の時間なのに来ない。」

昶達は訓練場の前に立ち尽くしていた。

「確かに。何か有ったのかもね。」

その時、偶然来ていたアリシアも言う。

「まあ、その内来るわよ。」

「そうだな。訓練をしてよう。」

昶の言葉に皆は頷くと、訓練場に入って行った。

＊

「…どう思う？ フェイトちゃん。」

「…似てると言えば似てるけど、何か違う気がする。」

「やっぱりそう思う？」
「うん。」

一方、はやてとフェイトはこの前の戦闘の映像資料を眺めていた。

「フェザーランサー：やっぱり、高等魔導師が使える魔法や。普通じゃ使えへん。」

「それは言える。幾つも戦場を駆け抜けたんだろ。あの三人は。」

「ゼロ君、レイ、ギル：この人達、何者なんや…。」
「繋いでみる？ 念話。」

フェイトが提案する。

「いや、通信の方がいいやろ。昶が言うには、元の世界の私等と会話してるらしいから。」

「そっか。わかった。」

フェイトははやての言葉に了解して、通信を開いた。

＊

「さて、後何分で工程が終わるかな…？」

ゼロは今、アリシアのデータを開き、眺めていた。その時、通信が来て、開く。

「こちら、ゼロ。」

『あ、聞こえる？』

返答が来る。その声の主はフェイトだった。

「ああ。聞こえる。」

『ちよつと聞きたいことが有るんだけど…。』

「答えられる範囲なら大丈夫。で、何？」

『フェザーランサーの事で少し。』

「…あれは如何言った系統の武器かという、遠隔制御系になるかな？」

そう言うことか。そう思うと、ゼロは説明する。

『遠隔制御？』

フェイトは語尾を上げた。解りずらかったか？ゼロはそう思い、さらに続ける。

「そう。まず、射出体となる物を精製し、射出。その後、コントロールして、当てさせるんだよ。」

『…そうなんだ。』

「解ってないだろ。」

『…ばれた？』

「間が有ればばれるだろ。まあ、データ映像渡すからそれで確認してくれるとありがたいな。」

『うん。それと、何してるの？』

フェイトは通信中ずっと動いていたゼロの手が気になり、聞く。

「アリシアのためのデバイス改修作業。まあ、名前は決めて貰うけど。」

『そうなんだ。手伝おうか？』

「いや、俺一人でやりたいんだ。そっちも忙しそうだから切るな？」
『うん。じゃあね。』
「おう。」

そう言うのと、通信を切り作業に戻る。

「…いつもの半分位で大丈夫かな？時間は。」

そう独り言をつぶやくと、作業を再開した。

「お。結構魔力値が高いのか？成程。」

ゼロはそう呟き、作業を続ける。

＊

…二日後。ゼロの作業も最終段階へと進んでいた。

「…OKだな。後は、これを転送して…」

ゼロはテンペストだった、赤い宝石をアリシアの部屋に送ると、立ち上がる。

「さらにその後は、俺の勝手で命令違反で、俺のけじめだ。」

そう言うのと、転送魔法陣を発動した。

＊

「……。場所は…よかった。六課から大分離れてる。」

ゼロは場所を確認して、安堵のため息をつく。それと同時に、スフィアが幾多も飛んできた。

「!!」

ゼロはそれを、跳躍してかわすと、グローブを外す。

「契約開放！」

それを告げると、運命の容姿となり、赤い翼を羽ばたかせ、上昇。それと同時にギルとレイも出てきた。

「御苦労様なこったな。ギル。レイ。」

「貴様もむざむざ死にに来るとはな。」

「“死にに来る”？それは間違いだ。“終わらせに来た”んだよ。」

一斬！一

その言葉をアルタードとなったゼロが発した瞬間、レイの体は無数の切り傷によって、血だらけになり、崩れ落ちる。

一斬！一

アルタードはそれをさらに斬り上げ、

一撃！一

踵落としを一発決めて地面に食い込ませる。

「…この宿命とな。ギル。」

「…面白い。どちらが冥界に行かせられるか。」

「どちらが、元の世界に戻るか。」

アルタードは剣を引き抜き、ギルは銃を構え、

「決闘と行こうじゃねえか！／＼ないか！」

そして、アルタードは駆け出した。

＊

「…ゼロ、これじゃ逆に心配するよ。昶も、千華ちゃんだって…。」

アリシアは自分の部屋に赤い宝石と書置きがあるのに気が付き、手にとって読む。その内容は、別れの言葉、それと、俺を忘れないようにと、このデバイスを。とのことと最後に

「ごめん、皆…か。」

そう。この一言。

「命令違反だったら、何でこんなことするのさ…。なんで、演奏を聞かせてくれなかったのさ…。あっちのフェイトの話聞いて楽しみにしてたのに…。」

そう言うアリシアの眼には涙が貯まっていた。

「一人で…死なせない！」

へマスター、アリシア。へ

「解ってる。貴方の名前は、“バルディッシュ・テンペスト”。記憶はないと思うけど、これが本来の名前。」

△了解しました。▽

その言葉に少しでも微笑むと、アリシアは転送魔法を発動した。昶がそれを見ていたのに気付かず。

「∴そろそろ、ええ頃か。」

「だと思えます。」

元の世界で、はやてとブレイブフォースは話していた。

「ブレイブフォース、頼める？」

「ええ。お任せ下さい、はやて。」

ブレイブフォースはそう言うと、伝達を各デバイスに渡した。

「解るんやろ？場所って言うのが。」

「ええ。本来のミッションの開始。という感じでここに集合させるように。」

「ありがとうな。」

「いえ。マスター、ゼロに戻るまでの間です。」

「∴なあ、ブレイブフォース？」

はやてが少し間を置き、聞く。

「はい？」

「何でゼロの事を主って呼ばないんや？」

「…主はやてと間違えそうで怖いからです。」

「でも、そんな事今まで無かったし…。まさか、またあんな事になるって恐れ取るんか？」

それを聞いて、黙りこんでしまう。どうやら凶星らしい。

「大丈夫や。ゼロだけやない。私達も着いてるんやから。安心しとったらええ。」

「そうですね。」

その時、扉が開き、シグナムが入る。

「主はやて。皆が集まりました。」

「ん。ありがとうな。行こうか。ブレイブフォース。」

「はい。」

そう言うのと、はやて宅の前に集合していた六課隊員達に連絡すべく、部屋を出た。

＊

「ブレイブフォースからも連絡が有ったと思うけど、今日は作戦の概要の最終確認や。まず、私達は、オーストラリア周辺のここに攻撃をする。」

はやてがそう言い、指差したのは海上。

「でも、海上じゃなくて、陸戦もできる様にするから。それに、スカリエッティはロストログアを保持している可能性がある。そこも注意や。それと…。」

はやては俯き、眼を閉じ、開き、言う。

「ゼロは、絶対に助けに来てくれる。だから、もう少し待ってな。攻撃開始は明日。しっかり睡眠とかとるようにな。」

《了解!》

はやてはその言葉に頷くと、「ほな、解散な。」と言って解散。その後、はやては自分の部屋に入った。そして、ベッドに倒れ込んだ。

「何で…こんなに大切な時に来ないんや…ゼロ…私等にはあんたが必要や…。」

そう呟き、枕を涙で濡らした。

「はやて…。」

ゼロはその頃、シャドウとギルと戦闘していた。

—G A A A A A A A A A A A!—

シャドウの叫び声が聞こえ、ゼロは右腕をたたき込み、蹴りを入れ、撃墜。さらに、スフィアで撃墜。

その時、後ろから斬撃が迫る。

「!」

ゼロは消耗してる体で反応しきれず、刃はゼロに着くつかないくらいまで迫っていた。と、その時。

一撃！・斬！一

集束砲と斬撃がシャドウに襲いかかり、シャドウは沈黙する。

「テメエは…怪我して向こうの先輩達にどうするつもりなんだよ！」

「ホントだよ。これで死んだら、私達が処理しなくちゃいけないんだよ？」

「アリシア…昶…。」

「私達も忘れて貰ったら困るで？」

そこに居たのは、昶とアリシアとはやて達。

「はじめなんだ。お前等には関係…『あるに決まってるんだろ！』…。」

その時、昶はゼロの胸ぐらを掴む。

「テメエは自分で自分の事かたずける悪い癖が有るくせして、何で俺達に頼んねえんだ！俺等だって、アリシア姉の連絡がなかったら、お前、怪我するところだったんだぞ！それを他人事扱いしろってか！俺等は一人じゃねえ！チームなんだから、仲間を頼れ！」

「昶…。」

ゼロは胸ぐらを掴まれたまま、言う。その後ろにシャドウが近づいていたのを見たゼロはスフィアを当て、沈黙させる。さらに昶の手を離し、言う。

「そうだな。雑魚は頼んだ。俺はアイツと決着を着けなきゃいけないし。：頼んだぞ。」

そう言い、笑顔を見せると、翼を広げ、飛び立った。

「ふ。何人増えようとも相手は同じだろうが！レイ！」

ギルがそう言うのと、レイがムクリと起き上がり、生気の無い赤い目を見せる。

「こいつ：シャドウ！？」

「やるしか：ない様ね：。」

レイは右手を上げると、シャドウが無数に出てくる。

「く：。多いな：先輩！」

「任しとき！しっかりバックアップするで！」

「了解！行くぞ！千華！アリシア姉！」

「「解ってるって！」」

そう言い、三人は一気に飛び立った。

Be continued,,



失敗だってGood night♪夜逃げするこゝとも、わゝるく
ないゝよね♪きゝつと♪眼が覚めて、わすれちゃうみゝんなゝ♪

今日の担当

・ゼロ ・はやて
・フェイト

ゼロ

「さて、本編のバトル空気をぶっ壊す“ZEROの境界線”。」
はやて

「始まるで♪」

フェイト

「今回は、バトル中心の内容だったね。」
ゼロ

「そうだな。今回のおさらい。」
はやて

「魔王は格闘があつてこそその魔王。」

フェイト

「という訳で。って、なのはに怒られるよ…。」
はやて

「安心せえや♪砲撃受けるのはゼロだけやから♪」
ゼロ

「それは俺に飛べと!?!」
はやて

「何を今更。」
ゼロ

「俺の扱い酷くね!?!」

フェイト

「ゼロ…これは元々だよ…。」
ゼロ

「……だな。今回は、元の世界は出さない様だし、次回予告行こうか。」

フェイト

「そうだね。」

フェイト

「遂に始まったギルとの決戦。」
はやて

「そこで、ゼロは隠し持つ能力全てを使い、戦うこととなる。」
ゼロ

「勝敗はどちらに傾くか？次回一宿命が閉じる時。一碧き大空へ！」
一同

「Drive ignition!!」

三章、異世界最終話―宿命が閉じる時。―（前書き）

重要なお知らせの所で、少し引っかかるかな？と思ったので、タグに残酷な描写が付いていますが、気にしないで下さい♪それでは、どうぞ♪

三章、異世界最終話―宿命が閉じる時。―

「はあああああああ!!」

「ふあああああああ!!」

―閃!・撃!・閃!―

散る閃光。そう、ギルの剣とゼロの拳の物。

「っ! やっぱ痛いな…。」

「ぼやぼやしてる暇が有るのか!」

ゼロは左手を庇いながら言う。そこに集束砲が飛ぶ。

「っ!」

ゼロはそれをプロテクションで防ぐ。当然、デバイスの補助なしのこれには欠点が一つ二つある。

―疲労の増加―

と

―強度の弱さ―

である。強度は何かなるかもしれないが、その分、体力が持っていられる。実際、ゼロもそうだ。その砲撃を彼は防ぎ切る。

「くそッ! ランサー!」

一射！一

そして、背中の羽から槍状の物が勢いよく射出された…。

＊

「フローゼン・ダイヤモンド！」

一撃！一

巨大な氷塊を蹴りで破壊する人影。そう、レイと名乗りしシャドウに昶達は苦戦していた。

「何やっても聞かないわね！」

「…テンペスト、何か有る？」

千華が悪態をつき、アリシアが聞く。

〈…もっと威力を出せますか？攻撃で割れない程の威力をぶつけるくらいです。今できるのは。〉

「…だめだね。他に何か有る？」

〈有るにはありますけど、危険度が高くなります。〉

「あるなら、やろう。それがゼロにとっても、助けになるから。」

〈連携で、超高速攻撃。けど、これには弱点があります。〉

「その弱点って…っ！皆離れて！」

アリシアが何かに気づき、皆に言う。

一射！・撃！一

その時、翡翠色の閃光が先ほどまで居た場所を通り過ぎた。

へこれです。このランサーの攻撃が、速度を落とし、攻撃の隙を与えてしまいます。く

「：つまり、攻撃の隙も与えずに、奴を倒せばいいんだな？」

へそう言うことです。けれど、AAAランクの攻撃を瞬間的に当てなくては…。く

「そう言うことなら…。キャロが居る！」

『了解です！ブーストオン！』

その言葉を耳にした瞬間、皆のデバイスが白く光る。

「行くぞ！アルトリア！」

『はい！』

「私達も行くわよ！アルクェイド！」

『任せなさい！』

「『』『ユニゾン・イン！』『』『』」

そして、二人の髪の色などが変わる。

「逆巻け！風王！」

へLoad cartridge.く

そして、昶の剣から、空葉莢が排出される。

「ストライク…」

『エア！』

一閃！・轟！一

そして、技が放たれ戦いは始まった。

＊

「くっ！」

「その程度か！貴様の力は！」

一撃！・砕！一

ゼロは吹き飛ばされ、近くに有った岩を砕く。その衝撃を和らげるかの様に剣を突き刺し、体勢を元に戻す。

「…その程度？今までの様子見に決まってるだろうが。こっからが…。」

その時、魔法陣が足元に展開される。

「本番だ。I S、不死鳥system、共にグリーン。最大稼働。」

そして、新たに、羽根が生える。その羽根に炎をともして居る。さらに、ゼロの瞳が深紅の色になる。

「来たれ…壱弐芒星。参芒星。」

そして、右で十二、左で三芒星の魔法陣を描く。

「盾と成れ、三芒星！」

そして、左腕に吸い込まれる。さらに、右腕の芒星にゼロは手を突っ込み、弓を取り出す。

「さあ、行くぜ！」

「ならばこちらも！」

一射！一

ギルはランサーを放つ。ゼロは左腕を前に出し、防ぐ。

一閃！一

その時、ギルの顔を集束砲が通り過ぎ、かすめた。そこに居たのは…。

「なっ！」

自分の背丈の三倍はあるだろう弓を持ち、矢をつがえ、笑っているゼロだった。

「…これが、俺の奥の手V e r . 1だぜ？」

「ふ。面白い。」

「八神ゼロ・S・A・ハラウン。宿命の明けない朝を終わらせるために、今…。」

ゼロはそう言い、弓を構える。

「推して参る！」

そう言い、矢をつがえた。

＊

「うおおおおお!!」

一閃!一

「はあ!」

一撃!一

「はああああああ!」

一閃!一

盛んに舞う、連撃。昶達三人はこれだけ攻撃を与えてもビクともしないレイに苦戦していた。

「ビクともしないわね!これ!」

千華が悪態をつく。

「確かに。向こうが尽きる前にこっちが尽きるな。」

昶もそれに頷く。

「そうだね。テンペスト。」

「フルドライブ。使いますか?」

「うん。そうする。確実に決めよう。」

「了解。」

「こっちもだ。アルトリア。」

『了解です。』

「私達もよ。アルクエイド。」

『アイアイサー。』

そして、三人は解放の言葉を告げる。

「「フルドライブ！」」

〈〈Ignition!〉〉

その言葉と同時に、昶は眩い光を放つ巨剣を精製。千華は日本刀を握り、アリシアは鞭の様な、手甲の様な物を右腕に付ける。

「つて、テンペスト。これって…。」

〈マスターに合わせておきました。全開で行って大丈夫です。〉
「……うん。」

一閃！

アリシアがそう言った瞬間、集束砲が肩をかする。

「っ！」

「アリシア姉！」

「アリシアさん！」

二人は叫ぶ。だが、向こうは、ランサーを射出し、二人を翻弄させる。が、

「「邪魔だあああああああ！！」」

二人はそれを斬り裂き、道を開くが、また襲いかかる。

「くそッ……!!」

その時、レイが昶の方に集束砲を放つ。それと同時にアリシアの方にシャドウを放つ。

「アリシア姉！」

「!!!」

昶に声をかけられた時には、もうシャドウは眼の前。絶体絶命のその時。

一撃! — 斬! —

二人の人影が現れ、シャドウを撃ち抜き、斬り裂く。

「こんなものでしょうかね？」

「そうだな。」

その人影はそう眩き、無音動作でフルドライブを発動。片方は巨大な紅き剣、もう片方は巨大な砲台を持つ銃の様なもの。

「リセ! シン!」

昶は叫ぶ。その人影に対して。

「ばやばやるな。来るぞ。」

「解ってる!」

そうして、ランサーが放たれたその時。レイが何かに反応し、その場を飛び立った。

「…何してるんだろ？向こう行っただけど…？」

千華は言う。少し息が切れ気味で。

「…まさかな。いや、その方が正しいな。」

「私もそう思う。」

昶の言葉にアリシアは頷く。

「どうしたんだ？」

「アイツ、多分…いや、ほぼ確実にゼロの方に行ったな。」

昶の言葉にアリシア以外の他の物は驚く。

「やっぱり、行くよな？」

昶は聞く。その言葉に還って来たのは当然。

《当たり前！》

その言葉。そして、5人はその場を飛び立った。

＊

「ふっ！」

ゼロは矢を5本まとめてつがえ、放つ。

「はあ！」

一斬！一

ギルはそれを斬り、撃ち落とす。

「おらあ！」

「ちっ！」

一閃！・撃！一

ゼロは弓をボウガン状にし、それで、剣と合わせた後、トリガーを引き、吹き飛ばす。

「——っ。——っ。結構……硬いんだな……。」

ゼロは肩で息をしながら言う。

「——っ。そう言う貴様もな。」

「笑わせる。その体でよくそんな事が言えるな。」

その装甲は、黒い焦げはあるが、完全には通っていない証が有った。

「これならどうかな？ レイ！」

ギルは叫ぶ。その時、ゼロの後ろからレイが出てきて、剣を構える。

一閃！一

ゼロはその瞬間にボウガン捨て、剣を引き抜き、その剣と鏢迫り合いの状態にさせる。

「私も居るのだぞ！」

「っ！」

「斬」

ゼロは左腕で抑えたため、腕が少し斬れ、血が滴り、落ちる。

「ランサー！」

ギルはそう叫ぶ。ゼロは脳内で即席の魔法陣を展開し、防ぐ。

「——っ。——っ。」

ゼロは意識が朦朧とする中、両の鏢迫り合いを抑えている。もうそろそろ限界も近付いているというこの中で、助けを期待せず、ただ、抑えることを頭に置いて硬直する。その時、レイの剣が動き、ゼロを狙う。もう駄目か。そう思うその時、

「撃！・殴！・斬！！！！」

砲撃一つと鞭による打撃、剣戟が3つ、レイに当り、沈黙する。

「大丈夫か！？」

昶達はその攻撃を放った事を知って、少しだけ落ち着いた気持ちを持つゼロ。その後、魔法陣を解き、ギルを蹴り、左腕を解放する。

「っ。この状況で大丈夫だと知ったら、奇跡だな。」

「確かに。左腕が血だらけだ。」

「……まあ、な。すまんが、時間を稼いでくれ。詠唱に時間がかかるから。」

「それって……。」

「大技を放つ。それしかないだろ。魔力が底をつく様な大技。巧く集束するか解らん。が、やってみないことには始まらないだろ？ 昶だってそうだろう？」

「……確かに。俺ならやれる手はやってみる。」

「だろ？ だったら頼む。」

「任せろ！ 行くぞ、皆！」

《応！》

そして、ゼロを残して、5人は飛び立った。

「…頼むぞ。A a n d i e l i g d i e d u i s t e r n
i s , d i e d u i s t e r n i s a a n d i e l i g
… A l d i e r e ? n k a r n a s i e … (闇
を光に、光を闇に…全ては輪廻転生…。)」

ゼロは詠唱を開始した。

＊

「はあ！」

「遅い！」

一閃！・射！一

瞬間の間に行われる、剣戟戦。昶とギルによるもの。

（昶。）

（シンか。）

（少しでも考えが有る。リセ。）

（吹き飛ばしますか？）

（そうしてくれ。で、有る技を使いたいんだが、協力してくれ。）

（解った。で、どんな技なんだ？）

（…と、そう言った技だ。）

（成程。良いじゃねえか。やってやろうぜ？）

（了解。じゃあ、行くぞ！）

（おう！）

そして、念話を切ると、

「皆さん！離れて下さい！」

集束が完了したりセのデバイスから、砲撃が放たれる。それを見たギル達は障壁を張る。が、

一碎！一

「なっ！」

それをいとも簡単に破壊する。

「今です！」

リセが言う。それに昶とシンは頷き合う。

「神藤昶！」

「シン・ルークス！」

「推して参る！」

そう言い、二人は突撃。

「くそっ！」

ギルは剣を構える。

「はあああああ！」

一碎！・斬！・斬！・斬！斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬！
——！！！！！！！！！！

二人は剣を破壊。さらに、二人が持っているのは巨剣。それに構わず、無尽の剣戟で、ギル達に攻撃を与えていく。

「これで終わりだあああああああ！」

二人は剣を構え、交差する様な位置に立ち、

斬！！

斬り裂く。

「光牙滅虛斬！」

そう言う、斬撃が遅れて叩きこまれる。

（皆！離れてろ！）

「ゼロ!？」

昶はそれに反応する。

＊

「Dit is misdadigers. Uitnodiging na die dood in die lig van die verwoesting! (咎人よ。滅びの光の中で死に誘え!) 抹消せよ! フェザーエクセリオンズディバインライト:」

両腕の他にランサーが展開。魔力が集束して行く。その中で、ゼロの左腕の傷口もだんだんと開いていく。

「ブレイカアアアアアアアアアア!」

一閃・撃!!!!!!!!!!!!!!!!!!――

そして、放たれる。その光の奔流は周りの岩、木々を巻き込みながら、ギル達を飲み込む。さらに、開いた傷口から、血が噴き出す。

「ぐッ! ああああああああああああああああああああああ
あ!」

それを堪えながら、威力を上げる。その時、背中に何かが触れる感触。人の手。そんな感じ。振り向くと、なのは達が居た。

「ゼロ君、無茶すぎだよ。私達にもその重荷を:。」

〈Load cartridge.〉

レイジングハートから空葉莢が排出される。

「分けてよね！」

Starlight breaker.

— 閃! —

レイジングハートから砲撃が放たれる。

一閃・閃！

さらに、他の皆からも。

「…すまん。後もう少し。だから、お願いするな。」

「任せて！ ブラスター！ ……2！」

— 閃! —

さらに閃光は大きくなる。

「最大火力放出！」

— 閃! —

それと同じようにゼロは砲撃を放つ。

《はあああああああああああああああああああああ
ああああああ！！》

「そう言うことなら、先輩方！」

昶のその言葉でなのは達は降りてくる。

「ゼロに魔力を分けてやってください。僕も分けるんで。」

「そう言うことなら、いいよ。」

そう言うのと、4人は魔力を抽出し、ゼロに吸い込ませる。

「…ありがとう。昶、そのほかの皆も、【護り守る】。忘れんなよ。」

ゼロがそう言った途端に、体が消え始める。

「楽しかったよ。この2週間くらいか？まあ、そう言う事で。じゃあな。そして…。」

—ありがとう。—

その言葉を最後に、ゼロはこの世界から消えた…。

Be continued,,



GONG! GONG! GONG鳴らせ! ♪

今日の担当

・ゼロ ・はやて

・フェイト

ゼロ

「さて、始まりました♪ “ZEROの境界線” ♪」
フェイト

「さて、今回のおさらい。」

はやて

「宿命ともオサラバ！」

ゼロ

「てことで。EXのクイズの答えは凄かったな。」
フェイト

「でも、“魂”が解らないから。って言うのは…」
はやて

「ひっかけやわ。」

ゼロ

「まあ、良いじゃねえか。で、次回予告。」
フェイト

「私から行くね。」

フェイト

「ゼロはギルに勝利した一方、なのは達は、作戦開始が告げられる。」

はやて

「対する相手は哀しい瞳を持っていて…。」
ゼロ

「次回、――作戦開始！――碧き大空へ！」

一同

「Drive ignition！」

三章、異世界最終話―宿命が閉じる時。―（後書き）

二階堂さん、今回のクロスの件はありがとうございました♪カオス
リレーの方も宜しくお願いしますね♪

第7話 一作戦開始！

同時刻。はやて含む機動六課は桜達と共にジェイル・スカリエツェイが居ると思われる、オーストラリアの少し右下辺り(?)のニュージーランドの海上に来ていた。

「作戦開始だね。」

桜は言う。

「そうなるな。俺等は俺等で頑張ろう。」

侑斗も言う。

「スターゲイザーさん、大丈夫ですか？」

『ええ。大丈夫です。』

セレナはアルスの横でユニゾン中のスターゲイザーと話をしている。

「油断するなよ。」

「わかってるよ。お兄ちゃん。」

「それは止せ。」

アルスとセレナは会話をする。

「さて、行くで。なのはちゃん、フェイトちゃんは周りにせずに暴れてな？」

「「うん！」」

はやての言葉にうなづく二人。それにはやても頷きで返し、自身の杖を振り上げる。

「行くで？リイン。」

『了解です。』

はやては一度眼を閉じ、気持ちを集中させ、再度、蒼い瞳を見せる。

「ダークネス・ショット暗黒の砲撃！！」

―閃！―

その杖の先に黒い魔力が集まり、放たれる。それと同時にガジェツトが多数出てきて、戦闘が開始した。

＊

「エクセリオン…ブレイク！！」

―殴・撃！―

放たれる、連撃と集束砲撃の応用打撃。なのははレイジングハートを右と左に赤い宝石が付いた格闘形態にし、戦っている。

「――っ。――っ。まだまだ！」

とは言え、まだ見た限りで50くらいは残っている。そう思いながらもなのは拳を振るう。そして、後ろから来る砲撃に気付かず、なのはは反応しきれない。その時。

―閃!―

赤髪の男が、己の剣を盾に、なのはを助ける。

「まだ、慣れてないんだろ？だったら、砲撃の方を優先しろ。近くに來たら守ってやる。」

「ありがとう!アルス君!」

なのはは男…アルスに一礼すると、形態を砲撃魔法状態に変えた。

「行くよ、レイジングハート!」

〈All right. My master.〉

「デイベイン…」

〈Buster.〉

―閃!―

刹那の内にためられた魔力が…。

―撃!―

レイジングハート
なのはの愛機の声によって放たれ、ガジェットはその奔流によって、一体、また一体。と数を増すように飲み込んで行き、眼前のガジェットを一掃した。

「祖名解放。」

アルスはそう呟き、自分の右腕を振り上げる。

「我が名は…ジャステイス。」

そうして、緑の光に包まれ、彼の体は機械的な装甲に包まれ、背中にはユニットの様な物が付いていた。

「無限の正義を…契約開放！」

さらに足元に魔法陣が展開。光に包まれる。

―射!!―

その時、ガジェットから砲撃が放たれる。が、光の中から、何かが飛びだし、砲撃を斬り裂き、

―斬・斬・斬・斬!―

砲撃を放ったガジェットを一掃。

「祖名、契約開放…インフィニット・ジャスティス。」

アルスはその機械的な装甲には合わない、赤い髪を縛りながら言う。

「さあ、ここからが…勝負だ。」

そう言うと、眼前のガジェットを見定める。

＊

「ショット!」

―撃!―

別な戦場。そこには機械的な仮面とそれにふさわしい鎧をつけた戦士が戦っていた。

「減らないな…。」

そう呟き、仮面を外す。

「侑斗、怪我しないでよ？」

「しねえよ。桜姐は心配性すぎるんだ、よ！」

――斬！――

侑斗はガジェットを斬り裂き、桜の元へと跳躍する。

「ゼロは何してんだろうな。」

「さあね。」

「二人とも、ちゃんと戦え。」

たまたま優斗達の近くにいた神無が話しかける。

「解ってるって。」

「解ってんのか激しく疑問だ。」

「悪い。ちゃんと戦ってなかった。」

「しっかりしろ、よ！」

――閃！・閃！――

神無がそう言い、障壁を張る。

「はぁ！」

―斬・斬―

その時、機械的な装甲を纏う一人の男性…刹那が降り、ガジェットを斬り裂く。

「三人とも。怪我はないか？」

「「大丈夫。」」「

「そうか。来るぞ…。」

刹那がそう言うのと、肩に付いていた槍形状の物を宙に浮かせる。

＊

「トライデント…スマッシャー！」

―閃！―

フェイトが三叉に別れる砲撃を放つ。その奔流はガジェットを巻き込み、消える寸前。

「ヒュッ！」

―斬・斬・斬・斬・斬・斬・斬・斬・斬・斬・！・！・！・！―

呼気と共に放たれた斬撃が、宙を駆け、ガジェットが爆発する。

「なかなか手ごわいですね…。」

「確かに。セレナ、大丈夫？」

「大丈夫です。スターゲイザーも居ますし。」

『私も大丈夫です。』

「そっか。」

『セレナ。出力を上げててもよろしいでしょうか？』

「大丈夫。もう少しだけ上げて？」

『了解しました。』

そうセレナが答えると、瞳は金、髪は銀色になる。

「よし。これで良いね…。」

『体調の方は？』

「大丈夫。」

『そうですか。』

「うん。次、来るよ！」

そう言い、二人は構えた…。

＊

「「刃^も以て、血に染めよ。穿^{うが}て…ブラッディダガー！！」」

ブレイブフォースとはやては紅き剣を精製し、敵に当て、破壊する。

「元主。大丈夫ですか？」

「私は大丈夫やよ？ブレイブフォースは？」

「私ものです。次、来ますよ？」

「そうやったな。」

『リインも忘れないで欲しいです！』

「そうでしたね。リイン。無理はしないで下さいよ？」

『はい！お姉ちゃん！』

「一応、私は闇の書の管制人格でしたけど、せめてお姉ちゃんは止めて下さい…。」

『「ええ〜。」』

「元主まで！もう…。来ますよ！」

はやてはその言葉を聞いた瞬間、構え、ブレイブフォースも同じように構える。

＊

「…始まった様だね？」

「そうですね。」

そんな戦闘の様子を何処かで見ているスカリエッティ。それに答えるウーノ。

「これを使うのがますます楽しみだよ。そのためにも、早くあの書物を完成させないとね。後何ページだい？」

「…後、20ページほどです。」

「そうか。フフフ…。楽しみだよ。」

「ですが、ここが落とされるのも時間の問題です。」

「私は自身に改造を施すから、時間稼ぎを彼らと共に頼むよ。ウーノ。」

「了解しました。」

そう言うと、その部屋から出ていく。

「クワットロ。」

「大丈夫ですよ♪お姉さま♪」

「そうですね。なら、行きましょう。ドクターも時間稼ぎをするよ

うに言われました。」

「了解ですわ♪」

「やっと出番かよ。待ちくたびれたぜ。」

クアットロの後ろで、バスターソードを担いでいる青年が言う。

「そう言うな。運命。その気持ちはみな同じだ。」

「あの鳩は成長していそうだが、他の物はどうかだろうな？」

「王。それを言うてはいけませんよ。」

その後、三人が会話する。

「とりあえず、行こうよ。僕の実力をかせてやるんだ！」

「アンタ、調子に乗ってるんじゃないわよ？」

「やめろ。自由。：行くぞ。クアットロ、シルバーカーテンで接近するまでのサポートは頼んだ。」

「了解ですわ♪」

その言葉を聞くと、男は運命とそのほかの4人を引き連れ、出ていった。

＊

「：今頃、皆戦ってるんだろうね：。」

「：：そうだな。」

その頃、リタとエミルは怪我人だから。という理由で病院待機を命じられた二人は話す。

「：：こうしているのがむず痒いな。」

「……そのむず痒さ、消してあげようか？」

「そうして貰えたらありがたい…。って、え？」

その声にエミルとリタは窓の方を向く。そこに居たのは…。

「「ゼロ!!」」

「よう。御二人さん。見ない間にでかくなったな。」

そう言い、ゼロは病室に入る。

「ガジェット倒して、即席だが、デバイスを作っただよ。リタ用のな。」

そう言って、ゼロは碧い宝石を渡す。

「一応、前の俺の相棒を想像して作ったんだけどな。気に入ってくれると嬉しい。それと、ヴェスペリアは？」

「あそこだ。」

そう言って、エミルは部屋の片隅に会った剣を指差す。

「そっか。」

ゼロはそう返し、ヴェスペリアに近づく。

「すまん。最終調整ですこしだけ改造。いけるか？」

「私も、マスターも大丈夫です。✓」

「そうか。なら、こいつを入れてくれ。」

ゼロはヴェスペリアにチップを差し出す。

〈了解です。〉

そして、ゼロはヴェスペリアにチップを入れると立ち上がり、窓の近くに行く。

「さっさと来い。時間も戦力もないんだよ。生まれねえんだよ。お前等が居ねえとな。」

そう言い、ゼロは紅い翼を展開する。

二人は一瞬呆けるが、互いを見て、頷く。

「行く。」

二人は声を揃えて言う。

「なら、さっさとセットアップしろ。」

「でも、名前付いてないよ？ゼロ。」

リタはゼロに聞く。

「自分で決めな。それが、お前にとっての愛着が付く証でもあるんだから。」

「…うん。じゃあ…。全てを護れる力…守る力…守る者…。ガーディアン・サーヴァントで。」

〈了解しました。名称^{ネーム}ガーディアン・サーヴァント。推して参ります。〉

リタはそれに頷くと、ベッドを降り、セットアップする。エミルも同じようにセットアップ。

「わぁ。原界の時と一緒にだ。」

リタの恰好は茶色がかった赤い服に腰の部分にベルト、さらに、右の方だけにソックスが付いている格好。もちろん、ゴーグルも付いている。

「まあ、そう言うもんだ。」

エミルは前と同じの黒服。

「準備はできたみたいだな。ちゃんと飛べるから安心しろ。」

「でも、飛び方が。」

「飛びたいなら、飛べと、進みたいなら、進めと願え。ちゃんとデバイスは答える。良いな？行くぞ！」

ゼロがそう叫ぶと同時にFW陣全員が出てきた。

「まったく。遅いわよ。ゼロさん。」

「手間取っただけだ。これじゃあ、最高速で向かえないし、どうしよう。」

そこに居たのはガジェットの軍勢。

「なら、私達が何とかします。」

「そうか。リタ、ゴーグル借りていいか？」

「大丈夫。まだ、替えあるし。」

そう言い、ゼロに翡翠色のゴーグルを投げ渡す。ゼロはそれをつける。

「IS：距離的には問題ないかな？スバル。一瞬で良いから、道を作れ。」

「おう！」

スバルは返事をし、ゼロは羽根を広げ、足に力を込める。

「ディバイーン…バスター！！」

―閃！―

号令と共に砲撃が放たれ、ゼロはそれと同時に跳躍し、ガジェット
の軍勢を突っ切り、赤い羽根を白く輝く羽根に変え、音速を突っ切
るほどの速さで飛んで行った。

「間に合えよ…！」

そう呟き、飛んで行くのを見たスバル達。

「行ったね。」

「そうだな。」

スバルの声にエミルは肯定する。

「ここからですね。僕達の戦いは。」

エリオが言うと、ガジェットは砲撃体制を固めていた。

「…だね。やろう。」

「ゼロさんのためにも、隊長達のためにも。」

リタとティアナが言う。皆は互いを見合うつと、一斉に散開。今、互いの宿命の戦いが始まる…。

B e c o n t i n u e d , , ,



デバイイイイイイイン…バスタアアアアアアアア！！

今回の担当

・ゼロ ・リタ
・フェイト ・エミル

ゼロ

「さぁ、始めましたよ♪ZEROの境界線♪」

フェイト

「なんか、今日のはスバルの第23話くらいでギンガを倒した時のあれだよね…？」

ゼロ

「気にしない♪」

エミル

「無理だから！」

ゼロ

「さて、今回のおさらいは♪」

エミル

「まさかの無視！？」

ゼロ

「守護の英霊、この胸に絶対の危機眼の前になってか？」
フェイト

「今回も大きく外れたコース通ったよね？」

ゼロ

「否めんがな。じゃあ、ここでも、やるよ。ネタバレ必死！クイズ・K I Z U N A ♪」

わー♪

ゼロ

「さて、今回の問題は！スカリエッティはあるロストログアを持っています。さて、それは、何！」

フェイト

「今回はヒントは一つだけだね。ある言葉の和訳で“暗黒の聖書”ということらしいね。」

ゼロ

「そう。期限は次回投稿するまでだから、頑張る様に♪」

リタ

「今回はL v. 1だね。」

エミル

「：何？そのレベル性？」

リタ

「5が難しい、1が簡単って事♪」

ゼロ

「：そうだな。うん。じゃあ、次回予告。」

ゼロ

「スバル達はガジェットに苦戦していた。」

フェイト

「その頃、なのは達は、ガジェットが引いて行くのを見て、少しだけ疑問を感じる。」

リタ

「皆が見た物とは…？」

エミル

「次回一暗黒の聖書。一碧き大空へ！」

一同

「Drive ignition!!」

第8話―暗黒の聖書。―

「ディバインバスター!!」

―撃!―

その号令と同時に桃色の閃光がガジェットを包み、消える。その刹那、ガジェットは一斉に退却し、一同ははやての元へと集まる。

「如何したんだろうね？」

フェイトが言う。

「…。まさかな…」

「如何したの？アルス君？」

アルスの言葉になのはは首を傾げる。

「いや…。!! 皆、散開しろ！」

「え？」

フェイトが首を傾げる。

―閃!―

その瞬間、砲撃がアルスの肩をかする。

「ちっ! もうちょっとだったのに…!」

「たいした問題じゃない。」

その二人の人物の言葉にアルスは反応し、その声の主を見上げる。

「自由…正義…」

「また会ったわね。本当は心臓打ち抜くつもりだったんだけどね」

「そう言うな。自由」

「あの金髪野郎は居ねえのか？」

後ろから、黒髪に赤い瞳の男が出てきて言う。

「…いないみたいです」

その後ろから、なのはによく似た容姿で髪を降ろした黒いバリアジヤケットを着た女性は言う。

「わずかだけど、魔力は感じるけどね」

その後ろから、青い髪の…というよりは水色に近い感じの女性と、白い髪の女性が出てくる。

「そこの鴉は成長できたか？」

「アンタは…！」

はやては自分と同じような容姿で、マテリアルだった存在の闇を総べる王を睨む。

「」「」「狩らせて貰う。その魂と共に」「」「」

6人はそう言うと、デバイスらしきものを精製し、構える。

＊

「間に合うか…？」

その頃、ゼロは海上を飛行していた。

「いや、間に合わせる…！」

ゼロは速度を上げ、一気に近づく。

「！…見つけた！」

ゼロはそう呟く。同時に左手に魔力を溜める。

「全てを打ち抜く神の一撃よ…」

さらに、その魔力は紫電を纏う。

「ディバイン…」

さらに、紫電が駆け巡り…。

「バスタアアアアアアアアアア！！」

―閃！・撃！―

その号令と共に、砲撃が放たれる。

＊

「!!、あの金髪野郎、帰ってきたな! 散開するぜ!」

運命はそう言い、その他の皆と合わせ、散開。

―閃!―

「逃がすか!」

男はさらに運命に向かって突撃する。

「畜生!」

―戟!―

運命はバスターソードを現れた男は右の紫電を纏わせた手刀でそれぞれ弾く。

「――っ。――っ。間に有ったみたいだな…」

男はそう言うと、付けていたゴーグルを外す。

「あ…」

フェイトは呟く。そこに覗く色は翡翠。そう、瞳の色。この場において、その瞳をする人物は一人しかない。

「ただいま。皆」

男はそう言う。

「お帰り…ゼロ…」

そう言い、フェイトは手を握る。

「本当にただいま…。心配かけたな。けど、甘えるのは後だ。良いか？」

「うん。大丈夫」

「よっしゃ♪じゃあ、ブレイブフォース」

「了解です。主！」

ブレイブフォースはそう言うのと、ゼロの手に両剣として収まる。

「主…か…。変わったな。お前も」

「何がです？」

「いや、何でもないな。桜達は鳴海周辺で待機。良いか？」

「けど、先生…『殺されたいか？』…」

侑斗はそこまで言ってやめる。

「良いか？これは、影を持つ者同士の戦い。だから、セレナは残れども、その他は無理だ」

「けど…！」

神無は何とか食い付くが、ゼロはため息を吐く。

「…ここでないか。はやてなら知ってるだろ。“琥珀の書”というのと、“一騎当千の書”が一つになる時の言い伝え」

「…そう言う事なんか？」

「そう言う事。あの伝説の通りにするなら、俺だけで十分だ」

「あかん！それしたら、アンタは壊れてしまう！それだけはあか

ん！」

「…誰が壊れるって言った？俺はあれを自身の力で何とかするんだよ」

「…ジンクスを破るか。ゼロ」

アルスは閉じていた口を開き、ゼロに聞く。

「そう。あいつ等は迷ってるんだ。今、自分がどの道へ進めばいいのか、どの方法を選べばいいのか、誰の下に着けばいいのか…。だから、あいつ等は闇の中をさまよう人間。闇には終わりは来る」

「…光になろうってか？先生」

侑斗は言う。

「そう言う事だ。侑斗。多分、色々な地域にガジェットは飛んだと思う。それを何とかして侵略を阻止してくれ」

「…わかった」

「侑斗！」

「桜姐。もう、これ以上関わるのは、あいつ等の掟に触れることになる。それだけは避けてやろうよ？」

「…そうだね」

桜もそれに肯定し、日本の方を向く。

「…死なないでよ？」

「当たり前だ。さっさと行け」

「…うん」

そう言い残すと、桜は飛んだ。

「さて、ここからが本番だな。皆、殺すなよ？」

「いや、殺さないから」

ゼロはそう言い、アルスはツツコミを入れる。

「お前にもはやて菌が入ったか？」

「何やねん！はやて菌って！」

「体に入ると、関西人の如く、突っ込みたくなる菌の事だ」

「それってほぼ悪口やんか！」

「：すみません。冗談です」

「あ、いや、そう言う事じゃなくて：」

「そうしていられるのも今のうちだな。覇王の家系よ」

はやてがあたふたしている内に、正義から声がかかる。

「はたしてそうかな？お前等は迷っているように見えるんだよな。
聞いてたと思うけど」

「俺等が迷ってる？ふざけんなよ！テメエ！」

「やめろ。運命。さすがと言えはそうだな。俺達は迷ってる。主が
誰なのかが良く解らんのだ。にしては、アイツは正常すぎる」

「：。マッドサイエンティストで有名な、ジェイル・スカリエツテ
イ氏か？」

ゼロは正義の言葉に返す。

「そうだ。俺と自由、運命は一騎当千の書」

「私と、王と雷刃は、琥珀の書」

正義と星光が言う。

「成程な。なら、俺が名前をつけてやる」

「はぁ！？主でもない君が！？」

「そうに決まってるんだろ。迷う者の光になるんだ。名前がないとか
わいそうだろ？」

「可哀想とか、そう言う問題じゃ…『あるに決まってる！』…！！」

ゼロは雷刃の言葉を挟み、言う。

「…あるに決まってる…何かが定まってないと…何も決められない
…それじゃあ、可哀想過ぎるからな…」

「「ゼロ…／金髪野郎…」」

運命とフェイトはそう言う。

「…そうだな。俺達も、もう命令には従えない…いや、従いたくない
いな」

正義はそう言い、手を差し出す。

「これから宜しく。ゼロ…と言ったか…」

「ああ。宜しく」

ゼロはその手を握り返す。

「名前は決めてあるんでしょう？ゼロ」

星光が言う。

「もちろん。星光は、「明星」で。お前の瞳の光は、凜としてて、
光みたく恰好よかったのが、その理由」

「恰好いい…ですか：／／／」

「ああ。恰好いい♪で、襲撃者には：そうだな…。「？^{れいおう}煌」で。元はRayoって発音で、スペイン語なんだけどさって、もう次が来たな。念話で話しながらにしよう。行こう！」

《応！》

そして、皆は返事をし、散開した。

（で、意味は雷。お前にピッタリだろ？）

（うん：うん！漢字でカッコイイし！）

（気に入ってくれた様でなにより♪で、王の方だけど…）

（それはウチに決めさせて？）

ゼロの念話にはやてが割り込み、言う。

（…わかった。いいぞ）

（何や？今の間）

（変ないちやもんつけないか不安になってただけ）

（失敬な！私はそんなことせえへん！）

（わかったから。速く言ってあげなよ）

（わかつとるわ！）

（大丈夫か？仔鳥）

（大丈夫や。で、アンタの名前は「シャイニングウインド」。“輝きの追い風”って意味や）

（成程な。いい名前だ）

シャイニングウインドは頷くと、ゼロは話を続ける。

（で、正義が俺と同じ気配がするから、俺の前の名前の「アルタード」を運命には名前の通りの意味合いで、「フォーチュン」自由も

同じで「リバティー」で、どうだ？)

(問題ないけど、最後の方、適当じゃない？)

(適当じゃない)

(怪しいわね…)

(怪しむな)

(それよりも、だ。来るぞ)

アルタードの念話を聞いた一行は上空を見る。そこには、ウーノとクワットロ、そして、スカリエッティが居た。

「やっぱり裏切ってくれた様だね？劣化コピー一同。」

スカリエッティはそう言い、口端を吊り上げる。

「何がおかしいんだよ？マッドサイエンティストさんよ」

「これからこれを使うのだよ？」

そして、白衣の中から、黒い本を出す。

「ブラック・バイブル暗黒の聖書を使い、君等を実験対象とし、混乱に陥れ…『させるかよ。お前の憎しみが無い限り、そいつは発動しない』…!!」

スカリエッティはゼロの言葉を聞いた瞬間、固まる。

「…暗黒の聖書…またの名を“Extra Dich tung Ha?”ドイツ語で憎しみの封印具って言う、ものなんだがな。封印し、心を喰らう、そんな魔導書なんだよ」

「…憎しみか…面白い」

スカリエッティはまた口端を吊り上げる。

「人には誰も苦しみがあるものだ。私でもむしろそうだな…」

ゼロはその言葉を聞いた瞬間、音を斬る速さで、暗黒の聖書を自身の手中に入れた。

「何時の間に…！」

「今の一瞬でお前がこの中に自分のリンカーを入れることは想定済みだ。大人しく投降しろ」

「誰が投降なんて…『この場で、被害を増やしたくねえ』…」

ゼロはクワットロの言葉をさえぎり、言う。

「もう一度言う。最良の二択だ。投降して、生きる道を選ぶか、それとも投降しないで、暴走した俺に殺されるか…。どちらを選ぶ？」

「…おとなしく投稿しよう。八神ゼロ・S・A・ハラウン君」

「賢明な判断だ」

ゼロはそう言うと、右腕に紫電を纏わせ、リンカーを取り出す。

「…はやて」

「なんや？」

「俺が帰ってこられても、憎しみの異形があるが…『大丈夫や。皆で、倒す』…なら、良い。リミットは30分。食われるか、道を探し出して、ここに戻ってこれるかのな。二択」

「ゼロ…」

「無理はしない。だが、それまで、信じていてくれ」

ゼロは皆に笑顔を見せ、リンカーを取りこませる。その瞬間、鼓動の様な音。ゼロの脳内に、憎しみの記憶が駆け巡る。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお
！！」

その瞬間、黒い閃光が彼を包み、次に出てきたのは、黒い髪、黒い瞳に、騎士甲冑。それに、腕と顔に黒い線がいくつも入っているゼ口。

「…我が名は暗黒の聖書。汝等の名を問おう。何者だ？」

暗黒の聖書ははやて達に聞いた。

「貴方の中に居る者の仲間です」

フェイトは答える。

「仲間…か…」

暗黒の聖書は空を見上げる。

「中に居る主は、こんな空と仲間が大好きだ。そう言ってたな…」

聖書はまたはやて達を見る。

「主は無益な争いを好んではない。大人しく…」

聖書は漆黒の魔法陣と翼を広げる。

「堕ちてくれ」

その言葉と共に、幾つもの槍が浮かび、はやて達を襲う。

《っ！！》

はやて達は機敏に反応し、全てかわす。

「全ては…憎しみを晴らすため…だが、主の憎しみはこんな物で収まるのだろうか…？」

聖書は空を見上げる。

（主…今、お助けします！）

ブレイブフォースもゼロの心に飛び込む。今ここに、運命を賭けた決戦が始まる…。

リミットまで後………30分。



高く飛べ♪高く空へ♪高く蹴れ♪高く声を上げ♪

何時か挫けた♪その陽の向こうまで♪

今回の担当

- ・ゼロ
- ・はやて
- ・フェイト
- ・なのは

ゼロ

「さて、始めました♪ZEROの境界線♪」

はやて

「いよいよ、リリバスネタまで…。」

フェイト

「はやて…それには触れない方が…。」

なのは

「確かに…。」

ゼロ

「細かいことは気にしない♪さて、前回の答えと、今回の問題♪」
フェイト

「前回の答えは、ブラック・バイブルだったね。」

ゼロ

「解答者なし！」

はやて

「で、今回の問題は、紋章を持つ三人はどちらの書でしたか？ってことやね。」

なのは

「そうだね。」

ゼロ

「てか、クイズ自体でネタ切れそうにならないか？作者。」

気にしない。

なのは

「だそうだよ？」

ゼロ

「ならいいか。さて、今回のおさらい。」
はやて

「体力バカは到着が速い。」

フェイト

「だそうで。」

ゼロ

「はやて。お前晩飯抜きで良いか？」
はやて

「そんな！」

ゼロ

「と言う冗談だ。」

はやて

「なんや。びっくりさせんといて。」

フェイト

「と言う冗談だとしたらどうするの？」

はやて

「…突っ込まへんで。これは突っ込んだら負けや。」

なのは

「解ってみたいだね。」

ゼロ

「だな。さて、次回予告。」

ゼロ

「暗黒の聖書はゼロの思いを具現させるが如く、戦う。」

フェイト

「それは真か偽か。」

はやて

「ブレイブフォースはゼロの中へと入り、光景を見ていた。」

なのは

「暖かい家庭。見た様子はそうだった。」

ゼロ

「それは、理想なだけ。真実は一体…。次回―幸せなことが罪だと言うなら、誰でも罪を背負ってる。―明日の大空へ！」

一同

「Drive ignition!!」

第9話 一幸せなことが罪だと言うなら、だれでも罪を背負ってる。――

「…かわしきるか。さすがは主の仲間だな」

「こんなところで…貴様の様な鴉に負けん！」

「ほう。貴様も変わったな。王よ」

暗黒の聖書はそう言うのと、右手に魔力を纏わせる。

「これなら…どうだろうな？」

「ッ！つくづく、嫌な技ばかり出してくれる…」

「それは貴公とて同じであろう？」

「癪に障る…。皆！自分を守れ！」

「遅い」

暗黒の聖書は魔法陣を展開する。

「そんなこと…ねえよ！」

「ッ！」

――閃！――

暗黒の聖書は魔力を纏わせた右腕を術に発動せず、上から振る剣戟から守るために使う。

「まだ仲間がいたか。だが…抑えられんだ…」

暗黒の聖書は右腕を振り払い、さらに、鳩尾に平手を入れる。

「この…憎しみによる破壊衝動は…」

「カハッ…ぐっ…はあ！」

一閃！

刺された男は、剣を振るい、暗黒の聖書から離れる。

「――っ。――っ。はあ。死ぬかと思った」

「そんなことしてる場合じゃないだろ！エミル！」

「場を和ませるジョークってのを知らんのか？リタは」
「知ってるけど、こんな場所でするな！」

「ったく。ゼロは何処行った？」

「…多分、あの中」

エミルはそう言い、リタは暗黒の聖書を指す。

「んあ？ありえねえだろ。第一、アイツは女だろうが」

「でも、ゼロの魔力はあの中」

「…取り込まれた？」

「それが自然」

エミルとリタは会話し、その後、ヴィータとシグナムも隣に降りてくる。

「あれ？そう言えば、シグナムさん達も防衛に回ってたっけ？」

「回ってた」

リタの問いにシグナムは答える。

「大丈夫だよ」

「何が？」

「頭」

「ぶっ殺す！」

「やめろ。お前等」

エミルの言葉に怒りを覚えたリタは右腕に魔力を纏わせ、殺ろうとするが、ヴィータに止められる。

「まあ、和やかにしてくれたのは感謝するがな」

「でも、そう言う訳にいけないのが現状？」

「そう見たいだな」

4人は暗黒の聖書に視線を移す。

「…如何する事も出来ぬか？我が騎士たちよ」

「…まず無理」

フォーチュンは答える。

「けどな、お前の主の気持ちはそんなにかよ？違うんじゃないか？」

「フォーチュンの言うとおりだな。暗黒の聖書よ。憎しみは時が来れば、やがては消え去る。主の憎しみは壊すことでは、治らないと思うぞ？」

アルタードはフォーチュンの言葉に肯定し、さらに続ける。

「…主の心の底は壊すのとは違う憎しみを持っている」

アルタードはそう言うと、己の拳を前に突き出す。

「……主は、この力も使いこなせるとは、思わない事でしょう……だ

が、俺はこの力を使い、足止めを…貴様を止める！ブラック・シグナル…開放！」

＊

「……？——何処だろ？」

ゼロは何処か、懐かしい感じのする部屋のベッドから起き上がる。

「これが憎しみの記憶？…俺の記憶が正しければ、あの辺に俺の銃があつた筈だよな…？」

ゼロはベッドから抜け出し、近くにあつた、布が巻かれている、棒の様な物を取り出す。

「…外すか」

ゼロはそう言い、布を外す。そこには、鉄ならではの光沢。さらに、スコープが付いている。

「…練習用の銃か…にしては、少しだけ重いか…？」

ゼロはその感触を懐かしみつつも、それを持ち、立ちあがる。その時、扉が開き、見覚えのない少女が入ってくる。

「兄さん、何してるんですか？朝ごはんですよ？」

…はい？ゼロは少し呆け、状況を整理する。

『俺に妹なんていたか？いないはずだよな？そうだよな！？あれ？』

じゃあ今こいつは何て言った？ いや、待て、俺は何で背が縮んでるんだ？ あれえ！？」

俺はかなり混乱し、頭を壁にガンガンぶつける。

「兄さん！？ 大丈夫！？」

「至って俺は正常だァァ！！」

「正常じゃないですよね！？ それえ！ 可笑しいですよね！？ とりあえず、壁に頭をものすごい勢いでぶつけないで下さい！」

俺はそれを言われ、ハツとなり、壁についた血を拭きとる。

「……なんか、良く解らん。家族構成教えてくれないかな？」

「？？、とりあえず、お父さんがデイルシア・ストラトス：『ちょっと待った！』：なんですか？」

俺はその少女の言葉をさえぎり、言う。

「父さんはフェードじゃないのか？」

「：？、フェード兄さんはアルタード兄さんの兄さんじゃないですか」

「あれ？ 何か矛盾してるな：？ あれ？ あれえ？」

俺は壁にまた頭をぶつけ始める。

「またですか！ 兄さん！ 落ち着いて下さい！」

「落ち着いてる！」

「落ち着いてないでしょう！？」

「何だ？ アルタードは如何してそんなことしてるんだ？」

「あ、フェード兄さん」

ゼロと少女の会話を聞いたフェードはゼロの首根っこを掴み、壁から離させ、自分の眼の位置まで持ってくる。

「アルタード。とりあえず落ち着け。幾ら頑丈でも、頭蓋が割れたら死ぬぞ？」

「死なねえよ！てか、それで死んだことなんてないから！」

「……わかった。今から家族の事を説明してやるから、ツツコミなしで聞け」

「…解りました」

「うし」

フェードはそう言うと、俺の首根っこを離し、俺は勢いよく落ちる。

「つてえゝ。何すんだよ！」

「受け身くらいとれよ」

寒い目でフェードはゼロを見る。

「いきなりそうゆうことやっておいてそうゆうこと言う！？」

「さて、父さんの方は…」

「まさかの無視！？」

「うるせえよ！お前にいちいち突っ込んでると、時間がいくらあっても足りねえんだよ！」

「んなことわかつとるんじゃ！一つくらい突っ込めや！」

「まどろっこしいんだよ！お前の喋り方！」

フェードは突っ込む。ゼロはその事を初めて知り、

「んなこと、今知ったわあ！」

逆ギレした。

「てことで、父さんは…『そのことはもう話しました』…そっか。ありがとうございます。イングヴァルト」

イングヴァルト…それがあの子の名前か…。ゼロはそう思い、腕を組む。

「で、母さんがライアン・ストラトス」

そこは変わら…って、待て待て。可笑しいよな？明らかにおかしいよな？ゼロはまた壁に手を掛ける。

「兄さん、やらないで下さいよ？」

「大丈夫…だと思う」

「思うってなあ…まあ、いいや。で、俺が長男のフェードで、お前は次男のアルタード、こっちは長女のイングヴァルトって所だ」

「…俺は次男か？」

「に決まってんだろ？」

ゼロはそれを整理した。その後…平和だな…俺はこんなものを求めていたのか…？彼は心の中でそう思い、自然と涙線が流れていた。

「アルタード？如何した？泣いてるのか？」

「御免なさい…」

ゼロはそう呟くと、フェードが頭の上に手を置いた。

「泣く必要はない。家族なんだからさ。謝ることだってないだろ？」

「そうだよな…。謝ることなんて…」

俺はそう言い、涙を拭う。やっぱり、これが俺の欲しかった世界…。
…。欲しかった日常なんだ……。

「兄さん、大丈夫ですか？」

「大丈夫。行こうか」

ゼロはそう言うと、歩き出した。

＊

「主…」

ブレイブフォースはその光景を見ていた。

「その思いは…理想でしかないはずだ…主…」

「憎しみの裏返しを見て貰っている。主にはな」

ブレイブフォースは気配を感じ、振り返り、構える。そこには、暗黒の聖書の姿があった。

「構えを解け。…主が取り込まれるまでの間、少し話でもしないか？」

「貴方は…主を助けようとは思わないのですか…？」

「主は、その世界を望んでいる。だから私は…『ふざけるな！』…！」

ブレイブフォースのその声に、少し後ずさりしてしまう聖書。ブレイブフォースの拳は怒りに震えていた。

「ふざけるな…！それは、理想でしかない！理想は崩され、新たに理想を生む！そんな変わらない理想は糞食らえだ！今の主は、それに浸っているだけ…このままでは、悲しむ人の方が多い…！それだけは…それだけは避けなくてはいけない！」

ブレイブフォースはそう言い、聖書の顔を見る。

「それを避けるために！私は全力を尽くす！貴方が行っているのは我儘だ！自分の我儘で、主を一人きりにして、貴方は嬉しいのか！？違うなら違うと言え！」

「私は…」

今のブレイブフォースの口調はゼロが聞いたら、間違いなく説教コースだとは思うが、あえて触れずに、ブレイブフォースは聖書を睨み、聖書は戸惑う。

「…もう、良い。私で主に会いに行く」

ブレイブフォースはそう言い、足を進めた瞬間、

「助けたい、に決まっているでしょう…」

その言葉を聞いて、足を止める。

「私の主なんです。助けたいに決まっていますでしょう…しかも、デバイスである貴方にそんな事を言わせる主がどんな人か、見てみたいですし」

「…やっと素直になりましたか。なら、主に伝える手段って言うのもあるはずでしょう？」

「ええ。あります。私には、主とリンクしてますから、念話が使えます」

「成程。で、私はどうすれば…」

＊

「ご馳走様」

ゼロは朝食を食べ終え、席を立ち、外に出る。

「…暖かいな…このまま続けばいい…そうは思うけど、俺の求めているものは…」

「兄さん」

ゼロは声に気付き、振り向く。そこには、すでに戦闘準備万端のイングヴァルトが居た。

「ん？ 如何した？ イングヴァルト」

「ちょっと、組み手しませんか？」

「良いぞ。と言うより、思ったけどさ。何で、“俺” って言ってるのに、皆普通なんだ？」

「それは…」

「俺が今、アルタードでないことも知っているのか？」

ゼロがそう言うのと、イングヴァルトは俯く。

「…すまん。変なこと聞いたな。やるか」

「…はい」

ゼロはイングヴァルトと対峙。構える。

ゼロは思いつきり叫び、イングヴァルトは苦笑いする。

「兄さん、もしかして技が使えないとか言います？」

「言わん！驚いていたただけだからな！？」

ゼロはそう言い、右腕に紫電を纏わせる。

「じゃあ、今度はこっちから…」

彼はそう言い、足に紫電を流し、地面を蹴る。

「霸王断空拳！」

一撃！—

彼の拳はイングヴァルトの防御の上に重なり、地面が隆起する。

「「はあああああああ！！！」」

一撃！！！！—

二人の拳はぶつかり合い、爆炎を起こす。そこから尾を引くように二人は飛び出し、対峙する。

「何でこんなに強いんだよ…」

ゼロはそう言い、

「ゼ…アルタード兄さんもなかなかですよ？」

イングヴァルトもそう言う。ゼロは構えを解き、イングヴァルトに近づく。

「なあ、イングヴァルト」

「はい？」

「俺の名前、何て言うか知ってるか？」

「アルタードでしょう？」

その答えに彼は首を横に振り、言う。

「それは昔の名前。今の俺の名前を聞きたい」

「ゼロ。でしょう？」

「…やっぱりな。皆隠してたんだ」

「はい。すみません」

イングヴァルトは頭を下げる。ゼロはそれに笑う。

「良いつて。頭を上げなよ」

そう言い、頭を上げさせた時、念話が入る。

（主！聞こえていますか！？）

（ブレイブフォースか？）

（無事でしたか。急いで下さい！そこから出れるまで、時間がない！）

（わかった。待っていてくれ。俺がそっちに戻るまでな）

（…はい）

そして、念話が切れる。

「でも、良いのですか？ 兄さん」

「良いつて、何が？」

「ここに居れば、永遠の幸せが掴めますよ？」

「永遠って言うのはないさ。俺がもし、そうしたら、俺は永遠に罪人さ」

「幸せなことが罪だと言うなら、誰でも罪を背負ってる。ですか？」

「そう言う事。でも、永遠って言うのは俺は信じない。終わりがあって始まりがある。だから、俺は元の場所に帰らなくちゃいけない。それは、お前等だって同じはずだろう？」

そう言い、ゼロは後ろを向く。そこには、フェード、ライアン、デイルシアが居た。

「アルタード…」

「母さん、俺は今、“ゼロ”だ。“アルタード”の名前はあげたよ」「そうか。ゼロ、すまん。お前に顔を合わせる前に殺されてしまつて」

「いいんだよ。父さん。俺は別な生き方してるから。父さんは俺の事を見守っていてくれ」

「ゼロ、ごめん。お前を殺したりして」

「兄さん、俺は兄さんを殺した。だから、差し引きなしだよ。」

「…そうだな」

フェードはそう言い、貯まっていた涙をふく。

「ゼロ…」

ライアンはそう言い、ゼロを抱きしめる。

「御免なさい…貴方を売って、私は逃げた…何て言えば…『母さん、

責めないで？ある意味、それのお陰でなのは達に会えたんだから、大丈夫』」

ゼロはそう言い、自身の母の抱擁から、離れる。そうした瞬間、ゼロの身長は元の物になった。

「じゃあ俺、行くね？」

ゼロはそう言うと、邸園の外へと歩き出し、やがて、姿を消した…。

＊

「はあああああああ！！！」

一閃！・撃！一

ぶつかり合う、閃光。その閃光は離れ、対峙する。

「如何したら、ここまでの防御になるんだ…？」

その閃光の片方の主、アルタードは言う。その体は機械的な装甲に包まれていて、アルスの様な形。が、色は黒。

「やはり、主も救えない劣化コピーなのか…？」

「そんなことは…ない！」

一閃！一

そこに、また黒い閃光が聖書とぶつかり、離れる。

「アルタードは、頑張ってきたんでしょう！？何時だって、主の事を思って、私達の事を思って！」

「リバティー…」

「呆気取られた様な顔してるんだったら、しゃきつとしてくれや！」

一閃！・閃！一

さらに、連閃。それを聖書は防ぐ。

「フォーチュン…」

アルタードは空いていた拳を握る。

「だな…今、何分経った？」

「25分」

近くにいた、明星は答える。

「急いでくれ…主…」

アルタードはそう呟き、飛び立った。

＊

「ダイバインバスタアアア！！」

一撃ッ！一

放たれる閃光。それと同時に飛ぶ、黒い短剣。

「ハーケンセイバー！」

一斬！一

横から飛んできた、金色の斬撃によって、それはすべて切り裂かれる。

「大丈夫？なのは」

「にやはは。大丈夫。けど…どう言う事だろうね？」

「…何で、暗黒の聖書が“二人”も居るのか…？」

フェイトとなのははそう言い、眼前の敵を見つめる。

「どちらかが本物で、どちらかが偽物？」

「それは解らんが、とりあえず、倒さなきゃならないのは確かだろ」

「アルス君」

その会話に、アルスが割り込む。

「それに僅かだが、動きが鈍くなってきている」

「それは、薄々と感じてた」

なのはは言う。それに、フェイトが

「だとしたら、防衛プログラムだね」

そう言い、

「油断は禁物だ。二人とも」

「了解！」

アルスの言葉に答え、散開した。

＊

「クロスファイアー…シュート!!」

一撃! 一

放たれるいくつもの閃光。それは、ティアナの物で、無機質でできているガジェットを貫き、撃破する。

「デイバイン・バスタアアア!」

さらに放たれる蒼い砲撃も、ガジェットを貫く。

「幾らいるって言ったって、これは多すぎでしょ!」

「ティア。落ち着いて、落ち着いて…」

叫ぶティアナを後から来たスバルは諫め、それにさらに青筋を立てる。

「だああああ! 苛々する! 吹き飛ばすわよ! チマチマやってたら、埒があかない!」

そして、爆発し、提案を出す。

「うん!」

スバルはそれに頷き、カートリッジをロードする。

「行くよ！マッハキャリバー！」

〈All right.〉

「ギア、セカンド！」

〈ignition!〉

一閃・閃・閃・閃・閃！一

瞬間、今まで居たガジェット全てが殲滅された。幾つもの閃光によって。

「間に合いましたね」

「なのはさん…じゃない？」

一瞬叫びそうになったスバルは首を捻る。

「似てますけどね。？煌」

「…いない。大丈夫」

確認を終え、降りてきた青髪の女性は言う。

「そうですか。はやてさん達はどうしてます？」

「シャイニングウインドと一緒にいる」

「そうですか」

なのはに似た容姿の女性に少し困惑気味だったのに気付いて、苦笑いする二人。そこに、エリキャラコが来て、さらに混乱した。

「あのさ、君達って闇の欠片事件って知ってる？」

？煌は口を開き、聞く。

「闇の欠片事件……。ああ。成程。それでなのはさんみたいな恰好で、フェイトさんみたいな恰好のお二人が居たんですか」

ティアナが状況を把握し、言う。

「そういう事です。とりあえず、主の所へ行きましょう」

明星はその言葉に肯定し、背中を向け、シャイニングウインドに通信を入れる。

「聞こえますか？ シャイニングウインド」

『聞こえておる。こっちは今のところ援護だけで済んでいるが、そっちはどうだ？』

「こっちはFW陣らしき人物たちを引き連れて、そちらへ向かう途中です」

『そうか。急げよ』

「了解です。切りますよ？」

『ああ』

そして、通信を切り、向き直る。

「早くして下さい。主が死にますよ？」

「ちょっと待って下さい」

その言葉を発したのはティアナ。それに？煌と明星はティアナを見る。

「どうしたのですか？」

「主って、誰なんですか？」

「主はゼロと言う方です」

「そうですか、解りました。けれど、もう一つ。何で、敵対していた貴方達が協力するんですか？」

「そんなに決まってる！主が…『？煌』：明星、良いの？」

叫ぶ？煌を明星は諫め、FW陣に背中を向ける。

「来れば解ります。それとも、貴方の先輩ともいえる方を殺す気ですか？」

「そう言う訳じゃ…！」

「なら、何も言わずに来て下さい。主が全て教えてくれます。私を…私達をこっちに入れてくれた訳を」

そう言うのと、飛び立った。

「あ！こら、待て！わかったら、さっさと来いよ！明星！待てって…！」

そう言うのと、？煌も後を追ひ、飛び立った。

「行く？ティア」

「行くに決まってるでしょ？あの人を見殺しに出来るか…！」

そう言うのと、ティアナは、巨大化していたフリードリヒの背中に飛び乗り、明星達の後を追った。

リミットまで…後、5分。



Come with me!

Young Bloods on Fire♪

戸惑い^{とまやう}を脱ぎ捨てて♪ 走れ♪

Get back your true hearts♪

目も眩^{くら}むようなスピードに抱かれ♪

You got a feeling ”way out”♪

今回の担当

・フェイト ・祐輔
・ゼロ ・はやて

ゼロ

「さて、始めました♪ “ZEROの境界線”♪」
フェイト

「今回は長かったね」

祐輔（執事服ver.）

「ですね」

はやて

「うおっ！ゲストの話は聞いておらんよ!？」

ゼロ

「いや、言ってねえし」

祐輔

「言ってなかったんですか。道理で…」

ゼロ

「気にすんな。アトリエ公認、最強執事め」

祐輔

「アトリエなんてまだまだです。あのブラウニーを越えなければっ
！」

はやて

「うおっ！燃え取る！燃え取るで！ゼロ！」

ゼロ

「はやては落ち着け。さて、今回はあそこで、本当に燃えている森
羅祐輔君が今回のゲストです♪」

フェイト

「いやいや。燃えている時点で可笑しいでしょ!？」

祐輔

「いや、一応バリアジャケットなんですよ？これ」

一同

「……はい？」

祐輔

「いや、バリアジャケットなんですって、だから、燃えても火はつ
かないでしょう？」

ゼロ

「…あ。本当だ。バリアジャケット」

フェイト

「本当だね」

祐輔

「さて、今日は新料理、和食が好きな人のための、羊羹です♪」

ゼロ

「サンキュウ♪」

祐輔

「はやてさん以外ですが」
はやて

「この薄情者オオオオオオオオ!!」

祐輔

「冗談ですから、上目遣いで見ないで下さい。色々刺さる気がしますから。あ。それと、ホワイトデーより遅れてしまったのですが、生チョコレートです。これは、はやてさんにはありません」

はやて

「薄情m……」

ゼロ

「嘘付くなよ。てか、同じネタやらせんな」

祐輔

「ばれましたか♪じゃあ、後書き終わったとでも食べて下さい♪」

フェイト・はやて

「は〜い♪」

ゼロ

「さて、おさらいと、クイズ。」

祐輔

「フェードは覇王の家系を封じようとしていた？」

ゼロ

「って所だな。おさらいは。で、前のクイズは、紋章を持つ三人はどちらの書でしたか？って奴だったな、答えは、一騎当千の書。さて、今回の問題は…」

はやて

「ゼロの旧名はなんでしよう？って事やな」

フェイト

「そう言えば、冬矢はお返し何くれるんだろ？」

ゼロ

「俺、冬矢の所…」

祐輔

「待って下さい。僕が行ってきます。少し鍛えて、生キャラメルくらいは作れるようにしてきます！」

ゼロ

「おい！祐輔！…って、行っちゃったよ」

フェイト

「楽しみだな♪」

はやて

「フェイトちゃん、狙った？」

フェイト

「うん♪」

ゼロ

「さて、次回予告」

ゼロ

「憎しみ。そこから来るものは争い。そんなものしか来ない。」

フェイト

「その言葉は今の暗黒の聖書には嬉しいもの」

はやて

「夜に終わりは来て、皆は朝日を浴びることとなるのだろうか…？」

次回－憎しみの夜が明ける時。－明日の天空へ！」

一同

「Drive ignition!」

第10話 一憎しみの夜が明ける時。一

「…ここは…?」

次にゼロが目を開いた場所は黒い空間。

「…闇…?」

ゼロはそう思い、歩き出す。

「暖かいな…。改めて思うけど、床も壁も天井も黒か…少し怖いな」

ゼロはそう呑気に独り言をつぶやきながら歩くと、二人の魔力が感じられた。…ブレイブフォースと…この魔力は…? ゼロはそれを少しと言うより、かなり気になったので、走り出し、ブレイブフォースの元へに行く。

「主!」

着いた所に居たのは、ブレイブフォースと同じ背丈の女性。…えっと…誰? ゼロには暗くてわかりづらいのだが、ISがあるのであまり関係ない。

「主、何であの世界に居なかったんだ?」

その時、女性が話しかける。

「…決まってるだろ? 俺だけ、罪を背負って、あそこで喰われる訳にはいかないからだ。そしたら、悲しみを皆に与えることになるだ

ろ？それだけは嫌だし」

「…やっぱり、面白いですね」

その女性はそう言うと、ゼロの方を向く。

「主は、憎しみをどう思いますか？」

「…憎しみか…まあ、争いしか来ない、醜いものなんだろうけど。けど、お前はそんな争いなんて、嫌だよな？」

「…けど、私の破壊本能が…『消し去ればいい。そんなものはさ』
…！」

ゼロは女性の言葉に口を挟む。

「破壊本能。あっても良いと思う。けど、嫌だと言うなら、嫌だと言え。俺が全力で受け止めて、消し去ってやる。何が良くて、何が綺麗で、何が合っていて、何がしたいのか…探すのを、掴み取るのを…俺が手伝ってやる。納得いくまでな」

「…私はデバイスです。ですから…」

そう言うと女性は俯く。が、ゼロは言う。

「…そんなものに囚われるなよ。？（アインス）だって、そうだった。皆の事を思って、主に従順で、最後には逝った。けど、俺はそんな彼女を変えた。名前は違うが、勇気の力。“ブレイブフォース”としてな」

ゼロはそう言うと、女性の手を握る。

「冷たいな。暖かさを知らなかったんだろ？今まで」

「…主。私は…居ても良い人なんでしょうか…？」

女性はゼロに聞く。その声は震えていた。

「当たり前。なら、その証として、名前をやる。お前は、まだ生まれ変わることができる。希望の聖書としてね。希望、光、輝き、照らす：イルミネートでどうだ？」

「主らしいな」

その名前にブレイブフォースは笑い、言う。

「うるせえな。良いじゃねえか。：で、受け入れるのか？この名前」

「：私でよければ」

「そっか。なら、一緒に行こう。イルミネート」

「はい」

その時、三人の足元に魔法陣が描かれ、イルミネートの服装が、黒基調の金色のラインが入っていた服から、白基調の水色のラインが入った服に変わる。

「そっちの方が可愛いな」

「可愛い：ですか…」

「ああ」

ゼロはそう言うと、ブレイブフォースが彼の事を睨んでいる。

「：わかってる。大丈夫。褒めてるだけだから。決して、ナンパとかじゃないから」

「解ってますけど、解ってますけど！元主の事を考えるとどうしても…！」

「解ってるなら良いだろ！」

芒星、左に、十二芒星を展開する。

「主。お手伝いします」

「ありがとう、イルミネート。ブレイブフォースも手伝ってくれ」
「解りました」

さらに、二人の足元にも魔法陣が展開。

「待ってろよ…俺達は…すぐに戻る…」

ゼロがそう呟くと、魔法陣は輝きを増した…

*

一撃・撃・撃・撃・撃・撃！一

幾回も激突する、剣と拳。

「コイツ…さっきより速くなってねえか!？」

フォーチュンは叫び、拳を弾く。

「確かに、動きは速くなっているが、俺達なら…」

アルタードはそう言い、背中についているブースターを唸らせる。

「行くぞ！」

そして、アルタードは、背中についていたブースターを、投げつけ、さらに、左足を軸に、跳躍する。

「私達も行きますか。フォーチュン」

「わかってらあ！」

リバティーもそう言い、羽根の形状を薄くし、分離させ、飛ばす。その後、フォーチュンは飛び、聖書に剣を振りかざす。

一撃・撃・撃・撃！

：が、全ての攻撃は、障壁、拳で防がれ、さらには、剣と、右足を掴んでいた。

「「なっ！」」

二人は、驚きの声を上げる。が、その顔は喜怒哀楽が無く、ただ、無表情なだけ。さらに、彼女は体を回転させ、フォーチュンとアルタードを投げつけた。

一撃

それは盛大な水柱を上げる。

「アルタード！フォーチュン！」

リバティーはそれを見て、駆け寄ろうとする。が、聖書が目の前に現れる。

「邪魔をするな！」

リバティーは腰から、剣を引き抜き、斬りかかる。が、右手で制さ

れ、バランスを崩した所を聖書は左手で首を締めあげる。

「くぁ……」

首を締めあげられて、リバティーは細い声を出す。

「「リバティー！！」」

アルタードとフォーチュンは、聖書がリバティーの首を締めているのに気付いて、空を駆けた…。

＊

「はぁ！」

一閃！・撃！ー

「くっ…！」

拳によって弾き飛ばされる、剣戟。

「硬いな…」

その主はアルス。その隣に、フェイトとなのはが来る。

「…何とか出来そう？」

フェイトは聞く。

「…解らん。もうちょっと打ち合いたい、今、何分経った？」

「29分。後1分だよ」

アルスの問になのはは答え、アルスは苦虫を噛み潰した様な顔をする。その時、聖書の体に異変が起こった。瞳の色が、黒から、翡翠に変わったのだ。

「…制御できて三分か…短いな…」

「「ゼロ!」」

その声を聞いて、三人は驚く。

「なのは、あの時の焼増しだ。行けるな?」

「うん! レイジングハート!」

へAll right! Load cartridge!! For
m attack!」

なのはの声にレイジングハートは答える様に言い、空薬莖を二発排出する。その後、なのはの拳にグローブの様な物が付き、構える。聖書はそれをみて、深呼吸。さらに、目を閉じ、開く。

「さあ…来い!」

ゼロがそう叫ぶと、なのはは腰を沈め、跳躍。右腕を引く。そして、左腕にスフィアを作る。

「はあ!」

右腕を振り抜き、初めにあった障壁を割る。成程な…道理で…。聖書はそう思い、目を閉じる。その時、なのはは聖書の腹部にスフィアを入れ込む。

「エクセリオン…」

スフィアは輝きを増す。なのはは同時に拳に魔力を溜める。

「クラッシャアアアア！！」

そして、聖書の体を貫き、聖書は桃色の光に包まれた…。

＊

「…撃ち抜いたか…。もう一つの方も消えたか…」

「そうですね。主」

ゼロが居た空間は先程とは打って変わって、辺りが白く輝く空間に居た。

「…さあ、行こう。一騎当千の書、記録されている、全ての術を、守護騎士に合うように、構成し、与えよ」

そのゼロの言葉に、希望の聖書は答え、リンカーコアの様な球が、6つ精製され、飛んでいく。

「琥珀の書、守護騎士としての一騎当千の書、そして、この書に記載されている守護騎士を一人の人として、改変せよ」

「主」

「ああ。行こう。皆が待ってる！」

ゼロは眼を開き、イルミネートの手を掴む。その瞬間、ブックホルダーが腰に精製され、そこに希望の書となったイルミネートを差し

込む。

「ブレイブフォース…」

「はい」

ブレイブフォースはいつも使っている刀剣型になる。どちらかと言うと、両手剣が一番しっくりくるか。ゼロは、それを掴み、鞘から引き抜く。

「…はあ！」

一碎！一

そして、ゼロは抜き身の剣で、閃光を斬り裂き、現れる。

《ゼロ！／主！》

その場にいた一同は名を呼ぶ。ゼロはそれに笑い、ブレイブフォースを掲げる。

「ブレイブフォース…セットアップ！」

〈了解！〉

そして、セットアップを告げ、彼の体は白の甲冑に包まれる。

「…少し、変わったな。ブレイブフォースは」

〈何がです？〉

「別に何でもないさ」

〈ならいいのですが…〉

〈主、憎しみの解放…来ます！〉

その瞬間、ゼロに一筋の光が向かい、彼はそれを剣を盾にすることで防ぐ。

「憎しみつつつても…あの時の焼き増し版かよ…」

ゼロはそれを見た瞬間、頭を抱えた。なんか、タコみたいな、イカみたいなのが周りにうようよしてて、さらに、人型の機械兵みたいなのがたくさんいて、さらに、そのもとになってるのが、ティラノサウルスとか、色々混ざった生命体みたいなもの。

「とりあえず、気持ち悪い実験生物って処だな…これは、酷すぎだぞ…」

「ゼロ！」

その時、ちょうど近くにいたフェイトが来る。

「ただいま…」

「ハーケン…セイバアアアア!!」

「だあああああああ!!」

一閃

ゼロは言いきる前にフェイトから、飛ぶ斬撃を受ける。

ハーケンセイバー

「痛あゝ」

「それくらいして当たり前！」

「カリカリしないでくれ。俺が悪かったから。許してくれ」

「…ゼロは、無理ばかりするから、皆心配なんだよ？」

「…わかってるさ。その中でも、お前とはやてが一番心配してくれ

ているものな」

そう言い、ゼロは剣を鞘に納め、フェイトを優しく抱きしめる。

「…馬鹿…」

「馬鹿で結構だ。護れば、それで良い」

ゼロはそう言い、憎しみの闇の方を見る。

「大丈夫…護り切れる…自分を信じる」

ゼロはそう言うと、ISを発動する。

「ここで退いたら…漢じゃねえ！」

ゼロはそう言い、剣を引き抜く。

「…少し、無理を押し量るが、勘弁してくれ」

「大丈夫。信じてるから」

「ありがとう」

ゼロはフェイトに礼を言うと、剣を掲げ、叫ぶ。

「希望の書の主、機動六課の戦闘隊長として告ぐ！総力戦の開始だ！生き残りたければ、出し惜しみせずに全壊で、戦え！」

その時、少しの間があり、皆は頷き合い、

《了解！》

そう返す。それに、ゼロは笑い、フェイトはゼロから離れ、構える。

「無理を推し量るって言ったけど、どの位？」

「死なない程度だ。行くぞ！」

「了解」

今、ここに、憎しみの闇との戦いが始まる……！！



君に出逢う為♪ここにいますよ♪

遥か七曜の星 道を照らし出して♪

僕を止めないで♪

ただひとつの♪愛を今、歌いたい

君の名呼ぶように♪

——— s e v e n 水樹奈々

今日の担当

・ゼロ ・フェイト

・祐輔 ・なのは

ゼロ

「さて、今回も始まりました♪ “ZEROの境界線” ♪」

祐輔

「決戦雰囲気ブチ壊しですね」

なのは

「だね。特にフェイトちゃんのあの行動で」

フェイト

「え？私！？」

フェイト以外

「うん」

フェイト

「だってね！ゼロとの約束で、怒って迎えるって、言ってね…それでね…」

フェイト以外

「…で？」

フェイト

「だから、それをしてあげようと…」

フェイト以外

「…で？」

フェイト

「だから…その…あの…」

祐輔

（止めてあげませんか？可哀想になって来ました）
ゼロ

（まだまだ♪）

なのは

（うん♪作者がT先生の小説の私の気持ちをここで仕返しさせてあげるって言ってたし♪）

祐輔

（駄目ですよね！？それえ！てか、T先生って、テストメントさんですよね！？）

フェイト

「祐輔…助けて……」

祐輔

（どうしましょう！？フェイトさんから、Helpコールがつ！）
ゼロ

（落ち着け。Helpコールは無視しろ）

祐輔

（無視って…）

フェイト

「祐輔え〜」

ユウ君の眼に映ったのは、半泣き状態のフェイトさんでした♪

祐輔

（駄目です！僕にあの殺人光線を耐えろと！？）

ゼロ

（そうだ）

祐輔

（夫のくせに残酷ですね！？てか、僕が善良な高校男子って知ってるでしょ！？）

なのは

（解ってるよ♪ただ…）

祐輔

（ただ？）

ゼロ・なのは

（祐輔の反応が見たくてそうしたのさ♪）

祐輔

（…鬼）

ゼロ・なのは

（何か言った？）

祐輔

（何も言っておりません）

フェイト

「祐輔え」

祐輔

「ほら！本人も反省してるし、良いじゃないですか！」「ゼロ・なのは

「…で？」

祐輔

（いい加減にして下さいよ！二人とも！！）

ゼロ

（じゃあ、後でお前の秘密を……）

祐輔

（教えません！）

なのは

（なら、女装をして？）

祐輔

（………僕も漢です。それくらいの罰は受けましょう！）

フェイト

「ホントに、二人とも、許して…？」

ゼロ

「悪かったな。ちょっとした冗談だったんだよ。祐輔、さっきの言葉、本当だろうな？」

祐輔

「本当です！」

なのは

「ごめんね、フェイトちゃん。祐輔君、後で覚えておいてね…」

祐輔

「はい…」

今更だが、なのはとゼロをくっつければよかったかな？

フェイト・祐輔

「同感です」

なのは

「何が？」

祐輔

「別に、何でもないですよ。ねえ？」

フェイト

「うん」

ゼロ

「まあ、良いが。さて、クイズの答え発表♪」

フェイト

「前は、ゼロの旧名だったね」

祐輔

「答えは、“アルタード”ですね」

なのは

「だね。さて、今回の問題」

ゼロ

「“ゼロが暗黒の聖書に付けた名前は何？”ってことだ。で、前から言ってるんだが、ゲスト呼びたいから、この企画やってるんだよね？」

そうだよ。でも・・・

ゼロ

「集まらないと。やる意味なくね？」

まあ、面白みがあつた方がいいじゃん♪

ゼロ

「あのなあ・・・」

祐輔

「まあ、良いじゃないですか。“今日のおさらい、これ一言!”に移りましょう♪」

ゼロ

「…何それ？」

フェイト

「ヒーローはやっぱり、痛い目に会うのがオチ」

祐輔

「と言う事ですな♪」

ゼロ

「名前変えただけかい！」

なのは

「ツツコミ入れちゃ負けだよ♪」

祐輔

「ですね♪さて、次回予告！」

ゼロ

「の前に。冬矢から届け物」

フェイト

「ホント!？」

ゼロ

「ああ」

フェイト

「開けていい？」

ゼロ

「良いぞ」

フェイトは箱を開ける。そこには、無粋だが、生キヤラメルがあった。

フェイト

「…冬矢…」

祐輔

「恋する乙女は大変ですね♪」

なのは

「だね♪」

ゼロ

「意味分からん」

なのは

（ゼロ君ってさ）

祐輔

（だんだん鈍感になって行ってますね）

なのは

（解る？）

祐輔

（ええ♪）

フェイト

「美味しい♪ありがとうございます♪冬矢♪」

なのは

（それと、ユウ君には、後で何かあげるね）

祐輔

（何ですか？）

なのは

（疲れたと思うから）

祐輔

（ありがとうございます）

ゼロ

「さて、一段落した所で、次回予告でも参りますか」

フェイト

「うん♪」

なのは

「そうだね♪」

祐輔

「はい♪じゃあ、僕から」

祐輔

「決戦はここから」

フェイト

「皆は武器を構え、戦う。」

なのは

「その中で、覚醒の光が現れる」

ゼロ

「それは、偉大なる戦力か？次回、一覚醒の光。新たなIS、XB
AREL。一明日の大空へ！」

一同

「Drive ignition！」

第11話 一覚醒の光。新たなIS、X・BARREL

「了解」

そうゼロがフェイトに言った直後。通信が入る。

『そう言えば、ゼロ。作戦はあるんか？』

はやてからだった。ゼロは少し笑う。

「有るに決まってんだろ」

『どんな作戦や？』

「ゴリ押し！」

その発言に、機動六課全員はすっ扱ける。

《アホかああああ！》

一閃！一

その時、はるか後方から、閃光が飛んできて…

一撃！一

ゼロに当たる。

「…すまん。何も考えてない」

ゼロは剣で防いでいたのか無償。そして、ゼロは肩を回した。

「さて、冗談もこの位にして、ちゃっちゃんと参りますか」

ゼロはそう言うと、剣を引き抜き、その先に閃光を溜める。

「ディバイン：バスター！」

一閃！

彼の声によって、それは放たれる。

一撃

「あゝ。やっぱりか」

ゼロはそう言うと、両手剣を構えなおした。

砲撃が当たった場所には、攻撃を受けた時に生じる紫電の様な物が走っていた。

「30枚ってところか」

ゼロはその紫電が走った場所と目標物を見合わせて言う。その後、目の前に剣を構え、足元に魔法陣を展開する。

「はやての魔法借りるか」

彼はそう言うと、魔法陣の形をベルカ式に確定する。

「灰白^{ほのしろ}き雪の王、銀の翼^も以て、眼下の大地を白銀に染めよ。来^こよ、氷結の息吹……」

その時、周りに氷の属性が備わった正方形の様な物がゼロの辺りに浮く。

アーテム・デス・アイセス
「氷結の息吹！！」

そして、剣を振り下ろすと、海が凍りつき、憎しみの闇全体を覆う。

「ふう。上手くいった…さて、皆集合〜！」

ゼロがそう叫ぶと、六課メンバーがゼロの周りに集まった。

「さて、作戦だが…あの障壁は30枚。と言う事で、俺が25枚を頑張って割る。だから、その後にお前等は砲撃叩き込んで、アイツを丸出しにする。そしたら、大気圏外まで連れてって、リミッターフルブレイク状態の俺の砲撃で潰す。以上が作戦でことで。異論は？」

ゼロはここで改めて聞く。

「なら、ゼロさんは大気圏外で待機するって事ですか？私達が手間取ったとしても、待機してるんですか？」

スバルが聞く。

「…まあ、そんなところだ。それだけか？」

ゼロは答え、皆を見渡す。その時、はやてが言う。

「私は反対や」

「何でだ？」

ゼロははやての言葉に語尾を上げて聞く。

「だってそうやろ。これで、アンタが失敗したらどうするんや！ゼロが失敗して…悲しむ人の涙の方が多いんちゃうか！？だから、私は反対や。こんな作戦、ゼロが考えた作戦はリスクがありすぎや…」

「…すまん。はやて」

ゼロはその言葉に少しだけ俯き、顔を上げる。

「…考えてみれば、あの時と一緒になんだ。FW陣とエミルとリタ、で、アルタード達は遠距離魔法は持ってるよな？」

《はい！／ああ。／任せて》

その答えにゼロは頷く。

「……なあ、スカリエッティ。聞こえてるか？」

『どうしたかね？異常』
アブノーマル

「その名で呼ぶなって言ってるんだろ。…お前が俺に組み込んだ最後の枷…外してくれ」

『どうしてだい？』

「護るために決まってる」

『…最後まで…とはいかないなあ！』

「な！最後までって…！」

『察しが良くて助かるよ。実は後5つくらいあるのだよ！』

「ああ、！？お前、俺に枷付けたのは2つって言ってただろうが！」

『あれは、妹達がお前の事を羨ましがるじゃないか！』

「知るか！てか、秘匿回線で伝えてくれればよかったじゃねえか！」

「まあ、落ち着いて。ゼロ」

ゼロの怒りをフェイトが抑える。

「解った…。とりあえず、それを外してくれ」

『嫌だよ!』

その言葉を聞いたゼロ達は目が点になり、ゼロは叫ぶ。

「ふざけんな!」

『ふざけたよ!』

「そんな暇あるなら、さっさとしろ!」

『…冗談の通じない奴だね』

「通じなくて結構だ! てか、お前と意思疎通なんてしたかあねえ!」

『…しようがない奴だね…』

スカリエッティはそう言うのと、端末を操作し、ボタンを押す。

『さて、終わったよ。そちらに向かった』

《向かった?》

ゼロ達は思いつきり頭を捻った。

「…! あれか?」

『そう、ゼロ君のために開発していた新武器ならぬ、神武器だよ!』

「文じゃなきゃ分からないネタをするな。で、名前は?」

『そうだね…X・BARREL^{クリス・バレル}で、どうだろう?』

「X・BARREL: 悪くないな。来い: IS、X・BARREL」

その時、SEEDを発動していたその瞳に”X”の青白い文字が刻まれた。そして、飛んで来ていたその武器は、箱状の物から射出さ

れ、ゼロの手に渡る。

「凄いな…」

「てか、ミーティアか？これ」

「違うから」

ゼロはエミルのベタな解答にツツコミを入れ、構える。

「…悪くない。本当に、俺の手に馴染む…」

ゼロはそこまで言い、スカリエッティの通信を見る。

「これ、貰っていいのか？」

『ああ。大丈夫だよ。君専用に作ってあるから、いつでも暴れてくれ』

「そうさせて貰う」

ゼロはそう言い、通信を切ると皆に向き直る。

「さあ、暴れようぜ！」

ゼロはそう叫び、光子砲とも呼ぶにふさわしいその銃を構え、皆は散開した…。

＊

「カートリッジロード！」

〈Load cartridge!〉

そして、ゼロの甲冑についている手甲が動き、空薬莖を排出した。

「X^{クロス}…バスター!!」

—閃!—

ゼロが咆哮し、砲身に光が集まり、放たれる。それは、渦を巻くように進んで行き、

—撃!!—

張ってある障壁を2枚壊した。

—G A A A A A A A A A A A A A A A!—

「やっと破り終わったか。このデカブツ」

ゼロがそう言うと、幾多もの機械兵が溢れだし、こちらに向かってくる。

「邪魔だ…」

〈R a d i a t i o n t y p e.〉

ブレイブフォースが吠え、形が変形。横広がりな砲口になり、それに閃光が貯まる。

「アクセル…シュート!」

—閃!—

そして、幾つもの黄金色の光弾が飛び、機械兵に当たる。その内の

一体がゼロの元へと向かい、魔力弾を発射する。

「鬱陶しい！」

―殴―

ゼロはそれを殴り返すと、魔力ナイフを投げつけ、沈黙させる。

「…これじゃあ、威力は出せないな…。一番威力の出るフォルムつてある？」

〈ランスタイプですかね？〉

ブレイブフォースが答える。

「ランスって…槍じゃねえか？」

〈とりあえず、試しましょう。主〉

ゼロは問いかけるが、イルミネートが言う。

「だな」

ゼロはそれに肯定し、砲身を掲げる。

「貫け！」

〈L a n c e t y p e. 〉

その時、砲身が変化し先の方が突撃槍ランスのようになる。ゼロはそれを構え、突撃する。

「シフト・ランチャー！」

〈Shift launcher!〉

その時、砲身がさらに変化。ランスの先が別れ、その間に、砲撃が出せるようになっていく。

「行くぜ…イルミネート!」

〈はい。主〉

ゼロは希望の書を手にとり、詠唱を開始する。

「闇を貫き、活路を導き出せ……戦いの夜想曲!」
バトル・ノクターン

その時、砲身の先に閃光が貯まり、一気に放出される。その奔流は、空を切る音を響かせながら、結界に向かい、28ある内の25壊した。

「なッ!破壊力ありすぎだろっ!」

〈そう言うこと言ってもな…〉

ブレイブフォースはゼロの叫びに苦笑いで答えていただろう。その時、さっきの30倍近くの機械兵が出てきた。

「はあ。やりますか。イルミネート、ブレイブフォース。アウトフレーム」

〈了解／了解です〉

二人はそう言い、俺の隣に立つ。

「あの機械兵壊すの手伝ってくれ」
ポンコツ

「ポンコツって…。頭が痛くなるぞ…」

ブレイブフォースは頭を抱える動作をする。

「そう言うな。出来るか？」

「当たり前だ」

「全力を尽くします」

二人は返事をし、

「頼んだ」

「「わかった。／了解です」」

そう言うのと、二人は散開した。

「さてと。…無尽に斬り裂け…」

ゼロがそう呟くと、突撃槍が双剣に変化した。

「行くか…」

彼は呟き、飛んだ。

＊

「はぁ！」

―撃！―

拳によって壊される、機械兵。

「ディバイン：クラッシャー！！」

追い打ちを掛ける様に放たれる桃色の閃光。その砲撃を放った主、高町なのはは、この異常な量のガジェットに苦戦気味だった。

「減らないね…」

「お前の十八番は使わないのか？なのは」

その隣に降り立った、赤髪の男は聞く。

「いや、まだその時じゃない。もうちょっと、叩いてからにするよ」

「…無理はするなよ？」

「当たり前！」

なのははそう威勢良く返事をする、バスターで、二体を粉碎し、さらに足技で1体落とす。

「…様になってきたな。そう思うだろ？村雨」

〈過大評価しすぎだな。まだ、上に登れる〉

アルスは自分の胸に掛かっているペンダントに聞く。

「ありゃ？そうか」

へそれより、お前もアイツに見惚れてないで、後ろに気を使え。馬鹿者〈

「へいへいっと！」

アルスはそう答え、拳を後ろに振り抜く。その拳は空を斬るが、それに構わず、その体勢のままアルスと言う。

「さてと。少し大変になるかな？」

〈真面目にやれ〉

「わかったよ。モード、日本刀」

〈ほらよ。馬鹿弟子〉

「馬鹿弟子言うな。馬鹿なのはゼロも同じだろ」

〈お前の方がゼロより劣っているだろうが〉

「な！この……！！」

村雨の言い様にアルスは抗議する。

〈だから、さっきから後ろに気を配れと言っておるだろう〉

「わかっとなるわ！」

アルスは剣を後ろに振り抜き、そこにいた、13もの機械兵を鉄屑にする。

〈やればできるではないか〉

「うるせえわ！てか、お前は何時からそんな口が聞けるようになったあ！」

アルスはそう言い、契約開放した時についている、サーベルを引き抜き、機械兵を一気に斬り裂いた…。

＊

「もう、始まってましたね」

「そうだね」

今の様子を見ている二人。明星と？煌だ。

「主は、戦ってますね」
「だね」

そんな会話をする二人。

「こんな所に居たか」

「よく解ったな。シャイニングウインド」

「貴様の様な鳥とは違うのだ」

「む。それは言いすぎや」

「そんなことはない」

そんな素っ頓狂な会話を聞いて、明星達はそちらの方を向く。

「シャイニングウインドですか」

「まあ、主も困っている様だし、加戦してやらないか？」

「それもそうだね。はやては、ここで援護してて」

「わかったわ。…って、邪魔になることは確定かい！」

「邪魔じゃなくて、隊長として、残ってろ。解ったか？ 鴉」

「む。アンタは何時もそればかり言うな！？ もっと、別な言葉を…」

「アロنداイト！」

— 撃！ —

「て、聞いてないし！」

とまあ、はやては置き去りにされてしまった。

＊

「鬱陶しい奴らばかりだな…」

――斬斬斬斬斬！――

ゼロは残り少なくなった機械兵を斬り裂きながら呟く。彼が一番落しているのは、はやて談。

「んなことはどうでもいいから」

突っ込まんでくれ

「嫌でも突っ込みたくなることするからだ……」

――閃！――

ゼロは右の剣先から、閃光を放ち、機械兵を貫く。

「撃て」

ゼロはそう言うと、双剣は元のランチャー型に戻る。

「後、3枚か……。撃ち抜くか」

ゼロは、そう呟き、構える。その時、ほぼ真下から、機械兵が現れる。

「ッ！」

――斬――

ゼロは、それに反応しきれず、少しだけかすめる。その後、砲身を

突き付け、

「喰らえ！」

―撃！―

引き金を引き、消し飛ばした。

「…左目が斬られたか…」

ゼロは、顔を触り、手についた赤い液体を見て言う。

「後、1時間位か。流れ切るまでの時間は…」

そう呟き、念話を飛ばす。

（皆。聞こえるか？）

（こちら、なのは。どうしたの？）

（…速攻で決める。時間すら惜しい状況になった。結界を全部割るから、エミルから、頼んだぞ。）

（待ってくれ！主！）

その時ブレイブフォースから、声がかかる。

（どうした？）

（どうした？じゃあ、ありません！ここで、仮にコアを露出させたとしても、そのコアを誰が破壊するんですか！？）

（俺に決まってんだろ）

ブレイブフォースの問いにさらっと答えるゼロ。

(…反対ですよ。私は、主の死に際のあの笑顔だけは見たくありません！)

(死に際？違うな。“生還するための前祝い”が、正しい)

ゼロはブレイブフォースの言葉を訂正する。

(主…)

(信じる。ブレイブフォース。俺は死なねえ…)

(生きて帰って下さい。それだけは破らないで下さい)

(当たり前。イルミネートは何か言うことあるか?)

ゼロはそう答え、イルミネートに聞く。

(…主。頼みごとがあります)

(頼み事?)

(はい。主の実家の様な所を見てみたいです…駄目ですか?)

(大丈夫。頼み事は果たす主義だし。絶対帰ってくる)

そう答えると、ゼロは一息吸い、言う。

「(さあ、最後の仕上げだ)」

呟き、伝える。そして、仕上げの幕が開く…。

＊

クロス
X・バスタアアア!!

今回の担当

・ゼロ ・フェイト
・祐輔 ・なのは

ゼロ

「さて、今回も始まりました♪」

祐輔

「今回はデフォルメでこれ何ですね…」

フェイト

「まあ、ネタが切れて来たらしいよ？」

祐輔

「でも、キャラソンとか入れれば良い話じゃないですか」

なのは

「成程ね。けど…」

ゼロ

「なのは達が歌う事になるな♪」

なのは・フェイト

「そうなの!？」

ゼロ

「必然的にそうなるだろ。じゃあ、今日のおさらいこれ一言!祐輔
!」

祐輔

「油断大敵」

ゼロ

「そうだな。そうなるわな。じゃあ、クイズの方は!？」

フェイト

「前はゼロが暗黒の聖書に付けた名前だったよね? 答えは、イル
ミネート」

ゼロ

「やっぱ正解者いねえわ。詰まん
なのは

「まあ。まあ。で、今回はゼロ君についていた枷の数は？って事で。あ。何か紙が降ってきた」

祐輔

「見せて下さい」

なのは

「はい」

祐輔

「……あの作者め……しようがない……カオス・コントロール混純操作！！」
「……」

「どわぁ！ここは何処だ！？」

祐輔

「さて、今回のゲストは、godaccellさんの小説、魔法少女リリカルなのは―留まらない流れ―から、村雨流留さんが来ております♪」

流留

「紹介ありがとう。けど、ここは何処だ！？今さっきまで、はやてと遊んでたんだぞ！？」

ゼロ

「案ずるな。虚空間の丁度境目だから」

流留

「何故に！？」

祐輔

「あれ見て下さい」

流留

「ZEROの境界線……あ、そっか」
なのは

「なんか、納得しちゃったね……」

フェイト

「そうだね……」

流留

「??.、何で、なのはとフェイトがいるんだ?」

ゼロ

「気にするな♪」

流留

「いや、気になるから聞いてるんだが…」

祐輔

「アンリミテッドモード…」

流留

「へ?」

―刺刺刺刺刺―

祐輔

「気にしたら負けと言う奴です♪」

流留

「待て待て!ゲストにそんな扱いするのか!?」

祐輔

「細かいこと気にすると…はやてさんに嫌われますよ?」

流留

「なら、その物騒な物をしまええええ!」

祐輔

「しょうがないですね」

流留

「ふう」

ゼロ（声真似あり）

「そろそろ時間だな。御退場願おうか!」

流留

「ラ〇!」?

ゼロ

「カオス…コントローオオオオル!」

流留

「ソニ〇ク!? てか、もう退J」

—瞬—

ゼロ

「さて、次回予告に行こうか」

祐輔

「そうですね」

ゼロ

「じゃあ、行くぞ」

ゼロ

「遂にはじまる仕上げ」

祐輔

「やれる事は全てやる」

なのは

「撃ち抜き、終わらせる!」

フェイト

「そして、彼らは…次回、—夜明け—明日の大空へ!」
一同

「drive ignition!!」

第11話ー覚醒の光。新たなIS、X・BARRELー（後書き）

godaccelさん、召喚許可、ありがとうございました♪

3章最終話―夜明け―

「スロツトル・X」クリス

ゼロはその言葉を呟く。その時、手甲が回転し、手甲が金色に染まり、十字架が刻まれる。

「ロード」

さらに呟き、空葉莢を2発排出する。

「負担がでかいな…決める！集え！明星！全てを焼き消す焰と成れ！」

そう、この詠唱は自身の守護騎士だった存在の明星の技の詠唱。リミット解除状態のなのは星砕きスターライトブレイカーの一撃をも凌駕するほどの魔力量が砲口に溜まる。

「ルシフェリオン…ブレイカアアア…！」

―閃！―

そして、それが一気に放たれ、結界を2枚砕く。その時、空間が揺れる。

「――バースト！」

―砕！―

その声と共に、最後の結界が砕け、機械兵が出てくる。

「らあああああああああああああああああああああ
！！」

一斬！一

さらに、そのまま砲口を振るい、機械兵を一掃した所で、残留魔力が切れた。

「後は頼んだぜ。エミル！」

「応！」

エミルは剣を掲げ、跳躍。その時、空葉莢が排出され、光輝く羽根になる。

「天翔覇翼斬！」

一斬！一

その一撃は、憎しみの闇を斬り裂く一撃。それと同時にまた機械兵が出てくる。なのははレイジングハートを砲撃モードに切り替え、機械兵を一掃しようとする。

「ディバイン：『まだ早いですよ。我慢してみてください』：：！」

明星はなのはを抑えさえ、少しだけ笑う。

「パイロ・シューター！」

はやてはその光景に声を上げる。

「そうだな。だが、これほどの敵は我等に任せておけ」

「…何でや？」

「主の願いだからだ。最後の一撃の時の詠唱を済ませておけ」

となり にいた シャイニングウインドは答え、暗黒のスフィアを生み出す。

「永久の闇に沈め…光の墮天使よ…デアボリック・レイ!!」

—閃閃閃閃閃閃!—

詠唱と共に放たれる連撃。それは間髪いれずに機械兵を沈める。

「一気に行く!」

「解ってるって!」

シャイニングウインドはそう叫び? 煌は答え、アルタード達は一点に集まり、魔力を一点に集束する。

エターナル・ディストラクション
《永遠の滅び!!》

そう6人は吠え、スターライトブレイカーを軽く凌駕する一撃を叩きこむ。

「主らも、速く一撃を加えろ! 長くは持たん!」

シャイニングウインドがそう叫ぶと、なのは達は頷く。

「「レイジングハート！／バルディッシュ！」」
〈Load cartridge〉〈〉

なのは達の声に答える様にデバイスは答える。

「「全力全開！スターライト：／雷光一閃！プラズマザンバー：／響け！終焉の笛！ラグナロク：」」

そして、詠唱を開始し、魔法陣が展開。そして、技が放たれる。

「「ブレイカアアア！」」

一閃！・撃！！！！！！

閃光が走り、三人の魔力がぶつかり、爆発を起こす。

「：長距離転送」

ほぼ大気圏外から発動される魔法。金色の魔法陣が憎しみの闇の下に現れる。

「演算開始：」

その言葉と共に、宙に文字が多数浮遊する。

「ありがとう。後は：俺の仕事だ：」

ゼロはそう言い、X・BARRRELを構える。

「転送開始」

ゼロはさらに、魔力を注ぎ込み、転送する。それと同時に大気圏を突破し、転送位置から、距離を取った地点に浮遊する。

「：フルドライブ」

そして、現時点で最大の能力^{チカラ}を出し切る為の合い鍵^{コトバ}を言う。
その言葉を発した瞬間、瞳のXの文字がさらに光り、背中に水晶の様な3対の翼が生える。

「X：DRIVE」

ゼロはそう呟く。手に持つは白銀の光子砲^{ランチャー}。瞳には、燃え尽きる事のない

—覚悟—

と

—闘志—

それだけ。彼は憎しみの闇を見据える。

「：High MAT：ON！」

その時、六枚の羽は、射出され、砲身が光り、構造を変える。
腰に二本の砲身。両肩には、4つの羽が集まった様な型の物が精製され、ついている。

右手には白銀の長銃^{ライフル}、左手には、黒翠の長銃^{ライフル}が握られている。

「これで…決める！ロード！」

その時、手甲が動き、空葉莢が5発排出される。

「本当は……滅多な事で詠唱入らないんだよ……。枷が外れてるなら、こいつも扱える！」

ゼロの瞳のXの文字が右は白銀に左は黒翠に変わる。

「行くぜ！ ルシフェリオンブラストライトディバインズフエザー…」

そこまで詠唱すると、全ての武器から、閃光があふれ出す。

「ブレイカアアアアアア！」

一閃！！！！！！
●
擊！！！！！！
—

そして、目を開けることも困難なほどの眩い閃光を発した後、十二の閃光は憎しみの闇の核^{コア}へと突き進み、大きな爆音を起こす。それと同時に、フルドライブが解除される。

「……やったか……？」

ゼロはそう言い、一歩近づいた瞬間。

—
閃
—

集束砲が顔をかすめる。

「……まだ、残ってたか……」

ゼロは鋭い眼光を見せ、憎しみの闇を見る。

「……やっぱ、苦戦してやがったな？」

「!!」

ゼロはどこかで聞き覚えのある声を聞き、振り向く。そこには、肩まである金髪に、藍の瞳。そして、六課の制服を纏った男が、戦艦の上に立っていた。

（元気か？大親友♪）

「何で……ここに……」

ゼロは念話に応える様に言う。

（何で……か。友達だから。それしか言えない）

「……なら、手伝ってくれ」

（そのつもりだ。千里、アルカンシエルの方は任せたぞ）

『了解。祐輔』

その返答を聞くと、祐輔は艦から、跳躍しゼロの隣に来た。

（お前はそのデカブツ一発放つだけで良い）

（は？何でだ？）

さっきまで口頭で話していたのを念話に切り替え、聞く。

（お前は魔力枯渇。見たところ、現状じゃ、さっきのでギリギリだろ。大丈夫だ。アルカンシェルだってあるし。何より…）

その時、祐輔の瞳が深紅に、髪が銀になる。

（頼りになる味方がいるからな）

祐輔はそう言い、笑いかける。

（確かにそうだな…。頼んだぜ？）

（おう）

ゼロは笑って返し、祐輔はそれに応える。その後、祐輔は告げる。

（アルトリア、メディア、メドゥーサ、ギル。行くぞ）

《（解りました／言うまでもないな。祐輔）》

ただ一人を除いて、皆は返事をし、アウトフレームとして、実体化する。その手には、自分が愛用する武器を持っている。

（あのな？ 本当に単独だけはやめて欲しいな？ って思うんだけど）

（単独？ 違うな。一人で行動してるんだ）

（それを単独つつうんだよ！ ギル！）

その一人こそギルだった。

（まあ、良いや。出し惜しみなしだ。俺の事はどうでもいいから、全壊でいけ）

（了解！）

そう言うと、皆は囲むように散開する。

（千里！）

『ぼっちり！いつでも行ける！』

（了解！皆、行くぞ！）

《（はい！／言われなくても！／了解！）》

皆は返事をし、祐輔とアルトリアは手に持つ剣を掲げ、メドゥーサは騎英ベルレホーンの手綱、ゼロは光子砲を構え、メディアは足元に魔法陣を展開し、ギルは乖離剣を虚空空間から取り出し、構え、戦艦からは閃光が貯まる。

（俺が合図したら、放てよ。抜け駆けとかなしだからな）

（断り♪）

（あ？）

ゼロは祐輔が言い切った後に空葉莢を排出し、砲撃を放つ。

一撃！一

（コイツ…障壁とか、やるじゃねえか…）

（この馬鹿野郎！くそッ！今だ！）

一撃！一

皆から砲撃が放たれ、憎しみの闇を飲み込む。

（千里！今だ！）

『了解！』

祐輔の念話に千里は通信で答え、アルカンシエルを作動させる。

（皆！射程から離れろ！）

《（了解！）》

そして、離れ、祐輔はアルカンシエルのキーを回した。

一閃！・撃！一

眩い閃光と砲撃。爆音とともに進むその姿は終わりを告げるようだった。

それは、目標物に当たり…それを飲み込むが如く、空間が歪み、

一撃！！一

消えさった。ゼロは安堵の息を吐き、大気圏内に居たはやて達は任務完了を喜んだ。

（そろそろ降りるか）

祐輔が聞く。

（だな。てかさ。さっき俺、口で喋ってたけどどうして解ったんだ？）

ゼロは聞く。

（読唇術使ったから）
（…成程な）

祐輔の答えに納得し、足場を展開するゼロ。

（何で足場を展開したんだ？）

（いや、そろそろバリアジャケットの構成を変えないといけないな
って思ってたさ）

（あゝ。そっか。お前はバリアジャケットの構成変えないとあれな
んだよな？）

（そう言う事）

ゼロはそう言うのと、バリアジャケットを女物に変える。

その時、髪が茶髪、瞳は右だけ藍になった。

（：魔力枯渇。資料には書いてあったけど、初めてみたよ）

（まあ、ジュエルシードの影響とかもあるのかもな。眼の色藍だし）
（そうだな）

そう言い、笑い合う。

（祐輔。はやて達がこちらを見えていますよ？）

（そうだな。行こうか？）

アルトリアの言葉に応え、祐輔達は戦艦に戻った。何故か？それは、
大気圏に生身で突入するのは危ないからに決まっているだろう。だ
が、それは口ばかりで、ただ単に祐輔が見たかったただけなのだ。

「変態か？お前は」

「違う」

ゼロの問いに祐輔は否定する。場所的には医務室と言ったところ。

「なら、まじまじと見るな」

「それもそうだな。このままじゃ俺が変も…『アルトリア』。お前の主がご乱心だあゝ♪』…って、何言っちゃってくれるかな!？」

その時、扉の後ろから、アルトリアが飛んできて、祐輔の後頭部を蹴り抜く。

「祐輔! 親友がいくら女の子だからと言って、それはセクハラですよ!？」

「御免なさい…って、違う! ただ話してただけだ!」

「祐輔ええええ!」

「って、千里もかよ! だああああああ!」

祐輔がボッコボコになってる間、ゼロは後ろを向いて、笑っていた。

＊

「ゼロ…お前、何で千里の顔が解ったんだよ…」

「いや、何となくお前の相方の顔思い浮かべたら、繋がったから…ククク」

「あのなあ…」

「けど、その顔はないぜ? 祐輔?…ククク」

「クーも笑うな!」

今の祐輔の顔はもう見ていられないほど酷いのだが、そんな顔を見てゼロとクーフリーンの二人は笑う。

「はあゝ。まあ、良いや。千里?」

「座標は入力したから、もうすぐ」

「そっか。なら急いでくれ」

「了解…」

千里はそう言うと、出ていった。

「…はあ。まったく。お前とは連絡取ろうとは思ってたんだけど、仕事が大変でな」

「そうなんだ。てか、デバイス変えた？」

「まあな。セイバーだと2体が限界だったから、聖杯グレイルにしたんだよ」

「成程。それで妙に適合率が高かったり低かったりしてたのか」

「違う。皆高いんだ。けど、さらに高いのか、低いのか、そういう感じなんだ。だから、融合事故はない」

「へえ」

ゼロは祐輔の話を聞き、感心していた。

「そろそろ艦を降りても大丈夫な頃だと思っぞ？ 祐輔」

その時、後ろから声がかかる。男の声、黒っぽい肌に銀髪でオールバックの男だった。

「そっか。有り難う。アーチャー」

「礼には及ばん」

アーチャーと呼ばれた男はそう返し、祐輔の隣に立つ。身長も同じくらい。

「で、お前が祐輔の友か？」

アーチャーはゼロに聞く。

「そうだけど。貴方は？」

「失礼した。祐輔のデバイスと言うところだな。アーチャーとでも呼んでくれ。しかし：腕も立つようだな。君は」

ゼロは聞き返し、アーチャーは答える。

「どうだろうな？ユウの方がセンスはあると思うぞ？」

「その言葉、そのまま返させて貰おう。祐輔は少しだけ躊躇する時があるんだ」

「躊躇？」

その言葉に疑問を抱いたゼロは聞く。

「ああ。そうだ。絶対的な悪と対峙した時に、貫くか否かを迷う時があるんだ。先ほどまで戦っていた機械兵と言うのか？ああいう物は大丈夫なんだがな。人と対峙した時がな」

「成程な。アーチャーならどうする？」

ゼロはアーチャーに聞いた。

「私なら、眼を見て判断する。君は？」

「全く同じ。眼を見れば、覚悟が解るからな」

「：君と私は良い友となれそうだ」

「それもそう思う。で、祐輔の兄貴は見つかったのか？」

「全く手掛かりなしだ」

「そっか」

ゼロはそう答える。その時、扉が開いた。そこに居たのは祐輔だっ

た。

「どうした？ユウ」

「いやな？フェイト達がお前に会いたいわって言ってるんだよ。駄目か？」

「：少しだけ、落ち込む話を話すかもしれない。それで大丈夫なら。って言っておいて？」

「了解」

祐輔はそう言うのと、歩き去る。

「私も席を外そうか」

「そうして貰うと助かる」

「そうか。ではな」

ゼロの言葉に応え、アーチャーが病室を出ると、ゼロはため息を吐いた。

「体の調子がおかしいな」

そう呟き、右肩を回す。

「なんだろう…。この不安な感じは…」

彼はそう考えた時、病室の扉がノックされる。

「どうぞ」

ゼロはそう言う。そこに居たのはフェイトとはやて。

「…ごめんな？フェイト、はやて」

「ごめんなって言う位なら、無理しないでよ…」

フェイトはゼロに言う。

「無理に見えるか。やっぱり」

「当たり前でしょ？それとも、無茶って思ってたの？」

「まあ、どっちもどっちだな」

「そう言えば、ゼロの眼の色変わってるけど、IS使っとるの？」

ゼロは一瞬言葉を疑ったが、納得し、ため息を吐く。

「ISは“使ってない”」

「使ってない？じゃあ…」

「無意識と言う訳でもなく」

「じゃあ…」

「そ。あの時の一撃で、色は元に戻らんだろうな」

「そっか…」

その言葉を聞いたはやては複雑な顔をする。

「…駄目だったか？」

「いや、別に…」

そんな事を聞かれたはやては少しおどける。

「本当は嫌だろ？こんな傷があるのは」

「まあ、少しは…」

「そっか。けど、護り切れた証として見ることもできる…。だろ？」

そう言い、ゼロははやてに笑いかける。

「そうやな」

はやてもそれに返す。はやては、ゼロの手を握り、さらに言う。

「私等を護ってくれたんやもんな…ごめん」

「なに謝ってんだよ。誰もそんな事頼んでないぞ？」

「でも…」

はやてがそこまで言った後、ゼロは優しく彼女を抱きしめた。

「でも何もない。俺は護れるだけで十分だし、何にせよ、皆無事だったんだ。それでいいじゃねえか」

ゼロはそうはやてに言い聞かせ、はやては少しだけ頬を赤く染めていた。

「せやな…もうちょっとこのままでええか…？」

「大丈夫。フェイトも来い」

「うん」

フェイトは傍に来て、近くにあった椅子に座る。

「情けないな。本当に」

「そうかな？」

「そうだと思うぞ？こんな形で再会して、自分で怪我してさ」

「考えてみると確かにね」

「だろ？」

ゼロはそう言い自嘲気味に笑う。対してフェイトは少し落ち込み気味。

「……無理だと思うから、無理なんだ」

「え？」

「昔、兄さんから教えてもらった言葉。だからさ、そんな顔するな。今回の件に関しては、無茶だとは思っていたけど、無理ではない訳だし」

「…そうだね」

そう言うと、フェイトは彼の眼を見る。

「…でも、綺麗だよな。その瞳」

「そうか？」

「うん。とっても。だから、これ以上、怪我とかしないようにね？」

「…顔だけは傷つけないよ」

「顔だけ？」

フェイトはゼロの顔だけ発言に疑問を浮かべる。

「とりあえずはね」

「…でも、駄目だよ」

ゼロはその疑問に答え、フェイトはさらに言う。

「わかってる。怪我をして欲しくないってのもな。けど、護るためには、怪我と言う代償が必要になってくるし。矛盾してるのは解ってるんだけど、我慢してくれないか？」

「うん。大切なものを亡くす痛みに比べたら、何でもない」

「無理するなよ？」

「大丈夫」

ゼロはフェイトを気を遣い、フェイトもそれに答える。その時、扉が開いた。

「ゼロく？」

入ってきたのは祐輔だった。それにゼロ達はこの姿をさらす事になって固まり、

「「「……………」」」」

沈黙の時間が流れ、祐輔は巻き戻しをするかの様に退室。すると、ゼロも立ち上がり、

「殺ってくる」

ゼロはそう言い、はやてをベッドに寝かせた後、物凄い勢いで走って行き、出ていった。その後、扉の向こうから物凄い轟音がした。

「祐輔…南無…」

フェイトはそう言い、十字を切った。



H i g h M A T : O N ! !

今回の担当

・ゼロ ・フェイト

・祐輔　・はやて

ゼロ

「さて、今回も始まりました♪ZEROの境界線♪」

祐輔

「まさかの作者クオリティだな」

フェイト

「そうだね」

はやて

「：で、ユウは何しに来たんや？」

祐輔

「次回で明らかになるよ♪」

はやて

「気が遠くなる…」

フェイト

「でも、無事に帰ってきてよかったよね」

ゼロ

「そうだな」

はやて

「まあ、ユウは南無やけどな」

ゼロ

「良いんじゃないか？別に。あの後ばらすつもりだったんだろ？」

祐輔

「そんな事は…」

ゼロ

「有るって」

祐輔

「：まあ、シャルさん達になら」

ゼロ

「殺る」

祐輔

「いやいや！何でさ！？」

フェイト

「そうだよ。殺る必要はないと思うけど…」

はやて

「甘いなく。フェイトちゃんは」

フェイト

「へ？何で？」

はやて

「このまま行ったら、祐輔君、あの三提督まで話すつもりやよ？」

フェイト

「気が変わった。そこを動かないでね？」

祐輔

「フェイトまで！？」

ゼロ

「Let's」

フェイト

「パリー♪」

祐輔

「いやああああああああああああああああああ！！」

「ただいま、残酷描写を通り抜けて、物凄い事になっておるので、はやてのトークをお楽しみください♪」

はやて

「はいはい♪って、こんな無茶ブリで出来るか！」

一終了

ゼロ

「さあ、おさらいとクイズだ♪」

フェイト

「と言うより、FW陣、活躍しなかったね」
はやて

「それが作者クオリティ♪もしかしたら、FW陣の出番もあって、ユウが出てなかったのかもしれへんよ？」

祐輔

「てか、その方が良かったんじゃないか？」

ゼロ

「それが作者クオリティだ♪」

フェイト

「じゃあ、前回のクイズ」

ゼロ

「枷の数。答えは七つだな」

はやて

「ん？何か紙が落ちてきおった」

ゼロ

「…ああ。成程。読者の皆さんに朗報。今回からクイズに答えてくれて、その中でも正解した人から順なんだけど、何でもお願いしていいらしい」

フェイト

「…大丈夫かな？作者」

ゼロ

「大丈夫だって。じゃあ、今日のおさらいこれ一言」

はやて

「まさかの人物、出現か!？」

祐輔

「そうだな」

ゼロ

「さて、次回から4章だ。で、ルートは3つくらいあるんだよ」

フェイト

「3つ？」

ゼロ

「ああ。ルート其の1。Xマリアージュ事件。ルート其の2。俺の
ブレイク・ワールド
壊した世界。ルート其の3。暗殺の使徒。って処だ。まあ、ルート
1か、ルート3は必ず通るんだよ。で、新キャラも使おうらしい」

祐輔

「本当なのか？」

ゼロ

「とりあえず。んで、読者のみなさんに決定して貰う！」

フェイト

「要約すると、決められないので、決めて下さい！って、事だよね
？」

ゼロ

「言うな。まあ、その前に幾らか話は入るけどな」

フェイト

「だよね。打ち上げ会もやらないといけないし」

ゼロ

「それもそうだな。その参加者も募集するか。オリキャラで、打
ち上げ会なんだけどさ。その時は歌う歌もな」

祐輔

「俺も？」

はやて

「当たり前や」

祐輔

「…はあ」

ゼロ

「落ち込むな。安心しろ。下手だと言って逃げたら、ミーティアで
粉碎するから」

祐輔

「そこまでする!?!」

ゼロ

「する。じゃあ、次回予告」

ゼロ

「暗黒の書事件。今回の一件はそう呼称されるようになった」
フェイト

「一同は行くべき場所に戻る」
はやて

「そして、祐輔からある事が告げられる」

祐輔

「その内容は…? 次回、第4章第1話「元帥」。明日の大空へ!」
一同

「Drive ignition!!」

4章第1話一元帥一

「さて、後始末も終わったし。何しようか？」

ゼロはそんな事を言う。これが、先程祐輔を半殺しにした奴のセリフとは到底思えない。

「その前に、用事があったんじゃないの？」

フェイトはゼロに言う。

「そう言えばそうだな。千里にでも聞いてみるか」

ゼロはそう返し、千里に念話を繋ぐ。

（千里さん？聞こえますか？）

（ゼロ元帥ですか？どうしたんですか？）

（元帥？何で？）

（…まさか、祐輔の奴やらかして、気を失ってるとかそんな感じですか？）

（まさにその通り）

（…あの馬鹿は何してんのよ…）

（空気崩さないつもりが崩して、制裁受けたらしいって言うか、制裁したって言うか…）

（起きたら聞いてみて下さい）

（解った。じゃあな）

そう言うと、ゼロは念話を切る。

「何て言ってた？」

フェイトは聞く。

「ユウの目が覚めたら、聞けって」

「そっか」

ゼロは答え、フェイトはそう返す。

「ん…」

はやては眠たげな眼をこすり、起き上がる。

「お。起きたか？」

ゼロは、それに反応し、はやては辺りを見渡す。

「ゼロは何処や!？」

そう言い、物凄い勢いで起き上がり、走って行こうとするはやての腕をゼロは掴む。

「お前は何処へ行くつもりだ？」

少し怒り口調で、はやての方を見ながら。

「あ。居たんか。良かった。てっきり、どこか行ったのかと…」

「行ったよ？お前が寝てる間に」

「そ、そうか。で、何してたん？」

少し戸惑い気味に聞き、座る。

「祐輔にお仕置きを」

「…何したん？」

お仕置きの単語が気になり、はやてはゼロに聞く。

「俺らの様子見て、何も言わずに巻き戻した様に出て行ったんだよ。てか、起きてるんなら起きろ」

「ばれてた？」

ゼロはそう言い、祐輔の顔を見て言う。祐輔はそのまま声を出し、聞いた。

「当たり前。さっさと起きろ」

そう言うと、祐輔は起き上がる。

「最近冷たくなってない？」

祐輔は聞く。

「気のせいだ。てか、何しに来た？」

「ん？進級の話」

「「「進級？」」「」」

祐輔の言葉に三人は首をかしげる。

「そう。フェイトには関係ないかとは思うっていうとあれなんだけど、一応聞いて？」

「うん」

「よし。とりあえず、この時点で階級が上がるのは二人。機動六課所属八神はやて特別捜査官兼部隊長と起動六課所属八神ゼロ・S・A・ハラオウン提督か？」

「提督!？」

「あれ?言ってなかったっか？」

祐輔の言葉から出たその単語に驚き、はやてはゼロに言う。ゼロは少しだけ首をかしげる。

「聞いてないよ!？」

フェイトも驚く。

「あら？」

「しっかりしてくれ」

ゼロはさらに混乱し、祐輔は冷めたツツコミを入れる。

「で、話を戻す。二人とも俺と同じ階級――」

祐輔はポケットから、階級バッジを取り出し、二人に渡す。

「元帥だ」

「「…なぬ!？」」

その事実にはやてとゼロは驚く。

「何かおかしいか？」

「提督と元帥って、変わらないよな？」

「どうなんだろうな？」

「それ以前に、なぜおまえは元帥なんだ？」

「それは…面倒だ。回想スタート！」

「言っではじめんの！？」

はやての叫びを無視して、回想は始まった…。

＊

ある日、祐輔は三提督に御呼ばれし、ちょっとしたパーティのようなものに来ていた。

服は…しっかり正装で来ていたのだが、数日前の任務で怪我をし、右腕に包帯を巻いていた。

「祐輔。大丈夫ですか？」

「大丈夫だ。アルトリア」

アルトリアの問いに少し無理をしながらも、笑顔で答える。

「祐輔さん？」

後ろから声をかけられる。振り向き、そこにいたのは、伝説の三提督の一人、ミゼット・クローベル。

「失礼しました！ミゼット提督！」

「いや、謝らなくても…。きっちり45度なんですね…。というより、少しだけお話しませんか？」

「私でよろしいのですか？」

「はい。よろしくなければ声はかけないでしょう？」

「それもそうですね」

祐輔は笑って見せ、アルトリアを手招きする。

「どうしたのですか？祐輔」

「いや、これからミゼット提督と話をするんだけど、アルトリアは来るかな？って思ってる」

「良いのですか？」

「良いから聞いてんでしょ。行くよ」

「待ってください！」

祐輔はミゼットが歩きだしたのを見て、追いかけて、アルトリアも追いかける。

「右腕、どうかなされたのですか？」

「任務で少し。アルトリアが重症だからって言って無理やり巻いたんです。というより、なんで自分が呼ばれたのかすらもよく解らないんですよ」

「これから、ちょっとした進級があるんですよ」

「誰のです？」

祐輔は分からなくて、ミゼットに聞く。ミゼットはそれに笑い、

「貴方のです」

と答えた。

＊

「と、こんな感じで」

「なるほどな…全くわからなかった」

「ゼロは機動六課からスカリエッティのところ行くまでには、もう提督だったし、小学生のころには、執務官資格取ってたしね…」

ゼロはそのようなパーティがあつたのも知らず、しかも、フェイトがそういった時点で、祐輔が驚いていた。

「で、なんで俺とはやてなんだ？」

「回想スト…『ゼロ impulse!』…ぐはぁ!」

祐輔の回想をゼロが止める。

「いい加減にしろ。てか、胸邪魔だな」

「邪魔になるくらいデカイって、どんなだよ…」

「いいから、お前の口で説明しろ」

「俺が元帥になった次の日にさ、ミゼットさんに呼ばれたんだよ」「で？」

「それで、元帥にするなら誰がいいですか?って聞かれて」

「まあ、自分らがいつ消えるかもわからんしな。で？」

「ゼロとはやてって答えt…『ゼロ strike!』…がはっ!」

「本当に胸邪魔だ!」

ゼロはその技を放った後に叫ぶ。一応、金髪までは戻っているのだが、体つきと眼の色が戻っていないということに。

「要らん説明だな。で、なんで俺とはやてを選んだ？」

「はやてはJS事件解決したし、ゼロは地上で究極最強の最終兵器って聞いたから」

「その仇名つけたの誰だ？」

「俺」

「よし。そこを動くな。骨すら残らないほど微塵に刻んで殺る」

「なんか、恐ろしいこと言ってる!？」

「ゼロも落ち着いて。私たちはゼロがそんなのではないってわかってるから…」

ゼロの殺る発言に祐輔は驚き、フェイトはそんなゼロを諫める。

「まあ、冗談だけど。それともう一つ」

ゼロは祐輔の方を向く。

「?？」

「何でお前はあの場所にいた？」

ゼロはその事を聞く。

「…聞きたい？」

「言え」

そう言うゼロの眼は冷たく、祐輔の顔を真剣なものにさせた。

「実は、機動六課に入る事になるんだ。俺」

「それで？」

「そうして、隊舎に行ったら、隊長陣達は97管理外世界で任務中って言われて」

「後は、戦艦引き連れてここに来たら、こんなことになってか？」

「そう」

「そうか。なら、もう一つ聞こう」

「何？」

「お前は、六課に来て何をするつもりなんだ？」

ゼロはそう聞くと、祐輔は少しだけ難しい顔をする。

「…言い方が良く解らないんだけどさ。無茶ばかりする部隊に、ストッパーは必要だと思うんだ。だからさ。ね？」

そう言い、祐輔は笑う。

「確かに。お前なら、冷静な判断ができそうだし。二人とも、異議は無いだろ？」

「「うん」」

ゼロはそう言い、笑い、その後二人も笑う。

「と言うより、何時からテストしてたの？」

「ん？今さっき♪」

「ご丁寧に秘匿回線で繋いでくれてなあ♪」

ゼロとはやてはご機嫌に言う。

「でも、よく許可したよね。ゼロ」

「まあな。それに、祐輔ならって思ってな。ちょっとばかり意地悪してみた♪」

フェイトの言葉にゼロは答える。

「さて…なのはとアルスカ。如何した？」

ゼロがそう言うと、なのはとアルスカが出てきた。

「にやはは…ばれてた？」

「当たり前。さて、何の用？」

「あ。そうだった。実はね、刹那君とスターゲイザーが：『もう行ったか？』：うん」

ゼロは少し寂しげな表情を見せる。

「別れてのは、何時だって辛いな」

「何言ってるんだ？いきなり」

「何でもない。で、それから？」

「スターゲイザーがこれをね」

そして、なのはは銀の羽根の様な物を渡す。

「これは？」

「この戦艦の起動キーらしいけど：」

「祐輔？」

「落ちていて！俺は何にもやって無いから！と言うより、これはアースラの後続機で、誰にも情報が渡って無いから！」

「アースラの後続機？」

ゼロはその単語に反応し、拳を解く。

「そう。六課のための、艦隊戦専用の戦艦みたいなもの。まあ、X・BARRRELとかも積めるしね」

「マジか。てか、あのMAD博士は何処だ？」

ゼロはX・BARRRELの単語を聞き、スカリエッティの事を聞く。

「この戦艦の収容所に居る」

「そっか」

アルスは答え、ゼロはそれを聞くと、医務室を出る。

「どうしたのかな？」

「大方、スカリエッティにでも会いに行くんだろうな。アイツの事だし」

なのはは首を傾げ、アルスは答える。

「何で？」

「あの通信でも言ってたと思うけど、枷のロックを外すんだろうな。多分、端末の暗号操作だからな」

「成程…」

アルスの答えに納得するなのは。

「ゼロ、暗号は解けるの？」

「ゼロなら大丈夫。3万桁の暗号も解除する位だし」

アルスはさらっとそんな事を言い、皆は凍りつく。

「今、何て言ったの？」

「だから、3万桁の暗号も解除できるって」

「本当なの？」

「マジで。足跡残さずに綺麗に必要な情報取って行くしな。アイツ」

その言葉でまた凍りつく。

「なら、ゼロはアルス君にも頼ってたけど、自分でも…」
「大方そうだろうな」

アルスはさらっと返し、一同は大きなため息をつく事になった。

＊

「よう。元気か？」

アフノーマル

「異常かね。どうした？見ての通り、私は捕まっている。問題は無いのだろうか？」

ゼロの声に、スカリエッティは答える。

「確かに。けど、俺の様は別にある」

ゼロはそう言う。

「俺の能力のロック端末、渡せ」

「何故だい？」

「決まってる。お前にいちいち通信を繋ぐのが面倒だからだ」

「君も相変わらずだ」

「お前に言われたくない。MAD博士め」

ゼロは殺意を込めた目で見ながら、言う。

「心外だね。私は君に良くしたはずだが？」

「それこそ心外だ。お前は触れてはいけないものに触れ、さらには、皆を追い詰めた。これ以上の侵害が何処にある？」

「…」

「黙りこむか。まあ、それでもいい。端末を渡して貰おう」

「…それなら、私が来ている白衣の内側に入っている」

「そうか。ランサー起動。行って来い」

ゼロがそう言うと、檣状の物がゼロの周りに浮遊し、端末を取って戻ってくる。

「有り難うな。これしか、礼ができないとはな…アンタなら、もつと別なところでその力を使う事が出来る。だから、やってみてくれ。頭をゆっくり冷やしてな」

そう言い、自身の端末を起動させながら、来た道に戻って行った。

＊

「うわゝ。2万桁かよ。面倒くさいな」

ゼロはそう呟き、端末を物凄い速さで打ち込んで行く。

「ゼロさ〜ん！」

遠くから呼ぶ声。それにゼロは反応し、手を止める。

「スバルか？」

そう思い、端末を打ち込みながら近づく。

「どうしたんですか？」

「俺の枷外すためにロック外してる」

「ロック？」

「2万桁の暗号解きつと。よし。1個目完了つと」

「何があったんですか？」

スバルは聞く。

「左腕専用のX・B A R R E Lだってさ。艦隊の兵器としても搭載可能…って、どんだけ威力高いんだよ。全く。千里ちゃん？」

『どうしたんですか？ゼロ元帥』

ゼロがそう言うのと、千里が出る。

「からかうのはよせ。これって六課の艦なんだろ？」

『はい』

「それだったら、X・B A R R E Lの方をドッキングさせるから、手伝って」

『了解』

そうすると、ゼロの周りに別窓がいくつも浮かび、ゼロはそれをものすごい速さで操作して行く。

「とりあえず、X・B A R R E Lのtype Rをドッキングさせて、副砲にさせた」

『速いですね…こっちはtype Lの方を副砲として、ドッキング』

「並行で暗号解読完了。ジェットパックみたいな奴だけど、これは補助ブースターとして使える。ドッキング頼む」

『了解』

こんな感じで、物の30分もしない内に、全てのドッキングを完了した。

「『疲れたあ〜』」

二人は終わった途端にそんな事を言う。

『しかし、凄いですよね』

「だな。対、ゆりかご用の誘導魔力弾兵器、それに、ジェットパックが二つ…どんな兵器だよ…てか、アイツは俺に何をさせようとしていた…？」

『ゆりかごが完成した時の殲滅兵器。ですよ…』

「…その形の名はK I Z U N A…」

『…使う事はないとは思いますが、使う時は気をつけて下さいね…』

「ああ」

ゼロはそう言うと、座り込む。

「…あの博士は、これを使うつもりなんて、無かったのか？」

『…私だったら、使わせてないです』

「きつく…当たり前過ぎたかな…？」

ゼロはそう思い、天井を見上げる。

『でも、元帥のやったことは正しいと思いますよ？』

「何でだ？」

『一般人民に、被害を出さなかったんですし、それに…』

「それに？」

ゼロが聞くと、千里は一息吸い、言う。

『最愛の人を失うこともなかったんですから』

「…そうだな」

ゼロはその言葉に頷く。

『じゃあ、私、資料の整理とかあるんで、此の辺で』

「ああ。色々悪かったな」

『ええ。それでは』

千里がそう言うと、通信が切れる。

「…KIZUNAか…」

ゼロはそう呟き、立ち上がる。

「案外、危険なのかな…」

そう思い、歩き出した…。



ゼロ impulse!!

今日の担当

・ゼロ ・はやて
・祐輔 ・フェイト

ゼロ

「さて、今日も始めました♪ZEROの境界線♪」
はやて

「…何か、歌とか、そう言うのがなくなつとるな…」
フェイト

「気にしない方が良くも…」

祐輔

「気にしてる時点で終わりじゃない？」

ゼロ

「だな…。っと。御唱和下さい。せーの！」

一同

カオス・コントロール
「混純操作！」

一瞬

???

「うわっ！ここ、何処ですか！？」

ゼロ

「落ち着いて。時空の境目だから」

???

「よかった…って、ええ！？」

祐輔

「作者のオリ小説、剣と魔法と少年と。の主人公、桂木・S・クリス君が今回のゲストです」

クリス

「紹介ありがとうございます」

フェイト

「ずいぶん疲れた顔してるね」

クリス

「母さんが俺に女の子の服着せて遊ぶからです…」

はやて

「ご愁傷さまや」

クリス

「はは…。有り難うございます…（涙）」

ゼロ

「泣くな、少年よ。人生とはかくも辛いものだ」

クリス

「言えますね…って、誰のセリフですか？」
ゼロ

「リリ〇と〇レ〇ズのラジオ放送番組のセリフだったかな？」
フェイト

「またそういうものを持ってくる…飽きないね。作者さんも
はやて

「全くや」
ゼロ

「そんな事は置いておいて、今回のおさらいとクイズ。さて、フェ
イト！」

フェイト
「用事がある人間に対しては丁寧な態度をとりましょう」
はやて

「そうやな」

ゼロ（女体化）
「なかなか、この薬も使えるな」

フェイト
「何するつもり？」

ゼロ
「決まってるでしょ？はやて？」

はやて
「了解や♪」

フェイト
「え？ちょ…」

ゼロ
「大丈夫♪ちょっと弄って遊びたくなっただけだから♪」

はやて
「そうやで♪」

フェイト
「きゃあああああああああああああああー！」

祐輔

「フェイト…頑張れ」

クリス

「容赦ないですね」

祐輔

「アリサ道場とか、LVはもっと酷いから。ゼロとはやてだから○○を○○○○するみたいな感じだろ」

クリス

「伏せ字が…」

祐輔

「規制厳しいからね。さて、クイズを」

クリス

「…クイズ、ありませんよ？」

祐輔

「…本当だ。作者？」

すまん m () m

祐輔

「宜しい。では、今回のクイズ」

クリス

「六課では元帥は何人いるでしょうか？」

祐輔

「て、事」

ゼロ（女体化）

「ただいま」

祐輔

「おかえり。フェイトは？」

ゼロ

「まだはやてに○○○○されてる」

祐輔

「やっぱり、乗っかっちゃいそうだね」
ゼロ

「なんてったって、○○○だしな」

祐輔

「確かに」

クリス

「○○○？何ですか？」

ゼロ

「人の布団にもぐりこんで、○○○するからだ」

クリス

「成程…。母さんはそんなことしてないと切に願いたいです」
ゼロ

「おいおい。まあ、良いや。次回予告」

クリス

「ゼロ達はイルミネートの願いをかなえるため、ゼロの故郷へ向かう」

祐輔

「そこで見たものとは…」

ゼロ

「次回、一墓参りー明日の天空へ！」
一同

「drive ignition!!」

はやて

「もう終わってた!？」

フェイト

「ううううう…／／／」

終幕。

第2話―墓参り―

次の日。ゼロは訓練場で剣を振るっていた。

「裂波！」

一斬！一

足を踏み込むその動作で放たれる斬撃は、展開していたフィールドの岩を砕く。

「まあ、こんなもんだろ」

彼はそう呟き、剣を鞘に納める。

〈お疲れ様です。主〉

剣の状態となっているブレイブフォースは言う。

「付き合ってくれて、ありがとうな」

〈いえ〉

「ブレイブフォースはクールだな…」

ゼロはそんな冗談を交えながら、ブレイブフォースを待機形態の青い宝石にする。

〈主〉

ブレイブフォースとは違う声がし、ゼロは腰に携えている本を見る。

「どうした？イルミネート」

そして、彼はその声の主の名を呼ぶ。

へアウトフリームになりたいのですが…

「ああ。大丈夫だ」

彼がそう言うと、イルミネートは彼より少しだけ身長が低い女性になる。

「ところでどうしたんだ？」

ゼロはイルミネートに聞く。

「昨日の事…覚えてます？」

イルミネートは聞く。

「もちろんさ♪」

ゼロは笑顔で答える。

「なら、今日中に行きたいです」

「そっか…この艦はユウが受け持ってるから、アイツに聞かないとな。よし。行くぞ」

ゼロはそう言うと、イルミネートの手を引き、歩き出した。

*

「で、艦長室には来たんですけど、どうするんですか？」

「もちろん、ノックして、その後に入るだろ」

ゼロはイルミネートの質問に答え、拳を引き搾り、

一殴！・殴！一

扉を二回殴りつける。

「ゼロだ。祐輔、起きてるか？」

返ってくるのは、沈黙だけ。イルミネートはゼロの方を向き、また元の顔の位置に戻し、耳を塞いだ。何故か？彼は怒りの心を顔に現わしており、拳に魔力を纏わせて引き搾っていたからだ。

「主？幾ら寝息が聞こえたからと言って、断空拳で無理やり起こすのは…」

「良いんだよ。ユウは寝ている振りしてるだけだから…な！」

一撃！！一

艦内中に響く撃音。その音は扉が吹き飛ぶ音と、金具が外れる音であった。

「お邪魔します」

「お前はもうちょっと入る方法って言うのを考えないの…？」

「考えたよ？結果がこれだけ」

「お前な…俺は寝てないんだよ…。少しくらい…」

「却下」

祐輔の言葉を気持ち悪い位爽やかな笑顔で切り捨てるゼロ。その様子に頭を抱える祐輔。

「で、何の様なの？」

祐輔は仕切り直し、ゼロに聞く。

「聞きたい？」

「そりゃ聞きてえよ。お前が普段使わないカイザーアーツ霸王流で起こす位なんだから」

「イルミネートが俺の故郷に花を添えたいって」

「…成程な。理解した。千里に連絡取ってからだな」

祐輔はそう言い、千里に通信を繋ぐ。

「千里？聞こえてるか？」

『祐輔。私は祐輔の事が…』

千里はそんな事を机に突っ伏して言っている。

「千里？」

祐輔は、千里にもう一度声をかける。

『…はッ！聞いた！？』

「うん」

『よし！今から殺るから待ってなさい！』

「待て待て。祐輔の事が…の所までだったから大丈夫」

『へ？そうなの？』

「うん」

『良かった：好きですって言ってなくて：』

今、言ったね。そう思わざるを得ない三人。だが、あえて触れないこととする。

「で、本題に入らせて貰うんだけどさ」

『うん』

「覇王家があった場所。覚えてるか？」

『大丈夫。ゼロ元帥が壊した場所よね？』

「馬鹿っ！本人が居る所でそれを言うな！」

『え！？居たの！？』

「別に気にしてねえから良い。それよりも、覚えてるのか？」

ゼロは祐輔の肩越しに言い、千里は座標入力を行いながら、『大丈夫』と答える。

『とりあえず、行くんだよね？』

「行きます。主の故郷を見てみたいです」

『了解！なら、少し次元飛ぶから、何かに捕まる様にね』

「OK。俺の方でも、そう言う放送は流しておく」

『準備ができたら言って？』

「了解。グレイル」

〈仰せのままに〉

祐輔の手に巻いて有った腕輪はそう言うのと、コンソールが浮かぶ。そして、祐輔は操作を始めた。

「有り難うな」

「大丈夫。それと、知ってる？」

「何を？」

祐輔の問いにゼロはさらに聞く。

「…エクリプス、それと、冥王、聖王、霸王の事」

「冥府の炎王、イクスヴェリア、聖王女オリヴィエ、霸王イングヴァルトの事か？」

祐輔の言葉にゼロは答える。

「そう。霸王はお前にもつながってる事は解る。聖王女はヴィヴィオのもとで、イクスヴェリアは…『まだ生きてる。そう言いたいんだろ?』…そう。まだ良く解らないんだけど、それは言える」

祐輔は険しい顔をして言う。

「実際、お前とイルミネートと俺の方が良いかもしれないんだ」

「何でだ？」

「一応、俺の方でも調べたんだけど、イングヴァルトを名乗ってるそいつは、強さを求めて、戦ってるみたいなんだよ」

「つまり…」

「そう。強くなる手掛かりを求めて、もしかしたら、鉢合わせするかもしれない。そうすると、間違いなく捕まるからな」

祐輔はそう言い、コンソールの操作を終える。

「終了。さて、良いぞ」

『了解！ポチッとな♪』

貴方はどこぞの団員ですか！？とツツコミを入れたくなるが、あえ

てツツコミを入れずに、傍に有る物に掴まった。その後、艦に激しい揺れが起こる。

「思ったんだけどさ、祐輔」

「何？」

「これ、アースラの後続なんだよね？」

「そうだよ」

「なら、揺れとかないよな？」

「まだ順応してないからね。っと。もう着いたかな？」

「てか、こんなドデカイ艦連れ込んで大丈夫なのか？」

「転送装置付いてないしね…」

「後で付けとくわ。俺ら降りたら、速攻で、ここから離脱。オーケー？」

「OK」

祐輔がそう答えると、ゼロはイルミネートの手を引き、ハッチの方まで歩いて行った。

＊

海際に立つ、崩れた建物。ストラトス邸である。その門の前にゼロとイルミネートが立っていた。

「じゃあ、手発通りにな」

『了解』

ゼロは祐輔との通信を切り、正門を開け、入る。

「変わらないな。ここも」

彼は懐かしむように崩れた建物を見て言う。

「主は、自分がした事に後悔してるんですか？」

「してるさ。とてもな。“本当の”親父に会えなかったんだし」

「本当の？」

「そう。俺はフェードが本当の親父だとは思ってたけど、違った。フェードは本当の親父を殺したからな」

「主……」

「ん。詰まらない話をしたな。行こうか。皆の墓がある場所に」

彼はそう言うのと、髪を整え、歩き出す。イルミネートもその後を追う。

＊

…着いた場所は草原。白い花が咲いている、とても綺麗な草原。

「着いたな」

「綺麗な場所ですね」

イルミネートは言う。

「俺も不思議な位だ…あの時、母さんを殺さなかったとは言っても、ここまで綺麗だとはな…」

ゼロは墓標に一步づつ近づき、それを見た。

「……成程な。居るんだろ？イングヴァルトと呼ばばいいのか、アインハルトと呼ばばいいのか分からないけどさ」

ゼロは墓標の前に座り込んで言う。

「アインハルト？誰ですか？」

「俺の妹さ。アインハルト・ストラトス。ゼロでも、兄さんでも良いぞ？」

ゼロがそう言うのと、ツインテールの翡翠がかった髪に異色虹彩の女性が出てくる。

「十年…いや、お前からすれば、三年位か？」

「そうですね。兄さん」

アインハルトは、近づき、ゼロの隣に立つ。

「まあ、そうだろうな。俺は“過去に”行ってたんだし」

ゼロはそう言うのと、立ち上がる。イルミネートから見ると頭一つくらい違う大きさと、彼はアインハルトの頭を撫でた。

「ただいま…で、良いのか良く解らんけど、とりあえず、言っておく」

「…私もよくわからないけど…お帰りなさい。兄さん」

「ああ…」

二人の周りには暖かい風が吹き抜け、草原を揺らす。ゼロはアインハルトを抱きしめ、アインハルトは、目を閉じて、幸せそうにしていた。

「主。折角の再会も良いですが、今は別な目的でしょう？」

「…そうだったな。悪い」

ゼロはそう言うと、墓標の前にしゃがみ込み、目を閉じ、手を合わせる。

「父さん、母さん、兄さん…ただいま…まだ、けじめは着いて無いけど、もう少し頑張るよ」

そう言うと、目を開き、立ち上がった。

「イルミネートは手を合わせないのか？」

「じゃあ、失礼して良いですか？」

「ああ」

ゼロが許可すると、イルミネートはしゃがみ、手を合わせる。

「主のお父様、お母様、お兄様…デバイスのイルミネートです」

「固いですね」

「ま。アイツの良い所の一つだし」

アインハルトとゼロは後ろでとても失礼な会話をしていたが、彼女はそれに気付かず、続ける。

「私は、貴方達の事を知りません。ですが、私は全力でお守りするので、安心して下さい…」

イルミネートは目を開き、立ち上がる。

「良いのか？」

ゼロは聞く。

「はい。もう大丈夫です」

イルミネートは答え、ゼロに微笑む。

「そうか。なら、俺ら行くわ。アインハルト」

「また、会えますよね…?」

「珍しい事もあるな…。お前が甘えるなんて…まあ、俺の勘違いかもしれないけど、これだけは言える」

ゼロはアインハルトに拳を出す。

「縁があれば会える。だから、会った時に、またこうやって…な?」

「…そうですね」

アインハルトはゼロの方に拳を出し、二人は出した拳同士をぶつけ合って、笑う。

「…じゃあな」

「はい。また会いましょう」

「ああ」

ゼロはそう言うと、転移魔法を発動し、地球に戻った…。

＊

…あれから三日。転校の手続きは済ませ…と言っても、ただ、ミッドに戻るただけだな。ゼロはそう思いながら、転送ポートの方に居る。

「大変だな。主も」

ゼロ

「理解者はお前だけだ…アルタード」

リバティー

「さて、おさらい♪」

明星

「故郷に足をつける時は周りを特に気にしましょう」

フォーチュン

「関係ネエおさらいだな…」

明星

「貴方の様な戦闘狂には言われたくないです」

フォーチュン

「ハッ！言ってくれるじゃねえか…ここで決着つけても良いんだぜ？」

明星

「望むところです！」

？煌

「あの二人から電撃が散ってるよ！？主！」

ゼロ

「だアアアアア！ウルセエ！明星！フォーチュン連れて外でやれ！それと、シャイニングウインドは驚って呼ぶのを止めろ！てか、鳥に例えるな！？煌は審判やってろ！リバティーとシャイニングウインドはこっちに来いや！仕切り直しじゃあ！！」



今日の担当

・ゼロ

・アルタード

・シャイニングウインド

・リバティー

ゼロ

「だいぶやりやすくなった…」

リバティー

「さすが主♪やる時はやるね♪」

ゼロ

「やる時は余計だ…」

シャイニングウインド

「主。向こうの方が面白そうだから、行って来てよいか？」

ゼロ

「良い。てか、疲れた」

シャイニングウインド

「そうか」

アルタード

「出で行ったな」

ゼロ

「そうだな…。さて、次回予告」

ゼロ

「六課に戻ったゼロ達」

アルタード

「六課では、新入隊員が居た」

リバティー

「それは一体…。次回！—新入隊員—明日の大空へ！」

一同

「Drive ignition!!」

第3話―新入隊員―

「もうそろそろだよな？」

「そうだよね。ゼロは何でこの二人を選んだの？」

「片方は戦闘方法に幅が広くて、扱いやすいからな。もう片方は、皆から見ても、問題ないと思うし」

ゼロとフェイトは六課の隊舎の前に立ち、新入隊員を待っていた。

「もう一人は？」

「もう一人は……。居ないだろ」

「いや、資料では、もう一人いる事になってる」

「マジで？」

「うん」

ゼロはその言葉を聞いた瞬間。コンソールを叩き、はやてに通信を繋ぐ。

「はやて？聞こえるか？」

『聞こえてる。どうしたの？』

「お前、新入隊員何人って言った？」

『3人だけど？』

「じゃあ、二等空尉と一等空佐以外にだれが居るんだよ……」

『……あ。人数の数え間違いや』

「あのなあ……『4人や』……はあ!？」

ゼロははやての言葉に耳を傾け、叫ぶ。

「何で四人なんだよ！」

『ユウやろ…後は、一等空佐やろ、二等空尉が居て…あ。資料渡すの忘れてた』

「…頭イテェ」

『後半片言やな…それより、データはこっちや』

「サンキュ」

ゼロはデータを見る。確かに、祐輔も入れたら四人か…。ゼロはそう思いながら資料を眺めて、ある事に気付く。

「…何で、サクラが…」

『学校辞めてきた見たいやよ?』

「このクソツたれ…」

『私のせいやない!』

「わかってる。場所的には?」

『バックアップ頼もうと思うとるんやけど』

「なら、大丈夫だな。さて、来たみたいだな」

ゼロは別な方向を見る。すると、そこには、小麦色の肌をした青年がぐったりと紺色の髪をした少年が楽しそうに歩いている。

「あづいゝ。デュノア、水」

小麦色の髪をした青年が紺色の髪をしたデュノアと言う少年に手を出す。

「水だったら、殺気僕の方はタクミ君が飲み干したよね?」

デュノアは持ってきていた水筒のふたを開け、逆さにしてタクミに言う。

「そうでしたね。何でこんなに歩いてんだよ…」

「筋肉付いてるんだったら、もったきびきび歩けないの？」

「こっちは、バス時間遅れて走りでお前と合流したんだぞ…」

「そうだったね♪」

「楽しんでねえ？」

「全然♪」

「はあ」

タクミはため息を吐く。

「…って、会話してる」

「『解るの！？』」

ゼロ達は読唇術を使って、タクミ達の会話を盗聴。そして、フェイトとはやての二人は驚く。

「とりあえず、水用意してやった方が良いな。持ってくるから、フェイトは呼びとめという」

「了解」

ゼロはそう言うと、隊舎に走り出す。

「私もやってみようかな？」

『多分無理やと思うよ？』

「水持ってきた」

「『速っ！』」

二人は驚く。それを見ていたタクミはデュノアの手を引き、走り出す。

「水うううううううううううううううう！！！！」

一撃！

「ぐはっ！」

ゼロは突き飛ばされ、持っていた水を離してしまい、落としそうになるが、タクミがキャッチし、飲み干した。

「プハあゝ！生き返るうゝ！！」

「まず、謝ろうよ：タクミ君」

後から来たデュノアが言う。

「何を？」

タクミは訳が分からず、聞く。デュノアが後ろを向け！というジェスチャーを表す。タクミがそれにしたがって後ろを見ると…。

「Hello?タクミ君♪」

笑顔のゼロが居た。

「何処が怒ってるんだよ。寧ろ優し「よほど死にたい様だな？タクミ・ユメバシ一等空佐殿？」…い？」

ゼロから笑顔がなくなり、右手にはランチャーが供えられていた。

「無礼をお許してください！」

タクミは土下座で謝る。だが、ゼロが許すはずもなく…。

「O☆K O☆T O☆W A☆R I♪」

そう言うと、ランチャーに閃光が貯まり…

「逝って来い！クロス・ブラスター！！」

「ぎゃああああああああああ！！」

少年の悲鳴が響いた…。

＊

「改めまして。ようこそ。機動六課へ」

復活したタクミと苦笑いしているデュノアと訳も解らず頭に“？”を浮かべているサクラにゼロは言う。

「ちつとは気にしろ！この怪我！」

「いやゝ。非殺傷設定あっても、対戦艦用武器って事、忘れてた♪」
「おい！」

ゼロのはっちゃけぶりにタクミはツツコミを入れる。

「さて、自己紹介しようか？」

フェイトが話を元に戻す。

「じゃあ、僕から」

デュノアは敬礼をし、挨拶する。

「本日から機動六課配属となります、デュノア・シャル二等空尉であります！」

「はい。さっき俺を突き飛ばしたタクミ君どうぞ？」

ゼロは少し怒りの笑顔で言う。タクミは敬礼をし、同じように挨拶する。

「同じく、タクミ・ユメバシ一等空佐であります」

「名前からして日本人？」

フェイトが顔を近づけ、聞くと、顔を真っ赤にして、

「そ、そうであります!!」

と少し焦っている様な口調で言う。

「どうしたの？ 顔真っ赤にして」

「何でもありません！」

タクミは顔を背け、フェイトが頭に“？”を浮かべているところに、ゼロは腕を引っ張り、少し離れた場所に来させる。

「ゼロ？ どうしたの？」

「いや、多分、女の子に弱いんだよ。ああ言う口調の時。だから、あまりおちよくなるなよ？」

「おちよくって無いよ！」

「…すまん。言い方が拙かったか」

「あのー。二人とも、そろそろ良いかな？」

二人の会話に桜が割り込み、言う。

「おっと。そうだったな」

ゼロはデュノア達の方に向き直ると、桜が敬礼をし、挨拶する。

「同じく、宮野桜医務官であります！まあ、JS事件の一件もあつて、訓練には参加するんだけどね」

「そうか。まあ、アイツの様にならないようにな」

ゼロは懐かしむ様な眼で言う。

「アイツって、ティアナ・ランスター執務官の事ですか？」

タクミは聞く。

「違う。夢を追って、俺に殺された…“兄さん”だよ」

空を見上げ、そう呟くと、皆は静まり返る。それに気付いたゼロが

「まあ、しんみりするのとは終わりだ。隊長室に行こう」

そう言い、歩き出し、その後を皆が追う。

＊

「じゃあ、ちょっと待ってて」

ゼロはノックなしで入る。

「ノックしろ！」

とか言う声があるが、気にしないで行く。

「…ゼロか。連れてきた？」

「おう。入れるか？」

「と言うより、入れないと駄目やろ」

「だな。ユウは？」

「デスクワーク中。元帥ってのも大変やなって思うよ？」
「言えるな」

二人が笑う。その時、ノックが聞こえる。

「あ。すまん。無駄話したな」

「ええよ。入れて？」

「了解」

ゼロはそう返すと、扉を開く。

「入って良いぞ？」

「「失礼します」」

そして三人が入ってくる。

「…フェイトは？」

「さっき、なのはさんから通信が入って、そっちに」

「成程」

桜の答えに納得し、はやての方を向く。

「とりあえず、自己紹介してな？」

はやては言い、三人は敬礼する。

「本日から機動六課配属のタクミ・ユメバシ一等空佐であります！」

「同じく、デュノア・シャル二等空尉であります！」

「同じく、宮野桜医務官で有ります！」

「そんな固くならんで、大丈夫やで？」

皆の様子を見ていたはやてが言う。

「じゃあ、お構いなく」

「おい」

タクミが敬礼を止め、ゼロはツツコミを入れる。

「だって、良いって言ってんじゃん」

「まあ、そうだが……」

「なら、良いんじゃない？」

「ところがそうも行かんのや」

「ツツコミ入れんの疲れた」

「バツくれた!？」

ゼロの発言に桜がツツコミを入れる。

「それよりも、皆集めて、紹介するから」

「マジで!？」

その事実にはタクミは叫ぶ。

「マジで」

「さすがだな。狸は…」

はやては答え、タクミはボソツと呟く。

「今、狸って言った奴は誰や？」

「タクミ君でゝす♪」

「デュノア！テメエ！…あ！」

「タクミ君、後でじっくりとお話ししましょうか？」

超笑顔でタクミの死亡フラグが成立した。

＊

ゼロは今は外に出ている。桜達は紹介中だと言うのにだ。

「…嫌な風だ」

「ゼロ？行かなくていいの？」

ゼロがその言葉で後ろを向くと、祐輔が居た。

「祐輔か。まあ、な。はやて達にはそう連絡入れたし」

「そっか。俺も同じ」

祐輔はゼロにコーヒーを渡し、彼はそれを受け取る。

「…何か用があるんだろ？」

「そう。はやて達には話したし、今いる隊員加えて、新分隊作ろう
と思ってね」

「名前は？」

ゼロは聞く。

「K I Z U N A分隊かな？それとも、スピリッツ分隊でも良いけど」

「後者だな」

「まさかの即答…はあ」

「ため息を吐くな」

ゼロはジト目で祐輔を見る。

「まあ、予想はしてたけどね」

『あゝ。二人とも、聞こえる？』

なのはからの通信。ゼロはそれに「聞こえてる」と答える。

『これから訓練って言うか、模擬戦するんだけど…「俺がやる。分析の方は頼んだ」…りょーかい。なら、後でね』

「おう」

そう言うと、通信が切れる。

「珍しいね。ゼロがそんなことやるなんて」

祐輔が言う。

「まあ、たまにはお前らくっ付けた方が良いかな？って思ってさ」

「…知ってたの？俺がなのはの事好きなの？」

「どうだかな。イルとブレイはOKか？」

ゼロは手のグローブについている宝石と腰に携えている本に聞く。

〈大丈夫ですけど、その呼び方は…〉

ゼロの確認の言葉にイルミネートが言う。

「駄目だった？」

〈いえ、そう言う訳では〉

〈可愛いなって思っただけですよ〉

「そうか。なら、この愛称で行くか？」

〈〈それでいいなら〉〉

「なら、これで」

ゼロはそう言うのと、歩き出した。

〈よかったのか？ 大将〉

腕輪から、後ろの髪を結って止めている紺色の髪の男が出てくる。

「…まあ、ゼロなりにか考えてくれてるんだよ」

〈そうかい。アルトリアが後で剣を交えたって言ってたぞ？〉

「有り難う。クー」

〈あいよ〉

そう言うのと、男は腕輪に戻る。

「さて、行きますか」

祐輔はそう呟くと、訓練場に向かった。



ZEROの境界線♪

今日の担当

・ゼロ

・フェイト

ゼロ

「さて、始まりました♪ZEROの境界線♪」

フェイト

「久しぶりの二人だね」

ゼロ

「だな。感覚的には寂しい様な、けど、満足な様な…そんな感じだが、行ってみようー!!」

フェイト

「そうだね」

ゼロ

「おさらい的には、サブタイトルそのままなんだよな」

フェイト

「確かにね。けど、違うところもいくつかあるし」

ゼロ

「だな。あ。キャラの方ですが、二階堂さんと九浄さんのキャラを使わせて頂きました♪まあ、覚えていてくれるとありがたいです♪」

フェイト

「そうだね。暗殺の使徒篇は九浄さんのキャラがないと、出来ないし」

ゼロ

「と言う訳で、次回、アッキーとイクト…じゃなかった。冬矢連れてくる」

フェイト

「イクトの方じゃないよね…?」
ゼロ

「ない…とも言い切れないな。作者の事だし」
フェイト

「作者さんには、頑張って貰わないと」
ゼロ

「だな」

フェイト

「…さて、次回予告に」
ゼロ

「新しい分隊を作ることとなり、其の準備をする俺達」
フェイト

「まず、新入隊員の實力をはかるため模擬戦をする」
ゼロ

「次回！—FW陣VSゼロ元帥！—」
フェイト

「明日の大空へ！」
フェイト・ゼロ

「DRIVE IGNITION!!」

第4話－FW陣vsゼロ元帥！－

訓練場。そこに、ゼロ達は集合していた。

「さて、模擬戦だが、高町なのは一等空尉がいつもやるんだが、俺が今回は相手させて貰う」

「この人数で一人かよ」

「侮らない方が良いわよ。一応、言うなりはあるんだから」

タクミの発言にティアナが補足する。

「さらに言えば、邪神事件の時も、最近有った絶望の書事件だって、ほとんどあの人の功績なんだよ？」

「…マジかよ…」

スバルがさらに言い、タクミの頬に一筋の汗が流れる。

「まあ、自己紹介がてらの模擬戦だ。そっちのリーダーはティアナ。10分待つから、作戦立ててくれ」

「いや、その作戦がことごとく崩されるの解ってますよね!？」

「立てておいて損はない。まあ、頑張れ」

ゼロはそう言うと、準備運動を開始する。ちなみに、場所設定は廃墟ビル街みたいなところ。

「さて、デバイスの方を確認するわよ。タクミは…」
「これ」

タクミは後ろに携えているアスタリスク状にまとまった剣を見せる。

「…ただの剣よね？」

「けど、そうじゃないんだな♪ユニゾンプレイス刀剣複合」

タクミは剣を二本引き抜き、合わせる。すると、自分の身長より大きめの大きさの両刃剣になる。

「まあ、こんな感じで」

「解ったわ。そっちのひよろいのは？」

「ひよろいって…「真実だろ」…まあ、いいや。とりあえず、小刀と槍です」

「そうね…。なら、エリオとひよろいのでのツートップ、あの人の背後からタクミとスバル。で、私とキャロは後方支援。良いわね？」

ティアナがそう聞くと、皆は頷く。

『さて、そろそろ良いか？』

ゼロは通信で話しかける。

「はい」

『セットアップした時点で開始な』

「了解です」

ゼロはその言葉を聞くと通信を切る。

「さあ、行くわよ！」

《応！》

ティアナの言葉に皆は答えた。

＊

「さて、準備運動も終わった事だし、トライ・ブレード TB」

ゼロは手を合わせ、魔法陣を展開し、剣を取り出す。

「この剣を使うのも久しぶりだな。ブレイ」
「そうですね」

「向こう行ってもよかったんだぞ？」

「無茶しかねないので、監視です」

「そんなに頼りない？俺」

ゼロは苦笑いする。

「まあ、少しは」

「あんなあ…」

「「はあッ！」」

正面から二つの人影が飛び出す。

一閃・撃一

閃光がきらめく。そこには、二つの斬撃を一つの剣で受け止めているゼロが居た。

「ジェナスとエリオか、だけどこれは四。本命は…」

ゼロは背後にランサーを二つ展開。

「はああああああああ!!」

その叫びが聞こえると、ランサーを剣にし、斬撃と拳を受ける。

「まだまだだな。もっと足掻いて見せろ」

ゼロは斬撃を弾き飛ばし、跳躍。

「ブレイ！」

〈E W s y s t e m、起動!〉

瞬間。ゼロの背中に白き翼が生える。

「さあ、お前等の力を見せろ！」

《言われなくても!》

「良い返事だ…」

ゼロは、もう片方にも、片刃剣を作り出す。それを狙っていたかのように、スバルのウイングロードが出てくる。

「久しぶりに、負荷量1.5倍にするか。ブレイ」

〈了解です〉

「よし。結構重くなったな。魔力制限もかけてあるよな？」

〈もちろんです〉

「うし」

ゼロはウイングロードの上に降り立つ。

「隙在り！」

—轟—

「ぬうあにい！？」

—撃！—

今の状況を整理。対艦刀を持ったタクミが跳躍し、落下速度を利用した一振りに驚いた所を撃ち落とされた。という具合。

「痛あゝ」

ゼロは体を起こすと、槍が頬を掠る。

「ッ！」

掠った部分からは、血が出ていた。…殺傷設定…？ゼロは起き上がり、槍を見る。

「…やっぱりな…。この事は伏せておくか…」

そう呟くと、上から振ってくる剣に気付き、前方に移動した。

「ビンゴ！」

その声が聞こえると、彼は振り返り、防御の姿勢を取る。

—撃！—

撃音が響き、煙が立ち込める。

「やった…?」

「な訳ないだろ」

ティアナの呟きにタクミが答える。

「その通り」

背後から声が響き、二人が後ろを振り返る前に剣を突き付ける人影。

「終了だな」

「手加減して下さいよ…ゼロさん」

「断るな。てか、俺の戦闘センスはけた違いだからな」
「…はあ」

ティアナはため息を吐く。

「まあ、少しは粘った方だ。誇って良いぞ?」

「どうせ、途中でリミッター割増したんでしょ?」

「御名答だな♪」

「…まだ、成長してないのね、私」

ティアナは肩を落として、そう言う。

「ゼロチョップ!」

「殴」

「痛っ!」

ティアナは痛み、ゼロはため息を吐く。

「お前、昔の概念を捨て切れてない。私って、凡人なんだ…とか、思ってただろ？」

「…少しは」

「それがいけないってんだよ。後で、ミーティングルーム集合。伝えておけよ？」

「了解です」

その言葉を聞くと、右手を上げ、歩き去る。

＊

訓練場から、少し離れた場所。祐輔となのははそこにいた。

「…さて、なのは。ゼロには少し聞かなきゃいけない事が出来たんじゃない？」

「そうかな？ゼロ君には特に問題はないみたいだけど…」

なのはは首を傾げる。

「そうじゃなくて…、まあ、良いよ。とりあえず、俺の方で聞く。データの方もやっておくから、休んで？」

「うん。有り難う。ユウ君」

「どういたしまして♪」

なのはは笑顔で言い、祐輔も笑顔で返す。

へよかったのですか？

「ああ。俺には少し引っかかるんだよ。メドゥーサ」

祐輔は険しい顔をする。間違いなく殺傷設定のあの一撃。当たってたら、命を落とすかもしれない。そんな感じの一撃。色々思いを巡らせる。

〈具体的には？〉

「あの一撃、非殺傷で、掠っても血は出ない。だが、あの一撃は血が出た…」

〈殺傷設定だったってことか？大将〉

「そう言う事だ。クー」

〈やっかいですね〉

「だな…」

祐輔はメドゥーサの言葉に応え、空を見上げる。

「…これが、何かの前触れではないと良いんだけどな…」

〈切に願う。そう言ったところか？〉

「そうだよ。アーチャー」

そう答え、祐輔はデータを纏め、隊舎に戻った。

＊

ミーティングルーム。そこにゼロ達は集合していた。

「さて、今回の模擬戦。俺は前のデータとかも比べてみるんだけど…」

「けど？」

ゼロの溜めにスバルは顔を寄せる。

「強くなってる。良く頑張ったな。四人とも」
「「「はい！」」」

ゼロは笑ってそう言い、スバル、ティアナ、エリオ、キャロは元気良く返事をする。

「「俺（僕）達は…？」」

「データ不足」

「予想はしてたけど、簡潔すぎねえ！？」

ゼロの答えに、タクミは叫ぶ。

「うるせえよ」

「てか、顔の傷、どうした？」

タクミはゼロの頬を見て聞く。

「お前に叩きつけられた時に、衝撃波で切った傷だ。気にするな」

「…本当にか？」

「本当だって。俺が嘘付くと思うのか？」

「思う」

タクミは真顔で言う。

「なら、お前の先輩のステーキ4姉弟だって、弱くなってるって言った事になるぞ？」

「そうか…。なら、大丈夫だな」

いや、納得しないで下さい！と、4人は叫んだが、

「よし。そしたら…任務が入るまで待機。入った時は教える。そう言う事で。俺はイルの守護騎士の相手しなくちゃいけないから。じゃあ、解散」

ゼロはそう言うのと、ミーティングルームを出る。

「良いの？あの子と話さなくて」

「誰の事？」

「とぼけないで下さい」

そこに居たのは、祐輔と桃色がかった髪と瞳の眼鏡をかけた女性。

「ライダーか」

「今はその名前ではなく、メドゥーサです」

「そうか。で、どうした？」

「本当にとぼけるのが好きなんだね。ゼロは」

「一体何の事だ？」

「あの一撃。殺傷設定なのは解ってたんでしょ？」

「…まあな」

ゼロは少し間をとり、返す。

「なら、何で問い詰めなかったの？」

「…材料が足りなすぎる。“真実”と言う名の料理を作るにはな…」

そう言うのと、ゼロは歩き出した…。左の頬の傷を治して。

「…どうするんですか？ユウ」

「どうしようもないよ。メドゥーサ。アイツはああいうところが頑固なんだからね。放っておくよ」

「…そうですか。なら、私は戻ります」
「うん」

メドゥーサはそう言うと、祐輔の腕輪に入った。

「…これから、何が起るんだろうな…」

祐輔はそう呟くと、壁に寄り掛かるのを止め、自室に戻った。

＊

デュノアの自室。デュノアは部屋を暗くし、通信をしていた。

『で、どうだったんだ？デュノア』

「任務に支障は無しだ。アラクノル執務官」

『フン。行け好かん奴だ。お前も、ゼロとか言うマセガキもな』

「…報告は終了。他の任務は？」

『なら、こっちから面白い物を送る。それに乗じて、アイツを…』

一殺せ一



銀河を舞う♪ Diamond dust—天使の囁き—♪

確かな記憶をたどって♪

これからきつと生まれてく♪ 真実へのトビラ♪

今回の担当

・ゼロ ・はやて ・フェイト
・ユウ ・なのは

ゼロ

「さて、始めました♪ZEROの境界線♪」
はやて

「ハイやな…」

ゼロ

「いつもそうだろ。イメージop、とりあえず決まったそうだな」
フェイト

「へえ…。どんなの？」

ゼロ

「こうなってる。K I Z U N A O P、U N C H A I N ∞ W O R L D。
E D、E n d l e s s C h a i n。

挿入歌、D o n ' t b e l o n g。

E A O P、S E C R E T A M B I T I O N。

E D、B e a u t i f u l A m u l e t。

挿入歌、p r a y (予定)だ」

なのは

「何で予定なの？」

祐輔

「良い曲が見つからなかったから、って、事らしいよ。作者らしく
て良いけどね」

ゼロ

「まあな。てか、今日は冬矢とかが来るんだっけな」

祐輔

「よし。カオス・コントロール
混純操作！」

一瞬一

冬矢

「いきなり呼び出すなよ…」

クリス

「助かりました…」

ゼロ

「何故、アッキーが居ない？」

クリス

「これ、作者から」

ゼロ

「『二階堂さんから連絡がなかったんだよね♪ゴメンネ♪』？まあ、俺的にはどうでもいいけどな。座ってくれ」

冬矢・クリス

「じゃあ、失礼して」

祐輔

「ところで、伊織達は元気？」

冬矢

「ああ。元気過ぎて困る位」

なのは

「そうなんだ。なら、向こうの私達に無理しないようにって言うておいて？」

冬矢

「解った」

フェイト

「じゃあ、おさらい。はやてお願い」
はやて

「キレがないのはそう言う訳でした♪」

ゼロ

「まあ、そんな感じだけど、どんな言い方だ…」

祐輔

「それと、何かお知らせがあるみたい」

ゼロ

「人気投票の事だろ？それと、剣と魔法と少年と。のオリキャラ計画だろ？」

クリス

「多分、それではないかと…」

祐輔

「まず、人気投票の事。人気投票はK I Z U N Aが10万アクセスPVを越えたからって事。ルート選択の様なポイント制で、活動報告に随時更新するらしいよ。で、期日が四月の末まで」

一同

「よろしくお願いします」

はやて

「まあ、理由とかあったら有りがたいんやけどな」

フェイト

「そうだね」

ゼロ

「それは、読者さんの気分次第で付けてくれ。で、次」

祐輔

「剣と魔法と少年と。オリキャラ計画。これは、クリスに説明して貰おうかな？」

クリス

「はい。とりあえず、次回予告でああ言った物の、なかなか難しいらしくて。で、申し訳ないのですが、一、二名くらいお願いしたいと思います。期日は来週の土曜日まで。暇な人だけお願いします。で、武器とかは何かのパクリとか、そう言うのは無しにして下さい。お願いします」

冬矢

「まあ、そうなるだろうな。伊織達も人気投票はOKなのか？」

ゼロ

「OKだ。てか、最終的に集計するからな。変わらんだろ。で、メッセージ、感想、活動報告とか、色々有る訳だ。何処でも良いから、送ってくれ」

なのは

「じゃあ、そう言う訳で、次回予告に行こうか？」

祐輔

「だね」

ゼロ

「その前に冬矢達戻すのが先だろうが。カオス・コントロール混純操作！」

一瞬

はやて

「お土産とかやらんくてよかったの？」

ゼロ

「用意するの忘れてたしな。作ろうとは思いますが、材料が足りないし。しょうがないから」

フェイト

「それより、次回予告を」

祐輔

「そうだね」

祐輔

「訓練中。任務開始の合図となる、アラートが鳴る」

なのは

「そこでゼロは思う」

フェイト

「あの事件の様な流れだと」

ゼロ

「その思いに後ろ髪引かれつつも、任務へ出る」
はやて

「次回、一ファーストミッションー明日の大空へ！」
一同

「Drive ignition！」

今日のゲスト情報。

・御薙冬矢

出典…魔法少女リリカルなのはRefrain
備考…

結局のところ、ゼロと似たような経験をしてる様な人。フェイトと結婚している。

一度記憶を失っているが、それも回復した。

・桂木・S・クリス

出典…剣と魔法と少年と。
備考…

死の星で生まれた、不幸なのか不遇なのか。そんな少年。今は堯の元でお世話になっている。

剣で相手をするのはまず難しい。心優しい少年で、自分の死すらも恐れる事はない。

第5話ーファーストミッションー(前書き)

人気投票、票数もつと下さい…。

第5話ーファーストミッションー

「はぁ！」

一閃一

振られる、大太刀。それを片手剣で受け止める人影。

「甘い！そんな太刀筋じゃ、俺は落ちん！」

そう、大太刀を使う方が、タクミ、受け止めた方がゼロだ。

「アンタはどうやって落ちネエだろうが！」

タクミは太刀を薙ぐ。ゼロはそれをバックステップでかわし、スフ
イアを飛ばす。

「んなっ！」

それに驚き、タクミはかわそうとするが、後ろにはゼロが来ていた。

「お前の攻撃は隙が多すぎだ……。けど、此の辺で終了だな」

ゼロはスフィアを消すと、地上に降りる。

「まあ、昨日よりかは矯正したから、良くなってるな」

「礼はいわねえぞ？」

「それで良い」

「可愛げのねえ奴」

「何か言ったか？」

「別に」

それを聞くと、ゼロは走り出す。

「しかし、アイツはどうやって鍛えてんだよ……。いくら大太刀でも、あそこまでの受け止め方はできんだろ……」

タクミは地上に降り、呟く。

〈まあ、シグナムさんにも勝ったぐらいですしね〉

「……マジ？」

〈マジ〉

「……バラージュセレス。俺、あの人怒らせなくて良かったと思う」

〈へタレ〉

「るせえ！」

こうして、二人は会話しつつ、隊舎に帰った。

＊

「約束された勝利の剣！！」
エクスカリバアアアア

「うおっ！結構集束はできてる！」

「伊達に貴方の騎士じゃありませんから……ね！」

一閃！

黄金の剣と深紅の槍はぶつかり合い、金属的な音を発する。そう、祐輔とアルトリアだ。

「^{ゲイ・ボルク}刺し穿つ死棘の槍！」
「ッ！」

「撃」

非殺傷設定なので、アルトリアははじけ飛ぶ。

「まさに、刺さらない♪貫かない♪ユウちゃんの♪ゲイ・ボルク♪だな」

「居たの？」

「ああ♪てか、今来た」

そこには金髪で赤と緑のオッドアイの青年。ゼロが居た。

「そうなんだ」

「S：いや、やっぱスベるな。止めとく。」

「…まあ、良いや。そっちはどう？」

「ん。微妙…かもな」

「そっか。こっちはデュノア達を色々と訓練して、お昼に行かせたよ」

「そうか。アーチャーは？」

「シグナムと模擬戦中。メドゥーサはスバルとティアの相手してるし、メディアはキャロに幻術教えてる」

「キャロに幻術なんか出来るのか？」

「出来ます！」

ゼロはその声に少し驚き、祐輔は感心したように言う。

「てか、居たの？キャロ」

「兄さんは解ってくれたのに、ゼロさんは解って無いです！」

「あはは…て、祐輔の事か？兄さんって」
「そうですよ？」

ゼロはその言葉を聞くと、祐輔の首根っこを掴み、訓練場の端まで来た。

「お前、目覚めたのか？」

「何に？」

「ロリコンに」

「今すぐ殺してあげようか？」

「嘘だ。で、何で呼ばせてるんだよ」

「いや、俺がああ4人とかかわっている内に、内の二人がそう呼びたいって」

「成程な…あの二人ならな。OK。解った」

ゼロはそう言うのと、また首根っこを掴み、戻る。

「ちょ…首締まる！首締まる！」

「気にしねえから♪」

「人権は！？」

「ねえよ♪」

「酷っ！」

「結構♪」

その時、アラートが鳴る。

「…何というタイミングの悪い…。しゃあない」

ゼロは手を離し、それと同時にロングアーチに足向け、駆けだした。

「祐輔！ 私達もいきますよ！」

「お、応…」

「返事はもっとはっきりと！」

「ハイ！ って、何で？ 王が？」

「何となく♪」

「おい」

祐輔はそう言いながらも素早く立ち上がり、アルトリア達をグレイルに戻すと、ロングアーチへ走った。

＊

「で、状況は？」

「まあ、大型車両にガジェットが沢山いるくらいやって…居たんかい！」

「今来たところ」

ゼロはそう言い、画面を見る。

「結構な数だな…ロストログア関連か？」

「そうや。今、連絡が入ってな」

「なら、急いだ方が良いな。ミッドか？」

「…そうやな」

「解った。なら、なのは達呼ぶか」

「その必要はあらへん。皆ヘリポートで待つとるよ」

「…手際が良いな」

ゼロは少し呆気を取られた感じで言う。

「伊達に無茶しよる旦那さんの隣いるのとはちゃうよ」

はやてはそう答えると、拳を出す。

「今は、少なからず安全な状態とは言えへんから、気を付けてな？」

はやてのその行動を見て、少し笑うと、ゼロは同じように拳を出す。

「おう。無事に帰ってくる」

そして、お互いの拳をぶつけた。

＊

六課屋上のヘリポート。そこにいつものメンバー十タクミ、デュノアが立っていた。

「遅いよ、ゼロ」

ゼロと同じ金髪の女性が、言う。

「悪い。作戦立てながら走ってたもんだから」

「どんな走りだよ…。主」

腰に携えているイルミネートから、青い髪の女性が出てきて、肩を叩く。

「自意識過剰なお前に言われたくないぞ…。？煌」

「五月蠅いな！放っておけ！」

ゼロの言葉にキレた？煌はゼロの事を殴った後に戻った。

「お前なんかに殴られても、痛くねえ」

「主に傷つける騎士が何処に居るんだよ！」

「ここ」

「へち、違う！」

「何処がだよ…」

「そろそろ良いかな？」

先程の金髪の女性が話しかける。

「そうだな。フェイト。行きますか」

ゼロはフェイトにそう言うと、ヘリに乗り込む。

「じゃあ、アルト、お願いするぜ？」

「了解！」

ゼロの声にアルトは答えると、ヘリが飛行を始めた。

＊

「さて、作戦概要の方だが、聞いてるか？」

「いや、ゼロから話されるからって」

ゼロが聞くと、フェイトが答える。

「そうか。じゃあ、話す。まず、構図的にみると、JS事件とまんなんだよ」

「つまり、車両があって、その中にレリックみたいなロストログア

が詰まってるんですか？」

エリオがゼロに聞く。

「そうなるな。まあ、具体的には良く解らないんだが、管理局行きの何かって事それしか解らんな」

「重要な物なのか？」

タクミは聞く。

「重要じゃなきゃ管理局には行かないし、第一、俺等に任務が回ってくる事はない。でだ。FW陣は前と同じような感じで。タクミ達にはそっち側について貰う。祐輔は…」

「俺は空飛べないから、向こうで」

「そうか。なら、お前も向こうだな。残りの俺等で、空を片っ端から叩き落とす」

「叩き落とすって言うけど、ガジェットからまたパーツとか取り出さないでよ？」

フェイトがゼロの事を睨む。ゼロは少し反応したが、笑顔で

「まさか、やるに決まってるでしょ♪」

と言った瞬間、金色の槍が飛んでくる。

「やらないんじゃない？ やるの？」

「そう♪」

「解った。お話を決行させて貰うよ…」

「アルト、ハッチ開けてくれ」

「アルト？ 開けちゃ駄目だからね？」

「えっと…その…目的地に着いたら開けますので」

ゼロとフェイトの攻撃に耐えられなくなったアルトはフェイトの方に賛同し、フェイトはそれを聞いた直後にバインドをかける。

「ちょっと、冗談もいい加減にしてね…」

「すまん」

「…まあ、今回はさ…その…初の任務な訳で、色々と気が抜ける訳だよ？それで、ゼロが怪我したら…」

「なんかさ、あの二人って、運命の赤い糸で結ばれていた気がしない？」

フェイトがゼロに説教している途中に祐輔がなのはに話しかける。

「そうだね。何か、説教してる側も、受けてる側もどことなく楽しそうだし」

「まあ、そうだけどさ。で、ユーノとは進んでる？」

「何でそこでユーノ君が出てくるの？」

なのははそこで頭に？を浮かべる。

「…何時になっても変わらないな。なのはは」

「？、どういう事？ユーノ君はお友達で、私にはもっと別に好きな人が居るんだよ？」

「その好きな人って？」

「高校の時に仲良くしてた人かな？」

なのははそう言う。祐輔はゼロの事を思ったが、ゼロはフェイトの所行ったし、やっぱり、居ないよな…？とか考えた。

「なのはさん、フェイトさん、ゼロさん、もう降りれますよ」

「了解。じゃあ、説教は後でだな」

「むう…。もう少し話したかったのに…」

ゼロはバインドを弾き、外すと、外に飛び降りる。

「イル」

〈了解です。両翼、展開〉

瞬間。ゼロの背中に漆黒の翼が生える。

〈漆黒の天使起動〉
ブラック・エンジェル

ゼロの体が漆黒の羽に包まれた後、そこには半袖で、長ズボンの漆黒の天使が居た。ゼロは自身の左側の顔に仮面をつける。黒と赤のカラーリングが施された物。

「まあ、E W s y s t e mは使い物にならないし、一気に行くぞ」
〈了解です！〉

「ブレイは俺とユニゾン。頼むぞ」

〈解っている！〉

「〈ユニゾン・イン！〉」

ゼロの髪は銀に染まり、翡翠の瞳は紅に染まる。

「さあ、まずは一体…」

ゼロは携えている細身の剣、サーベルを抜くと、魔力を纏わせ、

一瞬

瞬間的な迅さで移動し。

一斬一

両断した。

「凄いね…」

へり内で見えていたなのはは感嘆の言葉を漏らす。

「って、ゼロだけにやらせてないで、私達も行かないと！」

フェイトはそう言い、飛ぶ。

「あ！フェイトちゃん待って！」

なのはもその後飛び降りる。

「グダグダだね…」

「確かに…」

祐輔とエリオはそう言い、苦笑いする。

＊

「はあ！」

一斬！一

ゼロはガジェットを両断する。

「おいおい…。ガジェットが減るところか、増えてる気がするんだが…?」

『と言うより、確実に増えてます』

「マジかよ…」

『マジです。主、6時の方向から、飛行物体が飛んできます』

「了解っと」

ゼロはサーベルを振り抜き、物体を叩き落とす。

「実弾兵器？」

『そのようですね。次弾来ます!』

「了解!」

そして、ゼロは剣を振り抜いた。

＊

へり内。そこで祐輔は体の調子を確認していた。

「良し。大体こんなもんだろうね」

「祐輔さんって、何でそんなに落ち着いてるんだ?」

体の調整をしている祐輔にタクミは聞く。

「ん? いや、落ち着いてなきゃやっていけないからさ。いざという時に慌てるなって言うのと同じ」

タクミが返そうとした時、丁度、目的の車両の上空に差し掛かる。

「さて、降りるよ。アルトさん」

「了解！」

祐輔がそう言うと、ハッチが開く。

「さて：スピリッツ2、森羅祐輔！行きます！」

祐輔はそう言うのと同時に、飛び降りる。

「疾風一閃！ウインド！」

祐輔は自身の能力を使い、右腕に魔力を溜める。

「クラッシュ！」

一撃！

そして、落下速度を高め、車両内に侵入した。

「なんつう無茶苦茶な…」

「あの位でもう驚かないわよ。スターズ3、ティアナ・ランスター」

「まあ、慣れって言うのは大事だよ？：スターズ4、スバル・ナカジマ！」

「「行きます！」」

二人は飛び降りたと同時に、自身のデバイスをセットアップし、着地する。

「ライトニング3、エリオ・モンディアル」

「ライトニング4、キャロ・ル・ルシエ！」
「行きます！」

そして、二人も同じように飛び降りる。

「じゃあ、俺等も行きますか。スピリッツ3、タクミ・ユメバシ！」
「スピリッツ4、デュノア・シャル！」

「行（逝）きます！」
「今、どちらか発音がおかしかったよ！？」

そんなアルトの声を聞きつつ、タクミは空中一回転などして遊んでいる。

「バラージュセレス」
「アビシオン」
「セットアップ！」
「Standby ready. Set up.」

その機械音声が聞こえると、二人は閃光に包まれる。タクミには背中にアスタリスク型、形で言えば“*”が背中に付き、デュノアは小刀を手につく。眼が少し危なくなり、今にも狂気に満ちた笑いをしそうにn…。

「ひ○らしか！？」

そうです。はい。まあ、二人は着地する。

「まあ、しっかし、ガジェットが多いな…」
「だねえ。ゼロさんも困ってる様だし、ちょっとだけ、手助けしてから行くよ。先行ってて？」

「おう。解った」

タクミはそう言う走り出す。デュノアはタクミが視界から消えた事を確認すると、目付きを変える。

「非殺傷設定解除…」

〈release〉

その機械音声が聞こえると、デュノアはスフィアを展開する。

「思ったより早く終わりそうで何よりだ…」

スフィアを一点に集め、集束する。

「堕ちろ。霸王よ…」

「何やってるの？デュノア？」

一撃！一

デュノアはその言葉で、少しだけ軌道を逸らし、発射してしまった。そこに居たのは、スバルとティアナだった。

「あ。少し、ゼロさんが囲まれてたので、援護をと思ひまして」

「あの人にそんな心配いらないわよ。行くわよ」

「了解です」

デュノアはそう返し、ティアナ達の後について行った。

（アビシオン。非殺傷設定にしておけ）

（OK）

その念話が聞こえると、デュノアは表情を柔らかくした。

＊

「しかし、目的の物は何処に有るんだろうねえ〜っと。これかな？」

祐輔は一足先に目的の物資を手にとり、確認中。

「うん。間違いないね」

「「兄さ〜ん！」」

その声ができる方を向くと、赤髪の少年と桃色の髪の少女が小走りであつて来た。

「あ。エリオ、キャロ」

「もう終わったんですか？」

「うん。とりあえず、確認してみたけど、これで間違いなさそうだよ」

「そうですか。なら、連絡して、戻りましょう」

「だね」

キャロの提案に祐輔は乗り、通信を入れる。

「…爆音…？しかも、魔力は殺傷設定…」

「兄さん？」

祐輔の顔をエリオは見つめる。それに気付いた祐輔は笑いながら、

「悪い。他にも何か有るかもしれないから、先に通信してて？」

と言う。

「はい。けど、何かって言うとは…?」

「強化パーツとかだよ」

祐輔はそう言うのと、走り去る。

＊

「やっと減ってきたか…?」

〈ですね。けど、後5分で、この形態は解除されます。どうしますか?〉

「じゃあ、足場展開して、その状態で形態変更するかな?」

『主! 5時の方向から砲撃が来ます!』

「了解!」

ゼロは足場を展開するのを止め、上昇し、離脱する。

一閃!・撃一

瞬間、先程まで居た場所には、集束砲が通っていた。

「殺傷設定かよ…」

『ですね。私が気付かなければ…』

「お陀仏だったな。有り難う」

〈主、まだ戦力が残っています。気を抜かないで下さい〉

「解ってる。…一気に吹き飛ばすか。イル」

〈了解です〉

ゼロは腰から魔導書を引き抜くと、ページを開く。

「閃光よ…闇を貫く剣と成れ…」

その詠唱を終えると、ゼロの足元と、頭上に3つ浮かんだ。

「降り注げ、旭光！…閃光^{レイ・スピア}の牙！！」

ゼロが手を振り上げ、降ろすと、魔法陣から、幾多もの閃光が出る。

一閃！・刺！一

それはガジェット全てに突き刺さり、

一爆！一

爆発した。

「さて、お終いっと」

『あ、終わった？』

「ユウか。今終わったところ」

『じゃあ、アルトさんに連絡するよ』

「ああ。頼んだ」

ゼロはそう言うと、通信を切る。

「ゼロ、大丈夫？」

「ん？フェイトとなのはか」

ゼロは首を後ろに回し、見る。

「にしても、それは…」

なのはゼロについている仮面を見て言う。

「ん。ああ、話してなかったっけ？これ」

ゼロはそう言うのと、足場を作り、その上で仮面を取る。

「あ…」

「やっぱり、燃費が悪いな…」

「新技？」

「一応な」

ゼロはそう言うのと、後で来たへりに乗り込み、帰投した…。

＊

「はあ。疲れた」

「ごめんね？私の仕事まで手伝わせて」

「いや、大丈夫。執務官仕事って言うのは大変なのは重々承知してたからな」

ゼロは自宅に有るソファーに座りそんな事をフェイトと話す。

「…で、どう思う？」

「あの一撃の事だね？」

「新型と捉えるべきか、それとも…」

「スパイ？」

「そう。けど、まだ情報が足りない」

ゼロはそう言うのと、ため息を吐く。情報がないのは情報である。そうは言うが、この場合、それは通用しない。目撃者がいなければ、どうしようもないのが現状だからだ。

「現状打開策、見つかるか…？」

「…：どうだろうね？」

「いや、見つける手はたくさんあるが、リスクが大きすぎる…」
「どうするの？」

フェイトが聞くと、ゼロは黙り込む。それも其の筈。ゼロはリスクの少ない方法を知っている。だが、それには、フェイト達が反対すると知っているから、あえて言わないのだ。あくまでその方法は最終手段だ…。ゼロはそう考え、他の方法を探す。

「あれ？二人でなんか悩み事か？」

その言葉で頭を上げ、振り向くと、はやてが居た。

「うん。ちょっとね」

「そうか…何の話なんや？」

はやてはフェイトの隣に座る。

「今回の一件、少し可笑しな点がいくつかあったんだよ」

「…：そう言えば、そうやな…」

「だろ？それについて考えてたんだけどさ、まあ、悩んでもしょうがないわな。飯作るわ」

そう言い、気を紛らわすかのように立つ。

「駄目だよ、あれの反動で倒れたりしたら…」

「しないって。それに、暇してるのもあれだしな」

ゼロは心配するフェイトにそう言い、キッチンへと足を進める。

「…まあ、どうしてもって言うなら、手伝って貰うか」

「「なら、手伝う」」

「それならよろしい♪」

ゼロは笑顔でそう言い、冷蔵庫を開ける。

「…今日は中華だな」

「ちょっと待ったあ!!」

「…アリシア。お前はどこぞの芸人だ？」

「そうそう。吉本に入ってて…って、違う!」

「ノリツツコミがさえ取るな…」

「はやてもそんなこと言わないで!」

「で、そんなに中華が嫌なのか？」

ゼロはアリシアが入ってきた理由を思い出し、言う。

「…少しね」

「我儘は許さん。以上」

「人権は!？」

「なら、お使いにでも行ってくるか？」

「それは…」

ゼロはため息を吐き、冷蔵庫の扉を閉める。

「まあ、随分と放置した気もするし、今回だけは特別扱いだぞ？」
「お待ちください。主」

「ん？どうした？アルタード」

「買い物なら、自分たちが…」

「大勢で押し掛けても迷惑だろうが。すぐ終わるから」

そう言うのと、家を出て行った。

「任せて良かったのかな？」

フェイトが言う。

「一応、有名人だしね」

アリシアがさらに言い、

「確かに…」

はやては肯定。その後、沈黙が続く。

「じゃあ、私が行くよ」

「待った！有名人二人行っちゃって、駄目でしょ。私が行く」

「何してんの？三人で」

「「え！？」」」

振りかえると、買い物袋を両腕につりさげたゼロが居た。

「もう帰って来たの？」

「ああ。で、今日は和と洋、どっちが良い？」

「じゃあ、洋で！」

「了解♪フェイトとはやては？」

「「じゃあ、同じで」」

「洋食決定だな。さて、頑張りますか」

ゼロはそう言うのと、袖を捲り、腕を回し、キッチンへ向かった直後、倒れた。

《ゼロ（主）！？》

それに驚き、皆は駆け寄る。

〈…どうやら、疲れが出ただけみたいですネ〉

〈主、無茶も程々にしてくれ…〉

「あはは…すまん、面目ない…」

「まあ、しょうがないよ。一応、ソファアの上で休んでて？」

「飯どうするんだよ？」

「私が居るやろ？」

「…それもそうだな。なら、頼んだよ」

ゼロはやっぱり、やる。と言おうと思ったが、言った後の收拾がつかなくなるので止め、ソファアに横になる。

「大丈夫？」

アリシアが心配そうにゼロを見る。

「大丈夫だ…多分」

「多分じゃだゝめ♪」

「おいおい…」

〈主、ギンガさんから通信だ〉

「ギンガから？」

「ああ。そうだ」

「わかった」

ゼロは起き上がると、回線を開く。

「はい。ゼロです」

『あ。繋がった。ギンガです』

「で、用件は？」

『単刀直入ね…』

「そっちから掛けたんだろ…。それに、疲れてるからさ」

『そうなの？』

「そうなの」

『…なら、ちょっと聞きたい事があるの。これに身覚えはない？』

そうして、表示されたのは、バイザーをかけた拳を握っている少女の画像。アインハルトか…。ゼロはそれを見て、少しだけ笑う。

『知ってるのね？』

「ああ。で、どうするんだ？」

「んゝ。とりあえず、気をつけてってだけ」

「はあゝ。管理局はこれだから駄目だな」

『なっ！貴方も管理局員でしょ！？』

「確かにそうだ。けど、こっちは言われる前に動いてる事もあるからな」

「まあ、それは言えるかもね」

『二人して、何て言うでたらめな…』

「だからさ。お従兄ちゃんに任せなさい♪」

ゼロは笑顔を見せ、言う。バリバリの違和感ばっかりだったが。

『解ったわ…って、ゼロさんはそう言うがらじゃないでしょ?』

「まあ、そうだがな。で、作戦だが…」

『作戦だが?』

「…その名も、生け捕り変装作戦だ♪」

「そのまんまだよね」

『確かに…』

「ネーミングセンスがないのは前から知ってたよな…? お前等」

ゼロはそこでまた頭を抱える。

『とりあえず、その作戦で行きましょう。やる事は?』

「ノーヴェを生け捕り」

『…は?』

「と言うのは冗談で、1日は外に出ないようにお願いしても良いか?」

『わ、解ったわ…』

「予定とか聞いておいてな。その日の服も」

『了解したわ』

「じゃあ、そう言う事で」

ゼロはそう言い、通信を切る。

「通信は終わったの?」

「まあな。とりあえず、ご飯は準備し終わった?」

「うん。私は明日本局の方に行かなきゃいけないから、朝早くに出るよ」

「まさか、起こして欲しいとか言う?」

ゼロはソファから立ちあがり、言う。

「うん：ゼロのせいで、朝に弱くなっちゃって」

「俺のせいだよ…。は yet はどうなんだ？」

「私は、ずっと六課におるわ」

「そうか。わかった。じゃあ、行こう」

ゼロはそう言うのと、皆で歩き出す。

＊

ジェナスの部屋。そこで、前の様に通信していた。

「今回も失敗した」

『使えんな。まあ良い。今、私は忙しいから、お前は通信するな』

「次はどうすればいい？」

『…その時に連絡をよこす。それまで待っている』

「了解した」

そう言うのと、通信を切る。

「…ゼロ…か…良い奴なのだろうけど、俺には殺すことしかできないのが、虚しいな。だが、これが俺の任務だ…」

そう呟くと、ジェナスは眠りに就いた…。



今日の担当

・ゼロ ・は yet

・祐輔 ・なのは

ゼロ

「さて、始めました♪ZEROの境界線♪」
はやて

「随分と長いな…」

祐輔

「それが作者クオリティ♪」
なのは

「そうだね…。ん。そう言えば、セラフィムさんって言う人から、
こんな物を貰ったんだけど…」

ゼロ

「ん？俺にか？」

なのは

「うん。味わって食べて下さい♪って書いてあるよ？」

ゼロ

「そうか。では、頂きます」

パクッ

ゼロ

「……」

祐輔

「味の方は？」

ゼロ

「……」

祐輔

「ほっ！」

―振！・倒―

はやて

「気をうしなっとる!?!」

なのは

「た、大変だよぉ!!」

祐輔

「焦らない、焦らない。まずは、脈があるし、気を失ってるだけだから」

ゼロ

「…そう」

はやて

「あ、本当や」

なのは

「大丈夫?」

ゼロ

「…大丈夫」

祐輔

「まさか…」

ゼロ

「何?」

はやて

「正氣に戻るんや!」

ゼロ

「…私は正氣」

なのは

「性格が、某本読み宇宙人に…」

祐輔

「面白いね♪残しておこう♪」

はやて

「さすがにそれは…」

祐輔

「食べる？」

はやて

「…うん。ええわ」

ゼロ

「…脅迫」

なのは

「おさらい…」

ゼロ

「…任務」

祐輔

「だね♪で、人気投票、もっとカモン！って、事らしいよ？」

ゼロ

「…人気ない」

なのは

「それ言っちゃお終いだよ…」

はやて

「どうでもええ！次回予告や！」

はやて

「ゼロは作戦を執行する…」

なのは

「そこに居たのは、実の妹、アインハルト」

祐輔

「その勝負の結末は…？」

ゼロ

「次回、―兄弟対決―…明日の大空へ」

一同

「Drive ignition！」

第6話一兄妹対決一

「さて、すまないな。ノーヴェ」

「別に良いよ。ただ、しっかりやれよ？ 兄貴」

「その呼び方は止めろ」

ゼロはジト目でノーヴェを見て言う。…前回の翌日にゼロはナカジマ家に立ち寄って、今ゼロはノーヴェと対話中。

「兄貴ってのをか？」

「に決まってんだろ」

ノーヴェは笑いながら、ゼロは少し呆れ気味に言う。

「とりあえず、お前の容姿借りる」

「容姿を借りるって…どうやって？」

「じゃあ、見せてやる。ブレイ」

〈了解〉

そうゼロが言うと、ゼロの姿がノーヴェへと変わる。

「まあまあだな…。どう思う？」

「…言葉も出ないよ。と言うより、有り得ないでしょ。声まで再現してるって…」

「本人が居る前だけだね」

ゼロは笑う。ノーヴェは少し呆けていた。その時、扉が開く。

「ノーヴェ。ご飯だ。ゼロも連れてきていいから速く…?」

入ってきたのはチンク。かなり驚いていた様で、腰を抜かしていたところをゼロが助ける。

「まあ、解らなくもない。とりあえず落ち着け。チンク」

「その声、ゼロか？」

チンクはゼロの肩を借り、立ち上がる。

「そうだよ。チンク姉」

部屋にいたノーヴェは出てきて言う。

「にしても、再現しすぎだな…。姉もびっくりだ」

「それは言えるかもな。何とかならないのか？」

「無理だ」

チンクは感嘆し、ノーヴェは呆れ気味にゼロに聞く。ゼロは即行で答え、瞳の色を翡翠に変える。

「まあ、さすがにここしかできないしな」

ゼロは苦笑いしながら言う。

「けど、何するんだ？」

「それは姉も気になるな」

「えっとさ。ギンガから聞いてると思うけど、覇王って言う奴が現れてんじゃないか」

「そういえば言ってたな。で？そいつが？」

ノーヴェがその後聞く。

「生け捕りする」

「「生け捕り？」」

「まあ、あれだよ。なのは式のお話って奴ではないお話だよ」

「「ああ」」

感心してくれた様でなによりです。ゼロはそう思い、立ち上がる。

「でも、どうやって見つけるんだ？」

「そこでお前の容姿が必要になる」

「…成程。ノーヴェは格闘技ストライクアーツの中でも名が知れている。それを使うのだな？」

「そう。さすが皆の姉さんだけはあるな」

「今はお前の方があれだな」

「確かに」

そして、俺等は笑い合う。

「チンク姉。ご飯っすよ！」

「そう言えば、そんな用で来てたよな？チンクは」

「…そうだったな。少し話しすぎた」

チンクは苦笑いと言う。

「後でギンガとフェイトとはやてにナツクルが飛ばされない事を祈るよ」

「そう言えば、フェイトとはやては？一緒じゃなかったよな？」

ノーヴェはゼロに聞く。

「色々有ってさ。ヴィヴィオって確か初等部の4年生だったはずだろ？まだお祝いしてなかったと思われるから」

「そう言えば…」

「で、フェイトはしばらく向こうに居るって言ってるし、はやてははやてでプレゼント考えるからって寮に行った、だからアリシアと俺で来たんだよ。まあ、俺は一人で良いって言ったんだけど、アリシアが夜が怖いからって理由で来たんだよ」

「成程な」

「まあ、解らなくもないけどな」

ゼロの言葉にチンクとノーヴェは返す。

「じゃあ、行くか」

ゼロはそう言い、二人を促す。

「そうだな」

ノーヴェは答え、

「それでは行くとしよう」

チンクが言い、彼らはリビングへと向かった。

＊

「で、巧く行きそう？」

「騙し取れるな。今のままなら」

食事中。ゼロとギンガはそんな話を話していた。

「何がッスか？」

「ウエンディには関係のない事」

「良いじゃないッスか」。別に教えてくれたって」

ウエンディが口を窄めて、言う。瞬間、ノーヴェとギンガとチンクとゼロで緊急会議と言う名のアイコンタクトをする。

「（どうする？教えるか？）」

「（ウエンディなら、嘘ついただけで信じるとは思うが？）」

「（その嘘にも考えものだよ。チンク姉。下手に嘘付いたら、この作戦は失敗する）」

「（確かに、ノーヴェの言うとおりに考えものよ？どうする？）」

「（よし。俺に任せろ）」

「（大丈夫？）」

「（いつもウエンディに嘘付いて騙し取っていたのは誰だと思うんだ？）」

「（…任せる）」

「（了解♪）」

アイコンタクトを終了。その間、一秒足らず。そして、ゼロは息を吸い、言う。

「…実は、明日。ギンガとチンクが将棋で勝負するんだ」

何という嘘！？てか、ぶっちゃけ過ぎるでしょ！？それよりも、嘘が下手すぎる！！ウエンディ以外の皆は思ってしまった。ゼロも少しやってしまった感があふれている。

「ええ。あのつまらなそうなのツスかあ？」

「そ、そうよ。ねえ？チンク？」

「あ、ああ。姉とギンガは確かに勝負するぞ？」

「ほら、関係ないだろ？」

「そうツスねえ」

危ねえー！！その場にいた4人は思う。その後、ゼロは念話を繋ぐ。

（ノーヴェ、とりあえずプランA）

（了解。てか、あんな嘘良くつけたな？）

（：色々とすまん）

そう言い、念話を切る。すると、ノーヴェが話し始める。

「あ。おとーさん、ギンガ。あたし明日教会の方に行ってくるから」
「そう」

ギンガは返し、

「いつもの見舞いか？」

ゲンヤは聞く。

「ん。そんなところ」

ノーヴェは答える。

「じゃ、あたしも行くツス！セイン姉と双子をからかいに！」

ウェンディは手を上げて言う。うっさい。とか、ゼロは物凄く小さ

く呟いていた。

「姉も行きたいな。久し振りに」

チンクもそう言う。やっぱり、性格からか、上品に聞こえる。

「えー！」

ノーヴェは驚きの声を上げる。少し棒読み過ぎやしないか？とゼロは思うが言っては負けなので言わないこととする。

「だめよー。あんまり大勢で押しかけちゃ」

ギンガは二人を諫める。そして、ゼロは食事を食べ終わり、食器を片付け始める。

「あ。食器とか洗わなくても良いわよ？」

「いや、押し掛けで食事まで頂いて、何もしなくても良いって言うのはあれなんで、これだけでもやらせて下さい」

ゼロはそう押し切ると、食器洗いを再開した。

＊

「…さて、気になる汚れも全部排除したし。これでやっと寝れるな」
「ゼロって徹底的にそんなんだよね…」

ゼロの今の在り様は主夫そのもの。ただいまの時間。丑満つ時。

「アリシア。眠いんだったら寝ろ」

「ん。眠くない…」

「眠たそうな声してる奴を誰が信じられるか。やれやれ」

ゼロは着ていた上着をアリシアに掛け、外に出て空を見る。星空が綺麗だ…。そんな事を思いながら、見上げる。

「…アインハルトか…。どんな顔するだろうな…?」

そして、月に手を伸ばし、それを掴むように握る。

「本気で戦いたいもんだな。シグナムじゃないけど…な…」

そのような独り言を呟き、笑う。手を戻し、開く。そして、掌を見る。

「…過ちは許される物ではない。毎回思うな。これ。だけど、凄く大事だし、だからこそ、この空を…世界を守りたいって。そう言う風に思う。まあ、聞く人が居ないんじゃない意味ねえし。…寝るか」

ゼロはそう言い、壁に寄り掛かり、眠った。

＊

「とりあえず。これで本当に大丈夫だよな?」

「ああ。大丈夫だ、兄貴」

「気のせいかな、大丈夫じゃない気がする」

ゼロはノーヴェの言葉に頭を抱える。

「口調と、変身魔法に気をつけてれば大丈夫だって!」

「わかった。とりあえず、行ってくる」

「ノーヴェー！行くツスよー！」

「わかった。もうちょっと待ってて」

ゼロはそう返すと、少し駆け足で行く。玄関に出た時、待っていたのはウエンディとディエチだった。

「遅いツスよ。ノーヴェー」

「うっせえよ。行こう」

「そうだね」

ディエチもそれに賛同し、ゼロ等はヴィヴィオを連れて、聖王教会へ向かった。

＊

「ごきげんよう。イクス」

ヴィヴィオが寝ている(?) イクスの手を取り、そう言う。まあ、ゼロの力で蘇生っぽいのをさせるのも可能なのだが、残念ながら、ゼロは暴走しており、それが不可能であった。

(さて、久しぶりだな。セイン)

ゼロは念話をする。

(ゼロ兄？何処に居るの？)

(天井裏)

(ネズミ！？)

(と見せかけて、ノーヴェーに変装中だ)

(…何でまた…)

(色々有ってな。アインハルトの事。けじめつけておかないといけないと思うのもある訳で)

(成程ね。ゼロ兄らしいよ)

(まあ、俺も出来の悪い妹を連れて少し説教したいし)
(成程ね)

セインがそう言うのと、ヴィヴィオが歩き出したので、彼等も歩き出す。

(まあ、頑張れ。頼れる兄さん♪)

(あのなあ…。まあ、良いや。そろそろ切るぞ?)
(わかった)

そう言うのと、念話が切れる。まあ、元気な様でなにより。そう心の中で呟くゼロなのであった。

*

…その後、ゼロ等は教会を出て、ストリートファイト格闘戦…じゃなかった。ストライクアーツ格闘技を行ってから、ゼロは救助隊に行つて、その帰りであった。

「これは外れか…？」

「主がここまでしてるのに、何やってるんでしょうね？」

「ブレイ。最近、口が悪くなって無いか？」

「…それは少し感じています。すみませんでした」

「まあ、別に良いよ」

「ストライクアーツ有段者、ノーヴェ・ナカジマとお見受けします」

その声に気付いた彼は振り返る。なんだか、セイバーオルタの様な

バイザーをした少女が街灯に立っている。…来たな…。ゼロは心の中で笑い、その少女を見る。

「貴方に幾つか聞きたいことと、確かめたい事が」

さらに、続け、そう言う。

「質問すんなら、バイザーを外して名を名乗れ」

ゼロはそう言う。ノーヴェの声で。

「失礼しました」

少女はバイザーを外すと、名乗り始める。

「カイザーアーツ正統。ハイディ・E・S・イングヴァルト。『霸王』を名乗らせて頂いています」

少女：アインハルトはそう言い、街灯から降りる。

「噂の通り魔か」

「否定はしません。伺いたいののは貴方の知己である『王』達についてです。聖王オリヴィエの複製体クローンと冥府の炎王イクスヴェリア。貴方はその二人の所在を知っていると…：「知らねえな」

ゼロはそこで会話を切る。

「聖王のクローンだの、冥王陛下だのなんて連中と知り合いになった覚えはねえ。あたしが知ってんのは、一生懸命に生きてるだけの普通の子供たちだ」

ゼロはここで、女言葉って難すぎる。とか感じていた。

「――理解できました。その件については他を当たるとします。では、もう一つ確かめたい事は…」

ゼロは身構え、アインハルトは右手を胸の前に持って行き、握る。

「あなたの拳と私の拳。いったい“どちらかが強いのか”です」

その言葉を聞いた瞬間、ゼロは少しだけ頭に来る。

「防護服と武装をお願いします」

「いらねえよ」

「そうですか」

「よく見りゃまだガキじゃねえか。何でこんな事してる？」

「――強さを知りたいんです」

アインハルトは少し俯き、言う。

「ハッ！馬鹿馬鹿しい」

ゼロは構える。ストライクアーツ不慣れな格闘技の構えで。そして、足に力を込め、膝蹴りを放つ。

一撃一

アインハルトは少し怯む。ゼロは右腕に紫電を纏わせ、放つ。

一撃！一

そして、衝撃で、アインハルトは退く。

「（…やっぱり、どうやっても俺は^{カイザー}覇王なんだな…）」

そう誰にも聞こえない小声でつぶやく。その後、ポケットからブレイ…ではなく、ノーヴェのデバイス、ジェットエッジを模したブレイを取り出す。

「ジェットエッジ」

〈Start up〉

そして、ノーヴェのバリアジャケットではなく、アインハルトと同じような服を纏う。

「それは…」

「わかってるさ。俺だって。ここで、ノーヴェに任せるべきだって思っ
て、逃げ出したら駄目だって事位…」

「やっぱり、あなたは…」

瞬間。ゼロの姿が消失する。アインハルトは必死にゼロの姿を探す。

「何処見ている？」

「！！」

一撃！

「ぐっ…！」

アインハルトとゼロは距離を取る。ゼロはノーヴェの姿のままで。

アインハルトは苦悶の声を上げて。二人は対峙する。さっきよりも重くなった…。やっぱり、兄さんの…。

「アインハルト。お前は何で力を求める？」

「生きる意味で、他の王より強いことを証明するためです」

「…証明して、その後どうする？」

「弱ければ、この手で屠るまでです」

「このアホ…」

ゼロは一気に距離を詰める。反撃する様にアインハルトは拳を繰り出す。ゼロは体勢を低くすることによって回避。

「強さは…あのイングヴァルトは…！」

ゼロは、アインハルトの鳩尾を正確に撃ち抜き、打ち上げる。

「強い弱いじゃなく、本当に護りたいからこそその記憶だろう！それを…なぜわかってやらない！お前がしてるのは、イングヴァルトに對しての…」

ゼロは右手、右足を後ろに引き、魔力を纏わせる。

「冒涇だろうが！」

そして、一気に爆発させる。

「決！」

地面が抉れ、ゼロはものすごい勢いで、アインハルトに近づく。

「霸王…」

まずは右足で蹴り抜く。

—撃—

「絶天…」

そして、足場を作る。そこを蹴り、さらに跳躍し、右腕を引き搾る。
狙うは…鳩尾！

「断空拳！」

—撃ッ！—

「カハッ……」

そして、地面に叩きつけられる。その後気絶。ゼロは軽い調子で地面に降り立ち、変身魔法を解除する。

「……。馬鹿な妹だな。身に着けるべき強さ。履き違えてんじゃねえのか？」

ゼロはそう言い、モードをリリース。ジャケットを解除し、アインハルトを背負う。

「久々に霸王流使ったな…。アインハルトにも話をつけておかないとな」

『ゼロさん？』

「ギンガか。巧く行った。今からナカジマ家行く」

『そうですか。とりあえず、スバルには言っておきます』
「了解」

そうして、通信を切り、走り出す。

「あ。そう言えば、フェイトとかに通信しても大丈夫か？」

そうして、念話を繋ぐ。

（フェイト？はやて？起きてる？）

（（…））

返答が来ない。寝ているかどうかを確かめるために、質問する。

（もしかして、怒ってる？）

（（うん））

即答。しかもフラグが立っている。死亡フラグという名のフラグが。

（ゴメンナサイ）

（何で片言なんやあ〜？）

（色々と訳があり、今は帰れない状況になっていますので、後で好きなこととしていいから、明日になるまで待っていてくれませんか？）

（ん〜。ちょっと納得いかないけど、良いよ）

（有り難うございます。じゃあ、とりあえず切ります）

（うん。じゃあ、二人とも、お休み〜）

まず、はやてが念話を切る。

（ゼロ？）

(ん?)

(その：ヴィヴィオから何か聞いてた？大人モードについて)

(何も聞いて無いな。でも、親友を信じてやれって。ヴィヴィオも
けじめつけてんだろ?)

(うん…)

(なら、そっとしておく。この一点張りだ。じゃあ、そう言う事で、
お休み)

(うん。お休み)

そして、念話が切れる。気付けばナカジマ家に居た。とりあえず、
ゼロは中に入り、アインハルトをベッドで寝かせると、彼はその隣
で、壁に寄り掛かり、眠りについた。



レールガン
超電磁砲!!

今日の担当

・ゼロ ・はやて

ゼロ「今日はフリートークで参りたいと思います、このZEROの
境界線」

はやて「嘘ばかりやんか！何処がフリートークや！」

ゼロ「はやてよ。すまない」

はやて「な、何謝っとるんや！私が悪い見たいやろ！」

ゼロ「俺が勝手にノーヴェの容姿借りた事に」

はやて「そっち!?!」

ゼロ「んじゃあ、おさらい」

はやて「覇王の力…恐るべしっ！」

ゼロ「って、感じだな。」

はやて「そうやな」

ゼロ「それと、今回から、縦書きが好きな読者にも楽しんでいただきたいと思い、後書きが新しくなった♪」

はやて「なにその勇者のLvが1上がった。みたいなノリはっ!」

ゼロ「:じゃあ、次回予告」

はやて「スルーされた!」

ゼロ「次の日、ゼロは朝速くに出て行った。訓練もあるが、それ以前に調べたいこともあり」

はやて「勝手に始まってる!もうええわ!:そして、襲撃に遭う」

ゼロ「果たして、誰のものか?」

はやて「次回、――襲撃――。明日の大空へ!」

一同「Drive ignition!」

第7話一襲撃(Act 1)ー(前書き)

だいぶ遅れました。その割には進んでません。すみません m
し m

改めて、どうぞ♪

第7話―襲撃（Act 1）―

「眠…」

ゼロはらしくない言葉を愚痴り、立ち上がる。そして、アインハルトの顔を見る。その頬には涙が流れていた。

「…色々を抱え込んでるんだよな。アインハルトも」

そう呟き、嘆息する。その後、涙を拭き、静かに出て行った。

＊

「しかし、何かないと、あれだな…」

出て行ったは良いが、何をしようか悩んでいた。というのも、今はそっとしておくためだけに下に来ただけの事。

「まあ、今日はお前もいるから大丈夫だとは思うが…。スバルって料理できたんだな」

「出来ますよ！失礼な！」

調理場に居たスバルがゼロの言葉に反抗する。

「お前、もっとできない奴かと思ったぞ」

「デリバリー頼んでばかりいるとはいえ、それは酷くないですか！？」

「………すまない。で、誰に教わったんだ？」

「祐輔さんに教わって…その後、自分で」

「成程な。じゃあ、改めて聞く。本当に大丈夫だよな？」

ゼロは少し真剣な表情で聞く。

「大丈夫ですって！」

「ん。なら良いんだが…味見していいか？」

「良いですよ」

ゼロはその答えを聞くと、立ち上がり、作った物に一口づつ手を付ける。

「旨い」

「でしょでしょ！」

「ああ。正直、ここまで旨くなるとは思わなかった」

「あれから頑張って、ホワイトカレーとグリーンカレーとレッドカレーとオレンジカレー、作れるようになったんですからねっ！」

「ちょっと待った!!！」

「はい？ 何か問題がありました？ わかった！ 食べたいんですよ！ 信じられなくて！」

「そうそう♪ じゃあ、作って♪ って、違うっ！」

ゼロはその場の空気に流されそうになったが、何とか留まる。

「何か問題でも？」

「大ありだっ！ グリーンとレッドは許せる。だがな？ オレンジとホワイトはなんだあアアア!!！」

「へ？ 味は普通ですよ？」

「それは本当に普通なんだなっ！ いや、普通なのかっ!？」

「普通ですって！」

「二人とも。うるさい」

喧嘩(?)が白熱しているところにディエチが仲介に入る。

「すみません」

「解ればいいけど、ゼロもあまり細かいこと気にしたら駄目だと思う」

「細かいんだけどな…。ディエチにもチンクにもギンガにも食べさせたよな? カレー」

「うん。あれは茶色かったよね」

「だろ? それだったら…」

「……うん。ちょっとは気にした方がいいかも」

「えゝ!?!」

スバルはウェンディさながらの驚きをする。

「スバル。なに叫んでるのよ」

「あ、ティア」

ティアナが奥の方から出てきて、ゼロの隣に座る。

「丁度いい。ティアナ。お前の意見を聞かせてくれ」

「な、なんですか?」

「スバルのホワイトカレー論と俺のブラウンカレー論。どっちが正しいかって事」

「ゼロさんの方で」

「ティアもおゝ」

「諦めろ」

ゼロは少し落ち込んでいるスバルを見て立ち上がり、スバルに通り

様に言う。

「まあ、機会があったら食わせてくれ。少しだけなら評価すること
もできるかもしれんからな」

彼自身。ぶっきら棒なだけに、そういう言い過ぎたという感情があ
る為、彼はは彼女だけに聞こえる様に言い、朝食の準備をする。

「あ。私やるから良いよ」

「そうか。なら、俺はアインハルト達起こしてくるから、頼んだ」

そう言うと、ゼロは立ち去る。その後、ディエチは準備を開始し、
ティアナが話しかける。

「ゼロさん、最近ピリピリしてますね」

「ティアナもそう思う？」

「うん。って事は…」

「ティアナの思ってる通り。どうしたんだろうね？」

「…アインハルトになんて声かければいいのか分からないんじゃない
い？」

「それかもね」

そうして、二人は話をしながら準備をしていた。

＊

「……デュノア…アイツは何を目的としてるんだ…？」

丁度、アインハルトとノーヴェが寝ている部屋の前で考えていた。

〈主。深く考えすぎても、体に毒です〉

「わかってる。ブレイ。けど、このままだとさらに厄介だ。なんとか、止めないといけない…」

〈主…〉

そんなゼロを見て、ブレイブフォースは言う。その時。

「でも、そうやって考えてるだけじゃ、何もつかめないよ？」

「…アリシア」

ゼロはそれに振り向き、言う。

「ふさぎ込み過ぎないでよ？ 私だって、フェイトだってはやてだって。すっごく心配してるんだからさ」

「お前に言われるとか、俺終わったな」

「ゼロから見て、私ってどんな印象なの！？」

「すっごく残念な子」

「さて、バルディッシュはっと——」

「ごめん。嘘」

ゼロは【バルディッシュ】という単語を聞いた瞬間、土下座し、難を逃れる。

「まったく。ゼロは私をなんだと思ってるの？」

「俺の家に勝手にお邪魔している図々しい——」

「さて、この家で一番鋭い刃物ってどこかなあ？」

「——マジでごめん。そんなつもりはあった」

「あったんだ！？ というより、有り得ないでしょ！」

アリシアはその衝撃の事実につっこみを入れる。

「いや、本当に」

「まあ、良いや。でもさ。あまり抱え込んできると皆心配するんだから、気をつけなよ？」

「わかった」

ゼロがそう答えると、アリシアは手をヒョイと上げ、「じゃあね」と言い、その場を去った。

「…そんな顔してる時まで会いたくないしな。ありがとよ」

ゼロはアリシアが去っていた方を見てそう呟く。その後扉を静かに開くと、まだ寝ているアインハルトとノーヴェがいた。

「……お前等、起きてるだろ？」

「「……………」」

ゼロがそう言うと、物音だけが返ってくる。

「さて、スバルにすっごく不味くなるように作らせてくる——」

「やめろって！」

ゼロがそう言って、出て行こうとしたところにノーヴェのタックルが飛んできて、彼は倒れ、断念する。というより、断念せざるを得なかったのだ。なぜなら……。

「俺が涙目に弱いのは知ってたな？」

「そうでもしないと本当に行くだろ……」

「てか、本当に泣いてない？」

「……泣いてる」

と、可愛く首を振るノーヴェ。ゼロはそれを見て、少し申し訳なさそうな顔をする。

「すまん。悪かった。けど、自炊できる様にはなってるって」
「本当か？」

「ああ。味見してきたし。というより、俺より知ってるだろ。お前は」

「知ってるけど、兄貴は本当にやりかねないから……」
「……ヤバいな。これ。写真とって、ウエンディとかに……」
「渡すなっ！」

一殴！一

瞬間。ゼロの顎にナックルが飛び、ゼロの首がゴキッ！と有り得ない音を慣らす。

「アガガガガ……」

「少し力入れすぎな位が丁度いいんだよ。兄貴には」

「……………」

「あ、あれ？ 兄貴？」

「……………」

「まさか、本当にヤバい事に……」

「はいっ！」

バッキィッ！と豪快な音を鳴らして、首を元に戻すゼロにノーヴェは驚く。

「危なっかしいなあ、おい。もう少しで意識が飛ぶところだったじゃねえか」

「兄貴の方がもっと危なっかしい！」

「そうか？」

「そうだ！」

ゼロがノーヴェのその言葉を聞き、ため息を吐くと、アインハルトが起き上がった。

「起こしちゃったか？　アインハルト」

ゼロはニコニコ笑いながら尋ねる。

「兄さん……」

「ん？」

「お腹が空きました」

ゼロはそれを聞いた瞬間、思いっきりすっ扱けた。

「アインハルトがアルトリアみたいな性格になってるな……」

ゼロがそんな事を言うと、アインハルトの頭には“？”が浮かんだ。

「いや、解らなくていいんだ。じゃあ、行くとしますか」

ゼロはそこまで言った時に気付いた。今、ノーヴェが上に乗っかっている状態なんだと。そして、ゼロとノーヴェは互いを見る。ジツと…。見ている内に互いの体が火照ってきた。これはまずいと思い、ゼロは言う。

「とりあえず、このままじゃ立てないから、除けてくれないか？」
「わ、分かってる…」

ノーヴェは少しもじしなから除ける。

「(可愛過ぎるっ!)」

とゼロは思っていた。なぜなら？と言われたなら、ギャップが凄
いからなのだが。

「じゃあ、ディエチ達も待ってるし、行くか」

ゼロ達はそう言うのと立ち上がり、歩き出した。

＊

一方その頃、祐輔はというと……。

「ありがとうね♪ユウパパ♪」

「どういたしまして♪」

ヴィヴィオに勉強を教えていた。

「じゃあ、ユウパパ、ここは？」

「ここはさっきと同じパターン問題。まず自分で出来るところまで
やってみて？解らなくなったら教えてあげる」

「うん！」

そして、ヴィヴィオは机へ向かい、祐輔は部屋を静かに出る。

へしかし、祐輔も物好きですね」

「あんな目で見られたら断れないよ。俺」

「へ祐輔らしいです」

「まあ、そうなんだけどさ」

と、アルトリアと駄弁っていると、リビングについた。そして、そこにはなのはがいた。

「あ、おかえりなさい。ヴィヴィオはどうだった？」

「頑張ってるよ。ヴィヴィオは優秀だから、すぐ身に付けてぐんぐん伸びるしね」

「そっか」

沈黙が流れる。こうしているのもあれなので、祐輔はなのはの隣に座り、制服の上着を脱ぐ。

「あのさ、ユウ君」

「ん？どうしたの？」

「フェイトちゃんとはやてちゃんはゼロ君と結婚してるよね？」

「そうだね。若干、ゼロはピリピリしてる所もあるけどね。傷つけたくないって気持ちはわかるけど、無茶しすぎだし」

祐輔は持ってきていたカバンから、缶コーヒーを取り出し、飲み始める。

「そういう事じゃなくてさ。その……私とユウ君で……」

「ブフッ!!」

祐輔は飲んでいたコーヒーを思いっきり噴き出して、咽る。

「だ、大丈夫？」

「ふああゝ。落ち着いた。で、なんで？」

「へ？だから……」

「そうじゃなくて」

祐輔はなのはに顔を近づける。

「本当に後悔はない？　今、軽い気持ちで俺と結婚したとするよ？
そうしたら、一緒に過ごして、苦しい事……。例えばさ、俺が死
んだとかさ」

「そんなの――」

「例え話だよ。そんな事があった時、本気で悲しんでくれる？　本
気で、一緒にいてくれてありがとうって気持ちになれる？」

「それは……」

なのはは口ごもる。そして、考え始める。

「確かに、アルスと俺は話したよ。アイツは……もういないけどさ」

そう。ミッドに戻ってから、行方不明になっているのだ。【アルス・
フォードマン】は。あったのは、【俺を幸福にしてくれてありがとう。
う。そして、俺はお前等の事を忘れない】その一文が綴られた置手
紙だけだった。

「俺はゼロみたく皆を護れるほどの力を持っているとは思えない。
それでも……」

祐輔はなのはの瞳を見て言う。

「信じてくれる？――」

と。帰ってきた答えは……。

「まだ、少し待ってくれないかな？ 私はこうしてユウ君といるのは楽しいし、ユウ君の事は好きだけど…けど、焦る事はないよね」
「うん♪ヴィヴィオの気持ちもしっかり考えて、そう言うのは決めて行こう？ 行き成りすぎると、ヴィヴィオも混乱しちゃうしね」
「そうだよね」

そこまで話した時、奥の方から足音が近づいてくる。まあ、一人しかいないのだが。その人物は。

「んゝ。終わったあゝ」

「お疲れ様。ヴィヴィオ」

なのははそう声をかける。祐輔はその隣で笑顔を見せる。

「あのね？なのはママ」

「なあに？」

「ヴィヴィオは別に、ユウパパとなのはママが結婚しても、良いよ？」

「聞かれちゃったんだ」

「うん。聞いちゃ駄目だって、わかってたんだけど……」

そして、沈黙が流れる。その時。

〈マスター。本局から、電報が届いています〉

「電報？」

〈はい〉

「……とりあえず、俺だけ見る。保存しておいて」
〈了解です〉

祐輔はそういうと、少し嘆息した風に立ちあがる。

「じゃあ、用事出来たから帰るね？」

「うん」

「じゃあね〜♪」

「じゃあね♪ヴィヴィオも頑張ってね♪」

「うん♪」

そう祐輔とヴィヴィオは笑顔でなのは少し暗い顔で別れた。

「で、内容は……………！！」

祐輔はその内容に驚いた。

「死ぬなんてね。阿修羅が…」

〈マスター？〉

「ううん。何でもないよ」

祐輔はそういうと、六課へと歩き出した。

＊

場所は戻り、ゼロはとりあえず、警防署に来ていた。まあ、元帥権限ですぐに終わらすことも出来たのだが、それは職権乱用だと言う事で。そこで、ゼロも祐輔と同じ電報を貰っている。

「まさかな……。アイツが死ぬなんてな」

ゼロは少し俯き気味に呟く。その時、頭の中に声が響く。

「ゼロよ。不死鳥の羽の時間が残り少ないぞ：」

と。それは、ファルザーの声だった。

「残り時間か……。まあ、因縁を断ち切れるから良いけどな」

「お前がそうならそれで良い。私はもう消えるしな」

「そうか。なら、逝け」

「なら、そうさせて貰う」

その声は最後の言葉となり、ゼロは眼を閉じる。

そして、感謝の意を込めて。

また、因縁を断ち切ると言う意味でも。

「ありがとう……」

そう呟いた。

「兄貴？」

傍にいたノーヴェがゼロの顔を見て言う。その顔は少し心配しているように見てとれた。

「何でもない。俺、家に行って取ってくるものあるから、頼んだ」

「あ、うん。解った」

ゼロはそう言うと、警防署を出て、言う。

「いるんだろ？俺を狙ってる暗殺者さんよ」

瞬間。幾つもの砲撃が飛ぶ。

「フィールド・エア」

―撃!―

爆音が聞こえ、辺りが煙に支配される。

「スラッシュ・ウインド」

―斬!―

その煙を打ち破り、ガジェットを切り裂く人影。無償だった。何事もなかったかのようにそこに佇む人影。ゼロであった。その右腕には風を宿していた。

「魔力浪費が激しいから、デバイスなしの行使はしたくないんだけどな。やむを得ない状況だったし。結界も張られてるから丁度良いか。出番だぞ。ブレイ、イル」

へ〈了解です〉

「セットアップ!」

瞬間、ゼロの体に白の翼が生え、黒の騎士甲冑が装着された。

「いぶり出すか。今回の事件の黒幕を…!」

そして、一人の騎士の戦いが始まる。



霸王…断空拳!

今日の担当

・ゼロ ・フェイト

・祐輔 ・なのは

ゼロ

「さて、始めました♪ Z E R Oの境界線♪」

祐輔

「うん。なんか、進展って言うか、今までのフラグ、伏線纏めて回収したと言うか……」

フェイト

「気にしたら…駄目だと思う」

ゼロ

「ごめんな？ 出番なくて」

フェイト

「ううう…」

なのは

「私は出番なったけど…」

フェイト

「なのはの馬鹿あゝ！！」

ゼロ

「あ、おい！ すまん！ 二人とも、ここは頼んだ！」

祐輔

「投げた！？ って、もう行ったし！！」

なのは

「しょうがないよ。私が今回悪いんだし……」

祐輔

「……大丈夫だよ！ 今回のおさらい行こう？」

なのは

「そうだね…。一言で言うと、カレーは茶色でしょ！ ってところ

かな？」

祐輔

「そうなるね」

フェイト

「次は出番あるよね？」

ゼロ

「あるよ。俺が作者と掛け合ってみるから。泣かなくても大丈夫だぞ？」

フェイト

「うん……」

祐輔

「おかえり」

ゼロ

「ただいま。ごめん。呼んでおいて悪いけど、二人きりで進行させてくれないか？」

祐輔・なのは

「ごめん。全部やっちゃった」

フェイト

「二人の馬鹿あゝ！！」

ゼロ

「このドアホどもっ！ もうお前等でやれ！ 俺、フェイト慰めてくるからっ！」

祐輔

「速いね。あの二人」

なのは

「じゃあ、予告」

祐輔

「たった一人の騎士の戦場」
なのは

「そこに何があるのか？」

祐輔

「次回、――襲撃（Act2）――」

なのは

「明日の大空へっ！」

祐輔・なのは

「Drive ignition!」

第7話一襲撃（ACT2）一（前書き）

遅れてすみません m () m

後書きにちよびつと重要なお知らせの様な物があるので、読んでく
ださい。

第7話一襲撃（ACT2）一

「らあああああああああ！！」

一斬斬斬斬斬！一

その声と共に、斬り裂かれる、無機質の物体、ガジェット。

「なんか、増えてる気がすつけど…気にしてらんねえな！」

一斬一

ゼロはそう言った瞬間に斬り裂く。だが、剣にかかる重さが違った。そう、重かった。なんせ、斬ったのは…。

「生物…？ いや、これは…！！」

魔導師だった。しかも、目が虚ろ。

「……いつの間にか、囲まれてるしな…」

ゼロは周りを見てさういう。

「良かったですね。主。人殺さなくて」

「ブレイは何を心配しているんだよ…」

「主、私達も加戦しましょうか？」

「む……。どうするかな？」

ゼロは頭をポリポリ掻きながら考える。

「じゃあないな。加減しろよ？」

〈分かってますよ〉

〈久し振りに外に出られんのか〉

〈珍しいね。主がボクらと呼ぶなんてさ〉

「そろそろ行くぞ。ブレイトイルもお願いな」

〈断ります〉

「守護騎士システム、復元」

瞬間、幾つもの人が具現化する。

「久々に派手に暴れてやつぜ！」

「主、あまり無理はしない方が良いですよ」

「その鴉には心配しても無駄であろう」

「その言いぐさは酷いな…。シャイニング・ウインド。俺だって、人間なんだからよ…」

「……………」

「何がしたいんだ。この二人」

「まあ、まあ。いがみ合うのもわかるけど、このままじゃ主がボク達に掛ける負担の方が大きいよ？」

リバティーがそう言う。なんせ、そこには、額に汗ぐっしよりの主がいた。だから、言わざるを得ない。

「殺すなよ？」

「分かってますよ。その位」

「なら、良いけどな」

ゼロはそういうと、双銃を呼び出し、構える。

「俺は、魔力弾落とすから、魔力攻撃でノックダウンな？」

「了解です。主」

「そんなの、皆わかってるんだから、主のしたい様になってくれればいいよ」

「そうさせて貰う」

ゼロがそう答えると、散開する。

「さて、やりますか……」

ゼロは五芒星を描き出し、魔力を思いっきり注ぐ。

＊ ＊ ＊

「はぁッ！」

一撃！

魔力砲撃の閃光。その奔流は、一人、また一人と巻き込んで、消える。奔流が通った後に、ガジェットが入り、その場所を埋める。

「埒が明きませんね」

「だからこそ燃える展開だな……」

「うげっ、アルタードの戦闘狂が発動したよ……」

「邪魔すんなよ♪」

「すっげえ笑顔だしっ！」

「皆！ 避けて下さい！」

一閃！

イルミネートがそう言った瞬間、5つの閃光が通り過ぎる。

「ぬわっ！ 主！？」

「悪い。少しだけ、無茶させて貰う！」

ゼロがそう言うのと、閃光がいくつも分裂し、全員を飲む込む。

「やってのけたな…。主……」

「チートつつう部類にいますと、こうなっちまうんだよ」

ゼロはそんなこんなで、疲れて、膝をつく。

「主。そろそろ、私達、戻りますが……」

「そうして貰うと、非常にありがたい」

「分かりました」

イルミネートがそう言うのと、フォーチュン以外は元の形に戻った。

「：どうした？」

「主よお。アンタ、気付いて無いのか？」

「気付いてるさ。疲れてるから、好機なのか、どうなのか分からないけどな」

「先陣切るか？」

「なら、ユニゾンして、魔力の底上げやってもらった方が良い」

「了解だ」

フォーチュンはそう言うのと、嘆息したように眼を閉じ、黒い光となつて、ゼロの中に入る。瞬間、ゼロの髪は銀に染まり、甲冑は黒に、瞳は金と銀のオッドになる。

「主、結構冷めてるな」

「言えるかもな。最近、ピリピリしてたしな」

「良く言うぜ。全くよ」

「…うるせ」

「結構だぜ。さて、ほとんど潰したし、起き上がってこない内に探した方が良いんじゃないか？」

フォーチュンの言葉に、ゼロは「そうだな」と返し、瞳を閉じ、双銃ではなく、短銃一本と、長剣一本を携える。柄を握る。以前、楔をした時の様に、風の流れを感じる。今回は、運命の力：Dの力がほぼ消えかかっている、それは無しで。感覚で…察知する……。

「そこっ！」

一閃

キラリと煌めく刃。ゼロは居合と呼ばれる、抜刀術で真空波を起こし、狙った一点の場所に斬撃を入れる。そこから出てきたのは、デュノアだった。

「ビックリしたあゝ」

「デュノア……」

「あ。ゼロ元帥」

デュノアは、笑みを浮かべながら、一回転し、着地。そして、ゼロに歩み寄る。

「デュノア、何でここに？」

「いやあゝ。そうですね？ 結局、僕も巻きこまれて、隠れてたんですよ。そしたら、ゼロ元帥に向かって何人も襲いかかるもんで

すから」

「なんか、クアットロみたいな喋り方してるな…」

「元々です」♪ そしたら、元帥から、衝撃波みたいなのが飛んできて」

「そうか。それは済まなかったな」

ゼロは長剣と短銃をしまい、そう言う。それと同時に、解除される結界。

「う」。何があった…?」

そこにいた、魔導師が頭を押さえながら起き上がる。

「起きたか」

「今話題のゼロ元帥! サイン下さい!」

「何だよっ!」

その局員の言葉に思いっきりツツコミをかました後、嘆息する。

「さて、少しだけ話を聞かせて貰うぞ」

「はい!」

「喜ぶな。まあ、聞きたい事は二つ。一つ目、何故俺を襲ったのか」
「誰がそんな事を!?!」

その言葉を聞いた瞬間、頭を押さえ、悟った。コイツ……真性の馬鹿だ……。と。

「お前ら以外にだれが居るんだよ……それと。俺を憧れるのはやめろ」

「何故です?」

「俺はたくさんの人を殺したからよ。殺人者憧れるって、どうかしてるんだぜ？」

少し、呆れた様な笑顔で、そう言う。

「そんなことないです！ 英雄なんですよ！？ 元は犯罪者でも、今はヒーローです！」

「……ありがとよ。犯罪を犯しすぎて、何が正義かわからなくなった。つと。じゃあ、次な。お前に戦ってたという記憶は？」

「……………」

「ないんだな？ その様子だと」

「すみません…」

その魔導師は頭を下げる。

「別に。じゃあ…それ以前の記憶は？」

「…あれ？」

「ないのか？」

「ええ。模擬戦やって、休憩時間入ってからの記憶が…」

「そうか。有り難うな。……………。とりあえず、皆管理局だ。お前も含めてな。元の部隊の所に戻っておけ。今頃、隊長陣が鬼の形相して待ってるだろうからな」

そう言った後、ゼロは立ち上がり、「じゃあな」といって歩き出す。

（ゼロ！！！ 速く帰ってこおい！！！）

（どわっ！ どうしたんだよ！？）

頭の中に怒声が聞こえ、驚きながら反応するゼロ。

(暇なんや！ 速く帰ってきてー！！)

(暇だからって……)

(駄目なん……？)

(わかった！ 今行く！)

そう言った瞬間、走り出すゼロ。だが、次の一言で、行動が全く逆になる。

(いやー。扱いやすいわー)

(やっぱり遅く行く)

(そんなっ！？)

はやてが驚いているのに、少し笑いをもらしながら、言葉を紡ぐ。

(わかったよ。朝何食ったんだ？)

(和食)

(何とも幅の広い……)

(しょうがないやろ……)

(まあな。フェイトとアリシアは？)

(フェイトちゃんは、昼ご飯作ってて、アリシアは、外で魔法の練習してる)

(コントロール系？)

(そうやね)

はやてがそう答えると、少しだけ不思議そうな顔をする。

(……………。じゃあ、久しぶりに稽古つけるか)

(そうやね。じゃあ、頑張って！)

(おう！)

(じゃあ、また後で)

（ああ）

そう言った後、念話が切れる。あまり、気にしたくはないけど、何でいたんだろうな…？　そう思考しながら、走っていると、タクミと出会った。

「お、ゼロじゃねえか。どうしたんだ？」

「家に帰るところ」

「お邪魔していいか？」

「ああ…。狸とキツネが二匹いても良いならな」

「俺、動物は大丈夫だぜ？」

上手く引かなかったな。ゼロは心の中で感心していた。

「……まあ、俺について来い」

「了解」

そう言い、二人は走り出す。ゼロは今回の被害の報告書の事。

…そして、今回の犯人はだれか？　もちろん、デュノアがやった可能性が高いが、日本で育ったがため、一個人の人権を尊重してしまう性があるので、さらに悩んでいた。

「まあ、とりあえず。着いたな」

「うわあ、でっけえ」

タクミがそう言う。ゼロは少し悪戯染みた笑いを見せて、こう言ってみる。

「ただいま。はやて、フェイト」

「……はい？　今、あの二人にただいまって――」

「言ったな。てか、奥さんにそれくらい言わんきゃ駄目だろ」

「いやいやいや！ 聞いて無いぞ！」

「俺は言ったはずだが？ 狸一匹とキツネ二匹——」

「フェザー…ランサー！」

「射！—」

その声が聞こえると、ゼロに集束砲が二発発射され、ゼロはまともに受け、痛みに悶えている。

「ぐオオオオオ……」

「何言ってるのや！ 人の事を狸って言うからに！」

「すま…ん…」

「すまんですむ訳ないやろう！」

はやては、ゼロの服の襟もとを掴んで、ガクンガクン揺らしながら言う。

「やめ…首が締まる……」

「謝れ！ 今すぐっ！」

「本当に……」

ゼロはそう言うと、目から力が抜けた。

「はよう何か言いや！」

「はやて部隊長？」

「ん？ おお、タクミ君やないか。ちょっと待ってて、今からゼロを——」

「いや、気を失ってます」

「……………本当や」

「「本当や」で、すまされないよね!？」

奥から出てきた、フェイトがあたふたした様子で言う。

「いやゝ。暇すぎたもんやから、つい……」

「やりすぎだよ!!」 ゼロ、しっかり!!」

「嗚呼……マリア様……。今、河を渡って行きます………」

「そこから先は行っちゃ駄目っ!」

「あかん!　なんか、可笑しなことになっとなる!!」

とりあえず、三人は、ゼロを寝室に運んだ…。

＊

…ゼロが目覚めたのは、皆が寢床に着いた頃。

「魔力枯渴…とまでは行かないか…」

ゼロは自分の体を見て、言う。

「とりあえず、外にでも出てみるかな？」

ゼロはベッドから降りようとすると、微かに重みを感じた。それは、ずっと看病していたフェイトの重み。ゼロは少し嘆息し、掛けてあったジャケットを寒くない様に被せる。

ゼロは冷蔵庫から、珈琲を取り出し、庭に出て、一息つく。今のこの季節は、薄手で外に出ても、なんら影響はないので、安心できる。

「……しかし、良く入ってこれたよな、アインハルト」

「ばれてましたか」

その声が聞こえると、ゼロの目の前に、少女が降り立つ。

「当たり前だ。で、どうしたんだ？」

「お礼を言いに」

「……元々、お前がどれだけ成長したか見たくてな。中等科の4年生だっけか？」

「はい」

「俺が過去にさえいって無ければ、丁度、2歳違いだったのにな」
「そうですね」

ゼロはコーヒーを啜る。そして、続ける。

「学校は楽しいか？」

「はい」

「そうか。お前の笑ってる顔、もう少し、いっぱい見たかったのにな」

ゼロはそう言い、空を見上げる。

「綺麗ですね。星」

「ああ……。地球の方が結構いたから、地球の事の方が詳しいんだが……。こう、星を見ると、和むっていうかな」

「言葉では説明できない、なにかがあるんですよね」

「だな。そう言えば、あの夢見たか？」

「イングヴァルトの一番過酷で、悲しい夢……」

「そう。俺も見たんた。いつかは忘れたけどな」

ゼロはアインハルトの方を見て言う。

「アインハルト。お前がどう取っても構わないが、古代ベルカの戦争は終わったんだ。だから、その責をお前が負う必要はない」

「ですけど、私は…私は……」

アインハルトはそう言うと、黙り込んでしまう。その複雑な表情をしたアインハルトの顔を見たゼロは、言う。

「なら、俺も少し、考えてやってやる」

「え？」

アインハルトは、それを聞いた瞬間、ゼロを不思議な物でも見たかのように見る。

「だから、相談しろって事だ。なんでもさ。俺なら大丈夫だからさ。何時でも念話して来い」

「……………」

「なんだよ。その、不思議そうな物を見る目は」

「いや、昔の兄さんは、「アインハルトには、それを全部背負える素質があるから、頑張れ」って言ってましたから…」

「あの時は俺、覇王として覚醒してなかったからな。けど。今なら親身になってやれる。だから、そんな顔するな」

アインハルトにそうゼロは言う。それに少し涙を流してしまうアインハルト。見られたくないのか、顔を背けてしまう。

「アイン」

ゼロは少し、バカらしくなったのか、それとも、距離を置いているように思えたのか、そう呼び、抱き寄せる。

「今なら、誰も起きてないから」

「ありがとう……兄さん……」

そうして、アインハルトは瞳を閉じ、寝息を立てる。それを確認したゼロは、少しだけ涙を流す。

「……俺がこんなじゃなきゃ良かったのに……」

その涙は、自分の服にシミを作った……。



今日の担当

・ゼロ ・アインハルト

・祐輔 ・千里

ゼロ「さて、始めました♪ZEROの境界線♪」

祐輔「さて、今回はゼロの独り占めだったけど……」

千里「二回死ねっ!」

祐輔「ぐはっ!」

アインハルト（以下、アイン）「なんであんな仕打ちが?」

ゼロ「きつとあれだ。なんだかんだで、なのはの家に行ってたのが許せなかったんだろ?」

千里「そうよ! 私だって…その…」

祐輔「俺がなにしたのさ……」

千里「全部悪いのよ!」

ゼロ「人のコーナー荒らすな」

千里・祐輔『呼んだのアンタだろうが!』

アイン「まあ、二人とも、落ち着いて下さい」

ゼロ「じゃあ、おさらい」

アイン「なかなか、信じずらいのが現状」

ゼロ「だな。まあ、色々有るが、そんなもんだろ」

千里「完全にふざけてるわよね」

祐輔「あの局員は流石にないと思うよ…」

アイン「気にしたら負けだと思います…」

千里「ま。そうね」

ゼロ「じゃあ、次回予告でもするか」

ゼロ「いつものように訓練し、教導官のなのはの元へと集まるゼロ達」

祐輔「そこで、「皆頑張ってるので、今日は久々のお休みで〜す♪」と告げられる」

千里「ゼロはそこで、訓練をしようとするが…」

アイン「次回、一超本格的な休日。一明日の大空へ！」

一同『Drive ignition!!』

第7話―襲撃（ACT2）―（後書き）

さて、4章以降も続けようとは思いますが、これとはまた別ものです。つまり――察しの良い人は分かると思いますが、この続きではなく、別な作品として出すことになると思います。設定は後もう少しで出来そうなので、4章でも軽く伏線を張っておこうと思います。残り少ないですが、これからも宜しくお願いしますっ！

第8話 超本格的な休日（ACT. 1）（前書き）

遅れてすみませんっ！ ストック貯めましたっ！ 謝罪はこんな
ところで、どうぞ♪

第8話―超本格的な休日（ACT. 1）―

「オラァッ！」

「甘いっ！」

―閃！―

朝早く、皆が起きているとは思われるが、それでも五月蠅いほどの
撃音と眩しい閃光が駆け巡る。

「穿て！
スラッシュ・エア 風王之一閃！！」

―轟！―

その銘と共に放たれた風の一撃は、相手を貫く。

「まあ…今日はこんなもんだろ」

それを放った主。ゼロは嘆息したようにそう言い、笑顔を見せる。

「はあ。どうやってもアンタには勝てねえよ。スピリッツ分隊部隊
長さんよ」

「はつきり言うが、これでもすっごい不真面目だ」
「慰めになって無い！ それ！！」

その時、なのはから通信が入る。

「はい。スピリッツ1八神です」

「あ。繋がった。ゼロ君、今訓練止めて集合して？」

「了解した。今すぐ行く」

ゼロはそう言い、通信を切る。その後、地上に降り立ち、タクミ達を集める。

「とりあえず、召集かったから、お前等も一緒に来い」
『了解!』

相変わらず元気があってよろしい事。ゼロはそんな事を思いながら、手に持つ武器をクルクルと回しながら歩く。

「あ。ゼロ君」

「とりあえず、二人も連れてきた」

「うん。ありがとうね」

「じゃあ、俺はそこら辺に居るから、用があったら呼んでくれ」

「いや、ゼロ君も」

「何でだ？」

「それを説明する為の招集でしょ!」

「ああ。そんなんだ。じゃあ、ユウ。三行で簡潔に」

「無理♪」

「死んじまえ♪」

一撃!!—

「何故にイイイイイイ……」

ズッシャアアア! と豪快な音を立てて、滑って行く祐輔。それを満足そうに見つめて、嘆息するゼロ。

「で?」

「うんと……。皆の実力も上がってきたし、とりあえず、デバイスのメンテナンスも兼ねて、お休みにしようと思うんだ」

「そっか。なら、俺のデバイスは俺でやるから、FW陣はクラナガンにでも行って、ゆっくりしてろ。じゃあ、そう言う事で、自主練に戻るから、用があったら呼んでくれ」

「だ〜か〜ら〜！　そう言うこと言っていないで、フェイトちゃん達の相手もしてあげないと！」

「まあ、確かにそうなんだが……」

「だったら！」

「だが、これから戦う相手は少なくても、隙について好機を有効に使うタイプだ。俺より格が上のな。それに……もうあまり時間がないのも事実だ。クローンとしては良く生きた方だしな」

ゼロはそう言う。その顔に張り付いた表情はとても複雑であった。

恐怖……それは少し違う。

悲しみ……それも入り混じってる。

憎しみ………何かが違う。

嬉しさ………入っているのかすらわからない。むしろ、虚しさ。

そんな表情が張り付いていた。

そんな彼の手を握るなのもそれ相応に複雑であった。自分がクロインだと解った上で進む道。誰かを守りたいという思いで努力するのを否定する自分がいて、けれども、それをまた否定して……。双方、頭の中がごっちゃになっていた。

「とりあえず、今はこれから来る戦いに備えて、魔力を使わない戦いって言うのを慣れなきゃいけないから。二人に言うておいてくれないか？」

「うん……」

ゼロは少し気負いした表情で、その場を去る。

「：隊長が無理して死にでもしたらどうするつもりなんだろうね？」
「ホントだよな。ゼロ隊長、あれでも無理してないって言い張るつもりなんだろうぜ？」

「そうだろうね。これを止めるのも副隊長の役目だし、行ってくる」
「待って」

そんな祐輔をなのはが止める。

「言いたい事はわかるけど、あれが真実だったら、もっと楽しい事で埋めてあげないと。俺はアイツの弟だから、アイツの意思は俺が伝えてあげないと」

「けど……」

「：ま。それでもゼロは、止らないから、手を貸してよ」

祐輔はそう言うのと、なのはに笑顔を向ける。

「と言う訳で、俺等はゼロの説得行かないといけないから、FW陣は先に行ってて」

『はい！』

「良い返事♪」

祐輔はそんな返事に笑顔を見せ、なのはの方に向き直る。

「さて、通信でフェイト達を呼んで——」

「パイロシューター！！」

—撃！—

「……………」

「あの…これはすつごく大変な状況なのは…？」

「……………とりあえず、急いで呼んで。ここで良いから♪」

「…うん」
なのはは少し怖がっていた。祐輔の笑顔の裏には底知れぬ恐怖があったから。

「さて♪ 皆♪ 出動だよ♪」
『は～い♪』

そんな皆性格に合わない返事をして、具現化して、笑顔で立ち去る。やはり、その笑顔には恐怖があった。

「なんか…怖いよお……」

なのはは少しだけ、身震いし、フェイト達に通信を入れる。

「はい。フェイトです」

「なのはです♪ フェイトちゃん？ はやてちゃんと急いで来てくれる？」

「何で？」

「それはね——」

「約束された勝利の聖剣！^{エクスカリバー}！」

「ぐあああああああああああああああああ！！」

「撃ッ！！」

「……………うん。事情は解ったよ。はやてと一緒にすぐに行くから」
「ありがとう…………」

そう言い、なのはは通信を切る。その後、ヘナヘナと座り込んでしまった。

＊

時間は少しさかのぼり、祐輔となのはが話しているところまでさかのぼる。

「さて、来い！」

「本当に良いんだよなあ？」

「ああ」

ゼロと守護騎士たちは微笑交えながら構える。

「パイロシューター！！！」

「霸王…断空絶！」

一撃一

先ほど放たれた轟音の正体はこれ。ゼロは足を思いつきり地面に蹴り付け、それで吹き飛んだ破片を壁の代わりとして、防御をする。その後、跳躍。足場を作り、蹴り抜く。その瞬間。

「ゲートオブバビロン王の財宝！」

―刺！―

その言葉が聞こえた瞬間、大量に地面に刺さる武器。それを見た瞬間、ゼロはISを発動。敵の位置を特定する。

「そこか…」

—瞬—

降り立つ途中の体を無理やり方向転換させ、先程の攻撃の主に向かう。

「ゲイ・ボルク突き穿つ死翔の槍!!」

—閃—

一発入れようと思ったゼロだが、その攻撃によって阻まれてしまう。その主を発見して追撃しようと思ったゼロだが、そこまで馬鹿ではない。次に来る攻撃を予想して、武器だらけの地面に降り立つ。

「フルンテイング赤原獵犬!」

読まれたっ!? ゼロはそう咄嗟に判断して、傍らにあった剣をそちらに飛ばし、動きを止めさせる。

石原獵犬、その名の通り、敵を追尾して、撃破することが目的のこの一撃だからこそ、この様な行動をとったのだが…。

「ベルレフオーン騎英の手綱!」

その声が聞こえた瞬間、ゼロは腕を十字に重ねて、防御をする。だが、幾らなんでも、対軍兵器を相手に肉体だけで防御するのはさすがに不可能。だから、物の秩序で…。

—撃!—

「ぬう！」

吹き飛ぶ。ゼロは軽く錐揉み回転しながら、体勢を立て直した瞬間。

ストライク・エア
「風王鉄槌」

一撃！—

ここでゼロは気付いた。これは…祐輔の…。

エクス
「約束された——」

祐輔の…策略であると…！

カリバー
「勝利の聖剣！！」

「ぐああああああああああああああああああ！！」

—撃ッ！！—

これこそが、先程の衝撃の一部始終なのであった……。

＊

「離せ！ 祐輔！」

「イヤだね！ 幾らゼロの頼みでもここだけは引かない！」

「なんでだよ！」

「無茶しすぎだからだよ！ 見てみなよ！ あの二人の顔！」

祐輔が差すその場所には、なのはとフェイトとはやてがいた。

「あの三人がどんな想いでお前を見てきたと思ってるの？」

「無茶してる…か…けどな。俺はお前等を守りたいと思ってるからこそその行動だ」

「ゼロ。無茶すると、いつかのな——」

「わかってる。けど、止ってる方が怖いんだよ。俺にとっては」

そう言って、複雑そうな表情をする。何かを遠ざけている瞳。それのお国は先程見せた混純の瞳がある。

「ゼロ…」

祐輔が言葉に詰まる。それを見かねたフェイトがゼロの手を掴み、言う。

「ゼロ？ 休みは大切だよ？ その…邪神事件の時から、全然休み取って無いよね？ だから……」

「だが——」

ゼロは言い返そうと思ったが、痺れを切らしたはやてが叫ぶ。

「ああっ！ もう面倒な！ もう、今日は休みや！」

「だが……」

「駄目なん？ そんなに私等といたくないん？」

言い返せねえ！ ゼロは心の中で叫んだ。なんせ、はやては涙目＋上目遣いでこちらを見ていたのだから…。言い返せるわけがない。と言うより、言い返したら、死よりも恐ろしい制裁が待っていると見える……。

「……まあ、お前等の言うとおりでな。少し、焦りすぎたのかもし

れんな」

「じゃあ……」

「ああ。今日は楽しむとするか」

ゼロはそう言い、空を見上げる。そして、ため息一つし、頭を降ろし、二人に言う。

―行くか♪―

と。笑顔で。何事もなかったように。だけれど、何かに警戒しながら。そんな瞳をしていた。そして、三人で歩いて行くところを見つめ、残った二人は一息つく。

「やっと行った……」

「そうだね」

祐輔は嘆息し、なのはは苦笑いする。

「さあ、俺も出かけてくるかな？」

「何処に？」

「んゝ。どっかだな。久し振りに、アルトリア達と食事に行こうかなって思っただけど……」

祐輔はそう言い、なのはの顔を見る。その顔は何か言いたげそうだった。

「どうしたの？ 何か言いたそうだけど？ 俺なら聞くけど？」

「あ、いや…その…」

「？」

なのはが言いだせなくて、頭に“？”を浮かべている祐輔。そんな時に念話が入った。

（祐輔。なのはは祐輔と一緒に休みを過ごしたいのだと思います）
（休みを？）

アルトリアの念話にさらに“？”を浮かべて返す。

（大将……やっぱ、鈍感だな……）

（何でそうなのさ……）

（そりゃそうだろう。第一、なのはは結構抱え込む性だろう？ だから、聞いてやるとかすれ）

（けど、アルトリア達の休みが――）

（俺達は良い。祐輔。まずはなのは嬢の疲れをほぐすのが先だろう）
（それもそっか）

祐輔はそこで念話を切り、ため息を一つつき、なのはの方を向く。

「じゃあ、出掛けよっか？」

「え？」

「早くしないと、お昼になっちゃうよ？」

祐輔はなのはの手を取り、歩き出す。その時、なのはの顔は真っ赤であった。

＊

暗い部屋で響くコンソールの音。デュノアが操作していた。

「……見つけた……。奴の記録……」

その画面にはゼロの能力情報が記されていた…。

「…分析すれば、戦うこともできる…。基本的な能力が低い俺でも…。」

その画面を見て、不敵に笑った…。

N E X T S T A G E , ,

第8話 超本格的な休日 (ACT. 2) —

「じゃあ、何処に行こっか？」

「そうだな……。じゃあ、遊園——」

「ゼロさん！　ちよいカモン！」

「……ちよっとは空気読みやがれよ……。♪」

言葉を途中でタクミに阻まれ、機嫌を損ねたゼロは拳を構えながら、一歩ずつ近づく。

「待った、待った！」

「待たない♪」

「いや……良い情報ですって！」

「良い情報？」

ゼロはその言葉で、足を止める。

「そう！　今日、祐輔副隊長となのは隊長がデートするんですけど……って、痛っ！」

タクミは頭を押さえてうずくまる。ゼロは拳を振り抜いた形で立っていた。

「下らん。ユウの好きなようにさせてやれ」

「だけどよ」

「……そうだ。六課には任務の依頼が来てたんだった。ここは元帥権限で——」

「分かりましたっ！　おやめ下さいっ！」

「という冗談だ」

「何なんだよッ！ 結局！」

「まあ、頑張れよ」

ゼロはそう手をひらひらと振ると、戻って行く。

「お待たせ」

「何話してたんや？」

「タクミがユウとなのはがデートするから尾行しないか？ って」

「面白そうやないか♪」

「はやて。お前は、そうやって思うから、皆に狸くって、言われんだぞ？」

ゼロは嘆息交じりにはやてにそう言う。はやてはそれにむすつとし、言う。

「ゼロだけやないか。そんなの言うの」

「そうか？」

「そうや。全く。尾行する気も萎えたわ」

「それは何より♪」

「狙とったなっ！ 私がそんなことになるだろうと思っていたんやなー！！」

「御名答♪」

「あのさ……。二人とも……」

そんな2人の茶番を見ていたフェイトが話しかける。

「あ。すまん。で、何処行こうか？」

「今だったら、何処も混んでるやろ。ゼロの好きなところでええよ？」

「私も」

はやてがそう言い、フェイトもそれに賛成する。

「なら、少しやりたい事があるんだ。いいか？」

「ええよ」

「なら、はぐれんなよ？」

『はぐれる…？』

「来てみれば分かる」

ゼロはそう言うと、歩き出し、フェイト達はその後を追って行く。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

「まさか…スラム街に来るなんてね……」

「いや、バスケットボールやりたくなってよ」

「かと言って、お金かけるって……」

「別に、100点差つけてんだからいいだろ」

「いいんだけどさ……」

フェイトとはやては同時にため息をつく。つまり、賭け金をかけて、それで勝った方がそれを貰うというものをやっていたのだ。現在、100-0。相手はかなり涙目になっている。ダンク、レイアップ、フリースロー…全て防いで、逆にゼロは有り得ないシュートでかなり点数を稼いでいるのだ。無理もない。

「さあ、ラスト3分。せめて一本決めてくれよっと」

ゼロはボールをパスし、返して貰ったボールを捕り、ドリブルを始

める。一人がゼロの前に立ちふさがるが、ゼロは体勢を低くし、右によける。その後、また一人が来るが、今度は逆に体勢を高くし、ボールを背中側に回してかわし、最後の一人。これはかわしはせずにシュートの体勢を取り、放つその瞬間。

—ズキッ……—

「ぐ……」

身に覚えのない痛みと共に、少しだけ、シュートコースがずれるがその軌道はリングの方へと向かい、入った。その時、丁度笛が鳴り、試合が終わったと同時に。ゼロは膝をつき、咽る。

『ゼロ!?!』

フェイトとはやてはすぐに駆けより、ゼロの背中をさする。

「大丈夫だ……。二人とも」

「けど…」

「俺はそんな事じゃ倒れねえよ」

「そうじゃなくて、血が……」

「血？」

ゼロは口を押さえていた自分の右手を見る。そこには吐血した際に張り付いた血があった。

「どうってことないさ。この位」

「この位って…ゼロ……!!」

「いいんだ。本当に。そう吐血量は多くないし、すぐに治る」

ゼロはそう言うと、先程の対戦者から、勝利金を渡されるが、ゼロは「ただやりたかったただだからいらない」と言い、フェイト達を連れ、その場を立ち去った。

— — — — —
— — — — —

一方、今、デートを楽しんでいるであろう、ユウとなのは……。

「ごめんね。遅くなっちゃった」

「大丈夫。女の子の身支度は時間がかかるもんね」

と笑顔で話していた。ユウはなかなか女の子の扱いに慣れている様だ。ちなみに、今いるのはクラナガン。ミッドの首都だ。

「さて、何処いこっか？」

「そうだねえ。じゃあ、まずはお昼時だし、お茶でもする？」

「そうしようか」

なのはとユウは歩き出す。丁度同じ足幅で、周りの人から見れば、歴戦のエース・オブ・エースと英霊を総べる元帥がデートしていると、いう凄い組み合わせで驚いていることだろう。だが、当人たちは、鈍いので、ただ、休みを一緒に過ごしているだけの友達——程度にしか、とらえていない。

「あのさ。ユウ君？」

「何？ なのは」

「えいっ♪」

そう言うと、なのはは祐輔の腕にしがみつく。千里に見られたら、

間違はなく殺されてしまうだろう。この様子。

「な、なのは？」

「どうしたの？」

「いや、その、胸が…」

「あ。ごめん。駄目だった？」

「いや、そう言う事じゃなくて…」

祐輔は顔を真っ赤にして言う。というか、ドギマギしてて、見てられないカップルで御座います。

「……？」

「もう、いいや。折れたよ。千里がこの様子見て、殺されるのも覚悟したからもう良い。好きな様にして」

「うん♪」

なのははそう言われて、凄くご満悦だが、ユウはなのははこうだからいいんだよね…。体とかじゃなくて、心がまっすぐだから。とか考えていた。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

また場所は戻って、ゼロ達の様子。今、スラム街を出て、クラナガンの裏の方の通りを歩いていた。

「へえー。こんなところあったんやー」

「涼しいだろ？ よく来てたんだよ。何時か忘れちゃったけど、俺のお気に入りだった」

「そうなんだ。いい所だね」

「だろ♪」

ゼロは笑って言うが、その表情は少し寂しげ。けれども、彼は続ける。

「一回だけでも良いから、連れて来てみたかったんだ。俺が落ち着ける場所にな。確か、ここは桜みたいな花が咲く場所だったし」

「桜？ ミッドには咲かないはずだけど……」

「違って。何て言ったかな……。忘れたけど、夏は星が綺麗だし、秋は葉が散る頃で、丁度紅葉が見えるし」

「そうなんだ。その時になったら、また…三人で来よう？」

「来れば…な」

ゼロは少し、苦笑いをし、そう言う。若干、分かっていたのだ。自分の命が残り少ない事は。それでも、少しでも長く居たいという気持ちがあるから、この様な事になっているのだ。

「来ればとか、生きていたらとか、そんな観点で物事見たらあかんって」

はやてがそれを聞いて、言う。嘆息交じりのすっごく呆れた声で。

「今は、生きてるんやから、マイナス思考になったら…あかんよ？」

「それもそうだな」

ゼロは軽く嘆息し、時計を見る。いつの間にか、お昼の時刻を回っていた様だ。

「じゃあ、そろそろ昼時だし、何か食べるか？」

「そうだね。何食べよっか」

「外食なのは決まりとして……」

ゼロはそう言い、歩き出した瞬間に、なにかが引っ掛かるような感触を覚える。

「なんだ……？」

「どうしたの？」

ゼロが足を止めるとフェイトがゼロの方を見て言う。

「少しだけ…魔力が感じられる」

「魔力？」

「ああ……。しかも…。憎しみ？」

「……。もしかして、左目が反応してるんか？」

「とりあえずな。IS凍結されてるからなのかな」

「今、管理局に確認したら、ミッドの何処かに研究施設があるって」

フェイトがそう言う。ゼロは苦い顔をして言う。

「……………。行かなきゃ駄目か……」

「ゼロ？」

はやては聞き、ゼロの顔を覗き込む。

「あ。すまん。すぐ戻ってくるから…そうだな…。丁度その突きあたりになるのは達が通るだろうから、頼む」

「でも……」

「せやな。ここはゼロに任すわ」

「はやて!？」

反論するフェイトを差し置いて、はやては言う。

「フェイトちゃん。さっき私も確認したんやけど、結構大きいよ？
この件は。だから…任せよう？ デバイスも置いてきちゃったし」
「私にはバルディッシュが……！」

フェイトはポケットから出そうと思ったが、生憎、なかった。

「ないやろ？ だから、魔力だけで戦うんやったら、ゼロの方が適任。ここは……ね？」

「……腑に落ちないけど」

「なら、行こう？」

「うん。ゼロ、無理だけはしないでね？」

「ああ」

ゼロがそう答えると、二人は立ち去る。彼は適当な壁に手を当て、
空気の振動を掴み取る。

「丁度…。この下か……」

ゼロはそう直感的に察知し、地面を見る。

「また懐がすっからかんになるな……っ！」

彼は思いっきり地面を蹴る。だが、変化はなかった。

「…さすがミッドチルダ。こういうところもしっかりしてんなあ…
…」

嘆息するゼロ。とりあえず、ランサーを飛ばし、侵入口を探しながら

ら、転送魔法を試してみるが、それも駄目。何処かにAMFが張られているみたいで、しかも強力。

「じゃあない。探すか」

ゼロは歩き始めた直後、ランサーが消えた反応をキャッチする。

「そっちか…」

ゼロは走り出し、その場所へとつく。

「ここか…」

ゼロはその場所を中心とした計算式を描く。

「やっぱ…こんな面倒な方法じゃなきゃ駄目だなあゝっと、よし」

ゼロはそれを書き終えると、懐からライターを取り出し、火をつけ、投げ捨てる。

「3…2…1…ドカーン♪」

一撃ッ！！！！—

それに見合わない大きさの音が響き、辺りは煙に包まれる。

「ゴホッゴホッ……。計算式、やりすぎだな…」

ゼロは煙を払うように手を振り、爆破した場所を見る。そこには、鉄製のハッチの様な物があった。

「みいっつけ♪ さあ、突入するか♪」

ゼロは懷から、本当は持つてはいけないはずの拳銃とサブマシンガンを転移させ、右手にサブマシンガン、左手には拳銃を持ち、ハッチをこじ開け、突入した……。



君をくぶっ生き返す♪

今日の担当

・ゼロ ・フェイト
・はやて

ゼロ「皆さん、今回もやってまいりました♪ゲストが少なくしてしょんぼり。ZEROの境界線♪」

フェイト「今回、休み…なんだよね？」

はやて「そこは…StSの機動六課の休日と同じ流れや」

ゼロ「まあ、そう言うことらしいな。さて、今回のおさらい」

フェイト「休み…？ いや、休みだよ」

はやて「って事で♪」

ゼロ「さて、KIZUNA……。そろそろ終わりに近づいてるな。どう動かすんだよ？」

ZERO「ん。そうだねえ……。望まない方向に向かわせるよ」

ゼロ「おいおい…大丈夫かよ……」

はやて「大丈夫やろ」

フェイト「うん…多分ね」

ゼロ「多分というのは凄く不安だな……」

フェイト「じゃあ、次回予告だね」

ゼロ「研究施設に突入する俺」

フェイト「そこには、生きている人の影なんという者はなく……」
はやて「少年と少女がいるだけだった……」

ゼロ「次回、一超本格的な休日（其の参）一明日の大空へ！」

一同『DRIVE IGNITION!』

第8話ー超本格的な休日（ACT・2）ー（後書き）

少し遅れました…。クロスリレーが文字数大爆発だったもんで…。
それでは、どうぞ♪

第8話―超本格的な休日（ACT. 3）―（前書き）

すみませんっ。おそくなりましたっ！ ちょっと、文字数かさんで：WWWW けど、ポリュームはでたと思われます♪ では、どうぞ♪

第8話―超本格的な休日（ACT・3）―

「すまん。バルディッシュ」

〈大丈夫です。ゼロ〉

ゼロは施設内をゆっくりと歩きながら、そう言う。かなり薄暗く、目視するのがやっとという場所を隅々まで見渡しながら。

「生憎、フェイトには来て欲しくなくてな。実弾銃使った事は内緒にしておいてくれよ？」

〈……どうしましょうかね？〉

ゼロがばれて欲しくなくてそう言うのと、バルディッシュは何処か意地のわるそうな……いや、確信犯の様な感じで言ってきた。

「頼む。いや、ばれたら、フェイトとはやてとなのはが怖いから」

〈よし。言いましょう〉

ゼロがそう頼み込むが、バルディッシュは無視って、言う素振りと録音装置を起動させる。それを拙いと思ったゼロが、バルディッシュを目の前に置き、思いつきり土下座する。

「やめて下さい。本当をお願いします」

〈プライドというのが微塵もないですね〉

バルディッシュにそう貶されるが、ゼロは気にせず立ち上がり、また歩き出す。まあ、バルディッシュは後で返すつもりだったのだが、実はこの施設、魔法が全く使えない！ つまり、転送魔法が使えないから、返せない！ と言う訳で、この状況にあるのである。

「はあゝ。ついてねえ……」

ゼロはそう言い、歩き続ける。が、その時、なにかに気づき、素早く物陰に隠れる。そうして、気配があった向こう側を見る。

「今、何か物音がしなかったか？」

「さあ？」

話し声が聞こえる。決して、ゼロとバルディッシュの声ではない。ゼロがISを起動してみると、そこには警備していると思われる人物が二人いた。

「……見張り付きか」

〈どうするんですか？〉

ゼロはそう言う。少し、疲れている感じなので……。ゼロは右手に持っている銃の弾薬がまだある事を確認して、こう言う。

「強行突破するか……」

〈問題ありすぎでしょう〉

ゼロの提案にバルディッシュはツツコミを入れ、ぶった切る。だが、ゼロは隠し持っていた、機関銃を左手に持ち、安全装置を解除した。そして、息を大きく吸い、言う。

「なら、しょうがない。突破するぞ！」

〈某音〇みたく言わないで下さい〉

ゼロはそう言うと、物陰から、飛び出し、機関銃を発砲。それに

気付いた警備員も安全装置を外す。

その間にも、ゼロは機関銃を発砲しながら突進していく。

「侵入者か！」

一射撃射撃射撃――

そして、発砲。ゼロは回避はせずに、弾丸を全て弾丸で当てるという技をして、突進していたが、機関銃の弾が切れ、ゼロの体を一発の弾丸がかする。

「チッ！」

ゼロは降り注ぐ弾丸の雨の中を構わず、突っ切る。その内、弾丸の起動が読めるようになって、体を屈めて、思いつき足を踏み込み跳躍する。当然。ゼロは隙だらけになるから、警備員は無防備な空中を狙うが……。

「当たらない！？」

「どういう事だ！？」

と考えるのも当たり前。銃弾を受けた跡がないからなのだから。そうこうしている内に、着地し、左足に思いつき力を込める。

「はぁッ！」

一弾！――

一人の銃を蹴りとばし、もう一人はゼロに砲身を向けるが、ゼロは左に持つ拳銃を向け、こう言う。

「LOCK ON heaven's door（天国への目標視認）」

「は……？」

一射！一

銃声。ゼロは瞬間的に警備員の後ろ側に回り込んで、引き金を引き、こめかみを貫いた。というより、正規の管理員がこんな事しているのだろうか？ と激しく疑問なのだが、ゼロは気にせず続ける。

へだから、伏せ字が必要な表現は避けるようにお願いします」

バルディッシュはゼロが警備員を一通り始末し終えてからそう言う。ゼロは全く気にせず肩を回しながら言う。

「分かってるよ。さて、行くk——」

「ゼロさ——ん！」

と、何処かから、ゼロを呼ぶ声。ゼロの動きが固まり、脂汗の様な物が体中から湧き出る。どのタイミングでゼロを呼んだ……と言うか見たのか、見当もつかなかったから。

「……俺、誰かに見られてた？」

「知りませんよ」

バルディッシュ、やけに冷たいな……。そうゼロは思いながら、ギギギ……と、振り向く。そこには、青髪少女^{スバル}と橙髪少女^{ティアナ}がいた。

「ゼロさん、こんなところで何してるんですか？」

「そ、それは……」

スバルに聞かれて、さらに加速する焦り！ 拙い！ 非常に拙い状況だっ！！ ゼロはそう思考し、もう、脂汗ではなく、冷や汗となり、それをかなり掻いていた。

「ゼロさん、まさか……」

「違う！ 断じて違うっ！ ただ、気になったから、好奇心で。とか、そんなんじゃないからな！？」

ティアナに聞かれ、ゼロは焦り、そう叫び声になりつつ、言い訳をする。だが……。

「そんな理由でなんですね」

「あ……」

『……………』

ゼロがそう声を出すと、周りは静寂に包まれる。彼は結局、自分にとっての大きな墓穴を掘り、肩を落とす羽目になった。

〈……はぁ〉

「ため息吐くなっ！ 俺だって、早く帰りてえんだよっ！」

バルディッシュに思いつきり八つ当たり気味のツツコミを入れる。なら、何故ここにっ！？ と二人のツツコミはハモってしまった。

「とりあえず。二人はこの事内緒で、回れ右して、直進しろ」

ゼロは落ち着きを取り戻し、二人にそう言う。二人は頷き、返事をする―――。

「分かりまし――」

『侵入者だーっ!』

「――という訳にもいかないですね」

「なんつう分の悪い……」

返事をする前に、警備員の声が聞こえた。其の後、ティアナがそう言い、ゼロが頭を抱えている内に囲まれてしまう。少女二人は手を上げ、ゼロはそのままの体勢で聞く。

「武器を捨てて、手を上げろ!」

「断る」

警備員の言葉をゼロは真顔でそう言い、ぶった切った。

「貴様っ! 撃つぞ!」

「ちよっと、ゼロさん……」

その時、スバルがそれを止めさせようと言うが。ゼロは気にせず続ける。ちゃんと勝算があるから、そのような態度で。ちゃんと打開できるからこそ、言える言葉を言い放つ。

「撃てばいいじゃねえか」

依然挑戦的な態度。もちろん、見栄を張っているだけ友向こうには取れる。挑発、である。警備員は少し後ろの方に下がる。ゼロはそのままの態度で言う。

「どうした? 撃てよ?」

「言われなくても!」

そして、安全装置を解除して引き金を引く瞬間、ゼロは念話をする。少女二人に。その瞬間。ゼロは呪符を三枚懐から引き出す。

（返信しないでいい！ 全力でしゃがめ！）

それを聞くと同時。スバルとティアナはしゃがみ、ゼロは即席の呪符の一枚を地面に叩きつける。

「撃て！！」

一射射射射射！！

一弾弾弾弾弾！！

放たれる砲撃の雨。ゼロはスバルとティアナに呪符を張り付け、外に転移させた。その間も防御は依然として破られていない。少し魔力を使いすぎて、疲れているので、ゼロは息を整える。

〈世話焼きは自分を殺しますよ？〉

「言えるな。さて、一気に行くとするか。バルディッシュ」

〈マスター意外にその呼び方をされるのは癪ですが、この際です〉

「意外とお前の口は悪いな……」

〈元々です〉

嘘つけっ！ とゼロは心の中で叫ぶ。というより、確実に悪くなっている。フェイトがいない間に、ゼロの悪口言いまくっている。

「さて、行きますか」

ゼロは呪符を剥がす。それと同時に、「砲撃止めっ！」と声が掛かる。ゼロはニヤリと笑い、銃を発砲する。それは確実に相手の武装を剥がす攻撃だった。

一撃撃撃撃撃――

「何っ!？」

「油断大敵、だぜ？」

防人の一人がそう驚きの声を上げると同時、彼の武装も木端微塵に砕け散り、ゼロはおもしろくなさそうに武器の残骸を見る。

「本当。こういう施設は、ぶっ壊したくなるよな」

ゼロは防人の一人の腹に銃をえぐり込ませ、放った。力なく寄り掛かり、ゼロはそれを放っておいて、先に進んだ。

〈傍から見れば、悪役ですね〉

「それは、否定できんな……」

ゼロは苦笑いとも、呆れたともいえる表情をし、先に進む。と、その時、突きあたるようなものが見えた。

「壁……。いや……」

ゼロはゆっくりと壁を押す。

「扉だな」

〈隠し扉ですか。古典的です〉

「まあ、確かにな。けど、結構俺なら使うな」

と、そう言い、足を踏み入れた瞬間。

—ピチャ……—

「!!」

ゼロはその音を聞いて、足をすぐ引く。

〈どうしたんですか?〉

「水の音がしてよ。ちよっと、躊躇しただけだと思うが……。まあ、念を入れるに越したことはないな」

ゼロはそう言うと、警備員の一人から、銃をとり、通路の奥へ投げる。なにかが滑る音がして、沈む音はしなかった。

〈大丈夫な様ですね〉

「だな。ライト……とか、ある訳ないよなあ……」

〈私になりますようか?〉

「出来るのか?」

〈一応は〉

「わかった。なら、少しだけお願いできるか?」

〈了解〉

バルディッシュはそう答えると、ライトとなる。ゼロはそれで辺りを照らしだす。

「う……」

ゼロは思わずそのような声を漏らしてしまう。というより、そうじ

やなければ、鬼畜である。

〈血、ですか〉

「ああ……しかも」

ゼロは別な場所を照らし出す。そこにはかなりの量の血が、こびり付いていた。一見すると、気色悪いが、ゼロからすれば、少し、悲しい光景。

「どうして…なんだろうな」

ゼロは非常に悲しみの感情が濃く表れた表情で、そう言う。そして、少し、足を進める。

「銃撃、斬撃……。それが主か……。研究が終わって、管理局に知られる事を恐れたか……」

〈どちらにせよ、タチが悪いですね〉

バルディッシュがそういう中、進んで行くゼロ。この様な惨劇を目撃したうえで、真意を見なくてはいけないからだ。その時、

「く…増援はまだか！」

「まだです！ 持ちこたえてください！」

「もう持たん…ぎゃああ!!」

— 撃撃 —

先程まで聞こえなかった銃声と声が聞こえる。聞きたくもない悲鳴が、耳に入る。

「隊長!……うわあ!!」

そして、また一人倒れる音。少し、ゼロは思う。困ったな……。と。第一、結構な数の敵がいるらしく、ちよつと、出るのを戸惑ってしまふほど。そんな事態に、非常に顔を歪ませながら、物陰に隠れる。

「はあ。困ったな……」

〈ゼロ、今魔力反応が出ました〉

「マジか? こんな、体すら重いAMF下なのか?」
〈そうです〉

ゼロは自分で分かっているながら、どれだけ企画外だよ……。と、思う……って言うか、もう、諦め見たくなっていました。

「とりあえず、ゆっくり行くか」
〈そうですね〉

そうして、一機と一人は歩き出す。この事態を誰が起こしているか、見届けるために。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

「ゼロ、大丈夫かなあ……?」

と、フェイトが祐輔達の前で呟く。まあ、なのはもそれは心配しているが、祐輔はいたって平常に

「大丈夫だよ。フェイト」

「けど……」

「まあ、何時も無理してるし、ゼロ自身、無事な感じで帰ってくるでしょ」

「けど、心配なんだよね。さっき、スラム街に行ったんだけど、そこで吐血して……」

フェイトがそう言ったのに少し驚く祐輔。けれど、すぐに笑顔で

「ちょっとした、体調不良だよ。無理しすぎて、休養に体が慣れてないだけ」

「そうかな…？」

「そうだよ」

祐輔はそう言い、紅茶を啜る。ちなみに、今祐輔達がいる場所はミッドではかなり有名な喫茶店。

「まあ、結構無理してて、休みは必要だと思うけど……」

「休みじゃないよね、ゼロ君の場合」

『はあ』

4人は一氣にため息を吐く。

「けど、楽しんでる様でなによりだよ」

「そうだね」

「でも、私達にも解らへん事をゼロは何で分かったんやろうな？」

「勘……だと思うよね」

「だよね……」

『はあ』

そして、二度目のため息。てか、あんまり溜息していると、しわが増

えるぞ……。

「こら。作者」

すまん。まあ、そんなこんなで、祐輔達は楽しく過ごしていた……。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

「何かが来るな……」

少年……。というには少し大きい。大体、身長は戦闘形態のアインハルトと同じ。そんな奴が血の海の中に佇んでいた。少年の左腕には、機関銃が握られており、髪と服は血で濡れている。もちろんここは実験室な訳で、それ相応のぼろっつい服しか置いて無いのだが。そんな少年に、一人の男が近づいていた。その男の左腕には、同じように機関銃が握られており、違うのは、先程倒したような軍服ではなく、何処かに居る様な探偵の恰好をした男な事。

「成程な……。全部お前か」

「俺を殺す気か？」

「違う。少なくとも」

「そうかよ。なら、ここからさっさと立ち去りな」

「それは出来ないな」

「だったら……。殺すぞ？」

少年は銃を構え、右腕を引く。ゼロはこの状況で非常に見当違いなことを考えていた。まだ、幼いし、あの構え……。俺がもうちょっと、矯正すれば、良いトップになるな……。と。つうか、戦闘中に

何考えてんだよ……。

「覚悟はできてんだな？」

「ああ。出来る」

「なら、行くぞ！」

一瞬一

そして、視界から少年が消える。ゼロは一瞬探そうと思うが、その思考の暇すら……。

一撃撃撃撃射射射！一

「ぐ……ハッ……」

その暇すら、相手にとっては十分の隙だった。今、何が起こったのすら分からず、ゼロは血だまりに沈んで行く。少年は、そんな彼の頭を引っ掴み、腹に銃を突きつける。

「どうした？ お前は歪めるんだろう？ 生きるんだろう？ どうなんだ？ ええ？」

ゼロは言い返さない。いや、痛みでそれどころではなかった。“辛さ”。それだけが先行して、思考自体も、単純になってきていた。

「歪めろよ？ 言葉のままに……」

少年はゼロを蹴り上げ、壁に固定。その後、銃を構える。狙うは……頭。

「歪めて見せろよッ!!」

一射射射射射射射射射射!!――

少年は手に持つ機関銃の引き金を引く。ゼロはそれを受け煙に包まれる……。

「その程度かよッ! お前って奴はッ!!」

「ああ。その程度さ……」

「!!」

少年は驚く。煙は晴れなくとも、その状況は分かる。その場所から、血が滴っている位だ。相当大的な傷を持っていると断定した……。というより、実際。それしかなかった。すべて命中したのか、頭には結構な傷を負っている。ゼロはバインドを渾身の力を込めて破り、降り立つ。

「しかし、驚いたな……」

「何がだよ。ANGELの一員さんよ?」

「エンジェル? 天使かなんか? 悪いけど、俺はそんなんじゃないぞ?」

本当に何も知らないゼロはそう言い、首を傾げるが、少年は銃を降ろさず、さらに力を込めて言う。

「とぼけやがって……!」

「とぼけてないさ。俺は、何時だって真面目……だといいなあ」

「なんだよ……それ……」

ゼロのそんな言葉に、少年は少し力を弱める。と言うより、本当な

のだ。何時だって真面目じゃない。嘘をつくときは大抵笑顔だし、何より、無茶をしないっていた時はその逆なのだから。

「しかし、お前も立派だな。今自分の事で手一杯なのに、守ってやるなんてな」

「近付いたら……殺すぞ？」

そう言い、銃をゼロの頭へと標準を付けて構える。

「大丈夫だ。俺はそんなことしない。ただよ」

ゼロは手で、額を拭い、弾丸を取り出してから、言う。

「良く、頑張った。こんな辛い状況の中で。二人ともな」

そう、笑顔で言う。誰が見ても分かる酷い笑顔で。瞬間、少年から、雫が落ちる。

「これは……なんだ？」

「涙を見た事がないのか？」

ゼロは笑顔のまま、そう尋ねる。少年はそれが分からず、首を傾げる。

「ナミ……ダ……？」

「ああ。嬉しい時、悲しい時、安心した時、痛かった時……。そんな時に出るのが涙だ」

ゼロはそう説明し、少年は、拳を強く握りしめる。

「なんでだよ……！ 俺は嬉しくとも何ともないのによ……！」
「違うさ」

ゼロは首を振り、少年は叫ぶ。それを認めたくなくて。敵として眼前に立っているソイツを。否、そいつだからこそ、認めてほ九なかったから。力の限りに叫ぶ。

「違うくない！」

「それこそ違う。今、褒めて貰って嬉しいって感じただろう？ だからさ」

ゼロは少年に近づき、そっと抱き締める。そうして、ゼロは優しい表情になり、目を閉じる。

「だからよ。俺がお前等の幸せを……。俺達の幸せを……。教えてやる」

ゼロがそう言うと、少年は少し情けない様な顔になる。というより、正直。その通りで、認めてしまったから。思い切り泣きたいから。少年は聞く。

「俺達は……生きててもいいのか……？」

「ああ。生きる事が権利。生きる事が運命。生きる事が幸せなんだから」

「ありがとう……」

少年はそう言うと、崩れ落ちる。ゼロがそれを受け止めた瞬間、結構小さくなった。てか、本当に子供だな。おい。とか、ゼロは考えていた。とりあえず、ゼロは少年の隣に腰を落とす。

「そこにいる……名前が分からんな。とりあえず、出てきたら？」

ゼロがそう優しく言うと、何処となく、フェイトに似た感じの少女が出てきた。てか、フェイトなんじゃないかと思っ、ゼロは一瞬焦った。こうして暗闇が見えるのも、ISのお陰で、本当にそうかは知る処ではないが。

「何もしないから、こいつの様子でも見たら？」

「うん」

そう短く答えると、少年の隣に座る。安らかな寝顔で、少女は少し安心した見たいで、ゼロは嘆息する。その後、彼は話をする。

「守って貰ってたんだろう？」

「うん。あなたは？」

性格はルールーに似ていると思いつつ、言う。

「守る事はあったけど、守られるって事があまりないな」

「そうなんだ。……気持ち良さそうだ」

少女は少年の顔をのぞき、寝息を立てているところを見て、そう思う。

「そうだな……。ここ、出るか？」

「いいの？」

少女は聞く。ずっとここにいて、外に出る事がなかっただろうか。少し怖がっている。それを解してあげるために、ゼロは少女の肩を掴んで言う。

「見られたって、俺が守ってやる。目は慣れるまで閉じておいた方がいいかもな」

「どういう事？」

少女は首を可愛く傾げる。ゼロは笑顔を作り、言う。そう。少女が知っているであろう言葉で、少年が知っているであろう言葉。けれど、どちらも見た事のないだろうその言葉。

「光、ここにはないだろう？」

「あ……………」

少女はそれに気づき、声を上げる。ゼロはそれを見て、さらに補足の言葉として続ける。

「それだったら、目を潰しちゃうかもしれないから閉じておけて事。わかった？」

「うん」

そう言うと、ゼロは少年を背中に、少女は手を繋ぎ、外を出た……。

第8話―超本格的な休日（ACT. 4）―

「うおっ！眩しっ！」

ゼロは、少し驚き、目を隠してそう言う。それを後ろから見ている少女がおっかなびっくりで、出てくる。少女は出てきたときには目を隠していた。

「ああ。どんだけ暗かったんだよ……。おかげで涙が出るじゃねえか……。くそ」

ゼロは眼をこすりながら、そう言って、空を見る。眩しい太陽。まあ、日陰もある訳で、ゼロは少女を連れて日陰のベンチへと連れて行った。そして、ゼロは話しかける。

「何時からあそこにいたんだ？」

「分からない」

少女は、そう言い、首を振る。ゼロはそれが少し気になり、質問する。

「何で分からないんだ？」

そう。なぜ分からないかは、それなりの理由があると思ったから。そう聞いた。

「私が物心ついた時には、もうあそこだったもの。あんな暗い場所で、他にもたくさんいたけど、生き残ったのは私達だけ」

そう、少し…いや、かなり暗い顔でそう言う。ゼロはそれに少し苦い顔をする。

あそこで、どれだけの人が殺されてきたのだろうか？ そう思うと胸が苦しくなり、あの血の跡も納得してしまう自分がいるからだ。

「そっか……。そういえばさ。さっきから俺が背負っているコイツがANGELって、言ってたけど、何かの組織の名前？」

そう聞く。少年がANGELと言い、ゼロがとぼけたと思った。それで攻撃を仕掛けた。この質問で其の謎がはつきりする。

「うん。あそこで、私達を管理していたのはANGEL。管理局がどうか言ってたけど、良く分からない」

少女はそう答え、ゼロの顔を見る。じーっと、長い間。長い時間。ゼロはその事に着いて少し考えごとをしていたがその視線に気づき、少女の方を見る。

「どうしたんだ？」

ゼロはそう聞く。そうしても、少女はまだ見続ける。と言うより、なんか見惚れているみたいで、気付いて無いと思い、少女の眼の前で手をひらひらさせる。その行動で少女はハッとなり、ゼロの方をおっかなびっくりで見えて聞く。

「あ、あの……。どうかしまひたか……。？」

少女がそう言い、ゼロは少し笑ってしまった。敬語を使ってきたのもそうだが、どうかしましたか？ と聞こうと思って、噛んでしまったので、さらにツボに入り、笑ってしまった。

「う、うう？」

「ああ。お持ちかえりしてえ」

「ゼロ。それは犯罪です」

少女は訳が分からず、首を可愛く傾げていると、笑いが沈静化し、目尻に涙が浮かんでいるゼロがさらに、ちょっと危ない発言をして、バルディッシュはそれを超冷静にツツコミを入れる。というより、冷たすぎだろ……。とか、ゼロは考えていた。

「分かってっから。とりあえず、父さん母さんは――」

「いない」

ゼロが言い切る前に、少女は答える。その顔は凄く辛そうだった。と言うより、これ以上言及してもいいのか少し頭を悩ませ、そして「よし」と言い、聞く。

「なんでだ？　いたはずだろう？　お前のお父さんとお母さん」

それだけ。決意して聞く。その返答がどれだけ恐ろしくても、“聞かなければならない”事だと思ったから。ゼロは聞く。

「父さんも母さんも私の眼の前で殺された。そっちの子も同じ。だから、私達はANGELが許せない。天使なのに、私達にとっては悪魔だ。どれだけあいつ等が幸福であっても……。あの…デュノアって奴。私は、アイツを殺そうと思ったけど――」

「ちょっと待ってくれ」

そこまで聞き、ゼロは聞き覚えのある響きの名前を聞いて、少女の話を途中で止める。そして、息を吸い、目を閉じて、聞く。ゆっく

りと。けれど、それは一気に確信に入る一言。

「今、誰……って言った？」

そう聞く。もし、彼の耳が正しければ、同じ分隊で、4番目の人物の名前。間違っていれば、それ以外の人物の名前を言う事だろう。だが――――。

「デュノアって、言った」

少女から出た言葉は前者の方だった。ゼロはそれを聞いて、ニヤリと笑う。とうとう見つけた……。そう言うように、大胆不敵に。

「成程な……。やっと尻尾を捕まえたぜ……」

「あの……」

ゼロがそんな事を呟くと、少女が声を出し、ゼロを呼ぶ。ゼロはそれに気付き、苦笑いしながら返す。

「すまんすまん。で、とりあえず両親は殺されたんだよな。そこから先はいいとして……。お前等をどうするかだよな」

「うん。けど、私達の幸せって……あるのかな？」

ゼロはそこで暗い話を打ち切り、少女たちをどうするか、聞く。そうすると、少女が幸せはあるのか？ と、俯き気味に聞く。ゼロは何を思っただか、空を見上げ、少女に「見てみるよ」と、言う。

「空……綺麗」

少女は同じように空を見上げる。

それは、何処か新しいものをもらった子供の様な目で、

それは、とても楽しそうで、

それは、キラキラとしていた。

ゼロはそんな少女を見て、また空を見上げて言う。

「だろう。まあ、30近くでこれ言うのもあれだけどさ。一応、言っておく。“幸せは、すぐ傍にある。ただ、それを掴めないのは、己が、自分が、一步踏み込めてないからだ”」

「え……？」

ゼロがそう言い、少女は咄嗟にゼロを見る。それが、何処となく自分が一番信頼を寄せる人物に見えたのか、少女は目をキラキラさせたままである。ゼロは嘆息して、少女の方を向き、言う。

「俺が今まで生きてきた中でやっと見つけた言葉。それが今言ったやつだ。踏み出し方が分からなかったら、俺が教えてやるからさ。だから、幸せって見つかるのか？ とか、逃げて行くんだ。とか。そんなこと言うつもりだったら、俺がお前等を引っ張って行くからさ。元氣出せ♪」

ゼロがそう言い、笑顔を見せる。

その笑顔は何処か歓迎を表しているようで。

その笑顔は二人を怖がらせないようにと、作った様な。

けれども、凄く暖かい笑顔。

そんな形で笑顔を見せる。そうすると、少女の眼からは涙が零れ落ちてきた。

「何か駄目なこと言ったか？ その、言ってくれば訂正するぞ？」
「そうじゃないの……」

「じゃあ……。嬉しいのか？」

「うん……。いままで、あそこじゃ、私達は、もう道具当然としてしか扱われなかったから……。凄く、凄く……」

少女はそこまで言うと、下を向いて俯く。凄く辛い目にあったのだろう。拳を握り、本当に嘆く様に。自分はずっと早くこの人と出会えれば良かったというように。そんな風に泣きじゃくっている。ゼロは少女を優しく抱く。

「安心しろ。今なら誰も見てない」

「うん……。ありがとう……。お父さん……」

少女はそう言い、小一時間位は泣きじゃくっていた。ゼロは心の中でデュノアの事をどうするか考えながら、少女の頭を撫でていた。

＊

「寝ちまったか……」

「そうですね」

ゼロは気持ち良さそうに寝息を立てている少女を見る。辛い事がありすぎて、ごっちゃになってたんだろうな。と、思い、羽織っていた上着をかけて、背中に背負う。

「本ッ当に世話焼きですね」

バルディッシュが少し……。否、かなり怒り気味でそう言う。と言うより、実際。怒りまくっているのだ。小一時間も放置されていたから。

ゼロはそれに苦笑いしながら言う。

「まあ、悪かったさ。小一時間も放置でさ」

「いいですよ、いいですよ。私は別に羨ましくありませんから」

ゼロの態度に気に入らなかったか、それとも、ただ拗ねているだけか。ゼロには全く分からなかった。だが……。

「バインド♪」

一縛！一

そして、ゼロの四肢の自由がなくなる。そして、バルディッシュを落としてしまう。カランコロンと、それは地面を滑り、止る。草陰から出てくる。一人の……。否、たくさん的人物。少数ではあるが、ぞっとする感じの人たち。

「弁解の余地は……？」

ゼロは、それを最初に聞く。デバイスを目の前に、自分のデバイスがないのに、どうしろと言うのだ。だから、弁解の余地を求める。だが、帰ってきたのは、凄く予想通りの答えだった。

「ないよ♪ ゼロ♪」

そう言い、バルディッシュをセットアップさせるその人物。ゼロは、「はぁ」と、長く、長く、長あ～くため息を吐いた。と言うより、もうこの4人に捕まったら逃げる余裕がないと分かっていたからだ。……さらに、さっきのバルディッシュとのやり取りが全部時間稼ぎだった事にも気付かされ、ゼロは覚悟を決め目を瞑り、一応聞く。

「フェイト達はなんでこっちに俺がいるって解ったんだ？」

そう。4人と言うのは、なのは、フェイト、はやて、祐輔の事であり、この状況で一番怖い存在だったから。回避できるのでは？ と、思うのだが……

バインドを引きちぎるほどの元気は残されていない。さらには……逃げたところで落とされるのがオチ。

と言う事が分かっているから、あえて聞いた。

「それはね、少しだけ時間をさかのぼるんだけど……」

そうして、フェイトがゼロに向かって、かなあゝり怒りながら話し始める。

＊

「はあゝ。本当、怪我とかしてなければいいけど……」

フェイトはそう呟く。実際、無茶無理が当たり前だから、そこまで心配するのは当たり前である。逆に、それで「心配するな」と言う方も言う方だが。そんな事でため息を吐いていると、なのはが話しかける。

「大丈夫だって。ほら、ゼロ君はいつだって笑って帰って来てるし……」

なのははフェイトを元気づけようとそう言ったのだが……。

「今回笑えなかったら？」

「う……」

そのフェイトの痛い一撃に、なのはは黙り込んでしまう。そうしてると、流れて行き、だんだんと暗い空気になる。四人は何も話さずに、黙り込んで、紅茶を啜る。さすがに、居心地が悪くなったのか、はやてが端末を取り出し、スバルとティアナに通信をかける。

「スバル、ティアナ。聞こえるか？」

《はい。聞こえてます》

ティアナが応答に応え、祐輔は少しほっとするが、フェイトはまだ沈んだまま。はやてはなるべくそれを視界に入れない様に苦笑いしながら言う。

「ゼロ君が何処かの研究施設に入ったんや。ちょっと追ってくれへんか？」

《了解です。さっき爆発みたいのが見えたので、それだと思うので、詳しい座標はいいです》

どんだけの魔法使ったんやっ！ と、心の中で思いつきりツツコミを入れるはやて。だが、彼女はそれを表には出さず、そのまま苦笑いで続ける。

「そうか。ならええわ。追跡して」

《了解です》

はやてはそう笑顔で言い、ティアナは、敬礼をして了解。その後、スバルが駄々をこねながら、連れて行かれる。それを確認してから、はやては通信を切る。かなあゝり。苦笑いだったが。

「と言う事で、まあ。大丈夫やよ。フェイトちゃん」

と、そのまま取り繕うと、フェイトは笑顔になる。それを見て皆は安心――

「帰ってきたら、懲らしめないね♪」

――否。恐怖を感じていた。ここで逆らうと、酷い目に遭うと直感的に感じてしまうほど。けれど、それには何処か納得してしまうオーラがあり、なのはと祐輔は同じように笑顔だった。

「俺も今回はフェイトの方に乗るよ♪」

「私も♪ はやてちゃんも、だ・よ・ねえ？」

はやては、その恐怖に逆らえなく、はやては何処か明後日の方を向き、そうして、ガッツポーズで応じる。

「もちろんや！ 三人ともっ！！」

＊

「と、言う訳」

「いや、全然理解できなかった」

ゼロはフェイトにそう言う。先ほどから小20分。こんなに怒っている訳を聞かされたゼロは、そう言っただけ、バインドを破ろうとするが、やはり疲れてか。破れない。

「じゃあ、覚悟はできてたという事で」

と、祐輔がすっごく、すっごく黒い笑顔で言う。ゼロはそれに軽く

呆れ顔をして、嘆息しながら言う。

「出来てねえよ。しかし、あの嘘がよく短時間でつけたな……」

と。実際、その通りである。ティアナとスバルは通りがかっただけ。と、言っていたから、まさかの隠し駒とは思う訳がない。それを含めての訳で。ゼロは改めてこういう時の三人は敵に回したくないな。と思う。はやてはずっと後ろで苦笑いしているため、参加しなかったのだろうから、三人。一応、今回の件については共犯者の様な感じだったのだが。

「とりあえず、撃つだったら撃つで良いが、この状態では撃って欲しくない」

と、ゼロは言う。なぜか？ そんなの知れていて、背中に先ほど保護した少年たちがいるからだ。もし、この状況で砲撃なぞ食らったら、ゼロは約束破りで少年たちは確実に人間不信になってしまうであろうから、そう言う。

「了解♪ 宙吊りならいいんでしょ？」

そう、なのはが言う。ゼロは思いつきり、心の中で叫ぶ。そう言う問題じゃねえよっ！ と。本当にそう言う問題ではない。少年少女が後ろにいるというのに、ある意味。血が昇ってさらにあれな状況になってしまう。

「意味が違う。撃つなら撃つで、後ろにいる保護した奴等を降ろさせてからにしろって」

ゼロは、そう言い、なのは達はそれに不思議そうな顔をする。保護

した奴なんか何処にいる？　と言うように。

「子供なんだよ。上着着せて背負ってるから、見えてないだけだ」

ゼロがそう言うと、フェイトはバインドを解きカートリッジを二つ排出する。そこには魔力が集束していた。逃げるのを防止する為だろう。ゼロは少女たちを降ろしてから、手を上げる。

「はい。これで良いんだろ？」

そう言い、息を吸う。まあ、これだけ吸っても全部排出させられるのだろうな。と、ゼロはそんな事を考えながら、なのは達の方を見渡す。

なんか、目を見るだけでも殺されそうだな…。

と、ある意味では、感心し。

ある意味では、苦笑い。

ある意味では恐怖だった。

「一つ、聞いていい？」

なのはがゼロを鋭い目つきで見る。少し、驚き気味で、何かを問うような瞳。ゼロは撃つ気はないのだと判断して、同じように眼を鋭くする。

「何だ？」

そう言う。聞くからには、なにか、それ相応の理由があると思ったからだ。ゼロはとりあえず、本当に軽くだが、力を抜く。

「その子たち、本当に向こうにいたんだよね？」

「ああ。そうだ」

「なんで？」

先ほどよりも鋭い目つきで答えを聞く。ゼロはそれに少しだけ思考し、答える。

「研究だとき。多分、人造魔導師研究だな」

ゼロは少年たちを見ながら少し寂しげに言う。こいつ等は親を殺されてそれでもここにいるんだろうな。そう考えながら。

「それはもう完成しているんじゃない……」

なのははゼロのさびしげな声を聞き、その後、人造魔導師研究が事実上完成している事に疑問を抱き、そう聞く。ゼロは少しだけ嘆息し、返す。

「大まかにな。戦闘機人は人間が機械に合わせるといふ形だ。それを一から、作るとなると、相当の時間も必要だし、何より。何のためにあの魔力さえ練るのが難くなる場所を研究施設と選んだか」

ゼロがそう言うのと、皆がハツとした表情になる。ゼロはそれでやっとな得したか。と、少し苦笑いをする。その後、祐輔が聞く。

「でも、なんで魔力が寝るのが難くなる場所を選んだの？ それだったら、むしろ練りやすい場所を選ばない？」

そこで、またそういう疑問が生まれる。それになのは達も感心し、ゼロはそれを納得したような表情で返す。

「それだよ。魔力ですぐにばれる。まあ、要するに、AMF下なら、魔力がかき消されっから、どれだけ使っても大丈夫って訳だ」

そう説明する。だが、これでまた疑問を抱く。魔力が練りにくい状況で、どうやって、魔法を使うのか。それがまた疑問となる。だが、皆それ以上は問い正さなかった。これ以上問いただしても、逆に疑問が増えるだけだと思ったからだ。

「じゃあ、とりあえずこれで良いな？」

ゼロがそう聞く。そうすると皆は首を縦に振るだけであった。というより、頭を抱えているように見える。ゼロはそれを見て頭に“？”を浮かべるが、気にせず、少女たちをおんぶする。

「じゃあ、俺は家帰ってこいつ等置いてくるから、後は頼んだ」

ゼロはそう言い、四人に背中を向けて歩き出す。四人は少しでも考えうるしぐさを見せて、頷き合い、ゼロの肩を追いかけて掴む。ゼロは掴まれて、振り向く。そして、「どうした？」と聞く。

「家までついて行くよ。お仕置きする為に」

と、なのは。動機がそれと言うのが非常に気になり、さらに、右手の力がもの凄く入っているのが気になるが、ゼロは気にせずにいる。と言うより、食いこみ過ぎて、右肩からは血が出ている。

「力強すぎだろ……」

その弦きが聞こえたのか、なのははもっと力を強めて、グチャという音を立てる。途轍もなく怖い笑顔で何とか隠す。

「まあ、そう言うことなら」

ゼロはそう言い、手を離す。その後、凄く痛がり、そのまま倒れる。それを見た四人は驚き、近づく。

「ちょ、ゼロ!？」

とフェイトが体をゆっさゆっさと揺らす。だが、応答はなく、そのまま地面に突っ伏したまま。そこでなのは自分の指に血が付いている事に気付くが、フェイト達のリアクションが怖かったので、言わなかった。

「ゼロっ!　しっかり!　　と言うかフェイトは揺すったらゼロの体調が悪くなるからっ」

と祐輔が必死に対処している。その後、フェイトは引き下がる。と言うより、はやてが気付く。ゼロの右肩から血が出ているのを。

「あれ?　右肩の方、滲んでへん?」

と、言い、なのははビクツとなるが三人は全く見ていなかった様。祐輔は少し思考し、何かを思いついたように言う。

「貧血じゃない?」

『……成程』

と、3人は右の手を握り、それを左の掌に落とすという少しだけ遅れた様な表現を巧くやってくれる。祐輔は苦笑いしながら、ゼロを背負う。そして、その場にいた一同は、ゼロ宅へと歩き出した。

＊

「ゼロの調子は？」

「今は落ち着いたかな。ぐっすりだよ」

「そっか」

と、祐輔はフェイトに言う。なのははその隣で「すみませんでした……」と縮こまっていて、はやてはなのはを睨んで見ている。

「あの子たちは？」

祐輔はそう聞く。ちなみに、ゼロ宅に着た瞬間起きて来たから祐輔はそう聞く。一応、あの施設の事に着いて、何か聞き出せると思つての祐輔の判断だ。

「起きて、ゼロの傍にいて。男の子の方は、幸せを教えてください。って言うからで、女の子の方は、お父さんが少し心配だから……」

フェイトがそう言った瞬間、祐輔とはやては途中まで飲みかけた紅茶をブハッ！と、吐きだし、急にむせる。フェイトは訳が分からず頭に“？”を浮かべ、なのははフェイトの方をじーっと見る。

「それ、本当？」

「うん………」

祐輔の問いにフェイトはそう答える。祐輔は頭を抱え、嘆息。はやてはさらに聞く。

「まだ、女の子だけなん？ それを言ってるの」

「いや、どっちも……あ！」

そこまで言ってやっと気づく。もう遅い……。と、言わんばかりの長い、長あゝいため息を吐く。なのははそれに苦笑いする。

「にやはは……。頑張れっ」

『何、人事みたく言ってるの！？』

と、まるで人事……。いや、完全に人事で認知しているのはに対して3人は思いつきりツツコミを入れる。その時、奥から足音が聞こえる。

「全く。五月蠅くしなきゃ気が済まないのか？ お前等は」

そこから出てきたのは勿論、ゼロ。後ろには例の少女たちがついて来ていた。しかも、しっかりと足にくっ付いている。それを見た四人は思いつきり息を吸い、シャウトする。

『お前のせいだよっ！』

「俺の？」

と、ゼロがそう言った瞬間に、4人から一発もらったとさ。

＊

「……つまり。俺がこいつ等を持ってきたのがいけないってか？」

あれから小3時間。延々と説教を食らい、四人の怒りが収まったところで、ゼロは首を傾げる。そのようやく出た答えに4人は嘆息し、

フェイトはさらに続ける。

「要約するとね。それでいて何でお父さんって呼ばせたの？」

そう聞くと、ゼロはまた首を傾げる。そして、少女たちを一瞥して、しばらく思考し、一分。言い訳の考えの時間かと思った4人は拳を構えて、ゼロは何かモヤモヤした様な顔で、言う。

「俺、そんな覚えはないぞ？　そもそも、誰が呼ばせたって言ったよ？」

「またそんな嘘を……」

祐輔は満面の笑みで拳を構え、そのまま拳を振るうがゼロは首を捻るだけで回避する。その後、ゼロは祐輔に真顔で言う。

「嘘じゃないって。お父さんって呼んだのはその子だし、俺がそんなバカな事をすると思うか？」

と。良く考えてみれば、ゼロはそんな変な考え方の持ち主ではない。だから、そんな風に呼ばせる訳がない。と言う事は……。

「この子たちの意志……？」

「そうなるだろうな」

ゼロははやての言葉に返答する。五人は少年たちを見つめる。少しおっかながってはいるが、拒絶反応をしている訳ではないと分かったゼロは少年たちの前に屈み、手を頭の上にポンツと置き、笑顔で言う。

「ようこそ♪　八神家へ♪」

と。後ろにいた四人は少し呆れ顔で、口々に愚痴の様な物を漏らす。

「確かに。ゼロだもんね。こんなこともやるよ」

「だよね。ゼロだもん」

「なんなんだよ。それ。まるで俺だから納得したみたいじゃねえか」

と、その愚痴にゼロは口を尖らせて言う。それに皆は笑う。そして、
なのはが何かを思いついたように言う。

「名前、決めないとね。この子たちの♪」

その言葉に三人はうーんと唸っているがゼロは何か案があるようなので、あえて言わずに意見を聞く事と決めたみたいだ。そして、一番手にはやてが手を上げて言う。

「【くりむ】や！」

某生徒会の会長の名前を発言したはやてにゼロは白い眼をして、ツッコミを入れる。

「うん。著作権的に危ないものがあるから、止めようか」

と。はやてはそれを聞いて引き下がり、フェイトが次に言う。

「エーデルベルカは？」

と、今度はF○t e ネタ。これはちょっと優しい目で見て、ツッコミを入れる。

「うーん。いい所なんだけど、これも著作権的に危ないから、ね？」

フェイトは引き下がり、最後に祐輔が言う。

「麗衣は？」

と、今度はまともだったから、ツツコミを入れずにゼロ自身が持っていた意見を言う。

「俺は蓮華って言うのを想像してたんだけどよ。どう思う？」

と、聞くと、皆して唸る。と言うか、これは子供に任せるべきなんじゃないだろうか？ と、ゼロは少し考えていたが、それは、少女たちが決める事なので、あえて口出しはしなかった。そうすると、案の定少女が何か言いたげな瞳でゼロを見つめる。ゼロはそれにわざと気付かずに考えるしぐさが続ける。そうすると、少女は勇気を振り絞り、声を出す。

「私は、“蓮華”がいい」

と。ゼロはそれを聞いて、誰にも分からないような笑顔を見せる。本当に、少女にも分からない様な、そんな笑顔を。少女はフェイト達を納得させるために訳を言う。

「私は、その、えっと…あれ？ 何て言おうとしてたんだっけ…。えっと……」

そう言った瞬間、5人はほんわかした表情で、可愛いなあ。と思いい、声を揃えてこう言う。

『合格っ』

「ふぁ？」

こうして、少女の名前は“蓮華”に決定し、次に少年の名前を考えるために、考え込む。ここでも例の如く、はやてが言う。

「シャオオン！」

「却下」

即行で、却下されたそれ。一応、某ツバサの主人公で、却下され、
またも却下されたはやてはしょんぼりとしてしまう。次にフェイト
がゆっくりと手を上げ、言う。

「ソウルは？」

と、今度は某ソウル・イー〇ー。ゼロはこれも優しい目で見て言う。

「うん。なんで、皆、元ネタあるんだろうねえ。ごめんね。ちょっと考えさせて」

と、最後に残るのは、祐輔。今回は少し考え込んで、言う。

「アレンで」

何で少年誌ばっか！？ と、ゼロはツツコミを入れる。だが、それ
やってても意味はないので、ゼロは自分の意見を仕方なく言う。

「俺はファイを想像していたんだがな。てか、何で少年誌ばっかなんだよ」

と、ジト目で言う。その後、四人は案の定ため息を漏らし、どの名前にしようか悩んでいると、今度は少年が言う。

「俺はファイがいい」

と。はやて達は大層不満そうに。

けれども、表には出さず無表情に近い形で少年の方を見る。

「なんで？」

と、フェイトは少年に聞く。少年は、うろたえる事もなく、答える。

「ファイ” って言うのが確か、何処かの世界の偉大なる魔導師の名前って言ったかな？ 確か。俺は、父さんみたいな立派な魔導師になりたいし。俺もそれで納得したから」

意外とはっきりした答えを出し、ゼロはそれで納得。なのは達もそれでよかったので、そうすることになった。

「じゃあ、名前はファイと蓮華で決定。けど、その服はアレだから……」

ゼロがそこまで言った途端にフェイトが立ち上がる。そして、車のキーを取り出し、走り出す。ゼロは「ちょっと待った」と、フェイトの肩を掴み、フェイトはゼロの方を向いて言う。

「私、ちょっと買って……」

「意欲的なのは分かるけどな。けど、もうちょっと待とうか？」

ゼロは、そう言って、部屋の奥に戻る。フェイト達は頭に“？”を

浮かべ、ゼロの部屋にひっそりと向かう。

「ふう。やっと見つけた」

ゼロは何かをクローゼットから取り出す動作を見せる。と言うか、見覚えのない服であったからフェイトは上がり込んで聞く。それを見た他の5人も上がって行く。そこには、幼いころフェイトが着ていた様な服とゼロが着ていた様な服があった。

「それって…」

「昔俺がフェイトにプレゼントしようと思おっただけど、少し、気が引けてな。押し入れに入れっぱなしにしてたんだよ。こっちは自作で着る用。これで良いだろ？ 容姿もしっかり似てるんだし、似合うって♪」

そう笑顔で言うと、ゼロは少年と少女……ファイと蓮華に今出した着替えをあげる。そして、言う。

「着替えてくれる？」

「大丈夫。向こうにもお風呂とかはあったから」

蓮華はそう言い、ファイもそれに頷く。ゼロは頭を撫で、二人にお風呂場で着替えてくるように言う。二人はコクリと頷き、走っていた。こうして、八神家には、家族が一人増えることとなった。

「ZEROの境界線No. 1」(前書き)

後書きとサイドストーリー的なものです。

まあ、おさらいと次回予告もあります。

遅れて申し訳ありません。それでは、どうぞ♪

「ZEROの境界線No. 1」

アニキは死んだ！ もういない！

だけど俺の背中に、この胸に、ひとつになって生き続ける！
穴を掘ったら天を突く！

墓穴掘っても掘り抜いて、突き抜けたなら俺の勝ち！

俺を誰だと思ってる……！ 俺はシモンだ！

カミナのアニキじゃない、俺は俺だ、穴掘りシモンだ！

――――グレンラガンより、大グレン団“シモン”

今日の担当

・ゼロ ・蓮華

・ファイ ・フェイト

ゼロ「さて、物語も、いよいよクライマックスに突入してきた！

ZEROの境界線！」

蓮華「父さん」

ゼロ「どうした？」

蓮華「さっきから、ママの目付きが怖い……」

ゼロ「フェイトの？」

ファイ「確かに怖い……」

ゼロ「フェイト。少しは、落ちつけよ。第一、保護という名目での養子だろ？」

フェイト「それが気に入らないの！」

ゼロ「分かったから。泣くなって。俺はそんなつもりで言ったんじゃないんだし……な？」

フェイト「ゼロなんか死んじゃえばいいのに……」

ゼロ「よし。ブレイ。俺を殺せ」

フェイト「ストップ！ 嘘だからっ！」

ゼロ「分かってるよ。さて、今回のおさらい」

ファイ「どうしてこうなったんだろうね？」

ゼロ「ということ。よく言えたな〜♪」

フェイト「ゼロ、私にはそんなに優しく——」

ゼロ「すまない。だが、子供には、飴と鞭の使い様が大事だというだろう？」

フェイト「飴しか使って無いじゃん…」

ゼロ「それは悪いことしてないからさ」

フェイト「それはそうだけど…」

ゼロ「わかったら、これ以上は言及しないこと。わかった？」

フェイト「うん……」

ゼロ「じゃあ、俺等の休日風景だったな。じゃあ、スバル達の休日風景はどうだったのか」

蓮華「VTR」

一同『どうぞ♪』

「ティア、何処いこっか？」

「そうね…別に行きたいところとかもないのよね…執務官になって、別に買い物行きたいと思った事もないし」

スバルとティアナの二人はパーキングエリアにバイクを止めている。

これから、この休日をどう過ごそうか、思案中。

ティアナは何処にも行く当てがないといった様子。

後はスバルに任せるといった感じでそう言った。

スバルはそれを聞いてニヤリと笑った。

半分開らい、祐輔とウェンディのせいなのだろう。これは。

メイド服とかを着せたいという衝動にかられるのは。

「じゃあ、ちょっと服屋さんに寄っていいかな♪」

「あら、珍しい。アンタが服屋さんなんてね」

早速、感付かれた！？　　と思ひ、少しだけびっくりする。

だが、それもばれた時の話。

スバルは、ティアナの背中を押して、足早に特殊な方面の服屋に向かった……。

ゼロ「とまあ、こんな感じで序盤だ。スバルもそんな趣味を……」

ファイ「人間、何があるか分からないね。父さん」

蓮華「そうだね」

フェイト「む」

ゼロ「睨むな睨むな。じゃあ、超本格的な休日。スバティア編。後半戦の」

フェイト「VTRを」

一同『どうぞ♪』

「ティアのいけずー！」

「アンタがあんな変な副屋連れていくからでしょ！」

と、二人は、怪しい服屋を出た後。

スバルはティアナにくっ付こうとするが、ティアナは頭を押さえて止め、そのスバルにとって多分、至福……かどうかは分からないが。うまく出来ない状況である。

け○おん的にいうと、唯がアズにゃんにくっつけない状況そのまま。まあ、それは別にいいのだけれども。

「じゃあ、何か食べにいこ——」

スバルが何かを言いかけたその時。

ティアナのクロスミラージュに通信が入る。ティアナはそれに出る。なんか、嫌な予感を察知したスバルが止めようとするが、時すでに遅し。

はやてがゼロの搜索願を。と、その瞬間、後ろ方角で大爆発が起きる。

火花が上がったかと思うほど大きな音がして、黒い煙が上がっていた。

「了解しました」

「ティアナ」

そう言って、通信に応えるティアナを見て、そう縋り付く。

だが、ティアナはスバルの襟元を掴み、ズルズルと引き摺って行きながら、ゼロが爆破したと思われる、研究施設へ向かった……。

＊

「物騒ね……」

「ティアナ。戻ろうよ」

「遊びたいのは分かるけど、これも仕事よ」

今、二人はゼロが入っていた研究施設に来ている。

ゼロの後を追ってきたのだが、明らかな重火器類の火薬のにおい。そして、尋常じゃない殺気。

足が震えて、普通の人なら前に進めない程の。

普通じゃ魔力の使えないAMF下。ここで、何を研究しているのか。それでいて、何があるのか？ それを知りたかったわけで。

「ティア」

「大丈夫よ。ほら、ゼロさんもいるし」

「ホントだ！ ゼロさーん！」

スバルはそう呼び、手を振る。

はちきれんばかりの喜びを加えて。

ティアナはそんなパートナーに呆れて、固まるゼロなのであった…。

＊

「あれ？　なんで、私等ここにいるの？」

「ハメラれたわね……」

一応、軽く奇襲染みた攻撃があった後。

ティアナとスバルは、入口に来ていた。

ティアナは、何故この様な事になったか考えていると、スバルの背中。

札の様な物が貼られていた。ティアナが剥がした瞬間。

それが、蒼の炎となり、消えて行った…。

「これは……」

ティアナは、考える。

確か、全方向からの銃撃を受けて…。で、いつの間にかここにいる。転移魔法…？

考えずらい。あのゼロさんがそこまでして魔法を使う？ 断じて違う。だったら…。

そこまで考えて気付いた。

自分にもついているのではないか？

そして、背中を触って確かめると、案の定、あった。

確認しようと取った瞬間、蒼い炎となってしまったが、
どういう事？

そう考え、祐輔の昔の記録を思い出した。

「成程ね……」

「何が成程なの？ ティア」

ティアナが、自分の親指の皮を噛んで、そう呟く。

スバルは全く訳が分からず、ティアナの方を見て、首を傾げる。

というより、ティアナは自分の友人に本当に考えているの？

とか、思ってしまった事、数えきれない。

とりあえず。分かりやすく説明する。

「何で私達がここに居るのかって事」

そう言うと、唐突にティアナは着ていたジャケットから紙とペンを取り出し、文字と魔法陣を描き始める。

使用する形式は、ミッド。

使う魔法は、転送魔法。

転送する物は…適当に石ころ。

場所は…。スバルの頭の上でいいか。

と、適当に決め、張り付け、魔力を注ぎ込む。

ほんの一瞬だけ。それだけなのに。

ティアナの眼の前からは消え、スバルの頭の上には、石ころが乗っていた。

フェイト「愛…ね…」

ゼロ「そういう意味じゃない！」

フェイト「ゼロの馬鹿あああああああああああ！！！」

ゼロ「ぎゃあああああああああああああああ！！！」

—ズガン！—

ファイ「じゃあ、こっちはこっちで進めようか」

蓮華「うん」

ファイ「超本格的な休日。エリキャラ編」

蓮華「VTR」

ファイ「どうぞ♪」

フェイト「死んじゃええええええええええ！！！」

ゼロ「ちょ…カミゴロシノツルギ使うなああああああああああ！！！」

「とりあえず…何処行こうか？」

「こうやってミッド歩くのも久しぶりだし…行く当てがないしね、エリオ君」

休みをもらい、ミッドチルダへ来た方がいいが、何をしているのか、分からないご様子。

そんな二人を見て、少し、ニヤついている人物が一人。

二人は気付かずにいるが。

その本人からしてみれば、二人何やってるんだろう？　ワクワク！
的な感じなのだろう。

「とりあえず…。適当にお茶でもしようか？」

「そうだね」

そう言って、ほのぼのした空気を醸し出し、歩く二人。
そんな二人を見ている、二やついている人物。自分もアイツとこればよかった…。

というどんよりした空気を醸し出して、二人の間の空気を壊したくなったらしく。

小走りして、二人をワッと驚かす。二人はびっくりして、即座に振り向く。

「千里さんでしたか…」

「ちよっと、ほのぼのしてたから、壊してみた♪」

エリオがそう確認し、安堵。

対して、千里はニコニコ笑顔で、そう言う。

心底、自分哀れだなく。と千里は思っていただろう。

キャラはそんな千里を見て、少しムツとしているが。千里は笑顔を保って、言う。

「とりあえず、行き先に困ってるようすなく。二人とも♪」

「はい。とりあえずは」

エリオはそう答える。ついてくる気だろうか？そう思いながら。

本人はついていく気がバリバリだが。

キャラは二人でゆっくり過ごしたかったのに。と、小声で千里に言っている。

だが、気にせずに二人の手を引っ張り、喫茶店に入った。

「さて、なに頼もうか？」

「僕は紅茶でいいです」

エリオがそう言った瞬間。千里は何か考えるしぐさをする。

敬語をしたからだろう。千里は結構敬語が嫌いで、デュノアとか、シャーリーとかアルトとかにも、呼び捨てで、しかも気軽に話しかけられるようにしている。

本人曰く、「上下関係あったら、任務がやりにくいし、連絡取りづらいから」との事。

そして、思いつき、エリオに顔を近づけて言う。

「エリオ、敬語やめてくれないかな？」

「え？ いや、でも：年上ですし：」

「大丈夫だって。それに、あたし、エリオともっと話したいし。デバイスの件についても二人と話したいしね」

そう言い、笑顔を作る。エリオの顔が赤くなり、少し可愛いなうという風に、千里が思ってしまったのは余談であるが。

だが、キャラが千里の楽しみを邪魔して、大人しく引き下がったのも事実。キャラは話を続ける。

「話ってデバイスの件なんだよね？ 千里さん」

「んまあ、その敬語は良しとするか。うん。とりあえず、色々考えてもあれなだけだよ。とりあえず話ね」

千里はそう言い、ポケットからデバイスを取り出し、コンソールを開く。

何かの資料。しかも、人と比べると、かなり大きい。フリードと比べてもかなり。

千里は二人が驚いているのを見て、当り前か。と思い、さらに別な物を開く。

乗り込むための機体。そういった方が具体的。

「とりあえず。デバイスって言うかどうかは別として。仮名称。アーマードコアシステム。略称、ACS。対ロストログアの兵器とlotteくれてもいい。もちろん、あたし監修で、魔力しか使わないけど。けど、使い勝手によつてはミッド：いや、この世を破壊しかない兵器。って、言っても分からないよね」

「結構火力は高いって事だよね？」

エリオがそう苦々しい顔で言う。千里はそれに頷く。

アーマードコアシステム。これは、本部からの依頼物なのだが、千里は何で今更こんなものを？

と疑問に感じているため、完成済みでもまだ提出していないのだ。

「そう。というかここで話すのはちょっとだけ危険なおいがするからまた後でいい？」

「うん」

そうして、注文を決める。エリオとキャロは紅茶。千里はハーブティーを頼んだ。

そして、またコンソールを弄り始める千里。その間に、エリオとキャロは雑談。

そんな感じ。書き込みでは消し、消しては書き込み…。

そこまでの時に、物音がする。

…：少なくとも、この辺りの机ではない。立ち上がる音。

皆一斉にそちらの方を見る。どうやら、客同士の間で何か起こったみたいだ。

大柄な男と、小柄な女性。しかも、いい体つきをしている。

その両名が、何やらやかしたらしい。

千里は席を立ち、両名の間に割って入ろうとする。が、エリオ達に、手を掴んで止められ、千里は苦い顔をする。

そうしたら、エリオが首を横に振る。それは、「もうちょっと様子を見てからです!」という合図だった。千里は、一旦椅子に座り、様子を見る。あろうことか、男は、女を殴り付けた! それを見た千里はスフィアを精製し、ギリギリのところを狙って針上にして撃ち抜く。

「もう、良いわよね? エリオ」

「はい…もう大丈夫です……」

「私も………」

そう言っ、エリオとキャロが立とうとするが、千里は右手でさえぎる。

そして、念話で、「私の喧嘩よ。邪魔しないでね」と伝え、二人は頷く。

それを見た男は、千里の方を向き、女をつかんでいた方の手を離す。

「何してくれてんだ? このアマ……」

「心外ね…ちよつと間に入ろうと思っただけよ?」

そう言い、千里は笑顔を作る。

それは、果てしない恐怖。

それは、果てしない喜び。

千里はスフィアを消し、右を胸の丁度前に出し、左を腰に留めて構える。使う型は、無形!

「構えがなってねえぞ?」

「知ってる? そうやって形だけ見る人には幸せなんて訪れない事。それと人を見た目で判断しちゃ駄目だよ」

その声は、男の丁度隣から聞こえた。居る場所。男の肩の上。いつの間にか移動し、優雅に座っていた。そして、笑顔。別の場所で見れば、それはただの喜び。

けれど今、現時点では恐怖しか与えない程の清々しさがあった。そして、ゆっくりと肩に触れる。

それだけで男は飛んで行った。

千里は、いつの間にか地面に降りていて、伸びをしている。

そこにいた一同は思う。この人…鬼だ…と。

そして、ある程度小さくなったところで、また姿が霞む。

両手を結ぶように握り、頭目がけて振り下ろす！

アスファルトが割れる音。それと、骨が割れる音。

その両方が爆発音の様に響き渡る……。そして、千里は伸びをして一言。

「悪、許すまじ！」

ただ、言いたかったただけだろう。けど、今に至っては決め台詞として成立している気がする。

そして、千里の姿がまた霞み、元の席に戻ってきた。

そして、注文したハーブティーが来ているのを確認すると、飲み始める。

「えっと…千里さん？」

エリオは、千里に聞く。何故その凄い動きをしていたのかが知りたくて。

けれど、ちょっと怖い気もした。その答えが。

「ん？」

「なんであんな力が？」

「知りたい？」

千里が母親が見せるそれに似ている笑顔で言うと、二人も笑顔で「うん！」と、頷く。

「そう」千里はその笑顔のまま、言い、ハーブティーを一啜り。一息つき、言う。

「空想を描き、想像にならん。

理想を描き、現実反映せず。

理念を描き、誠実を貫き通す。

過去を抱き、今を変える」

「それが今やった事ですか？」

「いや、私が好きな言葉だよ。最後の文は、力ある者、力なき物を救いたつ。って言うんだけどね。まあ、さっきまでの分で大丈夫」

そういうと、もう一息つき、空を見上げる千里。

太陽の光が眩しかったのか、手で光をさえぎっている。

そんな中にも、大人な彼女の魅力がある。

そして、掌を太陽にかぶせる様に関き、太陽を取るかのように握る。

「あの……」

その時、エリオとキャロとは別の声。鈴の様に綺麗。

だけれども細い声。そんな声で話しかけてきたのは、先程、男に絡まられた女性であった。

千里にお礼を言いたいのか、少し困っている様子。

それに気付いた千里は、元のちゃんとした姿勢に戻り、その女性の方を見る。

「お礼はいいわよ。ただ、のどかな時間を誘拐とかで不快にされち

や堪んなかっただけだし。それに、力があるのに使わないなんてさ。貴女も貴女よね」

「力なんて——」

ない。そう言おうとした矢先。千里は目付きを鋭くして、その女性の方を見る。

女性は、少しだけその殺気を感じて構えを見せるが、すぐに解く。

千里は、魔力を察知してか言葉にも怒気と恐怖が入るようになっていた。

「その声も、魔法による擬音でしょ。何者なの？ 以前からくっ付いてきた張り付くように気持ち悪い魔力。それに、魔力運用も並の魔導師じゃ出来ない。アンタもアルスとか言う奴の仲間？」

女性は答えない。エリオとキャロが千里を止めようとするが、制止をかける。

まだ喧嘩の途中。そう言いたいのであろう。それを見た女性は、不意に空を見る。

そして、口端を吊り上げて、笑った。盛大に。

そこにいる誰もが狂ったんじゃないかと思うくらいで。

「なにがおかしいのよ」

千里がそう鋭い目つきを変えぬまま言うと、女性は、笑うのを止め、千里を面白いものを見る様な、興味深いものを発見した様な眼で見る。

「貴女は凄いよ。ANGELに招待したいくらいだ」

「天使…ね。悪いけど、私は天使^{コマ}じゃなくて神^{オウ}になりたいから、却下」

「そう……。分かりあえないね。それだったら」

「結構。反乱分子に肩入れする位なら、アイツの隣に私は立つ」

そう言うと、女性は一步づつ近づく

。千里はエリオとキャロを庇うように後ろに回して立つ。

女性は、手をあげ、指の関節の調子を確認する様な動きで近付き、最終的に、二人が接するぐらいの距離。

女性は指二本を立てて、その先に光りを燈らせる。

千里は、構えを取らずに鋭く見つめている。

「…おもしろいね」

瞬間。先程倒れていた男が、いつの間にか移動して、千里の後ろで拳を引き攢り、放っていた。

その刹那、気付いたはいいが、対処が遅れる。間に合わない！
そう思った時。一つの稲妻が首筋を通り抜けて、男の拳が弾け飛ぶ！

いや…腕全体が、消えてなくなる！

男は、激しく痛がり、その場で倒れて悶える。

「電撃…しかも、死なない様に、動脈静脈まで止血…」

「凄いでしょ？」

女性は、千里を助けたのか、そうではないのか。

気味の悪い笑顔を向けたまま、千里に顔を近づけて、千里は、その体勢のまま、隙を見せない様にする。

そのまま彼女は、自己紹介する。

「私は、リィナ・アルツストラ。リィナで良いよ。呼ぶ時はね♪」

「次会う時は敵同士よ」

耳元で囁き合う二人。片方は、大層楽しそうな笑顔を浮かべている。これから始まる、楽しい、楽しい戦争風景を思い浮かべて。

もう片方は、神経を集中させて、隙を作らない様になっている。何かをされてもすぐに対応できる様にちゃんと構えを取って。

「ま。その時はその時。今は、私達ANGELは中立。体制が整ったら、動き出すよ」

「そう。けど、それまでは誰にも手出しさせない」

そういうと、リィナを突き離す千里。

その眼は冷たく、なにかを警戒しつつ、軽蔑している瞳だった。

対して、リィナはそれをさも面白そうに見ている。これから始まる戦争は、楽しみだな…。

そう心の中で思いつつ。リィナは右手で空間を切り裂き、穴を作る。そして、「またね♪」と、笑顔で言い、消えて行った。

残された、3人は、複雑な気分。

「…ごめん。二人とも。私、六課に戻って、アーマードコアシステム仕上げる」

「なら、僕達も戻ります」

そう言い、立ち上がろうとするエリオを千里は手で制す。

そして、先程のような鋭い目つきではなく、優しい笑顔で言う。

「二人とも、せっかくの休日なんだし、休んだ方がいいよ。前線メンバーは前線メンバーなりの義務っていう物もあるし」

そう言い、3人分のお金を置き、「じゃあね」と、手を振って行く。

コンソールを開き、信号機の上まで跳躍して、その上を渡って行く。と、その時に気付いた二人。腕を吹き飛ばされてもがいている男。厄介事を任せるためか…。

と、つくづく後悔。だが、二人もしつかりとした管理局員なので、とりあえず、男を病院へ連れて行った……。

＊

男を病院へ連れて行った時。もう、身体活動自体が殆ど止まっていた。

九死に一生を得たみたいだが、実際。

そこにいた医師にも「どうやってこの攻撃を受けたんだ？ 腕はバツサリだし、魔法術式自体が見たことがない。貴方達、何の訓練をやっていたんですか？」と、そんな感じで。

さっぱりだったそうさ。

「…僕は、どうすればいいんだろう……」

「エリオ君……」

圧倒的な力を目の前に、そう言い、落ち込んでしまうエリオ。

キャロはそれを見て、励まそうとするが、言葉が思いつかない。

というか実際。キャロもそれ相応に落ち込んでいたのだ。

リイナ。彼女が見せた異常さ。そして、未知の魔法。それにどう対抗すればいいのか。

分からなかった。だから、こんなに落ち込んでいる。

「キャロ」

「はい？」

エリオは踏ん切りをつけ、落ち込むのを止める。

下を向いて立ち止まっても、打開策は出ないと知っているから。キャロはそんなエリオに顔を向け、聞く。

エリオは立ち上がり、自身の相棒。ストラーダを出して、言う。

「六課に戻ろう。ストラーダ、録画してるよね？ あの時の魔法の発動の様子」

〈Ja！（はい！）〉

そして、ストラーダが答えると、エリオはキャロの手を取り、歩き出す。

ちよつと強引ではあるが、そうでもしないと戻れない。

ちよつと焦りを感じているせいでもあるが。

キャロは、理解していて、当てがあるのか、聞こうとした瞬間。

〈Aber, ich denke, ich habe et was?（けど、当てがあるんですか？）〉

ストラーダに先を越されて、少しムツとなる。

けども、ストラーダはこういう感じなのは分かっているので、あえてどうこうとは言わないが。それにエリオは得意げな顔をし、応える。

「大丈夫！」

エリオは少しだけ歩く速さを急にし、六課に戻る……。

ゼロ「これにて、他の休日は終わり。しかし、皆も、熱心だな」
ファイ「父さん、俺もつと強くなりたい！」

蓮華「私も」

フェイト「大丈夫。絶対強くなれるよ。ね？」

ゼロ「ああ。今の俺よりもずっと、ずつとな。その力は、恩返しじやなくて、恩を売る為に使って欲しい」

蓮華「父さんのためじゃないため……？」

ゼロ「言い方はそうなるかもな」

ファイ「なんで？ 俺、父さんに感謝しきれない程恩があるのに」

フェイト「私も。アリシア助けてくれたのだって、母さんを楽に眠らせてくれたのだって、ゼロでしょ？」

ゼロ「そうだがよ。けど、フェイトには悪いけど、俺のためって言うのはおかしいさ。十分強いし。俺だって、破壊衝動が消え失せた訳じゃない。自制してるから。だからさ。なんかこう言いづらいけど、俺に対する恩は俺じゃなくて、他の人にその幸せな気持ちを分けて欲しいなって思うんだ」

フェイト「まあ、別に良いけどね」

ファイ「わかった！ 俺、頑張るよ！」

蓮華「私も頑張る……」

ゼロ「うし。頑張れ」（ナデナデ）

フェイト「じゃあ、コメント返ししようか」

ゼロ「その前に、いきなり読み始める人用に、こんなものを作ってみました♪」

ファイ「……おさらいメモリー？」

ゼロ「そうそう♪」

フェイト「それじゃあ、どうぞ♪」

「八神ゼロ・S・A・ハラオウン……。年齢31歳。嫁が、歩くロストロギアと漆黒の執務官かぁ……♪」

そう嬉しそうに独り言を喋る女性。様な漆黒の瞳とは対比する様に、

蒼い髪をしている。

紅茶を飲みながら、無邪気な笑顔で何処から手に入れてきたデータを手に入れ、閲覧している。

ハッキングデータ…。それが一番正しいのかもしれない。

全て、この女性……。リリイがやったこと。

「ゼロっちいゝ。駄目だよ？ 管理局にデータを任せるって言う事は、私に知られるって事なんだし♪」

そんな事を言いながら、情報を次々と抽出していく。

よく見れば、本当にプライベートな物が混じっていたりする。

身長、体重。生年月日から全部。本当にどうでもいい情報が抽出されていく。

かと言ってそれだけではなく、戦闘パターンデータ。

平均能力値。リミッター解除値。年別更新記録。

……。最新のデータを尋常じゃないスピードで取り出していく。

「…これを見るだけでも、ますます好きになっちゃうよ♪ ふふふ♪ ぞくぞくするよ…ゼロっちい…」

…この発言。聞いているだけで危ないものがある。

リリイは、小さい頃からゼロにゾッコンしていたのだ。

だから、ゼロの話になるとこの様に異常に明るくなる。

今は、ゼロの事を調べているからなのだが。

リリイは、目を細めて恍惚とした表情で見ている。

「邪神、絶望の書…。見るからにやばそうだねえ…♪ リイナなんて偽名はもうやめよ…。ゼロっ血に対して失礼だし」

「それは駄目だ」

「自分が偽名だからって、私まで偽名になることないじゃん。アル

ス……いや、ラヴ」

そう皮肉を言うようにいう。見るからに、嫌みを言っている眼だ。それを聞いているのは、仮面をかぶっていて、特徴がその仮面しかないと言える男。

例えるなら、コ○ドギ○ス。リリイには見えてはいないが、ラヴは相当急かしている眼をしているだろう。

気の流れを読むと言う事が出来るから、言葉なしの疎通が可能であるのだ。

「焦らないでよ。とりあえず、邪神事件。絶望の書の一件と関わりがあつて、翼竜は殆ど絶望の書で染まったバグ。最早“イキモノ”じゃなかったよ。それで重傷を負った。その後、ラヴが記憶を封じてまで与えた力がDで、ゼロっちのお婆ちゃんが持っていた力。それで、事の発端と言われた、ライザーⅡクロイツ」

そう言うと、また笑顔を作る。

それに返すラヴの顔は無表情。

リリイは少しむすつとした顔をして、ラヴを見る。だが、後を続ける。

「これが邪神の正体で、この事件の時にアリシアも発見してる。その後、絶望の書事件。DとF。地球への長期出張任務。ゼロっちが失踪したのは、その事件の中盤くらい。大体、1週間位かな。その間にも、ちゃんとした訓練は積んでたみたいだけどね」

「それで？」

「知ってるくせに、そんなこと言うんだ？」

リリイが説明している途中でそのような事を言うラヴをジト目で見る。

その時、バツの悪い様な表情を作り、後ずさる。
リリィはため息を吐き、また資料をまとめ始める。

「それで、その事件が終わった後。ゼロっちのDは消えた。それで、私達ANGELが立ちあがって、2世代型戦闘機人計画。私達の活動理由。ゼロっちを殺す為じゃない。ゼロっちを使うんだよ。それはラヴが一番知ってるけど、デュノア・シャル。殺し屋だよ」
「安心しろ。そこまでヤワな奴ではない。ゼロはな」

ラヴはそう言うと言の中消えていき、リリィはゼロの年更新記録を見て、少し複雑な顔をした。

だんだんと、強くなっている。のではない。

若干だが、本当に微妙だが。ゼロの能力値が下がっていつている。もしかしたら、本当に死んでしまうのかもしれない。そうは思ったがその考えは切り捨てた。

能力データに気になる単語があった。“KIZUNA”…と。

「ゼロっち、私と会える日を楽しみにね♪」

そう言い、辺りが闇に包まれた……。

ゼロ「という訳で」

ファイ「父さん！？ 狙われてるよ！？」

ゼロ「大丈夫だ。絶対にな」

蓮華「死んだり…しない？」

ゼロ「お前等を残して死ねねえよ。大丈夫だ」

フェイト「絶対？」

ゼロ「ああ。絶対の絶対の絶対だ」

フェイト「そっか♪」

ゼロ「じゃあ、感想の返信！」

某スーパーコーディネーターさんへ

ゼロ「あれは、確かに種死だな。作者が連ザやってた時の事だから、その影響かとは思う」

フェイト「うん。そうだね」

ファイ「それで、そのデスティニーの他に、ストライクフリーダムとか、∞ジャスティスも出るの！？ 父さん！」

ゼロ「出たんだけどよ。けど、あの戦いが終わったら消えたわ」

蓮華「そうなんだ……」

ゼロ「ごめんな？ けど、今度そういうの作って見せてやるから」

フェイト「ゼロ……？」

ゼロ「お前等にもちゃんと見せるから、大丈夫さ」

九淨 夕さんへ

ゼロ「超展開過ぎワロタw だってよ。どうすんだ？」

麗×零「ま。こればかりはしょうがないからな」

フェイト「作者さん、評価されてるね」

麗×零「今はこれが限界だな」

ゼロ「通りで翻訳が違う訳だ」

麗×零「それは勘弁して下さい……」

バルディッシュさんへ

ゼロ「ま。単にうる覚えなだけだった様だぞ」

麗×零「サーセン」

フェイト「でも、大丈夫だよ。きっと」

蓮華「そうだよ」

ファイ「俺もそう思う！」

麗×零「お：おお。何という優しさだ：これぞ、正しく愛だっ！」

ゼロ「気持ち悪いから」

naonaoさんへ

ファイ「…。父さん、こんな人もいるんだね」

ゼロ「参考にしちゃいけないからな」

麗×零「放浪って：何処に行ってたんですか！？ リーダーとはS

kypeしか話してないから：。てっきり、読む気が失せたのかと
！！」

フェイト「：努力してると思うよ？ 努力は」

蓮華「人気はあんまりだけど」

麗×零「はうっ！」

ゼロ「まあな。ツツコミはしないでくれ。それと、涼は死ねばいい」

ファイ「父さん、なのはさんって怖いのか？」

ゼロ「怖いって言う程でもあるような様な…。てか、お仕置き
喰らわされても、俺は多分ピンピンしてるな：とは言いがたい」

フェイト「結局どっちなんだろうね？」

麗×零「さあ？」

ゼロ「という訳で、長々と後書きをしてしまってますまないな。ゲス
ト待ってるからな」

ファイ「来た人は、俺と戦ってくれ！」

蓮華「ファイ、それ危ないから」

フェイト「そうだよ。怪我したら大変だから、ダメ」

ファイ「ええ」

ゼロ「よし。俺が変わりに明日模擬戦してやるから」

ファイ「うん！」

ゼロ「じゃあ、次回予告」

フェイト「皆が寝静まった頃、突然鳴り響く緊急アラート」

ファイ「そこにいたのは、ワイバーン」

蓮華「それとガジェット」

ゼロ「六課狙いのこの奇襲。ゼロは、それに対応する為に戦場に出る……。次回―奇襲―明日の天空へ！」

一同『DRIVE IGNITION!』

第9話一奇襲（前篇）一（前書き）

遅くなってしまうたあ〜。

でも頑張ったかいはあった出来だと思っています。

では、どうぞ♪

第9話 一奇襲（前篇） 一

深夜。皆が寝静まった夜。ゼロは一人、六課の屋上で空を見ていた。星たちが無限の瞬きを放っている。

風が、彼の髪を風いでいく。

ただ、星を見に來ただけ。それだけなのだ。

生まれては消え、消えては生まれていく幾多もの輝き。

それを綺麗だなど思いつつ。

なぜか、自分と重ねてしまい、悲しさと寂しさが自分の心を通り過ぎる。

それがなんでかは分からない。

けれども、そんな気持ち、頭の中で生まれては消えゆく。何故かは知らない。

ただ、それだけを感じている。

そんな時、後ろから近づく足音。

金髪、紅瞳。フェイトに似た容姿。違いは、あまりないが。まあ、想像に任せるとしよう。

そんな容姿の女性が、ゼロに。

「アリシアか？」

「えへへ。大正解♪」

そう笑顔で答え、指でブイサインを作るアリシア。

ゼロはそれを見ると、少しだけ端に寄る。

隣に座るなら、座れという意味だろう。

結構狭い所に座っていたから、ゼロなりの心配り。

アリシアは、お言葉に甘えましてと言わんばかりのステップで、隣に座る。

「綺麗だね。空♪」

「そうだな」

アリシアの言葉に應えるゼロの横顔は何処か寂しげだった。なにか、思い残したかのような、そんな感情を感じさせる。そのような感じの表情であった。

その時、空から降ってくる一つの物体。

それは、間違いなくゼロの頭上に降ってくる。

それに気付き立ち上がり。そして、障壁を張る。

軌道は、訓練場側にずれ、なんとか、外れる。

「なになに！？ どうしたの！？」

「……静かにしろ」

ゼロは目を閉じて、感覚を研ぎ澄ます。そのためには、少しでも影響を感じない状況が必要。

だからこそ、アリシアには静かにしてもらう必要があるのだ。

それを察知したアリシアは、生唾を飲む。

ゼロは辺りを暗闇から、何か物を取り出す様な手探り状態で探る。

反応があった様で、ゼロは眼を開き、真紅と翡翠の瞳が露わとなる。

「アリシア。アラートを鳴らしてきてくれ。それと、ロングアーチに敵の総数の確認」

「ゼロは！？」

「大丈夫さ。俺はこのくらいで墜ちん」

そう言い、無音動作でバリアジャケットを纏い、ナックルと杖を装備する。

杖はイルの物。ナックルはブレイのカイザーフォルムだ。

マルチタスク。

それを思わせるような、得物の構え方。無茶にもかかわらず、今はそれが安心できる。

そんな感じで、アリシアは屋上から駆けて行った。

「さあ、ワイバーンども。殺^やり合いだ……」

杖を掲げ、魔法陣が開く。幾多もの閃光が、翼竜を刺す…！

＊

〈デュノア。いいな？〉

「了解。任務に支障をきたさぬ程度にな。手駒は少ない」

デュノアは、珍しくカーテンを開け、外を見ている。

そこには、赤翼の翼竜と、金髪の元帥が戦っているところが見える。元帥の方が苦戦一方で、それをモニター越しに見ている男はニヤリと笑っていた。

強化型。

それがいかに恐ろしいか分かっている物でもなく。男は笑っていた。

〈あの男に死の絶望を見せてやれ。デュノア〉

「任務了解」

無表情で頷く彼は、もう六課としてではなく。

殺し屋の雇われ主として、非常に冷酷な瞳をしていた。

その時にアラートが鳴る。

第一級警戒態勢。

それを知らせるアラートだった。

男は、元帥の様子を見て、さも可笑しそうに笑っていた。
こいつの死に様を見れる……！　そう言うように。

〈頼んだぞ〉

その言葉にデュノアは静かに頷き、通信が切れる。
自身のデバイスを持ち、バリアジャケットを纏い、目を閉じる。
少しだけ何かを呟いた後、魔法陣を展開。
何処か、誰も気づきもせず、転移して行った……。

＊

「魔力反応か……？」

デュノアが転移し、左目のうずきを感じたゼロは、翼竜と距離を離し、後退する。

スペース自体がかなり狭いため、苦戦を強いられるのだが、翼竜達に言わせれば、壊すことが目的の特化型なのだから、どうでも良い。
ゼロは少しだけ見える魔力の光を見て呟いた。

〈主、前！〉

「っ！」

火炎の音が響き渡り、翼竜が火炎弾を吐き出す。

ゼロは、回避が間に合わないと瞬時に判断し、プロテクションで防ぎ、術式を展開。叩き落とす！

叩き落とされた火の弾は、地面に大きなクレーターを作り、辺りを焼け野原にした。

綺麗だった地面が焼け野原になり、ゼロは少し焦る。

「拙いかも…な…」

アレを受けた時、自分の体がどうなっていたかを想像して、冷や汗がだらだらと出る。

焦りはもう一つ。そのタフさにあった。

一撃目の術式。ワイバーンを串刺しにし、仕留めるはずだったのだが、何でもない様に空を飛び、その上術式を破壊する。

………規格外にもほどがある。

さらには、打撃系統が震動系ではないと、通らない点。

極めつけに、最後のブレス。普通なら、クレーターはまず作らないし、その場で留まり、焼け野原になてなる訳がない。

…だが、今回はどうだ？

見事な焼け野原になった。

これが何を語っているか、ゼロには…いや、誰にでも分かった。

「強化型…」

…絶望的ではない。だが、不安にはなる。

こんなのが一匹いるのでもかなり食うのに、それが何匹もポンポンと。しかも、市街地に向けて放たれたら…。そう思うだけでも背筋が凍る。

いくら管理局で訓練してるとはいえ、自分ひとりでこんなにも時間がかかる。

しかも、普通のワイバーンを倒すのにも、かなり時間がかかる管理局員に倒せるか考えてみる。

「急がないとな…」

あまりにも絶望的だった。

というより、逆に殺されるという結果。
だから少し焦る。

―……いや、そもそも何で六課に落とした？―

ゼロは新たな疑問を頭に残す。

ミッド狙いなら、中心部に落とせば、確実に混乱は狙えるはず…。
それでも落とさなかったという事は……。

そこまで考え、ハツと思いつく。これは六課でも、ミッド狙いでもない…。

あの場にいたのは、アリシアとゼロ…。つまり……………。

「個人狙いか……」

どちらかは分からない。だが、それだけは何が何でも断定できた。

誰が何と言おうとも、だ。

しかも強化型。

一人で戦うという事が無謀になってくる。これが弱いものだったら、
もうこの世界は終わりだ…。と、かなり落ち込んでいた。

その時、上空に煌めくものがあった。紅い煌き…。

いや、この場合は焰というのが正しいのかもしれない……。

見えないゼロにとっては焰ではなくただの煌きにしか見えない訳だが。
それが翼竜の緋弾だと分かるまでに、時間を要した。

それと同時に聞こえる咆哮。それと同時にワイバーンは突進を開始する。

ゼロはそれに対する反応が遅れてしまい、思い切り吹き飛ばされる！
六課を突き抜け、地面にクレーターを作る。そこら辺は流石という
ところであろう。

「ぐ…！」

痛みに少し不具合を抱え、起き上がる。

腕の部分がスパークし、足は血が出ている。

起き上がるのもままならず、その状況に顔を歪める。

さらに、そこに火炎の追撃。万事休すとはこういう状況。

もう駄目か…。

そう思われた時、閃光が火炎を木端微塵に粉碎する。色と速さ、そして、軌道から推測する。

頼りに出来る仲間、フェイトの物だった。その後ろには、なのは、はやてを筆頭とした、六課メンバーが勢ぞろいしていた。

「遅い」

「これでも速かった方なんだよ？」

ゼロの言葉にフェイトは答える。

だが、傷ができる前に来て欲しかった。

それだけ是不変ならない。血が流れ、スパークしている四肢。

それを見て、かなりバツの悪い顔をする。行動が遅かったせいでゼロがこんなにも傷ついているのだから。

当の本人はそんな事を気にせず、傷の修復に入る。深い傷を最優先にし、浅い傷はそのまま放置で、立ち上がる。

その眼光は強化型の翼竜を射抜いている。

「……確実に俺狙いか？ さっきのは二次災害って事で」

ゼロは六課に大きく開いた穴を見ながらそう苦笑いと言う。

今のこの状況で笑って入れるのが凄いと、その場にいた誰もが思った。

怪我だらけで、しかも自分が狙われていると分かっている。

それでも笑っている。その心の強さがあつたからこそ、今のゼロがいる。

本気でそう思ってしまったのもいる。

だが、この状況でそうも言ってられない。

だから、ゼロは言う。

「さて。こいつ等、片して帰ろうぜ！ 蓮華とファイも待ってる！」

構え、怪我をしたとは思えない距離を跳躍する。

それに合わせて、金の髪も風に風ぐ。

右には月明かりで銀に輝く長杖が。

左には己が信じ、共に闘ってきた拳が。

自分を守り、共に闘ってくれる。

自分がミスをしたとして、仲間が守ってくれる。

そんな状況を肌で感じながら、強化型に霸王流の一撃を入れる。

それを見た仲間は、感嘆し、自分も負けてられない！

この戦場では不謹慎すぎるが、そう思い、戦場を幾つもの閃光が駆け巡り始める…！

＊

「らあッ！！」

その掛け声と共に斬り裂かれる鱗。

空にはかん高い音が響き、剣を持つものはまた離れる。

傷を付けられた本人は傷を元に戻し、また空へと舞い上がる。

「全く。頑丈で厄介って、こういう事なんだろうね…」

祐輔はそう言い、持つ黄金を一回転させ持ち直す。

その額には、大粒の雫が。握り直す手にもじんわりと。
：だが、眼光は挑戦的ではあった。
守りたいという思い、そして、絶対に勝つという思い。
二つが合わさり、生んでいるこの状況。
祐輔は剣に魔力を溜め、振りかざすように構える。
空を飛べない彼だが。
翼が重い彼だが。

―手段はある―

〈祐輔、行けます〉

「了解：後はタイミングだけ。メディ！」

〈後、50秒で火炎球が来ますわ〉

「：もうちょっと柔らかくてもいいんだよ？」

と、ちょっと冗談交じりに言う。

月夜に輝く黄金の鎧は、剣と波長を合わせる様に雄々しく輝く！
なびく蒼の装束。剣に込められた魔力が風を発生させ、辺りの草を
横に倒す。

空には力を溜めこんでいる翼竜の姿。後、10秒。そのような感じ
なのだろう。

両手上段。そのように持っていた剣を右に預ける。当然、剣自体も
下段になる。

空いた左。そこには深紅の槍が現れる。

自分の身長よりも少し短いかくらの長槍。

月夜に不気味に姿を現したそれは、振りかぶる様に構えられる。

「はああああああ！」

祐輔の咆哮と共に放たれる深紅の槍。

その軌道は紅い光によって記されていた。

それと同時に両手に持ち変える。

また咆哮。今度はワイバーンの物。

火球を吐き出すが、そこは想定済み。

先ほど放った深紅の槍が粉々に砕き、そのまま貫く。

それを見た祐輔は口端をあげ、ニヤリと笑う。

そして、屈んだかと思うと、消える。

空を駆け、宙を踊る！

相手にはそれが見えず、眼光が右往左往する。

「約束された勝利の剣！！」
エクスカリバー

その声と共にワイバーンが粉々に吹き飛ぶ！

血吹雪と共に、肉片が弾け、散りゆく。

そして、金の短髪は血に濡れ、滴る。

黄金の輝きを放っていた剣は、血を浴びて輝きを失う。

深紅の槍はその先から、滴が落ち続ける。

降り立つ大地は、生の色……。暗いせいか、深紅に見える。

剣についている血を振り払い、また深紅に染める。

足元には、月夜に照らされて、強化型の鱗がゴロゴロ転がっていた。

それも、尋常じゃない位に。

一歩踏み込めば、そこは鱗地帯だというように、そこに転がっていた。

「……。外側からの攻撃が全く効かないのはそう言う訳……………か」

鱗を幾つか回収し、空を見上げる。

立っている大地には似合わず。

綺麗な、澄んでいる空であった。

そんな時、見間違えか、一人の少女の姿が見える。

髪は、自分より長い、いや、もしかしたらゼロよりも長いかもしれない髪の長さ。

月夜に照らされて、白銀に輝くその髪は、風になびく。光に照らされ、覗く瞳は金の色。

一瞬だけ、こちらの方を向いた気もするが、多分気のせい。祐輔はそう信じて、剣を握り直す。

「……後に残るのは、ワイバーン二体だけ……。倒せるかな……？」

そう言い、槍を握った瞬間。

背後から物音がし、魔法陣が展開する様な音が、そして、なにかが高速でまとまって行くような音が。

祐輔の耳に届き、振り向く。その瞬間、槍を投擲する。深紅のラインが軌道を描き、吸い込まれゆく。

当たった……。そう思った次の瞬間には、なにかの力に弾かれてしまう。

――また強化型……

そう思い、少し迷ってしまう。

自分の作り、使う武器自体が、実弾ではなく、ほぼ魔兵器。しかも、実兵器さえ弾いてしまうほど強化されたAMF。

対処方法が……。ない。

そういう決断になり、そういう答えにたどりつく。

もし、これで、魔兵器と実兵器。その両方が使えるとなれば………

……。考えることすらなかった。

突進力。そして、威力。

その両面を考えて考えてみるだけでも投擲の方が上。自分が振るう剣など、それに比べれば、紙威力も同然。それを瞬時に悟り、回避しようとして跳躍する。

その瞬間、溜めていた魔力を砲撃とし、祐輔に放つ。地上に居れば、まだ回避する手段はあったかもしれない。

けれど、ここは空中。しかも、威力、射程、太さは、管理局のACEの最大の魔法よりも上。しかも、後方からも放たれている…。

—ここまでか……—

そう思い、最後の悪あがきと言わんばかりに剣を振るおうとしたその時。

—障壁展開—

凜と澄んだ声が聞こえた。見れば、辺りの砲撃は止み、剣は片手で押えられて、辺りには深紅の障壁。球体の形をしていて、文字が所狭しと刻まれている。

……よく見れば、先程の女だった。騎士甲冑とも、バリアジャケットとも呼べるような物を身に纏い、佇んでるその姿は、祐輔より何処か頼りがいがあり、美しく見えた。

「駄目だよ…。ちゃんと助けてって言わなくちゃ…」

「……見知らぬ誰かに助けてとは言えない」

剣を握るのに加え続けている力を抜き、足場に着地。女は剣を離し、祐輔の方を向く。

その纏う武装をこちらに一つも向けることなく、向く姿を見て、敵対する意思がないと悟る。

剣はいつの間にか鞘の中。

「……知ってる筈だよ。“会ってる”から」

………会ってる………？

その言葉に、疑問を感じる。もしかしたら、忘れているかもしれない、その記憶。

無理やり引きずり出そうとするが出てこない。そんな記憶。

…女はそれを見て、祐輔に近づく。いや、正確には、額と額が触れ合う距離まで顔を近づけていた。

そんないきなりの状況で顔を赤く染める祐輔。

よく見れば、先程見た女…とは違うよう。

女というより、少し幼さが残っている…。言うなれば、少女。

少女は、その様子の違いに気付いたのかは知らないが、そのまま情報を魔に乗せて流す。

膨大な情報が流れ、祐輔はその多さに頭を抱える。

頭痛…だからだろう。体中に、汗がわき出て、その一部が額から落ちる。

「…大丈夫？」

「何とか……」

少女の問いかけに、祐輔は答える。目を閉じて、一度全てを整理し、また開く。翡翠の瞳が、露わとなり、少女を射抜く。

「…夢の中だね。きつと」

「そうだよ♪ で、貴方の事が好きになった♪」

そう笑顔で言う少女。名前は………教えてくれなかった。

そんな偶然で必然な夢での出会いを経て、今此処に現れている。

多分、千里にでも言い伏せられて忘れてたんだろぅなぁ…。と、自

分で納得し、剣を引き抜く。

「…そっか。とりあえず、あのポンコツじゃないポンコツ何とかしてから話はしようよ」

「それなら大丈夫♪」

少女はそう笑顔で言う。

その意味がイマイチよく解らない祐輔は、辺りを見て、先程の女を思い浮かべて、推測する。

それで、一つの答えに辿り着く。

一人じゃない。

その答えに。

「全く。幾らこっちの世界といえども、ここまで力を使わせるとは、苦労させるですの」

また声が聞こえる。祐輔の背後から。

だけれども殺気とかは無く、ゆっくりと振り向く。

：一瞬。見間違えたかと思う。何故か。その姿が、瓜二つだったからだ。

少女ともう一人。交互に見渡しては、頭を抱えて「う、うう？」と、混乱。

それを見て、さも可笑しそうに笑う二人。わからん。全く分からん！と、少々自棄になりながらも向き直る。

「取り乱してごめんね。俺は森羅祐輔。君達は？」

「麻井美紗だよ。で、こっちが——」

「美沙ですの」

声の感じとかは聞く感じだと違っていた。けれども、見た目は殆ど

一緒……。

違いは？　と言われれば、髪が前に垂れさせているか、ツールであるか。その程度の違いしかないだろう。

祐輔もその違いで見分けるしか多分、なくなる。とりあえず、敵じゃないのに安心したか、一息つく。

……実際。夢で見ていた少女が出てきたのだから、かなり驚き、戸惑いは隠せないものではあるのだが。

とりあえず、姿を見て思う事が一つあり、聞いてみる。

「…双子かな？」

と。それに対する答えは、美沙から返って来た。

「そう思ってくればよろしいですの」

思ってくれば…。その言葉に違和感を感じたがあえて言わずに頷いておく。

実際。そうじゃなくても別にいいのだ。祐輔自身、気にしている訳ではあるまいし。

気にしていてもすぐに自分で解釈して納得する。

そんな感じなのだ。結局。森羅祐輔という人間は。

必要最低限。後は自分で工夫して、考えて、何とかする。そんな人間性の持ち主。

〈祐輔。千里から通信です〉

「千里から？　なんて？」

〈何でも——〉

その通信の内容を聞いて驚愕した。二人の方はそこまでではないが、祐輔自身が、身の毛もよだつ様な。そのような感じの報告だから。

信頼していた人物が、瞬殺の如く簡単に落とされる気持ち。一番強い者が。誰かに落される気持ち。それを分かってあげられるのは、その仲間だけ。祐輔は、空を見上げた……。

＊

「リボルバァァ…シュートォ!!」

その怒声にも似た咆哮で振り抜かれる拳。

受けるのは、翼竜。衝撃を与え、鱗を削っては、また再生し、さらに強固なものになる。

その繰り返し。先程からだ。おかげで、攻撃が通っているという感覚自体もなくなっている。

———爆発!

その衝撃に身を任せ、放った主はバックステップで下がる! 膝をつき、手をつく。何発。何十発振るったであろうか。放った拳から紫電がバチバチと出ている。

地面には幾つものクレーターと爆発の痕跡。幾つもあることから、随分と戦ったのだろう。だが、ピクリとも動かない。

むしろ、こちらが傷つくばかり。そんな様子を見て、赤髪で長身の鎗使いの少年と橙髪で、双銃を握っている女性が出てくる。

「スバル!」

「スバルさん!」

「ティア…エリオ…ごめん。もうちょっと時間欲しかったよね……」

そう言い、立ち上がるスバル。フラフラと、少し頼りない感じに立ち上がる。

けれども、この状況での打開策は、誰ひとり欠けてはいけないもの。

ティアナはそのような案を考えていた。
けれども、この状態であまり無理はさせられない。そうも悟っていた…。

—どうする……？—

思考をし始める。どうすればこの状況を打開できるか？ 無茶はさせたくない。

かと言って、外してしまえばアタッカーがいなくなる。

皆の長所を長所を有効に使うためには、アタッカーが先陣を切るべき。誰が欠けてしまえば全てが使えなくなる作戦。だからこそ、迷っている…。

「LOCK—ON. READY…」

なめらかな発音。そして、耀き。今は夜なのに昼と錯覚してしまうような輝き。

それは渦を巻き、大きくなっていく…。熱を持ち、輝きが増す。それを使う主は、黒髪に黒瞳。首にはスカーフの様な物を巻いている。蒼基調の西洋服の様なバリジャケットに身を包んだその女性は、さらに番える弓をさらに引く。

「SHOOT！」

その言葉と共に、軌道を描き、ワイバーンに吸い込まれる。それを見た女性は一気に距離を詰め、剣を4本刺す。

菱形の形に打ち込まれたそれに。思いつきり魔力を注ぎ込む。すると、出てくるはずの鱗が出てこなくなった。

それを見た瞬間、ニヤリと笑顔を作り、ワイバーンから離れる。

そして、エリオの隣に立ち、言う。

「貫いて来い♪ 少年♪」

「千里さん!？」

エリオはその声に驚く。

当の本人はというと、何故気付かなかったの…？ とでも言うように、長あくため息を吐いていた。

だが、そんな声とは裏腹にティアナは千里がやった事に驚いていた。ただ単に、何時も食堂でお茶を楽しんでいる様な感じの人が、いきなりあんな魔法を使うのだ。無理もないはず。それを見てか、ティアナに千里は言う。

「やってやれ、リーダー♪ あのデカブツに一発ね♪」

笑顔で。そう言う。

先程の行動と魔法は、チャンスを作れなかった私達のためのチャンスなんだ…。と、ティアナは瞬時に悟った。

ティアナは一回瞳を閉じて、また開く。後ろにはキャロ前には頼りになる二人。それぞれの位置を確認して、念話を飛ばす!

(行くわよ! 皆!)

それと共に、浮かぶスフィア。空葉莢は地に落ちて、チン、チーンと音を立てる。

それが渦を巻く様に集束され、橙色の、太陽の様な色の輝く球体が生まれる。

さらに、アタッカーの二人が一気に突貫する。片方は蒼き閃光。もう片方は紅き燕!

「エリオ!」

「はい!!」

二人は、自身の得物を構え、空葉莢が得物から排出される。

スバルの得物はさらに鋭く回転!

エリオの得物はさらに勢を増し、突貫する!!

千里が作った、生肌の好機チャンスに向かい! 二人の力を合わせた技を放つ!

『スパイラル・ドライバアアアア!!!』

その衝撃は、ワイバーンを揺るがし、橙色の閃光は、またさらに輝きを増す!!

ティアナの額には、汗が滲む。

だが、それ以前に瞳が違った。このチャンスを逃すわけにはいかない! そう自分に言い聞かせ、自分の相棒であり、得物のクロスミラージュを握り直し、開く!

「スターライト・ブレイカアアアア!!!」

その怒声にも似た叫びで、極太のレーザーの様なそれが発射される!

奔流はワイバーンを巻き込み、内側から鱗を剥がす!!

さらに、奔流は肉をえぐり、ワイバーンを飲み込む!

奔流が細くなり、完全に消えると、空から物体が落ちてくる。

月夜に輝く4つの銀の物体は、落ちている時に塵となって消えた。

「倒したの……?」

力尽きてへたれ込むティアナ。その顔は呆然としていて銀の物体を見ていた。

そんな様子のティアナにスバル、エリオ、キャロが来て、激励の言

葉をかける。

千里も、ティアナの肩を掴んで笑顔を作り、「やったわね♪ リーダー♪」と声をかける。

その言葉に、ティアナの顔はだんだんと笑顔になっていき、「はい!!」と応える。

千里はため息を吐いた瞬間。通信が入る。この戦いの事を教えてくれた、アリシアからの通信。

「どうしたの？」

……内容は、祐輔とはやてに送っておいた。あの二人なら何とかしてくれると思ったから。

そう思ったのにもちゃんとした理由がある。

それは………!

「ゼロが落ちた………!」

第9話一奇襲（後篇）一

「ラテーケン…ハンマアアア！！」

その叫びとともに、鉄槌が振り抜かれる！

だが、だがそれは障壁によって、阻まれ、弾かれる！

そして、ガジェットは体制が崩れるのを狙ったかのように、砲撃が
ヴィータを襲う！

「アイゼン！」

〈Load cartridge. Schwalbe fliegen, F〉

その機械音声が響くと同時。柄の部分が動き、赤い空葉莢が排出される。

その排出された葉莢は、瞬時に姿を変え、小剣と球体が合体した様な形になる。

二流でも構わねえ…。三流でも…。だけど！ ヴィータはアイゼンを握り直し、イメージする…。

思い描く理想の軌道…。決めるための理想の流れを…。その間にも砲撃が迫る。

スッ…。と眼を開く。私は守る物のために戦う！ 鉄槌を後ろに引き、叩きつける！

砲撃はすぐ傍！ それも構わずに、思い切り叩きつける！

「フラガア…ラック！」

放たれる、紅銀の槍！

その槍が通るのは、思い描いた軌道！

イメージするは、すべてを貫き、破壊する理想！

槍は砲撃を貫き、いくつにも分かれ、ガジェットに降り注ぐ！

最後の一つが貫かれた時、槍は粉々に砕け散り、爆発。

肩で息をするヴィータ。それを物語るかのように、地面から煙が立ち上る。

「…此处まで魔力食わされるとはなあ…。恐ろしいな…。このガジェットは……」

そう言い、アイゼンを回す。円を描き、また手に戻る。

その時、ヴィータは感じていた。様子がおかしいと。

何時もなら、ゼロが誰かの手助けに行っているはずなのだが、その様子すら感じさせないほどの静けさ。

なによりも、ゼロが引きつけているはずのワイバーンがずっと佇んでいるのだ。

そのまま形を崩さずに殺したかもしれないが、ゼロに限ってそのような器用な事はしない。

それは絶対にわかっていた。満身創痍が一番近かったのだから。

「まさか…！」

ある一つの答えにたどりついたヴィータは、飛ぶ！

自分の答えが間違いであることを期待しつつ。

＊

「フラガドルヒ！」

はやてのその声とともに放たれるいくつもの小剣。

行く先は、3人が相手をしている、ワイバーン。

カキンカキンッと、かん高い音を発して、落ちる。

それを感じ取ったかのごとく、ワイバーンは、ゆらりと振り向き、口を開く。

そこには焰が収束していく。はやてはそれを見て、ニィ…と、笑う。

「ディバイン：バスタアアア！！」

月夜に輝く桃色の閃光！

なのはが放つその奔流は、ワイバーンの炎を横から無理やりかき消す！

ワイバーンは、それに驚き鱗を針状にして放つ！

だが、当たる針はなかった。タイミングはほぼ完璧。

なのはは愛機の形態をナツクルに変え、砲撃防御にアルスに習った放射状防御に変えたのだ。

針は、力を失くしたように地面に突き刺さる。

彼女はワイバーンの力に感心していた。防御だけではなく、攻撃も強化されていることに。

その時、ワイバーンの上空が影る。

ワイバーンが姿を確認しようと頭を上げた瞬間、頭部が真っ二つに斬り裂かれた。

鮮血が飛び散り、紅に染まる金の閃光…。大剣を担ぎ、フェイトは今度、横に構える。

「フウウ……………」

呼気からしても、普通ではない。そして、その構え方は普通では考えられない。

忍者刀を持つかのように構えた瞬間、空高く跳躍！

空中で体を捻り、回転！

輝きは増し、紫電を纏う！

「臥竜！」

落下の時の勢い、回転の勢いを利用し、斬り付けの動作に入る。竜という名の通り、荒々しくも、優雅な斬劇が繰り広げられる！鱗を削るかのごとく繰り広げられる斬劇！

1……2……3……4……5……6、7、8、9、10……！

飛び散る光。煌く斬光。太刀を入れる速度はどんどん上がっていき、もうその速度は、光速を超える！

それをもろともせず、尾を振りかぶるワイバーン。

ちょうど、100太刀を決めたところで、跳躍する！

大剣を双剣に組み替える。柄が二回動き、中のリボルバーが回転する！

そして、右手に魔力を練る。それと同時に魔法陣が開く！

狙うは、鱗をはぎ取った皮膚！

「デイバイイイイン……バスタアアアア！」

「ブリューナク！」

「トライデントスマッシュアアア！」

三人は、自分が一番必要としているスキルを、技を放つ！

3つの奔流は一本に纏まり、傷口をめがけて、衝撃と威力が伝わる！

悲鳴を上げるワイバーン。それに対して奔流は肉を抉り、内臓を貫きはじめる！

貫き、爆発！

奔流が粒子と化し、消えた時。

ズシン……と重たい音が辺りに響き、ワイバーンは倒れる。

息を整え、愛機を横に振るう3人。

煙が晴れ、ワイバーンの姿が現れる。

大穴が開き、倒れているワイバーンがそこにはいた。

「やったんか…？」

「ゼロ君の集団戦口座受けておいてよかったね……」

なのはは率直な感想を漏らす。

集団戦口座。

ちょうど中学2年生くらいの時に、リンディさんに頼まれたから。という理由で無理矢理にさせられた。

それ相応に実践も交えて、ゼロを倒したこともあるため、強くなったのだが。

今、ゼロは管理局内で一番強いらしいから、どうなのかもわからない。

「そうだね…。そういえばゼロは？」

フェイトがはやての方を向くと、はやては驚きに顔を染めていた。

驚きというよりかは、悲痛を言うべきなその表情。

なのはははやてに呼び掛ける。応えない。

フェイトも呼び掛け肩をゆする。だが、応えない。

フェイトははやてが見ている文書の内容を見た。

それを見て、フェイトは愛機を力強く握り、空を駆ける！

助けるために…！

＊

「っ…！」

起き上がれない。指すら動く気配がしない…。

ゼロは先ほどの記憶を引き起こす。確か、壁にでもたたきつけ

られたんだっけな…！

彼は何とか傷の応急措置を施し、起き上がる。

魔力自体もそこまであるわけではなく。

かといって、逃げることも、骨格自体が崩れかけているから、無理。こういうときは、考えるよりもまず行動する。じゃなければ死ぬ。それをわかっていたゼロは、疾駆する！

攻撃が当たらない場所に。慎重に様子がうかがえる場所に！

だが、それはあまりにも無理があった。

まずは左の足。続いて、右足が折れる。

体制はもちろん崩れ、倒れた瞬間に嫌な音がし、吐血する。

「倒せたのは、3体かよ…」

体を無理矢理ひねり、杖を向ける。

唯一の攻撃手段。それが、杖から放たれる、砲撃だけ。

万事休す、絶体絶命のこの状態。助けは…：求める必要もなかった。

空に輝く黄金。貫く深紅。それはワイバーンを直撃する！

放った主は二人。不甲斐ないところを見せたな…。

と、ゼロは一人思う。立ち上がるうとするが、うまく立てない。

その時、後ろから足音が聞こえる。蒼銀の髪。金の瞳。

ゼロを見て、笑う。

…これから、運命の歯車が変わり始める。

「お前は…誰だ？」

＊

「お前は…誰だ？」

その声に、その人物は答える。

「麻井美緒。貴方を助けに来た」

「…記憶にないな」

「当然。私たちはこの世界にいないもの」

「この世界…？」

ゼロはそのワードに首をかしげる。

世界の理。それを全て知っている人物でもわからないもの。

それが、この世界にはいない。その疑問であり、答えであった。
なにが起きている…？

ゼロは動揺で焦りを隠せない。

「……麻井と言ったな。何者だ？」

「私たちは——」

「お母さん！」

美緒が何か言いかけた時に、もう一つ声が聞こえる。美紗と美沙だ。
そして、何時の間にか、ワイバーンが倒されていた。

貫かれて。砲撃とかそんなレベルではない。体自体が殆どなくなっているのだ。

六課メンバーは、俺を必死に搜索している様。立てないから、歩けない。歩けないから、姿を見せれない。

どうすっかなあ…？ そう考えてた矢先、体が軽くなる感覚を覚える。いや、繋がっていくような感覚。

何時の間にか、起き上がれるようにも、歩けるようになっていた。

「……なんでだ？」

「…教える必要はないですの」

「……そうか」

もう一つの声がする。

ゼロは振り向かず、嘆息し、手首を捻る。

詮索をしないのが、ゼロの主義：ではなく、むしろガリガリいく派なのだが、今回はどうもそんな感じではない。

少し。ほんの少しだが気になる事がある。先ほどのワイバーンの事。それと、ガジェットの反応。

全てを繋げて、犯人を捕まえるか殺すかしなくては、この状況は：。そう考えていた。

「どこへ行く気ですか？」

「仲間のとこだよ。お前らとはまだ知り合い。顔見知りレベルだ。それに、”戦うなら”俺はまだ底を見せてない」

そう言うと、手を振りながら歩く。

六課メンバーと合流し、揉みくちにされているのを、見た3人は嘆息する。

笑っているゼロを見て、美緒は笑顔を作り、

「そっか。行こう。美紗、美沙」

「けど、母さん：」

美紗がそう言い、ゼロと美緒を交互に見る。

美沙は美紗の肩の上に手を置く。そして、美紗を見て、「好きなんですの？」と、言う。

その瞬間に、顔が真っ赤になり、手と顔をぶんぶん横に振る。

「ち、違うよ！ 別にさっき会った祐輔さんがどうかそんなんじゃないくて、えっと、その、あのままでいいのかな？ って思っただけだよ！」

「大丈夫だよ。誰もゼロが死ぬとは思ってないみたいだし」

美緒はあえて祐輔に気があることには触れずにそう言い、六課に背中を向ける。

「お母様の言うとおりで、少し考えすぎでは？」

そう言って、美沙も美緒の後についていき、美紗は「待つてよー！」と言って、後を追って、どこかへ消えて行った……。

＊

美緒達がため息を吐いて見ていたころ、ゼロは、六課メンバーの皆さんに囲まれていた。

まあ、心配掛けまくったから、しょうがないといえましょうがないが……どう説明しようか……？

と、まあ、先ほどの状況を巧くオマージュする方法を考えていた。撃墜された人物が、こんなピンピンで歩いていたら、そら誰でも驚くだろうな……。と、いうのも少しある。

正直。面倒だったのである。歩かずに行くことが。そしたら、さらに面倒の積み重なり。

「なんでそんなピンピンしてるの？ ゼロ」

「いや、なんでって……」

非常に気まづくなってしまった。打開策は、二つ。魔力爆発させて、自分の骨折り直すか、アリシアに全責任を持たせる。だが、後者はゼロがやると絶対に変な目というか、さらに気まづくなってしま……。

「アリシア、この戦線元帥のどこが撃墜だあ？ ぴんぴんしてんじやねえか？」

「あれ…!?」
「…うぐ…!」

ドサツと崩れ落ちる。魔力爆発させ過ぎて、複雑骨折にしてしまった。

意外と痛かったらしく、その場で脂汗をかいて倒れ伏す。

多分、美緒達がいたらなんとかするだろうが…。

はっきり言って、そこまでの力はゼロにはない。記憶操作は、範囲外、という事で。

「ゼロっ!?!」

「応急処置で立ってたんだ…。動けん…」

そう言い、意識がだんだんなくなっていくのをゼロは感じ、コトツと、意識を失った。

それを見たフェイトは祐輔におどした様子で、しがみつく。

祐輔は「落ち着いて落ち着いて」と言い、ゼロの容体をみる。

ジーツとみて、告げる。

「複雑骨折」

「それだけ?」

「うん。それだけ」

至って簡潔にそう答え、それに一同が呆気を取られる。

その後、祐輔は、指を持ってあり得ない方向に曲げたりしている。

それを見た全員。祐輔に一発入れ、ゼロを医務室に運んだ…。

＊

機動六課が援軍到着直後。デュノアは、ある場所にいた。”魔道師

達の辺境”そう呼ばれる場所に。

なにも意図がないと言って、此処に来るなら見当違いだ。
準備するために来た。本当の意味での殺しを行うために、ここに。

「……本当にいいんだな？」

デュノアは襟の裏に隠してある通信機に話しかける。

返答は、モールス信号で返ってきた。声を聞かれると警戒されるためだろう。内容は、「好きなようにやれ」というもの。

「了解」：そう返し、切先を向ける。そこにたまっている魔道師に。瞳に黒の焰がともる。何が起きようとしているのか分からない魔道師達。

目が合った瞬間に倒れる魔道師。

デュノアはそれを確認すると、ジャケットからサングラスを出し、掛ける。

「任務開始」

そう言い、何人かの魔道師を転移させる。

暗い空。今日のこの星の天気は、雨。傘などは血で濡れるため、常備していない。

雨だけでなく、最高なのだ。血で濡れる殺人鬼は。

雨が降る前に、自分の本拠地に戻るべく、魔道師を連れて転移した。

＊

「でええええい！」

「甘いつて」

剣を指二本で受け止める祐輔。そして、後ろから、砲撃。

軽々と落とされるタクミ。祐輔は肩を回し、調子を確認する。
その後に嘆息し、その祐輔の隣にセイバーが降り立つ。タクミは後頭部を掻きながら起き上がる。大剣を双剣に分解し投げつける。

「トリア」

「はい」

祐輔がそう言うのと、アルトリアが前に出て、スフィアで迎撃し、祐輔は魔力糸で、自分に引きよせて、手に取る。その後、タクミが突貫。背中に携えている剣二本を引き抜き、ぶつける。

それと同時に形状が変わり、長身の剣になる。姿が霞み、祐輔は剣を生成し、後ろを見ずに背後で構える。

金属同士がぶつかり合うかん高い音。その音の後に、衝撃波が響く。それを確認したアルトリアは、スフィアを放つ！

放つ！放つ！放つ！放つ！

弾く！弾く！

幾多もの金色を！タクミはアルトリアが放ったスフィアをギリギリまで引きつけて弾く。

祐輔はスフィアを撃つと同時にバインドをかける。そこでアルトリアが首筋に剣をつきつける。

「さて、もう終わりかな？」

「そうなるな」

案外あっさりと認めたタクミは、剣をバラバラにし、背中に携える。本当は、もっと戦略があるのだが、あえてそれはしなかった。

先日的一件事があったから、空気がピリピリしているためだ。

ゼロはほぼ回復しているのだが、まだ無理をするわけにはいかないと、訓練を止められているのだ。

完全復活すれば空気も変わるだろうに。そう思っていたが、ゼロ

が念を入れ過ぎて、無理な状況だ。

「さて、集合！」

「ちょっと待てよ」

「まだ叩きのめされたいの？」

「違う：あれは何だ？」

タクミが指を刺す方向には、昼なのに、光が見える。相対の弧を描いたかと思うと、煌き。

祐輔達めがけて集束砲が放たれる！

” defense ”

凜とした声とともに、張られる青の境界！

ぶつかる閃光は拡散する！

祐輔はそれに啞然とし、空を見る。その境界は、今、療養中のゼロが張ったものなのだから。

＊

「こりゃでかいモン作ったなあ」

「ほお。これはこれは元帥どの。嫁さんにばれた時がおっかないですぞ」

「んなこと言ったって、緊急事態だったの」

ゼロは怖い冗談を言っているタクミを尻目に体勢を立て直し、剣を抜く。

それと同時に、何発かこちらにスフィアが向かってくる。

切り裂くそぶりを見せずに、左手に魔力をため、過剰な魔力は紫電を纏う！

「はあああ！」

その掛け声とともに放たれる魔力と紫電！

先ほどの青の境界と似たようなものだが、違いは、勢いに任せて突進している事。

スフィアとかき消し、放った魔道師全員の瞳を見る。

変化がなく、気色悪いと思った刹那。

ゼロがくの字に吹き飛び、肋骨からミシリ…と軋むような音が漏れる。

地面にクレーターを作り、転がる。

「痛…」

そう言いながら体を持ち上げ、空を見上げる。いや、正確には敵の数を見極めている。

気づくはずなのに気付かない。体に無理とガタがきている証だな。

これは。そんな感じで考え、ISを発動する。翡翠の瞳が深紅に変わり、辺りを探る。

「…サーチャー破りのモンでも纏ってんのか…？」

ゼロは立ち上がり、意識を集中させる。

相手は動く気配すら見せない。誘っているのか…？ 誰もがそう思

い、ゼロは右手で合図^{サイン}を出す。

その合図は牽制のサイン。それと、XBARRELの射出。それを見た祐輔はフラガラックを放つ。

だが、何にかき消されるような衝撃音とXBARRELが装着される音。それが同時に響く。

（ゼロ、やっぱり何か仕込んでるよ）
（わからないとも思ったか？）

祐輔からの念話に嘆息しながら答え、肋骨のヒビを治す。
装着した武器自体の重量が、対艦機銃の5倍以上重い。

それを使うためには、体が万全な状態でなくてはいけない。
だから治す。そして、IS自体が効かない可能性があるため、一度切る。

視覚、聴覚、嗅覚、それと第六感。触角はもちろん頼りにならないから使わないだけ。

「さて、射的？ 格闘技？ 俺はどっちでもいいぜ」

ゼロはそう言う。実はこの言葉、合図なのだ。

援護要請と合図を出した瞬間に総攻撃を開始するという合図。

それは、デュノアがいなくなってから作ったサイン。手甲が3回上下し、空の葉莢が排出され、集束が始まる！

渦を巻くように集束が始まる。それを見た魔道師が何か動きを見せるかと思ったのが祐輔達。

だが、ゼロだけは違った。瞳を見た瞬間にいつかの襲撃の時の傭兵だとわかったから。

そんなのはわかっていいるから、あえてなにも言わない。

「杭30個！」

それを聞いた瞬間に、祐輔は、魔道師にフラガラックを闇雲に放つ！
いや、別な考えが浮かんだから、打ち込んだような感じに見える。
数撃ちゃあたるという訳ではないが、そういう考えを導きだし、実行に移す。

序盤の100本くらいは先ほどと同じ。だが、200本を超えた時

点で、突き抜けるものが見え始める。

「なくな…った！」

ゼロがそういった直後。砲口から光の玉が出る。そもそも、これは攻撃用のものではない。相手の影を見るためのもの。

ゼロは、射出を確認した瞬間を見計らって、飛び出す！

フェイト達が継いで飛び出そうとした瞬間、爆発音。光が輪を描きながら、広がっていく！

昼間ですらその明りに気づくぐらいの発光！

思わず目をふさぐ一同。ゼロは光の中に飛び込む！

「見つけたっ！」

「ッ！！」

繰り出される斬撃！ 光の一閃！

光が消える前に、砲撃を撃ちだす！

かぶっていただろうローブは破れ、だんだんと姿が見えてくる。

そして、その姿が確認できるようになった時に、砲撃を放つ！

だが、その砲撃は、手に持つ槍によって、霧散する！

そして、輝きが完全に消え失せる。ゼロは舌打ちをし、他の一同は驚愕に顔を染めている。

「もっと、早く決めるつもりだったんだけどな」

ゼロはそう言うと、XBALLを横に払い、背中にバックパツクのような、推進用の機械を取り付ける。

さらに、それらをすべて連結させ、砲身を作り、構え、睨む。

デュノアは、先ほどの魔道師全員を集め、彼らは杖を六課のメンバーに向ける。

無表情。その顔でゼロを見る。対しているゼロは、殺気を感じつつも、睨む。

これから何をやろうとしているか。わかっているのだが、あえて聞く。

「なにが目的だ？」と。デュノアはそれに答える。

「殺しに来ただけだ」

「：俺をだろ」

「そうだ」

デュノアはそう簡潔に答えると、ゼロに赤い液体の入った小さい瓶を投げる。

何かの薬品の様である、とゼロは見る。

そして、その薬品を見た後に、デュノアを見る。

冷たい目でゼロを見ている。

「それを飲め。楽に逝ける」

「これをか？」

ゼロは小瓶を前に出し、対する者は頷く。フェイトが動こうとするが、はやてはそれを遮る。

此処で動いてしまっただけはいけないとわかるからだろう。

ゼロは笑い、それを空に投げ、撃ち抜く！

鮮血の如く赤い液体は、蒸発し、消えてなくなる。

呆気を取られたような顔をするデュノア。

その顔にゼロは口端を釣り上げて笑う。

「んなこと、誰がすつかよ、ヴァーカ！」

「…成程な」

どこか納得したようにそう言うデュノア。かぶっていたローブを取り、サングラスを外す。

大抵の人なら、立ったまま失神するくらいの殺気。それに伴い黒化する槍。

「なら、もっと苦しみの中でもがいて死ね…！ 八神ゼロ・S・A・ハラオウン！」

構え、振り抜く！

それと同時に。後ろから迫る閃光！

ゼロはこんな状況の中で、笑う。満面の笑みで。

それと同時に。閃光が一気に消えさる！

瞳が完全なる深紅に染まり、黒槍を受け止める！

枷を一個外したのだ。自分が、自分自身にかけている”戒め”という名の枷を一つ。

「デュノア・シャル。お前に俺の嫌いなものを教えておいてやる」

ゼロは一呼吸置き、小動物が簡単に死ねる程度の殺気を出す。

それと同時に、腕の先に魔力が灯り、黒槍を握りつぶす！

「闇討ちと、人質だ…！」

ビリビリと流れる殺意と殺気。

黒槍の先が砕け、デュノアはバックステップで距離を取る。

ゼロは背中に銃を携え、手を合わせると、大剣が出てくる。

柄を持ち、一回転させて肩に担ぐと、言う。

「んで、俺はお前を殺す。異論は認めんからな」

最後の戦いの幕は切って落とされた…。

第10話―死闘（前篇）―

「んで、俺はお前を殺す。異論は認めんからな」

…睨みあう二人。その場だけ、時間が止まったかのように静かになっていった。嵐の前の静けさとは、正にこういう事だろう。その様子を後に駆け付けた他のメンバーも見つめている。

動かず、大剣を片手で構え、杖を構え。その先に光を灯らせ始める。渦を巻くように閃光は集まっていき、夜に太陽ができたような輝きが生まれる。

「ロスト…」

「ブレイブ…」

光を放つための言葉が紡がれ、さらに集まり方が激しくなっていく中、先ほどから消耗が激しいゼロは、その光を剣に纏わせ、力とする。そして、両の手で下段に構え、跳躍する！

このままでは格好の的。フェイト達が動き出すより前に他の魔道師による攻撃がゼロに放たれる。防御することもなく、反撃する素振りも見せないゼロ。剣を回し、周りに風のようなものを纏う。

それがあるおかげで、砲撃自体は実質のところ落とされ、攻撃自体がデュノアにたたき込まれようとしたその時に、目の前に魔導師が立ちふさがり、障壁を展開して防御する。刃と障壁が当たる一瞬の時間。刹那とも数えられるその時間帯で、デュノアには十分すぎた。自分にとっての魔道師はただの道具。そう思えるからこそ、砲撃なのだ。

「はあ！」

「…レイ」

障壁が紙の様に切り裂かれ、鮮血が飛び散るその瞬間。閃光を打ち出すための言葉を発し、撃鉄を引いた。

漆黒の奔流が、魔導師とゼロをのみ込み、辺りの木々も巻き込んで、着弾。太陽が落ちたかと思う強い光！ それを見ていたメンバーは動揺し、魔導師が動き出したのに反応が少し遅れた。

気付いたところには、砲撃が撃ち込まれ、幾多もの尾を引いている。

「…舐めるな」

その言葉が聞こえた瞬間、幾多もの攻撃が一気に散り、煙幕が散る。額から血を流して、眼にでも入りでもしたのか、左目は閉じているが、そこまでの支障はないようだった。むしろ、先ほどより殺気を増していて、辺りの木々が枯れ始めていた。

一步踏み込むたびに草木が枯れていき、その光景は地獄の支社でも来たかのような。そんな状況でもデュノアは微動だにせず、佇んでいる。動きがあったといえば、呼吸で肩が動くくらい。それもほんの少し。よく見ていなければ、わからないほどだ。

「まだ生き残っていたか」

「いい加減にしろよ…。暗殺者^{キラ}」

「確かに、このようなやり方は暗殺じゃないですね、”元帥”」

互いに、自分が気に入らない呼び方をして、さらに殺気を増す。殺気に当てられてか、キャロが膝をついている。エリオはそれを支えているが、ゼロはそんなこと気にせずに、跳躍する。姿が消えたと思えば、大剣を振り抜いていた。

対するデュノアは、数秒遅れて地面にたたきつけられる。その後に骨が折れるような音が響く。ゼロはデュノアに直撃したというのに、舌打ち。大剣を空中で分解し、地面に突き刺さる。

ゼロが持つのは長剣。振り回すのには不適當かもしれないが、攻撃するためではなく、防御するための剣。

目を閉じて、風の音を聞く。首を少し傾げ、地に着地したゼロは、デュノアを見る。それを見た瞬間、驚き、目を見開くが、同時に笑った。それと同時に襲いかかる砲撃。それをかわさずに、即座に反転し、袈裟に斬り、散らせ、無に還す。

「やっぱり、お前はそうではないくてはいけないな、暗殺者」

「まさか見破るとはな」

「想定内だったの。バレバレだ」

ゼロはそう言い、長剣を大剣に戻す。その後、肩に担ぎ大きく息を吐き、力を抜く。大剣が地面に付き、先の部分だけ刺さる。これが何を意味するのかはよく分からない一同。ゼロは、そんな一同にたった一言言い放った。

「しっかり耳抑えてろよ」

そして、息を思いっきり吸い込み、吐き出す！ 超音波と通常の音波の重ね技は、時に心臓を止まらせる音波となる時がある。状況と場合にもよるが、術者にも死を発生させるような危険な音波。攻撃としては非常に相応しくないが。だが、ゼロにはもともとそれをカバーするような魔法を持っている。

だからこそ、数式と罵声と魔法。そして、自身の中に秘めている本能の攻勢を！ 全て吐き出すように放つ！ それが聞こえた瞬間、訳が分かっている六課メンバーは急いで耳を押さえ、その場に蹲る。叫び終え、ゼロは膝をつき、吐血する。嫌な汗が全身にいきわたった頃、魔導師がボロ雑巾のように地面に堕ちてきた。

本当の狙いはこれだった。戦力を極限にまで減らすこと。そうすればこれからの事がやりやすくなる。対暗殺者には、多対一より、一

対一の方が向いている。それを彼はわかっている。その行動の意味を理解したデュノアは薄く笑った。

「上機嫌だな？」

「いや、そんなことはない。お陰でこれを使わなくてはいけなかったのだから」

そう言って懷から取り出したのは、拳銃。AI機関など、どこに入っているのか？ といった感じの黒い拳銃。型番から、ベレッタと推測したゼロは背中 of 銃を左腕に携える。構えはしない。かわりに、取っ手を引き抜いてサバイバルナイフの様に開く。ちなみに、この武器。取っ手を引き抜くと銃として使えなくなる代わりに、装備型の翼となる。High-MATとは違う形式の白銀の翼ができる。サバイバルナイフには、うっすらと、青の光が見える。

「奥の手か？ 元帥」

「さあな。けど、これが俺とお前でやる最後の戦闘となるのは確かだ」

「…場所を変えるか」

「……そうだな。自分の子供と義理ではあるが弟に、力で殺すなんてことはしたくないしな」

「準備ができたら後を追って来い。時間はたっぷりある」

そう言うと、デュノアは転移していった。ゼロは、それを見送った後に思いつき仰向けに倒れる。どっと疲れが増したような、そんな感覚を覚え、管理局の方の人影がちらほらと見える。そして、あの音と殺気の重さから回復した一同はゼロに近づく。苦笑い気味にフェイトに言う。

「悪いな。巻き込んで」

「大丈夫。ゼロは強いから信じられる」

そう言って、無理やりな笑顔。ゼロはそれを見て、少しだけ申し訳ない気持ちになった。だが、ここで止まる必要性はない。いや、止まるとすべてが台無しになる可能性がある。そう言った方が正しい。ゆっくりと起き上がり、祐輔にK I Z U N Aの全体調整と、あるだけの実弾兵器を持ってくるようにと頼んだ。千里もそれについていき、F W陣とアリシアは、これからの事について、そして、現状把握のための話し合いを始める。結局。この場には、4人が残る形となった。

「4人で話すのも久しぶりだね」

なのはが他愛もない話をするかのように口を開く。自分ができるせい一杯の笑顔で。ゼロは、体を起して、座る。

「最近は大バタバタしてたしな。しょうがないだろ」

と、笑顔を作って答える。実際は、笑顔なんか作っている状況ではないのだが。それでも、笑顔を作って話す。その根性と覚悟というのはすごいものだ。それは誰もが認めるところなのだ。

「…怖くないんか？ あんな特殊技能持ちで、時間まで与え取るのに？」

はやては神妙な面持ちで、ゼロに聞く。一瞬驚いたような顔をしたものの、すぐに笑顔を見せて、「怖くない」と言う。傍から見れば、怖くないように見えるかもしれない。だが、フェイトはゼロの足と手の震えに気が付いていた。やはり怖いだろう。こうやってSランク同士の魔道の戦いは。死の恐怖がゼロを護っているのかもしれない。

い。けど、それ以前に、人間なんだ。ゼロは。フェイトは、震えるゼロの右手をそっと掴み、人差し指を甘噛した。3人はその行動に呆気を取られた。沈黙が流れ、我に返ったゼロは言う。

「何やってんの!？」

「甘噛」

さも当然のように、言っただけのけるフェイト。何時の間にか震えは止まっていた。だが、それ以前にフェイトのした行動にかなり焦っていたようで、全く気付いていない。

「そう言う事じゃないの! どういう意味があつての事なの!？」

「…手、震えてたから…」

「だから甘噛って…はあ…」

「なんでため息つくの!？」

甘噛を止めて、押し倒すような感じで迫るフェイト。あんまりにもいきなりすぎたためか、体制が整わず、押し倒されてしまう。

「こんなので震えがおさまるなら、私は別にいいんだよ…。けど…」

そこまで言って、言葉が詰まる。ゼロは、上体を起こして、フェイトと目線を合わせる。こういう状況でこういうシチュエーションに遭遇すること自体が少ないことから、少しどうしたものかと考えた末の行動。その後、思いをぶつけるようにゼロに言う。

「ゼロがいなくなったら、この部隊が作られた意味はおじゃんだよッ!？ それに、ゼロがいなくなったら、皆さびしいんだよ…。だから、死なないでね。約束だよ?」

そんな事を言っている本人は、凄く涙目だった。ここいらで冷たい反応をすると、涙腺が大崩壊するほど、潤んでいた。ゼロは、溜息を吐き、フェイトが握っている手を握り返して、あいている方の手をフェイトの胸に当てる。深紅の瞳は、今だけ翡翠の色に戻っていた。自分の震えが止まっているのを確認して、笑って言う。

「約束する。この身に代えても、俺の機動六課くわうしやくに戻ってくる。だから、皆で守ってくれ」

「うん。必ず守りきって見せる」

フェイトは頷き、何かを思い出したかのように、ポケットを探る。そして、一枚のカードをゼロに差し出す。白基調で、金の十字架が入っている。しかもすごく機械的な十字架。あと特徴があるとすれば、黒のラインが2つ入っている事。意味はあえて尋ねない。これを使うのは本当にヤバイ時だけ。実物では見たことはなかったが、ロストデバイス。その大きな特徴が、金の十字架。これ一個で、純粹なロストログア一つ分は働く事が出来る。

「絶対使わないでね。約束だから」

「…破ったら多分死んだな」

「ゼロっ!？」

「冗談だって」

実際、そこまで冗談で言ったつもりはなかった。前にも何度か話した通り、限界が少しずつ近づいているのは確かなのだ。XBALL ELは、先日使った時よりも命中精度が落ちているし、High-MATも使えなかった。

そこまで戦力がないと、不安は山積み。怖がって当然。しかも、此処までで、かなりの時間を与えてしまっている。対策用の結界を張っていない訳がない。本当は行きたくないが、行かなければいけない

い。

ゆっくりと、立ち上がってカードをもう一度見る。金の十字架。裏には、型番らしきものが書かれていた。MARK-001と。嘆息して、ズボンのポケットに入れると、銃を背中に携える。ゼロはある一か所を見つめる。そこには、アインハルトがいた。先ほどの戦いを見て、こちらの方に来たのだろう。肩で息をしている。

「兄さん、大丈夫ですか!？」

「お、おう…」

あんまりの剣幕に、驚きつつ返すゼロ。急ぎ過ぎて髪がボサボサになっている。それに少し笑って、慣れた手つきで髪を直す。それは、本当に年の離れた兄妹の様。ハルトはそれを見て、恍惚な表情をしていた。

直し終えると、右手で頭をそつと撫でる。少し驚きの様なものが混ざっていたが、静かに撫でられて、ゼロは「ファイと蓮華はお前らに任せた」と言う。多分、”お前ら”と言うものの中に、ヴィヴィオも入っているというのがわかったハルトは「私だけで大丈夫です!」と言った。だが、ゼロは首を横に振り、頬にキスをした。

「…四人でやれ。ノーヴェとチンクとヴィヴィオとハルトで」

そう言って、笑顔を見せたちようどその時、祐輔達が戻ってきた。千里の手には、日本刀20本と小太刀10組が握られており、祐輔の手には、RPGとアサルトライフル、M9が2本とデュノアと同じ拳銃だが、少し様子が違うもの、それと大量の薬莢。ゼロはそれら全部を受け取り、ありとあらゆる場所に隠し持つ。体全体が一気に重たくなるような気もするが、異空間の中に、9割ほど入っているのだ。実際は2キロもない。

「こんなもんかな」

「ゼロ、そのベレッタだけど、ちょっと魔改造しておいたから。使う時は、バースト3が推奨だよ」

「サンキューな。祐輔。後、アサルトライフルも魔改造入ってるか？」

「うん。後、これ」

そう言って渡されたのは、色取り取りの弾丸。マガジンに入っている。ゼロはそれを受け取ると、ベレッタに差し込もうとするが、祐輔に止められてしまう。そういうことか。ゼロは勝手に納得すると、腰のホルダーに差し込んだ。

戦い方に幅を広げるもの。それだろう。戦略の幅が広がり、少し安心する。それと同時に、中身がなんなのか気になった。それを察したかのように祐輔は口を開く。

「属性弾だよ。火炎弾、蒼炎弾、緋炎弾、熱弾、溶岩弾、水弾、氷弾、霧弾、電撃弾、紫電弾、雷撃弾、樹弾、木弾、閃弾、光弾、暗弾、闇弾…後、その他諸々加えて、30個以上。全部、2つずつだから、1000個はある」

「RPGはこれ一発か？」

「うん。向こうが戦車でも出さない限りは使わない事だよ」

祐輔は頷き、注意をするように言う。ゼロは、RPGから、弾丸を抜き、本体を突き返す。一瞬驚いたような表情をするが、ゼロには必要のないもの。そう分かってか、祐輔は素直に受け取る。

ゼロはフェイトとはやてにキスをした。二人が何か触れたか？と思うくらいの感覚ではあったが。ゼロは最後に振り向き、笑顔を見せる。幼い頃と照らし合わせるかのような感じで見えるそれは、ほとんど見せる事のない屈託の物。そして、言う。

「行ってくる。戻った時はパーティだな」

「調子いいなあ、本当に。まあ、それがうちの旦那さんや」

はやては嘆息して、腰に手を当てて話す。本当に信頼しているからこそ、出る言葉。本当に信頼できるからこそ、こんなにも楽観的に見られる。

心配という行為自体がごく無駄に見える。それも、彼が異常だからで、誰よりも高みにいる存在だからこそ。こんなにも落ち着いていられる。

「絶対帰ってきてね、ゼロ」

「ああ。絶対帰ってくる」

フェイトと指きりをする。果たさなきゃなんない約束、また増やしちまったな…。そう思う。

これが、プレッシャー。

これが、重っ苦しい義務。

これが、自分にとって、最大の責任。

困難が伴う。だが、それを果たせる自信はある。震えも止まった。後は進むだけ！ 拳を握り、意思を固める。そして、ただ一言だけ指示する。

「：俺が転移したら、デバイス展開して、戦ってくれ。イルはこっちに残す」

〈主！？〉

「大丈夫だ。不服なら、ブレイも置いてく
へなぞ！？〉

トンでもない発言に驚くブレイ。実際にそんな事はしない、否、できない。長年の相棒なのだ。それをしてしまったのは、此処まで一緒

にかけてきた意味がない。

冗談交じりに、そう言い、ブレイに触れる。

「冗談だ」

「ゼロ、KIZUNAは？」

千里に言われて、しまったと、顔を手で隠す。それに千里は苦笑いして、「やっぱりね…」と途方に暮れた呟きをした。ゼロは、XB ALL ELを展開して、KIZUNAの形の戻し、背中に砲撃銃^{バスター}として携える。「十分な性能だな…」ゼロは呟き、待機させる。

ちゃんと浮遊できるように設計されており、光速にギリギリ落迫いつけないぐらいの距離は楽勝に出せるらしい。実際、そこまでの高速戦をするようなら、体はばらばらになっているのだから、しない。全確認を終えると、背中を向ける。

「…本当に行ってくる。言い残した事がある奴は？」

「それじゃあ、ゼロが死んでまうみたいやないか」

「それもそうだな」

ゼロがそう言うと、笑い始めた。死ぬはずもないのに、笑った事があまりにも滑稽で。それにつられて、皆笑い、少し落ち着くと、無表情だった顔に、自信がついた。

「行ってくる。機動六課は、お前らに任せる」

そう言うと、足元に、深紅の魔法陣が開く。それと同時に、翡翠の瞳が深紅になり、中央に、Xの文字、隅には、チャージのバランスなどが表示され、消える。一度、皆に笑って見せる。信頼と信頼。

— 絆 —

それが導き出す結末は、吉か凶か。それは俺等が決めること。ゼロは、此処までで貰った様々な言葉を思い出す。

―テメエは自分で自分の事かたずける悪い癖が有るくせして、何で俺達に頼んねえんだ！俺等だって、アリシア姉の連絡がなかったら、お前、怪我するところだったんだぞ！それを他人事扱いしろってか！俺等は一人じゃねえ！チームなんだから、仲間を頼れ！―

昶の言葉。これで、仲間に頼りがいを覚えた。あと思いだすのは自分の言葉ばかり。なんでこう俺って、一匹狼で無茶ばかりの大が何個ついても足りないくらいのおバカ野郎なんだろう。と、思ってしまった。いや、正確にはそうなんだな、助けられてんのはいつも自分なんだ。そうなると、これから向かう戦地に少し不安が残る。だが、バックには皆が付いている。そう思うと、不安はなくなる。不思議だが、不思議じゃない。そう思える自分もいるんだな。と、ゼロはそう思う。

「うし。じゃあ、暗殺鬼を殺しに行ってくる」

そう言うと、ゼロは転移した。デュノアが待っていると思われる、死の境界線に。皆はそれを見送って、デバイスを起動させる。それと同時に送られてきた、大量のガジェットとワイバーン。

その量に一瞬げんなりとしてしまった。一機、二機。そんな風に数えられる程度ならまだ許せる。だが、この量と質。それからして考えられる表現は一個しかない。その表現を、タクミは口にした。

「津波だな…。まるで」

そう、目の前に、身長以上のとんでもない数の敵がうじゃうじゃい

るのだ。どこの戦場に行っても、こんな光景は見られないであろう。ゼロがいたら余裕で殲滅するのだろうが、今はそういう訳にもいかないのが現実。あり得ないだろ、この戦場。そう思えるほどの数。千里は、この数を見て、コンソールを弄り、ボタンを押し、敵に向かって走り出す！ 一見自殺行為だが、器用に敵の頭上を走っている。

「マーキングポイント、セツト！ 主砲、撃て！」

そう叫ぶと、敵の津波の中に、スターライトブレイカーSLB級の砲撃が割って飛んできた。千里は、敵を割って出てきた戦艦に飛び乗り、牽制用に矢を何本か放つ。出鱈目な方向に飛んでいき、尾で払われて消えた。それを見た千里は、メンバーに一喝入れる。

「怯えんじゃないわよ！ 向かって行きなさい！」

そう言って、主砲を発射する。「はやてがそれは私の役や〜！」と嘆いていたが、千里は気にしなかった。むしろ、戦いにしか目が行っていなくて、そんなもの気にする隙がなかった。

それを見た一同は、もう駄目だ、この人たち。と思ってしまった。二人に思いつきり失礼だが。

：つぶやいた瞬間、完全に砲撃が飛んでくるから、言わなかっただけ。そう思いたい。

「まあ、いいわ。さあ、行くよ！」
『応！』

そして、戦いが始まる…。ゼロの、皆の居場所を護るための大切な戦いが。

＊

「随分待たせたな、元帥」

デュノアがゼロの方を向いて言う。二人は、かなりの距離を取って対峙している。ゼロは、一步踏み込み、バスターを構える。瞳にXの文字が浮かぶ。

「まあな。ただ、こっからだぜ、勝負は」

そう言うと、笑い、砲口の先に光が灯る。挑戦的な笑みと、冷酷な表情が互いをとらえる。ゼロは懷から、アサルトライフルを取り出し、右手に握る。格闘で攻めてもいいのだが、それはあんまりにも危険なのでしない。

「ブチ壊すぜ…。このしょうもない、幻想を！」

―煌―

輝き、砲口から放たれる2つの矢。そのままデュノアに直撃すると思ったが、そんなに易々とはいかなかった。何か壁の様な者に阻まれて、消滅した。成程な…。つまり、そこから先は実弾兵器だけのフィールドなのか…。ゼロは、そう確信し、バスターとなったK I ZUNAをブースター形態にし、飛び上がる。縦横無尽に飛行を試した後に、突入を開始する。

「実弾武器ならいくらでも持ってる！ デュノア！ お前がなんのために俺が狙うのはわからん。殺す義務はないが、殺させてもらうぞ！」

「上等だ…来い！ 八神！」

そして、最強と謳われた戦闘機人と、暗殺者との戦いが始まる……。

第10話―死闘（後篇）―（前書き）

なんか、言い忘れていた気がしなくてもないですが、この作品は9話あたりから白姫さんとのクロスが入っております。報告するのが遅れてすみません m（　　） m

第10話一死闘（後篇）一

「おらっ！」

―閃光！―

「当たると思ってたか！？ 元帥！」

甲高い音が響き、辺りの空気が震える。剣と拳が互いに交わり、火花を散らすっ！

ゼロは、傍にある岩場に着地し、デュノアも同じように着地する。邪魔くさそうにコートを掃けるゼロとそれをもろともせずには砲撃を放つデュノア。

ゼロは砲撃を跳躍してかわし、足場を展開する。それもかなりの数の。

その内の一個を蹴り抜き、一直線にデュノアへと向かう！

それがわかっていたかのように、デュノアは腕を伸ばし掌を広げる。

「はあっ！」

爆発音に限りなく近い、物体同士がぶつかり合う音が結界内に響く。黒の境界が広がり、二人を中心に、弾ける！

地面を逆立て、足場を片っ端から消し去る！

通ったか…？ そう思った矢先、手を掴まれるような感触。

拙いと思った瞬間には、しっかりと握られて、幾ら引っ張っても外れなかった。

デュノアは右手でしっかりと受け止め、左手に黒槍を構える。

「貰った！」

その声とともに穿たれる黒槍！

ゼロは僅かながらの抵抗として、首を捻って攻撃を回避する。

その後、体がかがめて、腹にボディブローを決める！

しかし、デュノアはびくともせず、頑として動かない。

決して威力が弱かったわけではない。

かといって、出鱈目に強くすると後で身を滅ぼすことになるからセーブはした。

けれども。

「効いてない…？」

「その程度か？ 元帥」

デュノアはそう言うのと、右腕を振り上げる！

それだけでゼロは持ち上がり、宙に浮く。

「本当の格闘は、こういうものだろうっ！」

そして、近くの岩場へ投げつける！

ゼロは、背中に背負っているブースターを吹かせ、衝撃を緩和する。

それでも完全ではなく、やはり岩肌叩きつけられてしまう。

その時に受け身を取れず、左肩を強打し、うつ伏せに倒れる。

呻き声とともにゼロは起き上がり、構えを取る。

息は荒い。隙だらけなのは一目瞭然。

それを見て、デュノアは一気に特攻をかける！

ゼロはかわす動作をせずに、デュノアへ突撃チャージをかける！

「っ！？」

「元々、俺は防御は狙ってねえ！」

デュノアは槍を地面に突き刺し、特攻の勢いを一気に0（ゼロ）に持っていく、それと同時に体が宙に浮く！

ゼロはその瞬間に加速して、足払いをする！ 槍に！

宙に浮いている間はそれが支点となるため、槍は衝撃によってずれ、バランスを崩す！

「うらっ！」

そして、黒槍に蹴りで罅を入れる！

それは全体に広がり、砕けるように割れる！

デュノアはそんな様子を見て、気づかぬように、クスリと笑う。

それは、ゼロには届かぬよう。それを見たデュノアは、ユラリと立ち上がる。

「元帥。もう終わりです」

「どういう事だ？」

「だから」

その声は、ゼロの耳元で聞こえた。ゼロの眼からは、かなり遠い位置まで離れたはずなのに。

つまりこれはそういうことかよ……。気づいた時にはもう遅い。

肉が挟れる様な鈍い音とともに、鋭利で太いものが、ゼロの胸に深々と刺さった。

「もう、終わりなんですよ”。ゼロ元帥」

「…そうか。”もう、終わっちまったんだな”」

ゼロはそれを確認した後、自分の持っていた拳銃を、右の瞳に突きつけて、思いつき引き金を引いた！

銃声。それと同時に排出される鉛玉は、易々と目玉を撃ち抜き、頭

を貫く！

そんな事をしたら、脳をも撃ち抜かれて、立っていられる状態では決してないだろう。

だが、それも普通ならの話。そう、”普通ではない”。元は、人間だが、戦闘機人。

つまり、機械化されているため。一見、自殺行為となるこれも。

ただ、邪魔な荷物を地面に下ろしただけ。当然、左は希望の書の時に負傷し、見えない訳だから、これで完全な盲目となる。

目を完全に閉じて、風音から何まで感じようとするが、何一つ感じる事が出来ない。

例えるなら、壁一面が黒色の何一つないところで密室の部屋に立っているような感じ。

そんな中で、出てくるのは、本当に嫌な汗。情報がないという事の、恐怖。

失われた感覚は、視力だけではなく、聴力も。戦闘には絶対的に必要な感覚二つが一度になくなった。

「気づいたか？ 元の黒槍自体が魔法で作られた、それも視覚と聴覚の融通を利かなくさせるための罠だトラップという事を」

デュノアはゼロに話しかける。それも音が感じ取れないこの状況を楽しんで、あえてネタばらしを始める。

任務完了を迎えようとする彼の眼は、安堵がある。K I Z U N A も、腕に仕込んでいるであろう仕込み刀も、感覚自体を狂わせれば怖くはない。

そう思っている。狂っただけ。実は響いている。ゼロは焦りを隠しきれず、集中しようとするあまりに、辺りに気がどんどん散ってしまふ。

魔法自体が使えないこの空間を選んだ訳はこういう事。視力、聴力

を元に戻せない空間を作り、そこで討つ。それこそが、デュノアの経験からの簡単に倒すための答え。

それも、普通だったら、の話だが。

「……結局、俺も振り回されてただけか」

その声とともに銃声が響く。その眼は、不敵に笑っていた。目は開いていた。片方は空ろだが。

それでも、大胆不敵な顔だった。右目を失って、血も随分流れたのか、落ち着きを取り戻していた。

実際のところ、これで本当に大丈夫なのかはいささか不安なところではあるのだが。

それほど顔をしてるという事は、よほど落ち着きを取り戻したという事。

ゼロが構えているのは、拳銃。その先は、デュノアへと向けられていた。

場所がわかるわけではない。ただ、自分でいる事を選んだ。それだけ。それだけののに。

こんな場所がわかるようにしている奴はつくづく厄介だな……。そう思わずにはいられない。

「やはり、全力で殺さねばならないな」

「全力で殺してもらえとは、ありがたいもんだよ」

そんな冗談を言いながら、また一発撃つ。今度は、かなり上に銃口を向けていた。

当然、弾は明後日の方向に飛んでいく。デュノアはそれを見て、ただのマグレだな……。

そう思い、それと同時に、槍を二本出す。白と朱。対称なる二色。

その槍の矛先を、ゼロに向けた。
ゼロはそれに気づけずに、拳銃を正眼に構える。これだけしか、できる事がない。

そして、デュノアは特攻をかける！

まず、白の槍をゼロの胸部に突き刺す！

ゼロは苦悶の表情を浮かべるが、デュノアはお構いなしに攻撃を続ける！

右足を引いて、思いっきり蹴り上げる！

ゼロの体から白の槍が抜け、上空に滞空しているゼロに朱の槍を突き刺す！

デュノアは白の槍を右の肘に突き刺す！

魔力で作られた紅の槍が四肢の関節の動きを完全に止める！

デュノアはゼロの頭を鷲掴みにし、地面に思いっきりたたきつける！

辺りに煙が充満し、デュノアはゼロの懷から、拳銃を取り出し、首に突きつける。

結構、キている。デュノアにとっても、完全盲目のゼロにとっても。これで終わりだ。そう告げようと思った矢先。K I Z U N A が動き拳銃を掴む。

「っ！」

それを見たデュノアは無理矢理引きはがそうとするが、離れない。常人の20倍はあろうという銃器の圧力が、拳銃一本にかかっていた。

ギシギシと音を立てて、拳銃の先が握られている。ゼロの眼は、もうほとんど生気を失くしていた。

だが、そのコントロールする力は衰えてはいない。

「TASK……PATTERN……ENEMY……STRIKE……」

そんな単語を延々と呟いている。
まるで機械のように。

まるで、何か発動してはいけないものが始まりを告げるように、ゆっくりと。

左が動き始め、ゼロに突き刺さった槍を除去していく。

「Standby……set up……ready」

そして、KIZUNAの形状がゆっくりと変化し、光が辺りを包む！
辺りを昼と思わせるほどの極光！
その光はだんだんと収まっていき、ゼロの姿がはっきりしてくる。

背中には、銀色の翼。先の方は朱く染まっている。

両腕には、紅の装甲。それに金のラインが入っている。

全身を包むのは、魔で出来た、朱。

ゼロは、感情のこもっていない声で告げる。

「operation……START……！」

その瞬間、姿が霞む！

その一回の羽ばたきは、辺りの岩壁に傷痕を残し、切り裂いていく！
次に現れた時には、そこは平地と化していた。障害物など何一つない、そんな平地に。

「戦闘能力は、奴の方が上か……」

デュノアはそう呟くと、槍を構える。対となる二本を。姿を探すまでもなく、ゼロは上空に佇んでいた。

一度、上空に舞い上がり、加速する！

デュノアにはぎりぎり目視できる速度。

一直線に向かってくるゼロ！

構えるは、完全なる刺突！

デュノアはそれを先ほどの拳を受けた時と同じような構えを取る！

―斬！撃！―

斬撃音と同時に、正反対側に、撃音が走る！

……速さだけは出鱈目に速いな……。デュノアは白の槍を消し、障壁にさらに強度を加える！

それをどうやら察知したらしいゼロはさらに速度が上げ始める！一つ、二つと、回を重ねるごとに、斬撃は重くなり、速度がどんどん増していく！

しだいに亀裂が生じ始め、

「ぐう……！」

「God accel. STANDBY……」

その機械的な声が聞こえた直後。羽根から、朱色の粒子が噴射され、ゼロの姿が消える！

残ったのは、砂塵と粒子だけ。それ以外は、なにも感じる事が出来ないような、そんな無の空間になっていた。

「……行ったのか……？」

そう呟いた瞬間に足音が聞こえる。

同時、デュノアを護っていた障壁がまるで紙でも破れたかのようなそんな音が耳に届く。

消えたのではなかった。それを意図するかのような雄々しい羽ばたきが感じられる。

デュノアにとって、余裕がだんだんと恐怖に変わりつつあった。

化物じみた強さ。実際、それと言って構わないくらいの本当の強者。デュノアは、白の槍と赤の槍を構える！

無理な強がり。それがデュノアの体全体からあった。顔には出さなくても、全身の筋が震えている。

「BAD END（終いだ）……」

その言葉とともに、また姿が消える！

――斬・撃！――

今度は、反撃する暇もなく、打ち上げられる！

そこに、彼は追撃をかける！ 恐ろしいほど、冷たい一撃……。

冷酷、残酷。それを確実に。速さがどれだけ上がるかと入れていく！

15、150、1500、90000……。一秒間に入れていく斬撃数がどんどん上がっていき、最後に一閃を入れる！

同時、翡翠色の呪縛の様な、六芒星の巨大な輪がデュノアを拘束をする！

非殺傷のまま何度も連撃したため、痣がいくつも残っている。それを確認してから、上空に飛び立つ！

その時に橙色の光が見える。そこには、両手を広げて集束している。それは、まるで夕陽の様な、止めを刺すとは思えないほどの温かい光がそこにはあった。

「……San Light Breaker」

ゼロはその言葉とともに光を一点に集め、放つ！

陽光の一撃。それは渦を巻くような奔流を生み、空気を掻き切り、地面を直撃！

抉れ、地面が盛り上がる！そして、光がおさまり、着弾点から大爆発が起きる！

爆発が収まり、光が完全に消えさった時。

KIZUNAがまた形を変え、元の形に戻る。そして、糸が切れた人形のように、地面に堕ちた。

「見渡す限りの敵、敵、敵……ホントに、メンドクセエぞコノヤロオオオオオオオ！」

「マスター。黙ってください」

「この物量作戦を見て、お前はまだんなことを言うか！？　こんなもん見てて冷静淡々と語れるオメエがすげえうらやましいぞ！」

「マスター。敵が来てます」

「後で絶対に^{スクラップ}廃棄物にしてやるからなこの野郎おおお！」

そう言いつつ、懐にある剣を一気に合体させ、大剣を作り、大降りに振るう！

それまで寄りたかっていたガジェットやワイバーンが嘘のように薙倒されていく！

そんな風に戦っているタクミは、敵の多さにウンザリ、耐久力の強さにゲンナリで、正直言うと、戦う気なんてなくなっていた。

そんな彼の考えてる事は、早く帰って、東〇のアニメでも見るか……だった。

「多いねえ」

「こんなにワクワクする戦場なんて久々だぜ……」

そんな風に余裕そうに話す祐輔とクー。

はつきり言って、余裕すぎた。

ゼロの援護行った方がよかったんじゃないかなあ……と思うくらいに。

AMFは剣で一刀両断。それに、ワイバーンは口ん中に砲撃ぶっ放せば、難なくクリア。そんな感じ。

「てか、大将も戦えッ！」

「戦ってるけど、パターンわかってきたから一気にやっていい？」

「それじゃあ面白くねえ！」

「……ホント、戦闘^{ジャンキー}狂にはついてけないな」

溜息を吐きつつ、ワイバーンの火弾をかわしつつ。

集束砲を放ち、落とした後に、一通りカタがついたクーが言う。

「何か言ったか？」

聞こえてたんだ……。祐輔は苦笑いし、「何でもありませんよ」と言った後に、武装を剣から槍に変える。

クルクルと回した後、ガジェットを深紅の槍で突きさす！

貫かれたガジェットは、数秒の沈黙のうちに爆発し、祐輔はしゃがみ込んで、その残骸から、あるパーツを取り出す。

ただの棒に見える。それを拾って、懷から出した設計図と見比べる。
ビンゴ……！　そう確信して、設計図ごと懷に収め、槍を構える。

「さて、Brave heartを見せましょうか！」

「いきなり乗り気になったな……大将……」

そんな祐輔のいきなりな発言に少し引いているクー。

それを横目に祐輔は、周りにいるガジェットだけを攻撃し、一気に爆発させる！

その後、槍を収めて、地面に手を当てて、大鎚を作りだす！　下手をすれば、アイゼンより貫通力のあるもの。

大きさはそこまでないが。祐輔はそれを一振りし、一気に跳躍する！
敵の軍勢の中心に行き、思いつき鎚を振りかぶり、槍から空葉莢が一個落ちる。

魔力が先の方に灯り、急速に収束していく！

――爆発！――

激しい爆発音とともに、ガジェットとワイバーンが一掃される！

祐輔は鎚を地面に戻し、手を叩いて、肩を回す。

あゝ。終わった終わった。早く援護行こうかな。と考え始める始末。

その時、残骸の一角が動き、タクミが残骸を吹き飛ばして出てくる。
その顔はまるで鬼の形相であった。もちろん、こんなことしてくれた祐輔に対して。

「おうおうおう……。祐輔副隊長オ……！」

「さて、はやてたちの援護でも行くかな」

「待てやコラ」

「何？」

祐輔が無表情な目でそう聞くと、タクミは息を大きく吸い始める。
それを確認した祐輔は大きい声で耳がぶっ壊れるのを防ぐために指
で耳栓をする。

「よくもあんなモン穿ってくれたなッ!? お陰でこちとらは残骸
の下で死ぬかと思ったじゃねえかああああ!」

「命令。黙れ」

「そんな命令従うか!」

一方的な黙れ命令を速攻で却下するタクミ。

まあ、そうだろうな。と祐輔は思いつつ、最前線で戦っているで
あろう、エース達の元へと足を向ける。

その時に、クーは激しくジト目なのは、皆さんもご周知の通り。祐
輔はそれも華麗にスルーした。

「多いわね」

「マスターが言いだしっぺなんですから、頑張ってくださいよ」

「いや、連れてきたの私じゃないし」

敵の多さにげんなりする千里をなだめるかのように相棒の蘇生の弓
は言う。
レイズアロー

が、千里は責任問題問われるのが一番面倒で嫌だと思ってる訳で、
そのように言葉を継ぐ。

その通信を聞いている、エースたちはため息しか出ない。凄く長い
ため息しか。

《千里ちゃん、あんまりそういう事言わんといて……》

「わかってるわよ。艦の損傷もそこそこだし、主砲はOK……副砲も同様……使えないのは、アルカトラズだけね」

「それはいいよ。千里ちゃん」

その時、千里以外の声が艦内に響く。

千里は、デバイスをその声のする方向に向けて素早く構える！

だが、その方向には誰もおらず、辺りを見渡す。侵入された……！？
焦りが生まれ、辺りをさらに捜す。だが、誰もいない。人っ子一人も。

どこか別な場所に移動した……？ その仮説を立て、移動を開始する。

一応使うかと思って持ってきておいたデザートイーグルを構えて、奥へと歩みを進める。

ブリッジから出ようとしたその瞬間、後ろから押し倒すように押さえこまれる！

「うぐッ……！」

「静かにして。千里ちゃん」

「っ……！」

そして、今押さえこまれている事を自ら確信すると、デザートイーグルを探すか、どこにもない。

握っていたはず……。そう思い、自分の両手を確認するが、ない。拙い……。そう思い、抵抗として、もがき始める。

「千里ちゃん、落ち着いて……」

「この……！」

千里は、スフィアを作り、自分の背中に向かって槍状にして放つ！

―撃音！―

当たる……というよりも、切り裂かれたようなそんな撃音。響いた瞬間に、意識が遠のくのを感じる千里。

睡眠薬でも入れられたか……？ 眠ってたまるか……！ そんな風に思考が働き、拳を握る。

だが、首筋に手刀を入れてられて気絶した。押さえこんだ人物は、立ち上がり、千里を医務室に運んでからブリッジに戻った。

「確かに、こりや多いなあ……」

千里を気絶させた人物、麻井美緒はそう言って、甲板に立つ。敵の軍勢を見て、平然とした様子でいる。

どうしようかなあ。と如何にも楽観的に考えている。実際どうでもいいという風に思っているが。

機械の残骸の処理なんて朝飯前、ワイバーンに至ってもそう。

それがこの世界にいない物の実力。その時美緒の後ろに降り立つ影。美緒はそれを見て、少し微笑む。

「どうだった、美紗？ 白馬の王子様は♪」

「お、お母さん！」

「冗談よ。……美紗は？」

「美紗は、この前助けた……えっと……名前なんだっけ？」

「八神ゼロ・S・A・ハラオウンの事？」

「あ、それぞれ」

ここにゼロがいたら間違いなく、拳骨が飛びそうなセリフを言っ
てのける美紗。

美緒はそれに苦笑いで返す。

「いくら長いからってそれ扱いはないと思うよ？」

「そうだけどさ。美沙はそれのところに行ったよ」

「そっか。美紗はいいの？ 祐輔君のところ行かなくて」

「んゝ。大丈夫だよ。それに、余裕そうだったもん」

「強いんだね、要するに」

そう言うと、美緒は伸びをして、一言。

「片付けようか」

「その必要はないよ。少し変わった魔導師さん達♪」

『！？』

その声に二人は振り向き、魔力を収束し始める。深紅と黒の魔力光
が月明りを奪うように、渦を巻く。

声の主は、「森羅祐輔ですゝって、聞く訳ないよね、この二人なら
……」と言い、剣の柄に手をかける。

同時に、放たれる集束砲！

祐輔の後ろに、ガジェットが行き成り数体現れる！

彼はニタァ……と笑い、頭を屈め、後ろにいる鉄屑機械にすべてを
当てる！

――爆発！――

盛大な音が辺りに響き渡る……………。

それと同時に、彼等を包む爆煙…………。

静寂は、突然破られる！

赤色の翼が、遮る黒を完全に消し飛ばす！

それを生やしているのは祐輔。ゆっくり一歩ずつ近づいて言う。

「ありがとうね。後ろにいたヤバイ奴ら消し飛ばしてくれて」

「あなた狙ったつもりだったのに♪」

「そんな事だろうと思ったから、勝手に解釈させていただきました、と」

祐輔は美緒にそう言うのと、落ちた羽根の一枚を拾い上げ、朱の剣を作り出す。

それを右に持ち、左には、煙を払拭する際に邪魔だったと思われるコートがある。

彼はそれを美紗に投げやると、彼女はそれを取る。

「ま。多少はこっちの方が融通効く…………かな」

「あの！」

「…………それ、持ってきてくれると助かる。それと、呼ぶ時は祐^{ユウ}でいい」

「なら、私の事も…………その…………」

祐輔は、言葉が詰まった美紗の事を一瞥し、その後、翼を広げて、飛び立つ。

左に楯を作り、一気に突撃する！

—すうつ…………—

鋏で紙を切ったかのような音。

その音の後には、全ての敵が凍りついたような、そんな感覚が全員に走る。

足音。そして、羽根の一枚が地面に触れた瞬間。

全ての鉄屑に電撃が奔る！

全ての翼竜に傷痕が刻まれる！

鮮血、爆発が散り、剣が羽根に戻る。

美緒はそれに感心し、美紗は少し心配したげな目で見ていた。

「とりあえず、持ってきてくれてありがとうね」

「うん、大丈夫……」

何が大丈夫なんだろうと思いつつ、祐輔は美紗からコートを受け取る。

二人は、事後処理途中で抜け出し、六課の屋上に腰掛けて話していた。

「事後処理大変だな……。面倒だし」

「ユウ……」

「ん？」

「私ね、好きな人ができたんだ」

「そっか」

祐輔はそう言うと、空を見上げる。

そろそろ朝が来る。そんな具合に赤みを帯びていた。

もう、終わりだろう。そう思う時間も増えてきている。

祐輔の中では。いつ終わらせようか。と、少しづつ長引いて行っている。

このまま長引けば、どうなるかもわかっては、いる。

決心がつかず。此処まで来てしまった。

「ユウは、どうしたいの？」

美紗が祐輔の心を見透かしたような声で聞く。

少しの沈黙。その後、祐輔がゆっくり口を開く。

「もう、終わっても、いいかな……って」

「……誰の記憶に残んなくてもってこと？」

「うん。シロウにも悪いし、そろそろ戻らないといけない」

そう言うと、祐輔は立ち上がる。

コートを羽織り、屋上から降りようとしたその時。

後ろから抱きつかれる。

「行かないで……！」

その言葉は、祐輔に深く突き刺さった。

彼は拳を一旦握り締め、そして、綻ばせる。

「もうちょっと、話してようか」

そう言い、背中合わせに座り込んだ。

今日の担当

・ゼロ ・フェイト

・はやて　・麗×零

ゼロ「このコーナー来るのもすごい久々だな……」

フェイト「ごもつともな意見だね、それ……」

はやて「そんな事よりも、カメラまわつとるよ？」

ゼロ「そうだな。さて、連れてくるゲストも、EXで発覚した、俺の黒歴史第8、888号は伏せておくとして」

フェイト・はやて『何があったの！？』

ゼロ「言わない。とりあえず、神々との共同戦線！　神のみぞ知るセカイはホントにあった！？」

フェイト「主旨がずれてると思うよ……」

ゼロ「注文が多いな……。まあ、大丈夫だろう。結局、企画倒れしそうだな、1周年企画……」

麗「倒れても別に大丈夫さ。別な企画用意してるし」

ゼロ「そうか」

麗「ちなみに、KIZUNAが終わったら新作書くわ」

ゼロ「色々待てコラ」

麗「なんだ？」

ゼロ「二期は？」

麗「EAが終わった後だっ！」（嘘だと信じて自分がいる

ゼロ「随分長いなッ！？」

麗「だから、その間にも、ちよくちよく書いておくのだ。ストックを」

ゼロ「後で仇にすんなよ」

麗「わかってます。じゃあ、次回予告」

ゼロ「遂に終わる戦い。そして、黒幕」

フェイト「その正体は誰か」

はやて「次回、黒幕」

ゼロ「示唆する運命は、吉か、凶か」

第11話 黒幕一（前書き）

明けましておめでとうございます♪

年末には上げたかった……orz

さて、少し遅くなってしまいましたが、どうぞ♪

第11話 黒幕一

機動六課で丁度処理が終わった頃。

ゼロとデュノアは気を失って倒れたままだった。

そんなところに降り立つ、一人の影。

白銀に輝く髪。月夜に照らされて、それがはっきりとわかる。

「全く。こんなところで力を使い果たすとは、情けないですよ」

先日、機動六課を助けた一人、麻井美沙が、そうやって溜息を吐く。彼女はゼロの顔を見る。自分で討ち抜いた銃痕が、四肢についた槍の痕が生々しく残っている。

そつと手をかざすと、撃ち抜いたはずの銃痕がすべて消える。

これで、少しは楽になったでしょう。そんな事を少し考えながら、デュノアを見る。

せめて、いや、楽にするなら……。美沙は、ゼロの懐にある銃を取り出し、デュノアの頭に突きつける。

「ゼロ様には、悪いですが」

拳銃についてるセーフティーを解除。カチツと音が鳴る。

それが、ある意味での怒りを表すようにも見えた。

ゆっくりと引き金を引きはじめる。

それが、自身の我慢を表すようにも見える。

「ここで、終わりにさせていただき——」

「待て」

「っ！！」

振り向くと、足元がおぼつかない様子のゼロがいた。

美沙は驚きの色に顔を染め、拳銃を落とす。

ゼロはそれに目を落とし、ゆっくりとした歩みで美沙に近寄る。

一歩進む度、怒りが湧き立ち、地面の音が威圧感を醸し出している。
一歩退く度、恐怖が湧き立ち、足音が己が思っている畏怖を醸し出している。

ゼロは美沙が落とした拳銃を拾い、ゆっくりとデュノアに向ける。

「起きろ、デュノア」

「……そんな眼をしないでくださいよ、貴方の勝ちなんですから」

デュノアはそう言うと言だけを動かし、ゼロのほうを見つめる。

ゼロは眉一つ動かさずに、見る。

その瞳はさながら射抜く様で、真実を見るような瞳。

その眼光は当然一瞥するだけで、挑戦するような瞳。

ゼロは引き金に手をかけ始め、そのまま言う。

「誰だ？」

問う言葉には棘があった。ゼロ自身、少し怒りが先走っているのだ。
裏切ったという事実と誰がやらせたのか。それを聞きたいがために。
拳銃を握っている手に力が入り、カタカタと震えはじめる。

ゼロは一旦力を抜き、改めて拳銃を構える。

「聞きたいですか？」

「ああ」

そう答える。

沈黙が流れ、美沙はゼロの隣に立つ。

正直、美沙は驚きが隠せないだろう。いきなり立ち上がったと思っ

たら、銃口を自分ではなく、デュノアに向けたから。
足音すら、大きく聞こえる沈黙の中。デュノアは口を開く。

「天使改革。僕たちはそれを行おうとしています。ANGELという組織によって」

「……天使改革とはなんだ？」

「まず、戦闘機人の強化戦闘型です。背中に翼が生えてる事から、呼称が天使機人。α、β、γ、Ω……。まだ沢山います。一番強い個体は、chaos。それを使って世界を変える。それが、天使改革です」

「ANGEL。これは？」

「貴方方に届いた情報の中に一つだけ嘘があるはずです」

ゼロはその言葉に少しだけ眉を動かす。

なにか不思議そうな物を見る目で。

眉間に指を当てて考えて、そして思い当たるものがあつたのか、はつとして眼を見開く。

「そう。アルス・フォードマン。アイツは死んでは、いません」

「そうか。質問を変えよう。お前に俺を殺せという任務を命令したのは誰だ？」

「管理局内にいる、カイル・トランスヴェル。その人が命令しました」

「了解した。ありがとうな。デュノア・シャル」

ゼロはゆっくりと引き金を引きはじめる。今までの物にけじめをつけて、終わらせるような動きで。

デュノアは、自身の終わりを感じてかゆっくりと眼を閉じて、安らかな眠りにつくように。表情を変える。

そして、銃声が響く。着弾した瞬間。周りが凍りつき、デュノアを

すっぽりと包みこんでしまう。

ゼロはふう……。と、まるで一仕事終えたような溜息をする中、美沙はゼロをジト目で見つめている。

「どうした？」

「いや、入った物が実弾じゃなくて氷結弾というのに驚きが隠せないだけですの」

「絶対にそれ以外の感情も入ってるよな、その顔」

逆にゼロはジト目にジト目で返す。第一、氷結自体が目的のことだったのだから。

拾った銃に入っていたのは、確かに鉛。だが、それが凍結の能力が付いていないとは誰も言っていない。

それに、自分より強い格の物ならば、これくらいわかるだろう。そう思っただけだ。だが、そこまで考えてやっとなかった。

麻井美沙という、目の前にいる少女は、自分の代わりを務めようとした事。そのことを。

だから、自分の代わりに引き金を引いて終わらせようとしてくれたのだ、と。そう考えるとこれから消えようとしている自分が少しだけおかしく思えた。

「さてと。こいつを地下に作った研究室に放り込んで、その後には倒しに行きますか」

「黒幕、ですのね？」

「ああ。お前はとうする？」

「私は神界に戻りますの。ゼロ様もあんまり気を詰めでくさいな」

「おう」

美沙はそう言うと、どこかへ転移していった。

ゼロはそれを確認した後、手を合わせる。

ゼロ自身が凍結で殺したとはいえ、心は人だ。

「墓標は立ててやれないが、冥福を祈ろう」

そして、封印の札と転移の札を張り付け、魔力を流すとその場所から消えていった。

自分の視力が回復しているのを確認して、歩きだした時。場所を聞き忘れていた……。

少し間拔けな事をしてしまったと思うゼロだったが、微弱な電波を感じた。

凄く弱い電波。ゼロはそれを拾って、持っていた端末とつなぎ合わせる。

「ブレイ」

〈やっと出番ですか。待ちくたびれましたよ〉

「すまん。分析頼む」

〈了解です。主、少し眠ってください。終わったら起こしますので〉

「……そうだな。頼んだぞ」

〈はい〉

ゼロは、崖の方に背中を向けるように腰をかけて、目を閉じる。

風音が妙に眠気を誘い、背中に携えている武器が安心感を与えてくれる。

その中で安らかに眠り始めた。寝息を立てて……。

「いくぞ……!」

「ええ……!」

睨みあう男と女。右手を振りかぶり、拳を握り始める。

女が息を吸い始め、男はその女の右手に意識を集中させる。

そして、一気に下ろす。

「ジャンケンポンッ!」

その声とともに!

男は、グー。女はパーを出した。

女はガッツポーズでその勝利を祝い、男は膝をついてその敗北をかみしめた。

「よっしゃあああ!」

「ぬおお……!」

「アリシア、強いね……」

「かといってタクミ君は挑み続けて、9358万4444敗目……」

その雄叫びに似た物を上げている女……アリシアを祐輔は感心したように見る。

がつくりと下背中を遠目で見ているのは男……タクミに溜息を吐いた。

事の発端は、事後処理が終了し、待っているのはつまらないから、じゃんけんをし始めたところ、タクミが立て続けに負け続けて、こんな数に至るという訳。

「ある意味、才能だよね。そんなに負け続けるって……」
「くそ……」

「ああ、ちなみにジャンケンだけなら、私負けくないよ?」

「なら、あっち向いてホイだ！」

「それでも負けないよ？」

「ぬぬぬ……！」

タクミは思いっきり拳を握って歯ぎしりしている。そんな彼を祐輔はなだめるようにチョークスリーパーをかける。

完全に逆効果だと思われるその行動で、タクミは口から泡を吹いて気絶してしまった。祐輔はそれをボロ雑巾のように投げ捨てて、座りこむ。

「遅いねえ……」

「そうだね」

祐輔の言葉にフェイトは答える。

空は、大分明るくなっていた。

終わりがもう、すぐそこに近づいているような、そんな感じが皆の胸にはあった。

「主、主」

そうして、呼ぶ声がゼロの耳に届く。ゼロは目を開けて、辺りの光を取りこむと、一瞬目を細める。

ゼロはブレイの姿を確認すると少しだけ欠伸をして立ち上がる。持っている武器の葉莢の数を入念にチェックして足りない分はなかったように、拳銃をホルスターに差し込み、ブレイに顔を向ける。

「どうやら、管理局の反乱派の方ですね。管理外世界に根を張って地下で指示してます」

「OK。行こうか」

「武器の方は大丈夫ですよね？」

「ああ」

ゼロはそう答えると、3連バーストの拳銃を取り出し左手に構える。そろそろ終わりだと考えて、帰ったら何をしようとか考えている。そんなゼロを見て、ブレイは少し微笑む。

「さて、マッピングは大丈夫だよな？」

「もちろんです」

それを確認して、二人は転移する。

そこに残ったのは、大量の砂塵だけであった。

「……どゆこと？」

「私にもわかりません」

二人が着いた場所には、とてつもない数のガジェットとワイバーンが待ち伏せしていた。

二人は呆然と立ち尽くして、その後正気に戻ったらしいブレイは言う。

「攻撃仕掛けましょう！」

「いや、ここは弾丸を消耗せずに進むべきだ」

ゼロはそう言うのと、足音を忍ばせ歩きだしたその瞬間。
鉄屑を思いつき蹴っ飛ばしてしまった。

……しまったあああああ！！　ゼロは思いつき後悔した。
こんなことなら、さっさと戦ってしまえばよかった、と。
そんなこと思っている内にガジェットがゼロめがけて拳銃をぶっ放す！

「っ！」

ゼロは左手に握っていた拳銃のトリガーを引く！

一発目の銃弾は、向かってくる銃弾を弾く！

継ぐ銃弾は、拳銃を破壊する！

最後の銃弾はガジェットの体に吸い込まれて、体を貫く！

そして、光がガジェットの体を包むと、爆発が起きる。

ゼロはそれを確認すると、右手にドラム式のマガジンが着いたライフルを携帯する。

「はあ……」

「面倒ですけど、私も手伝いましょうか？」

「面倒なくらいだったら手伝わなくていいから、後ろを任せる」

「はい」

ブレイは拳を構え、ゼロはライフルを片手で構える。

相当な重量があるはずなのだが片手で構える彼の腕は一つも動く仕草をしない。

鍛えていたバカみたいな力がここで発揮されている。

ゼロは引き金に手をかけずにまるで鈍器を使うかのような構え方をしている。

突っ込んだら負けだな。そうブレイは心の中に決めていた。

「あらよっと」

グシャツと何かが叩きつぶされる音がブレイの耳に届く。

振り向いたら絶対ツツコミを入れるだろうなあ。と自分自身の中で思いつつ、振り向いた。

確かに、潰してた。左手で断空拳を30回連続して入れたような跡がみられる。

「いろんな意味でストップですよ!？」

「ぬ？」

別な意味でツツコミを入れたくなったブレイはゼロに思いっきり叫んだ。

ゼロはそれを全く気にせずに左手でガシガシ敵を潰している。

こんな状況の中で言うのもアレだが、ツツコミしている場合ではない。

そんな事をゼロは心の中で思っていた。

ガッシャガッシャとなぎ倒されていくガジェット達を見ながら、ブレイはツツコミを入れた。

「あのですね……。なんでそんな武器出しておいて使わないんですか？」

「いや、ワイバーン来たら使おうかと」

「なら、その時でいいじゃないですか!」

「もう、その時だ」

ゼロはそう言うのと上空にライフルの砲口を向けて引き金を思いつきり引く!

反動で手元が少々ぶれているが、しっかりと当たっている感触はしていた。

その証拠に、上空に影ができて始めている。
赤色の血だまりで出来た雨の。

ゼロは左手に持っていた銃を何時の間にかしまっていて、代わりに銃剣を出していた。

やがて、全部打ち尽くしたようにカチカチと音を鳴らす。

それを投げ捨てると銃剣を肩に担ぎ腰を落とす。

ひゅう……とかすかに聞こえる吐息。

そして、ゼロはトンツという軽そうな音とは裏腹に物凄い距離を跳躍する！

「せやっ！」

その掛け声とともに、銃痕がある場所に刃が入る！

そのまま回転し、勢いに任せて切り裂く！

鮮血が飛び、ゼロの顔を赤く染める。

それすら気にせずに回転の勢いを使う！

さらに重さが乗った剣が深く入る！

それを確認すると、引き金に手をかける！

爆発音が耳を劈き、斬劇が横一線に振るわれる！

瞬間、その切った斬劇の場所から血が噴き出し、ゼロは重力に従い着地する。

直後に衝撃音にも似た落下音が耳に届く。

ゼロは剣に着いた血を払うと、大きく伸びをしてワイバーンの死骸を見る。

「主……？」

「……」

「主」

「あ、すまんすまん。珍しい竜だなんて思ってたよ」

「ワイバーンなんて、どこにいるんですか？」

「ここだよ」

ゼロがなにかを蹴り飛ばすような動作をするとガスツと音がする。その動作で、ブレイは確信した。ゼロが珍しいって言った理由もその時だといった理由も。

色素がないのだ。あるといっても、カメレオンのようにすぐに景色に溶け込んでしまう感じのもの。

それを確認すると、ゼロは鱗と思われる部分を剥ぎ取る。

剥ぎ取り終わると鱗をどこかに転移させ、銃剣を肩にもう一度担ぐ。

「んじゃ、行こうぜ」

「そうですね」

ブレイはそう頷くとゼロの後ろについて歩き出した。

中の警備も意外と手薄で、そんなに注意する事もなく踏破していった。

だんだん下に行くにつれて、障害物も増えたが、逆にそれは利用して防御しつつの攻撃に役立てた。

「手薄過ぎませんか？　ここの防御」

「それは考えたが主戦力を投入するほどのものじゃないだろ。情報が保管されそうな感じもしない。第一、そんな奴らが俺を殺そうとは思わない」

ブレイはゼロの予測にほぼ感嘆していた。

思い当たる節がありまくりだからだ。

確かに、情報を保管しておく所ならこんなにも障害物を置く必要はない。

明らかに戦闘用の障害物。それを設置しているという事はもう一つの可能性が考えられる。

「誘ってる可能性も……」
「ないな」

速攻で否定されたブレイは頬を膨らませてゼロに詰め寄る。
が、ゼロはそれを聞こうともせずに遠方を見ている。

ゼロの眼には、光が点滅しているようなものが見えていて微かにだが、声と何かがぶつかり合う音が聞こえる。

外にあった電波反応はかなり薄れていたがここで間違いないだろう。
そう確信し、拳銃を取り出す。

「聞いているんですか！」

「聞いてない」

「聞いてください！」

「とりあえず、俺がそう思ったのは確信条件が3つほどあるからだ」
「確信条件？」

「一つは、さっきから相手が障害物を構わずにガリガリ破壊してる事。障害物自体が必要なものだとしたら、こんな扱いはしない」

ゼロは後ろの方にあるスパークしている障害物を見て言う。ブレイもそれを見て、よく物を見ているな、と感じてしまった。

そして、もしかしたら、ここまで来る時のトラップを全部破壊できたのも、万能すぎる主だからなのだろう。と、思ってしまった。

ゼロはその後にブレイの肩をたたき、眼前にある光の点滅を見るように促す。ここまでくれば、言わなくてもわかるよな？ という目つきでブレイの方を眺める。

それにブレイはゆっくりと頷き、それを確認したゼロは拳銃とバタフライナイフを取り出し、突撃を開始する体制になる。けれども、その足はゆっくりだった。

「これで、全部終いだよ……。ゼロ元帥……ククク……」

男は端末に映し出された演算結果を見て、薄気味の悪い笑みを浮かべていた。

これで、憎しい奴を完全に葬る事が出来た、と。

完全な勝利による、究極の優越感。それをその人物は感じていた。

「ああ、これで全部お終いだ」

そう聞こえるのは、男が一番頼っていた刺客の声。

その声に振り向こうとした瞬間に驚きを隠せなかった。

——そこに立っていたのは。

「本当に、残念だよ」

——男が本当に殺したくて仕方なかったはずの元帥。

「なぜ貴様が……」

——殺されかけて、死に際からの復活を成し遂げるとは思わず。

「俺が殺した」

——守るため、その身勝手な理由で生きてきたヒト……。ゼロが。

「だから、お前も」

——そこにいた。

「つまり、勝ったというのか？ 奴に、デュノアに!？」

ゼロは五月蠅そうに耳を押さえて、男の額に銃を突きつける。

「声を荒げるな。引き金を引くぞ」

そう言われ、男は押し黙る。

ゼロはそれを見て耳を押さえていた右手を外して、バタフライナイフを開く。

小柄なその刀身からは、あり得ないほどの殺気が出ている。

この男が一番恐れていた事態。それを今。明確に、克明に感じている。

「さて、一番最初に聞きたい事はわかるよな？」

「名前か？ それとも、なんで私がここにい——」

言葉の途中で、銃口を男の額にぴったりとくっつけた。

それだけで喋るなという意志表明がしっかりなっている。

「やっぱわかってねえよな。お前の名前なんて誰も聞こうとは思っちゃいねえよこのポンコツ野郎」

「俺が聞きたいのは、なんでデュノアを使ったってことだ」

「六課に入れた時点で、その問いは来るとは思っていたがな。適任だったただけだ」

「そうか。なら、お前はそれまでだな。咎人は、俺一人で十分だ」

その一言だけ呟くと、引き金に手をかける。それを見て、焦るような動きを見せる男。

「ま、待て！ お前に有益な情報をやろう！ それなら文句はあるまい！」

その焦りで生まれた問いに帰ってくるのは引き金を引く指の摩擦音。ゼロはナイフを使う事はなかったな、と考えながら、男の話は聞くとした。

「デュノアの事——」

——ズガン！

瞬間、音が響く。引き金を引いて端末を一つ壊した。

男は間違っただけではない詮索の一つ。

しかも、一番踏んではいけない地雷を踏んだと察した。

引き金を引いたその顔から完全に表情が失せていたから。

恐怖しか感じなかった。

「覚悟は、良いな？」

そう言うと、弾が切れたのかマガジンを取り出し、その一番上の場所に黒の弾丸を差し込み、また拳銃に差し込む。

その後、もう一度差し込む。冷たい視線は変わらず向き続けて、後ろでブレイが見ている、そんな状況でも殺す事を止めようとする。

「ほ、他にもある！ たとえば――」

「もういい」

「聞いたかった情報だぞ！ 管理局が喉から手が出るほど欲しい情報もいらんというのか!？」

「人の過去を勝手にばらす奴に、貰う情報はない」

そう言うと、引き金を容赦なく引いた。

銃口から出てくるのは、光を吸いこむ漆黒の弾丸。

男の体を貫き、一瞬にして闇に吞まれた。

沈黙が、辺りを包む。酷く、湿り気の強い沈黙。

辺りに走るスパーク音が一層大きく聞こえる。

ゼロはデュノアを操っていた男、カイルを撃った拳銃を握ったまま天井を見る。

地下に造られているため、頑丈につけられている鉄壁。それが少しさびしく見える。

主がいない部屋。そんなところに二人は残されている。

ゼロは拳銃を握りつぶす。まるで、カッとした自分を恥じるように。そして、残骸を部屋に捨てる。もう過ぎ去った事なんだ。そう言い聞かせて。

「帰りましょう。主」

「……そうだな」

少しさびしげな笑顔を見せ、ゼロは頷く。なぜか、その顔がさびしかったのは気持ちが少しはあったからだろう。

ブレイはそれに少しだけ表情を濁らせる。主が、そこまで気を負う必要はないのに。必要な事をしっかりやっていたのに。そう思う。そして、二人は何とも言い難い難い空気の中、この施設を後にした。

「行くぞ……」

「ええ……」

また、先ほどと同じか、否か。緊迫した空気がアリシアとタクミの間に流れる。

タクミは拳を握りしめ、上空を見つめる。

朝にも限らず、光り輝く三つの星。桃色、金色、白銀。

その三つが収束されている。事の発端は、タクミの一言だった。

「お前が負けることはないって言うなら、負けたらACEご一行の砲撃をたんまり受けてもらおうからな！」

今思うと、自殺行為だったのかもしれない。その後の反応が普通すぎたため、それを言った本人が非常に恐怖におびえているのだ。

「どうしたの？　もしかして、ビビった？」

意地の悪い笑みを浮かべて、アリシアはタクミに聞く。

タクミは、「そんなことはねえ！」と啖呵を切り、じゃんけんの構えを見せる。

『じゃーんけーん』

二人は、拳を振りかぶり出す手を決める。

アリシアは勝つ気満々……というよりは、何か企みがあって、それを狙っているような顔を見せる。

タクミは絶対に勝つという焦りのもと、相手の手を窺うような表情を見せる。

『ポン！』

パーとチョキ。勝者は、タクミ。

ニタアと気味の悪い笑みを浮かべたアリシアはすぐに元の姿勢に戻り、伸びをする。

タクミはほっとしたような溜息を浮かべその後、アリシアにバインドをかける！

「え？」

アリシアは目を点にして、タクミの方を見る。

タクミはニヤリと笑い、アリシアの方を喧嘩腰で見る。

「言ったよなあ？ 受けるって」

「あゝ。確かに言ったけど……」

アリシアはそれを言った後に嫌な予感がした。

まさか、まさか……。そう思って少しだけ冷や汗が出る。

「逃げさせねえようにしねえといけねえしな♪」

「あほかお前は」

そう言って、現れた人影はタクミの首を締め上げ、本日二度目の気絶を味わせた。

その後ろには、なのは、はやて、フェイトの三人が立っていて、少しだけ気むずかしい顔をしている。

アリシアは三人には気づかず、ほっとした表情でその人物の顔を見

る。

「これで、管理局もしばらくは安泰だな」

そう言い、気楽に話すのは、ゼロだった。

長い髪は風で揺れている。

ゼロは肩を回して六課の隊舎の方に戻っていく。

大きい穴が開いたり、焼け焦げたりしている。そんな様子が陽光に照らされて鮮明に写っている。

ため息をひとつついて、見上げる。

もう、全部終わらせるか。そんな感じにすら見えた。

「はやて」

ゼロは決して大きくはないけれど、皆に聞こえるような透き通る声で彼女を呼ぶ。

はやてはそんなゼロのもとにゆっくりと歩み寄る。

「ん？」

「ありがとうな。もう、充分だ」

ゆっくりと、一言ずつ言葉を紡ぐ。

はやては、頭に疑問符を浮かべる。

「充分だって……なにが？」

「機動六課だよ。俺はもう満足した」

それを聞いた時、はやての表情が少しだけこわばった。

ゼロはわかっていたのだ。異世界を飛び回っているときでも、ちゃんとそう言う情報は耳に入る。

機動六課が再成立した理由も。元々あったとは言っていたが実際のところは、一回崩している。

そして、それが自分を受け入れるためだ、と。そんなことまで、わかりきっていた。

はやてはその後に言葉を紡ぐ。

「なに、言ってるの？ 別にゼロのためやあらへんし。ここ作ったのは」

「そうかもな。だから、俺はここを抜ける」

その宣言は、そこにいた全員に行き届いただろう。

それは、この部隊の終わりを危惧していた。

もう充分。その言葉が真実である事は、その言動からも表れている。

「だから……！」

「明日、辞隊届出すわ。そしたら——」

「ゼロ君のためやない！」

そう叫ぶはやて。その眼は潤んでいて、少し辛そうだった。

帰ったら気まずい空気になるんだろうな……。

そう思いつつ、はやてに背中を向ける。

無言の主張……という訳ではないが。

そのような感じになっていた。

それを受けてしまったはやてのショックも相当大きいだろう。

その重苦しい空気に当てられて、皆動けずにいたが、祐輔は動く。

「本当に、後悔はしてないよね？」

「……言っとくけど、俺はこれで全部終わると思っちゃいない」

「……つまり？」

「つまり……。ええっと……アレだ。これからが始まりなんだよ。」

俺はもう前線に出れない。裏の方で指揮の方をしようと思う。それも、一つの始まりだ。この世に終わりなんて言うくっさいセリフはないんだ。何時だって延長線上で、繋がっている。俺が抜けたところで、またちよくちよく顔出すんだから、かわんねえだろ………ってこと」

そこまで言うと、ゼロは頭を掻きむしり始める。相変わらず、説明の類だけは下手過ぎて困るな、というように。

そんなゼロの姿をはやてはじっと見ていた。食い入るように。思わず、駆け寄りたくなってしまったけれど、こんな状況でそんな事をすると、凄く微妙な空気になってしまうのは目に見えているから、踏みとどまった。

「まあ、どっちにしろ。この部隊が俺を迎えるために成立したっていう凄く単純で遠回しな理由なら、俺はもう降りるってことだ。どっちにしろ。俺たちは結構長い間部隊やってきて、切っても切れない縁っていうのができたってことだ。俺がこの隊やめたところで、この関係は変わらない」

この関係は変わらない。その言葉が聞こえた瞬間にはもう走り出していた。

ゼロはそれには気づかず、そのまま言葉を紡ぎ続ける。

「だから、んなさびしい顔をだな——」

「ゼロっ！」

「によわっ！」

いきなりはやてに抱きつかれるゼロ。体勢を少し崩しかけたが左足を軸に回ることと倒れる事はなかった。

はやてを地面にすんと下ろしたゼロは嘆息する。マジマジと顔を見ることはなくても、眼には涙が浮かんでいる事が容易にわかる。

呆れ顔を見せるゼロは、なんとなくほっとした表情をしている。そのような感じをはやては感じる。

「全く。なんだってこんなことになったんだかな」

「ホント、バカらしいわあ」

「だなあ。さて、帰ろうと思ったけど、後片付けが終わってからだな」

「そりゃな」

——数日後。

ゼロは宣言通り、機動六課をすっぱりと辞めた。

それに伴って再建された機動六課も無事終了。取り崩しとなった。任務という任務もかなり簡単なものだけとなってしまったが、家にいる時間が多くなっていった。

まあ、それだけ暇人となってしまったため、ヴィヴィオから勉強を教えるように頼まれることも度々あり……。

「そしたら、ここがこうなる」

「あ、じゃあこの方は？」

「それはな？　ここの数式がこっちに当てはまるから、こういう魔法ができる」

と、魔法の勉強を教えたりしている。

一応、これが終わったらルールーの方に顔を見せる予定らしいが、予定のペースの3分の一程度しか進んでないので、どうしたものかな……？

と、悩んでいる次第。

「ゼロ、もういいよ」

「そうか？」

「うん。この後にルーちゃんのところ行くんでしょ？」

「ああ。ファイと蓮華はフェイト達に丸投げで」

「それだと、フェイトママ達、大変だよ？」

「なるべく気にしないつもりだったのに……」

「まあ、ママ達も二人の事なんだかんだで可愛がってるから大丈夫だね」

ヴィヴィオはそう言うと、意地悪い笑顔を見せる。

ゼロは頭を手荒く撫でまわし、外に出る。

すると風が肌を刺すような寒さがあった。

時期外れの寒さ。季節的には夏なので、多分魔法によるものだろうと歩いてみる。

すると、スフィアがいくつか飛んできると、

首を捻ってそれかわすと、飛んできた方向……つまり、右の方向を見ると、蓮華とファイが笑顔で立っていた。

「なにしてんだ？」

「父さんをびっくりさせようと思って♪」

「その前に、なんでここにいるんだよ」

——始まりというのは、終わりの一部。

「ごめんね、ゼロ」

——終わりがあったら、新しく終わりを作って。

「フェイト……。まあ、いいや。皆で行くか」

——そこから始める。どれだけ小さくても、大きすぎて無謀だと思える事でも。

「うん♪」

——全部。

「さあ、いくか♪」

——始めることにこそ意義がある。

——暗殺のシ徒篇——

——終——

麗「ふふふふ……」

ゼロ「なんだ？ その気味の悪い笑い……」

麗「遂に終わったんだよ。暗殺のシ徒篇が！」

ゼロ「あゝ。はいはい」

麗「そして、2ndで『皆で旅行に行こうぜ！　　く月が一番近い世界』を開催する！」

祐輔「なんとなく想像できるよ。暇なメンバーというメンバー全部巻き込んで大暴れさせようという奴だよね？」

麗「そう言う事だ！ とりあえず、参加者を募集するんだぜ！」

ゼロ「まあ、今のところ。企画倒れで救急で作られたものだしな」

麗「まあ、旅行期間は一週間。だから、7泊8日になるな」

祐輔「皆の参加を待ってるよ♪」

麗「それでは！」

ゼロ「ちなみに二期はいつ始まるんだ？」

麗「E A終わったら。要望が強ければ、前倒しになるかもだけど」
ゼロ「ダメじゃん」

エピローグーGoodbye, This world.ー

何カ月か経ち、動かないという生活にも慣れてきたゼロ。

そんな彼のもとに、何通かメールが入る。

もう、完全に現役引退という形になっている。

元帥たちもそれをわかってくれていて、本当に軽いものか重要な極秘任務しか頼ってこない。

「……ヴィヴィオか」

メールには、稽古をつけてくれというものだった。

ハルトと最近友達になったのか、稽古中にそのことばかり話している。

二人とも初等科。ハルトが4年生。ヴィヴィオが1年生。と言っても、精神年齢自体は一個下かタメか。

そのくらいになってる。

「たまにはノーヴェも頼ってやった方がいいかもな、アイツは意外と寂しがり屋さんだから……と。送信」

返信をして、もう一つのメールを開く。

来たメールは6通。フェイトとはやてとなのは、それにヴィヴィオの物と……。

「非通知発信……極秘任務か？」

この系統のメールは来た事なかったので、そう思い件名をクリックしようと思った時、指が止まった。

―件名…アルス・フォードマンの亡霊とその動向についての調査―
他人が見たらいかにもイカサマ話だ、とすぐに破棄してしまうかもしれない。

けれど、ゼロはアルス・フォードマンという人物を知っていて、さらに死亡と知らされている人物についてのものだったから。少し、気になった。件名をクリックして、内容を読む。

……どうやら最近、管理外世界でアルス・フォードマンの亡霊らしきものが出てきているらしい。

局員の方でもその存在が近頃確実なものとなってきた。そして、管理局の任務を妨害。

こちらとしても、事を大きくしたくない。そして、業務執行妨害罪で逮捕するため。それを調査してほしい。

もし、向こうが攻撃行動をしかけるつもりならば、こちらからの発砲、攻撃行動は許可する。

「……ランクは………特S!？」

それを見た瞬間、驚愕で顔の筋肉がこわばってしまった。

この程度のレベルの任務なら、特Aランクでも大丈夫なはずだが……。

そう考えたが、よく考えるとアルスは武術の使い手で、戦いを挑まれると自分でも手も足も出ない時がある事があるのに気がついた。

とりあえず、この件は3人に相談することに決めて、フェイトのメールを開く。

いつもの近況報告。たまに微笑んだりして、読み進めていくと、秘匿メールの件が同じように綴られていた。

それも後回しではやてのメールを見る。

彼女のメールもフェイトと同じようなものだった。

近況報告。そして、その一番最後にはアルス・フォードマンの亡霊

とその動向についての調査についての事が少し綴られていた。

「どういう事だ……？」

ゼロは思いつきり気味が悪くなった。まるで狙ったように連絡が3人についたことに。

少し考えて、思った事は一つ。このメールは捨てアドレスではないとしたら、これに返信したらどうなるのか、という事。

確信は持てないが、多分返信はない。捨てアドレスである可能性が高いからだ。

けれど、任務についての概要の具体的詳細をお願いする。というメールを返して、そのメールについてまた頭を捻り始める。

「よし。今夜3人で話そう」

そう心に決めて、チェーンメールで一括して、2人に送信する。

その後、奥の部屋に向かう。ファイと蓮華が寝ているだろう部屋に扉を開いて、二人の寝顔を見る。この前の旅行で、随分と寝顔が安らかになったなと思い、扉を閉じる。

「ゼロ？」

「……アリシアか」

ゼロはその声に振り向いて、主の名前を呼ぶ。

アリシアはゼロの顔を眺めて、顎に指を当てて少し唸ってからうんうんと頷く。

一体何なんだ……。と、少し溜息を吐いて、外に行こうとした時。

「何か隠してるよね？」

そう言われて、足を止める。

眼力だけは恐ろしいほど鋭いな。そう思って、溜息を吐く。

「知りたいか？」

「別にいい。ただ、今回は雲行きが怪しいから、気をつけてね」

そう言うと、アリシアは早足で自分の寢床へと歩き去ってしまった。雲行きが怪しくなる。それを思い出すと、背筋に冷たいものが走っていた。

午後6時。管理局公務員の仕事というのは、とても大変なもので、遅い時は翌日の2時くらいに帰ってくる時がある。

そんな時にまで、子供たちを起こしている訳にもいかない。だから、晩御飯を調理中。

こんな時まで、例のメールの事を考えていた。

確かに、これは完全な策略だが、アイツがもし生きてたとしたらどうなるって言うんだ……？ 罠、誘い……。どっちにしろ、俺は殺されるといっても過言じゃないな。そう思い、晩御飯の調理を終わらせる。

今日の晩御飯は、蓮華が提案してきたオムライス。前日はスクランブルエッグ、その前日はデザートにプリン。乳製品ばかり、よく作ったよな……。そう自分に呆れて、テーブルの上に置く。

『いただきます！』

「熱いから、気をつけよう」

言いきる前に、食べたようで、口をはふはふさせている。
ゼロはそれに笑顔を見せて、見ている。

「……ゼロもそんな顔できるんだね」

アリシアに不意を突かれる一言を言われて、髪の毛が一瞬逆立って顔を見たが、いつもの笑顔だったので大丈夫か。と、またファイたちの様子を見る。

その時、ファイがゼロの方を見て、「父さんは食べないの？」と聞いた。ゼロはそれに「父さんは、フェイト母さんとはやて母さんと食べるから大丈夫」そう言って頭を撫でてやる。

見るからに嬉しそうな顔をするファイを見て、蓮華はゼロをムスツとした表情で見る。

ゼロは「蓮華も撫でてやるからなく」と言って、撫でると、気持ちよさそうな表情を見せる。

「ほら、早く食べちゃいなさい」

『はい』

二人はそう言って、残していたオムライスにまた手をつけ始める。
ゼロは自分の手を改めてみる。親バカになったんじゃないのか……？
と呆れの感情がこもった目で。

アリシアはそれをさも可笑しそうな目で見ていた。

食事を終ったあとの洗い物を済ませると、やる事が完全になくなってしまふ。

だから、ファイ達と一緒にテレビを見ている。幼いのにしっかりしていると思うのは、どこの親でも多分同じ。

なんでかという、まだ幼い年齢なのにテレビはニュースしか見ないからだ。家にはゼロがいるから、という理由で学校にはあまり行かせていない……。

というよりも、学校に行かせると、周りを敵と思いこむかもしれないからだ。数日前に行った旅行でその心配もなくなったが。

普通、この歳だとヒーローもののアニメとかを見てもおかしくない年頃だっただろうに。そう呟けるような食い入り度。

二人曰く、アニメとかより、ニュースの方がコロコロ変わって面白い。との事らしい。

ゼロは、そういえば、俺が小さい頃は、そういうのばかり見て、技を99%再現してやる、とか必死になっていたのを思い出し、恥ずかしくなってくる。

「父さん」

ファイがゼロの方を見る。

ゼロはファイの方を向いて相槌を返す。

「ん？」

「父さんは、人って殺したことある？」

「……唐突だな。けど、なんでだ？」

「ニュースで、管理局員の殺害事件があったから。父さんもそういう事はあったのかなって」

少し不安そうな声。ゼロは頭を撫でてやりながら口を開く。

「父さんも、殺したことあるよ」

「……だから、そんなに強いのか？」

「……わかんないな。父さんは表面上は強くても、根はすつごく弱いから」

「父さんは人を殺して、何か変わった事ってある？」

「あるよ」

「どんな？」

「ものすごい後悔と懺悔。俺の心はそれを抱かせたよ。それで、殺める事の罪の重さを知った」

「そうなんだ……。ごめんなさい」

そう謝ったファイを見て、少しだけ笑う。

なんとなくでなく謝ったファイを笑うのは少し不謹慎ではあるが、気にする程度の物ではなかった。

「気にすることはないよ。……さて、もう時間だし、蓮華と部屋に行って寝なさい」

「うん。おやすみなさい」

「はい、おやすみ」

そう言うと、凄く眠そうに頭を揺らしていた蓮華の手を引き、自分の部屋に戻っていった。

ファイ達が見えなくなるまでずっと笑顔で見ていた。本当に親バカになってしまったんじゃないのか？

これを見ている人は思ってしまうだろう。アリシアも少し思ったが、もうニヤニヤが止まらなくなっていた。

「ゼロ。ふふ♪」

「なんだよ、気味が悪い」

「そう言いなさんなって♪」

そう言うと、隣に回り込んでから、座り、体重をゼロに預ける。

その間もニヤニヤ笑いはおさまらっていないく、そんな気持ち悪い顔してたっけな。俺。とかゼロは考え始める。

「父さん、父さん、ゼロ父さんねえ……」

「気持ち悪い。離れなきや眉間にディバインバスター撃つぞ」

「いや〜ん。そんなこと言わないで〜♪」

「そうかそうか。スターライトブレイカーがよかったかぁ。気が効かなくてごめんなぁ？」

ゼロはそう言って、指先に魔力を集め始める。

アリシアはそれを見た瞬間に顔が青ざめ、「ストップストップ！」

嘘だってば〜！」と言っているが、ゼロはガン無視。目が据わっている彼には、かける言葉すら見つからない。

「だったら離れろよ？」

「嫌だ！ 絶対に離れない！」

「スターライトォ……」

「すみませんでした！」

ゼロがドスの利いた声でそう言い始めると、いきなり離れて土下座。それを見たゼロは魔法の収束を止めて、本を取り出して読み始める。アリシアはそれを覗き見る。育児の方法だとかだったらおもしろいだろうなぁ。と思い。

だが、その内容は予想とは違ったものだった。人間の人格についての物。それでも、これを読んでいるところを初めてみるアリシアにとっては、ニヤニヤが止まらなかった。

「今度はなんだ」

「なんでもないけど」

「……そうか」

そうゼロは返すとまた本に目を移す。黙々と本を読んでいるゼロはなかなか珍しいな、と思いながら隣で自分自身も読もうと思ったが、何が言いたいのかがさっぱりだった。

アリシアは自分も寝るかと思い、寢床に向かった。

それを確認してかゼロは本を閉じて、時間を確認する。

今の時間は、午後11時。戻ってこないのは多分仕事が長引いてるからだろう。ゼロは少し仮眠することに決めて、目を閉じた。

「ゼロ、待ってるかな？」

「どうだろうね。もう遅いし、少し仮眠してるかも」

「せやね。うちらも早いとこ帰ろう」

「うん」

そう言い、気持ちちは急ぎめで車を走らせるフェイト。現在の時間は、午前0時。本当はもっと早く帰るつもりだったのだが、意外と長引いて二人の帰る時間がかかなり遅れた。

それだけだったのだが。けれど、自然と口に出てしまう。

「やっぱり、ゼロにも来てたんかなあ？」

「メールの文面からしても、多分来てると思うよ」

「3人って事だしなあ」

「そうだね」

そう言い合っている内に、家の前についてしまった。
はやてはフェイトに車を任せて、家の扉を開ける。
家の明かりは付いており、少し不用心な気がするが、あらゆることに防御システムが設置されており、心配する必要はなかった。
はやてがリビングに歩いて行くと、ゼロが座った状態で壁に寄り掛かって寝ていた。

「ゼロ？」

そう言って、体を揺るとゼロの眉が動き、眠たげに瞳を見せる。
そして、はやての顔を確認すると伸びをして体中の関節を慣らして立ち上がる。

「フェイトも来たか？」

「その前に言う事あらへんか？」

「あるか？」

そう言った瞬間に、別々な方向から、10発ほど殴られて、地面に倒れる。

痛い……。ゼロはそう思う。なぜいろんな奴から殴られた？ それを考える。

そこで気付いた。眠ってたから思考が鈍くなってるんだろうなあ……と。

「お帰りのさいませ」

「よろしい」

その瞬間、纏わりついていた冷たい空気は完全に消えて、ガシヤガ

シャという音が耳に届く。

その音に違和感を覚えて、少し視線を後ろに向けると、雲之騎士が集合していた。

ヴォルケンズ

なるほど。道理で、殴られた覚えのあるような感じがした訳か。ゼロは自分で冷静に解析して、フェイトにも「おかえり」と声をかけてから、ソファアに座る。

他の一同もそれに続き、ソファアをぐるりと囲むように座る。

ゼロは一同が座り終えたのを確認すると、息を吐いて真剣な表情になる。

「まあ、さっきまでの冗談として受け取るとして、本題はこっち」

ゼロは、メールを開いて机の上に皆で見れるように置く。

一同はその内容を改めて読み返し、少しの沈黙。

ゼロはある程度それを予想していたため沈黙は苦ではなかったが。

流石に何もないと拙いので、とりあえず口を開く。

「どう思う？」

「……やはり、誘いだろう。これは」

「向こうとしては、こっちが行けば好都合だろう」

シグナムとザフィーラがそう神妙な面持ちで言う。

やっぱりそう来るか……。ゼロはそう思い、また文書を見直す。

――亡霊、か――

にわかに信じがたいその言葉。

――亡霊というのは、亡くなった人の霊のこと。

あの報告を聞いた時にも少し頭をよぎった事だが、そう簡単に死ぬだろうか？

ゼロが自分とやり合った時の事を思い出し、少し思ったことの一つにそれがあった。

アルスは魔法なんて滅多に使わない。

さらに剣術と体術でも自分を勝るほどの実力だ。

そんな彼が本当に死ぬだろうか。決してそうじゃないはず。

行方を眩ました事が死に値するのなら、自分という存在も死んでいたはずだ。

そして、生き返ったという事にもなる。人間の常識上、死んだ人間が生き返るのはあり得ないはずなのだ。

魔法を使用することができれば可能ではあるかもしれないが、それは魔法文化を持つ世界の法律で禁じられている。

その代わり、クローンを作る事は目を瞑っているところがある。それだから、プロジェクトF・A・T・E・なんかでのクローン孤児なんかができている。それも悲しい事実だ。

「ゼロ、難しい顔してどうしたの？」

そんな事を考えていると、フェイトから声をかけられる。フェイトから見ると、ゼロの眉間には、皺がもの凄く寄っていて、難しい顔をしている。

ゼロはそれに気付いたが、あえて直さずに続ける。

「亡霊の可能性というのを考えていた」

「アルスの？」

「ああ。行方を眩ます事が死んだ、ということになれば、俺も一度死んだ身じゃないのか？」

「つまり？」

その説明に満足のいく理解が逝かなかったはやてがゼロに向かって、さらに聞く。

ゼロは少し思考を巡らせてから、ゆっくりと口を開く。

「死んだ人間が生き返る。そんなもん、あり得ないだろう？」

その答えを聞いた一同は、鳩が豆鉄砲を食らったような顔をする。そんな言葉が出てくるとは思わなかったからだ。

そんな驚きもはやての一言で難しいものへと変わる。

「……確かに。けど、そう言う事やないやろ。本当に言いたい事は」

「ああ。一つ目に、実力だ。アイツは俺より強かった」

「相性って事はねえのか？」

ヴィータが尤もらしい問いをゼロに振ったがゼロは首を横に振ることでそれを否定する。

「なんでだよ？」ヴィータはそれに返して、ゼロは答える。

「相性なんて、剣一つ交えるだけでわかるもんだ。一流の剣士ってのはな。だから、相性なんて関係ない」

「じゃあ、物理が全く効かない相手というのは考えられないのかしら？」

「アイツはお前らが思っているほど弱くないぞ、シャル」

「……魔法も強かったの？」

「そう。まあ、俺と同等かそれ以下……って、ところか。単純に接近戦なら、負ける要素がないってのが本音」

ゼロがそう言うと、一気に空気が暗くなる。

皆考えているのだろう、その事を。ゼロはそのまま続ける。

「まあ、あくまで推測だがな。二つ目に、管理局の隠蔽工作って可能性も否定できない」

「どうゆうことだ？」

ヴィータのその問いにゼロは少し答えるのをためらった。

これを言ってしまうえば、全部合点がいくだろうし、さらには止められてしまうだろうから。

どっちか一人来なければ、絶対にその一人が止める。かと言って、連れていくといえ、ヴォルケنزに心配をかける羽目になる。

それを全部考慮したうえで、改めて口を開いた。

「俺を殺そうとしてる。ANGELっていう組織がな。いや、俺じゃなくて、管理局員の中で誰かを殺そうとしてるのは確実だ」

「付き合ってられっかよ！」

その時、ヴィータが立ち上がり、アイゼンをゼロの首元に向ける。

はやてはそれを止めようと動きを見せるがゼロは手で制した。

怒りの要素ならたくさんある。今までの我慢が吹っ切れてもおかしくない。そう思って、視線をヴィータに向ける。

「何が気に食わない？」

「お前のその被害妄想だ！ 確かに、管理局の中ではANGELは確かなものになって来たさ！ だけど、それにはやてを巻き込んだのはどいつだ！？」

「……それ自体が俺にも想像がつかないんだ。けど、巻き込んだのは俺だから、俺だけが任務に行く」

「そうじゃねえ！ 私が言いたいのは、それで、お前やはやてが巻き込まれなきゃなんねーのかって事だよ！」

「……一発殴りたいか？」

「殴るんじゃない。殺してえんだ」

「なら、そうすればいいさ。どうせ、ANGELは、抹殺目標の内の一つなんだしな」

ゼロはそう言って、メールの文面を少し眺めた後、任務受諾のメールを作成する。

ヴィータはゼロに嫌悪の視線を向ける。何が嫌なのかはあえて聞かなかった。

わかりきった事を聞くのは、相手に対しても失礼だと思ったからだ。

「お前、何してんだよ……！」

「気に食わないなら、俺だけ死地に行けばいい話だろ。ガセだったら、生きて帰る自信はあるし」

「そういう意味じゃねえんだよ！」

「じゃあ、どういう意味だ？ ヴィータ」

「お前らがいく必要はねえんだ！ ただ、お前には役目があるだろ！」

「……確かにな。けど、行かなきゃいけねえんだ。残念ながら」

ゼロはそう言うと、アイゼンを片手でどけると今度はシグナムに剣をつけられた。

「そうやって、逃げるのか？」

「……どうなんだろうな。逃げる事は、駄目か？」

「ダメだ。今、この状況においてはな」

「わかった。ちゃんと話す」

ゼロは両手を宙でひらひらさせた後に深くため息を吐く。

ちゃんと話すといっても、何から話したらいいかわかったものではない。

一番聞きたいのは、逃げたがる理由^{ワケ}なのは自分自身でもよくわかっている。

ゼロは少し唸った後、一言言う。

「自分の最期は……やっぱり、英雄らしい……最後で飾りたい」

と。一瞬、何言ってるんだ？ コイツ。みたいな視線を一同から受けた。

だが、ゼロは気にせずさらに言葉を紡ぐ。

「俺は、自分に嘘だけは付いてないつもりで生きてきたけど。最近になって素直じゃないなって時が少し多いのを感じてきた。

——嘘吐きってのとは訳が違うけどよ。なんか……うまく言えないけど、俺は道化だった気がする。だから、自分の最期っていうのも、道化の英雄で、死ぬまでずっと通したいと思ってさ」

少しだけ笑う。「アホらしいだろう？」そう問うかのように。

一同はゼロの顔を見た。

——道化の英雄。その言葉がぴつたりと当てはまるような感じがした。

栄光、いろんなスキャンダルじみた事。色々あったけれど、なんだからで彼が嘘をついてたりしてたから、ここまで来れたのかもしれない。かと言って、皆許してる訳ではないが。

「そこまで言うんだったら、仕方ねえな」

まずヴィータが。

「まあ、それがお前なりの覚悟なんだろうな。アームストロング」

そして、それを齒切りにシグナムも。

「本当に、勝手だけど。道化なら仕方がないわね」
「貫き通せ。そこまで言うのなら」

シャマル、ザファイラもそれに賛成し、ゼロははやとフェイトの方を向く。

二人は、それに笑顔で返し、ゼロはため息を吐く。

「決まりだな。俺はこの任務を受ける」

その日は、その言葉で締めくくられた。

翌日。朝食を食べ終わった後、ゼロ達3人は玄関で準備をしていた。任務に向かうために。結局、寝床に着いた時に3人で受けることになったのだが。ファイと蓮華は3人の準備を見届けている。ゼロは少し念入りに、ストレージデバイスの調整をしている。形は、拳銃型と銃剣型のもの。そして、長距離狙撃用の物も準備している。あるだけ邪魔だというのに。

「……うし。AMFの対策もしたし、もう大丈夫か」

「随分念入りだね。今回」

「実は俺が女の子だったりしてな」

『それはない』

苦笑いじみた表情でその場にいた全員に大否定された。
ゼロは笑って少し場を和ませると拳銃二本をホルスターに。銃剣を

腰に差し、狙撃用の銃を布で隠して、背中に背負うと、ファイと蓮華に目線を合わせる。

「ちゃんとお留守番してるんだぞ？　父さん達、すぐ戻ってくるから」

「うん。行ってらっしゃい」

蓮華がそう言うと、ゼロは頭を撫でて「いってきます」と言う。

その後、ファイが何かを思いついたようにハツとなり、ゼロに向かって言う。

「父さん、帰ってきたら組手しよう？」

「ああ。いいぞ」

「やったあ！」

ガッツポーズを見せるほど、ファイは喜んでいた。3人は笑顔を作り、ゼロは立ち上がったと言う。

「行ってくる。ファイ、蓮華」

その後に子供達は元気よく『行ってらっしゃい！』と言った。

ゼロははやとフェイトの二人を連れて、任務先へと向かった。

そこで、3人は思いがけない運命と出会う事を知らずに……。

「へくちっ！」

「大丈夫か？」

「大丈夫……じゃない……めっちゃ寒い……」

バリアジャケットの上からでも感じる寒さ。ゼロはそれを感じていても、表には出さず、寒い了承知でバリアジャケットの上着をはやてにかける。

「ありがと……。うう、寒……」

「まあ、そうだろうな。フェイト、お前は大丈夫か？」

「うん。と言うか、ゼロの方がすごく寒そうだよ？」

フェイトはゼロの姿を見てそういう。それもそうだろう。タンクトップ一枚でそれを言わない人はいないから。

ゼロは自分の恰好を見てから、銃剣のデバイスのバリアジャケットの上着だけ展開する。

「これならどうだ？」

「大丈夫」

「そうか……。少し、ここで待っていてくれ」

ゼロはそう言うのと、曲がり角ギリギリのところまで走っていき、辺りの様子を確かめる。

雪原地帯。吸う息は冷たく、吐く息も白く変わってしまうこの場所では、何時でも危険が迫っている。

そんな中でも、いつもどおり行動をしていた。ゼロだけは。

普通、人間ははやてのように筋肉を萎縮させたり、小刻みに体を震わせて熱を体から逃がさないようにさせるのだが、狙撃銃を使うゼロにとっては、そんな震えは誤差となってしまうため、熱を出さないために、呼吸は最低限度までとどめている。例えるなら、潜水の時の息継ぎだろう。

ゼロは辺りを確認すると、遙か下方を見る。薄らとではあるが、黒

いものがゼロの視界に入った。ゼロはその場にしゃがみ込み、背中に携えていた銃を構える。スコープで狙いを定めると引き金を引く。フェイトとはやての両名はそれに気付いて、ゼロの元へと駆け寄り、同じようにしゃがみ込む。

「なにしてたの？」

フェイトがゼロには触れないように気をつけながらそう聞く。

「少し、気になってな。多分あれはハズレだ」

「ハズレ？」

「ああ。弾は正確に当たったけどな。僅かながら金属音に似てる音が出たからな。とりあえず、降りて確認する。くるか？」

「そりゃもちろん。というか、降りる必要があるの？」

「ん」。低空飛行が効かないんだよなあ。AMFに似たものが全体に張られてるっていうかさ」

ゼロはそう言うのと魔力弾を放り込む。

ごく僅かの魔力しか籠められていないそれは空中で分解され、粒子として消えさる。

それを見たフェイトは少し罨と言う可能性を考えていた。それはゼロも同じらしく。

「罨って可能性も否定できないか……。けど、ここを降りて確認しなきゃいけないしな。とりあえず、戦闘ができなくなったら困るから、ナイフだけは持っておけ。いいな？」

最後にそう釘を刺されて、ゼロから渡されたナイフを二人は受け取り、ゼロは思いつき飛び降りる。

その瞬間、不思議な現象が起こった。ゼロが身にまとっていたバリ

アジャケットがまるで粉を纏っていたかのように完全に消えて、いつもの制服姿に戻ったのだ。

「ブレイ。大丈夫か？」

「・・・・・・・・」

「……ジャックか、クソッ！」

（ゼ……ぶ……！）

それに感付いた時に、聞こえてきたのはかなりひどいジャミングを受けた念話だった。

向こうはかなりひどいジャミングがかかっているらしく、ゼロは聞きとるのがやっとだった。

なにもない空間の中に一人取り残されている。そんな状況。

不気味、そんな言葉が一番しっくりとくるだろう。

確かに、罠の可能性があるだろう。ものすごく。

先程の黒い断片、よく見れば、横に筋が入っていて、どこか見覚えのあるような気配がある。

いや、なければおかしいはずなのだ。なぜなら。

「ガジェット……。しかもジャック加工済み……！」

「ゼロ！」

その時、聞き覚えのある声が耳に届いた。

振り向くと、はやとフェイトが額を汗で濡れさせて立っていた。

ゼロは冷や汗が全身に滲むのを肌で感じた。

そう。この状況で一番やってはいけない事の一つ。

―連絡をとらない事―。それを、彼は。

「……なんで来た……！」

「それは、心配だから……！」

「…………クソ……！」

ゼロはそう吐き捨てると、後ろで起動しているであろう機体の数を見据える。

こうなつては、どうしようもない問題だ。ここから脱出する。

そのには、まず、デバイスを使える状況にしておく必要がある。

そういう装置もしっかりと作動しているはずではある。ただ、場所と武器が悪すぎる。

数的には、向こうの方が圧倒的に多い。

銃弾の数は1000。向こうの数も同じくらい。ゼロが調整を念入りに行っていた訳はここにある。

どんな状況にあつても、冷静に対処するための武器。それが、オリジナルのデバイス。

実弾と魔法の両立。それができる。

「はやて、フェイト。時間稼ぐから、どこか高台の場所探してくれ。なるべく急いで」

「ゼロ、この数相手にできるの？」

「やるしかないだろ。つべこべ言ってる場合じゃない」

「そうだね、今はやるしか……」

フェイトが納得したところで、はやてが抗議に出ようとするが、敵は待つてはくれず。砲撃を放ってくる。もちろん、実弾で！

ゼロは射線上にいたはやてたちに当たらぬようにうまく弾丸同士を当てる。確認してからそれを放つ時間が限りなく短くなければできない技。それをやり、自分は弾丸で肌を傷つける。

焼けるように痛い肌を少し気には留めて、ゼロは前に目を向ける。

「少し、本気で行きますか」

銃剣を引き抜き、弾丸を弾く際に持っていた拳銃をホルスターにしまう。

一気に突っ込んできた機械兵を銃剣でなぎ倒していく。
アームを斬り落とし、隙ができたところに、特製の銃弾を撃ち込み、辺りに爆発させていく。

その連続。偶に打ち出してくる弾丸も、剣で斬る。

数分たっても数は減らないが、辺りは雪原とは対照的に赤い炎と焦げ臭い煙が辺りを支配していた。

「畏つてのはよく言ったもんだ」

「ゼロ、場所が見つかったからそっちに行こう」

「わかった」

フェイトの声にゼロは敵の方を向いたまま頷き、退きながらの移動となった。

なぎ倒しながら。目視では確認できないほどの敵を。

中心に近い場所でゼロは戦っていたせいもあるだろうか。移動にかなりの時間を要した。

「ここなら、大丈夫やろ」

「そうだね」

「……そうでもない」

安堵の息を吐く二人。ゼロはその二人とは対照的な態度を見せる。

腕は何発か貰って、血が滲んでいるがその痛みではない。

はやてはその態度が少し引っ掛かって、ゼロに尋ねる。

「どういう事？」

「様子がおかしいんだよ。なんか、こっちに来たがってない、みたいな」

「……それって、バルディッシュ達が使えないことに少し関係あるんじゃないのかな？」

フェイトは自分のデバイスを出してそんな事を呟く。ゼロはフェイトの方を振り返る。

そして、奥の方に入っていった。はやてたちは少しその行動に驚いたが、気にしなかった。

ゼロが明かりをつけると、そこには死体の山が築かれていた。フェイトとはやての両名は、声にもならない恐怖が体を襲った。

骨が見えかけている死体。ゼロはその中に平気で手をつっ込んで、探し物をする。

フェイトの言葉にあった妙な説得力の様な物。ゼロはそれを信じて、探す。

人肉を抉るというとても気が狂いそうなこの作業をしているゼロを見て、フェイトは声をかけようとしたが、やめた。今、周りの状況が確認できない状態で、奇襲でもしかけられたら、大変なことになる。

それを理解した。だから、入り口近くに立って、状況を確認した。防寒魔法を使っている、まだ冷たさが肌に残る。それでも、やはり。先ほどと変わっていないかった。

「……！ 見つけた………！」

ゼロはそう呟くと、思いつき手を引き抜いた！
血吹雪が辺りに舞う中、抜き出された黒い物体は、リード線などが

たくさんついた機械だった。

ゼロはそれを足元に置き、銃剣を抜く。完全に分解して、組み立てる。

ゼロが組み立てたのは、大きさが二回り大きくなった銃剣。

柄と刃の間には、漆黒の宝石の様なものがはめ込まれており、赤のラインが全体にいきわたるような、網の目のラインが刻まれている。

「こいつなら、大丈夫だろう……。フェイト、バルディッシュは起きたか？」

「バルディッシュ」

「Yes, sir. Barrier jacket, set up」

フェイトは握っていた宝石を見ると、点滅し、黒の軍服に白の衣が身に纏われる。

ゼロはそれを見て、嘆息する。

瞬間。ゼロの体に異変が起こった。

顔から血の気が引いて行き、吐き気が自身を襲う。

ゼロは膝について口を押さえる。

そのいきなりの急変に気付いたはやては駆け寄って触れようとするが、ゼロはそれを振り払い、剣を敵の隊群の真ん中に投げる。

サクッという音が耳に届くと、そこからガラガラと崩れるような音が響く。

その方向を見てみると、円形にガジェットが倒れている。

「あいつらがぶっ倒れた理由がわかった」

ゼロは後ろの死体の山を見て、そう言った。

「どういう事なの？」

フェイトがそう聞く。ゼロは推測である答えを言った。

「あの装置自体が、エネルギー吸引装置みたいなもんなんだよ」

「エネルギー吸引装置？」

「そう。あれにリモートの受信装置が付いてたのもそういう訳だよ」

ゼロはアンテナのような細くのびたピンの様な物を手でいじりながらさういう。

その後、戦場に出ようとしたフェイトとはやてを手で制す。

少し驚いたような表情をしたが、ゼロなりの考えがあるのだろうと思った。

共闘するにあたっての注意事項の様なものが。

「伝えたい事がある」

だが。それは思いもよられない形で裏切られることになる。

「俺をここに置いて行け。それから、ファイと蓮華によろしく伝えておいてくれ」

「それって……」

「ずっと気になってたんだ。俺達がこっちに来てから、転移魔法が引き続き発動してる。狙ってるとしか考えられん」

「けど、それも推測やろ！　ゼロを捨てて私達は動かない！」

「聞き分ける。はやて。そして、フェイトも。俺ら3人が共倒れで、この世に塵も残さなかったら、あいつ等二人がどうなるか考えてみる。一人は悲しいじゃねえかよ……！」

『ゼロ……』

二人はその言葉でゼロの考えを知った。けれど、それだけでは動か

ない事を知っているゼロはもう一言付け足す。

「いいか。管理局と関わり続ける限り、捨てる時と救う時がある。捨てる時は、ひと思いにスパッと捨てる。救う時は死に物狂いで救え。それだけが俺の想いだ。俺は、お前らとファイ達を全力で救うから、俺を捨てる」

「けど……」

「……雪は、儂く散っていくモンさ。けど、俺は太陽だ。光だ。皆を照らしてる。いつだってな」

ゼロは二人に語りかけるように、狙撃銃の布を取り除き、手につけてるグローブをきつく締める。

構え、ガジェットに実弾を穿つ！

振り向きざまに、二人に叫ぶ！

「H u r r y u p ! 俺なら大丈夫だ！」

二人は頷き、転移魔法を発動する。白い光と金色にも似た色の光が二人を包む。

そんな二人をゼロは笑顔で見送る。そして、完全に視界から消えた瞬間。死体を吹き飛ばして、不気味に3つの光が見える。

「ブレイ、イル。起きてるか？」

『当然です』

「……起きてなかったらどうしようかと思っただぜ。バリアジャケット展開。イルはイージスを展開な」

「イージスは負担が大きいです！ 使いどころを考えてください！」

「なら、ユニゾンしてなんとかするか」

「へそうしてください」

そんな話をしている間に敵は着々と近づいてきている。ユニゾンを無音動作ですませて、狙撃銃を構える。

トリガーのすぐ横についているモード変換を連射にして後ろにいた傀儡に当てる。3発当たり、来た場所へと落ちていく。ゼロはそれを追って行って、実弾を放ち、一掃する。

「さて、片付けを始めようか」

「……うあ……。ゼロお……」

口から出るのは嗚咽の言葉。

死んだわけではないが、あの時見せたのは、いつも無茶する時に見せる笑顔とは異なった、凄く優しいものだった。

つまり、何が起こるか分からない。それを危惧している。

「フェイトちゃん、まだゼロは死んでない。だから、そんな顔しないで」

「でも……でも……!」

「私も泣きたいのは山々。けど、ここで泣いてゼロは喜ばないから」

泣き続けるフェイトを諭すように話すはやて。辛さは、フェイトと同じであった。

共に戦場を駆け、共に過ごし、共に暮らす事を契りとした仲。悲しさは、両方同じなはずである。

今は、願い、祈ることしかできない。神頼みで、生きて帰ってくる事を。

それが、二人にとって、悔しい物で、辛い事なのは言うまでもない。

「それでも、一番つらいのは、ファイと蓮華や。いきなり、目の前から親が消えて、悲しいのは、その親に育てて貰っている子供。だから、私達は、二人のためにもしっかりやんなきゃ。な？」

「うん……」

「うし。なら、行こうか」

そうして、二人は歩きだした。なにも傷などついていないけれど。死に顔を見せたくない。多分そう思っていたのだろう、ゼロの気持ちを裏切らずに、歩きだす。

はやては、少しおかしい事があるのに気付いた。5時間くらい向こうで戦いながら、時間がそこまで経っていない。つまり、時間を狂わされた。そういった結界が張られているのだ。

「はあ……はあ……」

〈これで全部ですか〉

「ああ。辺りは火の海になっちまったけどな」

〈……無理矢理な嘘つきましたね、主も〉

イルミネートはそう言う。ゼロは苦笑いして、ユニゾンを解除する。そして、廃棄物^{ガラクタ}の一番上に腰を下ろす。

額には汗がにじみ、体中の至る所には、傷が付いている。

見上げた空は白かった。天井には、歪んだ形の魔法陣がある。

時間狂わせの魔法陣だと気付くのにそう時間はかからなかった。

念話で先ほど謝っておいた。けれど、すぐに返事をくれるはずの二

人から返事が来ない。

つまり、時間が狂っていて、外への連絡がつくのが遅いか早いか。そのどちらかなのだ。

「弱ったな……」

「何がですか？」

声のする方向を見ると、イルミネートが仁王立ちしていた。ブレイとは違い、ロングスカートなので中は見えない。ゼロはそんなやそこらにいる変態とは違うのでそう言うのに興味はないが。

けれど、少し気にした方がいいんじゃないのか？ という風にも思ってしまう。もしかしたら、どこかの変態に襲われるかもしれないし。というと、過保護すぎると怒られてしまうため、口には出さない。

「いや、時間がこっちと向こうで狂ってるのが困るなって」

「まあ、いいじゃないですか」

そう言い、隣に座る。

ゼロは肩にかけたままの黒い銃を下ろす。軽くなった肩を慣らすように回すと今度は腰に着いたホルスターをスルスルと外し、武器ごと置く。

イルミネートはその行動の一連を最初から最後までじっと見ていた。グローブから宝石を外し、イルミネートに投げ渡す。

ブレイブフォース。自分の相棒を。イルミネートは思考が止まった。武装という武装を外しているから。コンソールを弄り、マスターとしての権利も自分で消した。

「責任を取ると言う事がそう言うことなら、私は違うと思います」

何時の間にか、明星がイルミネートの隣に立っていた。少し驚いたような表情をする彼女とは違い、ゼロは眉一つ動かさずにさらに言えば振り返る事もせずに制服の上着を脱ぐ。

「どうなんですか。八神ゼロ・S・A・ハラオウン」

「明星が一番冷静だよな、やっぱし」

ゼロはそう言うと、振り返る。笑顔ではなかった。冷静に物事を判断する時、神経を集中させ、戦闘をする時の顔。

明星の頭に手を乗せ、撫でた後、魔法でリンカーコアを取り出す。二つに切り、多い方を明星の手に握らせる。

「何をしたんです？」

「……お前らも、守ってやってくれ。あいつ等を」

「らしくねえよナァ！？ 俺！」

そこには、フォーチュンが大剣を構えて立っていた。ゼロは首を反らし、それを確認したフォーチュンは後ろにいたガジェットを串刺しにする。そして、大剣を抜き去り、後ろで爆発が起こる。

気付けば、リバティーとアルタードもすぐ後ろで待機して、刃を抜いていた。久しぶりに見るその姿は頼もしいものに見える。

けれど、ゼロには苦痛にしかないようで。実際は助けなのに。そんな狂った感情の様なものが頭の中をグルグルと回る。

「もうちょっと頼ってくれてもいいんじゃないかしら？」

「主……いや、ゼロ。もう少し頼ってくれ。消えた黒の頭文字は、今も健在だからな」

リバティーの言葉。アルタードの言葉。

その言葉と同時に、弾丸のように飛び出していった3人。

それを無表情にも似たもので確認する。
閃光が戦場を包み始める。

「武器、運んでくれよな。無限書庫行って、ユーノに行ってもらえば保存してもらえるから。多分、ニュースで報道されると思うから、そこは大丈夫だな。お前らも、その時見計らって、受け取ってもらえ。それまではユーノの家で居候」

「いや、流石にそれは……」

「わかりました。貴方がどうしようもなくロクデナシっていう事だけは」

イルミネートが拒否しようとする、明星が間に入って、そのように辛口な言葉、毒舌を吐く。ゼロは溜息一つを吐きだすと、魔力を両腕から爆発させる。その風の勢いで、長い髪がなびき。両手からは炎を握っているような尋常じゃない魔力が見て取れる。つまり、その遺品を持ってさっさと去れ。という意志表明。明星はそれを受け取ったのか、ゼロの腰に差してある本を取って開き、転移魔法を開く。

「明星!？」

「行きましょう。あの4人の邪魔になるだけです」

「けれど、アルタード達は……!」

「元々、あの人達と私達4人は少し違いますから」

「私も入ってます!？」

「いいですから。……ユーノさんには、またお世話にならないといけないのが、少しあれですが」

「それだったら!」

「参ります」

そう言って、転移魔法が発動され、二人の姿は消えた。ある意味、

これは駄目だったのかもしれない。

だが、そうも言ってられず、ゼロはガジェットの群れに突っ込んでいく。

「うらあ！」

膨大な魔力が籠った右のストレートが直撃すると、崖の方まで飛んでいき、砕けた。そして、次の敵を探し始めようとするが、どこにも敵がいらない。それどころか、さっきまで戦っていた3人の姿すら見当たらない。

ゼロは目を閉じて、また開く。白の天井はいつの間にか消えていて、上空には、一人の人影がいて、左手にはアルタードが頭から掴まれていた。

「久しぶりだな、アルス」

「この状況を見て、なにも思わないか」

「思うけど、思わない」

「……支離滅裂だな」

「……アルタード。何か言いたい事は？」

ゼロはそう言って、アルタードに視線を向ける。アルタードは顔を向ける事をせずに、念話である事を伝えた。

ゼロは表情一つ変えずに、構える。聞き届けて、そして、なおも拳を向ける。だが、それ以上の動きを見せなかった。

「なにもしないのか？」

「まさか」

足の震えというのは、時にして一種の攻撃となる。その使用方法は様々。

連撃を与えて、相手を戦闘不能になるほど苦しめる事が出来れば。
脆い足場を崩すための戦略的撤退を用いるための攻撃。

そして、隠れていた敵を、誘い出して、暴くための攻撃にも！

「なッ!？」

その瞬間、四肢全部にガジェットの一部が刺さる。

一見自殺行為だが、ゼロは不敵な笑いを見せていた。

両手から出ていた魔力は何時の間になくなっており、むしろ、魔力を溜めている印象がある。

「うあああああああああああああああああああああああああああああ
あ!!!!!」

そして、咆哮と共に光の柱がその場に生まれ、ガジェット達も共に
その光に包まれる。そして、その光がだんだんと細くなり、やがて
消えてなくなった。

そこには、誰もいなかった。目を丸くしてアルスは驚いた。

「何処だ……?」

そして、5感を頼りに、探し始める。かすかに聞こえる風切り音。
アルタードは微かに笑った。

「逃げるなんて手はしないよなあ!？ あんな風に見栄張ったんだ
から!」

そんな風に大声で叫ぶアルタード。いきなり気が狂ったかと思うが、
風切り音を消すために、行っていた。

それを知らないアルスはさっさと握りつぶそうとするが、その直前。

―撃！―

骨を断つようなその響きの音が響く！

グシャリと肉を抉るような音が次に弾け。

体を弓なりに曲げて吹き飛ぶ！

「くはっ……！」

「裏切るくらいなら」

ゼロの声が響く。アルスの真横から。あり得ないほど接近した距離で！

吹き飛ばされた時の勢いは、音速をギリギリで超えないほどの速さ。しかもご丁寧崖の方に突き飛ばしている。

その速度に近づいてきているゼロは異常と言わざるを得ない。

「死んだ方がマシだったの！」

そう叫ぶと同時にしかと落としを入れ、地面に突き落とす！

その勢いは尋常ないほど強く、地面が雪と地面の砂埃で柱を立てるほどだった。

そして、崖にも衝撃で柱が立った。加速の勢いが止められず。ぶつかってしまったという事だろう。

「貴様……！」

「びびるだろ。流石にここまで速いと」

そこにいたのは、巨大な装甲で身を包んだ何か。その声は、ゼロのものだった。

その装甲は所々蒼くなっており、背中からは黒の尾と銀の翼が生え

ている。

アルスはアルタードを完全に握りつぶし、核となる魔力を四散させると、立ち上がる。

「ああ。だが、風切り音は聞こえていたぞ」

「だよなあ……」

「随分息が切れているな？」

アルスは抑揚のない声で、そんな事を言う。

ゼロは、ぜえぜえと息を切らして立っている状態。傷ができたのか、あるいは重さで疲れているのか。

どちらも。というのが本当の答えだろう。

「こんな重たいもん背負って戦ってるからだろ」

「そうか。AMFも正常。俺からは手は出せん」

「なら、お縄について貰おうか」

「残念。お前の負けでこの勝負は終わりだ」

その瞬間。耳を劈く轟音が散る！

ゼロの体が紐の切れたマリオネットのように力を失くす。

そして、不気味に笑っている人影。眼前にいるアルス。尽かない謝罪の言葉は口にしなかった。

微かに見えた愛すべき人、仲間、子供。

―ああ、そうか……。俺、死ぬんだな……。―

フツと笑い、そのまま前のめりになって力がなくなった。

「リリィ。もう良いぞ」

「うん。これで、ゼロっちは私の所有物になったね♪」

リリィと呼ばれた女性は腕を思いっきり引き抜き、血吹雪が舞う。ゼロを担ぎ、歩きはじめる。

「使わせてもらおう。ゼロと、その装備をな」

研究所のような風貌の場所。

その中心にはプラントがあり、人が入っている。

まるで、少年のような風貌の、そんな人物が。そこに網上にのびている回路と機械。

「オリジナルの死亡を確認。これより、クローンの起動シークエンスを開始します」

空間に声が響く。瞬間。プラント全体に罅が入り始める。

シークエンスが進行していくたびに、その罅は、増え、大きくなっていく。

最終シークエンスのアナウンスが響いた時。クローンの瞳が開く。

それと同時に、プラントが崩壊し、液体があふれ出す。

人影は、プラントから足を降ろす。辺りが静かなせいで、水音が異様に大きく感じる。

「……どこへ行けばいいんだろうな……」

「教えてあげるよ」

その時、声が聞こえ、そちらの方を見る。

髪が凄く長い女性。初対面のはずだが、その名前を知っている。

「案内してもらおう、麻井」

「ええ。それと、呼ぶ時は美緒ね。麻井って後二人いるから」

「ああ」

そして、その場所には誰もいなくなった。

残ったのは、壊れたプラントと機械。それだけだった。

その後、ゼロが死んだ事が報道された。

その子供達が父の誇りを懸け戦った事もあったが、それはまた――

――別な物語である――

麗「お疲れ様あああ！」

ゼロ「勝手に死なせてんじやねえよ……オイゴラ」

麗「痛い痛い！ やめて！ 死ぬから！」

ゼロ「殺してやろうじゃねえかア、お前をなァ……」

麗「やめて！ 僕の体力はもう0よ！」

ゼロ「ちよつと黙ってろやあ！」

麗「ギアアアアアアあああああああ……！！！！」

ゼロ「さて、ZEROSTORY一絆一。これで終わりです。いかがでしたでしょうか？」

麗「年末年始の企画は結局倒れてしまいそうです……」

ゼロ「けれど、2期の方で頑張ってやるそうなので、せいぜいジト目でじーっと見てあげてください」

麗「次は、今まで手を出した事のない、東方幻想郷に手を出そうと思います」

ゼロ「2期は、作者が話を考えられるようになったら掲載を開始するそうです。応援よろしくお願いします！」

エピソードーGoodbye, This world.ー(後書き)

追記..東方よりも先に、続編を公開しました。主人公設定に詰まる
.....。X storyです。よかったら、ごらんください♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7047i/>

魔法少女リリカルなのはStS ZEROSTORY一絆（KIZUNA） —

2011年8月13日15時32分発行